
Bowline

時任 恭一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bowline

【Nコード】

N7180Q

【作者名】

時任 恭一

【あらすじ】

タケルと彩はやっと素直になり、ツンデレな喧嘩友達からカレカノに……。情熱の限りを尽くして彩と愛し合うタケルは様々な事件を通し、仲間との友情を育む。遊び上手な由美は不倫に走りながらも本当の愛情を探し求める。いつも女の子の事で頭が一杯な雄二は謎の少女、美紀に恋する。不良で名を知られる智喜は年上の女性に一目惚れ。高校二年。思春期に起こる衝動、感傷、間違い、戸惑い。タケル、彩、由美、雄二、美紀、智喜、五人の運命は複雑に絡み合い、やがて、一本の線に。そして、タケルは全てを……。

「親子や兄弟なんて血縁関係は、死ぬまで切れない。そんなほって置いても切れない事実関係より、ほって置いたら直ぐに切れちまう、うかうかしてたら直ぐに切られる恋人や友達や夫婦との関係の方が俺にとつちや重要で尊いんだよ！ 切れない関係より、切れる、切られる関係の方が俺にとつちや大切なんだ」

タケルの言葉に共感できる方も、できない方も、さまざまな視点で本作をこー読下されば幸いです。

重厚なストーリーではありません。

「朝、ウザい会議がある憂鬱な通勤途中に」「親から理不尽な事で煩く言われた時に」「恋人と喧嘩して、ヤケ気味に携帯を切った後に」読んで頂ける内容に作成しております。

尚、ストーリーにリアルリズムを表現する為、より具体性があるセックス、暴力等の描写をしておりますので、読者の皆様個々の責任、判断においてこー読頂きますようお願い致します。

読者の皆様が、ストーリーに溶け込んで頂けるよう、文章は、全て、登場人物の視点で綴っており、不規則不規則な展開に迷い込んで頂けるよう、時制、構成も不規則不規則に作成しておりますのでご了承ください。

雨の中へ

雨が降っていた。

雨が濡らす路面を歩いていた。

光に包まれた。

そして、しばらくして暗闇に変わった。

「あの日は…暗闇なんてなかったのに…」

雨音だけが微かに響いていた暗闇。

暗闇の中、俺に雨が降り注いでいた。

校長のくそ長い話。周りを見回せば、所々で欠伸が漏れる終業式の体育館。

高一最後の日。

どうでもいい成績表を貰った後は、殆どの生徒が守りもしないような春休み中の注意事項を担任からくどく聞かさせる。退屈で眠気に襲われる時間。机に頬杖を突きながら、俺は春といっても枯れ葉が飛び散り、まだ冬の足跡を残すグラウンドを窓越しに眺めてた。よ

うやく終業ベルが鳴れば、その解放に合わせ、蜂の巣を散らしたように生徒達は教室を出ていった。隣にいる彩はまだ席に着いたままで、何やら俺に言いたげな流し目をした。通例だと、こんな雰囲気の時、彩とは必ず喧嘩になる。常に俺を子供扱い、小ばかにした彩の小言にシカトすればいいんだけど、俺も暇なもんで、ついつい調子を合わす。小顔で目鼻立ちが整った彩。髪はいつもポニーテールで確かに可愛い。体育の時間に発見した長い脚と括れた腰も…悔しいけどOK。でも俺らの関係は窓の外のようなもの。春になりきれない喧嘩友達のまま。そろそろ来る頃だ。そんな彩の小言が…。

「もう少しシヤンと出来ないの？ 一年最後の日だっていうのにさあ。そんなならだらされちゃ、『春休み、楽しんでね』って可愛く声も掛けられないよ。逆に、『いい加減にしろ』って言いたくなるよ。まあ、いいけどねえ。二年になればクラス替えあるから、あんたみたいなウザい奴とサヨナラ出来るかもしれないし…。そう考えたら、清々するよ」

この日、私はわざとタケルに喧嘩を売った。

頭痛と吐き気がと止まらなくなり、急に気分が悪くなった午後だった。「これ飲めよ。保健室から貰ってきてやった」とタケルは頭を掻きながら私の机に薬を投げた。え？ と顔を上げた痩せ我慢好きの私。普段どおりに笑顔で皆の冗談に付き合ってたつもりなのに何で、分ったの？ 「飲んだら、すぐに保健室行って寝てる。下校時間なったら俺が迎えに行く。今日だけは文句言わせねえ」と向けられた真顔。流石に文句言えず、「わ、分ったよ」と机から薬を取つてすぐに教室を飛び出し、嬉し涙を隠した事をよく覚えている。こうやって頬杖を突いて気怠い空気を漂わせ、一見、無神経で無頓

着だけど、さりげない優しさとここぞという時の強さに加えて、くすくすと周りを和ませる才能もあるタケル。一度見ただけで印象に残る透き通った瞳と思わず化粧したくなるような綺麗な顔立ち。でも、夏服のブラウスの袖口からは頑丈そうな二の腕が伸びる。こういうタイプの男は悔しいけど…女子からよくモテる。悔しい？ やっぱそうかも。何かとお節介じみた小言で喧嘩を売るのは、私をいつも子供のように扱うタケルに対し、悔しくって仕方ないからかもでも、この日だけは違っていた。一年最後の日で寂しかったのも当然あるけど、悔しさ以外、ある思いがあって喧嘩を売った。

「まあそうだなあ。二年なればクラス替えでおまえなんかと離れられるし、特にこの三学期は俺の隣の席に来てくれたもんだから、毎日頭痛くて仕方なかったよ」

いい感じで乗って来てくれたのは良かったけど、いざ始めてみると、頬杖を突いたタケルのふてぶてしさも手伝って、私のモードは本気に変わった。

「隣に来たのは、おめえだろうが！ おめえが私の後にアミダ引いたんだろがっ！」

タケルは椅子の背もたれに体を伸ばして欠伸をした。

「はいはい。で、今日は何を根拠に喧嘩売ってきてんだ？ それとも、単に生理痛のはけ口か？」

ここまで言われると想定してなかった私は流石に冷静さを失った。いつも、こんな感じだって言えば、それまでだったけど…。

「ここんどこ毎日すぐ隣で、ウザそうな顔されちゃ迷惑極まりない

んだよ！ 先週、英語の授業、爆睡してた後、ノート貸してやったのに有難うの一言もなしに黙ってノート受け取られちゃ堪んないよ！ で、次の日、私の机の上にまた黙って、ノートの間に百円玉挟んだだけで返されて、ふざけんのだよ！」

タケルは顔を正面に向け、すぐに私に戻した。

「安かった？」

「ハハハ…」

取り敢えず、呆れ笑いで正面に顔を向けると、教室のドア付近で由美が雄二と話しながら心配そうに私をチラチラと見ていてくれた。多分、大丈夫だと思うよ。由美…。

確かに、俺も悪かった。小うるさい彩だけど、最終的には俺の要望を聞いてくれる彩に感謝していたから。

「やめよ！ もう喧嘩。ここ一年ズツとだ。もうやめよ。俺が悪かった。ごめん。ノート助かったよ。期末前だったからさ」

マジでもうやめたかった。別に憎くて仕方ない相手でもない彩と無意味な喧嘩をしている自分自身が虚しく感じた。高一の最後。綺麗に帰りたい。

そんな、突然、謝られたら。もうマジで二人の喧嘩は終わりなん

だ？ 学年変わってクラス変わったら終わりなんだ？ そう思った
ら、何も言えなくなり、私は肩を萎めて机に視線を落とした。

「じゃ、帰るわ！ 春休み…お互い楽しも」

溜息交じりで立ち上がった俺は鞆を机から取り上げて肩に掛けた。

これで終わり？ やだよ。

「ごめん、タケル！ 私が…言いすぎた」

そんな寂しそくに言われてたらさあ。足を止めて振り返ると、彩
が小さく固まっていた。しょうがねえなあ。

「彩…。バイトまで時間あるからマック行くか？ 良かったらノー
トのお礼させてくれよ」

思いがけないタケルの言葉に私は顔を上げて振り返った。

「うん！ 行く！」

机から鞆を取り上げ、立ち上がった。

一瞬で元気が戻った彩を見て、俺はやや呆れて笑った。

「悪い！俺、彩と先帰るわ」

雄二と由美に手を上げた。

「じゃ、春休み楽しんでね！」

私と雄二に手を振る彩に、私は微笑みで合図を送った。

「由美…。大丈夫かなあ？ あいつら」

二人が教室を出た後、途端に雄二は心配そうな顔をした。

「大丈夫。もう、あの二人は…大丈夫」

ぎこちなくとも、私は雄二に笑顔を作った。

やっとこれで苦痛の日々から抜け出せる。急ぎ早に俺は目の前の入試に打ち込んでいた。この日まで、お袋からは散々うるさく言われて部活引退した後はズツと無茶苦茶怠い塾通い。塾には学校と違

って仲いい友達なんていなかったし、皆、何か妙に気合い入って勉強に対する強迫観念みたいなのがあって嫌いだったけど、「勉強してますよ」ってお袋に体裁保つ為に行つてやつてた。塾申し込んだのはお袋。俺は乗り気じゃなかったのに。

お袋はよく店の客から無駄な受験情報を聞いて、その情報を真に受けるもんだから俺は堪ったもんじゃなかったよ。

「通知簿3なんて1と2のオマケ評価よ」

「偏差値は最低60はないとねえ」

「学校で問題起こしたら内申点も削られて志望校なんて行けなくなるから」

酷い客は、「やつぱり顔でも取られるみたいよ。格好いい子とか可愛い子とかは受かりやすいみたいよ」何て言いやがって、全く意味が分からなかった俺は「ふざけんよ！」って感じで…。

都内で一人暮らしながら美容師やつてる俺の姉貴も中学の時は相当お袋に喧しく言われてたから、俺にも順番回つて来ると覚悟してたけど、いざ順番回つて来たら想像以上にウザかった。

ま、確かにうちみたいいな母子家庭は：お袋が仕事に出てる昼間、誰も監視する奴がないから天国だと思われがちだけど。でも、その分、お袋が家にいる夜、どつと小言が来る。だから、じわじわかどつとかの違いで小言の量は一般家庭と変わらない。勉強は適当に平均以上はキープしてたし十分と思つてたけど、無駄な情報を叩き込まれたお袋には十分じゃなかったみたいで、結局、俺は中三の夏休みにお袋の常連客が経営してた塾に放り込まれちゃった。

「どつせ客に上手いこと言われて営業かけられたんだろ？ それとも付き合いかよ？」

部屋で一人なげいてみても、お袋が入塾願書を勝手に出した後。

そのお陰で夏休みに雄二達と行くはずだった海は当然キャンセル。母を思う子心なんて、つくづく持つもんじゃねえ。

あの日も俺は怠い英語の授業を眠たい気分を受けていた。

「そこ違うよ」

隣からの声だった。

「エッ？」

「ほらここ。eat e a t e d . . . じゃなくて . . . a t e . . . 。
動詞の不規則変化」

そいつは、宿題で渡されたプリントの俺の解答を指差して言った。

「ああ…サンキュー」

俺は、そそくさとそれを消して書き直した。でも誰だっけこいつ？ 見上げれば、ポニーテールをした女が俺を見て微笑んでた。塾に友達なんていなかったし、うちの学校からきてる奴らもいたけど「人種」が違うって言うか、誰とも話す気分でもなかったし、誰も話し掛けてくれなかったから、学校にいる「同種」な友達で満足してた。

くすつと、そいつがこぼした。何、笑ってんだよ？ こいつ。

やっと塾の授業が終わり、さっさと教室を出た俺。塾を出ると、
外は雨。最悪。

「またかよ。来る時は降ってなかったのに…ついてねえなあ」

独り言しかなかった俺は軒下から雨を見上げて溜息。

「どっしたの？」

振り返ればさっきの女。

「雨。ウゼエなあ」

答えてやった。

「傘、持って来てないんだ？ 私、傘持って来てよかった」

はいはい。そーですか。

「うちどー？」

何聞きやがるんだ？

「中崎町」

俺も何答えてんだ？

「じゃ、うちよりまだ先だね。うちまで私の傘入ってく？ うちに着いたらこの傘貸してあげるよ。明日、返してくれればいいから」

親切はありがてえけど…。

「ほら行くよ！」

俺がまだ何も返事してねえのにソイツは傘を広げた。

「エッ？ うつつん」

俺は咄嗟にそいつの傘に入ってしまった。何なんだよ？ こいつ。

雨が：降り出した。

取り敢えず、傘を持ってきたけど待ち合わせ場所はもう近く。いつも、私は待ち合わせ場所に先に着いて「待ち人」を迎えてた。今夜もカラオケボックスが待ち合わせ場所。

小降りの雨に傘を開けるのも面倒だから、私は携帯を切り、そのボックスのガレージを走って通り抜け、自動扉が開くと急いで中に入った。受付カウンターの中には初めて見る男の店員が一人。

「いらっしやませ」

私とタメぐらいの店員。

「一名様ですか？」

「取り敢えず一人で、後でもう一人来ます」

「分かりました。では、会員カードをお願いします」

以前、新規で作った会員カードを差し出す私。その店員は私のカードをレジの読み取り機に通してピツピと操作した後、レジから伝票を取り出し、その伝票と会員カードをバインダーに挟んだ。そこまでは、いつもの流れ。でも、何故か店員の動きが止まり私をじつと見た。何？ こいつ。私は俯く。エツ？ バレた？ でも、バレる要素なんてない。多少、緊張していたら、その店員がカウンター越しに俯いた私の顔を覗き込んだ。だから何？

「あのさあ…君…」

猜疑心ありありの声色。やっぱバレた？ 私は更に俯いた。

「君…彩と同じクラスじゃない？」

カウンターに両手を着き更に私を覗き込みながらその店員は言った。彩？ 誰それ？ 人違いじゃない？

「須田彩だよ」

苗字まで聞いたら知ってる名前。

「長池由美も同じクラスだろ？」

その苗字も知っていた。じゃ、何？ こいつは同じ学校？ 焦った私はチラッとそいつに視線だけを上げた。こいつ知ってる！ 制服着てないから、気が付かなかった。

「何か今日は化粧してるから最初分かんかったよ。俺さ、隣のクラスの雄二…高田雄二って言うんだ。ちなみに同じ学校でタケルって

奴も俺の友達。俺とタケルと彩と由美。いつも連んでる仲間さ」

私にとって相当ヤバイ状況になってきた。

「俺の知り合いがこのボックスやっててさ。俺：今週からバイト入っててさあ…それで…」

そいつはテンポよく喋ってた。「初めから分かってたら来なかったよ！」思わず言いたくなっけど、まだ、そいつのウザいテンポは続いた。

「君：同じ学校だしさ。お友達割引にしとくね。レジ打ち直すよ。あ、君：名前は確か…」

そいつは私の会員カードをバインダーから抜こうとした。慌てて手を伸ばし、私はそのカードを取り上げた。

「ごめん！ やっぱ今日やめとく」

受付カウンターから離れた私。急ぎ足で自動扉を抜け、そのボックスを飛び出した。雨が強くなっていただけ、私はガレージを走り切るまでは傘を開かなかった。

春休み初日の朝、外は少し曇っていた。

前日、学校帰りに二人で行ったマックでタケルに無理矢理に約束

を取りつけた私。いつも付けないグロスを唇に塗って家を出ようとしたけど、お父さんに「おまえ、朝からコロッケ食った？」ふざけた事を言われて、すぐに自分の部屋に戻った。唇に着けたグロスを拭き取り、いつものリップだけにして玄関そばの鏡で服装を再チェック。

「やっぱ、パンツやめてミニにしよう」

再度、階段を駆け登り、自分の部屋に飛び込んだ私は不自然で大げなモトーン調のセーターとパンツを脱ぎ捨て、ナポレオンパーカーを着てウォッシュデニムのミニを履いた。

「やっぱ、いつもみたいなのがいいや」

部屋から玄関に降り、鏡の前で一人で納得して家を出た。

前日、マックで、「普通、高二になってすぐの学力テストぐらいで試験勉強はしないけど、進学希望組にとっては指導者側が生徒の偏差値と進路を見極める為の重要テストだから…」と半分、いや、殆ど嘘で固めてタケルとの約束を確実にしていた私。もう今日しかないよ。待ち合わせ場所だった私の家近くの角を曲がると、ヨッ！と手を上げて缶コーヒを差し出したタケル。会えた時は涙が出そうになったけど、何とか笑いでごまかした。

「おはよ」

タケルに近づくに連れて心拍数が上がる。

「おはよ。取り敢えず、昼飯調達しに行こ」

私の二の腕を軽く叩くタケル。少しだけ、落ち着けた。

「うん」

そして、私達は前日二人で行ったマックに戻った。

「勉強教えて貰うお礼に俺が奢るよ」

ウォレットチェーンを引き、タケルは財布を開ける。ヤバい！

「お勘定の時に財布を開けない女は嫌われる」と何かの雑誌で読んだ記事が私の頭をよぎった。

「いいよ…ここは…私が…」

慌てて、肩から下げたバッグを漁り、財布を取り出すと、タケルはもうお金を払ってた。

「ありがとう…」

「今日、お袋、仕事で夜まで帰って来ねえからさ。気楽にしてるよ」

マックを出る直前、何とか笑顔を作れた。家で二人きりになるんだ…。躊躇こそなかったけど、言葉少なげになった私。ある程度、緊張してたかも。

「いい。この間、学校で教えてあげたとこじゃん」

私が問題集の採点を終えると、タケルはシャーペンで頭を掻いた。

「動詞の後に目的語が入れば、動詞が . . . go . . . でも、ここは、to不定詞」

少しタケルに寄った私は問題集に赤ペンを走らせながら言った。

「もうこれで忘れねえぞ！」

タケルは頬を両手で頬を叩いた。

「ヨシッ！ 休憩しよ！ 腹減った！」

「だね」

出来るだけ自然な笑顔を作り、マツクの袋を開ける私。その時、ぼつぽつと微かな音が部屋の外から中に…。降りだした雨。その雨音が私の緊張を和らげてくれた。バーガー、ポテト、ジュースを机に並べて、ぐるっと見回したタケルの部屋。私にとって初めての男子部屋。アイドルやスポーツ選手のポスターが壁や天井にベタベタ張られ、無造作に脱がれた服が散乱する、タケルの部屋は私のイメージしていた男子部屋ではなく、服類は本棚の横のクローゼットに整理されている様子で、壁にポスター類は一切なし。出窓にテレビとオーディオ、部屋のドアから向かって右側の隅に勉強机。左側の壁に沿って設置された少し幅が広いベッドにはグリーンのシートがピンと張られ、ベッドの足元には綺麗に布団が畳まれてる。フロアリングの部屋のほぼ中心に敷かれた三畳ほどのブラウンのカーペットに私達は座り、ガラス面のミニテーブルを囲んでいた。

「綺麗にしてるんだね。部屋」

私はフライドポテトを摘みながら部屋を見回した。

「普段はいい加減なもんさ。今日、初めて俺の部屋に彩が来るからさ。昨日、大掃除したんだよ」

そりやどうも有難うございます。タケルがバーガーにかぶりついたから、私もバーガーにかぶりついた。

「最近…彼氏とはどうなんだよ？」

バーガーで口の中を籠らせたタケルが言った。

彼氏？ まだ私に彼氏いるって信じ込んでるの？ ウザいから沈黙してやった。

「ダンマリかよ？」

タケルがコーラを吸い上げた。

「はあ？ バーガーが口に入ってたただだよ！」

「分かったよ。やめようこの話」

タケルが軽く手を振りながら言った。

「せっかく勉強教えてもらってるんだしさ」

フライドポテトに手を伸ばしたタケルの態度が冷淡に見えた。

「待てよ！ 聞いてきたのそっちだろ？」

バーガーを持ちながら上体を少しタケルに迫らせた私から若干引き気味に、タケルが溜息をついた。

「休みの日まで…喧嘩やめよ」

またタケルが喧嘩を止めた。いつもなら食ってかかって来るくせに…。呆れた笑みを浮かべたタケルはテーブルの上の紙ナプキンを取って、迫っていた私の口元を極自然に拭いてくれた。

「子供！」

タケルの茶化しに私は慌てて身を引いた。

「べ、別に拭いてくれて頼んでねえよ！」

私は紙ナプキンをタケルから引ったくり、口元を拭き上げてオレンジジュースを吸った。

「そうかよ」

寂しく呟くタケルにゆっくり視線を戻し、部屋の外から響く雨音を聞いていた。

「彩…。おまえに彼氏なんていないよ。おめえは合コンなんかでナンパされるような女じゃない。それが分かってて…ごめん。意地悪にもほどがあったよな。俺」

バーガーを食べ終わって、紙ナプキンで口の回りを拭いたタケルはバーガーの包み紙とそのナプキンを両手で丸めてごみ箱に捨てた。

「分かってて…。分かってたんならちゃんと見えよ。バーカ！ 洒落になんねえよ」

タケルからソップを向いて、乱暴にポテトを摘んで食べながらも、私はほっとしていた。彼氏がいないんじゃないって、私からタケルに言えるチャンスはいくらでもあった。ちゃんと言わなかった私も馬鹿。だから、あんな事になったのかも…。

「タケルは…何で彼女と別れたんだよ？」

私は少しテーブルに視線を落としてオレンジジュースのストローを摘んだ。

「何？ 俺の終わった恋話聞きたいの？」

コーラを吸い上げながら私を見たタケルから咄嗟に視線を逸らした。

「べ、別に聞きたかないけどさあ。タケル、何か学校でも元気なさ気だったし。こっちは喧嘩相手なくしちゃったみたいでさあ。張り合いねえんだよね。ヤケに…昨日だって、今日だって素直に謝ったりさあ。だから…ちょっと相談乗ってやるっかなあってさ」

タケルはカップをテーブルに戻し、私はオレンジジュースを口に含んだ。

「今は落ち込んじゃないよ。そりあ…別れてすぐ、最初の方は、俺も並の男だからよ。落ち込んでるように見えた…かもしれねえけど。今は…それなりに元気さ。ご心配なく」

分かってた。いつも強がるタケルの性格を。だから、いつもタケルの事が心配になる。喧嘩して元気なタケルに触れ合えれば、タケルが誰と付き合っていていようと、安心する事が出来た。馬鹿な私。

「そうなんだあ。最初の落ち込みようがハンパなかったから、そのままずっと、取り越し苦労しちゃったかも」

タケルは私に寂しく苦笑いした。

「彩にも何回も言ったじゃん。俺、別に落ち込んだんじゃないって。それをおまえが信用しなかっただけだよ。で、いつの話よ？ それもう三ヶ月以上前の話じゃん。あっ！ そっか！ クリスマス前だったから…余計に悲劇に思ってくれたんじゃない？」

苦笑いを消したタケルの明るい笑顔。その笑顔を、私は待っていた。

「うん！ タケルがもういかにも別れてましたって暗そうな顔してんだもん。クリスマス前にあんな顔されちゃインパクトありすぎ。そりゃ尾を引くよ」

いつの間にかタケルのすぐ隣に座っていた私はタケルの横顔を眺めてた。

「彼女には悪い事したよ。付き合ってたのに蔑ろにしちゃって…。その反省の意味で暗かったと思う。それに…彼女と付き合ってた時から悩んでたから」

頬張ったバーガーを、私が飲み込むまでにタケルはポテトを平ら

げた。

「何を…悩んでたの？」

私がオレンジジュースを吸った後、タケルは微妙に私を見た。少し間が空き、雨音の中に時計の音と空気清浄機の音が交じり込んでいた。

「俺…素直になれなくて悩んでた。素直になれない自分の情けなさに気づいて…自暴自棄ってやつ？」

タケルはストローを噛んだだけでコーラを吸い上げようとしなかった。

「そっかあ…。あるよねえ…。素直になれない自分に腹が立つ事って。自分で自分が嫌になっちゃう事ってさ」

私はストローを指で弄るだけだった。

「彩も…。彩もあんのかよ？」

タケルが完全に私に顔を向けた。

「あるよ！ 私だって。しょっちゅうだよ」

「皆…。一緒かもなあ？」

いつの間にか、真後ろのベッドに背中をつけて話し込む私達。タケルが背伸びをした。

「あーっ！ 初めてかな？ 俺らがこんな話したの」

「うん！ 一年も、いや、出会ってからだと一年以上もかかったね。こんな話が出るようになるまで」

静かに頷いたタケルに、ゆっくりと体を向けた。

「私…。タケルに謝んなきゃいけない」

オレンジジュースのカップをテーブルに戻した。

「今日…タケル誘ったのは試験勉強の為じゃないんだよ。ごめん」

タケルから視線を逸らした。

「この一年、タケルとよく喧嘩したけどさあ。でもこれに懲りずにズツとお互い…これかも遠慮なしに何でも言い合えるような関係でいたいなって。柄じゃないけど…。二年なったらクラス替えあるから一緒にクラスじゃないかもしれないじゃん。だから…気持ちをリセットしてタケルにこれからもお願いしますって伝えようと思って学校じゃ、こんなこと照れ臭くて言えねえからさ」

緊張したり、憤ると不思議に男言葉になる私の癖。タケルが分かってくれていたから、私は最初の素直さを出し切れた。

「彩にお願いしたのは俺の方だよ。よく言うじゃん。喧嘩するほど仲がいいってさ。これからも、ぶっちゃけでいい」

力が抜け、またベッドに背中を倒した。

「でもいつからだろうねえ？ 由美や雄二が呆れるほど喧嘩するよ
うなっただの？」

照れて笑い、片膝を抱えて天井を見上げた時、少し強くなった雨
音に気付いた。コーラを飲みきったタケルが、アッ！ と声を上げ
て、パチンと鳴らした指を私に向けた。

「百円玉だよ！ 表と裏」

「あー！ そうそうそう！」

思い出した私はタケルの太股を何度も叩いた。

「最初は遊びのつもりだったんだけどさあ」

笑うタケルの後を私が続けた。

「コインで裏か表かで外れた方が一回パシリ行かされるって遊びし
て、私が裏でタケルが表だったよね？」

タケルが腕を組んだ。

「確か、そうだったよ。で、100って描いてある方が出て、『ヨ
シ！ 表だ！』って、俺が」

「私が『違うよ！ それが裏だって！』って言って」

「クラス中に聞いても、裏って言う奴がいたり、表だって言う奴が
いたり、ほぼ半々だったから、お互い譲らなくてさあ。俺が『おま
えが負けだから今日の掃除当番代われ！』って言ったら、彩が『バ

「カヤロー！ おめえが明日女子トイレ掃除してこい！」って、無茶苦茶だったよな」

「うん！ 覚えてる…」

「で、やっぱあれ表だろ？ あれ」

「バカ！ 違うよ！ 裏、裏、裏、絶対、裏！」

二人で顔を合わせて一通り笑った後、少し静かになった。タケルがベッドに背中着けて天井に向かって溜息をすると、私もベッドに背中をつけて天井を見上げた。

「今から思えば…くだんねえ事で」

天井から私に視線を戻したタケルに私は静かに顔を向けた。

「だよね…」

また天井を見上げるタケル。

「俺も意地っ張りだからさ」

意地っ張りは私だったの。

「もう意地っ張って自分無くすの止めた。好きな人に好きって言えない、素直じゃない自分作るのも止めた。結果的に…好きな人に当てつけみたいな残酷な事した俺は最低だった」

タケルが眺めたモスグリーンのカーテン。薄い外光を透かす、そ

のカーテン向こうから雨音が聞こえた。

「中三だった頃…こんな雨の日に…彩に素直になってたら」

私の視界の中、タケルの横顔が少しづつ滲むと、部屋の中にも雨が降っているように見えた。

「雨…強くなってきたみたいだ」

しばらく二人でその雨音を聞いた。雨のように優しい瞳を私に近付けるタケル。タケル…。私は重なり合う心音と唇を闇の中で感じた。そして、激しい雨音に包まれた。雨に濡らされて…。遠ざかるタケルの息を追いかけるように瞳を開ければ、やっぱり部屋の中にも雨が降っていた。

「キスして泣かれちゃ堪んねえなあ」

タケルがポケットからハンカチを取り出し、私の頬を拭いてくれた。私の視界に浮かんだタケルに少し照れてしまった私。タケルからハンカチを奪うと、ベッドに背中をつけた。

「しょ、しょうがねえじゃん！ タケルのキスなんだからよ！ 私にとつて二回目のキスだよ」

恥ずかしさと嬉しさが入り混じった複雑さをハンカチで両目を押さえて隠すと、タケルが静かに私の肩に腕を回してくれた。

「彩と二回もキスできるなんて幸せだよ。勇気なくて一年以上もかかったから信用されないかも知れないけど。俺…彩の好きだ。やつと…やつと素直になれた」

やっと言ってくれた。タケルの顔は滲みきっていたけど、はつきりとその言葉は聞こえた。そして、どうにも自分自身を制御出来なかった私はタケルの胸に崩れ落ち。声を上げて雨を降らせた。さあ、今度は私が素直にならなきゃ。少し時間がかかったけど、タケルの胸の中で出来るだけ呼吸を整え、勇気を出してぼろぼろになった顔を上げた。こうなりや、ちゃんとタケルの目を見て言ってる。

「タケル…」

言葉になりそう。

「ま、待たせやがってこの野郎。おめえに彼女が出来たって聞いた日、わ、私が、ど、どんな気持ちだったか、分かるか？」

体の震えが私の呂律を若干乱していた。

「わ、分かってんの!？」

怒鳴り声と共に涙が噴き出し、タケルの顔がまた見えなくなった。ダメだ! でも頑張らないと。全てぶちまけたい! おめえの顔よく見えねえけど、おめえは見てるよ! 私を。

「仕方ない。私はタケルの喧嘩友達なんだ。仕方ないって、その夜は泣き通して寝られなかったよ! でも、でも、おめえが女と別れて、えらいしよげてるって思ってたさ。私もバツカだよ! こっちは泣かされてんに、おめえの事、マ、マジ心配してさあ。何とか、何とか元氣つけさせてやろうって…。また元氣になつて私と喧嘩して欲しいって…。ああ、こんなバカな私、笑いたきゃ、笑っていいよ! で、でもな、仕方ねえじゃん! し、死ぬほどぼろぼろ

になつて野垂れ死んでもタケルの事、タケルの事…好きで好きで堪んねえんだよ！ もうっ！ 悔しいけど、こ、これが私の素直な気持ちだよっ！ バカッ！」

私は最後まで言わずにいられなかった。

「そ、そりゃ私は、こんな、こんな男みてえな性格で可愛気ねえよ。でも、で、でも、一人ぐらい、一人ぐらい好きで仕方ない人がいたっていいじゃん！ 悔しいけど、タケル、おめえだよ！ 悔しくつてしょーがないけど、も、もう逃がさないから！ はっ、離れるつて言われても、ついて行つてやるから！ おめえにウザいつて言われりゃ、また喧嘩買つてやりゃいい話だからよ。か、覚悟しとけよ！ わ、私、私…」

もうボロボロを通りすぎて何言ってるやら…。

「こ、こんな、ど、どーしようもない私だけど、私を、私を、は、離さないでください…。タケル…」

最後は声にならなかった私。再びタケルの胸に顔を埋めて爆発するしかなかった。やっつと、やっつと、全部、素直になれた。それまでの思いを全てタケルにぶちまけ、ただ震えて嗚咽する私をタケルは強くしっかりと抱き締めてくれた。激しい雨音。まだ部屋の外から聞こえていたけど、部屋の中はもつと土砂降り。

泣き疲れた私の肩を起こしてくれたタケルに必死で微笑みを作ったけど、上手くできなかった私にタケルはもう一度唇を合わせてくれた。そして、タケルは私の膝に落ちていたハンカチで私の涙を拭い始めた。もう涙はタケルに任せます。

「離さないよ。絶対、もう絶対、彩を離さない」

またタケルのキスが来た。長いキスの中で私はタケルの舌を口の中に受け入れた。そんな初めての体験にタケルの舌の動きに合わせて自分の舌を組み合わせるように絡めるしかなかった私。極自然にタケルの首に両腕を回していた。もう「好き」なんて単純な言葉だけでは追いつかない。タケルの舌がこんなに温かくて柔らかいなんて。言葉を無くされていた私は感情を表現するように舌の絡みを強めていく。キスしたまま、タケルが私の背中と両膝の裏に腕を回り込んだ。お、おお、お姫様抱っこ！体が浮かび上がり、私は雲に乗せられるようにベッドの上に寝かされた。えっ？もしかして今日？嘘？幸福感と緊張感の凄く複雑な狭間に寝かされていた私。

前夜の雨から一転、その日は朝から快晴。

夜からの塾に備えて気分転換が一番と思った俺は電話で、丁度、海から帰って暇にしていた雄二をいつもの図書館に呼び出した。図書館と言っても別に勉強する訳じゃない。

「図書館行くなって勉強道具持って家出た方が色々と監視が厳しくなった親に外出の理由付けが出来るからな」

家が電気屋、常に親から付き纏われて監視されてる雄二からの提案を、お袋が家とは別に美容室を持って、定休日の月曜以外、昼間は何の監視もされてない俺は受けた。以前は、お袋がない俺の家で雄二とだべってたけど、雄二のお袋さんが勉強してる俺達の為に昼飯作るって口実を付け、毎日わざわざ監視に来た。以来、タバ

コも吹かせない俺の家は没。にしても、あのミンチカツは美味かったなあ。

雄二とは小一からの付き合いで親同士も仲が良く…いわゆる「家族ぐるみ」ってやつ。お互いのお母さん方は「息子達の情報交換」も有難迷惑とは知らずにやって下さってた。だから、息子達が図書館行って勉強してると思ったら、幾分かは精神を安定して下さった。形だけでも親を安心させるって事は俺達の貴重な息抜きの為の「生活の知恵」ってやつ。「今日、図書館行くから」あえて、俺達が親にそう言っただけで図書館に行くのはそう言う理由。

初めて図書館に来た日、雄二と空調の効いた館内ロビーで話し込んでたら、段々と退屈になり、二人で「喫煙場所」を探しに図書館の周りを徘徊した。そこで、偶然、見付けた駐輪場奥にある図書館の資材倉庫裏は倉庫の壁と図書館の塀に苦しく挟まれ人目に付きにくい上、すぐ側に立つ栗の木の影になって涼しく喫煙にはうってつけの場所。そこを見付けて以来、俺達の間で「図書館で会おう」と言っただけ、その倉庫裏で会う事を意味するようになった。その日も、先に来た俺がその倉庫裏の壁にもたれ、しゃがみ込んでタバコ吹かしてら誰かとすぐ分かる足音がした。

「悪い！ 遅くなっちゃった」

雄二は俺に缶コーヒーを投げ渡した。

「海行つた後は猛勉強するって、お袋に約束しちゃったからさ。うるさくっつてしょうがねえよ」

ニヤけながらポケットから取り出したタバコ。雄二に差し出しすと、右手を軽く上げ、雄二はタバコを一本抜き取って俺の横にしゃがみ込んだ。

「で、その海はどうだったんだよ？」

雄二のタバコに火を点けながら尋ねた。

「ダメダメダメ！ 全然ダメ！」

タバコの煙を吹きながら言った雄二。そのダメと言う意味がナンの事だとすぐに分かった俺は、んなもんだろ、呆れ顔で缶コーヒーを開けた。

「タケルがいてくれたら…少しは様になってたかもな」

「一緒だってよ！ そんなの」

一口、コーヒーを飲んだ俺はタバコを思いっ切り吸って煙を空に向かって吹いた。

「あ！ それはそうと！ タケルの方こそ…何だよあれ？」

雄二の質問の意味が全く分からなかった。

「エツ？ 何？」

「またしらばっくれてよ！ 昨日の夜だよ」

雄二が缶コーヒーを開けた。昨日の夜？ 何かあったけな？ 俺が煙を吸いながら思い返していると雄二がやや口を尖らせて語り出した。

「タケル…。三崎中の須田彩ちゃんと歩いてたよな？ 海の帰り、

皆とファミレスでだべってたらさ。おめえと彩ちゃんが一緒の傘で外歩いてるし。相当ブーイングだったんだぜ。『海行つた俺らはハズレで残ったタケルはアタリかよ!』って」

何だ？ その事。

「あいつ…須田って言うんだ？」

でも、何で雄二があいつの名前知ってたんだ？

「あいつってまあ…」

煙を吐きながら雄二が更に俺に身を寄せた。

「なあなあ、どこで引つ掛けたんだよ？ あんな可愛い子」

「どっつて…」

雄二を横目で見ながら煙を吸い込んだ。

「なあ、もうキスぐらいしたのかよ？ それとも…もう食っちゃったとか？」

「はい？」

煙が一気に俺の口と鼻から出た。

「何勘違いしてんだよ!？ あいつとは同じ塾でさ。昨日…俺が傘持っつてなかったから、ちょっと同じ傘で帰っただけさ。それも殆ど強引に傘入れられちゃってよ」

「強引？」

口の端から煙を吹き上げ、ニヤけた顔をして俺を疑視し、何でもない事を納得してなさそうだった雄二に俺は前夜のあいつとの事を全て話した。

「へー！ でもそれって無茶苦茶ラッキーじゃん。あの子…超有名な人なんだぜ。俺もタケルと同じ塾行つときゃ良かったなあ。親父の客がやつてる近所の塾なんてブスばつかで話になんねえよ」

「有名人？」

「ほら、俺の元カノって三崎中じゃん。で、付き合ってた時に『三崎中でおまえよりモテる子って誰？』って聞いたらさ、彩ちゃんって言うから。マジ気になって修学旅行の写真見せてもらったんだよ。そしたらまたこれが超可愛い子でさ」

てめえの女に他の女の写真を？ そりやおめえフラれるよ。俺は笑いを煙りと一緒に口に含んだ。

「元カノの話じゃあ…。学校内では勿論の事、学校外でも噂立ってハンパない人気だって。そりゃあんな可愛い子が人気でない訳ないよ」

ニヤニヤの雄二。俺は苦笑い混じりの煙りを吐いた。

「それで…おめえ、あいつの事知ってた？」

「あれ？ タケル」

雄二が不思議そうな表情を俺に向けた。

「おめえにこの話…前にもした事あるぜ。これ二回目じゃん」

「そうだったけ？ 忘れてたよ」

「あいつかわらさずな野郎だな！」

煙りを吐きながら雄二は俺の腕を突いた。

「彩ちゃんの事知ってるのは…てか、うちの学校の男子の中で知らねえのはおめえぐれえだよ」

「そうなの？」

タバコを挟んだ指で、俺はこめかみを掻いた。

「そつだよ。でも噂じゃ…彩ちゃんは相当ガード固いって話だ。だから、言い寄ってくる男は無茶苦茶多いけど、皆、振ってるって話さ。ちなみに、彩ちゃんの友達で由美ちゃんてまた可愛い子がいるらしいんだけど、その子は結構ノリいいらしいんだよ」

興味ねえ事はすぐに忘れちゃうのが俺。

「でも、タケルの場合は向こうからじゃん。スゲエよ！ それ」

完全に勘違いした雄二に俺はまた苦笑し地面に向かって煙を吹いた。

「悪いけど…。俺、タイプじゃねえよ。ああいう何てか…男っぽい女」

雄二が煙を大きく吐き出す。

「分かってねえなあ！ タケルは。男っぽい子の方が実は女の子っぽくって可愛いんだよ。落ちてる札束拾わないなんて、おめえ罰当たるぜ」

意味が分からなかった俺は雄二に、ハイハイって感じで、タバコを揉み消し、缶コーヒーを飲み干した。

はじまりは雨だった

「おう、タケル。これ、おすそ分けだよ」

教室を出てすぐの廊下の隅で俺は青と白の柄が入った幅一・五センチ四方、長さ一五センチぐらいの正四角柱の箱を雄二から貰った。

「何だよ？ これ」

受け取った箱を目の前でクルクル回すと「避妊用膣薬」と箱に書かれていた。そして、雄二が俺の肩に腕を回し耳元で囁き始めた。

「これなあ、ゴムなしに避妊できる薬なんだよ」

「薬!？」

思わずでかい声を出した俺に雄二は自分の唇に「シッ!」と指を当てて周りを見回した。

「薬っても、飲む薬じゃないぜ。ここに書いてあるようにエッチする前に女の子の膣に挿入するんだよ」

雄二がその箱に書かれた要項を指差しながら言った。

「挿入?」

俺は小さい声で耳元の雄二に囁いた。

「そう。中には輪錠のトローチ見たいな指先に乗るぐらいの錠剤が

入ってて錠剤を指先に乗せたまま女の子の膣に挿入するんだよ」

周りから見られないように雄二は突き立てた人差し指を俺らの胸と廊下の壁で三角形に囲み、その説明により具体性を持たせようとした。

「指を一番奥まで入れたら中にコリコリした部分があるの知ってるよな？」

雄二はその人差し指の先を微妙に震わせながら俺に尋ねた。

「ああ、深いところにある何か固いやつな。あれ何なんだろう？ 回りは柔らかわけーんだけど、奥に妙に固い…」

俺も人差し指を使って自分の経験上の話をしていた。

「あれが子宮の入口だよ」

「はあー、あれが…その…入口な訳ね」

俺は顎を撫でた。

「お、おう。で、そのコリコリがある部分までこの錠剤を押し上げる」

雄二が人差し指を突き上げた。

「押し上げる」

ついでに俺も人差し指を押し上げた。

「で、待つ事三分だ」

雄二が人差し指の他に中指と薬指を立てて指を二本にした。

「三分」

俺もつられて同じように指を二本にした。

「おう、そしたらこの錠剤がそのコリコリの子宮口付近で完全に溶けて、その溶液が精子を殺してくれるんだよ。だから、女の子は妊娠しない。」

俺は再度、その箱を目の前で回した。

「マジかよ?」

「マジだつて。ゴムの避妊率は九十%未満だけどよ。これの避妊率は九五%越えるんだよ。それに：俺、実証済みだから。ほら、タケルも知ってる俺のセフレ。あれとやってたらゴム破れちまったって話：この前、したろ?」

「あー、おまえが公園のトイレでやってたら、中でゴムが破裂したつてやつな」

雄二がクスクスと笑い出した。

「そ、それぞれ。で、ゴム危ねえからゴムよりも避妊率高い避妊方法を色々調べて、これに出会ったんだよ。すぐにネット通販で買ったよ」

「ネット通販？」

「おう。それから、あの女とやる時には、こいつ使ってる。週二、三発を一カ月やり続けても妊娠ののに字もしねえよ」

「ほー、やるねえ。おめえ」

学校の勉強以外での雄二の学習能力、身を削っての研究熱心さに、俺はニヤつきながらも呆れていた。

「より安全な避妊を研究すんのは男の常識だ。あ、それと、これは、あくまでも避妊オンリーだからな。病気予防には効かねえから用心しろよ」

雄二が俺の胸を叩いた。

「その女も病気大丈夫かよ？」と突っ込む前に、俺は吹き出した。

「ちょっと、あんたらあ。何、男同士でヒソヒソやってんの？」

由美の声に壁から振り返ると、そこには彩も立っていた。

俺は慌てて、それをズボンの後ろポケットの中に忍ばせた。

「あ、コリコリが二人来た」

「バツ！」

俺の俯いた小声にウケけた雄二がまた俺の胸を叩いた。

「キツモーイ！」

彩が顔をしかめて俺達を見詰めていた。いきなり来て何だよ？
そのツラ…？

雄二が廊下に視線を流し、そのまま背を向けた。

「なあ、タケル。あの子…」

「あー？」

振り返って雄二の視線の先を見たけど、シャギー掛かったセミロ
ングの髪。その子の後ろ姿しか見れなかった。

「あ、いや、一瞬だけど可愛かったなってさ」

いつもの雄二の悪い癖を鼻息で蹴散らして、俺は彩と由美に顔を
向けた。

「ちょっとちょっと、可愛い子がここに二人もいるのにさあ。失礼
じゃないの？ 他に見惚れるなんてさあ」

由美が腰に手を当てて迫ってきたから、俺は咄嗟にタケルに視線
で助けを求めた。

「いやいや、俺達もカレー食いたい時も有ればオムライス食いたい
時もあんだよ」

つくづく、俺はタケルに視線を送った事を後悔した。

「あーっ？ どっちがカレーで？ どっちがオムライスだよ？」

彩が由美の前に出てタケルに迫った。んな風にいやあ、そう来るに決まってんじゃないか！ 女ならそう来るよ。

「そーだなあ…今日はオムライス食いたい気分だから…おめえらカレーだな」

タケルも返すし…。俺に視線を合わせ首を教室の方に振った由美の合図に俺は乗った。

「だから、その例えがムカつくんだよ」

「どう言えばいいんだよ？ たく、面倒くせ…」

後ろで二人はやり合っていたけど、一、二時間も経てば二人はまた仲良くなって「喧嘩、どうなったんだ？」って突っ込みたくなるぐらい仲良く話を再開する。俺と由美は、そんな二人の習慣からいつも呆れて遠ざかる。早く、おめえら付き合っちゃえ！ 由美と教室に帰りながら、いつものように苦笑を二人に残すと、俺は彼女が去った方にまた視線を流した。

私は廊下にいた彩とタケルに気を取られながら雄二と一緒に教室に入った。

「何とかは犬も喰わないってやつか？」

「だろね」

雄二に苦笑いで答え、自分の席に着くと、私の鞆が微かに震えていた。携帯だ。鞆を開けて携帯を見るとメールが受信されていた。周りを見回して気が付かれないように私は鞆の中で携帯を開けた。

…いつもの所で、九時に…

あの人から。

いつも、あの方は私のバイト先から人目に付かない裏通りのコイン駐車場前に車をつけて、待ち合わせた私を拾う。そこは私達にとつての「いつもの所」。

…OK!…

メールを返した私は自分の席から、まだ廊下にいた二人を廊下側の窓を通して見た。もう仲良く笑いながら話してるよ。雄二も二人の様子を伺ってたみたい。自分の席から私に振り向き、親指を立てた雄二に、私は苦笑いで返事した。

高一…夏休みが終つてすぐ。

あの日、彼女はシャギー掛かったセミロングの髪を揺らしながら

廊下を歩いてきた。この子……。彼女の歩く速さに合わせて流れた俺の視線。

彼女の少し顎を上げた表情は冷淡ささえ感じさせるほど落ち着いて綺麗で……。それまでの俺の理想を一瞬で消し去った。高二になって、彼女が彩と由美と同じクラスになった事はチエツク済みだったが、彼女の澄んだ無表情は声をかけられない壁を作ってた。何で、今夜は不自然な化粧にチューインガムだよ？ 何で、ケバ可愛いのが好きだった昔の俺のタイプになってたんだよ？

「ダメ元で……。明日、会ったら声掛けるか」

独り言を溜息で吹き飛ばした俺はレジでキャンセル処理をし、バインダーから彼女の伝票を抜き取り丸めて捨てた。

「やめとけよ！ タケル！ あいつマジやばいって」

雄二の声が背中でしたけど、俺は無視を貫いて廊下を歩き続けた。

行き先はA組の教室。高二になってすぐ、俺達と仲良くしていた後輩の事で、俺はA組の智喜って奴とトラブった。

事の発端は野球部に所属するその後輩がグラウンド裏の路地に停められていた智喜のバイクに練習中に打ったボールを当ててミラーを破損させた。それで、智喜って奴がその後輩に十万も請求した。元々、学校はバイク通学禁止で先生達の目を盗んで乗ってきたバイクに後輩が打った球が当たった。

そもそも後輩は被害者で一番悪いのは学校で禁止されてる事を口ソコソやってたバカだった。

「おい、タケル！ あいつは何でも、族の頭張ってて。この辺じゃ、それなりに名の通ったワルらしいぜ。あんなのに逆らったら仲間連れて来られてタコにされちまうよ。やめとけよ！」

「なら良かった！ 族の頭張ってんなら少しは話分かるだろうよ」

雄二に返事してる間に俺はA組の前に着いた。

廊下からその教室を覗くと、別に呼び出さなくてもどいつが智喜かすぐに分かった。

一番後ろの窓際の席。

眉間にシワを寄せた智喜が制服のジャケットを開け黄色のTシャツを強調するかように両手をスリータックはあるダブついたズボンのポケットに突っ込み大股開きで座ってやがった。

智喜のその威圧感に最初は正直ビビったけど、そこまで行って後には引けなかった。

「ここですごい」

雄二に言うと、俺は教室に乗り込んだ。

俺は智喜の席の前に無言で立ったが、智喜はビクともせず窓の外を眺めていやがった。気付いてるはずだろ？ しばらく黙って睨みを効かせてたら、智喜が窓の外を眺めながら口を開いた。

「何だあ？」

余裕ぶつた智喜の態度に腹が据わった。

「おめえのバイクの件って言ったら話分かるか？」

俺と目を合わさず、智喜の野郎はまだ窓の外を眺めてた。

「あー、あの野郎、おめえの舎弟か？今日金持ってきてやがったよ…も、もう金渡しまったのかよ！？」

しかし、「はい、そうですか」って俺も引き下がれなかった。

「じゃあ、話は、はええ。その金…今すぐ出せや」

「あーっ！？」

鋭く眉間に皺を寄せて薄い唇を吊り上げた智喜がようやく俺と目を合わせた。

「おめえが請求先を間違えてるから教えてやるよ。あれは部活中の事故だ。部活中の事故は生徒に請求するもんじゃねえよ。学校に請求するもんだ。それとも…何か？ おめえが学校に請求できねえ訳でもあんのか？」

智喜と対照的な無表情で、俺は正論を言った。

「おめえも、つくづく身の程知らずな奴だな。俺にその言い様はねーだろ？」

…何だ？ そのナメた低音？…

気取りもいい加減にしてほしかった俺はどうしようもなく頭へ血を上らせ…。やっぱ、理屈が通るような相手じゃねーな。智喜に向かつて軽く笑みを浮かべた。ざけんなよってんだ！ バーンと響く爽快音が床を揺らし、空気を凍らせた。俺は智喜の机を薙ぎ倒していた。

表になった智喜のその高慢な態度。
ざわめいていた教室が一瞬で静寂。

「言い様っ！？ ザケンじゃねえぞっ！ じゃ、おめえは何様だ！
？ 金返してやれって言っただよ！」

「タケル！ 止めろっ！」

飛び込んで来た雄二が俺の腕を掴んだ。

静寂が続く中、智喜がついに立ち上がるうとした時、タイミングよく始業チャイムが鳴った。

「放課後、体育館の裏に來いや。話つけてやるよ。話つけるの意味くらい…わかるよな？」

渋く決めたつもりの智喜をその場で蹴り倒してやっても良かったけど、先生に止められて中途半端で終わらせたくない。俺は目の前にいる「何様」と完全にケリをつけてやりたかった。

「ああ、そのサシ受けてやるよ！ 逃げんじゃねーぞ！」

爆発寸前の怒りをなんとか抑えながら、俺は雄二と一緒に教室を出た。

「とにかく誰にも言うんじやねーぞ。特に、あの二人にはな」

俺は雄二に念を押した。

「タケル…止めとけよ。もう、あいつも金払っちゃまったことだしよ」

雄二は諦めていた。

「もう金の問題だけじゃねえ。あんなヤクザみてえな奴を黙って見過ごすわけいかねえんだよ。俺、一人で行くから。絶対、言うんじやねーぞ！」

頭を抱えて溜息をつく雄二を残して俺は教室を出た。

と、格好良く決めてはみたものの…。族の頭とやり合うことなんて、当然、生まれて初めての俺。「完全にビビッてってなかった」と言えば…正直、嘘になる。

それまで、智喜と話した事なんてなかった。

何かイカつそうな奴がいるって事は雄二達から聞いていたけど、「興味ない人や物は、この世に存在しない」と、中学の時から持論を立ててた俺にはどうでもいい話。だから、智喜なんて奴は俺の意識にも視界にも存在してなかった。

あの野郎、ズツと余裕かまして座ってやがったからなあ。身長はどうよ？ まあ見た感じ俺よりちょっと高えか？ 体つき？ まあ

俺よりちよつといいか？ ケンカ慣れも向こうが上だし。クソ！
勝つてるとこねーじゃねえか？ まあ参加することに意義があんだ
よこのケンカは。とりあえず俺は自分に言い聞かせた。

クソ！ タイミング悪いなあ。階段で彩に出くわした。

「あれ？ タケル、どこ行くの？」

「便所だよ！」

やや、不機嫌気味で答えたみたいだったけど、よく覚えてない。

俺は校庭に出て渡り廊下を抜けて、ついに体育館裏に着くと、智
喜が体育館の壁に背中を着けて先に待っていていやがった。

「逃げちまったと思ってたぜ」

まだ二度目の対面で、ふてぶてしい態度。

「フツ！ 武蔵だよ。俺は！」

「あつ！？ 訳わかんねー事ほざいてんじゃねーぞ！」

歴史の学力は俺が上らしい。

「おめえみてえな野郎が学校に幅利かせてくれちゃー迷惑なんだよ。
おめえが金むしり取った奴は母子家庭だよ…」

嘲笑いやがった智喜は壁から背中を起こし、俺が立っていた体育
館裏庭の中央付近に歩み寄ながら制服のジャケットを脱ぎ捨てた。

何、ニヤついてやがんだ？ こいつ。

Tシャツ姿の智喜を近くで見ると、身長は俺より頭一つ以上高く、胸板も厚く、シャツから二の腕の筋肉がはみ出し袖口がはち切れそうになってた。でも、やるしかない。俺もジャケットを脱ぎ捨てた。

「来いよ！ 小僧！」

手招きしながら余裕ぶった顔つきの智喜に根性を決めた俺は智喜に突っ込んだ。しかし、智喜は微塵も動かない。

これなら最初取れる！

顔面めがけて放った拳を智喜はそれが当たるか当たらないかの寸前で避けた。空振った俺がバランスを崩してる隙に智喜のカウンター気味の右フックが俺の顔面を捉え、ケンカは初めてじゃなかったけど、これほど重いパンチを食らった事がなかった俺はよろけることもなくその至近距離からの拳に吹き飛ばされた。既に口の中に鉄分の味が広がり鼻血が地面に滴っていた。

「クソッ！」

血唾を吐き捨てて立ち上がるうとした寸前に智喜の蹴りが俺の脇腹に入り、体を浮かび上がらせた俺はそのまま地面に落ちる。胃液が逆流して吐き出しそうになったが必死で飲み込んだ。

「フッ！ もう終わりか？ 小僧！ こんな打たれよええ奴は初めてだ」

頭上で智喜のせせら笑いが聞こえた。このままじゃ、智喜の体格とパワーに圧倒されて終りになる。考える考える。何か勝機が…。

「立てコラ！ まだまだ遊びたんねーんだよ！」

叫びながらタケルの背中を踏み付けると、タケルは転げ逃げ、俺から距離を取った。口ほどにもねえ奴。

そう言えば、昔、親父が言ってたよなあ。

自分よりデカイ奴とだけしか喧嘩するな！ 小さい奴には業と負けてやれって。デカイ奴と喧嘩する時は？ そうだ！ 俺は揺らめきながらも立ち上がった。これしかねえな。行くぞ！

「ウラッ！ この野郎っ！」

余裕こいてたのか、不適に笑う、無防備の智喜。俺は智喜の腰目掛けてタツクルする。

「何だ！？ テメエ！」

俺はタケルの奇襲に慌てた。

デカイ相手とやり合うときは無理に顔面狙うな。絶対に距離をとるな。有効手段は相手に捕まってボディへの連打だ。親父が言っていた通りにしてみよ。

「この野郎がーっ！」

タツクルしたままの姿勢で智喜のベルトを掴んだ俺は智喜のみぞおち目掛けてボディブローを連打した。

「何だそれ！？」

やせ我慢してほざいてみたが、正直、手首にひねりを加えられたタケルのコークスクリュー気味のボディブローの連打は効いていた。苦し紛れに、何度も鉄槌をタケルの背中へ振り下ろしたけど、何が何でも離れようとしなかったタケルは更に激しいボディブローの連打を俺に浴びせた。こいつ、捨て身か？俺は奥歯を噛んだ。

智喜の鉄槌に息が止まりそうになっていた。俺は懸命に智喜の腰にしがみつき、親父の言った通り、手首にひねりを加え、拳をねじ込ませるように、その固い筋肉の板を連打した。

「ウグツ！」

智喜の嗚咽と同時に、智喜の体が前のめりになった。チャンスだ！咄嗟に、俺は智喜の体から離れた。くの字になって腹を押さええる智喜。

これなら打てる！

打ちごろの位置まで下がっていた智喜の顔面へ、俺は全ての体重を乗せた右フックを叩き込んだ。智喜が左によるめいた瞬間、軸足を右に切り替え、左蹴りを放つ。

「もう一丁だっ！」

俺の左蹴りが智喜の側頭部を捉えた。

俺の体は左に揺れ右に飛ばされ地面に叩きつけられた。

「何だコラ！　ぶっ倒れてんじゃねーぞ！」

頭上でタケルが叫んだ。

立ち上がるうとしたが、左右に脳を揺らされた俺は、なかなか地面を踏めずにいた。この俺が倒される？　あのタイミングでフックとキックのコンビネーション。この野郎、ありがち素人じゃねーな。舐めてた。顎をさすりながらタケルを見上げた。

形勢逆転と言いたかったけど…体力と痛覚が限界に近づいていた俺は智喜が寝ている間に息を整え、「親父の教え」を思い返していた。倒れてるデカイ相手に無理に覆い被さりマウントを取れば、逆に相手に巻き込まれる危険性がある。起きるのを待って、まだ迫ってくるなら同じタックルとボディ攻撃だ。

クソッ！ マウント取らせて巻き込んでやるうと思っただが、この野郎、乗ってきてやがらねえ。このまま寝てたら俺の負けになる…。おぼつかない足で何とか地面を踏みしめた俺は必死で起き上がった。

「ナメてたぜ…。おめえ…」

さすが族の頭張ってるだけの事はあんな。智喜の目はまだ死んでなかった。けど、明らかに足元はグラついている。

今だ！

再び、俺は智喜の腰に飛び込んだ。

「またか！？ てめえ！」

防御なんて出来る余裕がなかった俺に再度タケルのタックルが入った。また、タケルはボディブローを連打し始めた。このまま寝ても、こつも腰に纏わり付かれちゃ、巻き込んでマウント取れねえ。地獄だ！

智喜のベルトを握り締めた俺は最後の体力と精神力を振り絞り、智喜のボディに再び連打を浴びせ続けた。

早く倒れる！ この野郎がっ！

ひねり込ませていた右の拳の皮がめくれ上がり智喜のシャツが血染めにされた。

俺はしがみつくとタケルに膝と鉄槌を散発したけど、腹に力が入らない攻撃は苦し紛れにもならない。負けねえ！ 喧嘩に一度も負けた事ねえんだ！

智喜の膝と鉄槌を何発も胸と背中に受けたけど、俺は意地でも、ボディブローを止めなかつた。しかし、視界が眩み、呼吸が詰まり、そろそろ限界点を越えそうになって…

「いいっ！ いい加減しろーっ！！」

俺は死ぬ気で智喜の左足を抱え上げ…

「んのヤローツ！！」

そのまま全体重を浴びせ、智喜を押し倒した。

地面にツカツと鈍い音。

うわっ！ 頭からいつちやっただよ！ 智喜は動かなくなった。やり過ぎたか？ 朦朧としながら、智喜を見下ろした。大丈夫か？ こいつ。大の字になり薄く目を開けてゼーゼーと呼吸を繰り返していた智喜が急に体を曲げて嘔吐し始めた。

立てねえ！ もう終わりだ！ 負けた！ 初めてぶっ倒された！
けど、タケルには最後のプライドくらい見せてる。

「何だっ！？ トドメ刺さねえのか！？」

もう血も出ねえよ。

「寝てる相手、仕留めるほど悪趣味じゃねえよ！」

そう格好つけた俺も、息を荒げて必死で両膝に両手を突き、トドメ刺す元気なんて一ミリもない。仰向けに寝ていた智喜が徐にズボンの後ろポケットに手を潜り込ませ、何やら取り出して俺の足元に投げた。

茶色の封筒。

擦りむけた右手を動かし、その封筒を拾い上げて中身を覗いた。

札が：十枚。

終わった。

封筒を握りしめ、荒い呼吸の中で、達成感ではなく…虚しさも切なさにも堪えながら、俺は微笑んで智喜を見下ろした。

「タケル！ タケル！」

どっかで聞いた声…いや、間違いなく、彩の声が俺の背中で響いた。

「雄二の野郎…」

タケルのベッドの上で仰向けになった私は激しい鼓動を落ち着かせようとす。その困惑と動揺を出来るだけ制御する為にうっすらとだけ目を開けた。私の体に響くのは私の鼓動か、覆い被さり、私をジッと見詰めるタケルの鼓動か、分からない。私はまた暗闇に吸い込まれた。

「ズツとこうしたかった。今日から…一つになろう」

タケルの囁きに緊張感を出るだけ和らげようと努力していたら、ベッドの上に、固く置かれていた私の体がタケルに引き込まれ、溶けていきそうになった。

「うん。でも、初めてだから。タケル、怖くなったら助けて」

暗闇の中で囁くと、再び、タケルは私にキスをくれた。生理は三日前に終わってたけど、どんな下着を着けていたか、思い出す余裕も無い。でも、キスってこんなにいいもんなんだ。夢中になるよ。舌まで…絡む絡む。こんなんでいいのかな？ とりま、タケルの舌に合わせ。

長いキスが終わるとタケルが私に自分の体重が掛からないように首筋にキスをして舌を這わし始め、吐息か、声か、わからない音が私の口から漏れた瞬間、タケルの唇が私の唇に戻ってきた。あー！ 擦ったかったあ！

暗闇の中でも、私は雨音をしっかりと聞いていた。

タケルが唇を一旦外すと、私とベッドから離れて机に駆け寄り、引き出しを開けた。部屋の明かりを消して戻ってきたタケルと少し見詰め合うと唇も戻ってきた。そりゃ、最初は暗い方がいいよ。でも、昼間だから、あんまり変わんないかも。とりあえず、ありがとタケル…。

タケルは舌を絡めたまま私のパーカーの裾を捲りスカートの上ウエスト部分からインナーを引き出した。そして、キスを離れたタケルは一気にパーカーとインナーを私から脱がせたようとしたけど、私の脇の下で止まったから恥ずかしかったけど、後は私が少し上体を浮かせて自分から脱いだ。ちよつと、大胆だった？ で、タケルにブラ見られてる！ これ思ったより恥ずかしい。思わず私はライトイエロー地に白のビビット柄のブラを両手で隠した。まあでも、このブラなら見せられるか？ パンツもこれと同じ色柄だし。

「彩…。かわいいうブラしてるじゃん」

「もーっ！」

恥ずかしさのあまり私はタケルに抱き付いた。おめえ、口に出すこたあねえだろ！ こっちは真剣ハズいんだよ！ 私をしつかり受け止めてくれたタケルは浮き上がった私の背中に片手を回し込み、ブラのホックを器用に外す。慣れた手つきしやがって、こいつ。それは、そうと、オッパイを大好きなタケルに見られる…。マジ、私

胸だけは自信ないんだよねえ。ちっちゃいから。由美のおつきいオツパイをちよつとだけでも欲しいもん。

タケルは抱き付いたままだった私を柔らかく押し離すと、ブラのストラップに指を掛け、片方ずつ私の肩からブラを抜き去った。あー！　とうとう、見やがったよ！　こいつ。恥ずかしいさと緊張。少し怯えながらも、私はタケルから目を離せない。

「綺麗だよ…。彩」

照れて笑い、さすがに、視線をタケルから外した。マジ？　私、自信ないんだけどなあ。でも嘘でも嬉しいよ。観念した！　もう目を開けていられなくなり、枕に顔を埋める。少しの間隔を空けてタケルがついに私のオツパイを揉む。

タケルの手あつたかい。

私の乳首を指で弾き転がしながら、ゆっくりとオツパイを揉むタケルをおずおずと見る。タケルはいつの間にか羽織っていたブルーと白のタータンチェックのシャツと黒のインナーを脱ぎ捨てて、私と同じように上半身裸になっていた。タケルの裸見るのもハズい。ぼんやりとした私の視界の中に、タケルの二の腕が浮かび上がる。私のオツパイを丹念に揉むタケル。その動きに合わせて二の腕が波打つ。筋肉で少し盛り上がった両肩。堅そうな胸と割れた腹筋。逆三角のシルエット。綺麗。タケルの裸体に見取れた私。タケルの頬を撫でると、タケルの唇が私の唇に落ちてきた。

唾液が潤滑液になり、タケルの唇は私の首筋を滑り抜け、あまり自信がない私のオツパイの谷間に、いや、谷間なんて大したもんじやなかったけど、とにかく、その辺に這っていったタケルの唇はすぐに私の乳首を吸い込んだ。

「ウツ！」

生まれて初めての感触に歯を食いしばったけど、その擦ったさから解放されない。私の顔は、更に、枕へ埋もれた。そんな、丹念に舌回転させたら、吸って回転されたら、声出る。タケル…。ゴメン！ 我慢できない！

「ア、クツ、アアア…」

タケルは私の手を握ってくれていたけど、私は空いた方の手でタケルの髪を呻き声と一緒に撫で回した。

「ウツ、ククツクク…」

クツ、擦りたいっ！

雨音。心音。タケルの舌が私の乳首に絡み付く音。それらに、何とも恥ずかしい私の声が入り混じり、それまで聞いた事のない音声が部屋中に響いていた。

好奇心と不安に負けた私。少しだけ枕から頭を浮かせ、少しだけ目を開けると…。エー！ そ、そんな、赤ちゃんみたいに！ 舌先で転がし、口に頬張り、吸い上げる。一連の行為を左右の乳首に万遍なく繰り返すタケル。ああ、タケル…。驚嘆が母性に変わる。そんなタケルが健気で可愛く…。私は自分の頬をタケルの頭に擦り寄せ、タケルを抱き締めた。

もう、好きななんて単純な言葉では解決できなかった。

愛してる…。

私の両腕が緩み、タケルが私のミニスカに手を掛けた。その瞬間。

私の内股に力が入った。いよいよだあ。唯一の救いは、朝、シャワー浴びてきた事だあ。でも、でも、私のアソコをタケルに見られるう。明るいから、どうかなあ？ タケルがミニスカのホックを指先で弾き外しジッパを下げる。タケルの唇が雫を残して私の乳首から脇腹へ這い……。その攪つたさに「アッ！」と声を発して顎を上げた。タケルは緩くなったミニスカをサッと足元までずらし、うわわっ！ 取り去った。

パンツまる見えだあっ！ 心配窮まりない私はさすがに頭を上げて下を見た。ブラとお揃いのパンツを、タケルの馬鹿は上体を起こして、マジマジ眺めてる。もうっ！ こいつ！ んな、真剣に見なくていいって！ 私はまた恥ずかしくなって、顔を枕に戻すしかなかった。タケルは私の紺のハイソックスを素早く取り去った。直後に、私のパンツのクロッチ部分にタケルの指の感触を得た。

「アッ！」

また内股に力が入ったけど、タケルはパンツに指を掛けて一気にずり下げ、あー！ 終わった！ 私の両脚からパンツを引き抜いた。見られたあ！ ついに見られた！ 愛してるタケルに私のアソコツを。

カチャカチャと足元から音がした。ん？ チラ見すると、タケルがベルトを外し、ジーンズと下着を脱いでいた。あっ、ちよつと、タケルのお尻が見えた。私の羞恥を察してくれたのか、タケルはベッドの下に落とされていた布団を引き上げて私達に覆い被せた。さりげなく腕枕をしてくれたタケルに抱き付いた私は夢中でキス。よかったあ！ ちよ、ちよつとだけ休憩いるよ。これ。体ガチガチ。

タケルの体温と優しい瞳に安心感を得た私はタケルの唇と舌を吸いながらお腹辺りに何か固いモノを感じてた。

雨が…降ってきた。

夕方からバイトに入った私はレジカウンターの中でウィンドウの外を恨めしく眺めた。

「ああ、今日バッグ替えて折り畳み傘入れるの忘れた」

私の小さな独り言をすぐそばにいたオーナーに聞かれた。

「由美ちゃん…。今日は九時上がりだったよね？」

「はい。傘…取ってきます」

雨が降った時に陳列する傘を取りに、私はレジカウンターを出て、店奥の倉庫に向かった。六年前にサラリーマンを辞めコンビニを始めたオーナーは店の仕事ができなくなった妊娠中の奥さんの分まで、毎日、慌ただしくバイトの私達と一緒に店を切り盛りしていた。人通りが多い繁華街に立地された忙しいコンビニの評判は良く、親会社の会報誌に「顔も売上もカッコイイ、オーナー！」と紹介された事も。確かに、随分年下の私から見ても、業とワックスで乱した短い髪は単なる「四一歳の若作り」ではなく、鼻筋が通ってキリッとした顔立ち、長身でスラッとしたスタイル、オーナーに良く似合っている。うちに女性客が多いのはオーナーが原因かもしれないね。

その日は、バイトの子が一人休んでしまい、その子の代わりに私と一緒にオーナーはレジに入ってくれた。

バイトを始めるまではコンビニの仕事は簡単と想ってた。でも、実際はレジ打ちは勿論の事、陳列、冷蔵冷凍庫への補充、商品の受注に店内外の掃除等大変で…。コアタイムになると、バイトがフルで回っても人手不足になり、主に、倉庫兼用の事務所でPCを使って商品の発注、管理の担当をしているオーナーも店に出て来て、バイトを手伝う。

夜六時から八時までのコアタイムが終わり、一息着いて、後二十分でバイトは終わり。なのに…最悪の雨。ついてない。

「由美ちゃん…」

レジカウンターのそばで傘を陳列していると、オーナーからまた声をかけられた。

「はい」

「傘…持ってきてないんだ？」

「はい。ここで…傘買って帰ります」

「そんなの買わなくていいよ。九時上がりなら…俺が車で送ってあげるよ。九時からバイト三人来るから」

ウインド越しの雨は強さを増していた。これじゃあ、傘あってもキツイよね。

「じゃあ…お願いします」

その日だけ、私はオーナーに甘える事にした。

彩、ガチガチだ。こりや休憩いるわあ。もうちょい自然体でエツ子に入つてこ。俺は彩に腕枕しながら長いキスをし、彩の髪から緩くなっていたブルーのシユシユを抜き取った。ふーん、これもいいねえ。ポニーテール以外の彩の髪を、しかも、乱れた髪を初めて見た俺は手櫛で彩の髪を少し整えた。こんな長かつたんだなあ。彩の髪。

はつきりとした二重瞼。透き通った瞳。微妙な水分を滲ませる彩は雨音さえ寄せ付けない。

「彩…。綺麗だな」

「綺麗じゃねえよ」

照れて笑った彩が俺にまた唇を重ねる。可愛いオツパイも俺の胸に重なった。

「んな、せつかく褒めてやってんだから…」

俺の口の中に、彩は吹き出した。

「そ、そんなのさあ…。いきなり『綺麗だな』って言われてどう答るってんだよ？ 有難うございますってのも…何か変じゃん」

「嬉しくない？ 彼氏に『綺麗』って言われて」

「んまあ…嬉しい…かな」

舌を絡めながら、彩は腕の力を強めた。綺麗でもあり、可愛くもある彩。

「ちょっと、このままで…ゆっくりしよ」

唇を離し、俺は彩の前髪を手櫛で梳かす。

「うん」

その笑顔…眩し過ぎ！

休憩？ マジ良かったあ！ 心臓破裂しそうだったよ。でも、タケルの「彼氏から…」って言葉は効いたよね。タケルに唇を戻した私は悪戯っぽく、自分の舌先でタケルの舌先を擦った。

「こっやってると…凄い落ち着くね」

凄く癒されて、柔らかく、夢心地であっても、お腹に当たるタケルの愛情の固さは変わらない。

「もう好きってだけじゃ収まらなくなってきた。愛してる…。彩」

キスしたままのタケルの囁きは私の思いと一緒に。また雫が枕に落ちた。

「愛してる…。タケル。スッゴク愛してる。嬉しくって幸せでどう

しようもないんだけど…。ゴメンね。涙止まんないよ」

私の涙を親指で拭ってくれたタケルが柔らかく私の目にキスしてくれたから、私はその湿気の中で笑顔を滲み出せた。もう全身がタケルに溶かされ、タケルに同化されていく。

早くタケルと一つになりたい。

もう我慢できない。

左腕で彩に腕枕していた俺。キスを離さず、空いた右手を静かに彩のオツパイへ滑らせる。親指で固くなつた乳首を転がした。

「可愛い乳首だ…」

「ウラツ！ もういいってんだ！」

思わず呟いた本音にすぐ反応した彩は瞼を湿らせたまま、俺に強く身を寄せ、唇を固くした。

「だから、褒めてんだって！」

「だから、答えようがねえってんだ！」

「彼氏から褒められて嬉しくねえのかよ？」

「嬉しい…」

俺の舌に、彩はしつとりと自分の舌を絡ませた。乳首を摘む。一瞬、彩の体がビクッと痙攣し舌の動きが止まったけど、すぐに柔らかくなる。

「大丈夫だから…」

止めようがない右手は更に下方へ滑り始めた。

「うん」

いいよもう。タケルに全部任せるよ。だって、愛してるから…。脇腹から下腹部を撫でたタケルの手が…私のアンダーヘアに達した。タケルに任せただから、何も怖くない。…恥ずかしいけど、何とかなる…

タケルに溶かされてたから。

タケルは私の右足の下に自分の左足を器用に滑り込ませ、私の膝裏を自分の膝で引つ掛けて私の脚を開かせた。お、おっお！ 凄い凄い！ 私の右足はタケルの左足に乗つかるとかのような状態になり…比較的、楽に脚を開けられた。あんた、上手いねえ！ 一瞬、笑いそうになるくらいの余裕。私の茂みを撫でて、指の間に毛を挟んで引つ張って…またサワサワ撫でて…ピンピン引つ張って…繰り返す繰り返す。タケルはどうやら遊んでやがる。おいおい、ダメ！ 擦りたい！ 笑うっ！

「ちよっとお！ おめえ、遊び過ぎだつてよ！」

余裕を持ち過ぎた私は普段の口調で、キスしたままタケルに吹き出した。

「だって初めてだもん！ 彩のココさわるのさあ。堪能してえじゃん」

手の平全体で、タケルは、ゆっくりと上下に私のアソコを撫でていた。こんな、ふざけ合いもいいよね。

「エロいつてのバカ！」

軽くタケルの下唇を噛んでやった。タケルの茶目っ気によって緊張と不安を乗り越えられた私は初エッチ寸前にも関わらず、無邪気な感情を剥き出しに出来た。

「彩、おめえ…泣いたり笑ったり忙しい奴だなあ？」

「そりゃ私も女の子だからね。泣いたり笑ったり忙しくなるよ」

「調子いいところで、おめえ、女の子になるよな？」

「ざける！ 調子の問題じゃねえよ！ 生まれつき女だよ！」

こんな時でも…喧嘩の前兆のような会話。いつもならここで、タケルが、「フツ！ 面倒くせえ奴」私が、「あー！ 何言った!？」で、喧嘩が始まるんだよ。でも、この時、タケルはキスと私のアソコを触る手を外さず、優しい瞳に私を引き込んでくれたから。

「やっぱ、こっちの方がいいや！ さっきみたいなシミジミモードは俺と彩には似合わない。自分の感情をさらけ出し、彩も全てをさらけ出し、お互い素直になれば、格好なんてつける必要ない。てか、格好なんてつけるから素直になれないんだよ。皆、キメたがるエッチ寸前の雰囲気。そんな中、いつものキャラを取り戻してくれた彩。こういう、ぶっちゃけキャラの彩が一番可愛い。だから、俺は彩に喧嘩売ってたのかな？ 気持ちと体が柔らかくなった。」

「でさあ…。ど、どんな感じ？」

「普段を取り戻しても、私は絶対にキスを外さず、タケルの前歯の裏を舌先で撫でた。」

「どんな感じって…？」

「だからあ…。タケルが今触つてるところだよ？」

「気になってる事だけど、聞きにくい事。さりげないタイミングは、ここしかないと思った。」

「あ、ここ？」

「タケルがペタペタと私のアソコを軽く叩く。」

「う、うん」

「やっぱり、ちょっと恥ずかしかったから唇が固くなった。」

「どおって言われても…まだ触ってるだけだし…」

視線を上向きにしたタケル。アソコを撫でる手は休めない。

「触ってる感じは…どう？」

「最高に決まってんじゃん。だって、彩のだから。彩の全てが俺にとって最高だから」

タケルの言葉で、唇が柔らかくなり、舌が回転を取り戻した。

「愛してる…。タケル」

「愛してるよ…。彩」

そして、ついにタケルの指がアソコの中に埋もれた。ネチヨツとした生まれて初めての感触が…。うわっ！こんな時こそいつもの私でいなきゃ。やっぱりそっちの方がタケルも楽だろうし。

「凄い…濡れてるよ。まだそんなに指入ってないけど…表面付近まで滲みでてる」

タケルの具体的な説明に私の照れが爆発した。

「もうー！ おめえ、恥ずかしいだろがっ！」

また私はタケルにしがみつき、更に強く舌を絡めた。

「いや…彩も…不安だろ？ だから…説明した方がさあ」

まあ、そりゃそうだよな。私も質問したいから…。

「で…どんな感じで濡れてる訳？」

「ああ…こんな感じ」

指を引き上げたタケル。私の顔と自分の顔の間で中指と親指を重ね、ゆっくりと離す。糸が二、三本伸びた。

「うわっわわわっ！ な、何それ！？ そ、それ私のかよ？」

「うん。彩の…凄い濡れてるって言ったじゃん。ほら…」

もう一度、タケルは指を重ね、ジワーツと離して糸を作った。

「もういいよ！ バカもう！」

笑いながら、私は、その糸を握り潰した。うわっ！ 凄い又ル又ル感。

私の照れ笑いを舌の回転で沈め、指をアソコに戻したタケルは更に深くその指を埋めた。入る。入ってる。さっきより深い。粘着がさっきより、ネバネバ感がさっきより、こ、声出しているのかよ？ 感覚を研ぎ澄まし、タケルの指の動きを追う。

「ウツ！」

ある一点にタケルの指が到達した。

全身に電気が。な、何、そ、それっ！？ 最初、その部分を指で弾いたタケルは徐々に円を描くようにグニユングニユンと、こね始

めた。ダメ！ うわっ！ キ、キスが震える。し、舌が膠着する。
タ、タケルに聞いてみよ。

「タ、タタ、アアッ…ウツウウ…」

変な声が出て、伝えれなかった。

擦ったいような、気持ちいい、いや、何、そのコリコリした小骨
？ タケルが指の動きを速める。

「クツ、アア、アア、アアア、アアア…」

そのリズムに合わせて、ちょっと大きく漏れる声。布団の中で、
体が弓なりになる。

「ア、アアアアア…タケルウアアアアア…」

指の高速運動を止めたタケルは、その固い部分を指で摘む。けど、
滑ってなかなか上手く摘めないようだ…。ちよ、ちよと落ち着いた。
これならタケルに聞ける。

「タ、タケル。な、何だ？ それ」

「ああ、これ？」

タケルがその部分を指で押し込んで言った。

「そっ！ そそそ、それ」

瞬時に反応した私はすぐにタケルの舌を舐め回す。

「クリトリス。通称クリ」

タケルはそれをまた摘む。な、何か聞いたこと有るような無いよ
うな。まあいいや、通称クリね。

「女の子の一番感じる部分で…」

タケルが指の高速運動を再開する。ぐっわっ！ 来てる来てる来
てるっ！ うーっ！

「ウツ、アアアアア…」

「気持ちよくない？」

「き、気持ちいい」

ヌルヌル下品に濡れ、また体を弓なりにした私。嘘なんてつけな
い。タケルはクリを愛撫したまま少し上体を起こして、私に覆い被
さった。タケル。す、凄い。私の唇に落とされたタケルの唇はすぐ
に首筋へ移動し、さつきよりも早くオツパイまで流れ、乳首にキス
された。また赤ちゃんになるのかな？ タケルの唇はそこで止まら
ず、私の脇腹へ、下腹部へ…。て、エツ？ それ以上先つて、まさ
かっ！？ 慌てて目を開けた私。枕に埋もれていた顔を上げて、下
を見た。タケルは布団を蹴落とし、完全無防備になった私の脚の間
に入り込んで私のアソコを間近で覗き込んでいる。

「コ、コラッ！ おめえ！ それ洒落なんねえよっ！」

さすがに私は声を張り上げ、脚を閉じようとしたけど、脚の間に

入っていたタケルの体が邪魔をして閉じられなかった。

もしかしてまさかあ？

男が女のアソコを舐めると言う愛情表現方法は、私の知識の中に存在していたけど、余程、慣れてからでないといけない方法だと認識していた。初めてのエッチで…しかも、恋人同士になったとは言え、前日まで周囲が呆れるほど喧嘩やりまくってた者同士が…そんな…。とにかく想像を絶していた。

「ちょ、ちょっと、タケルちゃん！ それってえ？」

「大丈夫、彩。凄い綺麗だから…。俺に任せて」

な、何を任すってんだよ？ 綺麗なもんか！ んなの！ その人生の終焉をも思わせるような感覚に襲われた私は力なく枕に顔を落とした。かなりヤバイよ。これ…。で、恥ずかしがってる間にタケルがアソコにチュツ。

「ハッ！」

仕方なく声が。ついにやられたっ！ てか、臭いどうなの？ こんな事になるんならシャワーぐらい浴びさせてもらいたかったあ。朝のシャワーから時間経ってるし。んな臭いで引かれて嫌われたら生きていけねーよ！ 私。どうにせよ、私の人生がかかっていた事は確か。

もういい！ タケル！ 臭くって仰天しようが、全て、おめえの自己責任だからな！

恐ろしいぐらい彩のアソコは無臭で綺麗。勉強始める前に、確か、彩はトイレに行ったけど、不思議なくらい臭いが…ない。陰毛も見事な菱形で薄くもなく濃くもなく、いや、どちらかと言うと薄い方。小陰唇も小振り。しかも、縮れて皺になり黒ずんだ部分もない。愛液を醸し出す中身もピンクという卑猥な色ではなく、薄い桃色。

ヨシッ！ 舐めてみよう！

俺はその陰門の下部から彩の小陰唇に沿って、舌先に微妙なビートを作って舐め上げを開始する。すると、彩の膣口から溢れる愛液が俺の舌にしたり落ちた。少し体を浮かせて顔を横に向けた俺は上唇を向かって右側の小陰唇、下唇を左側の当てながら、その中身全体を欲望と熱意のままに舐め上げる。

わわわわっ！ な、何、ズーズー鳴らしてんだよ！？ 私の排泄物が出る所をつ！ アソコの液体を啜って飲んでやがる。そんな汚いのを。あーっ！ タケルのお母さん！ すいませんっ！ あなたの大切な息子さんの体おるか内蔵まで汚してしまいましたあ！ 有り得ないと思われても仕方ない罪意識、看過出来ない律儀な感情が深く私の顔を枕に減り込ませた。でも、私のアソコを舐めているタケルに私の体と声は反応し、沈む顔に反して体は再度、弓なりに軋んで…。

「タケル… ああっうわ、 ああっあ… 愛してるうう… 声でかくなってるいい？」

シートを握り締め、力んでいたけど、意地でも、私は可愛く存在したかった。

部屋の外にも中にも…

雄二にあんなこと言われたから、その夜の塾はヤケにあいつの事が気になった。

須田彩…。雄二の人違いかも。

雄二が言ってたみたいに、そんな可愛かったかなあ？ そう言やあ、まともに顔見てねえなあ。塾出てからは夜で雨であんまり顔見れなかった。まあ取り敢えず、今日は昨日のお礼を言っ借りた傘帰して終りだ。やや緊張し、やや楽しみにし、俺は微妙な気分で塾に向かった。

塾は一クラスに50人ぐらいで席が決まってない。大体席は前から埋まっていった。勉強熱心な奴らは常にホワイトボードにしがみつきたいらしいけど、俺は…そう言う人種じゃなかったし、塾特有の受験に対する集団意識は避けたかったから、いつも後ろの方で気楽に座ってる。

前日まで、俺はあいつに気付かずにいた。

たぶん、あいつは前の方の集団の一人で、たまたま昨日は前の席が空いてなかったから俺の隣に来たんだろう。そうに違いない。勝手な思い込みをしながら塾の廊下を歩いてると…

「オッス！」

息なり背中を叩かれ、振り返れば、そいつがいた。

「あつ！ ヨ、ヨッ！」

想像の対象がいきなり声かけてきたら大概は慌てる。俺も普通の人間。ヨッシ！ ついでだ。

「き、昨日…ありがとな。傘。今日持ってきたよ」

そいつを見ずに俺は言った。

「恥ずかしく…なかった？ ピンクの花柄の傘」 ムチャクチャ恥ずかしかったし。

「いや…別に」

何、気取ってんだ？ 俺。

まともにそいつを見ず、教室に入り、いつも通り教室の後ろに向かった。ん？ 何？ こいつ。何故か、そいつは俺について来る。前はまだガラ空きなのに。えー？ とうとう一番後ろまで。

シカト決めて、一番後ろの列に入った俺だけど、堪らず立ち止まり、そいつに振り返った。

「隣いい？」

そいつは俺が立ち止まった直近の席に座った。はあ？ 俺、まだ、いいて言ってるねえし。昨日の傘と一緒にかよ？ マジでマイペースな女だ。だから雄二にも言ったんだよ。こう言うところが男っぽくて苦手なんだよ。俺はそいつに聞こえない程度に小さく溜息をついた。

いつか雄二が言った。「男が女から主導権取るには女が答える前に次の行動に出て、徐々に自分のペースに嵌めていくんだよ」。いつもの調子で理屈こねる雄二に俺もいつもの調子で、「はいはい」って感じだったけど、そいつはまるで雄二の言ったたソレだ。違うのは雄二は男でそいつは女って事。でも、俺から主導権取って何するつもりだよ？ 性格がタイプじゃねえし。でもあま、スタイルは

…スリムで俺好みかもだけど…顔はあ？　まだまともに見てねえかななあ。

「座れば？」

長机に両肘を着き、両手で顔を囲んだそいつは、まだ背後で呆然と立ちすくむ俺にそう促した。

あんたに言われなくても座りますよ。　第一、ついて来たの俺じゃねーし。おめえだつっつの。

「おっ、おお」

昨日もこんな感じだったけ？　仕方なく俯きながら座り、鞆からテキストを引つ張り出した時、「あんな可愛い子…」。また雄二の言葉が頭を過ぎった。そうだ、顔だよ。ジワーツと目玉だけを隣に向けたけど、直ぐ前に戻した。でも待てよ。それは相手が間違はなく須田彩だったらの話で。ここに来る前にも思ってたけど、雄二の人違いって可能性大だよな？　昨日の夜、雄二はファミレスから窓越しに俺らが外を歩いてたのを見た。雨で、しかも夜。ただ単に雄二は海行つてハズレで海行かなかつた俺が女と歩いてたのを妬つかんで、女なら誰でも可愛く見えて、たまたま俺と歩いてた女が可愛く見えたんじゃないの？　たまたま、俺と一緒に歩いてたこいつが三崎中のそのアイドルに似てたんじゃないの？　きつとそうだ。んなアイドル的な女がこんな男みてえな性格なわきゃない。そんな子はもっと恥ずかしがりやで、控えめで、小鳥が鳴くような声で話す子さ。ならジワーツとさせる特別な意識は不要。普通に塾のクラスメイトとして自己紹介すればいい。ヨシ！　そうしよ。

自己解釈成立。

その時、バサッと俺の足元にそいつのテキストが落ちた。

OK！ いいきっかけだ。

そいつのテキストを拾ってやると、テキストの裏に書いてあったそいつの名前が俺の目に飛び込んできた。

…須田彩…

どんなに暗くても、あの雄二が女の顔を見間違えるはずはない。

最近の男つてのは皆、こんな男ばい女がタイプなのかよ？

テキストを拾い上げて一旦停止。そんな単純な俺の様子を須田は見過こさなかつた。

「私…須田彩。彩って呼んでよ。名前…何て言うの？」

いやあ、まだ呼び捨てできるほど親しくねーし…。

「お、俺…」

若干口ごもつた俺を尻目に、須田は俺のテキストを裏返した。

「タケル君かあ。じゃ、タケルって呼ぶね」

いやあ、まだ呼び捨てされるほど親しくねーし…。

「彩…愛してるよ。美味しいよ。いっぱい声出して」

暗闇の中、タケルのその言葉を聞き、私の不安は安堵に変わった。そうかあ。タケルは私の事を愛してくれている。だから汚くないんだ。そう自己解釈したら、急に体の張りが解け、私は好きに悶える気持ちになった。

優しく甘いタケルの言葉が私の躊躇いを払拭させてくれた。マジもう任せるよ。タケル、好きにして。タケルに私の全て委ねます。私のクリを捕らえたタケルの舌先が、更に強く押し込まれ、上下左右に動めき、徐々に周回運動に切り替わる。

「ウーツ！ ウツ！ アアアア…」

私は自分自身を完全に解放させた。

どんな感じで、タケルは舐めてくれているのかな？ 好奇心に駆られて、枕から顔を上げると、瞳を薄く控え、神秘的な表情のタケルが遮二無二に私のアソコ全体を頬張っていた。そんな熱心に…。そんなが健気で狂おしいタケルが堪らなく愛おしい。でも、その時、チラツと一瞬だけだったけど、タケルの固いものが目に入った。わっ！ デケエ！ 無理かも、あんな角。

安堵感と不安感。

好奇心と羞恥心。

微妙に揺れる空間に身を浮かせる私は微弱に奮えていた。

弓なりになった彩の体が尻の下に少し隙間を作った。俺は両手をその隙間に滑り込ませて彩の尻を掴みながら彩の性器を舐め続けた。

そして、我慢出来なくらいに膨れ上がった愛おしさは急激な吸引を起こした。

「タ、タケルツ！ アツ！ ウウウウ…アー！ アーッ！」

保護皮からチューツと彩の可愛い桃色クリを吸い上げてコリコリと舌先でリズムカルに鳴らすと、まるでサイレンのような彩の呻き声が部屋中にこだまする。そのこだまに合わせて彩の下半身が痙攣。その痙攣に合わせて彩から愛液が搾り出された。

「ウツワアアアツ、ハウアアアツアアア…タケルウウウアアア！」

授業中、俺の席の隣でノートを取っていた彩。

実を言うと、親友であり、喧嘩友達でもある彩の横顔を眺めながら、何度も彩の性器を思い描いた。

静寂と沈黙の中で、気に入った女の性器を想像する。男なら誰でも起こす生理的で健全な想像。

「何見てんだよ？」

俺の怪しい視線に気付き、猜疑心ありありの小声を振り向かせる彩。

「あ、さっき先生何て言ってたっけ？」

いつも適当に、ズボンの中に痛さを感じながら、ごまかす俺。

気のきつい女。すぐ喧嘩なっちまう女。でも、不思議なほど俺に、

その性器を想像させる素敵な女。

こんななつてたんだ。彩の性器。改めての実感。 想像が現実となる…その感動と興奮を女は無理かもしれねえが…全ての男は理解出来るはず。

これが日々想像していた彩の性器。

俺は直で可愛らしく開かれた膣口に唇を当て、ズーツズツと、溢れ出す愛液を思う存分吸い上げ、想像が現実になった感動を表現した。

「クツ！ ワーツ！ アアアアアーツ！」

彩の喘ぎは雨音を外へ押し返す。

構わず俺は小陰唇を一枚づつ唇で挟み吸い込み舌先でベラベラと奮わせたり、大陰唇と小陰唇の繋ぎ目を丁寧に舐め上げ、彩の性器の味を隅々まで堪能する。そして、別生命体となった俺の舌先は桃色の壺の上に小さく、可愛らしく存在する彩の尿道口を探り当てた。ヨシ！ こそもいつてやる。舌先がその穴を擦りほじくり返し、俺は彩の排泄物の風味を滲み汁を少しでも得ようと試みた。

「イツ！ ウーツ！ タ、タケル、タケルアーツ！」

大声で彩に呼ばれた俺は少し舌を離して彩の尿道口を眺めた。つぶらで綺麗な穴！ 惚れ惚れする。ここから彩のオシッコが発射されるんだ。舌先はまたその愛らしい穴に減り込んだ。ゴメン、彩。おまえが凄く恥ずかしかつてるのは分かるよ。でも、ズツとズツとしたかった事だから。説明できない位に美味しいから。もう少しだけ恥ずかしかつて、彩。

更に増殖された欲望が与えられた俺の舌先は彩の会陰（膣口と肛門の間）に滑り込む。もう止まらない！ 止めさせない！

制御不能。

彩にとってこれが初エッチと言う事実。

考慮不要。

私の知識の中にそこまでは無かった。

「あつ！ コラそこはダメツ！ タケル！ おめえ、ダメだって！」
堪らずの叫び声。

タケルの舌が這うように私のお尻の穴辺りまで落ちていこうとしていたから、流石に私はお尻の穴を萎ませてタケルに注意を促した。

「大丈夫。彩の全てを知りたいから」

彩の尿道口まで堪能した俺には彩を解放させる確信めいたものがあつた。

…行くぞ！ 彩…

タケルは私の両脚を膝下からグイッと押し上げた。

「ウツ！」

一瞬の内に隙…いや不意を突かれた私。もういいや。好きになさいよ。普通なら、どよめいて力むけど、最早、抵抗なんて出来る体力も気力も持ち合わせてなかった。こんな格好させられんのは、私の人生の中で赤ちゃんの時にお母さんにオシメ替えて貰って以来だよ。んな、お尻の穴丸見えじゃねえか。でも、マジ、マジ汚いよから知らねーぞ！ 私、責任持たねえからなあ！ タケル！！

「彩、ちよっと、舐め難いから自分で脚抱え上げて」

出来る！ 彩なら出来る！ 俺は心中で呪文を唱えた。

「エーッ！」

思わず声が出た。

「大丈夫だから。こっやって、ほら、ほら」

タケルは私の両手を取り、私の両膝の下に当てがった。自分ですんのかよ！？ 私、全然、大丈夫じゃないしっ！…

その状態でも、十分、タケルにお尻の穴を見られていた私はこの際の覚悟を決めてやった。ヨッシ！ もういいや！ 根性見せてやるよ！ あ、愛してるタケルだから出来るんだ！ さあ、どうぞっ！ 全ての概念を捨て去り、私は両膝を抱え上げ、自らM字を作り

上げてタケルの眼前にお尻の穴を晒す。あー！ はっずかしっ！
ふわわわー！ 見られてやがる。

綺麗な花柄。

俺は開かれ突き出された彩の肛門を熟視した。
さあ、味わおう！

ついについに、私のお尻の穴にタケルの生暖かい舌が触れた。
し、死ぬほどハズい！ てか、もう死ぬよ！ あー！ もう私の
デケエ断末魔聞きやがれっ！

「グッガーアアアアアッ！！」

多分、それは部屋を突き抜け、外の雨音をも引き裂いたと思う。

ヒエーッ！ ビックリしたあ！ まだ、ちょこつと舌先触れただけじゃねえか。俺は気持ちを落ち着かせて、ゆっくりと舌全体で彩の肛門を下から上に…

「ウツワアアアアッ！！」

ま、またかよ！？ ベロンした。
可愛い。この放射線状に伸びるヒダ…。丹念に、滑らかに、彩の

肛門を食すると、時折、彩は緊迫感を伺わせるように穴を強く閉ざし…

「タツケルウウウウウ…」

堪えられなくなると柔らかく開き…

「クウウウアアタケル…」

健気すぎるヒダの伸縮運動を繰り返した。

ならこれはどうだ!?

悪戯心が過ぎる俺は可愛い過ぎるその穴に、舌をドリル状に萎めて挿入させた。

「カツ、アアアアアーツ、!!」

部屋全体が揺すられるような喘ぎ声。わー！ デケエなあ！

その電撃と熱波に堪える為、両腕に力を入れると、仕方なく両脚はより高く抱え上げられ、ついでに、お尻もより高く浮いていった。

人生終了。

私の1番愛してる人に、私の1番恥ずかしく汚い部分を触られるどころか、舐められ、内部に舌先を。で、でもお尻がこんな敏感な所なんて、痺れるくらい、あったかい。そ、そんな丹念にピチャピチャズーズー音鳴らして舐めやがって。タケル、マジ覚悟しとけよ。

一生離れてやんないからっ！ てか、マジ初エッチってここまでするもんかあ？

「タ、タケル…ア、アア、ウウウツ、アワー…」

より激しく、熱く、深く、私のお尻の穴を這うタケルの舌がどうなっているか、把握出来ないくらい私の意識は朦朧とし首から上の血管が破裂しそうになった。

タケルのお母さん！ 本当に申し訳ありません！ 私は、私は、こんな汚い事を、む、息子さんにさせてますっ！ そりゃ息子さんが勝手にしてる事かもしれないけど。私も女の子なら躊躇すべきです。私がお母さんの立場なら許せないです。こんなお尻の穴を曝す息子の彼女を。でも、でも、こんな女の子でも、あなたのお息子さんをお愛してますっ！ 許してくださいっ！ てかもう温かくなり過ぎて、ウ、ウンチ出そうですっ！ すいませんっ！

俺の唾液が彩の肛門から染み出しシートを濡らす頃、彩が奮え始めた。もう彩は限界だな。ヨシ！ 美味かった。

タケルが私のお尻の穴から舌と唇を離すと、私は両腕の力をゆっくりと抜き、荒くなっていった息を深呼吸に変えて両脚を下ろす。終わったあ！ 恥ずかし過ぎてタケルにどの面提げればいいんだよ？ 深く枕に顔を埋めて目を閉じた。マジ、あのままならヤバかったあ！ タケルがまたクリを触り始め、私の刺激は継続されていたけど、私は一先ずの安心を得ていた。

「彩…」

タケルの声を闇の中で聞いた。タケルの顔見るの恥ずかしいよ…。勇気を出して奮える瞼を開けると、クリを触りながら私の眼前まで競り上がっていたタケルの瞳に一瞬で吸い込まれた私は素直に快感を伝えられた。

「うー！ タケル…気持ちいい…ウツ！ アアアアア…」

クリが熱い。

「今から…馴らす感じで指入れるよ。痛かったら痛いって言うてくれ」

ちゃんと私に気を使ってくれていたタケル。和らげられた私はタケルの頬を撫でる。もう、完璧開き直りだよ。

「うん。タケルに全部任せる…愛してる」

「愛してる…彩」

私の顔の傍に肘をついて、私に唇を落としてくれた。タケルはクリを弄っていた、多分、中指をだと思っけど。中指を私の膣付近まで滑り落とし、多分、親指だと思っけど。親指でクリへ刺激を継続させた。

痛くつても絶対に痛いなんて言うか！ お尻の穴までタケルは舐めてくれたんだ。もう怖いもんなんてこの世にもあの世にもねえよっ！ 最後までヘタレな事絶対言わねえ。愛してる人に遠慮なんてさせられねえよ！ こっちも任しとけ！ タケル！ 気合いが入る。

不動の決心。

そして、タケルの指が膣口から内部に、ゆっくりと進入される。
キタツ！ また電気が下半身に走り、私はタケルの両肩を掴んで唇に力を込めた。でも、やっぱり怖いもんは怖いわあ。うわっ！ 入ってる入ってる！ タケルの指：割とスムーズに膣内に入ってくるのが逆に怖い。

クリを弄られながらの挿入。

私の神経は完全にクリから膣に異動していた。

最初、ズキンときたけど、その後は割と落ち着き……。でも、それで済む訳がなかった。徐々に本当の痛みが押し寄せてきた。あ、いいいっ…「痛い！」と言葉に出かけたから慌てて唾を飲み込む。その瞬間、膣がグイッと締まり、何とも表現し難い窮屈な痛みが走った。いっ！ い、言うかつ！ さっき見たぶつとい固まりが入るんだから、これから指よりでっかいもんが入るんだから、タケルのものになるんだから、なもんで負けてたまるか！ タケルの唇を激しく吸った。

やっぱりキツイ！ ゆっくりだけど、あんまり無茶したら緊張しまくりの彩は持たない。中指を第2関節ぐらゐまで彩の膣内に挿入親指でクリを愛撫する余裕はもうない。クリから親指を外し、膣内の中指だけに集中した。もうちよいだ！ いっちゃん。よしよしよしよし…。

指…挿入完了。

OK！ 入ったあ！ 俺は一旦唇を彩から離れた。

「彩…。大丈夫か？」

強く眉間を絞る彩。

「大丈夫…。平気平気」

苦悶の表情に笑顔を滲ませる彩は俺を更に欲情させる妖艶な色気を醸し出す。

「全部入ったから…。一旦抜くよ」

「う、うん」

彩の乱れた髪を撫でながら…

「うっ…」

彩の吐息と共に、俺は中指を抜いた。

「ちょ、ちょっと固かったかなあ？ 私。」

私の開かれた両脚の間に入ったタケルはゴソゴソし、再度、指を膣に挿入させようとしていた。ヨシ！ 今度はもうちょい力抜いて…。

彩が静かに息を吐いたのを見計らって、俺は再び中指を挿入する。お、お、お、お、入ってく入ってく…。俺は彩の子宮口、コリコリした部分まで指先を到達させた。ここだ！ OK。

「うっうっ…」

愛液に塗れた指を慎重に抜き去った。

スムーズにいけたあ！ 私に競り上がってきたタケルは瞳とキスを私に戻してくれた。

「大丈夫だった？」

「うん…大丈夫だったよ」

タケルは私のオツパイを包む。

「俺達って…」

私はタケルの頬を撫でた。

「雨に縁があるのかなあ？ 出会いも雨で…初めて愛し合うのも…雨だよ」

「うん。だから、私、雨好きだよ。昔は嫌な気分になったけど…今は何か良い事起こりそうだから」

それから暫く、重なりキスしたまま2人で雨音を聞いていると、極自然に私から全身の強張りが爪先に向かって抜けていった。

「私達のはじまりは…いつも雨だから」

唇を離れたタケル。静かに、体を起こし、私の両脚を大きく開けた。

タケル、雨みたいに優しく激しく私を包んで。

処女喪失…準備完了。

タケルのお母さん。こんな子ですけど、息子さんを頂きます。必ず、ご挨拶には伺わせて頂きます。

この日、何故、私はタケルのお母さんに律儀になりっぱなしだったのか？ 私は未だに分からない。

俺は虚ろな表情の彩を見詰め、彩の脚をM字になるように開き、亀頭を彩の膣口に当てた。あと一押し一突きで彩の中へ。全ての過去が未来に消される。

「彩…。彩のペースで行くから。だから、痛かったり苦しくなったら…ちゃんと見えよ」

優しく私の手に触れながら囁いてくれたタケル。

「うん」

私は、そんなタケルを不安がらせないように微笑みを返した。絶対、痛くても苦しくても我慢してやる。ここからタケルと私はスタート切るんだ。決めたんだ。タケルしかないんだ。心の中でその結論を確認する。過去はこだわらない。タケルの最愛になるんだ。タケルの…。揺らぎなかった。

正面からそいつの…須田の顔を見たら、悔しいけど、雄二の言う通り、可愛い。気付かれないように隣の須田をチラチラ見てたら。え？ 須田は机の上から俺の宿題プリントをぶん取りやがった。

「違うよ。ここ。…t e a c h e d … じゃなくって … t a u g h t … だよ。弱いんだ？ 英語」

また勝手に宿題チェック。流石に、ウザくなった俺はプリントを須田から引ったくり、素早く間違いを消し、その正解を書いた。

「何だよ？ 勝手に見んなよ！ 面倒くせえんだよ英語なんて」
消しゴムの滓を払い、溜息つきながら俯いた。

「スペルは…分かってるじゃん。単語は勉強してんだ？」

須田は俺の顔を覗き込む。

「ま、まあ、一応…受験生だからな」

また溜息をつき、俺は顔を上げた。何、笑ってやがんだ？ こいつ。やっぱ、俺、苦手だよ。

須田が何やら鞆から取り出した。

「これ、貸してあげるよ。動詞の不規則変化表。私は、とくに全部覚えたからさ。蛍光ペン引いてあるところは要チェック。しっかり覚えなよ」

「エッ！ いいよ」と、俺が言う前に、須田は俺のノートにそれを挟み込んだ。

「あ、いや、でも…」

口ごもっていると、先生が教室に入ってきた。また、強引に借り持たせやがって。

「ほんとあいつ何だよ？ 俺が居眠りしかたら肘でコツコツ。ゆっくり寝かせるよ。一番後ろに座ってる意味ねえし」

3時間の授業がやっと終わり、早々と教室から脱出。俺はブツブツ言いながら塾の出口に差し掛かった。

「ついてねえなあ」

塾の出口。軒からしたり落ちる雨。

俺は溜息をつきながら雨を見上げた。今日は傘持ってきたけど、あれは須田の傘だし…。あ！ そう言えば、須田の傘、傘立てに入ればなで、まだ返してねえや。

「家まで傘入れてっよ」

振り返ると、須田が笑ってやがった。てか、おめえの傘だし、勝手に帰れよ。

「私…今日、傘持ってきてないんだよねえ。一本しかない傘は…一緒に使おう」

もう一度、雨を見上げた。

もう一度、溜息。

無理か…。観念した俺は傘立てから須田の傘を抜いた。

「おまえ…三崎中だろ？」

前夜のような激しい雨じゃなかったから、俯いた俺の声は須田に届いた。

「うん。何で…知ってるの？昨日…帰った時は殆ど、て言うか、みんな英語の対策だったよ。殆ど私しか喋らなかつたけどさ。中学の話なんてしたっけ？」

何の話をしたかは殆ど覚えてなかつたけど、須田の言う通り、

中学の話題が無かったのは覚えていた。

俺の友達からの情報でさあ…。何て、言い辛かった。

「お、おまえの家って…三崎中の学区じゃん」

咄嗟に出た切り替えし。

「あ、そう言えば、昨日、私の家まで来たよね」

「う、うん。あそこなら…三崎中って思ってたさ」

俺を見上げた須田はクスツと笑って話題を変えた。

「英語…がんばんなよ。昨日も言ったけどさあ。動詞の不規則変化は重要だよ」

「おっ、おっ。あ、今日…ありがとな。不規則変化表。覚えたら返すよ」

取り敢えず、お礼は言わなきゃ。須田が俯いてまたクスツと零した。

「返さなくっていいよ。私には…用済みだから」

「いや、そう言うわけには…覚えたらちゃんと返すよ」

「私、夏休み中しか、あの塾行かないから。タケルが夏休み中にある全部覚えるなんて無理でしょ？」

早々に、呼び捨てかよ。まあ、いいや。

「確かにな。じゃ、何か、お礼するよ。おまえ、何か欲し…」

「じゃ、映画連れてってよ」

そう来るのかよ？ 物じゃダメなのかよ？

「勿論、高校受かってからだよ。今は…それどころじゃないからねー
遠い約束ね？ ならいいだろ。須田がどこの高校行くか知らねー
し…。」

俺は傘の外を眺めながら溜息をついた。

「おう！ いいよ。映画な。高校受かったら」

「うん！ 約束ね。お互い…がんばんなきゃ。で、どこの高校行くの？」

「三崎高」

軽く答えてやった。

「マジ！？ 私と一緒にじゃん！」

エーッ！ 慌てて、視線を須田に向けた。

「あそこの安全圏だと…偏差値…」

それから、何故か嬉しそうな須田が家に着くまで一人でしゃべりまくった。

「雨…止んでたんだ？」

「みたいだな」

家の前で須田はまたクスツと零し、俺から傘を受け取った。

「ありがと。じゃあな、彩」 アレ？ 呼び捨てしちゃった。まあいいっか。

私を呼び捨ててくれた。

「じゃあ…タケル。また明日…塾で」

タケルと呼び捨て合えた私は目の下まで傘を沈めた。

もう雨は止んでいた。

でも、私は…タケルの足音が完全に消えるまで傘を閉じられなかった。

「入れるよ」

「うん」

暗闇の中で、緊張感が一気に上がった瞬間。

イターッ!!

激痛なんて生易しいもんじゃない。

指の時なんかと比較にならない。

杭で刺されたことなんてないけど、きつと、杭で刺されたら、こんな痛さだろう。

「初めての時って…やっぱり痛いのか？」

いつだったか、由美にした質問。

「そりゃもう、意識なくなるほど痛いよ。ハンパない」

「マジでえ？」

「マジだって！ 彩もすりゃ分かるよ」

やっと分かった。正直、舐めてた！ こ、こんな痛いなんて…。
砕けても仕方ないほど、歯を食い縛る私。

まだ先っぽがニユルツと入っただけ。でも、一瞬、彩の開かれた脚がプルツと内側に痙攣し、力が入ったような…。

「大丈夫か？ 彩」

「う、うん。平気だよ」

平気なわきやないよ！

「じゃあ…進ませるよ」

「う、うん」

エーッ！ まだ先あんのかよ！？ 冷や汗が背中から染み出る。

か、固い！ こりや最後までかなり苦労しそうだ。この閉塞感は、ハ、ハンパねえ。処女膣の反発力…。処女をブチ破った経験のある奴らは分かると思うけど、女の力みも手伝って、その反発力はハンパない。初回は半分だけの挿入で諦めて射精して、2回目、3回目とチャレンジを繰り返してやっと貫通させる奴らもいる。

少しでも気を抜けば、膣に押し返されそうになっていたペニスに右手を添え、俺は腰に力を込めて前進させた。最愛の彩。何が何で

も初回で貫通だ！ と、気合いは十分だったけど。いやいや、にしても、これは、腰だけじゃ無理だ。俺はペニスから右手を離さず、彩に覆い被さった。そして、左腕で彩の頭を包み…。ちよい強引かな？ 腰の力と体重で彩の処女膜を貫こうとした。

貫かれ張り裂けそうな激痛と私に被さるタケルの体温。ほのかに目を開けると、私の頬に自分の頬を合わせていたタケルが苦しそうな顔を上げた。タケルが私に苦しんで困ってる。ダメだ！ 私がタケルを助けないと。激痛に汗ばみながら、私はタケルの腰に両手を添え、グイッと自分の方へ引き込んだけど…。いいいいたたたたっ！ 洒落にならない痛み。私は奥歯を食い縛り直す。

「彩…」

落ちてきたタケルの唇に、私は夢中でしゃぶりついた。

彩が俺を引き入れてる。もうそろそろ大丈夫か？

彩にキスしたまま、俺はソツと右手を離し、ペニスが彩の内部で安定感を得ているかどうか確認。手放しでも、若干、腰の力を抜いてもペニスは押し返されない。

第一関門突破。

「彩…。半分ほど入ったよ」

彩の唇に囁く。

「う、うん」

私は愕然となった気持ちを伏せて答えた。

エーッ！ まだ半分かよ！？ 痛すぎて死んじゃいそうだよ。でも絶対勝つてやる！ でも、両腕の力が抜けそう。もうこれしかねえよ。深呼吸して気持ちを奮い立たせ…

ターッ！

私はタケルの腰に両脚をクロスさせ…。来いっ！ 手前に引き込んだ。イッタタッイターッ！

「彩…おまえ…」

「大丈夫だから…気にしないで」

私の行動に、タケルは驚き、瞳を広げた。

私は私なりに努力したい。頑張るから！ 愛してるから！ タケルッ！ 離すもんかっ！ おめえ、離すもんか！

こんなハードな事。それほどまでに、彩…。俺は彩の健気な精神力に応え、再び、腰に力を込める。

求め合う唇。

タケルの固いものが私の中に…熱く…深く…愛おしく…。

私とタケルの共同作業がヌルツとした感触と説明つかない、何か
が破れた感覚を私の内部に起こした。もうダメだ…。私の両脚は限
界を迎え解除された。

俺は彩の唇から離れ上体を起こし陰毛を掻き分けて彩と俺の結合
部を見る。

貫通確認。

「彩！ は、入った！ 全部」

やったあつ！

「マ、マジで？」

声が裏返り、涙が出そうに…。

「じゃ、ちょっと動くよ」

しかし、タケルのこの言葉で私の涙は押し戻された。動くう！？
そりゃまあ動くだろうけど、体に杭打ち込まれて出し入れされた
日にゃ、マジ、死んじゃうよ。男にゃ死んでもわかんねえよ。ああ、

もういいや死んでやるよっ！ 動けっ！ 殺せっ！ そんな内心とは別に、「うん」と出来るだけ可愛く見られるように頷く。タケルは体を倒し両手を私の両脇の下に着いて、そのスタンバイを取った。さあ！ 私がどれだけ、おめえを愛してるか、見せてやるよ！ タケル！ タケルが静かに私の中で動き始めた。

喚くぞ！

「アウツ！ アウツ！ アウツ！ アアアアア…アウツ！ アウツ！ アウツ！ アアアアア…」

タケルの先つぼが私の奥に届く…いや、衝突。 出し入れされる断続的な激痛が、衝撃的な激痛が、遠慮なんて言ってもらえない私の大声を部屋中に轟かせる。

「アツウアアアツ！！ タ、タケル！！ アアアア！！ ウウウアアアアツ！！ ウアアアア…」

痛い痛い痛い！ タケル！ もっともっと愛してえっ！

でも、徐々にタケルが私の中で動く度に私の思考に変化が起こった。

この痛さに堪えられるのはタケルだから。タケルを凄く凄く愛してるいるから堪えられるんだ。幸せな痛みなんだ。涙出てきたけど、気になんてしてらんねーよ！ タケルと一つになり愛情の確認を一緒にに行っている十分過ぎる幸福感とかつてない痛感の間に私は遊泳していた。タケルの動きが激しさを増すに連れてその激痛が不思議に緩和していった。それとも、私の意識が遠ざかっていったかもしれない。いや、そんなはずはなかった。タケルの息遣いが私の耳に届いていたから。

「愛してる…。彩」

私に堕ちて来たタケルを私はしっかり受け止めた。

「あ、愛してるよ。タ、タケル、い、いっぱい愛して。今までの分…いっぱい！も、もっと！」

素直な言葉が激しい息を掻き分けた。

キツイ！ 狭い！ 凄い！ 彩！ 処女の経験は初めてじゃないけど…彩の膣圧は最強。経験したことないペニスへの締め付けと快感を彩の膣内で得ていた。俺は彩を抱き締め、底無しの愛情を表現するかの如く、ピストンを速めた。

「タ、タケル！！ アツ、す、凄いっ！！ ウッアアアウッアアアア！！ 凄いっ！！ もの凄いいいアアアアウアアア…」

俺の両肩を抱く彩の力が徐々に強くなり、俺の我慢も…。このキツさなら、仕方ない。

タケルが軽く私にキス。両腕を起こし、更に動きを速めた。私はタケルの二の腕をしっかりと握り、顎を上げて、その動きに並走した。中にグチヨグチヨと音。

「アアアアアアア！！ 愛してる！ 愛してる！ タツ、タケル！ 愛してるよ！」

薄らぐ意識を取り戻す為、私は必死で心の底から気持ちを叫んだ。

「あ、愛してるよ…彩っ！ 俺、俺、も、もう、もっ！」

「ア、アアアアア、アッ！ タケルーッ！ 愛してるーっ！」

最後に私の顎が目一杯上げられた。

タケルが私の一番深い所で動きを止めた。

次の瞬間、私の中で何かが弾けて、タケルの先端がドクドクドクと波打つように反復運動を繰り返し、私の奥に熱いものが注ぎ込まれている感覚と感触が起こされた。

こ、これが、あの噂に聞く…。

私の中で、その愛情の注入を行っていたタケルを薄く眺めると、タケルは眉間に皺を寄せてハハハと苦しそうな表情を浮かばせていた。お、おめえ、大丈夫かよ？ 心配になった私はタケルを引き寄せた。

「タ、タケル…」

静かにタケルは私の上に堕ちた。ど、どうしたんだよ？ うん？

私は荒い呼吸を繰り返していたタケルをヨシヨシしながら包む。

マジ、大丈夫かよ？ んな息荒げてよ。そんな焦る事ないから、全部、私が全て受け止めてやるから。安心して私の中に出しな。タケル…。

「あ、あ、愛してる。彩…」

声出してくれた。良かったあ…。

「愛してるよ…タケル」

最後の涙が一筋私の頬を濡ったから、私はタケルの耳に唇を着けた。

過去が終わり未来が始まった瞬間。

やっぱり、雨音は部屋の中にも響いていた。

振り返ると悲壮丸出しの彩が俺に駆け寄って来た。あー！ また
ややこしくなる。

「もうっ！ 何やってんの！？ バカ！」

怒鳴った後、彩は俺の両肩を覆い、両肘を地面に着き、半身を起こしていた智喜を睨み付けた。

「もう終わったんだ！ 心配いらねえよ」

うわっ！ この子の目、こええ。どんな事があっても、捨て身で殺しに来る目だ。澄み切りながらも威圧感と覚悟が溢れ出した彩の眼を受け止め切れなかった俺は思わず下を向いた。

彩を宥めていたら、雄二と由美も息を切らせてやって来た。

「雄二…。おめえなあ」

呆れ顔で雄二に振り向いた。

「わ、悪い…」

俺に彩が顔を寄せた。

「雄二が悪いんじゃないの！ 階段で、すれ違った時、タケルの子が変だったから、由美とあんたらの教室に行ったの。雄二の様子も変だったから、二人で雄二を問い詰めたの」

俺が苦笑いしていると、至って冷静、無表情な由美が俺と彩の前に出て…。クールな表情の由美もなかなかいけるよな。智喜を睨みつけたまま、腰を下ろす由美。エッ！？ 無言のまま、由美はパーンと静かな空気を貫く良い音を智喜の横面に響かせた。平手打ち！？ おいおい！ 俺が決死で触った智喜の面を何食わぬ顔で捕らえた由美に、彩が「由美！」と叫んだ。しかし、由美は表情を変えず智喜に怒鳴る。

「あんだ！ 私の学校では暴れないでって約束したでしょ！？」

由美の迫力に、屈強な智喜は目を右往左往させ困惑するだけ。てか、お二人ともお知り合いですか？ じゃ、早く言っつてよ。なら、俺、こんなボロボロになんなくても…。

「ちよ、ちよっとした出来心だよ。こいつらとはもう話ついた」

泥だらけの体を重そうに起こして、立ち上がった智喜は一瞬よろめいたけど、直ぐに体を立て直し、歩き始めた。あれだけ打たれて歩ける？ 智喜は脱ぎ捨てたジャケットを拾い上げ、肩に担ぐと、その場から何もなかったように立ち去った。なかなか、シブイ奴。

「あんたもいい加減になさいよ！ タケル！」

彩の声が俺の耳元で響く。はいはい、次は俺ですか？ てか、俺らにはあんたらの息子達かよ？ しかめた顔を俯かせる。

「何で、私達に言ってくれなかったのよ？ 言ってくれたらこんな事にならなくて済んだのに馬鹿だよ！ もう！」

マジ、俺もそう思う。疲れて痛いだけ…。彩の語尾が涙声ぽかったから、取り敢えず、俺は反省の表情を浮かべた。でも、彩は堪えきれず、俺の肩に顔を着けて鼻を齧り始めた。

「わ、悪かったよ。でも…取り敢えず…取り返したからな。雄二！」

雄二に封筒を投げ渡す。雄二も泣きそうになっていた。

「じゃ、こちら保健室行って、どっかの馬鹿がグラウンドで転んだって救急箱借りてくるよ。雄二、行くよ！」

由美と雄二は小走りに保健室に向かった。

「マジ、心配したんだから。あの智喜て奴…族やってて一端のワルって聞いたから」

体中、痛かった。でも、彩は、そんな事お構い無し。泣きながら俺を強く抱き締めた。

「彩…」

「何？」

「取り敢えず、おめえのオツパイ、俺にスーパープレスだし」

一瞬の静寂。

「ギヤーツ！」

悲鳴と共に、彩は俺を思いっ切り突き飛ばす。智喜にやられて、立つるのがやっとの状態だった俺の体は脆くも後ろに倒され、智喜のようにズカッと後頭部を地面に叩き付けられた。彩が留め刺してくれるとは…。痛さなんてどうでもいいくらい虚脱していた俺は仰向けになり唾然とするだけ。そんなオツパイくらいで恥ずかしがるような仲かよ？ 俺らは…。

「だ、大丈夫！」

慌てた彩が俺を覗き込んだ。

「あ、彩…。つ、次、パンツ丸見え」

「ギヤー！ 変態！」

最高の角度で彩の蹴りが俺の脇腹に入った。そ、そんなパンツぐらいで恥ずかしがるような仲かよ？ 俺らは…。

踏んだり蹴つたりの一日。

昼間の彼女

私の胸で息を整えたタケルが軽く私にキスを落として体をお越し、その固いものを又ポツと私から抜いた時「ウツ」と声が漏れ下方向に又ポーツと吸い込まれそんな感じがした。

俺はテーブル下のティッシュボックスを取りに、ベッドを降りた。はあ！ 終わった。ベッドに戻りながら3、4枚ティッシュを抜き、ゆで上がりの彩の股間に当てて膣から精液を染み出させる。空いた手で2、3枚抜き、自分のペニスを拭いた。自分のを拭き終わるとその残骸を丸めて机の傍のごみ箱にナイスシュート。

彩のは入念にしないと、ほっといたら逆流して精液がお尻にする。俺はベッドに腰を掛け、彩の性器を覗き込み、その染み出しに注力した。うわー！ 結構、大量だよ。彩の膣からドロドロと精液が流れ出た。

恥ずかしい！ デカイ赤ちゃんじゃん！

「じ、自分でやるよ」

私はティッシュを股間に挟み込み、体をくの字に曲げた。恥ずかしい気持ちはあっても、私の乱れ髪を耳に掛けてくれたタケルに顔を向けてキスのおねだり。しんみりとした呼吸の中で、フツと私の意味ない笑いが零れる。唇を離れたタケルは乱れた布団を引き上げ、私の横に体を倒した。

「こっちおいで」

「うん」

タケルの腕の上にゴロンと頭を転がした。タケルの唇にキャッチされる私の唇。

「どうだった？」

「痛かったあ！　ハンパねえよ！」

照れ隠しに叫んでキスを強める。私の息の中でタケルが微笑んだ。

「凄い可愛かったよ」

タケルは私の髪を撫でた。

「誰が可愛いんだよ？　もう必死だから…変だったの」

私はまだ股間をテツシユで押さえている。

「その必死さが可愛いかったんだって。でもマジ…大丈夫か？」

タケルの瞳が和らぎ、更に、私は照れた。

「だーいじょーぶっ！」

やっぱ、おめえ優しいねえ。それと、その眼差しは反則だって。いつも、その瞳に吸い込まれて私は、私は、おめえ、許しちゃうん

だから…。

「意外と…私、タフだからさ」

「意外？ ハンパななしに彩はタフだってよ」

「ふざける！ 私もか弱い女の子だってよ」

「はいはい」

雨音は徐々に弱まっていたけど、タケルの唇と腕は徐々に強まる。

「タケルに抱き締められたら…何かまた中から出できた。 テッシユもうちよつと頂戴」

私は少し甘えた声でタケルに訴えた。

「お、おう…」

私の唇から離れたタケルはベッドの下からテッシユボックスを拾い上げた。

「好きなだけ使えよ」

私は数枚テッシユを抜き、股間に補充した。

「これマジすげえよ。ドクドクだよ」

初めての体験だった私はその後にも驚嘆していた。

「俺の精液と彩の…その液が混じって中から逆流してんだよ。初めてだから血も出てるかもな」

「血!？」

思わず股間からテッシュを引き上げる。

「うわわ! 何これ? ピンクじゃん」

タケルは冷静。

「普通…精液だけだったら白いだろ?」

「そみたいだね」

「で…俺の白い精液と彩の赤い…その初めての血が混じったら何色?」

「ピンク!」

「ピンポン! だから、ピンクになってる」

「じゃ、じゃあ、私、出血してるんだ? 生理3日前に終わってるのに」

初エッチ。出血ある子と出血ない子がいるって聞いた事あるけど、私が「ある子」に該当するとわねえ。いやまあ、どっちでも良かったんだけど…「生理」までは言い過ぎたかな?

「まあ…最初だけだから心配することないって。生理3日前に終わ

「つてたんだ？」

「ま、まあね」

やっぱり、タケルの奴は聞き漏らしてないよ。授業中は、ぼーっとしてるクセに余計な事には敏感な奴。まあでも、私の彼氏なら私の生理日ぐらいは把握しとけてんだ。

タケルは私の額にキス。布団の上はまだあったティッシュボックスから新しいティッシュを数枚引き抜いた私は、そのティッシュに汚れたティッシュ包んだ。丸めたティッシュを、上体を少し起こして、ごみ箱に投げたら上手く入った。

「やるじゃん！」

「タケル…責任取れよん」

私に振り向いたタケルに私は目を細め、口を尖らし、冗談の怒り顔を作って迫った。

「責任？ 責任なんてハンパな言葉で片付けたくないね。俺は彩にマジだから。マジな気持ちで彩と愛し合ったんだから」

再び、タケルは私を抱き寄せ、唇を合わせてくれた。

「でも、タケル…。マジな話。もし、もしだよ。他の…他の女好きになつて…私が邪魔になつたら言うてくれよな」

「邪魔！？ 他に好きな女！？ 冗談もいい加減しろよ！ 俺には彩しかいねえよ！ んな事、絶対、有り得ないね」

タケルの瞳は真剣。

「やっと彩と一緒になれたんだ。他に女が出来るなんて…。邪魔になるなんて…。そんな信用出来ねえのか？ 俺の事」

タケルの瞳が沈む。

「ご、ごめん。タケル…」

タケルの瞳を追い掛けた。

「し、信用してるに決まってるじゃん！ でないと、初めてをタケルにあげたりしないよ。ほんのちよつと、ちよつとだけ不安になっただけだよ。何だかんだでタケルはモテるから…私より好きな人でなくても可笑しくないから」

それ以上言葉を見つけれられない。私はタケルの瞳から視線を外した。

「今日から彩の事…」

タケルの瞳に恐る恐る視線を戻す。

「俺の命より大事にする。普通、死ぬまで離さないって言うけど…。彩は命より大事な存在なんだ。彩を死んでも離さない」

タケルは私の肩に布団を掛け、頬を撫でてくれた。

「タケル…」

溢れた幸せがタケルの腕に流れ落ちた。

「たく、しょうがねえなあ」

タケルが指で雫を拭ってくれた。

今日は何回泣いたんだろう？ 嬉し涙がこんなにも出るなんて…。

「しょうがねえじゃん！ 無茶苦茶幸せなんだから！」

「俺も無茶苦茶幸せさ。それに…俺、そんなモテねえからさ。安心してろよ」

苦笑いのタケルも、何か憎めない。

「あつははは！ タケル様。んなご謙遜を。よく手紙貰ってるくせに」

「暇な女が多いんだよ」

「その余裕がモテモテの訳だよな」

軽くタケルの下唇を噛んでやった。

「イテツ！ てか、おめえも大概手紙貰ってんじゃん」

「私は…んなの貰っても、興味ないからシカトだよ」

「俺も、興味ねえよ。んなの」

「ほんとにい？」

「本当に決まってるんだろ」

タケルが私の頬を撫で、若干暇を持て余していた舌に活力を与えてくれた。そりゃまあ、モテない彼氏よりモテる彼氏の方が…。

「また仲良く喧嘩しよ。彩」

唇を離れたタケルがまた私の乱れていた髪を耳に掛けた。

「うん！ 喧嘩しよ。でも覚悟しとけよ！ これで、うちら何も遠慮なくなつたから喧嘩は前よりも激しくなるよ」

私は自分の足をタケルの足に絡め、固い唇をタケルに着けた。

「激しくなる？ 面白えじゃん！ 俺は負けねえから、おめえの方が覚悟決めとけよ」

「はあ？ 連敗中の奴がふざけるってんだ」

全裸でキスしながら喧嘩。仲が良い証拠。

「誰が連敗中だった？ まあ勝ってるって思ってる事自体が可愛いよねえ」

「分かったよ！ なんこと言っんなら、おめえに今後、絶対ノート貸してやんねえからな！」

「いいよ！ どうせ2年なつたらクラス別々だからな」

そう思うと…。

「んな事…言う訳？」

唇を離し、寂しく呟いた後、私はタケルの胸に頭を着け、業と鼻を齧って噓泣きを作る。

「か、かもなつて事だよ。ま、まだ、クラス分け、どうなるか分かるねえよ」

困り始めたタケルの様子とその奮えた声色で分かった。

「タケルは…私と…別のクラスなりてえんだろ？」

タケルの胸で、頭を微妙に揺すってグスングスンと泣き声を演じてやると、タケルは私の髪を撫でる。

「んな、な、泣く事ねえだろ」

私は何も答えず頭を揺すってその真似事を続けた。

「わ、分かったよ！ 悪かったよ！ 下らねえ事言った俺が悪かったよ。泣くなよ」

この時ばかりと、私はサッと顔を上げ…

「バーカ！嘘だよん！」

タケルの胸から競り上がって、私の唇をタケルの唇にぶつけた。

「きったねえ！ こんな状況で女の演技かますことねえだろ！」

私はタケルの口に笑いを吹き込む。

「キヤハハハ！ 取り敢えず、付き合い始めの一戦目は私の勝ちだね」

呆れた溜息を私の口に吹き込んだタケルに、私はオツパイを擦り付け、抱き着いた。

「でも…寂しくなるなあ。クラス分けて、もし、皆、離れ離れになったら」

タケルに巻き付けていた足の絡みを少し強めた。

「タケル、皆一緒の学校だよ。そんな離れ離れなんて。クラスが別々になっても…お互いのクラス行き来すればいいだけじゃん」

タケルは溜息に笑顔を混じらせ…

「だよな。同じ学校だもんな。にしても…」

私の腰に腕を回した。

「彩のオツパイ気持ちいい！」

「ギャー！ 恥ずかしいっての！」

離れようとする私をタケルは必死に引き寄せ、私は、少し、じゃれて暴れたけど、直ぐに諦めてタケルの胸に落ち着いた。

「ねえねえ。この際…喧嘩のルール決めない？」

「どんなルール？」

「喧嘩した後は必ず仲直りの…その…エッチしちゃうとかさあ」

また、恥ずかしくなった私はタケルの胸に顔を埋めた。

「ハハハ！ いいねそれ。それなら…どんな激しい喧嘩してもすぐ仲直りできるじゃん」

顔を上げ、タケルの唇に吸い付いた。

「じゃ、約束しよ」

「うん、約束しよ」

私達は「舌切りげんまん」した。

「約束…覚えててくれるかなあ？」

俯いて眩き、指で涙を拭って傘を閉じた後、私はただ濡れて誰もいなくなつた路面を眺め、玄関のドアを開けた。

「ただいまあ！」

「おかえり！」

キッチンからお母さんの声がした。

「ごはん、もうちょっと待ってね。雨、大丈夫だった？」

「大丈夫」

玄関を上がって廊下を通り、キッチンを通り過ぎた私は階段を駆け登り、自分の部屋に入り、明かりを点けた。

「タケルと同じ高校…行きたい」

鞆を机に置き、カーテンの隙間から、タケルの足音が消えた曲がり角を眺めた。

「いるわけないよね」

窓に溜息が染み、曲がり角が曇る。

始めて、タケルを見たのは塾の帰り。

その日も雨。

塾の授業が終わり…降り注ぐ雨を一瞬見上げたタケルは鞆を傘代わりにして雨の中へ消えた。この時間なら同じクラスの子だ。大概、授業中に雨が降れば、傘を持って来ていない生徒を親が塾まで迎え

に来ていた。雨が降ってなくても迎えに来る過保護な親もいた。でも、タケルは一人で雨の中を傘も差ささずに走り去った。

「うちみたいに両親とも働いてるのかな？」

雨に染み入るタケルの背中を眺めながら呟いた。

私の家は自動車整備工場を営んでいて、昼夜問わず工場内で忙しく事務の仕事をしていたお母さんに「自分の事は自分で……」って私は幼い頃から躰られてきた。

「雨が降りそうなら傘を持っていく。傘を忘れたら濡れて帰る」

小学校一年の時。

下校前に突然降り出した雨を私はただ教室の窓から見上げていた。傘、持って来てないや。お母さんが一人、また一人と子供を学校まで迎えにきたけど……私には関係なかった。

いいや！ やせ我慢を通り越した笑顔を作って、私は校舎から土砂降りの雨の中に飛び出した。

いいやいいや……。帰り道、私の頬は雨とも涙とも分らない雫で濡れていた。

それ以来、私は雨が嫌い。

その日は横顔しか見えなかったけど、雨の中に飛び出して行った時に、ほんの一瞬だけ、タケルの瞳にあの日の私と同じような淋しさを感じた。似てるかもしれない？ 塾なんて友達作りに行くところじゃなかったし、友達は学校で気の合う子が何人かいたから、その

子たちで十分。

あまり構ってくれなかったお母さんが受験を控えた私の為に近所の塾の夏休み講座を申し込んでくれた。学校の成績だけなら担任の先生は第一志望はOKって事だったけど、取り敢えず、お母さんは心配してくれて…。なら今のうち甘えておこ。私は塾に行く事を決めた。

あいつ、いつもどこ座ってんのかな？

次の日、いつも通り、教室の一番前の列に座った私は先生に気付かないようにそっと振り返った。

いた！

1番後ろの列で、眠たそうに頬杖をし、ホワイトボードを眺めている。思わず、私はフツと小さく吹き出した。

「彩！ ごはんできたけど、どうすんの？」

下からお母さんの声がした。

「今、降りるね！」

返事をした後、タケルが消えた曲がり角をもう一度眺めた。溜息で作られた霜が窓を濡らして…。いや、内側だけじゃなく外側も濡れている。

「また雨だ。タケル、大丈夫かな？ 私に傘返したから。もう家着いたかな？」

「彩！ ごはん冷めるよ！」

私はカーテンを閉めた。

「今、行くー！」

部屋を出る前、鞆から折りたたみ傘を取り出して一人微笑んだ。

通学路の坂道を歩いていたら、あの子が校門に…。

化粧なんてしてなかったけど、時々、彩達の教室で見る肩までのシヤギー掛かった髪。その後ろ姿は遠目にも昨夜の「その子」と同じだ。

俺は割と早歩きなその子に向かって全速力で走り、下足場の前でやっと追いついた。

「ヨッ！ おはよ！ 昨日のボックスの…覚えてる？ 雄二だよ」

多少、息が上がってたけど、出来る限り気さくに声かけた俺はそ
の子にツンと顎を尖らされて無視された。あれ？ 昨日、何か俺、
変な事したかな？ 自問したけど、心当たりは無い。

「昨日、急に帰っちゃうからさ、ビックリしたよ」

澄まして、足早に下足場に到着したその子の返事はまだ無い。

何で無視？ 意味が分からなかった俺は早々に上履きを履いた彼女の行く手を遮るように前に出た。

「ねえって？」

「別に」

澄まして、彼女は俺を通り過ぎた。キリツとした上目遣いが怒っているように見えた彼女。
溜息をつきながら振り返ると彼女は既に正面階段を登り終えて姿を消していた。

「ヨッ！ 雄二」

「雄二、おはよ」

タケルと彩が下足場に入ってきた。

「お、おう……」

俺はまだ唾然を食らっていて、いつもの調子は出せない。

「何だよ？ 元気ねえな」

タケルが俺の異変に気付いた。

「なあ、タケル。なんで女は…別になってフレーズが好きなんだ？」

俺の唐突な質問の答えに困ったタケルは彩に振り向いた。

「一々、答えるのが面倒臭い時に別になってフレーズが便利だからだ
」

「なるほどねえ…」

変な朝。

前から気になってた子だったんだけどなあ？

昼休みになっても、朝に起こった「不可解」は俺を悩ませていた。

「雄二、飯行くぞ！」

「悪い、先行つといてくれ」

俺は昼飯を後に回して、急いで教室を出た。

自分で自分を抑えられない。口説い行動と言われりやそれまで。

何故、昨日、傘も差さずに雨の中に飛び出していったのか？ 何で、朝、あんなに機嫌が悪かったのか？ 何で、誰が見ても可愛い顔をあんなケバい化粧を消すのか？ 気になってた事もあったけど…彼女に対して、いつもの軽いナンパとは違う別の感情があったのは確か。

一年の時から彼女の存在に気付いていた。気付いてたと言うより気になってた。でも、それまで俺がナンパしたタイプや軽く付き合ってたタイプとあまりにも掛け離れていたタイプの彼女に、時々、廊下ですれ違った彼女に、俺はどうしても声を掛けられなかった。だから、いきなり、付き合うなんておこがましい、先ずは、友達になりたかっただけ。

もう遅いかもしいけど、無視されても仕方ないけど、もう一度、彼女と向き合ってみよ。

廊下から彩達の教室を見渡すと、1番窓際の1番前の席に彼女はいた。

ハンパない緊張。

てか、ここまで来たらガチで行くっきゃねえな。根性決めて、教室に入ると机で弁当を広げてた彩と由美が俺に声を掛けてきた。

彩：「雄二、どうしたの？」

由美：「もしかして…デートの誘い？」

いつもなら冗談の一つでも返してやったけど、俺は彼女の机へ直行し、彼女の前に立つ。

頼みます！

彼女は俺に気づいて恐る恐る顔を上げた。

今だ！

「あ！ビックリさせた？ゴメンね。朝もビックリさせたいみたいで…」

駄目だあ。何か変。

「よ、良かったら…昨日を機会に…」

まだ俺は話していた。開けかけていたパンの袋をサッと胸に抱えた彼女は俺に見向きもせず教室を飛び出していった。

撃沈。

啞然としていた俺の視界に「どうせまたナンパ失敗したんだろ」
てな感じでせせら笑ってる彩と由美が入った。

「で、撃沈された感想は？」

食堂に来た俺はカラオケボックスでの事からつい5分前の事まで、
彼女の事をタケルに全て話した。タケルは「またやってるよ。こい
つ」みたいな顔をして呆れて俺を見てた。

「別に…」

俺は食堂のテーブルにうなだれた。

「女だけじゃねえよな？ 答えるのが面倒臭くなるほど気分が滅入
るってのは」

「滅入るところか…今の気分は最低最悪だ」

俺はテーブルに頬を密着させていた。

「ま、おれもチラッと見た事あるけど…。うん、確かに可愛い子だ
よな。でも…おめえのタイプかあ？」

「タ、タイプってか…」

ギャルっぽい子が俺のタイプと、当然、タケルは知っていた。

「ま、いいや！　いつか彼女が心開いてくれる時が来る！　ちいと散歩してくるわ！」

溜息を隠し、俺は出来る限り元気に席を立ち、テーブルを離れた。

カラオケボックス。夜の厚化粧。昼間の素颜。初め一人で後から二人。

雄二が去った後、嫌な予感が俺に下唇を触れさせた。

この際、確かめたい。

「ねえ…タケル？」

「ん？」

「聞いていい？」

「何でも」

「私の…私のオツパイってどう？　やっぱ、ちっちゃいだろ？」

話題に逆行して、私はタケルにオツパイを密着させて、タケルに見せないようにした。

「いや。丁度いいんじゃない？ てか、イメージ通りだよ。可愛いオツパイも。ちっちゃい乳首も」

タケルは腕枕していた反対側の手を私のオツパイに滑り込ませ、揉みながら露骨に言った。

「イメージ？ おめえ、どこでそんなイメージするんだよ？」

タケルの唇に着けた私の唇…。笑っていた。

「男なら誰でも…その…気になる子のオツパイのイメージするんだよ。俺は主に教室でしてたけどな」

「いつやらしっ！ 変態じゃん！？ それ」

呆れ笑顔と顰蹙の間。微妙な表情が自然と滲み出る。

「だからあ、男なら誰でもするっての。女には分かんねえよ」

「分かりたくねえよ！ んなのさあ。じゃ、じゃ何？ 私と喧嘩してる時もイメージしてたっての？」

「うん！ 当然」

タケルが指と指の間に私の乳首を挟んでいたけど、不思議に恥ずかしくなかった。

「て、事はあ…」

唇をタケルから離し、私は視線と顎を浮かせる。

「じゃ、タケルはそれだけ…私の事が気になってたんだ？」

乳首から指を離したタケルは私の髪を指に巻き付けて弄る。

「そりゃ、気になってたから…今こうしてるんじゃない」

私は勝ち誇ったように顎をタケルに突き付けた。

「ふーん！ じゃ、ついでに聞くけどさあ…。私の…私のアソコは？」

答えが怖かった私は唇をタケルに戻し、舌をチロチロ動かした。

「する前に言わなかったっけえ？」

「だからそれは…触った感じだろ？」

「え？ じゃあ、味とかの感想聞きたい訳？」

溜まらず、私は吹き出してタケルの腕を叩いた。

「違う！ そこまでいいよ！ だから…見た感じだけでいいよ」

んな、味まで聞く勇氣ないわ。

「お、おう。見た…感じね」

タケルは急に唇を和らげ、瞳を下げた。

「実を言つとさあ……。怒るかもしんねえけど……」

「何よ？」

心配になった私も唇を和らげる。タケルは瞳をを上げた。

「いいや！ 止めとくよ」

中途半端はモヤモヤ消化不良か起こさない。当然、そんなの引き下がれない。

「言つて！」

タケルは瞳を左右させる。

「わ、分かったよ。怒ると……思うけど……」

心配だったから、私はジツとしてタケルに聴き入った。

「実は…彩のアソコも……教室で……」

バカ！ 堪らず、また吹き出し、タケルの腕を叩く。

「変態！ もうっ！ ちょっと止めてよね！」

「止めてよって言われても…何度もイメージした後だからなあ」

「もーっ！ 最低！」

「彩の事…それだけ気になってたって証拠じゃん」

それだけ思われてたなら本望。笑ってやるしかない。

「フッフッフ…。バツカじゃん！ そんなイメージいつすんだよ？」

笑いを口に含んでいたタケルが無性に可愛かった。

「主に…授業中。ノート取ってる彩を眺めながら…イメージ」

「勉強しろよな！」

ついにタケルが笑いを吹き出した。

「グッフッフッフ…。マジ、授業どころじゃなかったって！」

「あっ！ そう言やあ…何か、おめえの視線感じてたよ」

「お、おう。そう言う時は…間違いなく彩のアソコをイメージしてた。因みにオツパイの方は…彩が俺の正面立った時だな。喧嘩しておめえが怖い顔で腕組みした時なんて最高のイメージタイム」

「有り得ねえ野郎だな！」

もっ、好きにしるよ！

全裸で抱き合っていると云う解放感と安心感が私達の会話にゆとりと無遠慮を与えてくれる。

「で、タケル君。実物は、あなたのいつやらしいイメージと比べてどうでしたか？」

何だかんだで気になってたから…。

「いや、それがさあ…。」

その心配をタケルの舌先を自分の舌先でチロチロさせて表現した。

「俺のイメージがいかに浅いか思いしつたね」

唇を離して、タケルを上目遣いで見た。

「それって…褒めてくれてんの？」

「褒めてんにきまってるじゃねえか」

嬉しく、ほつとした私はタケルに唇を着けて、激しく舌を絡め…。
良かった！ ゆっくりと唇と舌を和らげた。

「そんな気にしてたの？」

「そりゃやっぱり…愛してる人が私のアソコをどう思ってるのか、
気になるよ。女なら誰だって気になるよ」

「心配なく。彩のアソコは最高だ。毛も濃くなく薄くなくだし、
あと…ピラわかる？」

初めて聞く名称。

「ビラ？ 何それ？」

「だから…アソコの表側の身の内側にビラビラの薄い身が2枚あるんだよ。彩、自分の見た事ねえのかよ？」

「えっ！ な、ないない！」

タケルの彼女になって、初めてタケルに嘘をついた。

中2の時…。学校で、由美も含めてのガールズエロトーク。その夜、どうしても自分のアソコが気になった私はバスタブの中で手鏡を使って生まれて初めて一瞬だけど自分のアソコを見た。とても自分のとは思えない複雑窮まりないその形状に、私は怖くなって真剣に涙を浮かばせた。

ほんの一瞬だったけど、かなり印象に残った。だから気になるんだよ。自分のアソコ。そう言えば、一瞬、開いて見た時、何かキモいビラビラあったような…。

「彩のビラって…ちっちゃくて桃色で可愛いよ」

えー！ あんなキモいの褒められるもんかよ？

「いや、殆ど皺がなくなっさあ…大きさも…薄さも…」

タケルが自分の人差し指と親指を使い私の目の前で描くように説明してくれた。絶賛されてるみたいだから…。ま、いつか。

「ま、ビラってのは俗語で、学術名は小陰唇って言うんだけどね」

くっわしいなあ！ 女より女の体詳しいじゃねえか。ま、頼もしくっていいけどね。キスの中で、瞳を輝かせて嬉しそうに話すタケル。そんなタケルを眺めながら私は安堵され最高の幸せを感じていたけど…。

「でも…よくあんな汚いところ舐められたよな」

この際、話の流れで心配事を全て解決したかった。

「汚くないって！ 何言ってたんだよ？」

タケルは平然と言い放った。

「いやでも…」

私は少し眉間に皺を寄せた。

「てかさ、彩…自分のを舐めた事ないの？」

それだけは絶対にない！

「ある訳ねえだろ！」

またタケルの腕を叩いてやった。

「どうやって舐めたよ？ なんとここまで舌とどかないっての！」

自分で言いながら笑ってた。

「いやいやいや…だから…直接舐めるんじゃないって…」

タケルは込み上げる笑いを必死で堪えるように話しを続けた。

「そ、その…ゆ、指に付いたやつをちょこつと…た、例えばオナニーしてる時とか…」

「ウラツ！ もうっ！」

遠慮がちに胸に溜めていた笑いを全て平手に込め、私はまたタケルの腕を叩く。

「イツ！」

そのガールズエロトーク。

確かに…オナニーの話題は上った。けど、私は女の子としてと言うより、人として自分で自分のを弄り回すなんて言う自虐行為は出来ない。

「絶対、有り得ない！」

「そ、そうなんだ」

「当たり前じゃん」

タケルが乱れた私の前髪を耳に掛けてくれた。

「愛してる人のなら何でも汚くないの。美味しいの」

「でも…臭いとかするんじゃないの？」

まだ不安。

「それが嘘なしで全く臭くないんだよ。無味無臭。スゲエよ。お尻もそうだよ」

「マ、マジで？」

「マジだよ。あとは…もつと俺色に染めるだけさ」

タケルの舌がより優しく激しく熱く私自信に絡む。もつともつと外も内もタケルの色に染めて…。朦朧と目を開けると、タケルの瞳が私を包んでいてくれたから私はヤバいくらいにまた興奮。だから反則だってその瞳…。自分からまだリクエストする勇気がなく、少しだけ心拍数を下げたかった私はチュツとタケルの唇に鳴らして自分の唇を離れた。

「タケル、シャワー貸して」

股間に湿り気。

私はタケルに覆い被さって願いました。

「おう、いいよ。階段下りて廊下左行つて1番奥のドア。トイレのすぐ右のドアな」

「うん、分かった。じゃあ、一瞬…」

顎先を壁の方に振った。

「向こう向いてる」

「エッ!? 何で?」

タケルは不思議な顔をしていたけど、タケルに乗っかっていた私は視線を宙に浮かせた。

「いや、そりゃ、おめえ…恥ずかしいじゃん」

「恥ずかしいって…さっき、あれだけ見たじゃん。今もこんな密着してんのにはズいいの?」

タケルが私のお尻を撫でると、私はタケルの固いものをお腹に感じた。

「それと…これとは…別だろ? 雰囲気…さっきと違うだろ?」

私は尖った唇をタケルに落としてやった。

「ふーん。分かったよ。じゃ、向こう向くよ」

上になっていた私の体をベットへ転がしたタケルは壁の方に体を向けて私に背を向けた。ゴメンねえ、タケル。やっぱ、まだ流れ作らないマツパ晒すのはズいよ。

静かにベットから足を降ろして立ち上がった私は散乱していた服を探す。スカートとパンツがないなあ。まだ布団の中かあ? とりまパーカーだけでいいか。私は、足元に落ちていたパーカーを拾い上げ脇に抱えてベットで背を向けるタケルに振り返った。

可哀相だからキスだけして行こ。身を屈めてタケルに近づいた瞬間

間、馬鹿が勝手に…

「ダヨーン！」

振り向きやがった。

「ギャー！」

私はパーカーを捨てて猛然とベットの中に滑り込み、タケルに抱き着いた。

「おめえ！ マジ洒落んなんねえってのっ！！！」

声が裏返る。

「いや、キスするの忘れたからさあ」

「だ、だから、しようとしてたんだって！」

タケルもキスしたかったんだ…。

「じゃ、ハイ！」

尖ったタケルの唇に私が唇を合わせると「シャーッ！」とタケルは再び壁に体を向けた。

「ちゃんと向こう向いてるよ！」

「分かったよ」

たく、何がダヨンにシャーツだ!? 子供な野郎だなあ。今度
はソッコー行くぞ! 私はベットを飛び出し、パーカーを拾い上げ、
サツと被って袖を通した。

「彩…」

ドアに向かって走ろうとしていた私はタケルに振り向いた。

「な、何？」

タケルは私に背中を向けたまま。

「おまえが髪下ろしたの初めて見たよ。俺、好きだよ。そっちの方
が大人っぽくてさ」

髪を触って…

「バカもう」

照れ臭くなつた私は直ぐに部屋を出て、階段へ走った。

誰にも見られてないからいいけど、下半身丸出しで、私、結構ハ
ズい格好してるよ。階段を駆け降り、1階の廊下を走り切り、1番
奥のドアを開けた。

「ハーツ！」

ドアに首だけ突っ込んで、初めて入るタケルの家の脱衣所を見回
し、ドア横のスイッチを弾いて脱衣所とバスルームの明かりを点け
る。正面にバスルームの扉、その扉の左側にスモーク硝子がついた
2メートルぐらいの棚、奥角にはドラム式洗濯乾燥機、電話ボックス

みたいな家庭用サウナ、その向かいに洗面台。広い脱衣所……。そつと中に入り、ドアを締めた途端に股間を押さえた。

「イッテ！」

さつき、走ったから、また痛みが……。その痛みがタケルと初めて一つになった証だと考えれば、自然に微笑みが漏れる。私は徐に体を起こし、パーカーを脱いだ。タケルと一つになれた。

髪を振りながら洗面台へ。腰下まで映す洗面台の大きな鏡に自分の裸体を映すと、私と一緒に映っていた時計は1時を少し回ってる。まだ、あれから1時間も経ってないんだ……。初めての体験に費やされた時感の長さを溜息と共に実感。私はタケルに褒められた髪を右斜め、左斜めに鏡へ映した。

「ふーん、下ろした髪も……。言われてみれば……。良いかもね。ポニーテールはそろそろ卒業しようか。テールアップにしても……」

少量の髪を後ろで束ねて、残りの髪を垂らして最後にはバサッと全ての髪を下ろした。

「もう、タケルのもんだからね……。全部。タケルの奴、私の髪弄るのが好きみたいだし」

胸元まで伸びた髪を指でなぞった瞬間、また股間に電気が。

「あ、イッテッ！ あの野郎、無茶しやがて。ぜってえ離れてやんねえからなマジ、覚悟しとけ！」

少し前屈みになった私は股間を押さえて斜め後ろのバスルームへ。

バスルーム入ると、私はシャワーピッチからシャワーヘッドを外した。

「温度はあ…これでOKだね」

温度調整ノブで41 に設定した後、ノブを捻ると、徐々にヘッドから湯気が上がり、私はヘッドから出るお湯を胸に当てた。

「気持ちいい…」

湯気の中で、私は静かに目を閉じた。

バスルームの換気窓から聞こえてくる雨音に暫く気を取られていた私。また股間の違和感に気付いて下を向く。赤い線が股間から右足首に向かって伸びていた。

「わっ！ 来た！ この血はたけえぞ。タケル」

微笑みながらその赤い線を洗い流した私は壁のピッチにシャワーヘッドを戻してオツパイを両手で握り締めた。

「これがタケルにあげたオツパイ。で、これが…」

感慨深く右手を徐々に下げ…

ガッシャーン

いきなり開いたバスルームの扉に慌てて振り返ると、ニヤけた馬鹿がそこに立ってやがった。

「ギッ、ヤーアー!!」

私の感慨は一瞬でその馬鹿に吹き飛ばされ、タイル壁に響くのは悲鳴と言うより怒声に近かった。

「で、出てけ! バカッ!」

それは罵声。

反射的に私は胸とアソコを押さえ体をくの字に曲げる。

「そ、そんな叫び声上げるこっちゃないだろ! い、いや、これ使
うんじゃないかと思ってさ。お袋のだけど」

タケルは私にスケルトンブラウンのバレッタ(髪留め)を差し出
した。

「もっ! ビックリすんじゃないかっ!」

身を屈めたまま、タケルからバレッタを引ったくる。よく気がつ
く野郎だなあ。てか、何で女がシャワー浴びる時にバレッタ使うの
知ってたんだよ?

「じゃな、ゆっくりあったまれよ」

何もなかったように、全裸のタケルはバスルームを出ていこうと
する。な、何だよ? 呆気なさすぎ! うちら恋人同士だろ? 女
の気持ちと言葉は…裏腹になる場合がある。バスルームから出たタ
ケルが扉を閉めようとした。

「ちよ、ちよつと待てっ！」

扉が途中で止まった。

「キ、キスぐらいしてけよ」

湯気の向こうでタケルの瞳が柔らかく浮かんでいた。だから、その瞳は反則だって。湯気の向こうからバスルームに帰ってきたタケルに合わせ、ゆっくりと体を起こし、タケルの首に両腕を回す。タケルは私の腰に両手を当てた。タケルの固いものをお腹辺りに感じながら、私はタケルの瞳に吸い込まれ、暗闇に導かれ、躊躇は溶かされて湯気と一緒に気体になった。夢中で求め合う唇と激しく絡み合う舌…。湯気と雨音が二人を包む…。

極々静かに薄明かりへ戻される私。タケルは私の頬を指の背で撫で、乱れた前髪を耳に掛けてくれた。タケル…。

タケルの両手が私の両肩に乗る。

「後ろ向けよ」

白く籠った湯気の中で背中を向けた。何すんだろ？

タケルは私の後ろ髪を軽く手櫛で梳かし、クルンクルンと2回捻って纏め、私の頭のとっぺんにひよいと上げる。私が握っていたバレッタをさりげなく取り上げ…

「オッケー！」

そのバレッタで器用に髪を束ねてくれた。

「じゃ、俺、出るよ」

タケルが耳元で囁いた。やだ、行かせたくない！ その優しさも反則だつての！ 慌てて、タケルに振り返った。

「タ、タケル！ もう、ついでだから一緒にシャワーしない？」

タケルはフツと照れ臭さそうに笑った。

「実は…俺も彩とシャワーしたかったんだよね」

正直に言われたら、私も気楽になる。

「な、何だよ！ なら最初からそう言えよ！ たくさあ！」

思わず、腕組をして右足に体重を乗せ斜めに構え、学校でよくタケルに説教をする時のポーズを全裸で取った。

「彩…それ…」

開けっ放しだったバスルームの扉を閉めたタケルが視線を上下させて、その醜態を指摘した。

「エッ？」

俯いて自分の全身を眺め、漸く、その醜態に気付いた。

「フーッ！」

反射的に、私はうずくまりタケルを見上げた瞬間。タケルと私の間にそびえ立つ突起物が眼前に現れた。ヒヤッ！

「タ、タケル」

「ん？」

「か、く、せ、コレ」

うづくまっただまま横を向いてソレから目を逸らすと、やっと、タケルは自分の突起物のポジションに気付いた。

「あ！」

「ドアップじゃねーか」

小さく言った。

「隠した方が…反って厭らしいよ。立てよ。洗ってやるよ」

サラッと言いやがって。いいや。この際、慣れとくか。私はその突起物を避けるように体を起こす。うばばば、やっぱこええよ。これ。

前日の事が嘘のように、いつもと変わらない学校。

由美から聞いた話だと、元々、智喜は父子家庭で育ち、その親父さんも智喜が小4の時に亡くなったとの事。

実のお母さんは親父さんの浮気が原因で智喜が小1の時に離婚して家を出て行き、その後、親父さんは、その浮気相手と結婚したけ

ど、智喜はそのママ母から酷い虐待を受けたらしい。結局、そのママ母は若い男と駆け落ちして親父さんと離婚。それから親父さんはアルコール依存症なり、拳げ句に自殺。居間で首吊ってる親父さんの姿を学校から帰って来た智喜が目当たりにしたらしい。親父さんが亡くなってから、祖父母の家に預けられた智喜は祖父母への対面上、表向きは勉強に打ち込んでたけど、中学になると学校外で自分と似た奴らをかき集め、元々、頭が良かった智喜は不良チームを引っ張り、高校生になれば、そのチームを族に化けさせた。

そんな智喜もバイト先が一緒の由美には…由美の碎けた性格も手伝って…何でもよく相談してたみたい。でも、由美がいくら窘めても族は止めなかったようで…。

由美曰く、寂しいから悪やってるとの事だけど…まあ、俺には関係ない。

あの「騒動」の後、俺は由美と雄二が保健室から借りてきた救急箱を使われて、彩と由美から文句タラタラで手当てを受け、お陰様で絆創膏だらけの汚い顔になっちまった。

朝、担任の先生に「どうしたんだ？」って声を掛けられたけど「転びました」と在り来りな言い訳。

昼になっても、もう1人の「当事者」、智喜とは出くわさなかった。別に避けてた訳じゃなかったけど、教室も違ったから。それに、あの「騒動」までは気にも留めなかった奴。別に、気にする必要はないと思ってた。

「タケル、食堂行こうや」

「悪い。食欲ねえんだ」

雄二に断りを入れた俺は教室を出て学校内を徘徊し始めた。

智喜の事が気になってた訳じゃない。朝から智喜の顔を見なかった事が不思議な違和感を齎していただけ。

智喜の顔見たら、また喧嘩なるかもしれないけど…何かふっ切れそうな感じが…。ま、どうにかなるような。ならないような。

彩達の教室の前を通り、廊下側の窓から教室の中に視線を流せば、由美が前の席から後ろ向きになって彩の机の上で弁当を開けて、彩と何やら楽しげに話しながら弁当食べていた。相変わらず姉妹みたいな2人に感づかれないように俺は歩き去った。

智喜の教室を何気に除いたけど、前日、俺が薙ぎ倒した机の後ろには誰も座ってなかった。

食堂に入ったら、先に着いていた雄二が「おう！タケル、一緒に飯食おうぜ」とテーブルから誘ってきたけど、俺は雄二に片手を軽く上げてだけで、自販機に寄って食堂を出た。

教室にも、廊下にも、食堂にも、智喜の姿はない。

昼休みの校庭。芝生の上で笑いながら輪を作ってる奴ら、参考書片手に孤独を気取ってる奴ら、幸せそうに寄り添うカップル達。色んな人種を眺めながら、俺は、校庭から体育館に続く渡り廊下に乗る。気が付けば前日と同じコースで体育館裏に向かって歩いてた。

渡り廊下から体育館正面を横切り、俺は閑散としたグラウンドを横目に体育館の裏庭に出る最後の角を曲がる。

体育館裏。

あの野郎…。体育館の外壁にもたれ、座り込んで俺と同じ絆創

膏面。やっぱり、ここかよ。野郎は方膝を立て、パンの入った袋を開けようとしていた。智喜は俺の気配に気付いたけど、直ぐにパンの袋に視線を戻す。溜息をした後、俺は智喜に近付き、少し間隔を開けて智喜と並んで座り込んだ。

智喜も俺も無言。

俺は徐に右側のポケットからコーヒー牛乳のパックを取り出し、そのパックにストローを突き刺した。そして、左側のポケットから…もう一個コーヒー牛乳のパックを取り出し、無言のまま智喜に差し出した。

少し間隔があったけど…智喜はそれを受け取った。俺がコーヒー牛乳を飲もうとすると、智喜が半分ちぎったパンを俺に差し出した。少し間隔があったけど…俺はそれを受け取った。

少し間隔があったけど…裏庭に木漏れ日が落ち始めた。

151

「洗ってやるよ」

「いいの？」

「うん」

「じゃあ…お願いします」

私に軽くキスしてくれたタケル。ボディ spons ジを取り、ボトル容器を2回プッシュしてスポンジにボディソープをつけ、シャワー

にスポンジを浸して泡立てる。

「前から？ 後ろから？」

素早いタケルの手つきに私は見取れた。

「う、後ろから」

背中を向けると、タケルはピッチからシャワーヘッドを取り外し、私の背中にお湯をかけ、ゆっくりとスポンジで洗い始める。気持ちいいけど、何かやっぱり緊張するね。体洗ってもらうなんて小学校の低学年以来だから…。恥ずかしさからくる緊張感を払拭させるには自然な会話しかない。

「ねえ、タケルのお母さんって…いつもこの時間家にいないの？」

「この時間は仕事だよ。お袋の美容室が駅近くのアーケード街にあるんだ。姉貴も今は都内で美容師やってる」

結構、タケルは丹念に私の背中を洗ってくれた。

「へー、格好いいね。お母さんもお姉ちゃんも美容師さんなんだね。私、全然色気ないから憧れるよ。お洒落な大人の女の人に」

「格好なんて良くないよ。別にお洒落でもないし。うちでは普通のお袋だよ。はい、バンザイ！」

何か子供にも戻ったようで楽しくなってきた。

「ハイ！」

バンザイに素直な私だったけど、タケルが私の脇を洗ってくれた時はちょっと擦ったかった。

「ヒエエエツ！」

「コラコラ、動くな！」

「フフツ！　じゃ、じゃあ、ゆ、夕飯とかはどうしてるの？」

「お袋が冷蔵庫に食材いれといてくれるから、適当に作って食ってるよ。月水木曜日は5時か6時にバイトあるから、バイトから帰ってきたら、お袋の作り置きレンジで温めたり、自分で作ったり、色々だよ」

「偉いね。一人でご飯作るなんて」

タケルは私のお尻まで洗ってくれていた。話しに集中してるから、恥ずかしくない。

「偉かないって。マジ、適当だから。姉貴がいた時は姉貴が飯作ってくれたんだけどね。この歳になれば自分の事は自分ですよ」

自分の事は自分です。私もそうだ。タケルの持つスポンジが私のお尻の割れ目と内股を這う。

「ちょっと脚開けて」

「ハイ！」

不思議なくらい、素直に脚を開けられたけど、その隙間から股間の前の方にスポンジが差し入れられた時は、流石に擦ったかった。

「ヒエヒエ!」

「だから、動くなつて!」

タケルは私の太股、膨らばぎ、臍から足の膏、指、裏まで洗ってくれた。

「前…どうする?」

私は遠慮なくタケルに振り返った。

「お願いします!」

無邪気にはしゃぐ彩も、喧嘩して怒った彩も、悲しく嬉しく涙流す彩も、どんな彩も可愛い。俺は彩の首筋にスポンジを付けた。

「く、擦りたい!」

彩は首を萎縮させ、同時に目をギュツと閉じた。

「洗えねえよ! ちゃんと首伸ばして」

「はいはい」

首を伸ばしても、彩は目を閉じたまま。目を閉じた彩も、大人っぽくって綺麗じゃん。彩の首と両肩を洗い終える。俺はスポンジを

彩の胸元へ滑らせた。彩は小さいオツパイを気にしていたけど…長い脚、くびれた腰、スリムな体型と小さな顔には巨乳は似合わない。彩のオツパイをニユルプル素手洗いしながら再実感した。

そりゃ、雄二みたいに「そのアンバランスさがいいんだよ…」と言うマニア的な奴もいるけど、割と正統派の俺はやはりバランスって奴を重視する。だから、オツパイとのバランスが取れた彩の乳首も俺にとって最高の二粒。こいつ、喧嘩っばやいけど、マジいい体してるよなあ。乳首。ピンピンじゃーか。てか、俺のチンコモピンピンなんで人の事言えねえだけだな。ピンピンとピンピンでいいコンビか？ 何か訳分かんねえけど、ま、いいか。一瞬、吹き出しかけた笑い。目を閉じていた彩に気付かれなかった。

「あ！ 彩の乳首って…可愛くて…あれに似てるよね」

静かに目を開けた彩がゆっくりと乳首に視線を落とす。

「な、何？」

目を見開いて、彩は顔を上げる。

「気泡緩衝材」

「はあっ？」

多分、聞き慣れない名称。彩は口を開いた。

「蓋川 美紀？」

俺は下駄箱に書かれた名前を指でなぞる。

最低の一日。

ナンパに失敗だけなら、よくある事で終わったけど…俺は彼女をナンパなんてするつもりはなかった。何の邪念も無いまま彩や由美と同じように友達として付き合いただけ。確かに、過去、俺はナンパに明け暮れた。でも、そこで彼女やセフレになった女とも長続きした事は無かった。中には「ひでえ失恋」もあった。だから、そんな「ゲーム感覚」に疲れを感じ、漸く、くだらなさを理解した俺は高2になってゲームの延長で彼女を作る事を辞めて、友達作りに専念してる。まだ本当の友達と呼べるの女子は彩、由美の二人だったけど…二人には特定の彼女に対して抱く特別な気取りと周囲への気負いなんて全くなく、本当の友達として気軽に気楽に接する事が出来た。

彼女とはまず友達に…。

そして、喧嘩し放題だったタケルと彩みたいに、友達同士としてお互い全てを出し尽くした後、信頼し合えるカップルになれば…。それが、取り繕うだけのナンパで作る簡易的な彼女やセフレ作りとの最大の相違点と思う。

可愛い子だなあ。でも、暗そうでオマケにガード固そうだからなかなか話せねえなあ…。

変な先入観を持たずに、もつと早く、普通に彼女に声を掛けてれば…。タケル、彩、由美と一緒に彼女も。
俺は後悔してた。

でも、まだタケル達には俺の感情の変化は伝わってない。まあ、ぼちぼち分かってくれればいいや。

その夜、家で、お袋の小声聞いてたら益々滅入ってきた俺はバイト先のカラオケボックスにいつもより早く到着した。

店の受付カウンターに入った時、また彼女の顔が浮かんできた。昨日の夜、彼女は「後から一人来る」って言ってたけど…結局、誰も来なかった。

素顔の方がズツと可愛いのに何であんな化粧してたんだろ？ っ
て思うのは、やっぱり特別な感情かな？ 頭ん中は彼女の事だらけ。
彼女ねえ。彼女、彼女。あ、そう言えば、名前も聞いてなかった。
あの状況じゃ、まだ聞けなかったと言う方が正しいけど、彩と由美
が同じクラスならあいつらに聞けば良かった。タケルと食堂で話し
た後も俺は夢遊病みたいになってたから。色々と御託並べても、い
つも肝心な事を忘れるのは俺の悪い癖。いや、欠点。

しくった。せめて、名前くらいは…。

溜息の後、俯いたら、カウンターの上のレジが見えた。

そうか！ そうだよな。俺が彼女の会員カードをレジの読み取り
機に通した時、レジが彼女の名前と来店データを記録しているはず。
別に、名前くらいなら罪じゃねえよな？ ヨシ！ 見てみよ。

俺はレジに付属されたキーボードを操作しながらレジの画面に見
入っていた。

あつた！ ここだ20時48分、来店キャンセルで、会員様名は、
えーと、村井梨華。梨華ちゃんね。俺は変な好奇心で梨華ちゃん

の過去の来店データを調べる。先月は、大体、週1ペースで来て、利用時間は殆ど30分以内で、お客様数は来店時1名、追加1名。追加1名？　って事は昨日と同じパターンだ。

名前だけでも分かっていたから、俺の気持ちは幾分かは晴れた。

またダメだと思うけど、明日、おはよ！　梨華ちゃんって声掛けよう。徐々に行けばいいや。

俺は得意なプラス思考の溜息をついた。

部屋の外にも中にも…

雄二にあんなこと言われたから、その夜の塾はヤケにあいつの事が気になった。

須田彩…。雄二の人違いかも。

雄二が言ってたみたいに、そんな可愛かったかなあ？ そういやあ、まともに顔見てねえなあ。塾出てからは夜で雨であんまり顔見れなかった。まあ取り敢えず、今日は昨日のお礼を言っ借りた傘帰して終りだ。やや緊張し、やや楽しみにし、俺は微妙な気分で塾に向かった。

塾は一クラスに50人ぐらいで席が決まってない。大体席は前から埋まっていった。勉強熱心な奴らは常にホワイトボードにしがみつきたいらしいけど、俺は…そう言う人種じゃなかったし、塾特有の受験に対する集団意識は避けたかったから、いつも後ろの方で気楽に座ってる。

前日まで、俺はあいつに気付かずにいた。

たぶん、あいつは前の方の集団の一人で、たまたま昨日は前の席が空いてなかったから俺の隣に来たんだろう。そうに違いない。勝手な思い込みをしながら塾の廊下を歩いてると…

「オッス！」

いきなり背中を叩かれ、振り返れば、そいつがいた。

「あつ！ ヨ、ヨッ！」

想像の対象がいきなり声かけてきたら大概は慌てる。俺も普通の人間。ヨッシ！ ついでだ。

「き、昨日…ありがとな。傘。今日持ってきたよ」

そいつを見ずに俺は言った。

「恥ずかしく…なかった？ ピンクの花柄の傘」 ムチャクチャ恥ずかしかったし。

「いや…別に」

何、気取ってんだ？ 俺。

まともにそいつを見ず、教室に入り、いつも通り教室の後ろに向かった。ん？ 何？ こいつ。何故か、そいつは俺について来る。前はまだガラ空きなのに。えー？ とうとう一番後ろまで。

シカト決めて、一番後ろの列に入った俺だけど、堪らず立ち止まり、そいつに振り返った。

「隣いい？」

そいつは俺が立ち止まった直近の席に座った。はあ？ 俺、まだ、いいて言ってねえし。昨日の傘と一緒にかよ？ マジでマイペースな女だ。だから雄二にも言ったんだよ。こう言うところが男っぽくて苦手なんだよ。俺はそいつに聞こえない程度に小さく溜息をついた。

いつか雄二が言った。「男が女から主導権取るには女が答える前に次の行動に出て、徐々に自分のペースに嵌めていくんだよ」。いつもの調子で理屈こねる雄二に俺もいつもの調子で、「はいはい」って感じだったけど、そいつはまるで雄二の言ったたソレだ。違うのは雄二は男でそいつは女って事。でも、俺から主導権取って何するつもりだよ？ 性格がタイプじゃねえし。でもあま、スタイルは

…スリムで俺好みかもだけど…顔はあ？　まだまともに見てねえかななあ。

「座れば？」

長机に両肘を着き、両手で顔を囲んだそいつは、まだ背後で呆然と立ちすくむ俺にそう促した。

あんたに言われなくても座りますよ。　第一、ついて来たの俺じゃねーし。おめえだつっつの。

「おっ、おお」

昨日もこんな感じだったけ？　仕方なく俯きながら座り、鞆からテキストを引つ張り出した時、「あんな可愛い子…」。また雄二の言葉が頭を過ぎった。そうだ、顔だよ。ジワーツと目玉だけを隣に向けたけど、直ぐ前に戻した。でも待てよ。それは相手が間違はなく須田彩だったらの話で。ここに来る前にも思ってたけど、雄二の人違いって可能性大だよな？　昨日の夜、雄二はファミレスから窓越しに俺らが外を歩いてたのを見た。雨で、しかも夜。ただ単に雄二は海行つてハズレで海行かなかつた俺が女と歩いてたのを妬つかんで、女なら誰でも可愛く見えて、たまたま俺と歩いてた女が可愛く見えたんじゃないの？　たまたま、俺と一緒に歩いてたこいつが三崎中のそのアイドルに似てたんじゃないの？　きつとそうだ。んなアイドル的な女がこんな男みてえな性格なわきゃない。そんな子はもっと恥ずかしがりやで、控えめで、小鳥が鳴くような声で話す子さ。ならジワーツとさせる特別な意識は不要。普通に塾のクラスメイトとして自己紹介すればいい。ヨシ！　そうしよ。

自己解釈成立。

その時、バサッと俺の足元にそいつのテキストが落ちた。

OK！ いいきっかけだ。

そいつのテキストを拾ってやると、テキストの裏に書いてあったそいつの名前が俺の目に飛び込んできた。

…須田彩…

どんなに暗くても、あの雄二が女の顔を見間違えるはずはない。

最近の男つてのは皆、こんな男ばい女がタイプなのかよ？

テキストを拾い上げて一旦停止。そんな単純な俺の様子を須田は見過こさなかつた。

「私…須田彩。彩あやって呼んでよ。名前…何て言うの？」

いやあ、まだ呼び捨てできるほど親しくねーし…。

「お、俺…」

若干口ごもつた俺を尻目に、須田は俺のテキストを裏返した。

「タケル君かあ。じゃ、タケルたけるって呼ぶね」

いやあ、まだ呼び捨てされるほど親しくねーし…。

「彩…愛してるよ。美味しいよ。いっぱい声出して」

暗闇の中、タケルのその言葉を聞き、私の不安は安堵に変わった。そうかあ。タケルは私の事を愛してくれている。だから汚くないんだ。そう自己解釈したら、急に体の張りが解け、私は好きに悶える気持ちになった。

優しく甘いタケルの言葉が私の躊躇いを払拭させてくれた。マジもう任せるよ。タケル、好きにして。タケルに私の全て委ねます。私のクリを捕らえたタケルの舌先が、更に強く押し込まれ、上下左右に動めき、徐々に周回運動に切り替わる。

「ウーッ！ ウッ！ アアアア…」

私は自分自身を完全に解放させた。

どんな感じで、タケルは舐めてくれてるのかな？ 好奇心に駆られて、枕から顔を上げると、瞳を薄く控え、神秘的な表情のタケルが遮二無二に私のアソコ全体を頬張っていた。そんな熱心に…。そんなが健気で狂おしいタケルが堪らなく愛おしい。でも、その時、チラッと一瞬だけだったけど、タケルの固いものが目に入った。わっ！ デケエ！ 無理かも、あんな角。

安堵感と不安感。

好奇心と羞恥心。

微妙に揺れる空間に身を浮かせる私は微弱に奮えていた。

弓なりになった彩の体が尻の下に少し隙間を作った。俺は両手をその隙間に滑り込ませて彩の尻を掴みながら彩の性器を舐め続けた。

そして、我慢出来なくらいに膨れ上がった愛おしさは急激な吸引を起こした。

「タ、タケルッ！ アッ！ ウウウウ…アー！ アーッ！」

保護皮からチューツと彩の可愛い桃色クリを吸い上げてコリコリと舌先でリズムカルに鳴らすと、まるでサイレンのような彩の呻き声が部屋中にこだまする。そのこだまに合わせて彩の下半身が痙攣。その痙攣に合わせて彩から愛液が搾り出された。

「ウツワアアアッ、ハウアアアアア…タケルウウアアア！」

授業中、俺の席の隣でノートを取っていた彩。

実を言うと、親友であり、喧嘩友達でもある彩の横顔を眺めながら、何度も彩の性器を思い描いた。

静寂と沈黙の中で、気に入った女の性器を想像する。男なら誰でも起こす生理的で健全な想像。

「何見てんだよ？」

俺の怪しい視線に気付き、猜疑心ありありの小声を振り向かせる彩。

「あ、さっき先生何て言ってたっけ？」

いつも適当に、ズボンの中に痛さを感じながら、ごまかす俺。

気のきつい女。すぐ喧嘩なっちまう女。でも、不思議なほど俺に、

その性器を想像させる素敵な女。

こんななつてたんだ。彩の性器。改めての実感。 想像が現実となる…その感動と興奮を女は無理かもしれねえが…全ての男は理解出来るはず。

これが日々想像していた彩の性器。

俺は直で可愛らしく開かれた膣口に唇を当て、ズーツズットと溢れ出す愛液を思う存分吸い上げ、想像が現実になった感動を表現した。

「クツ！ ワーツ！ アアアアアーツ！」

彩の喘ぎは雨音を外へ押し返す。

構わず俺は小陰唇を一枚づつ唇で挟み吸い込み舌先でベラベラと奮わせたり、大陰唇と小陰唇の繋ぎ目を丁寧に舐め上げ、彩の性器の味を隅々まで堪能する。そして、別生命体となった俺の舌先は桃色の壺の上に小さく、可愛らしく存在する彩の尿道口を探り当てた。ヨシ！ こそもいってやる。舌先がその穴を擦りほじくり返し、俺は彩の排泄物の風味を滲み汁を少しでも得ようと試みた。

「イツ！ ウーツ！ タ、タケル、タケルアーツ！」

大声で彩に呼ばれた俺は少し舌を離して彩の尿道口を眺めた。つぶらで綺麗な穴！ 惚れ惚れする。ここから彩のオシッコが発射されるんだ。舌先はまたその愛らしい穴に減り込んだ。ゴメン、彩。おまえが凄く恥ずかしがってるのは分かるよ。でも、ズツとズツとしたかった事だから。説明できない位に美味しいから。もう少しだけ恥ずかしがって、彩。

更に増殖された欲望が与えられた俺の舌先は彩の会陰（膣口と肛門の間）に滑り込む。もう止まらない！ 止めさせない！

制御不能。

彩にとってこれが初エッチと言う事実。

考慮不要。

私の知識の中にそこまでは無かった。

「あつ！ コラそこはダメツ！ タケル！ おめえ、ダメだって！」
堪らずの叫び声。

タケルの舌が這うように私のお尻の穴辺りまで落ちていこうとしていたから、流石に私はお尻の穴を萎ませてタケルに注意を促した。

「大丈夫。彩の全てを知りたいから」

彩の尿道口まで堪能した俺には彩を解放させる確信めいたものがあつた。

…行くぞ！ 彩…

タケルは私の両脚を膝下からグイッと押し上げた。

「ウツ！」

一瞬の内に隙…いや不意を突かれた私。もういいや。好きになさいよ。普通なら、どよめいて力むけど、最早、抵抗なんて出来る体力も気力も持ち合わせてなかった。こんな格好させられんのは、私の人生の中で赤ちゃんの時にお母さんにオシメ替えて貰って以来だよ。んな、お尻の穴丸見えじゃねえか。でも、マジ、マジ汚いよから知らねーぞ！ 私、責任持たねえからなあ！ タケル！！

「彩、ちよっと、舐め難いから自分で脚抱え上げて」

出来る！ 彩なら出来る！ 俺は心中で呪文を唱えた。

「エーッ！」

思わず声が出た。

「大丈夫だから。こっやって、ほら、ほら」

タケルは私の両手を取り、私の両膝の下に当てがった。自分ですんのかよ！？ 私、全然、大丈夫じゃないしっ！…

その状態でも、十分、タケルにお尻の穴を見られていた私はこの際の覚悟を決めてやった。ヨッシ！ もういいや！ 根性見せてやるよ！ あ、愛してるタケルだから出来るんだ！ さあ、どうぞっ！ 全ての概念を捨て去り、私は両膝を抱え上げ、自らM字を作り

上げてタケルの眼前にお尻の穴を晒す。あー！ はっずかしっ！
ふわわわー！ 見られてやがる。

綺麗な花柄。

俺は開かれ突き出された彩の肛門を熟視した。
さあ、味わおう！

ついについに、私のお尻の穴にタケルの生暖かい舌が触れた。
し、死ぬほどハズい！ てか、もう死ぬよ！ あー！ もう私の
デケエ断末魔聞きやがれっ！

「グッガーアアアアアッ！！」

多分、それは部屋を突き抜け、外の雨音をも引き裂いたと思う。

ヒエーッ！ ビックリしたあ！ まだ、ちょこつと舌先触れただけじゃねえか。俺は気持ちを落ち着かせて、ゆっくりと舌全体で彩の校門を下から上に…

「ウツワアアアアッ！！」

ま、またかよ！？ ベロンした。
可愛い。この放射線状に伸びるヒダ…。丹念に、滑らかに、彩の

肛門を食すると、時折、彩は緊迫感を伺わせるように穴を強く閉ざし…

「タツケルウウウウウ…」

堪えられなくなると柔らかく開き…

「クウウウアアタケル…」

健気すぎるヒダの伸縮運動を繰り返した。

ならこれはどうだ!?

悪戯心が過ぎる俺は可愛い過ぎるその穴に、舌をドリル状に萎めて挿入させた。

「カツ、アアアアアーツ、!!」

部屋全体が揺すられるような喘ぎ声。わー！ デケエなあ！

その電撃と熱波に堪える為、両腕に力を入れると、仕方なく両脚はより高く抱え上げられ、ついでに、お尻もより高く浮いていった。

人生終了。

私の1番愛してる人に、私の1番恥ずかしく汚い部分を触られるどころか、舐められ、内部に舌先を。で、でもお尻がこんな敏感な所なんて、痺れるくらい、あったかい。そ、そんな丹念にピチャピチャズーズー音鳴らして舐めやがって。タケル、マジ覚悟しとけよ。

一生離れてやんないからっ！ てか、マジ初エッチってここまでするもんかあ？

「タ、タケル…ア、アア、ウウウツ、アワー…」

より激しく、熱く、深く、私のお尻の穴を這うタケルの舌がどうなっているか、把握出来ないくらい私の意識は朦朧とし首から上の血管が破裂しそうになった。

タケルのお母さん！ 本当に申し訳ありません！ 私は、私は、こんな汚い事を、む、息子さんにさせてますっ！ そりゃ息子さんが勝手にしてる事かもしれないけど。私も女の子なら躊躇すべきです。私がお母さんの立場なら許せないです。こんなお尻の穴を曝す息子の彼女を。でも、でも、こんな女の子でも、あなたのお息子さんをお愛してますっ！ 許してくださいっ！ てかもう温かくなり過ぎて、ウ、ウンチ出そうですっ！ すいませんっ！

俺の唾液が彩の肛門から染み出しシートを濡らす頃、彩が奮え始めた。もう彩は限界だな。ヨシ！ 美味かった。

タケルが私のお尻の穴から舌と唇を離すと、私は両腕の力をゆっくりと抜き、荒くなっていった息を深呼吸に変えて両脚を下ろす。終わったあ！ 恥ずかし過ぎてタケルにどの面提げればいいんだよ？ 深く枕に顔を埋めて目を閉じた。マジ、あのままならヤバかったあ！ タケルがまたクリを触り始め、私の刺激は継続されていたけど、私は一先ずの安心を得ていた。

「彩…」

タケルの声を闇の中で聞いた。タケルの顔見るの恥ずかしいよ…。勇気を出して奮える瞼を開けると、クリを触りながら私の眼前まで競り上がっていたタケルの瞳に一瞬で吸い込まれた私は素直に快感を伝えられた。

「うー！ タケル…気持ちいい…ウツ！ アアアアア…」

クリが熱い。

「今から…馴らす感じで指入れるよ。痛かったら痛いって言うてくれ」

ちゃんと私に気を使ってくれていたタケル。和らげられた私はタケルの頬を撫でる。もう、完璧開き直りだよ。

「うん。タケルに全部任せる…愛してる」

「愛してる…彩」

私の顔の傍に肘をついて、私に唇を落としてくれた。タケルはクリを弄っていた、多分、中指をだと思っけど。中指を私の膣付近まで滑り落とし、多分、親指だと思っけど。親指でクリへ刺激を継続させた。

痛くつても絶対に痛いなんて言うか！ お尻の穴までタケルは舐めてくれたんだ。もう怖いもんなんてこの世にもあの世にもねえよっ！ 最後までヘタレな事絶対言わねえ。愛してる人に遠慮なんてさせられねえよ！ こっちも任しとけ！ タケル！ 気合いが入る。

不動の決心。

そして、タケルの指が膣口から内部に、ゆっくりと進入される。
キタツ！ また電気が下半身に走り、私はタケルの両肩を掴んで唇に力を込めた。でも、やっぱり怖いもんは怖いわあ。うわっ！ 入ってる入ってる！ タケルの指：割とスムーズに膣内に入ってくるのが逆に怖い。

クリを弄られながらの挿入。

私の神経は完全にクリから膣に異動していた。

最初、ズキンときたけど、その後は割と落ち着き……。でも、それで済む訳がなかった。徐々に本当の痛みが押し寄せてきた。あ、いいいっ…「痛い！」と言葉に出かけたから慌てて唾を飲み込む。その瞬間、膣がグイッと締めまり、何とも表現し難い窮屈な痛みが走った。いつ！ い、言うかつ！ さっき見たぶつとい固まりが入るんだから、これから指よりでっかいもんが入るんだから、タケルのものになるんだから、なもんで負けてたまるか！ タケルの唇を激しく吸った。

やっぱりキツイ！ ゆっくりだけど、あんまり無茶したら緊張しまくりの彩は持たない。中指を第2関節ぐらゐまで彩の膣内に挿入親指でクリを愛撫する余裕はもうない。クリから親指を外し、膣内の中指だけに集中した。もうちよいだ！ いっちゃんお。よしよしよしよし…。

指…挿入完了。

OK！ 入ったあ！ 俺は一旦唇を彩から離れた。

「彩…。大丈夫か？」

強く眉間を絞る彩。

「大丈夫…。平気平気」

苦悶の表情に笑顔を滲ませる彩は俺を更に欲情させる妖艶な色気を醸し出す。

「全部入ったから…。一旦抜くよ」

「う、うん」

彩の乱れた髪を撫でながら…

「うっ…」

彩の吐息と共に、俺は中指を抜いた。

「ちょ、ちょっと固かったかなあ？ 私。」

私の開かれた両脚の間に入ったタケルはゴソゴソし、再度、指を膣に挿入させようとしていた。ヨシ！ 今度はもうちょい力抜いて…。

彩が静かに息を吐いたのを見計らって、俺は再び中指を挿入する。お、お、お、お、入ってく入ってく…。俺は彩の子宮口、コリコリした部分まで指先を到達させた。ここだ！ OK。

「うっうっ…」

愛液に塗れた指を慎重に抜き去った。

スムーズにいけたあ！ 私に競り上がってきたタケルは瞳とキスを私に戻してくれた。

「大丈夫だった？」

「うん…大丈夫だったよ」

タケルは私のオツパイを包む。

「俺達って…」

私はタケルの頬を撫でた。

「雨に縁があるのかなあ？ 出会いも雨で…初めて愛し合うのも…雨だよ」

「うん。だから、私、雨好きだよ。昔は嫌な気分になったけど…今は何か良い事起こりそうだから」

それから暫く、重なりキスしたまま2人で雨音を聞いていると、極自然に私から全身の強張りが爪先に向かって抜けていった。

「私達のはじまりは…いつも雨だから」

唇を離れたタケル。静かに、体を起こし、私の両脚を大きく開けた。

タケル、雨みたいに優しく激しく私を包んで。

処女喪失…準備完了。

タケルのお母さん。こんな子ですけど、息子さんを頂きます。必ず、ご挨拶には伺わせて頂きます。

この日、何故、私はタケルのお母さんに律儀になりっぱなしだったのか？ 私は未だに分からない。

俺は虚ろな表情の彩を見詰め、彩の脚をM字になるように開き、亀頭を彩の膣口に当てた。あと一押し一突きで彩の中へ。全ての過去が未来に消される。

「彩…。彩のペースで行くから。だから、痛かったり苦しくなったら…ちゃんと見えよ」

優しく私の手に触れながら囁いてくれたタケル。

「うん」

私は、そんなタケルを不安がらせないように微笑みを返した。絶対、痛くても苦しくても我慢してやる。ここからタケルと私はスタート切るんだ。決めたんだ。タケルしかないんだ。心の中でその結論を確認する。過去はこだわらない。タケルの最愛になるんだ。タケルの…。揺らぎなかった。

正面からそいつの…須田の顔を見たら、悔しいけど、雄二の言う通り、可愛い。気付かれないように隣の須田をチラチラ見てたら。え？ 須田は机の上から俺の宿題プリントをぶん取りやがった。

「違うよ。ここ。…teached…じゃなくって…t
a u g h t…だよ。弱いんだ？ 英語」

また勝手に宿題チェック。流石に、ウザくなった俺はプリントを須田から引ったくり、素早く間違いを消し、その正解を書いた。

「何だよ？ 勝手に見んなよ！ 面倒くせえんだよ英語なんて」
消しゴムの滓を払い、溜息つきながら俯いた。

「スペルは…分かってるじゃん。単語は勉強してんだ？」

須田は俺の顔を覗き込む。

「ま、まあ、一応…受験生だからな」

また溜息をつき、俺は顔を上げた。何、笑ってやがんだ？ こいつ。やっぱ、俺、苦手だよ。

須田が何やら鞆から取り出した。

「これ、貸してあげるよ。動詞の不規則変化表。私は、とくに全部覚えたからさ。蛍光ペン引いてあるところは要チェック。しっかり覚えなよ」

「エッ！ いいよ」と、俺が言う前に、須田は俺のノートにそれを挟み込んだ。

「あ、いや、でも…」

口ごもっていると、先生が教室に入ってきた。また、強引に借り持たせやがって。

「ほんとあいつ何だよ？ 俺が居眠りしかたら肘でコツコツ。ゆっくり寝かせるよ。一番後ろに座ってる意味ねえし」

3時間の授業がやっと終わり、早々と教室から脱出。俺はブツブツ言いながら塾の出口に差し掛かった。

「ついてねえなあ」

塾の出口。軒からしたり落ちる雨。

俺は溜息をつきながら雨を見上げた。今日は傘持ってきたけど、あれは須田の傘だし…。あ！ そういえば、須田の傘、傘立てに入ればなで、まだ返してねえや。

「家まで傘入れてっよ」

振り返ると、須田が笑ってやがった。てか、おめえの傘だし、勝手に帰れよ。

「私…今日、傘持ってきてないんだよねえ。一本しかない傘は…一緒に使おう」

もう一度、雨を見上げた。

もう一度、溜息。

無理か…。観念した俺は傘立てから須田の傘を抜いた。

「おまえ…三崎中だろ？」

前夜のような激しい雨じゃなかったから、俯いた俺の声は須田に届いた。

「うん。何で…知ってるの？昨日…帰った時は殆ど、て言うか、みんな英語の対策だったよ。殆ど私しか喋らなかつたけどさ。中学の話なんてしたっけ？」

何の話をしたかは殆ど覚えてなかつたけど、須田の言う通り、

中学の話題が無かったのは覚えていた。

俺の友達からの情報でさあ…。何て、言い辛かった。

「お、おまえの家って…三崎中の学区じゃん」

咄嗟に出た切り替えし。

「あ、そういえば、昨日、私の家まで来たよね」

「う、うん。あそこなら…三崎中って思ってたさ」

俺を見上げた須田はクスツと笑って話題を変えた。

「英語…がんばんなよ。昨日も言ったけどさあ。動詞の不規則変化は重要だよ」

「おっ、おっ。あ、今日…ありがとな。不規則変化表。覚えたら返すよ」

取り敢えず、お礼は言わなきゃ。須田が俯いてまたクスツと零した。

「返さなくっていいよ。私には…用済みだから」

「いや、そう言うわけには…覚えたらちゃんと返すよ」

「私、夏休み中しか、あの塾行かないから。タケルが夏休み中にある全部覚えるなんて無理でしょ？」

早々に、呼び捨てかよ。まあ、いいや。

「確かにな。じゃ、何か、お礼するよ。おまえ、何か欲し…」

「じゃ、映画連れてってよ」

そう来るのかよ？ 物じゃダメなのかよ？

「勿論、高校受かってからだよ。今は…それどころじゃないからねー
遠い約束ね？ ならいいだろ。須田がどこの高校行くか知らねー
し…。」

俺は傘の外を眺めながら溜息をついた。

「おう！ いいよ。映画な。高校受かったら」

「うん！ 約束ね。お互い…がんばんなきゃ。で、どこの高校行くの？」

「三崎高」

軽く答えてやった。

「マジ！？ 私と一緒にじゃん！」

エーッ！ 慌てて、視線を須田に向けた。

「あそこの安全圏だと…偏差値…」

それから、何故か嬉しそうな須田が家に着くまで一人でしゃべりまくった。

「雨…止んでたんだ？」

「みたいだな」

家の前で須田はまたクスツと零し、俺から傘を受け取った。

「ありがと。じゃあな、彩」 アレ？ 呼び捨てしちまった。まあいいっか。

私を呼び捨ててくれた。

「じゃあ…タケル。また明日…塾で」

タケルと呼び捨て合えた私は目の下まで傘を沈めた。

もう雨は止んでいた。

でも、私は…タケルの足音が完全に消えるまで傘を閉じられなかった。

「入れるよ」

「うん」

暗闇の中で、緊張感が一気に上がった瞬間。

イターッ!!

激痛なんて生易しいもんじゃない。

指の時なんかと比較にならない。

杭で刺されたことなんてないけど、きつと、杭で刺されたら、こんな痛さだろう。

「初めての時って…やっぱり痛いのか？」

いつだったか、由美にした質問。

「そりゃもう、意識なくなるほど痛いよ。ハンパない」

「マジでえ？」

「マジだって！ 彩もすりゃ分かるよ」

やっと分かった。正直、舐めてた！ こ、こんな痛いなんて…。
砕けても仕方ないほど、歯を食い縛る私。

まだ先っぽがニユルツと入っただけ。でも、一瞬、彩の開かれた脚がプルツと内側に痙攣し、力が入ったような…。

「大丈夫か？ 彩」

「う、うん。平気だよ」

平気なわきやないよ！

「じゃあ…進ませるよ」

「う、うん」

エーッ！ まだ先あんのかよ！？ 冷や汗が背中から染み出る。

か、固い！ こりや最後までかなり苦労しそうだ。この閉塞感は、ハ、ハンパねえ。処女膣の反発力…。処女をブチ破った経験のある奴らは分かると思うけど、女の力みも手伝って、その反発力はハンパない。初回は半分だけの挿入で諦めて射精して、2回目、3回目とチャレンジを繰り返してやっと貫通させる奴らもいる。

少しでも気を抜けば、膣に押し返されそうになっていたペニスに右手を添え、俺は腰に力を込めて前進させた。最愛の彩。何が何で

も初回で貫通だ！ と、気合いは十分だったけど。いやいや、にしても、これは、腰だけじゃ無理だ。俺はペニスから右手を離さず、彩に覆い被さった。そして、左腕で彩の頭を包み…。ちよい強引かな？ 腰の力と体重で彩の処女膜を貫こうとした。

貫かれ張り裂けそうな激痛と私に被さるタケルの体温。ほのかに目を開けると、私の頬に自分の頬を合わせていたタケルが苦しそうな顔を上げた。タケルが私に苦しんで困ってる。ダメだ！ 私がタケルを助けないと。激痛に汗ばみながら、私はタケルの腰に両手を添え、グイッと自分の方へ引き込んだけど…。いいいいたたたたっ！ 洒落にならない痛み。私は奥歯を食い縛り直す。

「彩…」

落ちてきたタケルの唇に、私は夢中でしゃぶりついた。

彩が俺を引き入れてる。もうそろそろ大丈夫か？

彩にキスしたまま、俺はソツと右手を離し、ペニスが彩の内部で安定感を得ているかどうか確認。手放しでも、若干、腰の力を抜いてもペニスは押し返されない。

第一関門突破。

「彩…。半分ほど入ったよ」

彩の唇に囁く。

「う、うん」

私は愕然となった気持ちを伏せて答えた。

エーッ！ まだ半分かよ！？ 痛すぎて死んじゃいそうだよ。でも絶対勝つてやる！ でも、両腕の力が抜けそう。もうこれしかねえよ。深呼吸して気持ちを奮い立たせ…

ターッ！

私はタケルの腰に両脚をクロスさせ…。来いっ！ 手前に引き込んだ。イッタタタツイタイッ！

「彩…おまえ…」

「大丈夫だから…気にしないで」

私の行動に、タケルは驚き、瞳を広げた。

私は私なりに努力したい。頑張るから！ 愛してるから！ タケルッ！ 離すもんかっ！ おめえ、離すもんか！

こんなハードな事。それほどまでに、彩…。俺は彩の健気な精神力に応え、再び、腰に力を込める。

求め合う唇。

タケルの固いものが私の中に…熱く…深く…愛おしく…。

私とタケルの共同作業がヌルツとした感触と説明つかない、何か
が破れた感覚を私の内部に起こした。もうダメだ…。私の両脚は限
界を迎え解除された。

俺は彩の唇から離れ上体を起こし陰毛を掻き分けて彩と俺の結合
部を見る。

貫通確認。

「彩！ は、入った！ 全部」

やったあつ！

「マ、マジで？」

声が裏返り、涙が出そうに…。

「じゃ、ちょっと動くよ」

しかし、タケルのこの言葉で私の涙は押し戻された。動くう！？
そりゃまあ動くだろうけど、体に杭打ち込まれて出し入れされた
日にゃ、マジ、死んじゃうよ。男にゃ死んでもわかんねえよ。ああ、

もういいや死んでやるよっ！ 動けっ！ 殺せっ！ そんな内心とは別に、「うん」と出来るだけ可愛く見られるように頷く。タケルは体を倒し両手を私の両脇の下に着いて、そのスタンバイを取った。さあ！ 私がどれだけ、おめえを愛してるか、見せてやるよ！ タケル！ タケルが静かに私の中で動き始めた。

喚くぞ！

「アウツ！ アウツ！ アウツ！ アアアアア…アウツ！ アウツ！ アウツ！ アアアアア…」

タケルの先つぼが私の奥に届く…いや、衝突。 出し入れされる断続的な激痛が、衝撃的な激痛が、遠慮なんて言ってもらえない私の大声を部屋中に轟かせる。

「アツウアアアツ！！ タ、タケル！！ アアアア！！ ウウウアアアアツ！！ ウアアアア…」

痛い痛い痛い！ タケル！ もっともっと愛してえっ！

でも、徐々にタケルが私の中で動く度に私の思考に変化が起こった。

この痛さに堪えられるのはタケルだから。タケルを凄く凄く愛してるから堪えられるんだ。幸せな痛みなんだ。涙出てきたけど、気になんてしてらんねーよ！ タケルと一つになり愛情の確認を一緒にに行っている十分過ぎる幸福感とかつてない痛感の間に私は遊泳していた。タケルの動きが激しさを増すに連れてその激痛が不思議に緩和していった。それとも、私の意識が遠ざかっていったかもしれない。いや、そんなはずはなかった。タケルの息遣いが私の耳に届いていたから。

「愛してる…。彩」

私に堕ちて来たタケルを私はしっかり受け止めた。

「あ、愛してるよ。タ、タケル、い、いっぱい愛して。今までの分…いっぱい！も、もっと！」

素直な言葉が激しい息を掻き分けた。

キツイ！ 狭い！ 凄い！ 彩！ 処女の経験は初めてじゃないけど…彩の膣圧は最強。経験したことないペニスへの締め付けと快感を彩の膣内で得ていた。俺は彩を抱き締め、底無しの愛情を表現するかの如く、ピストンを速めた。

「タ、タケル！！ アツ、す、凄いっ！！ ウッアアアウッアアアア！！ 凄いっ！！ もの凄いいいアアアアウアアア…」

俺の両肩を抱く彩の力が徐々に強くなり、俺の我慢も…。このキツさなら、仕方がない。

タケルが軽く私にキス。両腕を起こし、更に動きを速めた。私はタケルの二の腕をしっかりと握り、顎を上げて、その動きに並走した。中にグチヨグチヨと音。

「アアアアアアア！！ 愛してる！ 愛してる！ タツ、タケル！ 愛してるよ！」

薄らぐ意識を取り戻す為、私は必死で心の底から気持ちを叫んだ。

「あ、愛してるよ…彩っ！ 俺、俺、も、もう、もっ！」

「ア、アアアアア、アツ！ タケルーッ！ 愛してるーっ！」

最後に私の顎が目一杯上げられた。

タケルが私の一番深い所で動きを止めた。

次の瞬間、私の中で何かが弾けて、タケルの先端がドクドクドクと波打つように反復運動を繰り返し、私の奥に熱いものが注ぎ込まれている感覚と感触が起こされた。

こ、これが、あの噂に聞く…。

私の中で、その愛情の注入を行っていたタケルを薄く眺めると、タケルは眉間に皺を寄せてハハハと苦しそうな表情を浮かばせていた。お、おめえ、大丈夫かよ？ 心配になった私はタケルを引き寄せた。

「タ、タケル…」

静かにタケルは私の上に堕ちた。ど、どうしたんだよ？ うん？

私は荒い呼吸を繰り返していたタケルをヨシヨシしながら包む。

マジ、大丈夫かよ？ んな息荒げてよ。そんな焦る事ないから、全部、私が全て受け止めてやるから。安心して私の中に出しな。タケル…。

「あ、あ、愛してる。彩…」

声出してくれた。良かったあ…。

「愛してるよ…タケル」

最後の涙が一筋私の頬を濡ったから、私はタケルの耳に唇を着けた。

過去が終わり未来が始まった瞬間。

やっぱり、雨音は部屋の中にも響いていた。

振り返ると悲壮丸出しの彩が俺に駆け寄って来た。あー！ また
ややこしくなる。

「もうっ！ 何やってんの！？ バカ！」

怒鳴った後、彩は俺の両肩を覆い、両肘を地面に着き、半身を起こしていた智喜を睨み付けた。

「もう終わったんだ！ 心配いらねえよ」

うわっ！ この子の目、こええ。どんな事があっても、捨て身で殺しに来る目だ。澄み切りながらも威圧感と覚悟が溢れ出した彩の眼を受け止め切れなかった俺は思わず下を向いた。

彩を宥めていたら、雄二と由美も息を切らせてやって来た。

「雄二…。おめえなあ」

呆れ顔で雄二に振り向いた。

「わ、悪い…」

俺に彩が顔を寄せた。

「雄二が悪いんじゃないの！ 階段で、すれ違った時、タケルの子が変だったから、由美とあんたらの教室に行ったの。雄二の様子も変だったから、二人で雄二を問い詰めたの」

俺が苦笑いしていると、至って冷静、無表情な由美が俺と彩の前に出て…。クールな表情の由美もなかなかいけるよな。智喜を睨みつけたまま、腰を下ろす由美。エッ！？ 無言のまま、由美はパーンと静かな空気を貫く良い音を智喜の横面に響かせた。平手打ち！？ おいおい！ 俺が決死で触った智喜の面を何食わぬ顔で捕らえた由美に、彩が「由美！」と叫んだ。しかし、由美は表情を変えず智喜に怒鳴る。

「あんだ！ 私の学校では暴れないでって約束したでしょ！？」

由美の迫力に、屈強な智喜は目を右往左往させ困惑するだけ。てか、お二人ともお知り合いですか？ じゃ、早く言っつてよ。なら、俺、こんなボロボロになんなくても…。

「ちよ、ちよっとした出来心だよ。こいつらとはもう話ついた」

泥だらけの体を重そうに起こして、立ち上がった智喜は一瞬よろめいたけど、直ぐに体を立て直し、歩き始めた。あれだけ打たれて歩ける？ 智喜は脱ぎ捨てたジャケットを拾い上げ、肩に担ぐと、その場から何もなかったように立ち去った。なかなか、シブイ奴。

「あんたもいい加減になさいよ！ タケル！」

彩の声が俺の耳元で響く。はいはい、次は俺ですか？ てか、俺らにはあんたらの息子達かよ？ しかめた顔を俯かせる。

「何で、私達に言ってくれなかったのよ？ 言ってくれたらこんな事にならなくて済んだのに馬鹿だよ！ もう！」

マジ、俺もそう思う。疲れて痛いだけ…。彩の語尾が涙声ぽかったから、取り敢えず、俺は反省の表情を浮かべた。でも、彩は堪えきれず、俺の肩に顔を着けて鼻を齧り始めた。

「わ、悪かったよ。でも…取り敢えず…取り返したからな。雄二！」

雄二に封筒を投げ渡す。雄二も泣きそうになっていた。

「じゃ、こちら保健室行って、どっかの馬鹿がグラウンドで転んだって救急箱借りてくるよ。雄二、行くよ！」

由美と雄二は小走りに保健室に向かった。

「マジ、心配したんだから。あの智喜て奴…族やってて一端のワルって聞いたから」

体中、痛かった。でも、彩は、そんな事お構い無し。泣きながら俺を強く抱き締めた。

「彩…」

「何？」

「取り敢えず、おめえのオツパイ、俺にスーパープレスだし」

一瞬の静寂。

「ギヤーツ！」

悲鳴と共に、彩は俺を思いっ切り突き飛ばす。智喜にやられて、立つるのがやっとの状態だった俺の体は脆くも後ろに倒され、智喜のようにズカッと後頭部を地面に叩き付けられた。彩が留め刺してくれるとは…。痛さなんてどうでもいいくらい虚脱していた俺は仰向けになり唾然とするだけ。そんなオツパイくらいで恥ずかしがるような仲かよ？ 俺らは…。

「だ、大丈夫！」

慌てた彩が俺を覗き込んだ。

「あ、彩…。つ、次、パンツ丸見え」

「ギヤー！ 変態！」

最高の角度で彩の蹴りが俺の脇腹に入った。そ、そんなパンツぐらいで恥ずかしがるような仲かよ？ 俺らは…。

踏んだり蹴つたりの一日。

コンパス

「雨、降って来ないかなあ…」

少し曇った空を部屋のカーテンの隙間から、私は見上げていた。激しい頭痛で朝起こされた事を何故に変えてみても、もう遅かったけど。

例えば、誰とも会いたくなかった。

学校行きたくなかった。

だから、部屋にいるだけ。単純。

私は待ち続けただけで、あいつは行き続けただけ。もう遅い私。だから、こんな中途半端な曇った自分をいつそのこと雨で流してくればいいのか。なら、どっかに流れ着く。どっかに辿り着く。雨、降って来ないかなあ。

もう一度、曇り空を見上げる。

雨の日に、あいつに出会った。

私は誰とも上辺ツラだけの、作り笑いだけの、人が友情なんて呼ぶ付き合いを拒絶していた。うんと昔は人についてくのが億劫だったけど、まだ我慢できていた。

でも、アレが起こった。

アレが私の方向を変えた。

親？ そうだね…。

母親…元々、シングルマザー。私が中1の時に、いきなり結婚し

た。結婚するまではキャリアウーマンって呼ばれる事が好きだったみたいけど。私が中2の時に白血病で死んだ。

元々、自分の死期が分かってたみたい。だから、結婚して私に父親を残した。

「お父さんは本当のお父さんだよ。だから、何にも遠慮する事ないからね」

死ぬ間際に、お母さんは、全ての秘密を話して逝った。

父親…中1から一緒に暮らし始めたけど、未だにぎこちなかった。何か、デパートで管理職やってるって話だったけど。

「だから、私にも愛想笑いが得意なんだ」

そう思う事になっていた。

私…一人の私だけ。

あと一人…話したくても…。

雨の日に…あいつに出会った。

暇潰しに、万引きして、コンビニを飛び出した後、あいつは私の肩を叩いた。

雨の中で、振り返った。何だ、店員じゃない。

「やるんならもっと楽しい事があるよ」

面白ろそうだから、あいつについていった。

私と同じくらいの歳。私には暇潰しだけだったけど、何故か笑顔のあいつ。

怪しいとまでは思わなかった。ゲーセンで、初めてのクラブで、一方的な笑顔が何故かウザくなかった。

気が付けば…私は鏡だらけの部屋にいた。

気が付けば…何か重いものが私に乗っていた。

気が付けば…体が揺れていた。

気が付けば…あいつが隣でタバコを吸っていた。

あれ？ 部屋の花瓶が割れてる…。

「元気ねえな？ どうしたんだよ？」

帰り道。タケルからマツクに誘われた。

「別に、至って普通だよ」

髪を弄りながら、少し視線を逸らしたけど、コーラのカップをトレーに戻したタケルの視線に私の視線は戻された。

「今日、授業中。 勇気を出して見上げたタケルの瞳がとても優しかった。」

「由美。 おまえ…悩みを人に言えないタイプだろ？」

当たってた…。

「俺にだけには聞かせろよ。 もう…一人で悩み抱えてパンクする必要なんてねえよ」

少しだけ涙を零した私に、タケルがハンカチを投げ出す。 タケルになら。 タケルだけになら…。 私はタケルに話す決心をした。

「タケル…。 私…好きになっちゃいけない人好きになった」

テーブルの向こうから、タケルの溜息が聞こえた。

「次は…アイス舐めるみたいに下から上にを繰り返して」

それ分っかかり安い！ アイスね。 下から上にね。 タケルの固いものの根元に舌を合わせた私は先端へ向かってツーツと舐め上げ、先端を軽くくわえて舌をチロチロ。 ま、本当のアイスなら先をガブツとやっっちゃうんだけど、んな事やっっちゃ洒落なんないからね。

そのアイス舐めを何度か繰り返し、タケルに上目遣いで合図を送った。

「上手い上手い。やるじゃん」

笑って舌を離れた私は…

「やりや、できんだっ…」

タケルの固いものを叩きそうになる。

「おおい！ 止めて止めて！」

「あ！ ごめんごめん」

私は舌をタケルの固いものに戻して舐め続ける。何か、落ち着く…。こうしていると、タケルの全てが私のもんだって実感できる。満足感と安心感の中、タケルの吐息を聞く。

こんな素直に。彩…。覚束ないながらも健気に舌の上下を繰り返し、時折、心配そうに上目遣いで俺を見る彩。

自分では気が付かない内に尻を突き上げて卑猥な格好で俺のペニスに注力する彩。

そんな献身的な彩に、俺は改めて感動させられる。

「どう？ 気持ちいい？」

先端をチロチロ舐めながら尋ねると…

「ああ、気持ちいいよ」

タケルは薄い瞳で答えてくれた。

「良かったあ！ 初めてだから、どうなんのかなって心配だったからさ」

「心配する事ないよ。凄い…気持ちいいよ。愛してるよ。彩」

タケルは私の頭を撫でてくれた。

「愛してる。タケル」

先端にチュツとキスした私はスッポリとそれをくわえ込んで口の中で舌を動かす。こんな感じでもいいのかな？ でも、先っぽって舌触りいいね。ツルンツルンしててさ。

「エーッ！ なんとまあナチュラルにくわえたなあ！マジやるねえ！どこまで俺を感動させる気だ？」 彩。

「いい感じだよ…彩」

スポッと、私は口から先端を抜いた。

「んな感じいい？」

タケルを見上げながら、また先端にキスすると…

「うん。可愛いよ」

タケルはまた頭を撫でてくれた。もう、完全にタケルの固いものへの違和感と躊躇は無くなり、目を閉じて可愛く感じてくれているタケルを眺めていると、私の興奮も高まった。もう、完璧にタケルのココは私のもんだ。もう誰にも渡さない！ タケル自身にも貸してやってるだけだから。それまでの私には有り得ない発想だったけど、口を含む行為は異常なぐらいの独占欲も芽生えさせた。髪を耳に掛けて気合いを入れ直した私は再度先端にしゃぶりついて激しく舌をローリングさせてやる。

「彩…。その穴の下にある筋みないな縫い目わかる？」

鼻息が荒くなっていた私は先端をくわえ込んだまま舌でタケルが言うその部分をクチュクチュ探り…。筋？ 筋ねえ。うん？ ううん？ ココか？ 舌先でチロチロとその部分を擦りながらタケルを見上げて、先端をくわえたまま、「うう？（ココ？）」「と視線に鼻声を交えてタケルに信号を送った。

「そ、そこ！ そこを重点的に舐めて」

OKOK！ ううね。

「こ、これはっ！ かなり来るっ！ やるじゃん！ 彩。瞬時に探り当てた彩に感服した俺は更に息を荒くして応えるしか無い。」

は、はーん！ ココがウィークポイントなんだ。

私は舌先でその「筋」を押仕込み、更に振動を加えるように舐め続けると、タケルは両手で私の髪を撫でて。タケルが私の舌で感じてくれる。もつと感じさせてあげたい。これから、もつともつと。

タケルの先っぽから流れていた液を舌に染み込ませて味わい、それを私の舌全体でタケルの固く張った先端部分全体に絡め、また「筋」に舌先を戻す運動を繰り返す内に、私は、「くわえ込む」に「やや吸い込む」を加えて舌使いとのコラボレーションを工夫する。

俺は完全に脱力。

彩を舐めてたあ。あ、いや、今、舐めてるのは彩なんだけど。まあ、どうでもいいや。んな事。

ヨシッ！ まだまだあ！

タケルの先端部分と私の唇と舌には摩擦感が無く、くわえたまま軽く吸うだけで滑走度が増して簡単にツルンと喉手前まで先端部が入ることが分かった。おお！ スッゲエ！ これ。うっうん？ でも、あまり強く吸い過ぎると、ウエツと吐き出したくなる事も分かった。

次第に、私は固い茎を握り締めたまま、一定のリズムで口の上下運動を始めていた。そして、もう一方の手は下部の「袋」に移動し、バスルームで洗ってあげた時のように内容物の「玉」を柔らかく持ち上げて手の平と指でサワサワ。

「くわえ」、「舐め」、「吸い上げ」、「握り」、「転がす」の5点動作を器用に熟せるようになった私は、誰に教えてもらった訳でもない好奇心を通り越した「思いのまま」を何の弊害も躊躇もなく、愛するタケルの為だけに表現していた。

これなら、更に、彩のレベルを上げられるかも？

俺の頭の中に、「69」と言う番号が浮かび上がった。

合格発表の日。私は校庭に張り出された合格者受験番号の中から自分の受験番号を直ぐに見つけられた。

入試当日。タケルを探したけど、広い学校、厳粛な雰囲気と予想以上に多かった受験生の中で、タケルを見つけられなかった。

私は無難に試験を…。でも、タケルは？

一喜一憂、騒然とした校庭の中、タケルを探した。大丈夫、春からタケルと一緒に高校。この日まで、それしか頭になかった。タケルの受験番号知らないし。入学式まで待つしかないの？ 背伸びして辺りを見回してもタケルらしい姿は見当たらない。あいつ、マジ、ここ受けたのかなあ？

不安が私の奥から涙を押し上げかけた時、誰かが私の肩を叩いた。

「ヨッ！ どうだった？」

タケルだ！ 私は直ぐに振り返った。

「そ、そっちこそどうだったのよ？」

先にタケルが私に結果を聞いて来たにも関わらず、久しぶりの挨拶もそっちなので、私は少し震えた声でその結果を聞いた。

「楽勝さ！ 受かったた」

一気に脱力し、張り詰めた神経と涙腺が解かれ……。ヤ、ヤバイ！ 俯いたけど、遅かった。夏が終わってから、いや、タケルから志望校が一緒と聞いてからズツと願ってた事が叶い、もう不必要になった不安感が涙となって落ちた。

「お、おい！ どーしたんだよ？」

タケルがポケットに手を突っ込んだまま私の顔を覗き込んだ。

おめえの事、心配してたんだよ！

言えない本音。

「受かったから嬉しくて……」

搾り出した建前。

「お互い…良かったな」

マジ良かった！ 心の中で呟けば、益々、涙が溢れ出た。

「彩！ どーだった!？」

後ろからの声に驚き、慌てて鼻を吸った私にタケルがポケットからハンカチを渡してくれた。

「受かったよ。由美」

由美が私の肩を抱き寄せる。

「私も！ また彩と同じ学校行けるよ」

俯いてまだ目に涙を溜めていた私を覗き込み、由美は正面のタケルを見上げる。

「あー！ 彩を泣かしたでしょ!？」 当然、タケルはまだ由美の冗談に慣れてない。

「おいおい、受かって感激して泣いてるんだって」

本当はそうじゃないんだけど…。

「分かってるって。私も…泣きたいもん!」

急に泣き出した由美にタケルは困惑し周りを見回す。

「ハンカチ…。一枚しかねえから共有してくれよ」

泣きながら少し吹き出した私はハンカチの端を由美に差し出す。そして、私と由美はハンカチを半分づつにしてお互い頭を寄せ合っ

て泣いた。

「タケル！ 俺、受かったぞ！ おまえは？」

タケルの背後から声がした。

「おう！ OKだ」

「良かったなあ！ 俺達また一緒じゃん。あれれ？ タケル駄目じゃん。こんな可愛い女の子二人も泣かしちゃ」

「おまえまでなんだよ！？ 二人共…受かった嬉し涙だよ。こっちが同じ塾だった…」

「須田彩ちゃんでしょ？ 噂は兼がね」

何で私の名前知ってんだろ？ 多分、タケルから聞いたのかな？

「それと…こっちの子が…」

由美とは初対面だったタケルは私に視線を送った。

「長池由美。私の親友ね」

まだ泣いていた由美がウンウンと頷いて答えた。

「こいつも俺の親友で…」

「高田雄二です。初めまして。あー！ 俺も泣きてえよ！ マジ、俺、ヤバかったからよ。これでお袋に面目立つよ…」

いきなり、雄二がタケルの肩に寄り掛かり泣き出た。タケルはまた周りを見回し…

「もうハンカチねえからそこで泣いてる」

鼻を指で擦って苦笑い。

何とか涙が晴れた私はタケルと笑顔で見詰め合った。

俺は、また両肘をベッドに着いて少し上体を起こした。

「彩…。お尻…こっちに向けられる？」

俺のペニスをくわえながら、彩はキョトンと俺を見上げる。んな可愛い顔されたら…。

「いやその…そのまんま俺にお尻むけて…。その…俺の顔跨げたりなんか出来ちゃったり？」

タケルの固いものに注力していた私はいきなりのタケルからリクエストに若干思考を乱した。ん？ このまま、くわえたまんま？ タケルが言ったスタイルを頭の中でイメージ。クルンとお尻をタケルに向けて、跨ぐう？ ん？ エ？ だから…？ エーッ！？

その下品な窮まりない合体スタイルを頭に描き切った私。流石に、

タケルの固いものを口から吐き出した。

「お、おめえ、それ、エーツ！？　そ、そ、そんな事…」

固いものに握りは加えたままだったけど、私はかなり引き攣った。

「まあ…カップルなら皆やるけどね」

み、皆、やるう？

確かに、私はタケルとは何でもできると自信はあったけど、そのまま逆さまになってタケルの顔を跨ぐなんて…。想像を絶する。女子トークでも、そこまで情報は入って無い。

皆やるんなら、うちのお父さんとお母さんも、んなことするう？　正直、夢にも出てきて貰いたくない両親の醜態を想像してしまっただ私。

「タ、タケル、で、でも、そんな、お尻丸出しで…タケルの顔跨いだら…。何かタケルのお母さんに申し訳なくない？」

遠慮がちに言ってみた事は紛れも無い私の本心。おめえより、おめえの親に申し訳ないよ。んな事…。

「お袋？　何でお袋に？　意味分かんねえ」

「だ、だって、大切な息子さんの顔をマップで跨ぐなんて…。普通…彼女として彼氏のお母さんに申し訳ないって思わくない？」

顔の筋肉がピクピク。不自然な笑いを作って正論を言ったつもり

の私にタケルは何故かブツと吹き出した。

「ふ、普通そう思わないって」

ま、まあ、どーなんだろう？ 私が律儀すぎんのかなあ？ タケルはまだ笑顔。

「わ、分かったよ。無理しなくていいよ。ゴメン、まだ慣れてないからさ。彩はまだこれ2回目だから」

意外と簡単に引き下がったタケル。それが、また私のハートに火を点けた。

はあ？ ちょ、ちつと待ってよ！ 私にはまだ無理だあ！？ まだ2回目だあ！？ 随分と、お子ちゃま扱いしてくれんじゃねーか！ 私はおめえに処女奪われた時点でバリバリの大人だよ。無理はやる前に決めつけるもんじゃねーだろ！ やってから言う事だろが！ やってやらあ！ んの野郎！

口説くされるのは大嫌い。けど、愛してる人にサツパリと引かれると追い掛けたくなるのが私。いやでも、愛してる人なら口説くされるのも、やつぱ好きだね。ま、まあ、んな事はどーでもいいっか？ 私はタケルの固いものを握りしめたまま決意を固めた。

「い、いや、やるよ。で、できるよ、私にだって。わ、私が、お尻、そっち向けるからタケルはジツとしてな」

「わ、分かった。じゃ、ジツとしてまーす」

俺は両肘を外して寝そべった。

てか、マジ、こいつ、大丈夫かあ？ 何か、呂律、変だったし。彩が心配になってきた。

つつても、こええよなあ…。一応は、大人ぶって冷静を保っているようにしたけど…私の下半身は、なかなかタケルの方に向かないヨシッ！ 得意の開き直りだッ！ ターッ！ 片膝だけ少し浮いたけど、途中で止まった。ダメじゃん…。私はチラッとタケルを見て、すでに両肘を外して頭の後ろに両手を組ながら私を見て微笑んでいたタケルに口元だけを吊り上げたデパートの店員のような笑いを返した。

意識するから出来ないんだ。意識しない為には自然に行為に移らないとダメ。

私は握っていたタケルの固いものをジッと見詰めた。

そっか！ 今握ってるコレだ！ コレに意識を集中させて自然にその行為に移る。ヨシッ！ 出来た！

この世で1番愛する人の顔面跨いでドアップでお尻をさらけ出す方法を散漫する意識の中で思いついた。タケルの固いものをくわえながらだったら自然に出来る。この固いものを軸にしてクルンとお尻を向ければ自然に出来る。

固いものの先端をくわえ込み、若干、吸引力を上げる。これで、OK。こ、これで、ゆっくり向けよう。クルンっと、この固いものを軸にして…。お尻をシャキッと立た直し、私は徐々にタケルの顔面に向かわせた。もう一度、敢えて言うなら、私はこの世で1番愛してる人の顔面をノーパンで…。いや、そりゃパンツ履いてても困るけど、お尻ドアップで見せるのがあ。ああ！ もういいや、とにかく、やる。

「あいつらには絶対に言わなねえよ。でも…そんなのは止める。どう考えても…」

タケル、もうどうしようもないとこまで来てるんだ…私。タケルはボロボロに泣きながらも真剣な表情を上げた私をしっかりと見詰めてくれた。

「やっぱり…俺達は似た者同士さ」

タケルのハンカチで涙を拭いて、私は出来る限りの作り笑顔をそのハンカチから浮かばせた。

「何か…悩み事って…自分を弱く見せるみたいで妙に恥ずかしいんだよな？　んな、格好つけたってどうしようもないんだけど…。気が付いたらどうしようもなくなってる。で、自分を押さえ込んで、友達の事が気になって…。気が付いたら自分の事そっこのだけで友達の事を助けてる。俺達は損な性格だよ」

私はタケルに頷く。また涙が零れる。

「由美…。俺は、おまえを一人にさせない。無理だと思ったら…どうしようもなくなったら…俺を使えよ。俺は全力でおまえを助ける。おまえに似た俺はズツとおまえの親友だ。約束しよ。俺はおまえに何でも話す。おまえも俺に何でも話してくれ」

視線を外し外しにし、照れながらも伝えてくれたタケル。

「あ、ありがとう…。タケル。約束する」

涙が止まらない。

人目なんてどうでもよかった。

コンパスで言うなら、タケルの固いものが支点、くわえる私の口が力点、移動する私のお尻が作用点として、180度回らないとタケルの顔には到達しない。まだ90度手前だったから、まだ半分以上残ってる。とにかく、お尻を移動させると言う感覚を捨てて力点で支点の角度を変える感覚で。舐める事に集中しながら自然に作用点をタケルの顔に…。私は無我夢中でタケルの固いものに集中し、その角度を変えていった。

ヨシ！ 90度を過ぎた。その時、チラ見でタケルと目が合った。何、見てやがんだよ？ トロ〜とした顔じゃがってよ。こいつ。

先端の傘部分に舌を這わせながら、私はゆっくりと角度を変える。もう少しだ。頑張れ！ 私。

タケルの顔の傍まで私の左膝が迫り、私は最大の勇気を出して左膝を浮かせる。

ふわふわわ、怖いよおお…。

浮かせた私の左膝にタケルが手を添えて誘導してくれた。

うわわわ、タケル顔面を越えてる…。

そして、ついに、空中移動していた私の左膝がタケルの誘導により下ろされると、タケルは私の内股からお尻に両手を回し込んだ。

ヨシ！ 合体出来た！

タケルがやや浮いていた私のお尻を掴んでグイッと押し下げた瞬間、私は生暖かいタケルの息をアソコに感じた。うおっ！ これ、ゲキハズだよ！

恐々と、タケルの顔を跨ぎ終えた私は、その直後に生まれて初めての羞恥に襲われた。誰にも見せらんないよ。この格好。てか、誰にも見せないけど。固いものを頬張りながら気が遠くなりかける。しかし、タケルの舌と唇によるアソコへの攻撃が容赦なし。

「うっうっうっ…」

タケルは私のクリ唇で吸引しながら舌先で転がしている様子。

「クッウウウクック…」

私はその恥ずかしさと気持ち良さの全てをタケルの固いものにぶつける。あつ、でもこれ…。私は固いものの先端を裏側から舐めるより表側から舐めた方が舌の表面がその先端部にフィットして舐めやすい事に気付いた。舌触りはこっちの方がいいね。

その先端部の固く張った傘…出っ張り部分に舌先を引っ掛けコリッコリッと刈り上げるように舐めると、微妙にタケルの太股が私の舌運動に合わせて痙攣する。この出っ張りはタケルの気持ちいい部分なんだ。そう理解した私は舌先を更にその出っ張りに引っかけてコリコリと刈り上げを加速させた。でも、タケルも負けてはいない。私のクリへの集中口撃に加えて膣に指を深く挿入し内部を掻き乱すタケル。

「ウッ、ウーッ！」

思わずタケルの先端部に対する吸引を和らげた私。呻き声が漏れたけど、直ぐに我に帰り、その吸引を強め、舌の加速をアップさせた。絶対、負けない！勝負してやるよ！タケル…。

快感をながら、欲望を晴らす。初めての複合行為。口とアソコ、二極の神経を私は必死で纏めようと努めた。

私はまだ16歳…。高1と高2の間の春休み中。昨日までバシバシの処女。今はもう20代以上の行為してる。こうなりゃ、とっことんやってやる！タケル、愛してるっ！

奮わされる熱いクリが膣内から温かい汁を止めどなく流出させる感覚。

「ふっ、うっうん、うっう…」

もっともつと舌絡めないと、音出してタケルの汁吸って味わって、あー！私の汁が！またクリがあ！夢中にタケルの固いものにしゃぶり着いて、その快感に耐えていた。そんな状況の中、私は何かが私の肛門に当たってる事に気付いた。それは、舌のようなウエツト感はなかった。指？いや違う。現にタケルの両手は、今、私のオツパイを揉んでる。

固いものの根元に舌を巻き付けながら、私は冷静にタケルがどのように私のアソコを舐めているのか分析。

逆さまになってるから、クリはタケルの顎付近にある。ヨシ。膣は変わらずタケルの口付近。ヨシ。で、最後の肛門はあ、タケルの顎の上は口、で、口の上は鼻。ヨシ。ん？鼻が？エーッ！！ヨシじゃねーよ！バカヤローが！洒落なるかつての！

よりによって人間の臭覚を掌る器官である鼻が人間の中で1番臭い所に直接位置し突いている。それがタケルの鼻で私の肛門！？その事実を知った私は慌てて上体を起こす。

「タケルーッ！そ、そこはっ！！！」

ヒエエツッ！ ビックリすんじゃねえか！ また、いきなり、デケ
エ声出して。別段、変わったこととしてねえじゃん。極普通の69だ
よ。

彩の叫び声に、驚いた俺は、一旦、彩のアソコから口を離れたけ
ど…。いいやいいや、気にしない気にしない。愛撫を再開した。

し、し、死にてえー！！ 私の肛門を1番愛する人に直に臭がれ
てるーっ！！

確かに、舐められはしたけど、臭いは別。恥ずかしさを超越した
残酷な現実。籠った呼吸の中で私の意識は空前の灯となる。とにかく
く朦朧とした私。タケルは私のオツパイから両手を離し、お尻に戻
した。そして、また私のお尻を掴み押し下げようとする。もう勝
手になさいよ…。無気力になりかけていた私はタケルの両手の圧力
に従い、お尻の力を抜くしかなかった。

ん？ ち、違った感触が…。私の肛門に当たっていた突起物の感
覚が消えた代わりに熱いウエット感が生じていた。

「ふっ、うっうんふ…」

タケルが私の肛門を舐め始めた。熱いタケルの舌面が私の肛門全
体を滑らかし、攪る舌先がその穴を突く。良かったあ！ 嗅がれる
より舐められた方がマシだよ。

タケルの舌がその穴に若干入る。

「うっうっうっうっうっ…」

溜まらず吐き出した固いものを握り締めながら、私は遠慮なく声を出す。

「ア、アアアアウー、イー！愛してるタケル！」

「あ、愛してるよ。彩！」

タケルの言葉が私のお尻の穴に当たる。もう思い切り感じるしかない状況の中、もう遠慮なんてしている場合でなかった。

私は再び鋭い舐めを再開する。

思うがままに、愛おしく…。

タケルへの固いものに対する私の哲学が完成した。私のお尻の穴からクリに舌を滑らせたタケルはクリに舌の高速回転と圧力を加えて舐める。

「うっくくくうっくうっくうっく…」

そして、タケルの舌が作るコリコリ感が私の上半身を痙攣させ、私はどれだけ濡れているか知るよしがなかったけど、また、あの固まりが私の子宮で形成されようとしていた。あー！出てくる愛情の固まりが！快感の解放が！タケルは私の下半身の膠着と上半身の奮えに気づいた様子で、私のお尻を両手で掴んで舌の回転速度を上げる。その迫り来る絶頂感の中で、私は凄まじい尿意を感じた。タケルの両腕が私の両腿をしっかりロックしていたので、私は動けない。こ、この姿勢で、タケルの顔の上でイク？あ、でも、ヤバイ！オ、オシッコちびりそっ！タケルの顔に…。

限界！タケルの固いものを吐き出した。

「ダメ！ゴメン、タケルッ！オシッコ出る！よ、避けてっ！あっ、イイイイックー！デルーッ！」

体が反り返り、ついに我慢仕切れない制御不能の流出が起こる。

「イツ！ アツ！ ガアーツ！！」

私は恥ずかしさなんてかなぐり捨てた下品な断末魔を轟かせ、そして、散った…。

出てる。出てるよ。ジュンジュン大量だよ。ああ、止まんない…。薄れる意識の中で、止めようがない、生暖かい放出感だけを得ていた。うん？ タケルは？ 流石に避けてるよね？ エツ？ なんか感触が。エツ？ エーツ！？ まだ私のアソコにタケルの唇と鼻息の感覚が残っている。ハツと意識を完全に取り戻した私。

エツ！？ ま、まさか！？

タケルが私のアソコ全体を頬張り、ゴクゴクと私の流出物を飲んでいる事実を知った。

「タ、タ、タケル…」

虫の息のような声。

何してんだ！？ 次は大音響。

「タケルーツ！！ 馬鹿か！？ おめえは！」

な、何だよ？ ビックリして零すよ。ただでさえ、出てるのを飲み続けるの難しいのにさ。たく。俺は唇を彩の性器に当てながら彩の液を口の中に一杯になるかならないかで、息継ぎも兼ねてゴク

ンと飲み、そしてまた、タイミングよくゴクン。またゴクン。いっ
ちやなんだけど高度な吸飲の繰り返し。ヨシ！ やっと放出が止ま
った。ゴクンと最後の一飲み。フーツ！ OKだ。ご馳走さーん！…

タケルのお母さん、本当にすみませんっ！ 私はあなたの大切な
息子さんに大変な事をさせました。本当に、本当に、ゴメンなさい。
またまた、私は、まだ会った事もなかったタケルのお母さんに謝
っていた。力尽き、タケルの太股に落ちた私。ヒクつく体。私の目
に映るもの全てが白く濁り、やがて、黒く染まって何も見えなくな
った。

「今度：彼女に会って欲しいんだけど」

仕事場のサロンから家に到着。立ちっぱなしの仕事で剥くんだ両
足からパンプスを引き抜き、玄関を上がった私。バツクの中からポ
ケットティッシュを出し、口紅を拭う。鉛が入ったような重い体を
ふらつかせ、バスルームに向かわせるのは結構大変。贅肉はないん
だけど、垂れ始めた二の腕と胸は歳も歳だから仕方ない。最近は、
裸体を鏡に映さず、バスルームの扉を開けるようになった。熱めの
足し湯をしながらバスタブに硬い体を沈める瞬間は、働くバツ一母
さんらしい低音の声が出る。溜息を伸ばした後、軽やかに鼻歌が湯
気に乗るまでは時間が掛かった。

長いバスタイムが終わり、生き返った体にバスローブを纏う。リビングを通り抜け、キッチンに向かった。いつも、タケルが食事した後は、散らかりばななってるのに、また、キッチンが綺麗になってる。流し台には水垢一つ落ちてない。キッチンだけじゃない。ここ最近、家の中が綺麗になってる。仕事に行く前より帰って来た時の方が綺麗に。タケルが？ あの子にこんな事できっこない。きつと、タケルの…。グラスに大量の氷を落としてココナッツリキユールを注ぐと、カリカリツと氷の割れる音。パインジュースとミルクで割る。冷蔵庫の中もこんな整頓されて…。お気に入りのカクテル、ピニャコラーダの完成。バスルームの時とは違う鼻歌。グラスを鳴らし、一口、二口しながらリビングへ。2階から降りて来るタケルの足音がした。

うちの愚息ちゃんからのいきなりの要望。グラスがカラカラさせ、私は意味深な笑顔をくれてやる。

あの子ね…。ピニャを一口飲んだ。

「お疲れ様です！」

「お疲れ！」

従業員達に手を振り、店を出ると、アーケード街の路面は傘の雫と足跡で濡らされていた。

「先生、そんな歳のお子さんいらっしやるなんて見えないわあ。でも、高校生の息子さんは心配でしょ？ いつも、遅くなるんですよ

？ 仕事」

20歳と16歳の子供がいると言えば、私と同年くらいのお客様さんからは有り難い事に、20歳と16歳の子供がいると言えは、有り難いことに、大抵のお客様さんから驚かれる。

「はい。もう高校生なんだし。夕飯くらい勝手にやってくれますよ」

高校生にもなれば、親に日々構われるのが嫌みたい。私も子供に構わなくていい分、仕事に集中出来た。お陰で様で、店の経営は従業員を増やせるくらい順調。子の佐紀も高校卒業した後は都内の美容店に就職して、私から離れたから、そろそろ親の人生と子供の人生に分別つけなきゃいけない時期に来ていると自覚していた。

シャッターを下ろす店が目立ち始めたアーケード街を出ると、黒い斑な雲の隙間から星が見えていた。

横断歩道で信号待ちしていると…え？ タケル？ 何、あいつ。大通りを挟んだ向かいの歩道。遠目だったけど、自分の息子だから直ぐ分かった。女の子と歩いてやがる。タケルは私に気付いてない。まあ、その方がいい。私はそんな息子より、彼女に注目。タケルを見上げる彼女の笑顔が印象に残った。

結構、可愛い子だねえ…。

母親の私へ、割りりと、タケルは自分の彼女に関してオープンにしてくれる。

半年くらい前、タケルの制服にマンダリン系のフルーティな香り。

「あなた…彼女出来たの？」

「う、うん」

「高校になって初めての彼女じゃん」

「適当に遊ぶ子はいたけどね」

「なーに言っただか？ で、新しい彼女とは、もうエッチしてるの？」

「そりゃまあ…付き合ってる訳だし」

親子と言うより姉弟みたいな会話と云えば、少しでも若く見られたい私の独りよがりかも。でも、姉弟と思えば、気楽に、気さくに色々聞けて、タケルも気兼ねなく答えてくれた。私は、「自分はそうだったけど、自分の子供はダメ！」と我が儘な子育てはできない性格。確かに、義務教育の中学までは色々と喧しく言っただけど、子供達の恋愛だけは昔も今も口を挟まない。私も親から自由に恋愛させて貰ったから、今の自分があり、私の子供達がこの世に存在すると、常に実感してるから。

数多い女の子の話をタケルから聞いたけど、実際に、女の子と歩いているタケルを見たのは、この日が初めて。

どんな子なんだろ…？

最近、タケルと話す機会がない。けど、タケルの極身近にいる女性として当然、興味があつた。

私にもあんな時があつたねえ。旦那と…。

その旦那も出てつて3年。

信号が青に変わり、横断歩道を渡る。タケルが彼女に引つ張られるように…二人は人混みの中に消えていった。

「もしかして、私に似た子選んだんじゃないかあ？ あの野郎。ま、そりゃねえよな」

珍しく独り言が出た。私は、時々、内向きでも外向きでも急に男言葉が出る。

「ああ、この癖、いい加減もう治さねえとなあ」

苦笑いを掃つて、私は足早に横断歩道を渡り切った。

「うん、いいよ。じゃあ…明日どう？ 店、早く上がれるようになるから」

グラスを片手に、タオルで頬を拭きながらタケルに答えた。

「うん。大丈夫。春休みだからさ。彼女に…連絡しとくよ」

「店のお客さんが、しゃぶしゃぶ屋さんオープンしたの。家でも何だから…そこで、3人でご飯たべようよ。明日、場所教えるから彼女と来なよ。7時でどう？」

「うん。じゃ、そうしよ。7時ね」

タケルがリビングから出ようとした時、ドアの前で振り返った。

「どんな子かって…聞かないの？」

「もう分かってるからいいよ」

不思議そうな表情を浮かべたタケル。私はカラカラとグラスを鳴らし、またピニヤを飲んだ。タケルがリビングから出た後、私はキッチンに戻り、綺麗な流し台をまた眺めた。きつと、この子だ。高校生の時、私は彼氏の家でここまで出来ななかった。私に出来なかつた事をやる子。

「参った」

タケルは、この子に任そう。そう思ったら、流し台に涙が落ちた。

「何でアイツがいるの？」

雨を待っていたから、度々、カーテンから顔を出していた。

確か…雄二って言ってた奴が玄関の前に。

「私に会いに？ 私は約束なんてしてないのに」

雄二は私の家の玄関先で、周りを見回しながらインターホンを押しかけて、押す手前で、車が後ろを通りビクっとして止めた。何、ビビってんのよ？ 久しぶりに、私は笑った。

待っただけだった私に雄二は何で？

彼女の事を知って以来、夢遊が収まらなかった俺にタケルが声を掛けてきた。

「おい！ 大丈夫か？ 顔色悪いぞ」

「う、ううん。熱っぽいかもしれない。ちょっと…保健室行ってくる」

あれから彼女とは…廊下で度々、すれ違っけど、いつもツンと顎を尖らされ、素通りされ、目さえ合わせて貰えない。

今日は朝から見ないなあ。彼女、美紀。

別に、熱なんてないの分かってたから、廊下をうろついてた。

「雄二、どこ行くの？」

彩に声を掛けられる。

「郵便局」

面白くない事言った。トイレから出て来た由美と八合わさった。

「由美…。相変わらず可愛いなあ」

タケルの口癖を真似した。

「キヤハハハハ！ んな、あつたり前な事言わなくて言いの！」
背中に気合い入れられた。

もうダメだったから、階段に座り込む。

そうだ！ 彼女の家、行ってみようかなあ…。住所分かってるから、ダメ元だよ。追い返されたら、諦めつくかも。

「入ってよ」

ドアを開け、そう言っても、雄二が口をポカーンと開けたまま。

「入いんなって！」

やや大きめな言つと、雄二は何か言いたげに口をパクパクさせ、漸く、玄関先からドアの方に向かってきた。良かったあ！ 入って来てくれる。

家に入っても、玄関で、まだ直立不動だった雄二を私は腕組みしながら見下ろした。

「玄関先で…。挙動不審過ぎだし」

白のスエット。部屋着がちょっと恥ずかしい。

「ゴメン！ 何てったらいいか…。俺…」

「いいよ。丁度、暇だったから。上がったよ」

愛想なく振る舞まい、リビングへ向かう。私に会いに来てくれたんだ。

腕組みし、顎をツンと上げて、リビングのソファーに座っていると、萎めた肩に鞆を幼稚園掛けした雄二が入ってきた。その萎縮しきった雄二を見て思わず吹き出し、私の取り繕いの表情は一瞬で崩れた。

「座ったら？」

私から距離を保っていた雄二は少し笑って、そのままの姿勢でソファーに近寄る。肩から下ろした鞆を足元へ置き、私の向かいに座る雄二。またフツと零した私を眺め、雄二は口を引き攣らせた。

「雄二君って…言ったけえ？」

「う、うん」

「でえ…。雄二君は…どうやって私の家調べたの？」

完璧可愛くない私。雄二は俯いて困惑している様子。

「ゴ、ゴメン…。犯罪ばいんだけどさあ。あの…俺のバイト先で…。バイト先で調べたんだ」

「バイト先？ あのボックスで？」

「学校の下足場で君の名前見て、それで、何となく店のPCに君の名前打ち込んで検索かけたら…この住所が…」

そこまでして？ 私はまた吹き出した。

「へー、んな私に興味持つてくれてる訳だあ？」

足を組んだ私は膝の上に肘を着いて顎を摘む。

「興味つてかあ…。何て言うんだろ？ 興味ね。興味…持ったかな？ 変な意味じゃなくて友達として。ゴ、ゴメン、意味分かんないよね？」

「友達ねえ？」

天井を見上げた。

「で…何しにうちに来たの？」

理由なんて聞かなくていいのに。ガチで可愛くないね。私。

「今日、学校休んでたから…お見舞いのつもりで…。ちょっと気になつてたから…美紀、あ、いや、君の事」

「ハハッ！」

急に笑い出した私の声に雄二が驚いて顔を上げた。

「そりゃ笑うよ。私の名前言われた後に君って言われたら」

「ははは、そつだね。いや、さ、最初から君って言おうしたんだけど…思わず、逆さまにいつちやたよ。君の反対、美紀って」

やっと雄二が笑った。学校でクールぶってたのは男にデレデレする女だつて見られるのが嫌だっただけ。実際は弱い女なのに…弱いとこ見せるのが怖かっただけ。最後まで正直になつていいや。

「体…大丈夫？」

「大丈夫。単なる生理休暇だから」

笑顔を消した雄二が俯き、一瞬、静寂した。意外とウブな奴？

「嘘だよ。単に学校行きたくなかつただけだから」

雄二から視線を外した私はソファーに背中を着けて溜息と一緒にまた天井に顔を向けた。

「お、俺のせいかな？俺が…慣れ慣れしくしたから」

「そつだね」

また静寂。

「嘘だよ。私…気分屋だから。よく休んじゃうから、学校。彩達に聞いてみてもいいよ。あ、でも、あの子達と話した事ないから、分かんないかもね？私の存在」

雄二に視線を戻す。

「学校じゃ、あんまり話さないんだね？ 今日も話してくれるか…心配だったよ」

俯き加減に、雄二が細く笑った。

「学校じゃ…影消してた方が楽だから。友達…欲しいのか、欲しくないのか、分かんないから黙って過ごしてる」

私も少しだけ俯いた。雄二が黙ったから、私は顔を上げる。

「そう言えば、彩の彼氏…。タケル君って言ったけえ？ 雄二君の友達の」

「タケルが彩の彼氏って知ってるんだ？」

「そりゃ、二人とも学校であの雰囲気だし…。誰でも二人はカレカノ関係って分かるよ。雄二は…彼女いないの？」

「今は完全フリー。美紀は？」

雄二は多少リラックスしてきた様子。私は何気にスエットの前ポケットからタバコとライターを出し、引き抜いたタバコを口にくわえて火を点けた。テーブルを隔て、そのタバコとライターを雄二に差し出してみる。

「あ、ありがとう」

意外に、あっさりと受け取った雄二。慣れた手つきで振り出したタバコ。口にくわえて火を点け、そのまま一気に吸い込んで、やや上向きに煙を吹いた。可愛い顔して私よりタバコに慣れてる。

「へー、吸えるんだ？」

煙で驚きを隠しながら聞いた。

「う、うん。久しぶりだけどね。高校入って直ぐに禁煙したから」

雄二はタバコの灰をテーブルの真ん中に置かれた灰皿に弾き落としながら言った。

「タケルと一緒にタバコ吸ってたら…彩と由美に見つかってさ。こっぴどく怒られて。で、タケルと…もう面倒臭いから止めよかって」

私はグフツと煙を吐いた。

「彩と由美と仲いいんだね？ タケル君とも」

「タケルとは何か兄弟みないな感じだよ。タケル繋がりで…彩と由美とも仲良くなれて」

タケルと兄弟かあ？

「美紀のご両親は…共稼ぎなの？」

雄二はまたタバコを灰皿で弾いた。

「共稼ぎって言うかあ…。お父さん一人だけだから。いつも遅いよ。帰ってくるの。何にも言わない親父だよ。私が夜遅く帰ろうが、朝帰りしようが、何にもね」

タバコを思いっきり吸い込み、一気に煙を吐いた。

「そう…なんだ」

少し長い静寂。

灰皿でタバコを揉み消した私は…

「ねえ…」

ゆっくりと立ち上がって雄二に歩み寄る。漂う煙の向こうで、雄二はただ啞然と私を見上げている。

変化

前のめりになって、雄二に迫る私。

「えっ？」

ソファアーの上で、か細い声を出した雄二は私を見上げたまま、仰向けに倒れそうだった体を奥に滑らせた。お願い。それ以上、逃げないで…。私から後退った雄二。ソファアーに両膝を乗せた私は雄二の方へ体を向けて正座し、右腕を背もたれに伸ばした。少しだけ微笑んでみる。

「あっ！ やべっ！」

雄二は落ちかけていたタバコの灰に気付き、慌てて、テーブルの灰皿でタバコを揉み消した。口を半分開き、私を見るか、見まいか、雄二は視線を左右に振っていた。

「今だけでいいから…何も考えないで」

私は雄二の肩に触れた。雄二はドキッと上半身を奮わせる。

「美紀…。俺…」

両膝の上に両手を置いてた雄二。その視線は、まだ定まっていな
い。

「何も…考えないで…」

雄二は恐る恐る私に顔を向け、私達は見詰め合えた。

「美紀…」

何も言っただけで欲しくなかった。自分の唇を雄二の唇に押し付け、思い切り雄二を抱き締めた。全体重を雄二に乗せて、私は雄二をソファの上に押し倒す。

雄二…。

舌を強める。雄二は私の顔を両手で持ち上げた。

私を分かって…。

雄二は私の体を慎重に半転させ、仰向けにさせた。吐息が吐息が引き合い、私達は、より激しく唇と舌を求め合う。

天井に薄く漂う煙を、ただ、ぼんやりと眺めていた。

少しの間、朦朧とした意識と衰弱した体をタケルの太股の上に寝かせていた私は、意識が正常になるに連れて、私の排泄物を飲み干したタケルが心配になってきた。

タケルが、タケルが、タケルが、や、やっばい！ タケルが！
完全に意識回復した私は取り敢えず、飛び起きる。

「タケルッ！ 大丈夫か？」

丁度、ベッドの下に落ちていたティッシュボックスを広い上げ…

「大丈夫大丈夫。平気平気」

「んな分けねーだろ!？」

そのティッシュボックスでタケルの胸を叩いた。

へっ? うわ! 排泄物の筋がタケルの頬を薫っていた。もっ

! 恥ずかしいっ!

無造作に抜き取ったティッシュで、私はタケルの頬と口をゴシゴシと拭き取る。

「い、い、いててて…」

「痛いじゃねえだろ! バツカだよ! んなの飲むなんてさあ」

「いやでも…口外したら、シートがビショビショなるじゃん」

呆れた溜息をついて拭き終わった。

「そりゃそーだけどさあ…」

「それに…汚くないって。愛してる人のは」

嬉しさと照れ臭さが入り混じる。仕方なく、私は唇をタケルぶつけていった。

「ならいいや! 愛してるっ!」

タケルは私を引き込み、仰向けに倒した。

「無茶苦茶気持ち良かったよ。彩が…舐めてくれて」

「ご満足いただけましたでしょうか？ 100万円になります」

唇を着けながら私の乱れた髪を耳に掛けてくれたタケルに、私は冗談を言っつて、その照れを隠す。

「たっけえなあ！ 初めてにしちゃあ」

「初めてだからたっけえんだよ！」

タケルの下唇を軽く噛むと、タケルは次の行為に入った。はい、タケルの番だよ。自分から両脚を開いて、覆い被さるタケルを受け入れる。タケルはどうしようなく濡れていた私のアソコに指を入れた。

「ウッフ…」

この時、絶頂直後のアソコが擦ったいぐらいに敏感になる事を初めて知った。私は貪るようにタケルに唇を求める。もうどうなってもいい。ズツと、タケルを愛していたい。

「愛してるよ」

「愛してる」

何度、囁き合っても足りない。

暫く、タケルの温かい舌を乳首に、熱い指をアソコに感じていた

私。早く欲しかったから、腰を浮かせてタケルに無言の催促をしたしまった。タケルは固いものを私の膣口に当て、まだ2回目の私に配慮して、ゆっくりと挿入してくれた。

「ウーアーツ！」

吐息混じりの呻きを上げ、私はタケルを抱き寄せた。これ以上、何もいらない！

「ウーツ、アアアアウツ、ア、ア、アアアアア…」

まだ痛さは残ってたけど、それを凌駕する興奮が私の中に芽生え、激しさを増すタケルの出し入れに、私は最大の喘ぎ声で応えた。タケルが、一旦、固いものを私から抜く。

「彩…。後ろ向き」

エツ！ 後ろ？ まあ、タケルが言うんだから取り敢えず向き。

「うん」

こんな感じ？ 私は体を伸ばして俯せになる。

「そうじゃなくて、こうっ！ で、ここをこうっ！」

タケルは私の腰を掴み上げ、背中を圧して沈ませた。

な、何？ この猫が背伸びするようなポーズは？ またお尻丸出しじゃねーかつ！ もう、丸出しばっかじゃん？ 今日。躊躇の間

もなく、タケルの固いものは私の膣を捕らえ…

「アウツ！」

余りの衝撃に私は抱えていた枕から頭を上げた。タケルの突進は続き、その激しい突進に合わせて、ベッドの軋む音と私の喘ぎ声が部屋中に響き渡る。

「ウツ、ア、ア、ア、アアアアアツウツククツンアアアア
…」

痛さが抜けてきてるっ！

私の両脇の下から両手を差し入れたタケルはオッパイを揉み回し、ギョツと掴んで、私の上半身を引き起こす。

「タ、タケルーツ！アアアア、アツアアアア…」

片手だけをオッパイから離れたタケルは、その手を私の内股へ潜り込ませて、指でクリを掻き鳴らした。

ヤバイ！ そんな入れながら、それ弄られたらっ！

「アーツ！ ウツ、アアアアアツ！」

こ、これ擦ったすぎーっ！ で、でも、気持ちいいーっ！ これ以上ない声が部屋に響き渡った。子宮を強く突かれ、クリを速く弾かれ、ダブルな刺激に私の頭とお尻は縦横無尽に揺すられる。

「タツ、タケルツ！」

クリから指を離し、私の腰を両手で掴んだタケルはまるで機関銃。

私を打ちまくる。

「グッ、アアアアア！ググッウアアアアア…タタタ、タケルウアアアアア…」

「あ、彩！ い、いきぞ。いきぞ。彩！」

「タ、タケルッ！ い、いいよっ！ 行って！ 行って！ 出して！ 頂戴！」

「あ、彩！ イッ、イックーツ！」

「ウウッ！」

強く突き上げるタケル。頭を上げて体を弓なりにする私。二人の動きと時間が止まった。

「うっ！ ふっ…」

タケルが長い息を吐くと、その勇ましい突き上げは弱まり…

ドクドクドクドク…

再び、タケルの愛情が私の中に注ぎ込まれた。タケルの分身が私の中に染み渡っていく。温かくタケルに染まってく。しんみりするっ…。

ドクンと最後の反復が起こり、私の中で分身を出し尽くしたタケルは息を荒くし、私からゆっくりと固いものを抜いた。

凄い！ 凄いよ…。

体を起こしてタケルに振り向き、ベットにお尻を着けた。その瞬

間…

ブリブリブリ…

明らかに私の膾から鈍い音が漏れた。

「ふわふわわっ!」

怖くなった私はそのままタケルに倒れ込む。

ブリプスブリ…

また、何とも言えない音が漏れる。

「ふあああ、違うよ! タケル、違うよっ!」

抱き着きながら、泣きそうになっていた私をタケルは冷静に見詰めていた。

「分かってるよ。それ、オナラじゃなくって…膾ナラ」

「チツナラ?」

またサツパリと分からない事を言うタケル。私は驚きの表情を上げる。

「そつ。バックで…所謂、後からエッチした後によく起こる現象。激しく突くと中に空気が入るんだよ」

「くっつきが?」

まだまだ意味が掴めてない私。

「そつ。エッチの後、何かの拍子で膣に圧力が掛かったら…さつきみたいにプリプリって溜まった空気が外に漏れるんだよ。もうちょい具体的に言うと、風船膨らませて指を離れた時と同じだな。プリプリプリッて音するじゃん。まあ…女の子なら誰にでもある事」

「誰にでも？」

激しい瞬き。

「そつ。誰にでも起こる事。テレビや雑誌に出てる綺麗な女にも、高学歴で官僚エリートの子にも、体裁ぶってスカしてる主婦にも、彩みたいな高校生にも、誰にでも起こる現象。気にする事ないよ」

「じゃあ…生理みないなもんだね？」

漸く微笑んだ。

「それとは…また違うけど。エッチの後、女の子に起こる自然現象だよ」

タケルの説明に何となく納得と安心をした私はタケルの胸に顔を埋めた。こええ！ 思わず、オナラしちゃったかと勘違いしたよ。んな時に、タケルの前でオナラなんてしたらマジ生きていけねーよ。

「何か、今日は、ぶっ飛びばっかだよ」

「初めての事ばっかだから、仕方ないよ」

体の張りを緩め、うなだれる私を、タケルは優しく包んで寝かせてくれた。

ブリブリッブ…

「うっほっ！ 来てるよ。これ」

タケルの胸で、私は恥ずかしさを笑ってごまかすしかない。

「可愛いよ。この音」

「マジでえ！？」

私は唇をくれたタケルの頬を撫でた。

「愛してる」

「愛してるよ」

タケルが私から腕を外し、ティッシュボックスに手を伸ばした。まあ、可愛いんじゃないか。

耳を澄ませても、雨音はもう聞こえない。

来た奴はいたけど、みんな計算だらけの上辺ツラだけの奴らだけ。

雄二は？ 雄二には行つて欲しくない。何故、雄二と？ あんな素直に、あんな真面目に、あんな不器用に私に来てくれた人いなかった。雄二の照れた笑顔。雄二の震えた体。雄二の気取らない言葉。みんな嘘が無かった。抱かれたら嘘じゃないって分かったから。でも、ゴメンね。私、ダメなんだ。雄二にはダメな女なんだ。誰とでも寝る女って分かったよね。

少し熱めのシャワーで頬を流す。

雨…降ってきたのかなあ？

俺の上で揺れていた美紀が雨音に合わせて…何故か、泣いていたように見えた。

正気を取り戻した俺はリビングの中を時々の溜息と一緒にうろつく。とにかく、美紀を待とう。本棚の上に置かれてた写真。俺の視線が流れた。家族写真か？ 俺はその写真に近付き、吸い込まれ、そして、動けなくなった。

「な、何で？」

胸の中にも、雨音が響き始める。

2回目のエッチの後、またシャワーを浴びて、ベッドに戻り、またたり、ゆっくり、タケルと口移しの会話。その流れで3回目をした。

「彩？」

「何？」

タケルの鼓動が響いてる。

「春休みの予定は？」

「何にも」

タケルの胸から顔を上げた私は自分の唇をタケルに着ける。

「俺も…バイトぐらいだよ」

じゃ、明日も一緒に？ 誘ってよ！

「明日も…来るか？ 明日、バイトないから。明後日の日曜もバイトないし。月曜はお袋いるけど…火曜はバイト休みで…水曜と木曜はバイト5時からだから…」

じゃ、春休み、殆ど毎日会えるじゃん！

「どっしよかなあ？」

悪戯つぼく、人差し指でタケルの頬を撫でる。タケルがどんな反応をするか、見たかっただけ。

「な、何だよ？ 嫌？ 会おうぜ！ 彼女がいるのに、家で一人で過ごさせてのかよ？」

「んなの、会うに決まってるじゃん。タケルを一人にする訳ないじゃん」

変な演技をしたお詫びに、私はタケルに思いつ切り舌を絡めた。

「じゃ、どうよ？ 月曜以外…毎日…うち来ない？」

来るに決まってるじゃん！

「それは…どっしよかなあ？」

「もう、いいって！ おまえさあ！」

タケルが私のオツパイと脇を擦る。

「キャハハハハッ！ 来るよ！ 来るっ！ 来ますっ！ タケルとズツと一緒にいたいから！」

ズツとタケルと…。ズツと…。もう、離れない。

寂しいかったけど、時計は6時を少し回っていた。

タケルとその日最後のシャワーを浴びて、タケルの部屋にあったドライヤーで髪を乾かし、帰る準備をする。まあ、準備と言っても服着るぐらいだったけど、出来るだけ、ゆっくり着るようにした。

「改めて見ると…かわいいパンツじゃん」

「もういいってんだよっ！」

ゆっくりしてたのに、サツとスカートを上げさせられる。絶対、タケルと離れない。死んでもタケルについて行く…。

タケルが私を家まで送ってくれる。外に出たら、雨はもう止んで星が見えていた。

その日から、雨の日は、たとえ一人でも、タケルが私の傍に…。雨の音がタケルの気配のように。

タケルは私と繋いだ手をパーカーのポケットに入れた。

「初めてだね？ タケルと手繋いで歩くの」

朝は、まだ二人の間に壁があっただけど、でも一つになれて、帰る時は、初めてタケルと繋がる事ができた。

「うん。もう…離さねえから」

タケルがポケットの中で私の手をギュッとする。私はタケルの腕にしがみついた。

「離れないから…」

帰り道。途中、ファミレスで、タケルと夕飯を一緒に食べる事になり、私は携帯で家に電話を掛けた。

「なあ、彩…」

タケルが歩く速さを緩めた。

「俺ら、どうして…中学の時にメアドとか交換しなかったんだろな？」

私は俯いて笑った。

「きつと、話すのに夢中で…お互い忘れてたんだろね」

タケルも俯いて笑った。

本当の理由は違った。タケルとメアドを交換して、毎日毎日、タケルからのメールを待つて待ちくたびれて、堪らなくなつて、私からメールを送つても…返事は？怖かった。いつまでも来ない返事に苛立つて我慢と涙を溜めるようなになる事が怖くて仕方なかった。タケルと携帯番号を交換して…掛けていいか？悪いのか？タケルが携帯に出てくれなければ、嫌われてるじゃないのか？ウザがられてんじゃないだろうか？色んな憶測をしそうな自分が怖かった。

もし、同じ高校に行けなかったら？そう考えると、更に恐怖は大きくなつていった。

「おめえさあ…メアドと番号教えるよ」

「うん。いいよ」

でも、同じ高校なつて、毎日会えると思つたら、合格発表の日に気軽にタケルとメアドと番号を交換する事が出来た。

もし、何も怖がらずに、中学の時に出来たら、もっと早くに…。

もう後悔なんてしたくない。もう何も怖くない。

愛し過ぎると、余計な事を考え過ぎて、悪い事ばかり考え過ぎて、優位になる事や格好つける事を考え過ぎて、素直に、正直に、自分の気持ちを伝えられない。そして、愛してる人は離れて行き、後は後悔だけしか残らない。もう、後悔なんてしたくない。愛して仕方ないタケルには何があるかと素直でありたい。

「タケルに…毎日、メールしていい？ もう顔も見たくないような喧嘩しても…毎日、メールしていい？」

タケルがまたギュッと私の手を握ってくれた。

「いや、俺が毎日メールするから。彩は返事だけしてくれりゃいいよ。俺が最初にメールする」

タケルの手を引っ張る

「ざけんなよ！ 私が言い出したんだから、私からメールすんだよ！ おめえは返事に回れっ！」

タケルが私の手をポケットの中に引き戻す。

「やだね！ じゃ、勝負してやるっか？ メール早打ち…」

「しまった！」って表情をして、タケルは言葉を詰まらせた。「しめしめ」と私は微笑む。

「あ、言ったな？ 言ったよな？ おめえ、女にメール早打ち勝てると思ってんのかよ？ 私は両手打ちって知ってるよな？」

「あ、いや、ちょっと待て。ハンディくれ」

「意味分かんねえ！」

ほら、素直になれば、こうなれる。

ファミレスでは、色々話をして色々笑った。

先生達の悪口。由美と雄二の事。タケルのバイト先の話。私の下着やビキニの趣味。2年になったら行く修学旅行の自由時間の計画。タケルの苦手な英語の攻略方法も。タケルが食べたハンバーグのソースがタケルの口の回りについていたのを私が拭いてあげて「しょーがねえなあ。子供だよ」って朝のやり返しもした。

タケルの口調は友達だった時と同じだったが、タケルの瞳は：瞳だけは：友達だった時と違って、優しく、暖かく、時には、照れ臭く、私を包んでいてくれた。でも、時折、タケルの悲しい横顔が窓ガラスに映ってた。

ここ出たら、10分くらいで私の家に着く。今日は、それでお別れなんだあ。

「今日：どうだった？」

「スツゴい楽しかった」

俯いて答えて、直ぐに顔を上げる。オレンジ色の街灯に照らされた綺麗なタケルの顔を眺めた。

「俺も楽しかった。で：嬉しかったよ。彩を彼女にできて。明日も

…明後日も…ズツと彩は俺の彼女さ。今日は、素直になれて良かった」

もうっ！ それ以上言われたらマジ帰るの嫌になる…。

「私も…私も素直になれて良かったよ」

濡れた路面が更に濡れて見えた。

「彩…。キスしていい？」

「うん」

足を止め、目を閉じて、タケルに唇を上げる。聞かなくていいよ。好きな時にして。私、タケルの彼女なんだから…。

車が水溜まりを弾く音と駅の発着ベルが微かに聞こえる。

帰りたくない…。明日になったら、また会えるのに…。

少しだけ長い立ち止まりが終わり、私達は歩き始めた。

「明日…また迎えに来るよ」

「いいよ。私がタケルの家に行くよ。何時？」

「早く、彩に会いたいから、俺が迎えに行くよ。それに…朝から彩と歩きたいから」

タケルの手をギュッと握り締める。

「分かった。じゃ、またあの曲がり角で」

目の前に迫った、その曲がり角を私は指差した。そこを曲がれば私の家は目前だと気付いたタケルは足を止める。

「分かった。じゃあ、明日朝、9時に」

「遅い！ 待てない！」

「8時にしない？ 明日：朝、二人でスーパー行こうよ。お昼は、私がつってあげる」

タケルが驚いた顔を私に下ろした。

「エッ？ 彩がつってくれる？ そりゃ、かなり期待しちゃうよ」

「そ、そんな期待されても…。」

「で、でも味は…保証しないよ。タケルの口に合うかどうか、分かんないから」

私達が歩き始めると、曲がり角の向こうに私の家の屋根が見えた。

「いいよいいよ、裸でエプロンしてくれたら」

「また、そんな事…。」

「いいね、それ。やっちゃんおっか？」

淋しかったから、タケルの冗談に付き合っただけ。

「ノルねえ！ 彩も。冗談だつて」

良かったあ！ でも、ちょっと興味あったけどね。曲がり角を過ぎるとシャッターが閉まった工場と玄関が迫った。もう今日は終わりなんだ…。

曲がり角と玄関のほぼ中間地点でタケルは足を止め、私の手をゆつくりとポケットから抜き、静かに離れた。

「じゃ、また明日」

「うん。また明日」

「じゃ、俺…帰るよ」

「うん。気をつけて」

私達は手を振りながら背中を向け合った。

玄関間近で、私の背中から迫って来た車の走行音に遠ざかるタケルの足音が消される。

タケルは、もうあの曲がり角に消えたところだろね…。

車のヘッドライトが俯いた私の影の横に、もう一本別の影を伸ばした。

…エッ？…

振り返えった私。眩しい車のベクトライト中に、誰かの陰影が浮かび上がる。車が通り過ぎ、光の残像から…

「タケル…」

私の最愛の人が現れた。

曲がり角に消えずに、私を見てくれた。下唇を噛んで、少し顔を背けて堪えようとした。でも、徐々に滲む視界。我慢なんてできっこない。

。一つ嗚咽を漏らした後、私は全速力でタケルに向かって走る。タケル、タケル、タケル、タケル、もうちよつとでタケルに着く…。息を切らせて、ボロボロになって、タケルの胸に飛び込む私。しっかりと私を受け止めてくれたタケル。夢中で唇をタケルの唇にぶつけ、私は乱れた息と止めようがない涙をタケルに預けた。初めて、初めて、タケルは消えずに、私を、私を見てくれた。嗚咽で潰された言葉を、必死でタケルの胸の中で叫ぶ私。

その日から…タケルが私の傘になってくれた。

「雄二の調子どう？」

由美が心配そうに俺を見上げる。

「悪いみたいだなあ。声掛けても…。あ、う、うん…って、朝から話になんねえよ。」

「アレ以来でしょ？」

彩が言うアレとは、雄二がその子、蓋川美紀に声を掛けた日って事。

「だな。一時の恋心で済んだらって思うんだけどよ」

「もう、皆、帰りならさ。雄二誘ってマック行かない？」

彩の提案に由美が乗った。

「いいね！ 雄二も…女の私達に元気付けられた方がいいんじゃない？」

確かにそうだ。お姉さん方に愚痴聞いて貰って、シャキッと喝入れて貰えば、雄二も元に戻るだろう。男の俺はどうしても甘やかしちゃまう。

「OK！ じゃ、俺、雄二呼んでくるわ」

彩の席から立ち上がり、教室のドアに向かう俺は、そのドアから姿を現した雄二に足を止められた。

「おう！ 雄二。丁度…良かった」

教室に入ってきた雄二。

「雄二…」

青白い顔、引き攣って僅かに奮える唇、泣いてたのか？ 野郎の目は充血してる。単純に、明らかに、正気じゃない。「笑顔が可愛いね！」と、合コンで、よく褒められた、女ウケする自慢の童顔は見る影もない。

「おめえ…どうしたんだよ？」

雄二の悲壮感が磁石のように俺を引き寄せる。俺は雄二の両肩に触れた。

「タ、タケル…」

奮えた声と一緒に、ついに雄二の目から涙が落ちた。相当だな…。

「ゆ、雄二…。取り敢えず…落ち着け。す、座れよ」

雄二の両肩から両手を離し、俺は傍の椅子を引いた。

「タ、タケル…。な、何にも言わずに…俺を、俺を殴ってくれっ！」

「はいつ？」

何言っただこいつは？

その異常に気付いた彩と由美が俺達に駆け寄って来た。

「た、頼むよ…。思い切り殴ってくれ！」

涙を流しながら雄二は俺の両腕を掴んだ。

「で、出来るか、んな事！ 何言っただ！？ おめえは！」

訳も何にも分かんねえ事。流石に動揺した。雄二の腕を振り払うと、由美は小さな体を俺と雄二の間に入れ、俺に迫る雄二を抑える。

「ちよ、ちよっと、雄二！ ちゃんと話しないと分かんないよ！」

息を荒げた俺がジャケットの衿を直していると、彩も間に入ってきた。

「どう言う事？」

「お、俺が聞きてえよ！」

「タケルーツ！許してくれっ！俺：俺：おまえにとんでもねえ事しちゃった！」

彩と由美には目もくれず、雄二は嗚咽しながら俺の足元にうずくまった。

俺に？ はあ？ 意味が全く掴めない俺は啞然とするしかない。

「雄二、どうしたのっ!？」

「落ち着いてっ！ 雄二！」

泣き崩れた雄二の背中を彩と由美が撫でていた。
どうなっただ？

グラウンドと中庭に挟まれた体育館。予想通り、グラウンド側から体育館裏に姿を見せた美紀を、俺は中庭の側の角付近で待ち受けた。

「いれ…」

美紀はメモを指に挟んで、ペラペラと俺に見せる。

…明日の放課後、体育館裏で待ってる。…

前日、下足場で、俺が美紀の上履きに忍ばせたメモ。

「告ろつと思つてた」

俺がそう言うと、風に乱れる髪を押さえ、意味深な笑顔を作った美紀。そのメモを風に飛ばした。

朝5時起床。てか、1時過ぎまで続いたタケルとのメールと願いが叶った喜び、興奮で余り寝られなかった。取り敢えず、まだ3時間あったから、私は服を選ぶことに…。ベッドから起き上がり、クローゼットを開けると、クシャ髪ポ―で気持ち悪くニヤついた私の顔が扉の鏡に映る。直ぐに服を選べなかった私は1分くらいその不細工な顔を眺めた。

「昨日…服選べる余裕がなかったなあ」

そして、何気にクローゼット内に吊られた服を手にする私。

「アーガイル柄のセーター？ 親父臭い。ノルディックも…暗いね。フリル付きのライトブルーのワンピース？ なんか女の子っぽい。てか、私は女の子だよね。ソックスは二―ハイで…ならスカートは短めにして…やっぱ、しっくりいかないかなあ。で、下着は…？」

また、気味の悪いニヤつきが鏡に映る。
正常な意識を取り戻すまで、結局、2時間近く掛かった。

「後1時間しかないじゃん！ 何やってんの私？ 今日…シンブルに白のグラフィック柄のシャツワンピースにしよう。アウターはブルーのパーカシャツ。ヨッシ！」

焦ったら、直ぐに決められた。

「でえ…下着わあ？ 絶対、タケルの奴、見るじゃん。下着、あー、気使う。ここは…お気に入りのやつにしよう」

見えない部分を白とライトイエローのギンガムチェックに決めた。

「ヨシ、完璧OK！」

バスルームへ駆け降り、シャワーを浴び、体の隅々まで洗った私。次は、ダッシュで朝ごはんを食べる。

「あんた、今日、どっか行くの？」

「ちよと…友達と。遅くなったら電話するね」

お母さんに嘘をつき、ご飯を食べた後は、気合いを入れて歯を磨いた。そして、部屋へ駆け戻り、髪を乾かし、セットに入る。

「あ、上げちゃいけない！ タケルの趣味は…下ろした髪だ。こつやってえ…軽い目の…テールアップにして…。ヨッシ！ 可愛いや」

鏡に向かって自己評価。眉を整え、薄いピンクの口紅を塗って、
漸く、完成。

7時40分。私は家を出た。

待ち合わせ場所の曲がり角は家の目の前なのに…。我慢できなかつた私。薄い霧が敷かれた道を曲がり角に向かって走る。もう直ぐで、あの曲がり角に着く！ タケルは、まだだろうなあ。でも、早く会いたい。タケルに…。鼓動と呼吸が激しく乱れる。曲がり角に差し掛かった私は足を止め、胸を押さえて深呼吸をし、呼吸を整えた。タケル…。思い切つて曲がり角を曲がる。

「おうっ！ おはよ。早かつたな」

タッターソール・チエツクのシャツ。タケルが曲がり角の塀に背中を着けて缶コーヒーを飲んでいた。

タ、タケルが先に来てた。何故か恥ずかしくなり、俯くと、笑顔が滲み出た。

「いいや！ 行っちゃえ！」

私はタケルの胸に飛び込む。

「お、おいつ！」

缶の音が道に響くと、私は前夜のように自分の唇をタケルの唇にぶつけた。タケルは私の腰を引き寄せ、私はタケルの頭を包む。お互い、首の角度を何度も入れ替え、長い絡み合いに没頭した。でも、まだまだ、タケルに会えなかつた長い長い時間を、寂しかった時間を払拭させるには十分じゃない。もっと、強く抱いて。もっと、激しく舌絡めて…。

やっと、絡み合いが終わり、私は暖かいタケルの胸に顔を埋めた。

「おはよ。早かったのはタケルだよ。何時に着いたの？」

「10分くらい…前かな」

少しの間、タケルの心音を静聴した。タケルが私の体を離し、私が空き缶を拾って自販機のごみ箱に捨てる。タケルはチノパンのポケットから缶のミルクティーを取り出して、私に差し出した。

「ありがとう」

ミルクティーの缶を開ける前に、私とタケルはチュツと音が鳴る程度のキスをした。

「彩…。この髪…似合うじゃん。グツと大人になったよ」

タケルが私の乱れた髪を耳に掛けてくれた。ヨシ、OK！嬉しかったけど、照れて笑っただけ。

「あ、タケル！ ちょっと、ジツとして」

私は肩に掛けたバックからハンカチを取り出し、タケルの口に着いた口紅を拭く。

「大丈夫だよ。これくらい食うから」

「ははは！ 食べてどうすんだよ。ちゃんと朝ごはん食べたの？」

タケルは私の手からハンカチを取ると、私の唇からはみ出た口紅を拭いてくれた。

「お袋が…土日早いからさ。仕事行く前に作って行ってくれらんだよ。でも、何か…まだ何か食い足りないよなあ」

ハンカチを私に返したタケルは両手をポケットに入れた。

「じゃ、何か食べに行こうか？ あそこのファミレス…朝…」

ポケットから両手を出したタケル。息なり私を抱き締めて唇をぶつけて来る。私は動揺する事なく、タケルの行動に瞬時に合わせ、タケルの首に両手を回した。

タケルは唇をゆっくり離す。

「もう満腹だ」

タケルを見上げると、タケルの唇にはもう口紅は着いていない。

「バツカ…」

少しタケルと歩いた。我慢できなかつた私は足を止める。

「タケル…。もう一回ちようだい」

俯いたタケルが私と繋いだ手をグイッと引つ張ると、私はスツポリとタケルの両腕にキャッチされた。そして、顔を上げた私にタケルは優しい唇と激しい舌をくれた。

抱かれない。早くタケルに…。

もう止んだはずの靄に、私は包まれていた。

何とか、雄二をマックまで引つ張ってきたけど、俺の向かいに座った雄二はコーラのカップに手も着けず、ズツと下を向いたまま。どうなってるんだよ？ 溜息の後、俺は雄二に語り始める。

「雄二…。取り敢えず、内緒事は無しだ。皆、仲間だろ？ 俺もまだ意味が分かんねえけど、俺とおめえただけに関する事でも、皆で共有だ。一人で暴走してどうすんだ？ 皆で悩みを解決しよう」

隣の彩と斜め向かいの由美に視線を向けると、二人は静かに頷いた。

「タケル…」

漸く、雄二が口を開いた。

「昨日…一晩…寝ずに考えた。おまえにどうやって話そうか…」

俺に？ 眉間を絞り、俺はコーラを吸った。

少し長めのシャワーを終えた私は別に何も気にせず、ノーブラで白のＴシャツを着て、スエットパンツを履き、リビングに向かった。リビングに戻ると、リビングと繋がったキッチンで雄二がグラスにジュースを入れていた。

「あ、勝手にして、ゴメン。シャワー長かったから喉渴いてないかな

って」

頬にバスタオルを当て、濡れた前髪を垂らした私。ただ漠然と雄二を眺めるだけ。

「聞きたい事があるんだ」

グラスにジュースをいれる音が止まる。グラスを持った雄二が私に歩み寄り、私はグラスを受け取る。雄二は私を通り過ぎ、本棚まで進んだ。振り返ると、雄二は本棚の上の写真を眺めてた。何となく分かった。ジュースを一口飲んだ私はソファに腰掛け、テーブルの上にグラスを置き、濡れた髪を拭く。

「これ…美紀のお父さんとお母さんだよね？」

髪を拭くてを止めた。

「そっだよ」

溜息で、雄二の肩が大きく上下した。

「美紀のお父さんが…今、もし、ここにいたら…。間違いなく俺は…おうつ、雄二、おまえ、何してんだ？ って、お父さんから言われてるよ」

雄二が気付いてくれた。髪を拭き終った私はグラスのジュースを一気に飲み干す。

「タケル君と私…キョウダイだよ。あ、タケル君の誕生日っていつ？」

雄二が私に振り返った。

「10月16日」

「私は…12月3日だから…ちょっと違いで、タケル君は私のお兄ちゃんだね」

淡々と話す美紀。俺は戸惑いと混乱を隠せず、唇を震わせる。何とか、声は出せそうだった。

「み、美紀がシャワー浴びてる間…。俺が想像してた通りだね。タケルの親父さんは美紀のお母さんと再婚したんだ？」

「再婚は再婚なんだけど…。その前に、私のお母さんがタケル君のお父さんに不倫したの」

不倫？ 沈んでいた視線を上げ、後ろのソファに座る美紀に振り向いた。

「お母さんはモトモト独身だったんだけど…。タケルのお父さんと不倫して、私ができたって訳。で、私のお母さんが妊娠した時期とタケル君のお母さんが妊娠した時期が、ほぼ一緒だった」

そう言う事かあ…。

美紀はテーブルに残っていたタバコを抜き、口にくわえて火を点けて煙を吹かす。

今まで、誰にも話さなかった事を雄二に…。

「しよがない大人達だよね。お母さんが死ぬ前に私に全部教えてくれた。私に半分だけ血の繋がったキョウダイがいるって」

タバコを雄二に差し出したけど、雄二は首を振った。

「タケルの親父さんとお袋さんが離婚したのは…確か…」

「4年前でしょ？ 私達が中1の時。お父さんは白血病だった私のお母さんの死期が分かってたみたい。私が一人になる事を不敏に思ってたんだろうね。タケル君のお母さんと離婚して…私達と一緒に住み始めて。お父さんはお母さんと結婚する時、私の苗字を変えないように婿養子になってね。だから、お父さんが一緒に兄妹でも、苗字が違うって訳。タケル君の苗字も…お母さんが離婚する前と変わってないよね？」

「ああ」

「タケル君のお母さんも子供の苗字変えない為に、離婚しても旧姓に戻らなかつたんだね」

「いつ、タケルの事…。分かったんだ？」

灰皿でタバコを揉み消した。

「高校の入学式の時」

「入学式？」

「お父さん、入学式に来てただけだ。雄二もタケル君も気付かなかったみたいだね、まあ…あれだけ生徒と父兄がいたら無理ないよ。それに、皆、入学式の際に父兄なんて意識してなかったらどうし」

確かに、俺も、一々、後ろに座ってたお袋に振り返って、興味ない父兄の顔なんて眺めなかった。

「でも、私…気付いたの。父さんがこそつと携帯で私以外の生徒の写真を撮ってたの。気になって、お父さんの目盗んで携帯の中身見ちゃった」

「タケルが写ってたって訳だ？」

「そう。咄嗟に…タケルが私の半分血が繋がったキョウダイって思った。他人の子なんて撮らないからね」

雄二は本棚の家族写真に振り振り向いた。雄二…。

「美紀…。何で…俺と寝たんだけ？ タケルに近付く為か？」

俺は背中に近寄って来る美紀と激しくなつた雨音に気付く。

「当然、兄妹だからタケル君にも興味があった。でも…私…雄二の事が…。何もできなかった私に雄二が来てくれたから。最初は、どうしていいか分からなかった。でも、雄二が来てくれた」

俺の背中、雨音が涙を齧る音に変わる。

「雄二…。ありがと」

振り返った俺にゆっくりと落ちてきた美紀。俺はそっと抱き締め
た。

それから、俺は…どうやって美紀と過ごしたか覚えてない。部屋
の外に浸みる雨と胸の中の沁みる涙を交互に感じていたけど、ただ、
俺の脳裏に、タケルが…兄弟のようなタケルが…いつも一人っ子の
俺の傍にいてくれたタケルが…浮かんでいた。形は、どうであれ、
俺は兄弟みたいなタケルの妹と寝ちまった。裕ちゃんも、佐紀姉も
俺に優しくしてくれたのに…。息子や弟みたいに思ってくれてたの
に…。裕ちゃん、佐紀姉とタケルから親父さんを奪った人の子に、
俺は…惚れちまった。タケルが、まだ知らない妹に…。

「雄二、可愛い彼女できたら、その時は、ちゃんと私にも紹介して
よ。あ、今日、これ終わったら、うちに…ご飯食べに来な。タケルも
いるからさ」

俺の髪を切りながら、裕ちゃんがニヤニヤの俺に言ったのを思い
返した。

「雄二は優しいから…きつと素敵な彼女に出会えるよ！ もうちょ
い大人になったら私が見つけてあげてもいいよ」

小6の時、佐紀姉に言われ、照れてたのを思い返した。

美紀の家を出た後、気が付いたら、俺は、のたうち回り、濡れた

頬を雨に打たせていた。

俺はタケルとタケルの家族を裏切った。

タケルが好きなクリームシチューの食材が散らばる。転がる玉葱とジャガ芋も気にならない。私達は玄関口で抱き合い、絡み合う。スーパードで繋いでた手の握力。見上げた視線。私の本能をタケルは理解してくれたに違いない。だから、人目なんて気にせずタケルとキスした。そして、濡れている自分に気付いた。今すぐ抱かれたい！

狂ったような呼吸の中で、私達は首を左右に捻り舌を絡ませる。タケルが私のシャツワンプを太股から捲り上げてブラの隙間から私のオツパイを窮屈そうに撫で始める。私はタケルのタッターソールを剥ぎ取り、インナーの中に手を滑り込ませ、直にタケルの固い胸と乳首を撫でた。タケルの重力で、私は靴を履いたまま玄関から廊下に倒され、私の投げ出された両腿にタケルが慌ただしく体を割り込ませて来る。タケルの指が私の乳首から下半身に向かう。タケル……。パンティーの上から私のアソコを掻き混ぜるタケルの指に合わせ、私の陰毛が引つ張られる。もう、マジ、ダメ。いや、ダメじゃない！ 陰毛が何本か抜けていたに違いなかったけど、タケルはついにパンツのクロッチから指を内部に進入させた。激しく波打つお互いの唇の結合部分が僅かに開き、私の吐息は呻きに変わる。

「タケルウ……」

クロッチから進入されたタケルの指。私のクリを捕える寸前、パンツから抜かれた。何で？ 私がその訴えを視線に乗せる前に、私

から靴を脱がしたタケルは私の膝裏と背中に腕を回し込み、足を振って器用に自分の靴を脱いだ。

そのまま、タケルは私を抱き上げる。

お姫様ダッコだあ！

玄関から廊下を通り、私を抱えたまま、階段を急いで登るタケル。私は必死にしがみつき、その唇を吸い続ける。

部屋に入り、ベッドに下ろされた私はタケルが覆い被さって来る前に上半身を起こした。自ら、アウター、ワンピースとブラを脱ぎ捨て、その催促をする。タケルもベッドの傍で、息を切らせ、インナーシャツを脱ぎ、カチャカチャとデニムパンツとトランクスを一緒に下ろし、全裸に。来て！ タケル！ タケルはベッドに上がり、私を押し倒した。抱いて！

見詰め合ったまま、私はタケルにパンツを下ろされ、全裸になる。やっとの思いで、互いの体温を確かめ合う事が…。強く、激しく抱き合う私達は、その準備を整えた。

雄二が悲痛な表情で、その真実を俺達に打ち明けた。

俺の隣の彩。雄二の隣の由美。そして、雄二自身もしくしく涙を流していたけど、当人の俺は全く泣けなかった。

「マジで…何て言ったら…。お、俺、タケルの妹と…」

俯いたまま呟いた雄二。彩がハンカチで涙を拭きとった後、そのハンカチを俺に渡した。いやいや、俺、泣いてねえって。

「お、おい、何で…おまえら泣いてんだ？」

タケルの問い掛けに、皆一斉に頭を上げた。
な、何でって？

タケルは至って冷静な顔。由美と雄二も、私と同じ呆気に取られた涙顔をタケルに向ける。

「おいおい、勘弁してくれよ。んな、大人の事情に俺は、一々、付き合ってらんねえよ」

エーッ!?

「タ、タケル、でも…」

雄二と由美を交互に見る。私はタケルに視線を戻して声を震わせた。

「だからさあ…。片親の子供なんて、そこまで親を面倒見切れないっつての」

溜息のタケルは私にハンカチを返し、フツと笑顔を雄二に送る。

「雄二…。何も気にするな。おめえが…その…俺の妹、美紀？ 美紀に惚れたんなら…。うん、それで？ 何か問題ある訳？」

雄二が小刻みに頭を動かした。

「い、いや、でも、タケル…。俺…おまえの妹と…」

「雄二…。おめえが俺の為に悩んでくれたのは…嬉しいよ。いや、嬉しいってか、逆に、俺の方が申し訳ないよ」

タケルはコーラを吸って、また溜息をつく。

「あのなあ、雄二…。親子や兄弟の血の繋がりなんて一生消えねえんだよ。切っても切れねえ関係なんだよ。俺の親父がどこで何してようが、俺の妹が同じ学校にいようが、あいつらと俺は血縁だ。たとえ、俺から、はい、さようなら！ おめえらとは、コレツキりだ。つて言っても、切れねえ関係だよ。俺が大事にしてえのは…んな切っても切れねえ、ほって置いても繋がりはな関係じゃねえよ」

雄二も、私も、由美もタケルに聴き入っていた。タケルは少し呼吸を整えて話続ける。

「嘘でも何でもねえ。俺は家族よりも…おめえらとの関係が大事なんだよ。おめえらとの関係を、絆を、俺は、ほって置く訳にはいかないからな」

タケル…

「俺にとつちや、そんなほって置いても切れねえ…誰にも切る事ができねえ親子や兄妹の血縁関係より、ほって置いたら直ぐに切れる…つかつかしてたら直ぐに切られる…友達や恋人や結婚すれば嫁さんとの関係の方がズツと尊いんだよ。より大切に、より大事にしてえんだよ」

タケルが私達を見た。

「変か？ 俺」

いや、変じゃない。

タケルの言葉が正論と思った私。また涙ぐんで首を振った。由美も目に涙を溜めて笑顔でタケルを眺めてる。

「雄二。おめえが美紀に惚れたんなら、俺に気なんて使う必要全くない。それに…」

またタケルはコーラを吸った。

「俺は…美紀を妹なんかにしねえ。雄二が惚れたんなら、美紀は俺の家族より尊い、俺の…」

私達に笑顔を向けるタケル。

「友達だ」

タケルの彼女になって良かったあ。愛してる。タケル…。その意思表示として、そつとタケルの手に触れる。膝の上で、タケルは私の手を握り返してくれた。

タケルは、やっぱり強い。彩が羨ましいよ。

私は曇った視界の中で、タケルの優しい瞳を見詰め、隣の雄二の肩に手を置いた。

「ねえ、雄二…。自信持ちなよ。タケルは正しいよ。美紀が好きな素直になって、美紀を抱き締めてあげな」

「タケル…。あ、ありがとう」

美紀の家を出た後、雨の中でタケルの顔が浮かび、そのタケルの顔を必死で消そうとした自分を恥じていた。タケルに殴られれば、タケルの妹と寝た事を許して貰えるだろう。安易に下品に考えていた自分自身を情けなく感じていた。

「お礼なんて止めてくれよ。俺、何もしちゃねえよ。俺的には…これは、中学時代から続くおめえの自慢話にしかなくてねえよ。相変わらず、おめえもやるねえ！ 女の子がここにいなきゃ、俺、もっと詳しい事聞いてたぜ」

彩と由美が同時に吹き出した。何、俺、悩んでたんだろ？ 膨れっ面を作った彩が自分の肩をタケルの肩に当てた。

「ちよつと！ どんな話聞こうと思ってたのよ!？」

「そりゃ…おめえ…。女の子には言えねえボーイズトークってやつだよな？ 雄二」

「いつやらしい男!」

由美がしかめ面をタケルから背けた。いつもと変わらない、タケルのおどけた笑顔。俺は完璧に安心し、頭の後ろを撫でながらコーラを吸い上げる。

「ちょっと…トイレ行ってくるわ」

テーブルを離れたタケル。彩が心配そうに見詰めた。

「彩…」

小声で彩を呼んだ私はタケルの背中に視線を向け、直ぐに彩に戻し、「行ってあげて」の合図を送った。

トイレに入った俺は胃液と一緒にバーガー、ポテト、コーラ、全てを便器に吐き出した。

「雄二よう…」

唯一の懸念を脳裏に、俺は咳込みながら、やっと便器から体を起こす。出来るだけ呼吸と心拍を整えた俺は背後の洗面台の蛇口から水を激しく放出させ、唾を吐き捨てて顔を洗った。

洗面台から顔を上げ、鏡に映った自分の顔を眺めた俺は両拳をその鏡に着き、溜息と一緒に俯く。

「美紀よう…」

ドアをノックする音。

「タケル、タケル…」

彩の声。ハンカチで顔を拭き、深呼吸する。

「こりゃ…俺達だけじゃ無理だ。女手もいるな」

ドアを開けると、心配そうに俺を見上げる彩が…。

「タケル…。大丈夫？」

「ああ、何でもない」

少し悲壮感と疲労感を滲ませたタケル。タケルの頬を撫で、軽くキスをすると、唇から酸味。

「彩…。今夜…時間あるか？」

「うん、大丈夫」

「雄二抜きで、彩と由美に話がある」

「わ、分かった。由美もバイトない日だから。私が後で由美に言っとく」

「サンキュー。頼むよ」

タケルともう一度キスした。どうしても、その味が気になる。何かあるんだ。

「俺…学校寄って帰る。美紀と2人きりで話できるようにしてくるよ。由美と一緒に…雄二の事、頼む」

何も聞かず、ただ、私はタケルを信じて頷いた。

「分かった。任しといて」

「忘れ物したから…学校寄って帰る。先出るわ」

彩と一緒にトイレから戻った俺は床から鞆を、テーブルからトイレを取り上げた。

「エッ？ タケル…」

「今日の現国の宿題。机の中に忘れちゃった。じゃ、また明日」

雄二は最後まで俺の事を気掛かりにしていた。彩から目で合図を送られた由美は何も言わなかった。

「ごうしちゃんないよ。」

タケル、私が付いてるからね。

自動扉から出て行くタケルの後ろ姿を溜息を我慢しながら見詰める私。由美が雄二の腕を肘で突いた。

「ねえねえ、美紀って…どんな子？」

「うん。凄いサツパリした子。由美も彩も仲良くなれるよ」

「で…。結局、あんた、何回した訳？」

「エッ？ いや、それは…」

由美が上手く雄二の神経をタケルから離してくれた。

坂道を駆け上がり、学校の下足場に着いた俺は鞆からノートとペンを出し、俺の名前入りのメモを書く。取り敢えず、これです。蓋川って言ったよなあ…。ここか。小さく引き裂いたメモを美紀の上履きに忍ばせた。

絶対、美紀は来る。俺からだから。

美紀の上履きを眺めたまま、俺は下足場を後にした。

とにかく、美紀とサシで話さないと。…

学校を出て、坂道を下っていると、ポケットの中で携帯が振るえた。

きつと、彩からだ。

タケルの唇が私の首筋から温かくオッパイに移動し、その渦のような舌の回転に乳首が吸い込まれる。

「タケル…。気持ちいい…ウツ、アーツ、ウウウアツアアアアアアア…いい…」

撫で回すタケルの頭が更に下がり、私の脇腹を擦った唇と舌がア

ソコに到着。もう恥ずかしさなんて…。私は何の躊躇もなく両脚を広げ、タケルのしたい事を受け入れる。

いつから彩は、こんなに濡れてたんだろう？ 彩の小陰唇をネチヨツと指で開ける。ゼリー状化した愛液の固まりが膣口下部に付着している。 何でこんなに濃いんだ？

俺は何の躊躇も無くその乳褐色ゼリーをジュルツと啜った。

「アッ！」

タケルが何かズズツて啜った。何を啜ったのっ？ 一気に、私は枕に顔を埋もらせた。

俺はまだまだ噴出する濃い愛液を彩の性器全体に塗りたくるように舐めな、膣奥深く、指先を子宮口まで届かせた。あったかい。彩のクリと膣内。クリに合わせた舌先と膣に差し入れた指先を同時に奮わせて、回転させる。

「カッアアアア…タケルウウウ…」

熱いタケルの舌と唇。私のクリとその周辺に下品な粘着音とズーッズズツと強烈なバキューム音を作り出していたから、余りにも

恥ずかしくなった私は、それらの音を喘ぎ声で消す。

「ウツアアアツアーツ！！アーツ、ウウアアアア…」

どうにかなるーっ！

「タケルーツ！アアアツ！タケルーツ！」

一通りの喘いだ後、タケルの体が私の真横に戻り、仰向けになった。もう何も言わなくてもタケルの要求するものが、何か分かる。タケルにキスし、最初にタケルが私にしてくれたようにタケルの乳首を口に含んで転がした。

「うわわわわっ！擦ったい擦ったい擦ったい！」

タケルが私の髪をクチャクチャにしてのたうち回る。

「あー！もうっ！コラ、じっとしてろよー！」

タケルを押さえ込む。けど、激しいタケルの抵抗に遭って継続を断念した。畜生！いつかオモツキリやってやる。…

下方に体を滑らせた私はタケル股間に顔を埋めた。

その日、まず私はタケルの玉から口に含み、唾液で袋をベタベタにした。うーん、この可愛いムチュムチュ感は堪んない。舌先で、舌面で、そして、唇で、情熱を込めてタケルの愛らしい二つの球を万遍なく堪能する。口の中から玉を出すときには業とスポンと効果音を出してやると、タケルがクスッと笑うのが聞こえた。美味しか

ったあ！ 固いものの根元に、私は舌を巻き付けながら指先で尿道をなぞり、染み出る液体をその先端部分全体に塗る。徐々に舌を波打たせて競り上げ、タケルが好きな「筋」に沿って「縫い目」に強く舌を押し付けて奮わせ、その「覚えてたの技法」を楽しんだ。タケルの汁が止まらない。これも美味しい…。

タケルの反応を伺う為に上目使いでタケルを眺める。タケルは目を閉じて放心した表情を浮かべていた。私の行為で満足してる。

鼻息を荒げた私はその先端部を口にパクツと頬張った。剥き出しに解放された私の欲望は、私により強い吸引力を付けさせる。上目遣いで先端部をくわえ込んだまま、私は首にスナツプを加え、ヘビメタのように頭を回転させた。

タケルがいけないんだ！ ここまで私を変化させたタケルが！ 私のもんだ！ タケルは私のもんだっ！ 愛してる。

激しい鼻息。呪文が私の心中でこだまする。

バスタブ

由美と一緒に雄二を送った後、「由美と私でご飯作るから、今夜7時に由美の家に来て」とタケルに連絡を入れた私。一旦家に帰り、私服に着替えて由美の家に行った。

「後は：パスタ湯がいて、生クリーム、卵の黄身、塩を混ぜて、ベイクオン掛けたら終わりだね。足らなくなったら、チャーハンでも作る」

流し台で手を洗っていた由美。テーブルの上にサラダとガーリックブレッドをセットしていた私に振り返る。

「ごめんね…由美。タケルの事で…」

「全然いいよ。今夜、お母さんもお父さんも夜勤で…。一人でご飯食べるのも寂しいし、これみんな残り物だからさ」

由美のお父さんは自動車メーカーの生産ラインの責任者。お母さんは看護師。週に何回かは両親の夜勤が重なる日がある。

「でも…タケルの話ってさあ…。雄二の事かなあ？」

流し台に持たれた由美が、やや上目遣いで私を見詰めながら言った。私は俯いて笑顔を浮かべ、由美に歩み寄る。

「大丈夫。心配ないって」

玄関のチャイムが鳴り、私と由美は同時に玄関の方を見た。タケ

ルだ、と顔を見合わせた私達は玄関に向かう。

「いらっしゃいー!」

「おお、可愛い女子が二人もエプロン姿でお出迎え。今夜は色んなサービス受けられそうだな」

いつものタケルの冗談に、私達は苦笑い。タケルは重たそうなコンビニの袋を由美に渡した。

「適当に買ってきたから足しにしてくれよ」

「相変わらず、気が利くね。うちの彼氏は」

タケルは、指でこめかみを掻きながら玄関を上がった。

午前中は、どんよりと曇り空が広がっていただけだったけど、午後からは、とうとう雨が降り出した。体育館裏の軒下で、雨宿りしながら、俺達は話を始めた。

「まさか、おめえから頼み事されるとはなあ」

「どいつも、きな臭い事だったからよ」

「まあ、蛇の道は何とかって言うからな」

薄い唇を吊り上げ、笑みを浮かべた智喜は雨を見上げながらポケットに両手をつっ込み、やや体を丸める。

「まあ…俺もちょうど気になってた事だ。今回は相思相愛って奴だな。昨日、俺の仲間使って、ゲーセンから出てきた大東高の松井って奴を囲んで、吐かせてやった」

「大東高？」

全国的にも名が通った進学校。

「俺らの間でも、チラホラ噂が広がってて、いつかはシメなきゃいけねえって話してたところだ」

智喜の耳にも入ってる事？

「その連中が…女はべらかしてウリやらしてるらしいんだ」

ウリ？ やっぱり、そういう事か。じゃ、あの子も？

「その松井ってのは、連中のパシリやらされてる野郎で…。色々の中身を白状したよ。俺らも相当締め上げてやったからな。連中は女に上手いこと言って、女に客集めさせて、上がりをピンハネしてるらしい。ボディーガード料って名目でな」

「インテリ悪ってやつか？」

俺は拳を握り締め、足元の水溜まりに視線を落とす。

「まあ、そんな感じだ。連中は頭いいだけあって、自分らでは表立

って動かねえ。出会い系やテレクラ使わせて女に客引かせてる。ポ
ディーガードなんてしねえよ。連中がやってるのは女の管理だけだ」

白い溜息を軒先からしたり落ちる雨に吹き付けた。

「最悪の連中じゃねえか！」

頷いた智喜は更に続ける。

「連中はワルしてると思っちゃねえ。ゲームだよ。いかに女をコン
トロールして金を引き出すか、ゲーム感覚で楽しんでやがる」

智喜は俺と同じように雨を見上げ、溜息をついた。

「その子も…ヤバそうか？」

俺は雨から足元の水溜まりに視線を落とす。

「まだ、分からねえけど…ほぼ間違いねえだろな」

「連中は女に客との待ち合わせ場所にカラオケボックスを使わせて
る。連中が偽造した身分証明を女に使わせて、店の会員カード作ら
せてやがる。店に客の来店データが残ると同時に会員カードのIC
チップにも来店データが残る。そのICチップって割と簡単に他の
パソコンで読み取れるらしい。週に一回、その会員カードを女から
回収して、データを読み取って女が何人の客を引いたかチェックす
る。そして、女から客数に応じてポディーガード料を徴収するって
訳さ。ウリやらされてるのは、その子だけじゃねえ。パソコン使っ
て集計しなきゃいけないほどの数だぜ」

一人の男に一人の女ではなく、一人の男に複数の女。その女達を管理する為にボックスの会員カード。店が怪しんでも、元々、身分証明書が偽造だから女の子の身元はばれない。

「それなりの進学校行ってる女ばかり狙われてる。女の学校名、住所、家族、友達の情報を全て把握してる。女が勝手に抜けられないようにする為にさ。もし、抜けるような事があれば、これをバラ捲くって脅しかけてな」

智喜はジャケットの内ポケットから写真を取り出した。

「松井が持ってやがった。松井はそのカメラマンもやってる」

それは、俺達くらいの歳の女の子が中年のオヤジとホテルから出てくる写真。

「クソどもが！」

粗筋を理解した俺はその写真を握り潰した。

「普通、こう言う写真は、相手のオッサン脅す時に使うんだけどよ。気の弱いオッサンならすぐに警察に駆け込むって分かってやがるとこが頭いいよな。だから、これ使って、進学校通ってて、それなりの将来と世間体がある女の方を脅してんだよ。最初は、どっかのホスト気取りで優しい顔して、羽振り良く女の子に取り入る。俺は、いつでも君を守ってあげるよ的な。気を許した女から情報を得て、完全に優しい彼氏なった頃に、『俺の友達がヤクザと揉めて金いるんだ』とか、『親が破産しちゃまって今月の学費払えないよ』とか、そんな泣きの演技をして、完全に惚れさせた女を騙して一回キリって事でウリやらせる。当然、色々理由付けて一回じゃ済まさねえ。

最終的には、そんな写真使って女が足洗えないようにするって事さ。松井って野郎もパシリやらされてるだけあって相当馬鹿な奴だな。意気がって街でペラペラ自慢げにこの事吹いてやがったんで、俺達の耳にも入って来たって訳さ」

俺はまた水溜まりを見た。

「おめえらの耳にも入ってるって聞いた瞬間から相当な事だっと思ってたよ。しかし、許せねえなあ…。連中にはゲームだろうがよ」

俺の脳裏に雄二の顔が浮かぶ。

「雄二よう…」

「どうする？ タケル。雄二に…」

「まだ…言えねえな」

二人の白く濁った息が雨に打ち消された。

「智喜…。まだ、その松井って野郎と話できるか？」

「ああ、いつでもOKだ」

「おめえの事だ。松井には、おめえらに洗いざらいバラした事を裏にいる連中に喋んなって口止めしてるはずだよな？」

智喜はまた唇を吊り上げた。

「お察しの通り。松井は俺がすっかりと手なずけてる」

「初めて、雄二から美紀の話聞いた時…。どうも解せなかったんだ。嫌な予感がして…。だから、智喜に」

食事の後、彩と由美に全てを話した。にしても、カルボナーラ美味かった。おめえら可愛いし、料理上手いし、言う事ねえなあ。

「そいつら許せない」

呟いた彩が天井を見上げ、由美が俯いていた顔を俺に向ける。

「智喜から何にも聞いてなかった」

「智喜には…俺が誰にも言わないでくれって頼んだんだ。俺もいい加減なもんだつてのは、重々、承知してるよ。雄二には『内緒事は無しだ』って言っというて、これだ。雄二に肝心な事を話してねえ」

両腕を抱えて、一瞬、彩をみた由美は、直ぐ俺に視線を戻した。

「でも…雄二が美紀の事を相当好きなんだし。そんな事…。雄二には言えないよね」

「今回の事で、由美も彩も気付いたと思うけど、雄二は…ああ見えて実は純情極まりない奴なんだよ。これ知ったら、あいつは、絶対暴走する。今日の比じゃねえよ」

俺が溜息をつくくと、彩が俺に体を向けた。

「タケル……。美紀の事……助けられる？ 今日、タケルが雄二に言った事はタケルの正直な気持ちだと思う。でも、美紀は……タケルの……」

「ああ、やってみる。いや、やんなきゃいけねえだろ。雄二の為にもな」

由美が顔を上げた。目を吊り上げ、唇を震わせた由美の形相。普段の可愛くて笑顔が似合う由美からは想像出来ない。

「タ、タケル、私達なら何でもするよ。そ、そんな奴ら許せないよ！ そいつら、女を何だと思ってるのよ！？」

「由美の言う通りだよ！ マジ許せないよ！ 雄二も美紀も完全被害者だよ！」

少し体を前のめりにし、二重瞼の中の綺麗な瞳を潤ませた彩。怒った彩は妙に色気を滲ませ、一瞬、変に俺を欲情させた。何考えてんだ？ こんな時に。俺は。でも、そんな目で見られたら、勃起してしまうのがねえじゃねえか。

やや咳込んだタケルは、グラスに入ったウーロン茶で喉を潤した。

「中一の時に……。突然、現れた親父と仲良く出来るか？ 出来ねえよ。だから、美紀は、ほんの一時の安らぎをそんな男に求めた。もう間違いだっただとは気付いてるはずさ。友達がないから誰にも相

談できなかった。俺が、もつと早く美紀に気付いてれば…。今更…
兄妹なんて関係はどうでもいい。美紀と友達になつてれば、同じ親
父を持つ友達になつてれば、親父の愚痴でも聞いてやってれば、美
紀は間違いなんて犯さなかつた。美紀に必要なのは血縁なんかじゃ
ない。友達さ。で、雄二みたいに純情でバカ正直な彼氏さ。ほんと、
あいつは純情で正直な奴だよ。だから…あいつは口で言う割にはナ
ンパ下手だぜ。しょうがねえ野郎だよ」

涙を流し、鼻水を啜っていた私と由美を、タケルが吹かせた。

「おめえら、泣いてんのか？ 笑つてんのか？ 訳分かんねえなあ
？ 女つて奴は」

「もつっ！ タケルが、そういう話し方するからでしょ。違つ？
彩」

涙を拭き終わった私は、ハンカチで目頭を押さえていた由美に大
きく頷いた。私も美紀をほって置けない。

「いやでも…。そういう感情の起伏が激しい女の子も…。俺、嫌い
じゃないけどね。とつても可愛いよ。思わず抱き締めたくなる」

「もう！ これ以上、真顔で笑かすなつて！」

叫んだ由美は笑いながらハンカチで目を押さえ、私はクスクスと
肩を奮わせた。

「由美。美紀と友達なろうよ」

私が笑いを収めようとしている間に、彩に私が言いたかった事を先に言われた。

「うん！ あのバカの雄二に惚れちゃう子でしょ？ 面白いよ。仲良くなりたいたいよ」

苦笑いのタケル。髪を掻き上げる。

「後…。付け加えると、エプロンしてるおまえらって可愛いよなあ」

「バカ！ エプロンしてなくっても、こちらは可愛いよ！」

私が言つと、また吹き出す彩。

「まあ、マツクで言ったように…。俺も美紀と友達になりたいから美紀が男に言えないような話も二人が聞いてやってくれよ。『私、雄二よりタケル君の方が格好いいと思う。タケル君、好きになっちゃうたかも…。』。何て話もあるかもしれないけどな」

「あっても言わねえよ！」

こう言う奴だからタケルはモテるんだよね。呆れて叫んだ彩を私は羨ましげに眺めた。

彩がまた俺に体を向けた。うお！ やっぱこいつ可愛い。また立ってきた！

「で、タケル。今後…どうするの？ 美紀の事」

「今日、学校に戻って、美紀の上履きにメモ入れたんだ。明日、俺と美紀とで話す。それから…」

俺はその後の説明を躊躇した。

「そ、それから？」

「ど、どうする気よ？」

二人の顔が不安に戻った。おっ！ エプロン着けて不安な顔するあんたらも妖艶だねえ！

何か情緒が安定していない俺。

「上に乗ってみるか？」

上？ 昨日の逆さまになるやつかな？ 先端部をくわえながら考えていた。

「彩が上に乗って…それを入れるんだよ」

昨日、そんなのしてなかったから。スポツと先端部を口から抜く。

「上に？ 私が跨がって入れらん…だよな？」

「うん、そうそう」

何となく、イメージは掴めた。でも、なんか下からタケルに見られんのハズいけど。でも、クリアしなきゃ。

「わ、分かった。ちょっとまた教えてね」

「おお、当然」

こんなあ、感じ？　まずは、タケルの固い物が私の股間の真下になるように両膝を立てて両腿でアーチを作る。こ、これ、出来るのかよ？　うわっ、何かこええよ。

「もうちょい、下がって、俺…これ持つてるから」

いや、そ、それ、自分で持たれちゃ困るんだって。入口が掴めないうって。目閉じたまんま、飯食べるのと一緒に、お箸は私が持たないと食べられないって。私はタケルから固いものを奪い取った。

「い、いいいいいよ、私が…持つから」

お、おお！　やるね。彩。なら教える事なんて何もねーよ。いきなり初騎乗で自己挿入？　やっぱ、大した女だよ。ヨシ！　任そう。やって！　俺のペニスを摘み上げ、大胆にも、ゆっくりと腰を沈める彩は髪を掻き上げ、眉間に皺を寄せる。可愛い！　その表情。

ここか？　いやもうちょい後ろか？　にしてもグチャングチャン

じゃん。何？ これ。タケルの先端部をアソコになぞらせ、粘液と粘液の絡み合いの中、その入口を探っていた私はグニツと沈む地点を見付けた。シャツ！ ここだ！

そこだ！ 彩、ロックオンだ！ 俺を見て確認を取った彩。俺は無言で頷く。

探し当てたけど、怖いっての！ 私はナプキンしか使った事ないっての！ ああつ、もう言ってるらんねえよ。行くぞつ！ タケルッ！ 少し腰を沈める。

「ウツ！」

声が漏れた後、その安定性を確かめる為にタケルの固いものから手を離す。OK！ な、何とか、先っぽだけは入ったみたいだけど。

「彩…」

俺のペニスから手を離れた苦悶の彩。流石に見兼ねた俺は彩の腰に両手を回して彩の体を引き寄せた。

「あ、彩…。俺の頭を抱き抱えたら楽だよ」

彩は鬱すらと表情を和らげて俺の頭を包む。

「う、うん、タケル、まだ…動かないでね。私が最後まで入れるから」

耳元で彩が吐息交じりに囁いた。

タケルやっぱり優しいんだね。この姿勢の方が楽だ。安定してる。ヨシ！ 後は私が…。

「あ、彩…。ゆっくりでいいから…自分のペースで」

「う、うん」

わ、分かっているって、んなの。両膝と両腿の力抜けねえよ。でも頑張る。タケルの頭を抱えたまま、私は覚悟を決め、腰を徐々に沈める。あばばばばあ。は、入ってく。うわわわわあ、怖い怖い。

「ウツ、アーツ！」

そりゃ、声も出るよ。も、もうちよいだろ？ そして、漸く、私は完全な安定感を得た。はー、入った！ 根元まで、根元まで、は入ったあ！ もう汗かくよ。

「入ったね。彩」

は、はい。ありがとうございました。てか、奥が、な、何か、痛い。痛い。

「う、うん」

頭を上げてタケルに唇を落とす。私の髪が垂れ下がり、ベールのようにタケルの顔を包んだ。

「ちょ、ちょっと見てみる？ 入ってるよ」

見たい見たい！ 私の努力の結果。

「どうやって？」

「体、少し起こせば、ソコ覗き込めるよ」

なるほどね。考えたら分かる事じゃん。上体を起こす。ズキツとアソコに痛みが走った。うわっ、イッテ！ けど、好奇心が勝っていた。私はタケルの陰毛部と私の陰毛部がしつかり重なり合い、一本の線になっていた二人の結合部を初めて見た。タケルのモノがしつかりと私の中に収納されてる。タケルと1つになってる。感動して涙が出る。

「ど、どうしたの？」

目を見開き、タケルが下から私に声を掛けた。

「嬉しいから。タケルに愛されてるって。ここ見てさあ」

「じゅっち、おいで…」

私はタケルに引き寄せられる。タケルは私の髪の中に入った。

「愛してる…。彩」

タケルの唇に吸い付いていた私。舌を絡めずにはいられない。ピチャピチャと音が鳴るに連れて、タケルの固いものが私の中で微妙に蠢く。いついいい…。

「愛してる…。タケル」

私の泣き声がむせるたびにアソコがキュツと締まる。涙がタケルの頬にポタポタ。上と下から液体が漏れてる。私がタケルの全てを包んで…。中で、う、動いてる…。タケルが。タケルの胸で涙を拭き終わると、タケルは私の顔を両手包み、柔らかく起こしてくれた。

「これからは…ズツと一緒にだから」

私の髪を耳に掛けながら囁くタケル。

「もう！ マジ待ちくたびれだしー！ おまけに初キツスも忘れられちゃうしさっ」

涙に照れていた私は、業と唇を尖らし、拗ねた表情を上からタケルに浴びせる。案の定、私の下で、タケルはハツとして慌てる。

「あ、あれはさあ…。み、皆の前で、ちょっと、照れて…」

「いいよ！ もう」

ツンと頭を横に向けてやった。タケルの困った顔が面白い。この状態なら逃げようにも逃げられないね。タケルちゃん。

「お、俺が追いかけて行って…。その後…どうした？」

一応、気にしてたんだ？ なら、もっと追っ掛けて来いよ。

「家帰った」

目を合わせたら笑いそう。拗ね顔作るのも難しい。それに、笑い堪えると、タケルの固いものが中で…。変な声出そうになる…。

「家帰った後は？」

「号泣！」

叫んだら、ズキンって来た。

「イツ！」

「だ、大丈夫かよ？」

タケルが私の腰に両手を置いた。

「う、うん…。この痛みを早く取らねえとなあ」

タケルの唇が首筋に落ちる。

「そのうち取れるよ。なあ、彩…。初チューした日を俺らの記念日にしない？」

そんなのするに決まってんじゃん！ 頭を上げた私はまだ拗ね顔

を作ってた。

「いつか…覚えてるっ?」

「八月三十一日」

「塾の最終日だからね。簡単だよ」

早く、喜べっての！ 私も。てか、エッチの最中だったの。

「あー、じゃあ、初エッチの日も記念日に」…拗ねてみるもんだねえ！ それも、するする。最高じゃん!…」

「記念日は三月二十五日。『昨日だから簡単じゃん』何て言っなよ。何があっても絶対忘れないから」

私も忘れないよ！ タケルに抱き着く。

「二人だけの大切な日だもんね」

唇を重ねたまま、タケルがクスクスし出した。お腹が揺れて固いものもが、また私の中で蠢く。

「な、何?」

「何か、さっきのさあ…。早く、痛さ取りたいってエロくない?」

「な、何がエロいの?」

「だってさ、早く痛み取るって…。それだけ短期間に何回もエッチ

するって事じゃん。早く慣れないと、痛みは取れない訳だし」

「なるほど。そういう事になるよね。でも、痛みなんて関係なく、タケルとは短期間でも長期間でもいっぱいしたいよ。当然じゃん。タケルにいっぱい愛してほしいよ。言葉だけじゃないくてさ。タケルは…私といっぱいしたくないのかよ？」

言った後に、照れて、視線をやや浮かせる。ま、いつか。今エツチ中なんだし。大胆な事言っていい時だよな。

「そりゃ、俺もいっぱいしたいよ。彩をいっぱい愛したいから。俺には彩だけだから」

かなり嬉しいかった。でも、まだ照れてたから、ちょっとまた演技してやりたくなる。

「じゃあ…。浮気してゴメンってなもん聞かねーからな」

私は尖った唇をタケルに落とした。

「する訳ねーだろ！ したらどーにでもしろよ！」

「どーにでもね？ 分かった。もし、タケルが浮気したら…。今、私の中に入ってるやつ噛み切ってやる」

タケルの唇に軽く歯を立てた。

「こえーっ！」

タケルは笑いながら唇を横向けたけど、私はタケルの唇を追いか

けた。

「噛み切るだけじゃねーからな！ 私…食べるから」

タケルが私の口の中にブツと吹く。

「た、食べる？」

「そりゃ、そうだろ。噛み切っただけじゃ、お医者さん行って繋がれても困るからさ。食べたら繋がられなくなって永遠にタケルが浮気できるなるからさ」

エッチしながらの会話。私は少し照れながらも楽しんでいた。

「はいはい、しませんよ。彩みたいな可愛い女いねーから。彩が世界で一番可愛い」

唇を離して顎を上げる。

「はいはい、何もでねえぞ」

何で、エッチしながら学校トークなの？

「いや、何もでねえぞってか…。もう、出されちゃたからさ。ほら？ 昨日、俺の顔の上で…彩、出したじゃん」

ダメだもう！ 笑いが堪えきれないっ！ でも笑ったらアソコが震えて痛くなる。あー！ でもダメだっ！

「エロいのおめーだろっ！！」

吹き出したついでに、タケルの胸を思いつきり平手打ち。

「イッテ！」

「イターッ！」

二人同時に叫んだ。

やっぱりこう言うのが私達に合ってるね。タケルとだけ出来る会話と笑い。笑い終わったらタケルが私の二の腕を引き、唇を引き寄せる。激しい舌の絡み合いで、またピチャピチャ。タケルの口元からどちらのものか分からない、いや、たぶん私のものと思われる唾液が流れてる。

「んな事言ったら…また出してやるからな」

「おう、受けて立ってやるよ。飲み切ってやるよ」

「言ってる！ 吐いても責任持たねーぞ」

「吐く？ 俺誰だと思ってるんだ？」

「誰？ 私の目線見て分かんねーのかよ？ おめえしかいねえよ」

喧嘩口調になる。それでも、私達は舌を絡め、結合している。フツとタケルがまた吹き出したから、私も吹き出し、私達は絡みあったまま見詰め合う。タケルはゆっくりと下から断続的に私を押し上げた。

「ウ、ウウウウ…」

唇をタケルから離れた私。両肘をタケルの顔の両側に着き、揺れて悶え始める。

「ちょっと…体…起こしてみよ」

私の両肩を押し上げたタケル。私は素直に従い、上半身を立たせ、タケルを見下ろす。うわっ！恥ずかしい！前日と逆になっただけなのに、下から見上げられるのがこんなに恥ずかしいなんて…。髪を掻上げた私は自然に目を閉じた。

俺のペニスに突き刺ささる、見事にシエイプされたタワー。その窪みに両手を添え、揺らす揺らす。目を閉じ、口を半開きにし、胸元で長い髪を騒がす彩。初めての騎乗位に恥ずかしかっている様子が、また可愛い。その振動のリズムに合わせ、健気な鳴き声を出すのが精一杯のようだ。揺れ過ぎて、一人でバランスを取り辛くなっただみたい。彩は俺に倒れ込みそうになる。お、とつとつ…。彩のオッパイを押し上げて支え、そのまま下からこね回す。彩は小さいオッパイ気にしてたけど。要は小さくても、デカくても、形なんだよ。ね。ブラで無理矢理に吊り上げて形作って、脱がしてみりゃ牛の乳みてえなドロソパイなんて最悪じゃん。性欲失せちまう。下から見上げた時のツンと尖った彩のこのオッパイの形。最高！乳首の立ちようも…コリコリ素晴らしい！いいねえ！オッパイに執着しながらも、俺は彩に更なる上達を求めようとした。

「彩、ちよつと自分で動いてみる？」

「フツ、ウワワアアア…へ？ 動く？」

夢中で、タケルが作る緩かな振動と微弱な突き上げに体を預けていた私。タケルの声で起こされ、その要望に、一瞬、困惑したけど、すぐに冒険心が芽生えた。

「自分で…上下…出来る？」

「う、うん」

オッパイから離れた両手を、タケルは私の両手と組み合わせた。

「まずは…こうやった方が動き易いよ」

「だね…」

「俺の両手を押し込むように体を浮かせるんだ」

また汗が出てきた。

「わ、分かった…」

ゆっくり腰を上げると、眉間に皺が寄った。うわわわ、ぬ、抜けてくー。タケルの固いものが引き抜かれる時は、膣内部の肉が全て外に出されるような感覚が起こる。どうあああ、入ってくー。そして、それが押し込まれる時は、出された肉を全て膣内部に戻されるような感覚が生じる。な、何とも言えないよ。これ…。思い切つて結合部にズシッと体重を掛ける。私の一番奥にタケルの先端が到達し、コリツとした痛感が内部に走った。イッテ！ 何だコレ？ 何か、奥の方が狭まってない？ 声には出なかったけど、腕にビクッ

と力が入る。私は頑張つて、「抜く」「入れる」「コリ」「痛」の順でゆっくりと六回繰り返した。まだまだ出来る！ い、痛さなんて、か、関係ない…。組まれた両手を解いて上半身を起こしたタケルは自分の体を私の体に密着させてくれた。私達は結合したまま座つて抱き合う姿勢になった。あつたかい…。私は夢中でタケルの唇に吸い付き、タケルの頭に両腕を回した。ヨシ！ 休憩終わり。動くよ。タケルを満足させたい。

「ウツクウウアクウウ…」

座つたまま上下に腰を振っていると、タケルは私の腰に両腕を回し私の運動を止めた。

もう、限界だ。止めさせないと負けず嫌いの彩は延々とやり続けちまう。俺は、苦悶の表情を浮かべていた彩が無理して動いていたのを分かっていた。「止めていいよ…」って言ったら、彩の性格上、彩が意地になるの分かっていたから、俺は出来るだけ穏和に彩を止めた。よく頑張つたよ。後は、俺に任せろ。

「愛してる。」

「愛してるよ。タケル」

私は、また激しく舌を絡め、タケルの髪を撫で回す。タケルは私が無理していると分かつて止めてくれたんだ。優しいタケル。タケルは小刻みに私を突き上げ始める。舌を絡めたままだったけど、私

は、鼻息混じりの声を漏らす。

「うっうっうっうっふっうっうっ」

何故か、その断続運動の中で、奥の痛みが和らぎ、痛さよりも熱さが充満し、その熱によって作られる絶頂が私の子宮内に形成されようとしていた。

「アーウツアーツ！タケルーツ！ウウアアアツ！」

タケルの突き上げが激しくなる。バランスを取る為に唇を外した私。タケルの頭をより強く抱き締め、耳元で張り上げられるだけの声でその愛情に応えた。

「アーツアアウアーツ！！」

大きく突き上げたタケル。弓なりになった私に覆い被さる。タケルが上に、私が下になる普通の体位に戻る。

「き、気持ちいい…。タケル。も、もっとして！」

初めて、私はタケルに恥ずかしい要望をした。体位は変わっても、激しく熱い出し入れ運動。私の要望通りに継続してくれたタケルは、更に、私のクリを刺激する。

こ、これは、効きすぎるっ！

「イイ、アアアアアア、イイーツ！」

膣とクリ。同時に刺激される私は頭を上げ、タケルの指の動きを見ながら遠慮のない声を轟かせた。

「タ、タケルッ！ き、気持ち、気持ち、イイイアアアッ！」

空いた左手で私のオツパイを揉むタケルは、時折、私に覆い被さり、乳首を吸い込み、転がしている。限界に近づく子宮から絶頂が噴火しそうに…。

「ウー、アア、ウツ、アアアア、ウー、アアアアアッ！」

頭がベッドに埋もれる。グチャグチャと、タケルの固いものが激しく私の膣内を乱す。そして、タケルの指によるクリへの刺激が速度強度共にアップされ、極自然に私の両脚は攣られる程、Mの字に開かされ、その中心から広がる止めどない刺激が全身に波打った。

「もう限界！ タケルッ、ダメッ！ で、出るっ！ アッ！」

胸の中の酸素が詰まりそうになる。

「彩、一緒にいつ、いこっ！」

タケルの声が出たよう…。タケルが私に覆い被さり、さらに激しく私の中で動き続けた。

「タケルッ！ あー、愛してるっ！ イーッ！」

「お、俺もいく！ 出すよっ、彩！ あ、愛してるっ！ アーッ！」

何かの固まりが、私の中から放出された。同時にタケルの分身が私に注入された。

ドクドクドクドク…

出して、出してきてる。タケル……。タケルが私の中に愛情を出してくれてる。ゆっくりと正常を取り戻そうとする二人の呼吸。お尻の穴に蔦っていた二人の混合液を、私は薄れる意識の中で感じていた。

「雄二から聞いたよ。俺達の事」

風が止むのを待って、俺は美紀に言った。

「その告白ね。お兄ちゃん」

髪を押さえた美紀。綺麗な無表情。

「悪いが……。今更、兄貴面なんてできねえよ。そんな事より大事な話がある」

一瞬、俯いたように見えた美紀。美紀は俺に何を言われるか、感づいてる。

「雄二に惚れてるなら、雄二の親友として言う。アイツらとはもう会うな」

完全に美紀は俯いた。

「もう分かってんだ。ボックスの偽名会員カード、厚化粧、待ち人雄二の事が心配でなあ。おまえには悪いが色々調べさせて貰った」

言葉に詰まり掛けた。俺は溜息をして気持ちを落ち着かせる。

「こつ俺が言っても…。おまえがアイツらと切れない理由も分かってる。ゲスもいいとこの奴らだ」

裏庭に視線を流した美紀は目に涙を溜めていた。

「俺が何とかする。雄二には…この事は言つてねえ。言える訳がねえ。美紀…おまえはジツとしてればいい。雄二と一緒にジツとしてる。俺がアイツらとカタをつける。いいか？俺を信じる」

美紀は上を向いて鼻水を啜り、頬に涙を薦わせた。

「妹が、妹が、ウリしてるなんて学校中に知れたら…あんだどうなの？これ以上、あんに迷惑掛けなくなかった。だから、私は我慢したんだ。元々、弱い私が撒いた種だから」

そして、美紀はボロボロになった。やっぱり、美紀は俺の事を連中に話したんだ。それで、連中は俺を脅しのネタに…。美紀との距離を詰める。美紀に手が届く距離にまで近寄った俺はポケットからハンカチを取り出し、差し出したけど、美紀は俺から顔を背け、受け取らない。

「迷惑？俺から親父を奪ったと思つて…おまえはずっと俺に後ろめたい気持ちでいたんだろ？なら、もう何も心配するな。俺は親父の事は何とも思つちやない。そんな大人の事情に振り回されて堪るかつての。俺にとって大事なのは…おまえとの兄妹としての肉親関係より、友達としての仲間関係だ。今日から俺を兄貴なんて思うな。んな事思つから…俺に気兼ねするんだ。今日から俺を仲間と思

えよ。なら、親父や兄貴にも相談出来ない事も何の気兼ねもなく…何の遠慮もなく…相談できるんだよ。助け合えるんだよ」

美紀は青白い涙顔を上げ、俺を見てくれた。少し疲れた俺はまた息を整える。

「ゆ、雄二が…おまえを好きになる理由が分かった。その綺麗な顔を見たら…その素直な涙見たら…誰だって、おまえを助けたくなる。もう涙見せるの躊躇うな」

そつと美紀の涙を拭くと、美紀は静かにハンカチを受け取った。

「タ、タケル…。わ、私、誰もいなかった。お父さんにも…兄貴にも…ズツと遠慮して相談できなかった。怖かった。やっと、やっと、私の声を聞いてくれる人に…雄二に出会った時は…もう遅かった。汚れきった私だから。だ、だから、だから…」

美紀の声はもう出なかつたけど、美紀の気持ちは分かった。

「美紀はもう生まれ変わったんだ。もう汚れてない。雄二には…何も言う必要ない。俺が仲間として美紀を連中から救い出す。美紀は雄二と幸せになる事だけ考えてる。ジツとしてる。俺を信用しろ。兄貴じゃなく仲間の俺を信用しろ」

「タ、タケル…。もつと早く、タケルに…私…」

「誰にだって間違いはある。間違った時には…仲間に頼ればいい。今は仲間の俺に頼れ。俺は絶対に美紀を助ける」

「夕、タケル…」

美紀は俺の胸になだれ込み、堪え続け、押し込み続け、溜め続けた涙を流した。大丈夫だ。大丈夫だから安心ろ…。全ての涙を流し切り、俺の胸から離れた美紀。微弱になった風の中で、潤んだ瞳で微笑む。俺の唇に自分の唇を合わせた。エッ！？　な、バカな！　一瞬を避けられなかった俺。終わった後に美紀から顔を背けるしかない。

「お、おまえ！　何すんだよ！？」

「照れてんの？」

天然か？　こいつ。もう女ってやつは、何で泣いた直後に、いつも突拍子もない事しやがるんだ？

「な、訳ねえだろ！　ビックリしただけだよ」

「照れてんだ？　お兄ちゃん」

美紀は後ろで両手を結び、俺の前に回り込んだ。睫毛に涙溜めながら、キョトンとした笑顔止めるっての。

「だ、だからあ。俺とおまえは…」

「わ、分かってるって。友達でしょ？　友達になる前に…一回でいいからお兄ちゃんとチューしたかったの。それに…お兄ちゃんの優しい目ってマジ素敵で…」

「はい？」

「やっぱ、こいつ、天然入ってるわ。」

「わ、訳分かんねえ」

「タケル…。ほかにキョウダイは？」

ポケットに両手を突っ込み俯いた俺の顔を覗き込む美紀。俺は慌てて顔を上げる。

「姉貴が一人」

「子供の時に、お姉ちゃんとキスした事ない？」

何、聞きやがんだ？

「ああ、大昔。チビの時にならあるよ」

「ならあ…お姉ちゃんただけズルイじゃん」

「はい？」

「お姉ちゃんただけチューして、妹とはチューなしなんてさあ…。不公平じゃん」

唇尖らすなよ！ 彩と一緒にじゃねえか！

「あのかなあ…。俺ら幾つだ？ チューできるような歳かよ？」

「だ、だから…こ、これが最初で最後の兄妹チュー。後は友達同士」

でいいじゃん」

美紀は俺のジャケットの胸ポケットにハンカチを突っ込んだ。初めて聞いたよ。兄妹チューなんてフレーズ。

「わ、分かってくれたならいいよ。さっき言った事も分かってくれよ。美紀は…雄二と一緒にジツとしてる。後は…」

「タケルに任せるよ」

俯いた美紀は少し間を空けて、スツと俺を見上げた。

「じゃあ…行くね。タケル」

「雄二の奴。まだ教室にいるよ。美紀を連れて来るって雄二と約束したからな。ドキドキしながら待ってると思う」

美紀は足を止め、俺に振り向いた。

「野郎と一緒に帰ってやれよ」

また俯き、微笑む美紀。雄二には勿体ねえなあ。

「男の子と一緒に帰るのなんて生まれて初めて。タケルに告られたけど…彩に悪いから振ってやったって雄二に言っとくよ」

「早く行け」

笑顔で手を振り、美紀は走り去った。

「大丈夫。大丈夫だ。大丈夫…」

美紀の背中を眺め、俺は何度も呟く。

「タケル…。話あるんだ」

その日、最初のエッチの後、シャワーだけじゃなくバスタブにお湯を張ってタケルと浸かった。バスタブの中で、タケルの胸を背もたれにして身を委ねた私。時々、私の胸元や鎖骨辺りにタケルがお湯を手で掬って掛けてくれた。

「どうした？ 赤ちゃんでもできた？」

クスッと私が笑う。お湯を掬う手を止めたタケルは私の耳たぶに唇を着け、オッパイに腕を回す。

「違うよう…」

「じゃあ…何？」

囁いたタケルは私の耳の中に舌を挿入。

「ウ…」

いけないっ！ 一瞬、感じて変な声が出た。お湯とタケルの体温

が私を普段より敏感にさせる。

「タ、タケルのお母さんに…会っていい？」

タケルの唇が耳から離れた。

「お袋に？　なんでまた？」

バスタブの中で、上半身を捻り、クルツと全身を半転させて重なり合う。私はオツパイをタケルに密着させ、その綺麗な瞳を見詰めた。

「だって…私、お母さんが留守ん時に、こうやって家にながらせてもらって、お風呂使わせて貰って。で、タケルと…。色々とお世話になってるでしょ？　だから…挨拶したいんだ。お母さんに」

「彩の気持ちは分かるけど…。お袋ねえ…」

タケルは手で顔を拭いた。

「そ、そりゃ、露骨に、『タケルと一緒に風呂入ります』とか、『エッチしてます』何て、言わないよ。ただ、母さんにタケルの彼女として認めて貰いたいだけだよ。それに…」

口の上までお湯に浸け、タケルを見上げた。

「それに？」

当然、タケルは尋ねる。ブクブクした私は、口をお湯から上げる。

「あ、あのさあ…。昨日、タケルと初エッチしてた時、自分でも分らないんだけど…お母さんの気持ちになったんだ」

「はい？」

無理もない。タケルは目を見開く。

「マジ、よく分かんねえよ。それ」

そりゃ、そうだよねえ。私は目の下までお湯に浸かる。私もよく分からなかったけど、でも、あの時、確かに母性を感じた。私はブクブクしながらタケルに誤解がないように説明しようと考えていた。

「お袋の気持ち？ 愛し合ってる時に？ と言っただそれ？」

タケルも私の心理を探っているようだった。そっかあ！ と叫ぶと同時にバスタブから飛沫が上がり、シャボンとバスルームに水音が響く。タケルが言った「愛し合ってる…」に答えを見出だした私はオッパイの下までお湯から上がった。

「そう、その愛し合うだよ。私はタケルの事…世界で一番愛してるよ。で、タケルのお母さんもタケルの事…世界で一番愛してると思うんだ。多分、タケルと愛し合ってる時に…私が自然にまだ会った事ないタケルのお母さんと共感したんだよ。何か、それで…お母さんの気持ちになったと思う。それに…」

「それに？」

私は顔をタケルに近付ける。再び、私のオッパイがタケルに密着。

「あの…タケルが私の…その…」

言いつらい。

「その…なんだよ？」

タケルは私の濡れた前髪を指で梳かす。

「だから…私がいつちやった時に…タケル、ゴクゴクやつちやった。そりゃ、タケルの彼女として、大切な息子さんにお尻丸出しにして変なもん飲ませちゃって、すいませんって…。普通、お母さんに思うだろ？」

タケルが震え、明らかに笑いを堪えている。

「そ、それ普通かあ？ 別に気にすることはないんじゃないかねえの？ お、俺が…勝手に飲んだんだから」

最後の方は笑い声になっていたけど、私は気にならなかった。

「で、でも…。将来…私の息子が得体の知れない女にそんなもの飲まされたら…。いくら勝手だって言っても、その女を恨むよ」

体を強くタケルに押し付ける。

「だから、私は…タケルのお母さんに対して…得体の知れない女になりたくないっての。ちゃんと筋通したいんだよ。タケルの彼女として。い、いいでしょ？ お願い！ お母さんに会わせて」

私は無心でタケルに迫る。

「お願いだから…。私、私、マジだから…。ね、タケル…」

私の体に圧迫されバスタブの中で行き場所がなくなったタケル。キユツキユツとバスタブを競り上がり、バスタブの縁に腰を掛けた。私の眼前にタケルの…が、ぶら下がったけど、気にならない。

「わ、分かった！ 分かったよ！ 会わせるよ。お袋に。でも…」

「でも…何？」

「その、お袋に俺が…彩のを飲んだって…言うなよ」

タケルが顔を横に向けた。

「言うわけねーだろかあ！ んな恥ずかしい事。ただ、お母さんと会って、『初めまして、タケル君とお付き合いさせてもらってます』って挨拶して、『すいません。変なもん飲ませちゃいました』って、心の中で謝りたいだけだよ。タケルの彼女として」

タケルが、少しホツとした表情になる。

「分かったよ。彩」

湯気の中に、タケルの笑顔が浮かんだ。会える！ タケルのお母さんに。

「あ、それと」

思い出したようにタケルが言った。

「それと？」

「お、俺：自分の彼女をお袋に紹介したことないんだよね。彩が：初めてだから。緊張するよ」

視線をやや泳がせ、天井に顔を上げたタケルに、バスタブから飛び上がった私は抱き着いた。

「私が初めてなんだ！？ やつとやつとタケルの一番最初になれる！」

私は夢中でタケルの唇を吸う。

「俺にとつちや、心も体も全てさらけ出す事が出来る一番最初の女が彩さ。一番愛せる存在だよ。だから、何もかも、彩が一番最初。今までのも、これからも、彩を一番愛してる」

また泣かせる事言うつから。

「私も：私もタケルを一番愛してる。命懸けで愛してる。タケルしかないよ」

本当に離れないから。離れる時は死ぬ時だよ。静かに、唇と舌をはなしたタケルが囁く。

「で…」

「な、何？」

「で、彩は…いつ俺に彩のお父さんとお母さんを会わせてくれるの？」

「さっ！ お昼つくんなきゃ！ 先出るねー」

「ずりい！ おめえ！」

私の背中に、お湯が弾かれた。

怒涛

グラウンドは無惨な沼地状態。並木の枝葉は風に吹き乱され、重たい風の音が教室を揺らして。あいつら大丈夫か？ 折られそうな相合い傘。校門を出たタケルと彩が見えた。グラウンドフェンス沿いの坂道は飛沫まみれ。二人が止まった。ん？ おい、勘弁してくれよ。こんな豪雨の中で…また喧嘩かよ？ あ、ああ、傘までぶっ飛んじまって。しょうが…え？ 何だよ、あいつら？ 抱き合っただがる、もう、マジ勘弁だよ。ポケットに両手を突っ込んだ呆れ笑いが窓を曇らせた。勝手にしろ！

「タケルと彩。仲良いいなあ…。いつも感心するよ」

俺と同じ事を思っ二人を眺めていたのだろう。由美も窓を曇らせていた。

「私が言った通りでしょ？ 引っ付いたら離れないよ。あの二人は」

苦笑いを残して、由美は窓から離れる。

「由美とタケルって…似てるよな」

振り向きざまに、俺は手摺りに背中を付けた。

「そおう？ 似てるかな？」

「自分のこと後に回しても…俺らのこと考える所が」

また苦笑いの由美。少しだけ、顔を天井に向ける。

「私はタケルみたいに何でも受け止める事できない。かと言って、彩みたいに切替早くない。中途半場な私は上手く生きられないだけ」
上手く生きられないかあ…。俺はどうなんだろ？

「由美。美紀の事…どう思う？」

「思ったより明るくて面白い子だよ。いきなり雄二の教室入って来て、『私のダーリン貰ってくね！』って、彩と私から雄二奪って行くんだもん。大笑いだよ。あれから、タケルが教室に戻って来て、『あの子、相当、天然入ってるぜ』ってさ。昨日、一緒にお弁当食べて…。雄二の事、色々聞かれたよ。どれ喋っていいのか、悪いのか、彩も私も困ってた」

「そ、そりゃどうも…ご迷惑お掛けました」

顔をピクつかせ、頭を撫でた。

美紀の事実は絶対、雄二に言えない。

「一昨日、美紀と初めて一緒に帰った時…。美紀から聞いたんだけどさ。俺、腹抱えて爆笑したよ。そりゃ、タケルに『天然』って言われるよ。兄妹チューの話」

何それ？ 眉間に皺を寄せ、口をポカーン。意味が分からない。思わず、私は変顔を作ってしまう。

「きよ、兄妹チユー？」

「べ、弁当の時は彩いるから、み、美紀も、流石に、そのネタは話せねえよな。タケルが、一昨日、体育館の裏で美紀と今後について話した時。その時、タケルと友達になる前に、美紀はどうしても『兄貴のタケル』にキスしたかったんだって。昔々、タケルがまだちっちゃい時、タケルの姉ちゃんがタケルにキスした事あるのに、妹の私がお兄ちゃんに一回もキスなしなんて不公平だってさ。で、タケルの不意突いて軽くキスしたらしいよ」

堪らず、一拍してウケる。

「ハッ！ ハハハハ…。何それ？ 意味分かんないよ！ キャハハハハ…。センスあり過ぎだよ！ 美紀」

私は体をくの字に曲げた。

「そ、それで…雄二はOKな訳？」

雄二も笑ってた。

「OKも何も、モトモトあいつら兄妹なんだしさ。それに、最初で最後だって美紀も言ってたから。んな事より、その時のタケルの顔。想像してみるよ」

笑い混じりの雄二の仄めかしに、私は、そのタケルの顔を想像してしまい、再び、吹き出す。

「バツ！ ハハッ！ それ傑作じゃん！ タケルの奴、ハンパなく動揺した顔してたよ。きつと」

目尻に滲んだ涙を、指で拭き取る。

「だろ？ 俺も帰り道、想像して大爆笑したよ。あ、でもこれ…彩には絶対、これな」

雄二が唇に人差し指を当てた。

「わ、分かってるよ。彩みたいなヤキモチ焼きに兄妹チューなんて通じないよ」

「本当、タケルのお陰で何の気兼ねもなく美紀と付き合っただけだよ」

私の笑いは、ゆっくりと止まった。

「雄二…。大事にしろよ」

雄二は照れ臭さそうに自分の頭を撫でて頷いた。

「美紀と…一緒に帰ってる時に気付いたんだ」

ドキッとして雄二の顔を見上げた。ま、まかさ、雄二がああに気付いた？

「時々…美紀が寂しい顔するんだよ。何か抜けたような顔するんだよ。どうしたのって聞いても、何でもないよって背中叩かれて終わるけどさ」

詳しい事まで、雄二は気付いてない。

「まあ、元々、淋しがり屋な子だからさ。俺が美紀を元気付けられるように頑張るよ」

雄二、タケルに任せておけば美紀は大丈夫だから。

「あ、由美…。お願いがあ…」

分かってるよ。

「傘だろ？ もう、その役も終わりそうだからね。シミジミ入れてやるよ」

雄二が私から目を背け、窓の外を見た。

「今日は…その…送って欲しい所があるんだけど…」

首を捻る私。

「送って欲しい所？」

「今日、美紀休みだったろ？ だから…美紀の家にお見舞い行こうと思っただよ。結構近いんだよ。だから、由美も美紀ん家寄ってけよ。美紀も喜ぶからさ」

はいはい。

「んな、幸せカップル眺めて、私は何してたらいいんだよ！？ お邪魔なだけじゃん。いいよ、今日で最後だからね。あんたのタクシ―になっちゃうよ」

自分の机に向かって歩き出した私を、雄二が追って来た。

「い、いや、そんなタクシーなんて…」

「ほら、行くよ!」

机から鞆を取り上げた。このまま、雄二と美紀の幸せが続きますように。タケル…。お願い。

「ひでえ雨だなあ」

フェンス越しにぼやけて浮かぶ校舎を、俺と彩は同じ傘の中で眺めていた。傘を叩く強い雨。まだ夕方なのに、もうヘッドライトを点した車が一台、薄暗い坂道を登って来た。その車が通り過ぎる。水飛沫混じりの突風に、傘を奪われそうになった。止みそうにならない雫に焦点を移す俺。今日が過ぎてく…。

「私…。タケルの彼女で、タケルの親友だよ」

学校から出てから、何も語らなくなった彩が漸く口を開いた。立ち止まり、彩と見詰め合う。堪らず、俯いた瞬間、彩が俺の胸に飛び込む。傘が飛び、俺はフェンスに押し込まれる。俺達二人は激しい雨の中に放り出された。ズブ濡れの髪も気にせず、唇を震わせ、顔を上げた彩。雨によるものでない潤んだ瞳を俺に向ける。

「彩…。帰る」

俺の胸から離れた彩は精一杯の笑顔を作った。

「うん！ 制服びしょびしょだから乾かさないとね」

傘を拾い上げる彩。

「早く入んなよ！ 風邪引くよ」

マジ、彩には敵わない…。

雨音に合わせた彩の鼻歌を聞きながら、俺は家に着くまで終始無言。傘からはみ出た肩と腕は雨に打たれ続け、鞆が重たい。

「ふうー！ 酷いね！ これ」

家に入り、急いで鞆からハンカチを取り出した彩は濡れた髪のまま俺の顔を拭き始め、湿った睫毛の奥で僅かに瞳を震わせる。完全に俺の負けだよ。彩の濡れた唇を塞いだ俺。彩を玄関に押し倒し、激しく彩の唾液と舌を求めた。ズブ濡れの彩は俺の衝動を受け入れ、舌を絡み返す。そして、雨を吸いきつっていた俺のジャケットに両腕を回した。俺の唇が、まだ雫を残す彩の首筋に這う。

「タケル…」

俺の耳元で囁く彩。俺の髪を狂おしく掻き乱し、生々しく両脚を開いた。雨の匂いが染み込む彩の制服のブレザーを剥ぎ取ると、俺も邪魔になつたジャケットを脱ぎ捨てる。胸元が透けた彩のブラウ

ス。悩ましい…。完全に理性の制御を失った俺は彩に舌を絡めながら、そのボタンを野蛮に外す。彩も俺のシャツのボタンを急いで外し始めた。

「愛してる…。彩」

「タケル…。愛してる」

雨音に包まれてる。

互いのボタンを最後まで外し終わり、俺は彩のブラウスを開け、湿った自分のシャツとインナーを脱ぎ捨てると、すぐに、彩の背中に手を回し、ブラのホックを外した。タイト感を失ったブラ。ヨシ！ そのまま捲り上げる。彩の胸を掴んだ俺は、既に膠着した乳首を摘み上げて吸い付いた。

「タケル…タケル…」

喘ぐ彩。俺の頭を熱く包む。彩の乳首に吸い付いたまま、チエツクのスカートに手を突っ込んだ俺はパンティーを彩の足元まで素早く引き下ろした。乳首から唇を外し、彩の靴に引っ掛かっていたパンティーを強引に引き抜く。彩、綺麗だ…。ベルトを外し、ズボンとトランクスを太股辺りまで下げた俺は彩の乳首に戻った。

「来て…。タケル…」

暫く、彩の乳首を転がす。俺は上体をやや起こして中途半端なズボンとトランクスを靴と一緒に蹴り脱ぎ、剥き出しのペニスを握る。

「行くぞ！ 彩」

俺を見詰め、彩が頷く。俺を受け入れる為に十分に潤っていた彩の膣口に亀頭を合わせる。彩！ 一気に彩の子宮口にまでペニスを突入させた。

「アウツ！」

叫びと同時に彩は俺を抱く。あつたかい…。彩に突き入れたペニスから彩の体温が冷たい俺の体に伝導している。

「ハーツ、アツ！ ハーツ、アツ！ ハーツ、アツ！」

深みと温かみを堪能しよう。俺は高速にペニスを出し入れするのではなく、一旦、亀頭を彩の膣口付近まで引き、一気に強く子宮口まで先端部を貫かせる。所謂、「断続的な速さ」よりも「刺激的な強さ」を醸し出す運動を繰り返した。

「タツ、ハーツ、タケルツ！ あー、いしてるっ！」

「あつ、愛してー、るっよ！ 彩ああ…」

俺の「静かな抜き」と「轟く突き」に合わせ、彩は頭と顎を上下に揺らす。その視線は、ぶれずに俺を捕らえ、背中に回した両腕を更に絞る。

「彩…」

徐々に俺の運動は「断続的な速さ」を求めた。そろそろ、早打ちだ！ 彩は次第に爪を俺の背中に立て出てる。しかし、そんな痛さより、その快感が神経に伝わっていた俺は更に運動スピードを速めた。

「アッアッアッアッ、アアアアア…」

彩の声の間隔が短くなり、激しい揺れと狂った突きの中で、叫びは、その頂点に達した。

「ウツ、アアーツ!!」

同時に、俺の先端部は彩の最深部で停止。

「ウツ！」

小さく俺の声が漏れてしまうと、その爆発が起こった。で、ててる…。彩の中に…。ドクドク出てる…。あつたかい。溶けそうだ…。

「ハアツ！ ハアー、ハア、アア、ア…」

彩の腔内で、徐々に精液の放出が止むにつれて彩の声がフェイドする。そして、全てを出し尽くした俺は、ゆっくりと彩の上に堕ちた。精気を切らし、震えるだけだった俺を彩は優しく包み、柔らかく髪を撫でてくれた。もう、死んだ…。耳元で騒ぐ彩の呼吸の向こう。俺は少し弱まった雨音を聞いていた。

「テストどうだった？」

高一の最後のテストを終えた私は偶然とは言い難い計算で、タケルと下足場で会い、一緒に校門を出た。

「ぼちぼちってとこかな。あ、そうだ」

坂道で足を止めたタケル。何かをポケットから取り出し、私に渡す。

え？ 何？ 手紙？ 一瞬、顔が綻んだ。

「春休みオープンする水族館のチケット」

何で二枚あるの？ 私と一緒に行くって？ 完全に笑顔になり、チケットを受け取る。タケルが歩き始めた。

「彼氏と行けよ」

はあ？ 完全に私の笑顔は消え去る。

「テスト前にノート借りたる。そのお礼だよ。いつもマックとかフアミレスだしよ。味気ねえと思ってさ。今回は奮発したよ」

あの噂信じてんのかよ？ へー！ 勝手に信じてるよ。私はチケットを鞆に入れた。

「ありがと。彼氏と行かせて貰うよ」

暫く、私達は無言で歩いた。

「じゃ、俺、今日、バイト直行だから」

私から離れたタケルは丁字路を曲がり、坂道を下りて行った。

あんな噂……。噂だけに決まってんじゃん。相手が勝手に入れ込んでただけだよ。それが何か変な噂になってるだけだよ。夕日に染まるタケルの背中を眺めてるだけで、何も出来ず、何も言えなかった。もう終わりかな？

涙を拭いた後、私は丁字路を通り過ぎ、暫く歩いた。

ダメ、我慢できない！ 足を止めて振り返った私は全速力で丁字路に戻る。

タケル！

丁字路。タケルの背中は、もう夕日の中に消えて無くなっていた。やっぱり……。絶対諦めないから。何とかなるんだから。

また涙が零れる。

仕方ねえよ。俺は、俺で。

少し勇気を出して、振り返る。けど、彩の姿は無かった。「私、わがままな人って、だいつきらい！」この前、喧嘩した時に彩が俺に言った台詞が……。胸の中に響いてて、考えても仕方ないけど、考えってしまう。

彩だから……。

溜息と一緒に、俺は少し速く坂道を下って行った。

「メール来ないね」

部屋のベッドの上、仰向けに携帯を弄る私。タケルからのメールを待った。

「メール来ないや」

バイト帰り。白い息を吹き付け、携帯を閉じた。
頬に雫が当たった。

部屋の窓に、雨が蔭り始めた。

暫くの虚無感の後、彩に気遣いながら体を横に転がした俺は天井を仰ぎ、後ろ手を付き体を起こそうとする。え？ 何？ 目眩がし、何かに胸を押さえ込まれ、床に墮ちそうになる。ヤベツ！ 何とか後ろ手に力を入れて支えけど、耐えられず、ゆっくりと体が沈んでいく。俺の異変に気付いた彩が慌てて起き上がり、身を寄せて俺を支えてくれた。

「タ、タケル！ 気分でも悪いの？」

俺は情けなくも彩に体をもたれさせた。

「大丈夫。ちょっと…疲れただけ。もう大丈夫」

覚束ないながらも、俺は斜めになった上半身を起こし、立ち上が

ろうつとする。

「タケル、じつとしてな」

彩は開けたブラウスをサッと閉じ、靴を脱いでキッチンに駆け出す。

マジ、くらくらしてる。情けねえ…。片膝をつき、首を摩りながら瞼を固く閉じていると、彩がキッチンから帰ってきた。

「飲んで…」

水が入ったグラスを俺に差し出す彩。

助かった…。その水を一気に飲み干した。

「マジ、大丈夫かあ？」彩は俺の背中を挿すりながら俺の顔を覗き込んだ。

「うん、落ち着いた。ゴメンな」

「エッチした後こんなになるなんてよ。なっさけねえよ」

指で彩の前髪を梳いながら言った。

「気にすんなって！初めてだね？こんなエッチさあ。ビックリしたけど…。でも、何か嬉しかったよ。タケルと雨ん中歩いてる時から…。私も、すっごくタケルとしたかったからさ」

彩が俺の肩にもたれ掛かる。溜息と一緒に笑い、健気な彩の髪を撫でた。

「タケルの家に来るまで…。今夜の事、心配してた。ダメだね？
まだまだね？ 私。タケルが大丈夫だって言ってたから、タケル
の事もっと信用しないと」

いつもの明るい笑顔で俺のおどけに付き合っても、すぐに黙り込
む彩。三日前の夜からその雰囲気の変化を読み取っていたけど、俺
は何も彩に言えなかった。

「今夜は…ちょっと話してくるだけさ。マジ、大丈夫だから。心配
すんなよ」

「分かってる。待ってるから…私」

雨音が…また小さくなった。

「一緒にシャワー浴びよっか？ ちょっと熱めのシャワー。私、一
生懸命、タケルを洗ってあげたい」

もう雨に流せない涙を堪える彩。微弱な震えを肩に感じていた。

「彩…」

俺の肩が軽くなる。

「何？」

「エッチの後…愛してるって言うの忘れてた」

「忘れてんな！ んなこと！」

俺の背中にいい音が響いた。泣いたと思ったたら怒るし…。まるで、女は分かん。

「これ…返すね」

朝からそのタイミングを逸していた私はタケルが食堂から戻ったのを見計らい、隣のタケルの机の上に水族館のチケットを置いた。

「何だよ？ 彼氏と行きゃいいじゃん」

タケルは両手をポケットに突っ込んだまま。

「あんたが誰か誘って行けばいいじゃん。ノートのお礼ならもっと他のモン頂戴」

溜息をついたタケルから、私は腕組みして視線を逸らす。

「とにかく…チケットいらないから」

何で、私は可愛くなれないの？ 「なんなら、一緒に行こうっか？」。簡単な一言が言えない。

「そうかよ」

タケルは机のチケットをサッと取り去る。あ！ チケットをポケ

ツトに突っ込んで教室から逃げるように出て行った。あーあ。残された私はまた自分の言動を後悔するだけ。

午後の授業が始まって、隣のタケルが気になって仕方ない。気が付かれないように横目でチラチラとタケルを見ていた。理由はどうであれ、せつかくチケツトくれたのに…あの返し方はキツかったよねえ。無言で反省していたら、私に振り向き、微笑んだタケルに気付いた。何よ？

午後の授業が終わり、鞆を肩に掛け、帰ろうとするタケルに私は近付いた。

「何？ あの笑い」

「ああ、単なる思い出し笑い」

「いつやらしい男！ 何、思い出してたのよ？」

タケルが肩から鞆を下ろした。

「別に…大したこっちゃ…」

そう言われると、気になって仕方ない。

「言いなさいよ！」

私から視線を反らし、タケルは頭を掻く。

「いや…おまえと初めて会った日も…こんな雨の日だったなって。思い出して、おまえの顔見たら、何か笑っちゃった。下らねえだろ？」

いつの間にか…雨が降ってた。私は背伸びして、タケルの肩越しに窓の外を見る。

「覚えてたんだ？」

「お、覚えてるよ。中三の時、塾の帰りにおまえが傘に入れてくれたの」

俯いて、クスッと笑う。

「で…頼みがあつてさ」

もう分かったた。

「傘、持って来てねえんだろ？」

「あ、当たり前」

タケルと私に笑顔が戻った。

「じゃ、また私の家まで入れてってやるよ」

「サンキュー。明日、ちゃんと傘返すからさ」

私は鞆を取り上げ、折り畳み傘を取り出した。

「じゃ、帰ろ」

「由美い……」

「はいはい、あんたも傘だろ？」

私と雄二は、「ああなつたら、暫く、ほって置いた方がいいよ」。教室の隅から彩とタケルを眺めていた。

「私の幸せアイテムだから……」。いつも折り畳み傘を鞆に入れていた彩に習って、「いつか素敵な人を私の傘に入れてあげよ」私も折り畳み傘を鞆に入れるようになった。

「私の幸せって……いつ来るんだよ？」

小さく嘆く私。

「幸せ？ 俺が幸せなんていくらでも運んで来てあげるじゃん！」

いつも幸せな雄二が私に擦り寄る。

あー！ もういいや！

「はいはい、帰る帰る」

二人でシャワーを浴びた後、タケルの部屋に上がり、濡れた制服とバスルームで洗った下着をカーテンレールに干そうとした。私は慎重にローラー付きの椅子に乗る。

「下でちゃんと押さえといてね。で……ハンガーに掛けた服一枚づつ

渡し…」

「彩…。アソコ丸見えなんだけど…」

バスタオルを胸に巻いたままだった私は割と冷静にカタンと椅子から下りる。

「おめえ、止めろ！ コラッ！」

でも、声は冷静ではない。

「ちきしょー！ 言わなかったら良かった」

「しょうがねえ野郎だな！ おめえだけは」

バスタオルを托し上げ、私は笑った。

「上見ないで、これ渡すのってムズいってよ」

「あー！ もうー！」

諦めて椅子に乗る。

毎日のように見せてんだから…。ま、いいか。

「彩…」

「うん？」

「おめえ…。やっぱ、足綺麗だよな」

「もういいってよ！ サツサと服渡せ！」

てか、おめえにこれやらせりゃ良かったよ。

「褒めてんだからよ」

「はいはい、ありがと。はい、次」

「味気なねえなあ…」

「次、頂戴つての！」

「お尻もまた…」

「蹴り飛ばされてえのかっ！？ 次だ！」

「はいはい、そのイケてるお尻にこの可愛い…」

「ウラッ！！」

タケルが広げてた私のパンツ。すぐに引つた。笑かすよもう！ この野郎…。

何だかんだで、全て吊るし終わって椅子から降りた。タケルが机の傍から空気清浄機を吊した服の真下に移動させてスイッチを入れる。

「こっやつたら…風が当たって乾くの早いだろ」

「タケル…。頭いいねえ」

「彩が服吊してる時に、下から風当てたらもつと頭良かったんだけどな」

「やっぱ、おめえ、バカだ」

ニタニタのタケルはクローゼットに行き、中から私の着替えと見慣れないブルーの手提げ袋を取り出した。

「お疲れ！」

取り敢えず、タケルから両方受け取った。タケルのＴシャツと短パン、着替えより手提げ袋が気になる。

「何？ これ」

「開けてみるよ」

タケルの笑顔を疑視し、着替えを小脇に抱えて袋を開けた。えっ！袋の中には、新品のブラとパンティー５セットが入ってた。

「こ、これ、タケルが？」

その内の１セットを取り出す。

「まさか、お袋だよ」

「えっ！ ママがあ？」

「ほら、この間…。俺、彩の家で焼肉ご馳走なったじゃん。そのお礼だって。それだけじゃないぜ」

またクローゼットを開け、タケルが私に手招きをする。

「何？ どーしたのコレ？」

中にはタケルの服以外にワンピース、トレーナー、セーター、Tシャツ、ブラウス、キャミソール。ミニ、フレアー、プリーツスカート等が吊されていた。

「姉貴のお古だけどさあ。姉貴、着ないから彩につて。お袋が。お陰で、俺の服が窮屈になっちまったよ」

クローゼットの中を眺めながら私は茫然。タケルのお母さんが、ママが私の為に…。徐々に私の視界がぼやける。

「あー、でも、彩にも趣味があるから無理強いすんなってさ。流石に、その下着には驚いたけど。一緒に、しゃぶしゃぶ食いに行つてから…。お袋の奴、えらい彩の事気にいつちやてさ」

タケルはテーブルの上からアイステイラーの入ったグラスを取り上げ、口を付けた。私は、まだ茫然としたまま。

「これなに？ つて、お袋に聞いたらさ。お袋が、『もう彩とエッチしてんでしょ？ 男なら惚れた女に下着くらい贈つてやれ』つて、訳分かんねえ。お袋にほっぺたつねられたよ」

グラスを持ったまま、タケルはベッドの縁に背中を付け、両足を床に放り出した。

一筋、私の頬に薫う。ママ、有難うございます。私にこんな事まで…。袋を抱きしめて泣き崩れた。

「な、何だよ!? いきなり」

背中を起こしたタケルはグラスをテーブルに戻す。

「だって、嬉しいもん! ママがこんな…こんな…私に」

頭を掻き出すタケル。私は続けた。

「私は…ママからタケルを奪った敵みたいな女なのに。それなのに…それなのに…」

「いやだから、それは焼肉の…」

「ママ! ありがとう。ありがとう! ママ!」

下着が入ったビニールの袋を開ける。

「ママ、ママ、着ます! 着ます! みんな着ますう! この下着だって…」

はい? 下着を取り出した彩は泣き叫びながら立ち上がった。お、おい、ちょ、ちょ、ちょと…。バスタオルを脱ぎ捨て全裸になった彩。猛スピードでピンクとライトイエローのストライプ柄のブラとパンティーを着ける。んな、必死になんなくても…。下着を着け終わった彩は呆気に取られていた俺に四つん這いになって迫る。うわわわ…。若干引いた。

「どう？ タケル。似合う？」

「あ、ああ……」

それしか言いようがない状況。

「ママー！」

彩は俺に抱き付き、また泣き崩れる。俺、お袋じゃねえって。顔をしかめながら彩を抱き締めた。んなの、たかが下着じゃねーか。突っ込むことなんてできる訳ない。しょうがねえなあ……。

その時、テーブルの上で俺の携帯が振動し、彩が俺の胸から涙顔を上げた。

取り敢えず…嫌な予感。

放課後、校庭からブラスバンドの演奏が微かに響く校舎に入った俺は、階段を昇り、二階から三階途中の踊場に差し掛かる。

「どうだった？」

三階へ続く階段手前。踊り場の壁にもたれ、肩から鞆をぶら下げていた彩が俺に声を掛けてきた。今更？ 小さな疑問文を心中で呟いただけで、何も答えなかった俺は彩に視線も合わせず、踊り場を素通りして階段を昇る。

「タケルって！」

足を止めそうになったけど、振り返る煩わしき。俺は階段を昇り切った。

西日が斜めに差す教室には、もう誰もいない。机から鞆を取り上げた鞆を肩に掛けると、慌ただしい足音が教室に迫り、勢いよくドアが開かれた。

「何でシカトだよっ!?!」

怒鳴り込んできた彩の威勢も俺の表情を変えさせなかった。

「何でシカトされなきゃいけねえんだよっ!?!」

鞆を床に捨て、俺に迫る彩。振り切ろうとしたけど、目に涙を浮かべた彩が俺の腕を掴んで来た。なら言っただけよ!

「シカト? 最初に、そうしたのはどこのどいつだよ!?!」

「わ、私がいつシカトしたんだよ?」

彩の頬から、西日に色づく涙が落ちた。

その日の朝、いつものようにバカ話、愚痴話、噂話をケラケラとしながら仲良くタケルと登校。下足場に着き、タケルが上履きを下駄箱から引き抜くと手紙がヒラヒラと舞い落ちた。

タケルに手紙? 女から?

確かに、お互い付き合う前は…私もタケルも学校で手紙くらいは何度か貰ってた。タケルが手紙貰ったり、告られたりした時、嫉妬で燃え上がる内心を落ち着かせる為、私は無理に喧嘩をタケルに売っていた。

「あの子…。あれから、どうしたの？」

でも、ほとぼりが醒めると、いつも私から声を掛けた。

「ああ、あの子ね。興味ないから断り入れたよ」

「かわいそうに…」

「可哀相？ タイプでもねえのに無理矢理付き合えつてのかわよ？」

「モテる男はいいよね…。フラれる女の気持ちなんて考えなくていいんだからさ」

「気持ち考えてるから早めに答え出すんじゅねえか。おめえ…内心ホツとしてんじゃねえのか？」

無茶苦茶ホツとしてた。

「な、なんで私がホツとしなきゃなんない訳？ バツカじゃない！」

「俺が…彼女と学校でラブラブに過ごしてるの見たくないとかさ」

死んでも見たくない！

「言ってる！ バカ！」

また、喧嘩の繰り返し。

私は…手紙なんか貰っても興味無かったから、封を切らず机に閉まっておいて、痺れを切らした相手が、「あの…」って来た時に、「ごめん、好きな人いるから…」。手紙を返していた。

「カツコイイ奴なのに…勿体ない」

「関係ねえよ！」

タケルも私への手紙や告白を気にしていた感じ…だったかな。でも、タケルと付き合い始めて、いつもタケルと一緒に登下校をし、二人で仲良く廊下や校庭を歩き、誰がどう見ても分かるように、その「二人の事実」を公然と学校中に曝け出して以来は、誰も私達に良い結果なんて得られようがない手紙を渡したり、まして、告つて来たりなんて愚かな事をしなかった。

その時、当然、タケルと私の事実を知っていながら、タケルに手紙をよこす無謀な女を不快に感じていた。フツ！ 愚かな女だよ。でも、ここは余裕で流そ。

「へー、手紙貰うなんてタケルもモテるんだ？」

付き合う前と変わらない口調。

「んなんじゃねえだろ？」

拾い上げた手紙を裏表しながらタケルは言った。その手紙を奪い

取る。

「ほらココに名前書いてある」

勝ち誇ったように、私はツンと顎を上げた。裏側の右下隅には緑のインクで『1年C組 岩崎梓』と遠慮がちに小さく書かれていた。

「やっぱりラブレターじゃん。タケル頑張ってるねえ」

不愉快な溜息と一緒に、タケルは手紙を私から奪い、ポケットに入れ、私を置いて階段を昇っていった。

「何、あいつ？ 勝手にすれば」

タケルの背中に膨れ面を叩き付けた。

…タケル先輩の事が好きになりました。タケル先輩に素敵な彼女がいるのは知っています。でも、好きになりました。まずは、二番目から始めさせてください。放課後、校庭の花壇の前で待っています。…

授業中、机の下でこっそり広げた手紙を、周りにチラチラ目配りしながら読んだ。

二番目？ 変な女。苦笑いを傾げ、手紙を閉じる。

「マジ、行くのかよ？」

昼休みの食堂、カレーを平らげた俺はタケルに尋ねた。

「ああ、取り敢えず、来てくれって言うてんだし。デートくらいしてやってもいいんじゃないの？」

平然と答え、グラスの水を一気に飲んだタケル。俺は口を開けて
啞然。

「で、おめえ…。彩、どうするの？」

真つ当な質問だろ？

「あいつは何にも気にしちゃいねえよ。いいんじゃない」

平然とグラスの水を空けるタケル。えー！？

「でも、彩は…」

タケルはトレーへグラスを置いた。

「悪い、雄二。俺、先出るわ」

俺の言葉を途中で切ったタケルはトレーと一緒にテーブルを離れる。何で、そんなクールなんだよ？ タケルの後ろ姿が出口に消えるまで呆然と眺めていた。

付き合い出して、まだ一ヶ月も経ってないからよ。まだ二人ともしっくり来てねえみたいだな。グラスの水を一気に飲んだ俺はテーブルに目を落とした。

さっき、雄二に聞いたときや良かった。この二番目の子の事。雄二の情報網に引っ掛かってるんじゃないかねえかなあ？ 俺は目的もなく階段を降りる。

何か、釈然としねえよ。彩…。

「雄二！」

由美の声に振り向いた。

ん？ 階段で誰かの視線を感じた俺は足を止め、振り返った。見覚えのある後ろ姿。あの子…。いつか、雄二が言ってた…。

あの時…私は初めて勇気を出し、階段を降りて来たタケルに視線を送った。タケルは立ち止まってくれたのに。あの時、タケルに声を掛けていれば…。雨音を聞きながら私は涙に変わった後悔を拭き、雄二にメールを送った。

さっき、あの子、俺を見たような…。いいや、気のせいだろ。俺は気分晴らしの校庭に向かった。

彩からタケルへのラブレターの話聞いた私。タケルの行動が気になり、食堂に来た。

「で、タケルはマジ行くって?」

でも、もう雄二しかいなかった。

「うん。彩も…別に気にしちゃねえし、デートくらいしてやってもいいってさ」

頭の後ろを撫でながら、雄二は答えた。

「バツカじゃない! あいつ。彩がマジで気にしてない訳ないじゃん」

テーブルに肩肘をついて、呆れを横に向ける。

「俺もそう言おうとしたんだけどさ。タケル…出てっちまって。まあ、変に意地張ってるだけだと思っただけだよ」

たく、意地っ張りにもほどがある二人。

「彩…。本当にタケルほっとくの?」

私は食堂で雄二から聞いた事を彩に話したけど、彩は澄ました表情を変えない。

「うん、いいんじゃない。前から…私達、こんな感じだから」

彩の机に両手を置き、顔を彩に寄せた。

「ま、前まではそれで良かったかもしれないけど。今…彩はタケルの彼女だよ。そんな軽くで、いいの？ もっと、自分の気持ち、タケルにぶっちゃけなよ」

私はタケルが見かけに寄らず淋しがり屋だと知っている。

「いいよいいよ、タケルが最終的に決めれば」

顎杖をして廊下を見詰めた彩。私は溜息しかない。

放課後までに、私はタケルと廊下ですれ違ったけど…。

「タケル、ちよっと話あんだよ」

「今からウンコ」

相手にされなかった。

「シカトと一緒にだろが！ 俺が手紙貰おうが、告られようが、おめえは気にしちゃねえ！ おめえ、マジで俺と付き合ってるのねか？ 俺とマジでセックスしてるのか？ 友達の時と何にも変わっちゃねえ！ いつまで、しがみついてんだ！」

俺の腕を掴んでいた彩を振り払う。彩はバランスを崩し、傍の机に手をついた。その姿勢のまま、彩は俺を見上げる。

「気にしてるよ！　だ、だから、待ってたんだよ。マジでタケルと付き合ってるよ！　あ、遊びで…タ、タケルに処女やつれかよ！　わ、私は…自分で自分抑えてただけだよ。私、私、本気で嫉妬したら自分で自分抑えられなくなるから。そうなるのが怖かっただけだよ！」

俺を見上げる彩の潤んだ瞳。受け流ながした俺は溜息と一緒に窓の外を見た。

「おめえは…いつも遅過ぎんだよ」

「遅い？　どう言う事だよ？」

また溜息を吐き、少しだけ間を空けた。

「OKしたから。割と…俺好みの可愛い子でさ」

西日に染められた教室は、普通なら甘い囁き合いが似合う。この時ばかりは、凍りつき、沈黙が似合う空間と化した。泣き濡れた顔を、机から無言でゆっくりと起こした彩。静寂した空間に、やっとな響いた音は、彩が俺の横面を思い切り平手打ちする乾いた音。

これで、満足だろ。

何も言わず、俺は鞆を肩に掛け直し、顎から止めどない雫を落とす彩を残し教室のドアに向かう。

「しっ、死んでやるよっ!!」

はい？ 慌てて振り返ると、彩は窓に向かって走り出していた。何考えてんだ！？ 窓を開けた彩は手摺りに身を乗り出す。

「彩！」

鞆を捨てて駆け寄った俺は、間一髪、彩の腰を掴んだ。

「は、離してっ！ バカツ！ 離せっつてんだろ！」

髪と腰を振り乱し、彩は手摺りから両手を離そうとしない。

「や、止めろっ！」

俺は彩を羽交い締めし、無理矢理、手摺りから引き離そうとする。

「もっ！ もうヤダって！ はっ、離せーっ！」

彩が手摺りから両手を離した瞬間。その反動で俺達二人は床に倒れ落ちた。

「何やってんだよ！」

俺は半身を起こして怒鳴り、彩はうずくまって泣き崩れた。

「い、生きてらんねえよ！ おめえと別れて…どうやって生きていけてんだよ！？ ほ、本気で、命懸けて愛してる男と別れて…は、離れて…生きていけるかよっ！」

「だ、誰が、おめえと別れるって言った!？」

「他の女と…他の女とふざけた事されて…まともにつき合っていないか! バカッ! こ、こうなるのが怖かったから…本気で嫉妬したら…こうなるの分かってたから…」

彩の嗚咽は止まらない。もう負けた。

「嘘に決まってるだろっ! んなおまえ以上の女いるか!? 断り入れに行っただけだよ。おまえが何も気にしねえから、頭に来てただけだ。俺だって…彩の事…命懸けで愛してる。だから、ほっとかれたら頭にくんだよ! それだけだよ!」

くしゃくしゃの顔を上げ、後ろ手について足を投げ出していた俺に飛び付く彩。

「バカッ! もうっ! オシッコちびったあーっ! バカ、んの野郎…もう…あー!」

俺の胸を何発も殴り、泣きじゃくる彩を俺はただ強く抱き締めた。

「俺が…彩を離す訳ねえだろ。彩が死んだら…俺も死ぬよ」

俺の胸を叩き終わった彩は、まだ息継ぎもままならない嗚咽を繰り返し、とても話せる状態じゃない。

西日に乗った風が俺と彩を冷やしていた。

ジャージに着替えた私とタケルは床にモップ掛けしていた。

「お互い、体育があつた日で良かったな。俺の家でシャワー浴びて…制服のスカート洗おうぜ」

「うん！ 汚れちゃったタケルのズボンもね」

理由はどうあれタケルに対して脅しとも言える行動。モップ掛けしながら、私は猛省していた。

「ゴメンな…。変な嘘ついて」

夕日に染まった二人だけの教室。床を擦るタケルの横顔が優しい。私は首を振った。

「違う違う…。謝んなきゃいけないのは私だって。悪いのは私だよ。つい頭にきて…。死んでやるってさ。こんな重い女…。最低だよ」

「こんなんでOKだろ？」

タケルはモップをバケツに立てた。

「その原因作つたのは…俺だよ。今日はどう考えても俺が悪い」

床を擦るのを止め、タケルに顔を上げた。

「原因で言うなら…私だよ。今朝…タケルが手紙貰つた時、私、無茶苦茶腹立ってたんだよ。それなら素直にその感情出せば良かったんだよ。そうすれば、タケルは私の気持ち分かってくれたと思う。変に格好付けた私が悪いよ。タケルには、何でも素直になんかや

ダメだつて分かつてたつもりで…。やっちゃったよ私」

私もモップをバケツに立てて、タケルの側に立った。

「どつちもどつちつて事で、いいんじゃないのか？ ほんとこ俺ら喧嘩なかったから。今日、溜まったもんが爆発しちまったと思つとこつよ」

タケルが私の腕を摩ってくれた。

「私つて…重いよね？」

「うん、重いね」

タケルの言葉に、私は更に俯く。

「でも、嫌われるなんて思うなよ。俺がそう言う、重い彩を愛してるんだから仕方ねえよ。だから、また彩が死にそうになったら、命懸けで助けてやる」

静かに顔を上げた私。透き通ったタケルの瞳が迎えてくれた。

「重いから…いつも俺は彩の愛情を感じれるんだ。『言葉や態度に出さなくても相手は分かってくれるはず』。何てのは恋愛を買い被ってる奴らの格好付けた言い訳さ。正直に、素直に、俺らはぶつちやけで感情を爆発させていこ」

頷いて、たま泣きそうになる。タケルの胸に飛び込むと、二人が支えてたモップが床に倒れた。

「今日のエッチ…。激しくなるから、覚悟しとけよ」

「俺の方が激しいっての！ 負けるかよ」

タケルの胸でキリツと顔を上げる。

「言ってる！ 私の方が激しいの。勘違いすんなよ！ 私の方がおめえを愛してるんだから」

「ハハツ！ 笑わせんなよ。今日、死にかけて、おめえを止めたの誰だと思ってるんだ？ それだけ、愛してるから止められたんだっての」

タケルは私から離れた。

「ちょっと！ 離さないでくれる！ 男だったら、てめえの女しっかり抱き締めとけ！」

溜息をつきながら私に戻ったタケル。私の腰を両腕で包んでくれた。唇を尖らして拗ね顔を作った私はタケルの首に両腕を回してやった。

「私は…オシッコ漏らすほど、おめえの事愛してるんだよ。この光景、よく目に焼きつ…」

私の喧しい口をタケルが唇で塞いだ。静かな教室。絡み合いが響く。やっと、落ち着けた。タケルがゆっくり唇を離し、私の髪を耳に掛けた。

「私…妬いたらマジ止まなくなるよ。いいの？」

私の頬を撫でるタケル。

「望む所だ」

額をタケルの胸に付けた。

「帰ろ」

「うん、帰ろ」

モップとバケツを持ち上げ、教室のドアに向かったタケルを私は
追い掛けた。

「言っとくけど、今日は私の方が激しいからな！」

「俺だつての！ ひっけえなあ……」

「吠え面かかしてやるよ！ 私…まだ妬いてんだから、激しいに決
まってるんだろ！」

「エッ！？ まだ？」

「だから、止まんないって言っただろ？ で、ついでに聞いてやる
けど。その女、どんな女だったって？」

「それがまたマジ可愛くてさあ……」

「ざけろっ！」

ニヤケやがったタケルに蹴りを入れてやる。

下らない事で喧嘩している私達を、夕日が撫でてくれた。

「で…タケルの家で四回も仲直りエッチ？ あー、心配して損した！ どおりでメールしても返って来ないと思ったよ」

次の日、私は学校の廊下で彩から前日の結末について聞いた。

「こ、声デカイって、由美」

彩は周りを見回した。

「マジ…心配してたんだからさあ…」

小声になった私は涙ぐんでいた。

「由美、ゴメン、心配掛けて。メール返せば良かったんだけど、由美には心配掛けたから、どうしても直接言いたくて…」

鼻水を啜り、彩の肩を抱き寄せた。

「良い薬になったよ。もう、タケルに格好なんてつけない。ぶっちやけで行くよ。由美が言うようにさ」

彩も涙ぐむ。

「これからも…何でも相談してよね。あんたらに別れられちゃ、私、

目標無くしちゃっよ。」

俯いた私は、そっと彩の右手を両手で包む。

「これからも…お願いします」

彩は左手を被せてくれた。

「ヨッ！ 今日も相変わらず可愛いねえ。由美」

惚けた顔。タケルの馬鹿が来た。

「あつたり前の事わざわざ言うんじゃないよ！ ウンコでもして来い！」

吹き出す彩と唾然とするタケルにその場を譲り、私は教室に消えた。

それから数日後、今度は、私の下駄箱に手紙が入ってた。

「何で、空気読めない奴が多いんだろねえ？」

私は、ペラペラと手紙をタケルに見せた。

「だよなあ…。腹立つ奴だよ。俺の彩に証拠にもなく」

タケルに手紙を差し出す。

「自由」どころ

タケルは手紙を私の手から取り去った。

「一年A組…池田聡…。また一年坊かあ。俺が突っ返しといてやるよ」

手紙をポケットに入れるタケル。

「宜しく。でも、無茶しないでね。」

私達は一緒に階段を昇った。

「おう、おまえんここに池田って奴いるか？」

「はい…」

「悪いけど、呼んで来てくれや」

昼休み、俺はその池田って奴を教室から呼び出した。あいつが池田か？ ニヤケた野郎だ。教室の奥から廊下にいた俺にチラッと目を合わせた池田は頭を掻きながら教室から出て来た。

「はい、池田ですけど。」

少し長い髪をM字バンドにした長身の池田。一般的にモデル顔のイケメンと言っている奴。

「これ。彩が返しといてくれたさ」

彩に宛てた手紙を池田に差し出す。池田はふてぶてしく顎を引き、両手をポケットに突っ込んだ。何だこいつ？ ムカつく上目使い。池田は大きく息を吐いた。

「へえー、勿体ない事しますねえ。彩さんも」

「はあ？」

おもむろに池田はポケットから手を出し、手紙を受け取るうとしたが、池田のナメた言動にムカついた俺は池田の目の前でその手紙を破り捨ててやった。これは無茶じゃねえよ。当たり前前の事だ。

「今度からは、手紙みてえな古い手使わず、直接、告って撃沈されるや」

啞然と口を開けていた池田。馬鹿が！ 視線を残して立ち去った。たく、彩が絡んでなきゃ、一発二発入れてやってたよ。

「先輩！」

階段口に差し掛かった俺を、池田が呼び止めた。喧嘩なら買つてやるよ。こんな奴、智喜の百分の一にも満たねえ。

「俺が、彩さんに告って良いって事ですか？」

大した自信だな。笑うしかない。

「ああ良いよイケメン。どうぞどうぞ。てか、おめえも空気読めね

え奴だな。彩がいらねえって言ったから、俺がわざわざ手紙返しに来て、わざわざ処分してやったんだ。感謝くらいしろや」

俺が軽く池田の腕を叩くと、野郎はまた上目使いでニヤつき、自信満々な顔を見せた。

「彼氏の手前なら、誰だって言葉裏腹って事がありますからね。格好いい男を見たら、女の子の気持ちなんてコロコロ変わりますから先輩には悪いですけど…僕には彩さんを落とせる自信ありますよ」

溜息しか出ない。やっかいなナル男だ。

「可哀相な野郎だなあ…。今まで、そんな気変わりが激しい、とんでもねえ女とばっか付き合ってきたんだろつなあ。おめえみてえな不幸な野郎見ると、いい彼女と出会えたって、つくづく幸せに思うぜ」

またふてぶてしくニヤけ、額のM字バンドを業とらしく指で梳く池田。この野郎…。

「タケル！」

爆発寸前のタイミングで、彩が階段を駆け降りて来た。クソ！いかせて欲しかったよ。心残りに、彩へ顔を向けた途端。ん？いきなり俺に抱き付いて来た。

「えっ？」

池田の小声がはっきり聞こえた。な、何だよ？ 問答無用で、彩は俺の唇に自分の唇をぶつけ、舌まで絡ませる。唐突、強烈過ぎる

キス。動揺を殺し、キスされながらも何とか冷静に、目玉だけ動かして周りを見る。幸運にも、俺と彩の周辺には、池田以外、誰もいない事を確認し、取り敢えず安心ついても、ビククリするよ。

それまで強気だった池田は口を半開きにし、血相を変えて啞然としている。彼氏がいると分かっても告りたくなるくらい惚れた女。その女が彼氏に抱き付いて強烈なキスカまし、二人のワールド作ってる。そんなところを目の前に曝された日にゃ、誰だって言葉もプライドも無くす。その青ざめた面にさっきまでの自信なんて微塵も感じねえ。哀れすぎのナル男だ。ざまあねえ。死んでくれよ。ゆつくりと瞳を開け、唾液糸を引かせ、俺から唇を離れた彩。涼しく澄み切った視線は、時として清楚感より威圧感を与える。迷わず、彩は池田に切り付けた。

「でえ…私に何か用かあ？ 小僧」

静かで冷たい彩の迫力。猛々しく熱い智喜の迫力より数倍怖い。次に何が出て来るか読めねえ。

「あ、いや、その…」

池田がどんなイメージを彩に対して抱いていたか？ 別にどうでも良かったけど、多分、いや、絶対、こんな屈強な彩のイメージは池田の頭の中には無かっただろう。死にかけの金魚のように口をパクパクさせた池田。額のM字を奮わせて半歩ずつ後退りしてやがる。

「よ、用ってのは…」

「あー！？ 聞こえねーよー！！」

急に、声を張り上げた彩。ビクツと両肩を上げたのは池田だけじ

やない。不覚にも、俺も肩をビクつかせた。彩の怒声を聞き付け、ゾロゾロと階段口に集まったやじ馬を尻目に、右手を腰に当て、やや顎を突き上げた彩はジワジワと池田に迫る。もう、どうにでもしろよ。

「何か用かって聞いてんだよ！ はつきり喋れ！ 一年坊！」

ヤクザか？ おめえは。池田はハツと目を開き反応する。俺は人差し指でこめかみを掻く。オドオドと、周りを見回した池田は、ようやく自分の情けない状況を把握した様子。

「な、何でもないです！ し、失礼しましたーっ！」

深々と頭を下げた池田は体を前のめりにし、野次馬を掻き分けて退散。格好悪い。

俺に振り返った彩は冷淡な表情を消し去り、いつもの可愛い笑顔を取り戻してた。な、何だ？ おめえ。

「食堂で雄二に聞いたよ。タケルが手紙返しに行ったって。タケルが無茶しないか心配だったから…来ちゃったよ」

無茶はおめえだよ！ 何で、突っ込める訳ない俺は無意味にジャケツトの襟を直す。

「そ、そうなんだ。あ、ありがとう」

何で、お礼言わなきゃいけないんだ？ 手紙突っ返してやったのは俺だぞ！ とも、言えるはずない俺。

「さっ、帰ろ！」

俺は彩に手を引かれて階段を昇るだけ。もしかして、俺も相当格好悪いかあ？

以来、どんな形であれ、俺と彩に告白する無謀な生徒はいなくなつた。

あー、これで来年のバレンタインデーのチョコは二個だけだよ。今年も総数で雄二に勝つたのに。

由美からの連絡。

「タケル！ 雄二が…」

携帯を耳に着け、焦った由美の声色を聞いた途端、俺はその悪い予感がほぼ現実に変わった事を実感した。

「行方不明なんだよ」

「雄二が、行方不明？」

俺は彩と顔を見合わせた。

「今日、あれから…雄二と一緒に美紀の家に行ったんだ」

彩が俺の携帯に耳を寄せた。

「でも…何度チャイム押しても美紀出て来なくて。雄二が元気なさそうだったから…一緒にマック行かない？ って誘って…」

由美の話を聞きながら、色々…頭の中で想像し始める俺。

「で、マックで雄二にメールが入って…。そのメール読み終わった途端、顔色変えて、雄二、マック飛び出して行って…」

俺はまた彩と顔を見合せた。

メールは美紀からだ。あれほど、動くなって行ったのに…。

「雄二とは…それっきり？」

「心配になったから、何度も雄二に連絡したんだけど…。携帯繋がなくなって。タケルにも彩にも連絡したんだけど…携帯繋がなくなつて。やっと繋がったよ」

シマッタ！ セックス真つ最中で携帯どこじゃなかった。

「由美、まず雄二を探したい。今から…いつものファミレスで会えるか？」

「うん！ すぐ行くよ。タケル、お邪魔して…ゴメンね。彩と…その…あれだったんでしょ？」

流石、由美。バレてやがる…。携帯から耳を話した彩が笑いを口に含んでる。

「いやもう…終わったからいいや」

パーンと俺の腕を、彩が弾いた。

「あ、ああ、そう。彩に…謝っというて」

「由美は何も悪くねえよ。取り敢えず…ファミレスで落ち合おう」

「わ、分かった」

何人も性欲には勝てねえってか。溜息を一つ吐いた俺は携帯を切り、立ち上がった。

「て、事だ。彩、すぐ姉貴の服着てくれ」

「う、うん！」

立ち上がった私はクローゼットに走り、扉を開けた。大変なあ！タケルは携帯を耳に着け、テーブルを回っている。

「雄二の奴…。繋がんねえ。彩、美紀の携帯番号…聞いてねえ？」

私は首を振った。聞いとけばよかった。慌てていた私は取り敢えずクローゼットの中で最初に目に入ったインナーとアウターを着て、ジーンズを履いた。サイズぴったしじゃん。

私の適当なブラッシングが終わるまでに、Tシャツを着て、ジーンズを履いたタケルは黒いパーカーを羽織おり、慌ただしく私にキスをした。

「行くっ」

そして、タケルは私の手を取った。

雨は…上がっていた。

いつも由美達と集うファミレスにはタケルの家から歩いて10分くらい。タケルは少し早歩き気味。私はタケルの手にやや引かれるような感じで歩いた。

「切れてる。あの馬鹿、どこにいやがんだ？」

雄二に繋がらない携帯を閉じたタケルは更に歩くスピードを速めた。タケル、もう心配しないよ。私はあなたを信じてるから。タケルならきっと雄二と美紀を救い出せる。私は無言でタケルに付いて行った。タケル、愛してる…。

濡れた路面。夜がほのかに滲んでいた。

「彩…」

そのファミレスが角にある交差点で、私達は最後の信号待ち。

「ありがとな。今日。で、心配掛けるけど…ゴメンな」

男の邪魔をする哀れな女にだけはなるんじゃないよ…。私はお母さんの言葉を思い出す。

「似合う？ この服」

タケルは信号から私に目を向ける。

「お、おう、似合うよ。でも、何か、姉貴と歩いてるみたいで照れるよ」

タケルが俯いた時、信号が青に変わった。私はタケルの手を引く。

「ほら、行くよ！ タケル！」

奥のテーブルから、由美が私達を見つけ手を振った。

「彩…。そんな服持ってたっけ？」

私達がテーブルに着くと同時に、由美が言った。

「これ…。タケルのお姉ちゃんの」

「お、お姉ちゃん？」

タイミングよくウエイトレスが来た。いつものドリンクバーを注文した私とタケルは、まだドリンクバーに立とうとしない。

「来る前に、雄二に電話したけど、繋がらなかったよ」

由美が二の腕を抱える。

「雄二にメール送ったのは…美紀に間違いなねえよ」

私はタケルの方に体を向け、由美はテーブルから視線を上げた。

「美紀は…どうするつもりなんだろ？」

由美が、少しテーブルに身を乗り出した。

「たぶん…いや、絶対、美紀はメールで、あの事を雄二に告白したんだ」

私と由美は溜息で俯く。

「雄二に全部ぶちまけて、自分だけでケリつけようとしてんだ。あのバカ！ ジツとしとけて、あれ程、言ったのに…」

私はテーブルに視線を落としたタケルを覗き込んだ。

「じゃ、美紀は一人で…あいつらのどこに？」

テーブルから視線を上げたタケルは私と由美を交互に見た。

「ああ…。美紀はその事も雄二に伝えたんだ。だから、雄二は美紀を助ける為にマックを飛び出して行った。でも、美紀を捕まえられる訳がねえ。雄二は、あいつらの居場所を知らねえんだからよ。今頃、どっかでのたうち回ってるはずだ」

タケルの声が小さくなった。

「のたうち回ってくれてるだけならいいけど…。暴走しちゃうんだよ。あいつは」

私と由美はお互いの顔を見合った。由美を見詰めながらタケルの腕に触れる私。

「ねえ、タケル。雄二が…行きそつな場所知らない？」

タケルが溜息と一緒に首を振ってた。

「あいつが遊びに行く場所なら知ってるけど…。こんな時に、んな遊び場なんかにいる訳ねっ、ウツ！」

私は、急に激しく咳込んだタケルに身を寄せ、タケルの背中を擦った。

「だ、大丈夫？」

「タケル…。大丈夫？」

テーブル越しに、由美がタケルを覗き込んだ。

「悪い…彩、何か…飲み物持って来てくんねえか」

「わ、分かった」

私はタケルの背中を見詰めたままテーブルを離れた。

「由美…」

由美が顔を上げる。

「相変わらず…。今日も可愛いな」

「何言ってるの！ こんな時に」

「こんな時だから言ってるんだよ」

荒れた精神状態を、何とか鎮静させようとした事を理解してくれた由美。溜息から笑顔を滲ませてくれた。

「タケル…。私も…何でもするよ」

そして、由美は寂しい笑顔を俺に近付けた。

「タケルは、まず美紀を助けて。雄二は、私と彩で手当たり次第探すから」

「悪いなあ…。由美。おめえ、マジ可愛いな」

「あつたり前の事、わざわざ言うんじゃないよ」

由美の瞳。微かに潤んでいる。

雄二の野郎。こんな時に…。俺が視線を流した窓。ドリンクバーから帰って来る彩が映り込んでいた。雄二と俺が中三の時。このファミレスで、雄二は、俺と彩が同じ傘で外歩いているのを見たんだ。それをあの図書館、図書館で…。俺は、テーブルにコーラを置いた彩を見上げた。次は、由美に視線を向ける。雄二…。再び、窓に視

線を流した。あん時、中三の時、俺達は何かあったら、あそこに行つて。何かあったらあそこだった。ウザい親から逃げたい時。可愛い子の噂話する時。他の奴らには言えない事を話す場所。夏休みが過ぎ、彩に会えない淋しさを紛らわしたい時。あそこに行けば必ず雄二が来てくれた。あそこに行くと、必ず、雄二が待っていてくれた。あそこにいると、必ず、雄二が来てくれた。

「彩!」

「ど、どうしたの? 急に」

「さっき、雄二が行きそうな場所知ってるかって言ったよな?」

「う、うん…。それが…どうしたの?」

「分かったんだ! こんな時、雄二が行きそうな場所」

「どっ?」

由美がテーブルに身を乗り出す。

「ここから歩いて五分も掛からねえ」

彩が俺の腕を揺する。

「そ、そんな近い所なら…」

テーブルの上のコーラを一気に飲んだ。

「行くぞ! こうなりゃ、雄二も一緒に連れて行く。雄二にもケリ

つけさせてやる」

気合いを入れて立ち上がり、テーブルを離れた瞬間、「ゲーツ！」と、ゲップが吐き出た。

「きつたねえなっ！」

彩が俺の背中を叩く音がパーンと響くと、由美の笑い声が聞こえた。マジ、姉貴に叩かれたみてえだ。

「もう抜きたいと？」

あいつ…。裸電球の下で怪しく眼光だけが光る。昭が私を睨んでいた。昭の後に取り巻きが二十人くらい、昭にくっついてる犬みたいな奴ら。怯えてたまるかつての。お兄ちゃん：タケルには「ジツとしてろ…」と、言われたけど、そんなタケルに：優しいお兄ちゃんに迷惑なんて掛けたくなかった。雄二に会いたかった。でも、会えなかった。雄二の顔見たら、離れたくなるの分かってたから。だから、雄二にメールを打って最後に私の洗いざらいを告白した。そして、携帯の電源を切り、街をフラフラして、ここに来た。決心は変わらない。

「やっぱり…そういう事だったんですね。残念です」

やっぱり？ 何の事？ 昭が敬語口調になるのは取り巻きと一緒に居る時だけ、格好をつけるときだけ。暇つぶしに私を抱く時はキモい猫撫で声。私が黙っていると、昭の後から男が出てきた。

「君達の監視役の真鍋君です。梨華が最後に行ったカラオケボックスでバイトしてくださいさってるんです。君以外にもあのボックス使用している女の子いますので…監視してもらってたんです。梨華君」

私は美紀だったの。

「あの男…。名前、何て言いましたっけ？」

雄二の顔が浮かんだ。こいつらあ…。私は目を見開き、思いつ切

り酸素を吸い込む。すると、ソファアのそばで、真鍋が話し始めた。

「雄二君って言ったよね？ 店で君のデータを見てた彼」

冷静さを装っても、雄二の名前が私の手足を震わせた。眉間に皺を寄せてキモ過ぎる笑いを、昭は浮かべた。

「どうしました？ 顔色が変わりましたね」

雄二に何する気だよ？

「君は僕の為に…よく尽くしてくれました。無論、これからも尽くしてもらいます。私から愛を授かりたければ尽くすことですよ。君は、私無しでは生きていけない。一人ぼっちの悲しい子なんですから。私はそんなあなたに愛を授けてるだけです。何も無いあなたにね」確かに、昭は何でも買ってくれて、行きたいところにも連れて行ってくれた。私は昭の大勢の中の一人って分かってても、一時でも、昭を一人締めする為に、昭に尽くすしか、追い掛けるしかなかった。昭の言うがまま、ウリするしかなかった。馬鹿だった。雄二と出会うまで気が付かなかった。もう生まれ変わりたい。雄二に会って変わったんだ。タケル、お兄ちゃん、やっぱり私だけじゃ、ダメだったのかなあ？

「雄二君。可哀相に…彼の身が心配ですね。彼に危害は加えたくないんですが…」

雄二には、雄二だけには、指一本触れさない！ 覚悟は決まった。最悪の状況を考えてバックの中に忍ばせていた包丁。取り出して突き付けた。

「何だっ！ コラッ！」

今まで至って冷静だった昭。声を裏返してソファアの背もたれに上擦り、顔を膠着させる。

「雄二には手出させない！ あんた道連れにして死んでやるっ！」

ごめん、雄二。ごめん、タケル。もう命投げ出して、こいつ道連れにしてやる。やっと本当に愛せる人ができたのに、お兄ちゃん以上の友達ができたのに、もっと早く出会いたかった…。視界が曇り始める。泣くもんか！

表通りから一本入った夜の図書館。周りは閑散とし、自販機の明かりだけが、図書館のゲートの前に浮かんでいる。

「ちよつと待って」

俺は彩と由美を待たせ、その自販機で缶コーヒーを二本買いパーカーのポケットに入れた。車用の一・五メートルぐらいの高さのゲートで図書館は閉められていた。

「先に俺が乗り越えて…。中からおまえら引き上げる」

不安そうに無言で頷いた二人を残し、俺はゲートに飛び付いた。

ガシャンと結構大きい音が辺りに響く。構わず、ゲートを乗り越え、二人に振り返った。

「ジャンケンポン！ あいこでしょー！」

「どっちでもいいから、早く来い！」

結局、彩が先に来た。

「ちゃ、ちゃんと支えてよ」

「分かってるよ」

彩はゲートの上に両手を着き、自分の体を押し上げた。

「ヨシOK！」

彩の腰をタイミングよく掴むと、ゲートから両手を離れた彩は俺の頭に抱き着いた。うわ！ 顔面に彩のオツパイ、スーパープレスだ！ って、んな事考えてる場合じゃねえ。俺は彩をそのまま中に引き込んだ。

「フーッ！ 結構：簡単だった」

着地した彩は由美に振り返る。

「彩…。ちょっと、お宅の彼氏借りるよう」

小さい由美は自信なさ気に両肩を竦める。

「どござどござ、使ってやって下さい」

「大丈夫…。俺がちゃんと支えるから」

「う、うん…」

由美もゲートに両手を着いて体を浮かせた。

「ヨッシャ！ いい感じ…」

しかし、俺が由美の腰を掴んだにも関わらず、由美は体とゲートをガタガタ震わすばかりで、両手を離さない。

「おっ、おい！ 手、手離せ！」

「エッ？ エッ？ エッ？」

仕方なく、俺は無理矢理、由美の体の中に引き込む。

「そ、そんな、エビ反って、ど、どうすんだよ！？ コ、コラッ！」

「もっ、ちょ、ちょっと、オッパイが、もっ！」

「んな事、言ってる場合かよ！ うわ！ く、苦しい…」

「だから、もっ、ちょっ！」

「うんとらもっっ！…！」

そばで、彩のクスクス笑いが聞こえた。俺は何とか立派なおっぱ

イを引き込んだ。

自転車置き場を照らす室外灯が敷地内の唯一明かり。中腰になって身を寄せ合った彩と由美は、お互いの両手を繋ぎ合って暗闇を歩く。肝試ししてんじゃねえんだから。その自転車置場を通り過ぎると、あの懐かしい倉庫が見えた。あの倉庫の裏でよく雄二とダベリ、タバコを吹かした。…

一瞬、思い出に耽った俺とは逆に彩と由美はその静けさと暗さに不安を滲ませた。

「ちょっと…。こんなところに本当に雄二いるの？」

由美の震えた声。

「ここしかない。中三の時、何かあったら、俺と雄二はここで会ってたんだ。学校の事、受験の事、友達の事、それと…女の子の事。そういうば、彩の事も初めてここで話したっけなあ」

「彩の事も？」

由美がすかさず反応。

ヤベ！ 俺は懐かしさのあまりに余計な事を言った迂闊な自分自身に気付いた。

「あ、いや…」

「へー！ こんな怪しいとこで、よく人の噂してくれたわねえ」

当然、彩は、そう来る。

「いい噂してたんだよ。三崎中の彩って子は、無茶苦茶可愛いってな。ついでに由美って子もいけてるって」

「私はずいやかよ!？」

本当、女は隙がなく難しい。とにかく、俺達は倉庫の前に着いた。

「行くう」

彩と由美を連れて倉庫の裏へ回る。ザクザクと枯れ葉を踏む音。雄二、居てくれよ。自信めいた事をほざいても、不安は不安。心の中で祈りながら、俺達は倉庫の外壁を沿って倉庫裏に出る最後の角に差し掛かる。頼むぜ。雄二。最後の角を回り切ると、闇の中にオレンジ色の小さな点が浮かんでいた。そして、その点が若干明るくなる顔が浮かび上がった。

「雄二…」

良かった…。昔と変わらず、蹲み込んで、その倉庫の壁にもたれ、タバコを吸っている雄二。制服のままで、雨で髪を濡らしていた。酔っている様子はなかった。彩も由美も雄二の姿を見て安堵の溜息をつく。

「悪い…。遅くなっちまったなあ」

俺は、缶コーヒーをポケットから出し、雄二に差し出す。

「俺も…さっき来たばっかだから」

雄二は制服のポケットからタバコを取り出した。何の躊躇もなく、

俺は雄二が差し出したタバコを一本抜く。俺がくわえたタバコに、雄二が両手で囲んだライターを近付けて火を付ける。一瞬、ライターの火で照らされた雄二の頬に涙の跡。もう分かってるよ。雄二…。二本の煙が夜空に伸びた。

星が降ってるネオンの街に。星かネオンが分からないけど、作り笑顔で道行く人に愛想振り撒けば、少しは夢も見られるかもね。もう一ヶ月かあ早いねえ。一人暮らしの延長だけど。住むところ違えば何となく新鮮な気分にもなるね。

「六十分飲み放題五千円！ どうですか？ お客さん、寄って行ってください！」

店が暇な時は…いつも同じ事を叫んで客引きしてた。別に好きでこんなことやってるんじゃないかった。ただ、現実と理想の間で苦しんで、ちょっとだけ見つけた安らぎだったけど、そのちょっとだけにも傷つけられた。分かっていただけ。行き過ぎたから仕方なかった。

「六十分飲み放題五千円です！ どうですか？ お客さん、寄って行ってください！」

今更、どの面も下げられなかった。だから、もう言い訳止めただけ。もう干渉なんて野暮なことされるのもね。行った先に行き着いたから、どうなっても良かった。これが、意外にあってるかもなんと思っただけだったんで、結構、無感情を続けるのも辛かった。

「ハイ！ 六十分飲み放題五千円でーす！ どうですかー？ お客さん！ 寄って行ってくださーい！」

星かネオンが分からない。マジ、分からない。

タケルが、来てくれた。彩も由美も。タケルなら来てくれると思ってた。そういえば、彩の事を最初に話したのもここだったよなあ。

「雄二……」

俺はタケルに苦しい笑顔を送る。タケルに話さないと、美紀の事を。ちよつと照れ臭かったから、いや、話すと泣きそうだったから、俯いた。由美がハンカチで俺の頭と顔を拭いてくれていた。

「もう、心配させて！」

由美はタケルに貰った缶コーヒーを空けてくれた。

「飲みな！ 雄二」

「由美……。マジ、今日、可愛いな」

またタケルを真似した俺は本当に照れて笑う。

「あつたり前の事わざわざ言っんじゃねえよ！」

由美が泣きながら言った。コーヒーを一口飲み、やっと、俺は語り始める。

「今日、由美と一緒にマツクに居る時、美紀からメールが来たんだ。メールには…美紀の秘密が書かれてた。美紀が男に騙されて、ウリやらされて、脅されて抜けれなくなってる事も。携帯の充電切れてもう見られないけど…。俺は全部、覚えてる。充電切れる程、読み返したから。充電切れるほど、美紀に電話掛けたから。繋がんなかったけど…」

もう、口の中が渴いてきた。またコーヒーを飲んだ。

「美紀は友達欲しくなかったんじゃない。人が怖くって友達作れなかったんだ。今から三年前、美紀が中二の時、お母さんが無くなる一ヶ月前、美紀の誕生日の日に、美紀は塾帰りにレイプされたんだ」

三人の溜息が聞こえたけど、俺は息も切れ切れに言い続けた。

「怖さと痛さに震えて家に帰っても誰もいない。お母さんは病院で。親父さんは仕事。美紀は一人で体から血が出るくらいシャワーで体洗ったんだよ。一人で、誰もいない家で、部屋で、怖くて寂しくて、一人で泣いてた。でも、堪らず、お母さんのいる病院に走った。一生懸命涙拭いて、病院に走った。お母さんに心配掛けないように笑顔で、病室に入った。その時、お母さんの一言は、『何やってんの？早く帰りなさい』だって。美紀は、レイプされた事を、お母さんに心配掛けないように隠してた。ただ、ただお母さんに、誕生日…、誕生日おめでとうって言うてほしかっただけだった。そんな単純で、どこの家庭でもある言葉を、レイプされた日にお母さんに言うてほしかったんだよ。ただ、それだけなんだよ。だから、お母さんのお葬式の時も泣けなかったって」

俺は滲み切った三人の顔を見た。タケルはしゃがんで、俺をじつと見ていてくれた。由美と彩は俺の両脇で肩を撫でていてくれた。俺は流れる涙を止められず、細くなった声も出なくなってきた。でも、続けなくてなくちゃならなかった。皆に美紀を分かってもらおう為に。

「それから…美紀は人が怖くなって。どんどん一人ぼっちになっていった。でも、でも、一人でいるとやっぱり寂しさには勝てないんだよ。美紀は惚れた男に騙されて、脅されてウリさせられるようになった。その男に少しでも振り向いてもらうために必死で尽くしたって。そして、疲れきって、心も体もボロボロで…。最初に、俺が美紀の家に行った日、美紀は雨を待ってたんだ。雨が降ったら死のうと思っただって。雨が降る前に俺が美紀の家に行った。もし、雨の後だったら美紀は…。今日、雨が降った。美紀はもう一度生まれ変わりたいって。だから、その男のところに一人で話つげに行くって。もし、もし、ダメなら死んで生まれかわるって。俺、美紀止めてなきゃと思っただって、その男のところに一緒に行こうと思っただって、美紀の家に戻ったけど、やっぱり美紀居なかった。いくら、連絡入れても美紀の携帯切れてて…。メールの最後に、今度、今度、生まれ変わってくる時には真っさらで俺に…俺に抱かれましたって。タケルや彩や由美と真っさらで友達になりたいって。それから、俺、街中、美紀探した。でも美紀いないんだよ。どこにも…。気がついたここに来てた。なあ、タケル…。美紀が生まれ変わったら俺達の仲間にしてやってくれよ！俺なんてどうでもいいからさ。美紀を仲間にしてやってくれよ！」

俺の訴えに三人は頷いてくれた。

「雄二。もう、美紀は俺達の仲間さ。それに、雄二…。殴られなき

やいけないのは俺の方だ。俺は美紀の事を知ってた。でも、美紀に惚れ貫いてるおまえに、おまえに言えなかった。『仲間同士で、内緒事はなしだ』って、ほざいておいて…。おまえには、どうしても言えなかった。許してくれ」

頭を下げるタケルに、俺は何度も首を振った。

「い、いいんだ、タケル。もし、この事を俺が知ったら、俺は一人で暴走しちまうって思ったんだろ？ その証拠に、今の俺がこの様だからよ。おまえほど…俺の事、分かってくれる奴いねえからよ。タケル…」

俺は、もう限界だった。タケルの前でも、女の子の前でもこんなに泣くのは初めてだったけど、仕方なかった。

「雄二、行くぞ！」

いきなり、タケルは俺の腕を取って立たせた。

「タ、タケル…。どこに？」

「俺達の仲間を取り戻しに行くんだ！」

雨の夜…彼女が店に入ってきて来た。

ルーズに束ねた髪。束ねきれなかった長い髪は柔らかい曲線を描き胸元で揺れている。黒のボレロスーツのファーに水滴を光らせた

彼女は整髪料ベツタリでグレーのスーツを着た小肥りのオッサンと一緒。

「とりあえず、生中！」

「私は、ライムの耐ハイ」

「喜んで！」

俺が注文を取った。キャバクラの同伴出勤が多い時間帯だったから、とてもカレカノな関係には見えなかった彼女とオッサン。絶対キャバクラ嬢と常連客の雰囲気。印象だけだったけど、近くで見た彼女は、その取り繕った雰囲気逆らって、とても静かで、寂しそうで、無理にオッサンに笑って、無理に香水の匂いを漂わせていたような感じがした。

俺は生中と耐ハイを運んだ。

「ご注文よろしいでしょうか？」

「じゃ、俺は、カリカリチーズ、サイコロステーキと枝豆、刺身盛り合わせ。後、出汁巻きも」

「私は…シーザーサラダと…」

「好きなもの注文しなよ」

オッサンをチラチラ見ながらメニューを指差し、気を使いながら注文していた彼女は、やはり無理している様子。あれ？ 誰かに似てる。

「ご注文繰り返します…」

伝票を読み返しながらも、俺は気がつかれない程度に彼女をチラチラ。分かった。

「以上で？」

「とりあずな」

「喜んで！」

オッサンの決まり文句を聞き、厨房に戻ってオーダー品を告げた後も、俺はカウンターのホールの彼女を眺めてた。

「どうしたの？ 智喜」

由美が俺の様子に気付く。

「彼女…。由美の友達の…。何とかって言う子に似てない？」

カウンターから微妙に顔出した由美。俺の顎が差したテーブルを見た。

「あー、彩ね。そう言われてみれば…」

クスツと笑い、由美は俺を見上げる。

「智喜は、ああ言う年上お水系がタイプなんだ？」

「タイプてつか…」

奥の厨房から声。

「枝豆とサラダ上がったよ！」

「ハ、ハイ！」

とりあえず、もう一度、近くで彼女を見たくなくなった。

俺達は図書館のゲートに向かって走った。

「智喜が、奴らの事を洗ってくれた」

「智喜が？」

「詳しい事は、車中で話すよ。タクシー拾うぜ」

俺と雄二はゲートを乗り越え、俺が彩を引き上げ、雄二が由美を引き上げようとした。

「美紀…。ちよっとあんたのいい人借りるよ」

由美の言葉に、俺と彩は、一瞬、顔を見合わせて少し笑った。

「ちよっ、ちよっと、コラッ！」

「しょ、しょうがねえだろ！」

また俺達は少し笑った。ゲートを乗り越えた俺達は、表通りまで走り、急いでタクシーを止める。

「彩…。由美…。待っててくれ。必ず、美紀と一緒に帰る」

雄二を先にタクシーに乗せ、開いたドアの前にいた俺に彩が歩み寄り、唇を着けた。

「気を付けて…。待ってるから」

彩の頬を撫で、作り笑顔で頷いた。そして、俺は由美を呼び、二人に耳打ちした。

「わ、分かった。すぐに。私の家で二人で待ってるから。彩は…私が見てるから心配しないで」

「サンキュー」

俺は由美の腕を叩き、悲壮な表情を浮かばせていた彩と見詰め合ったまま、タクシーに乗り込んだ。

「雄二…」

タクシーの後部座席。雄二は少し震えて拳を口に当て、試合前のボクサーのように無言。こりゃ、話できる雰囲気じゃねえな。

十分程タクシーに乗り、俺達はそこに着いた。潮風に晒された剥き出しコンクリ壁。トラックが一台余裕で入れるくらいの鉄製ゲート。その隙間から内部の光が薄く漏れてる。覗いてみたけど、中は

見れない。取っ手は鎖と南京錠で固定されていた。俺と雄二は、そのゲートに耳を付けた。何か聞こえるような聞こえないような。

「美紀。こん中にいるのかよ？」

「ああ、裏回ろう」

震える雄二の背中を叩いた。正面のゲートは鎖で繋がれてる。連中も裏からしか入れないはず。裏に回った俺達は、すぐに開けっ放しになっているアルミ製のドアを発見。ここだ。雄二が一気に前に出ようとした。俺は慌てて雄二の腕を取る。

「雄二、中に二十人はいる。焦ったら連中に袋にされて終わりだ。美紀の救出どころじゃなくなる。落ち着け」

小声で雄二をなだめた俺にも、方法が見つからない。まっいったなあ…。

「とりあえず、ゆっくりだ」

俺は雄二を連れ、息を殺してドアの中に入った。足音を殺し、詰まれた段ボールの間を進むと、内部の光が見えた。埃の匂いが充満し、何やら話し声が聞こえる空間に足を踏み入れる俺と雄二。横並びの連中は揃って正面ゲートの方に体を向け、裏口からお邪魔した俺達に誰一人気付いじゃない。こっちは向かないでくれよ。

「あんた殺して私も死んでやる！」

美紀の怒鳴り声。口を開け、雄二が声を上げそうになる。バカ！慌てて、俺は雄二の口を塞ぎ、自分の口に人差し指を当て、「静

かに！」の合図。俺に口を塞がれた雄二は目を見開いて頷いた。息をも殺し、俺達は連中の真後ろに来た。これからどうする？ まずは、美紀のそばに行ききゃな。それには、こいつらが…。壁になつてる連中が邪魔。この際、しょうがねえなあ。「落ち着け！」と、雄二をなだめた俺だったけど…。「一々、落ち着いて断つても、了承するような連中じゃない」と勝手に判断させてもらった。一瞬、雄二と目を合わせ、微笑んでみる。俺はソツと進んで、連中の一人に狙いを定めた。そいつの肩を掴み、無理矢理振り返らせて、顔面にワンパンを見舞った。まず、一人だ！ やつと、美紀が見えた。雄二が倒れたそいつの上を飛び越え、美紀の元へ駆け出す。お、おい、美紀！ おめえ、包丁握って何してんだよ！？

「美紀！」

「ゆ、雄二！」

包丁を落とし、腰を抜かした美紀。雄二の胸に泣き崩れる。感動的なんだけど、まだ、これからなんだよ。

「ゆ、雄二、ご、ごめんね…」

「い、いいんだ！ もう心配ないから！」

悪いけど、心配だらけだったの。さあ、これからどうする？ ノーアイデア。うーん、といあえず話でもするか…。

「皆さん！ どうも初めましてっ！」

俺は必死で平常心を保ち、雄二と美紀に歩み寄る。振り返ると、騒然とした連中の中に一人だけ、電気スタンドとノートパソコンが

置かれたテーブルのすぐそばのソファに座る冷静な男が居る。あいつが昭か？ 大体の憶測はついていたが、俺は業と呼びかけた。

「昭って野郎はいるかあ？」

「私ですが」

やっぱり。無表情で答えた割には、よく見ると眉間に汗を垂らしてる。昭は冷静さを必死で保っているだけ。

「おめえ筆頭に、随分、この街で悪どい事してるみてえだな」

「何のことですかねえ？」

昭が唇を引き攣らせて横を向いた。こいつ、相当、動揺してやがる。

「しらばっくれんのはいいけどよ。とりあえず…美紀は連れて帰るぜ！」

「どつぞどつぞ。お持ち帰りください。女なんていくらでもいるんで」

昭の開き直りとも取れる舐めた発言に、俺の気持ちもメラメラと開き直り始める。

「そんな、ゴミみたいな女。お持ち帰り下さい」

「ゴミ？ 取り巻き連中がせせら笑つ。」

「あー！ なんだと!？」

俺が叫ぶと、昭はゆっくりとソファから立ち上がった。

「んな女に、何、血眼になってんだよ!? おめえら、バカじゃねえか!？」 頭悪いおめえらやゴミ女に俺が執着するとも思ってたのかよ? 俺にとっちゃ暇潰しのゲームなんだよ。女で性欲晴らして女使ってゲームする。おめえらバカにはできねえ頭使って楽しめる遊びなんだよ! 騙される女が悪いんだ! 俺が支配する側で、おめえら凡人は支配される側だ! その使い捨てゴミ女も相当楽しんでやがったぜ! 俺の下でヒーヒー鳴き声上げてな。ウリやらせて楽しみ料代わりに金せしめて何が悪いんだっ!？」

取り巻きの笑い声が大きくなる。

「こ、殺してやる……」

雄二の胸で、震えながら美紀が呟く。それが俺への着火スイッチになった。もう、我慢超えちまったよ。振り返った俺。他の奴らには目もくれず昭に突進。一瞬、そのニヤついて気味が悪いゲス面に付いてる細い両目が広がった。容赦なかった俺は思い切り捻りを効かせた右ストレートを放り込んだ。

「ウグッ!」

俺のコークスクリューを真ともに、その汚ねえ顔面で受け、か細い声と共にソファへ飛ばされた昭。そのソファもろとも勢いよく背後に倒れ、情けなく両足をV字にして天井に向けた。

「ざけたこと吐いてんじゃねえぞっ! おめえの力なんてこんなも

んだよ！ クソ野郎がつ！」

叫ぶ俺に、他の連中が迫って来る。

「上等だ！ んの野郎！」

さあ、こつから集中力だ。美紀！ 俺らの親父に教えられた喧嘩を見せてやる！

さあ来い！ 大振りで殴り掛かってきた馬鹿。見え見えの軌道。「アガツ！」。左に避け、顎を狙った右カウンターがヒット。顎を打たれば、脳が動いて暫く立てねえ。前に集中し過ぎると、後ろから来る奴にやられる。案の定、背後から迫って来たクソ野郎。ボディがら空き。後ろ中段蹴りを放つと、気持ち良く肝臓に入る。ウグツ！ とそのクソは体をくの字に曲げて倒れ落ちた。もう一匹、そのクソの後ろから飛び出して来やがった。素人が！ 今更、踏み込んでどうすんだ？ そのまま突進し、その阿呆の鼻に頭突き。額にグチャツとした感触。「ズアツ！」。汚ねえ鼻血。困まれた時には、むやみに相手を掴まない事。たらたらしていたら多勢に無勢。捕まったら終わり。いち早く脱出口を見出だす為には一撃必中。ピンポイントで急所を狙い、機敏に一人づつ倒す。

「ヨツシャー！」

そのクソと阿呆を飛び越え、連中の輪を脱した俺は、雄二と美紀の元に走り込んむ。多勢とやり合う時は後ろに回られないように壁を背にする。

「雄二！ 美紀！ 起きろ！」

慌てて体を起こした二人と俺は、すぐ右側の壁に身を寄せる。俺達と壁の間に美紀を挟んだ。

「美紀！ うずくまってる！ 雄二！ 美紀を守るぞ！」

「あ、ああ……」

大丈夫かよ？ 雄二。そういえば、雄二の喧嘩なんて見た事ねえなあ。

「美紀を俺らの後ろから出すんじゃないぞ！ 俺の親父に教わった事…覚えてつか？」

「壁、う、後ろに壁だったよな？」

「今がそのシチュエーションだ！ 次は！？」

「来た順番に落ち着いて狙う」

「来たぞ！ 雄二！」

連中の一人が雄二を狙い、拳を放った。

「頭下げろ！」

「ハッ！」

間一髪で、雄二は頭を下げ、その馬鹿は思い切り壁を殴った。「アッ！」。そいつが悲鳴を上げた瞬間。

「雄二！ 腹狙え！」

「んの野郎っ！」

雄二がそいつにボディブローを叩き込んだ。「ブウツッ！」。前のめりに倒れた込んだそいつの右側に、いい感じで雄二が回り込んでくれた。

「蹴れ！ 雄二！」

「んのコラーツ！」

雄二がそいつの脇腹を蹴り上げると、「ウゲアツッ！」。そいつは悶絶して転げ回り、壁から離れた。しかし、まだまだ、他の連中は薄ら笑いを浮かべ、ジワジワとその半円を俺達に向かって縮めて来る。

「きっちり責任取らせてやるよ！」

連中の後ろで、昭が叫ぶ。ボンボン育ちで、集団心理しかしらなような奴らだけど、人数が人数。捨て身で十人いけるか？ 十人やりゃあ、他もビビって。でも、美紀を守りながら……。難しいかあ？

「ハハハハッ！ バカに塗る薬なんてありやしねーよ！」

また昭の奇声が届いた瞬間、鎖を解く濁音が響き、一気に正面ゲートが開かれた。数台、いや、数十台のバイクのヘッドライトと爆音の中からバールを担いだ智喜が現れた。

「待たせたな！ タケル！」

智喜！ お、おめえ、最高にカツコイイよ。

体育館裏。俺は去って行く美紀の背中を見詰めていた。

「と、言うこつた」

グラウンド側の角に、美紀の姿が消えたのを見計らい、俺は呟いた。

「にしても、モテる野郎だ。恐れ入ったぜ」

智喜が美紀が消えた反対側の角、中庭側の角から姿を見せた。

「よしてくれよ……。女のジャレ事さ」

苦笑いで答え、体育館の壁に背中を着ける。

俺の願いを受けた智喜は、美紀に見られないように中庭側の角に背中を着け、その一部始終を聞いていくれた。

「でも、いいのかよ？ 俺に、あんな話聞かせちまって」

智喜は、両手をポケットに突っ込み、俺の横に並んだ。

「俺と美紀が兄妹って知ってるのは、美紀本人と雄二、彩、由美、で、おまえ。俺の仲間だけさ」

少し、間が空く。智喜が溜息を着いた。

「おめえに言われた物は、全部、松井に集めさせた。連中のたまり場は頭張ってる昭つて野郎の親父が経営してる会社の倉庫だ。その倉庫は湾岸倉庫街の36A。毎週金曜の夜に、そこで集会するみてえだ。向ここの総勢は二十人ほどだ」

良い天気。今日は雨なんて降りそうにない。飛行機雲。何年振りに見たかな？ でも、風がある。裏庭には砂煙が舞い上がり、樹々が騒ぐ。

「こつちは三十以上だ。俺達の仲間を。美紀を奴らから奪い返す」

一瞬、風が止む。砂煙が消え、樹々が静寂を取り戻した。

「智喜…。戦闘開始だ」

テールランプ

「クセエなあ！　ここは、人間廃棄物の臭いがするぜ！　俺達が掃除しねえとな！」

叫ぶ智喜の後ろにはバイクに跨がったお仲間様が三十人以上はいた。無表情の智喜が顎を上げ、バールを担ぎながら倉庫内に入ってくる。お仲間様一行もバイクを降り智喜に続いた。その沈黙の威圧は見えない波。俺達を取り囲んでいた連中を昭の所まで押し返した。擦り剥けた間抜け面を倒れたソファアールから出す昭。口を死にかけの金魚のようにパクパクさせてやがる。口や鼻から血を流し、顎を撫で、肩で息をしている奴らが数人。

「あれれ？　タケル。先走っちまったのかよ？　ズリいなあ！」

その現状を見た智喜は業とらしく、声を上げて悔しがった。

「おめえ、おっせえからよ！　ちよつとつまみ食いしちゃったよ！」

俺も業とらしく、連中を眺めながら叫んだ。

「由美から連絡貰った。予定が狂っちまったんで焦ったよ」

ニヤケ顔から真顔へ。智喜が俺に耳打ちした。金曜の八時に、俺と智喜と智喜の仲間が連中のアジトに乗り込む。俺は智喜と体育館裏で計画した通りに事が運ばれると信じ切っていた。しかし、雄二と美紀の想定外の行動が予定を一時間早めた。

「悪い、とんだアクシデントだ。とにかく助かったよ。後は計画通

り行くぜ」

智喜の胸を軽く拳で突いた。

「あ、昭さん！ あいつら相当ヤバい族です！」

連中の一人が、まだソファーに身を潜めてる昭に縋り付く。

「真鍋…。あいつも仲間か？」

雄二が呟くと、美紀が立ち上がった。

「雄二！ あいつが私の管理役だったんだよ。雄二と私の事も昭に」

「つくづく汚ねえ奴らだ！」

俺は怒りに震える雄二をなだめに掛かる。

「雄二…。とりあえず…美紀を外に出してくれ。俺は智喜とこいつら…」

「いや！ タケル…。あの昭って野郎とサシでやらしてくれ」

お、おお…。そ、そりゃそうだな。ま、これも想定外だけど…。ま、いいか。

「ヨシッ、分かった！ やって来い！」

雄二の根性と覚悟を理解した俺は微笑んで、雄二の背中を叩く。

「でも…雄二…」

美紀は涙を溜め、雄二を見上げる。俺は美紀の肩を抱き、雄二から引き離れた。

「俺らがついてる…。大丈夫だよ」

俺は智喜に振り向く。智喜は薄い唇を吊り上げて頷いた。

「美紀にも見てて欲しい。美紀の過去を俺が吹き飛ばしてやる」

制服のジャケットを脱ぐ雄二。泣かせるほど、おめえ、カッコイイよ！

「智喜、メインディッシュは後だ。まずは、雄二のケジメだ。」

「そう来ねえとよ！」

智喜は怯える連中に振り返った。

「ヨーシッ！ 最初は個人戦だ！ 昭って奴、前出るや！」

智喜の指名に、昭は知らばっくれ、白々しく回りをキョロキョロと見回す。

つくづくヘタレな野郎。

「昭！ どこ見てんだあ！？ おめえだよ！」

俺が昭に叫けぶと、昭は咳払いをして、やっとソファァーから体を

上げた。

「な、なんですか？ 野蛮な人達ですね。お、お金ですか？ 好き
なだけあげますよ」

「やっぱり、俺があの野郎ヤキ入れていいか？」

呆れ顔で振り返った智喜に思わず苦笑いした。

「雄二！」

雄二を呼ぶと、それが戦闘開始の合図になった。

「ウツラアアア！！」

雄二は怒りの雄叫びを上げ、クソ昭に突進。雄二、落ち着いてい
けよ。ソファアを飛び越えた雄二が昭を捕らえる。昭の集団が真っ
二つに割れ、雄二と昭の体が倉庫奥の段ボール箱の山に突っ込む。
埃が舞い上がり、一瞬、雄二と昭の姿が見えなくなった。

「おめえら手出すな！ 手出す奴は俺らが相手だ！」

智喜の警告に昭の集団は一斉に壁に引いて行く。舞い上がる埃の
中から雄二と昭が出て来た。

「何やってんだ！」

まだ雄二は昭の胸倉を掴んでいる。早く、先手取れ！

「雄二！ 親父が言った通り先にイケッ！」

雄二はふらつく昭の顔面にパンチを放った。

「ヨッシャーッ！」

テーブルの上に倒れた昭に追い撃ちをかけようと雄二が迫る。

ヤバい！

「雄二！ 倒れてる相……」

昭はテーブルの上から電気スタンドを掴み、振り向き様に雄二の頭を殴った。遅かった……。倒れてる相手ほどそばの凶器を使ったがる。細心の注意がいるんだよ。

「雄二っ！」

叫んだ美紀を俺は必死で抑える。

「あんの野郎……」

次は、前に出ようとした智喜の腕を掴んだ。悲壮に振り返った智喜に俺は首を振った。雄二、負けんな！ おめえが美紀を守らねえで誰が美紀守るんだ！？ 頭を押さて倒れる雄二に昭はフラフラした足取りで迫り、雄二の背中を踏み付けた。

「おめえみたいな下等人間が俺らみたいなの知識層に何ふざけたことしてんだ！？ コラ！ 言ってみろ！ ゴミが！ カスが！」

常軌を逸したクズ昭。倒れていた雄二に蹴りを入れまくる。

「雄二！ 雄二！」

泣き叫ぶ美紀の肩を抑えながら俺も堪えた。そうだ雄二…。倒れて相手から逃げられねえ時は…そうやって亀になってとにかく頭をガードしろ！ あんなヤケクソキックが効く訳ねえ。相手に存分に蹴らせて、相手が疲れた時に…チャンスがある。案の定、調子よくケラケラと笑いながら倒れた雄二を蹴っていたバカ昭が、はあはあ、と息を切らせ始めた。もうそろそろだ。蹴り疲れ、一瞬よろめいた昭の足を雄二が掴んだ。

「そこだ！ イケツ！ 雄二！」

「オツラーツ！」

昭の足首を脇に抱え、勢い良く起き上がった雄二は、そのまま昭に体重を乗せて押し倒す。意表を突かれ、頭から落とされた昭。すかさず、雄二は馬乗りになり、連打を浴びせる。脳震盪起こしてる相手には、巻き込まれる心配はない。

「この野郎がつ！ カス野郎がつ！」

完全に戦意喪失した昭に拳を浴びせ続ける雄二。唾や汗と一緒に涙も落としていた。勝負ありだ。これ以上はさすがにヤバい。智喜の背中を叩き、目で合図を送る。俺達は雄二に向かって突進した。

「雄二！ もういい！ おまえの勝ちだ！ もういい！」

「雄二！ もう分かった！ もう、もういい！」

俺と智喜に抑えられた両腕をふりほどき、昭の胸倉を掴んで頭を

押し付け、雄二は駄々っ子のように昭から離れようとしなない。

「分かったよ！ 雄二っ！」

俺と智喜は力づくで雄二を引きずり、昭から離れた。

「ゆ、雄二…雄二…」

そして、俺達は…泣きじゃくる美紀の胸に雄二を戻した。

「雄二…。後は任せる」

俺は智喜と顔を見合う。

「ウッシャー！ おめえら、これで終わったと思うんじゃないぞっ
！」

俺が叫びながら振り返る。連中はドキッと姿勢を正す。

「これ以上…。何しようてんですか？」

昭がへド仲間二人に支えられ、体を起こしながらほざいた。

「おめえらの悪事を裁いてやるんだよ！ 智喜！」

「任しとけ…タケル」

薄ら笑いを浮かべた智喜が前に出る。

「ようっ！ エリートの方々よ！ おめえらの犯罪の証拠は全て上

げさせて貰った。松井！」

智喜の仲間が倉庫の外から松井を連れて来る。昭と連中の形相は見る見る蒼白した。

「おう！ おめえらは…敵に回しちゃいけない奴らを敵に回した。おめえらみてえな将来有望な人種が俺らみてえな後先ない連中を敵に回したらどうなるか、思い知らせてやるよ！ なあ…松井君」

智喜が松井の肩に腕を回す。

「そりゃもう。俺は…智喜さんにゾッコンスから」

最高の笑顔で松井は答えた。

「おいおい、タケルにも挨拶しねえかあ。実質的な頭はタケルだけ」

「エーッ！？」

「タ、タケルさん。噂は兼がね…。よ、宜しく願いします」

「どんな噂だよ？」

「ど、どうも」

妙に照れた俺。体を直角にして礼をする松井から視線を外す。フツと笑った智喜は松井を連れて輪の中心へ出た。

「で…この松井君が持ってたデジカメは俺が預からしてもらった。おめえらが汚ねえ脅しのネタに使ってる、女の子がオッサンとラブ

ホ出て来る画像がたつぷり入ってたよ」

倉庫内には智喜の声と連中どもの動揺だけが駆け巡る。

「松井君が言うには…画像データは全てそのパソコンに落とし込んでるらしいなあ」

乾いた足音を響かせ、昭のテーブルに近付く、無表情の智喜。周りを見回した後、ニヤリ。担いでいたボールをそのテーブルの上に置かれていたノートパソコンに叩き落とした。プラスチック製のパソコンと木製の机が鉄製のボールによって碎かれる瞬響に、また連中がドキッと体を震わせたが、智喜の涼しい表情は変わらない。

「ホーッ！ お、昭？ んなビックリすんなよ」

昭は顔面を引き攣らせ、血色の悪い唇を震わせる。

「昭…。肝心な中のデータは…ちゃんどこにある。松井君がコピーしてくれた」

智喜は革ジャンの胸ポケットから取り出したUSBメモリーを昭に見せた。智喜は俺の言った通りにやってくれた。

「おめえのパソコンから入手した確実な証拠がこの中に入ってる。」

昭の顔、いや、全身が震える。

「女の子の個人情報。ウリの時間や行動管理表。お馴染み客の名簿。偽造会員カードの雛形に偽造会員カードから落とされたカラオケボックスの管理データ。これは、おまえらの児童売春教唆及び脅迫罪の

証拠さ。まだあるぜ。この松井君って…名カメラマンだな？ おまえらが女の子と話してるところ。金を受け取ってるって。全て隠し撮りしてくれた。松井君！」

松井はポケットからデジカメを取り出し、智喜に渡す。智喜がへたれ昭の肩に手を回し、デジカメの中の画像を見せると、昭は口をパクパクさせた。

「で…こう言うのもあるんだ」

智喜の目の合図で、次に松井が取り出した物はICレコーダー。松井から受け取ったICレコーダーからヘッドフォンスピーカーを伸ばした智喜。昭の片耳にそのスピーカーを突っ込み、再生ボタンを押す。
完璧だ。

「おまえらが…ここで会話した全てを松井君が録音してくれた。俺も聞かせてもらったけど…おめえ筆頭にここにいる奴らの声がよく入ってるだろ？女の子の事。客の事。金の事。今後の汚ねえ計画の事。さあ…どうする？」 昭

その智喜の問い掛けに、まず昭のヘッド取り巻きが騒ぎ立てた。

「昭さん！ どうするんですか？」

「学校どうすんですか？」

「警察に捕まったら？」

「人生、目茶苦茶ですよ！」

「親父にバレちまうよ！」

夢のゲームから覚め、現実を突き付けられ、窮地を把握した連中。

昭に現状打破の懇願を始める。なっさけねえクソどもが。早く誰かに殺されちまえよ。とりあえず、崩壊したな。思った通り、こいつらは頭いい分思い上がりか激しいだけだ。

「昭：証人もいるぜ。被害者の女の子達には全て連絡した。おまえらの名簿使つてな。女の子達には：おまえらには一切連絡するなつて言つてある。今夜：女の子達がここに来ないのは女の子達が全て俺らの保護下にあるからさ」

智喜がゆつくりと茫然自失しかない昭の耳からスピーカーを外した。

「ここまで：証拠が揃つたら彼女達は被害者だ。警察も、学校も、おめえらの家族も、彼女達を被害者として扱つよ。で、逆に：おまえらは加害者だ」

いきなり、昭が土下座した。

「か、買います！ それ全部買います！ 何でも買いますから許して下さい！」

いいから死ねよ。おめえ。堪らず、俺は前に出た。

「昭よう！ 何か勘違いしてねえかあ？ 俺らは、おめえらと商売しに来た訳じゃねえんだ！」

昭が小汚い顔を上げた。うわっ！ 蹴り殺してえ。必死で我慢した俺は続ける。

「おまえらをネン所に送る事なんていつでもできるって事忘れんな

いつでも、俺達が、おめえらの国立大、有名私大卒の肩書や、これからの華々しい官僚人生、エリート人生を葬れる事を忘れんな！もし、今後、ふざけた真似しやがってみろ！もし、今後、被害にあった子達に指一本でも触れてみる！脅してみろ！そんな噂が少しでも俺達の耳に入ってみろ！俺達は、この全ての証拠を管轄の警察署、マスコミにはもちろんの事、おめえらの学校や家族にぶちまけて、おめえらの人生、将来、全て崩壊させてやる！今日から、おめえらは…俺達の管理下だ！」

昭はやつと薄汚い顔を失せた。

「は、はい！ わ、分かりましたっ！」

智喜が平伏した昭の前に松井を立たる。

「昭…。今日から松井君をおめえらの管理役、見張り役にする。パシリは卒業だ。俺らの代わりにおめえらを管理してもらおう。松井君を丁重に扱えよ。俺達の舎弟って言う意味が…頭のいいおめえならどう言う事が分かるよな？」

「は、はい！ わ、分かりましたっ！」

更に昭は体を丸くし、額を地べたに擦り着けた。死んでろ！バカ！

「松井、言ってやれ」

智喜に促された松井はしゃがんで昭の髪を鷲掴み、泥だらけの昭の顔を持ち上げた。こいつ、やるね。

「俺は、今後、おめえの管理者だ！ ざけたマネすんじゃないぞ！」

そのまま、松井は昭の顔を地べたに叩き付けた。

「ヘヤーツ！」

情けな過ぎる昭の悲鳴に、思わず、俺も智喜も吹き出す。いつの間にか、雄二と美紀が俺達の真後ろへ来ていた。ヨシツ！ 最後の仕上げだ。俺は美紀に視線を送り、昭を見下ろして、すぐに美紀に視線を戻した。その合図の意味を理解した美紀は目を吊り上げ、静かに頷いた。俺の含み笑いと美紀の噴火寸前の形相を理解した智喜は口を吊り上げて例の薄ら笑いを浮かべた。そして、俺と智喜はまだ地べたに伏せていた昭の両腕を掴み上げ、無理矢理に昭を立てさせた。

「はい、美紀！ どーぞ！」

美紀が怯える昭の正面に出た。

「女、女、なめんじゃねーよっ！」

美紀は全ての怨みを踵に込め、思いつきり、昭の急所を蹴り上げた。

「ガーツ！」

悲鳴を上げ、俺と智喜の腕から滑り落ちた昭。真ん中を押さえて転げ回る。

「死ねバカ！」

最後に俺が叫んだ。失禁し小便まみれの昭を見下し、その場を離れた俺達と入れ替わり、智喜のお仲間の方々が茫然としていた他の連中に押し寄る。後は任そう…。

「はー！ スツキリ爽快だよ！」

髪を掻き上げる美紀。

「タケルんとこの女は…皆スゲエな！」

智喜が眼球を左右に揺らす。

「おお…。だから苦労すんだよなって、おめえ、何、泣いてんだ！
？ 雄二！」

「いや…嬉しくってさあ。タケル、智喜、有難う！」

智喜が照れ臭さそうに苦笑いを浮かべ、頭を撫でた。

「雄二…。美紀…。紹介する。俺達の新しい仲間、智喜だ」

「いや、な、何か、改まって、てのは…」

智喜が意外と照れ屋って事が分かった。

「智喜、私もタケルのチームには新人なんで…宜しくね」

「は、はい」

ますます照れ、普段の調子を狂わせ、苦笑いで俺に助けを求めた智喜の可愛らしい表情が可笑しくって、俺は笑いを堪えながら智喜の背中を撫でた。

「俺は…何て言ったら…」

雄二が俺と智喜を交互に見た。

「あ、またナンパの仕方教えてくれよ」

智喜の要望に雄二が頭を掻く。

「ナ、ナンパはもう…止めた。こんな可愛い彼女いるんだから」

雄二が美紀の肩に腕を回すと、その雄二の調子の良さに美紀も含めて呆れた俺達三人は笑い声しか出せなかった。

「タケル…後始末は俺達に任せとけ。早くカップルをこの修羅場から出してやれよ。」

俺は雄二と美紀を見て、直ぐに智喜に視線を戻した。

「何から何まで…悪いな」

俺は智喜の腕を叩いた。

「タケルの指示通りにやっただけさ。大した奴だよ。おめえは」

俺は少し俯いてから智喜を見上げた。

「由美の家…知ってるか？」

「ああ、何回かバイクで送った事ある」

「そこに皆でいる。後で落ち合おう」

俺はポケットの中にあつた缶コーヒーを智喜に投げ渡し、雄二と美紀を連れて倉庫を出た。

倉庫から離れ、三人でタクシーが拾える湾岸道に向かったけど、緊張感を切らし、虚脱感しかなかった俺は、その急激な精神状態の変化に気分が悪くなった。

「ちょ、ちよつと待って…」

港のボラードに手を着き、ゲーゲーと吐き出す俺。あー、良かったあ！ 大丈夫だった！ 美紀を奪還だあ！ 雄二もOKだ！

「タツ、タケルツ！ だ、大丈夫！？」

慌てた美紀が俺の背中を撫でてくれた。

「タケル…。ごめんなあ…。んななるまでよう…。ごめんなあ…」

おめえはもう泣くなつてんだっ！ あー！ また来た。気持ち悪い。

タケルと雄二を乗せたタクシーのテールランプが夜道に溶けて見えなくなるまで、私は、その場に立たずんでいた。携帯を切った由美が私の背中に腕を回し、ようやく、私は溜息をつけた。

「智喜に連絡着いたから…大丈夫」

由美の言葉にも、私は安心を得られなかった。

「由美…。止めた方が良かったのかなあ？ タケルに…タケルに…もしもの事があつたら…私、生きてけないよ。私…私…」

テールランプが消されるまで保っていた気丈さ、痩せ我慢と言ってもいい張りつめた気持ちを一気に崩した私は由美に抱き付いた。

「彩が…彩がすっかりしないと！ タケルは大丈夫だから…大丈夫だから…。彩、大丈夫だから…」

私は彩の背中を何度も何度も撫でた。タケルと約束したんだ。タケルが帰るまで彩は私が守るんだ。彩の背中を摩る私の手も奮えていた。

「由美…。私、私、すっかりしなきゃね」

濡れた頬を上げた彩を見詰めたら、私の視界まで曇り出す。ダメダメ！ 私まで泣いたら、ますます、彩が不安になる。私は夜空を見上げて唇を噛んだ。

「ヨシ！ 彩！ タケルが帰ってきたらさ。今晚はタケルを離しちやダメだよ。一晩中、タケルを抱き締めてあげな！ 今は…いい事ばかり考えよ。彩…」

何とか、踏ん張った私。着ていたプルオーバーの袖口を伸ばし、濡れた彩の顔を拭き、まだ握っていた携帯を開けた。震える指。必死に掛けた携帯を、私は耳に当てた。

「もしもし、由美です。涼子さん？」

彩が「へっ？」と小さく漏らす。

「今夜：カラオケで彩達と盛り上がって：良かったら：彩をうちに泊めたいんだけど…。うん、いやそんな。私も寂しいから…。いえいえ。彩に代わりましょうか？ うん、分かりました。はい、有難うございまーす」

彩は、キョトンとし、私を見た。

「由美…」

「私からのささやかなプレゼントだよ。あ、彩の家に連絡しといたから。タケルが帰ってきたら、今夜は一晩中：タケルを抱き締めてあげな！ 今夜は一晩中：彩が愛してるタケルと一緒にいられるんだよ。だから、ほら、今は…良い事ばかり考えよ。彩、大丈夫だから」

また、雫が彩の頬を濡らし始めた。踵を踏ん張り、込み上げる涙を押さえていた私は出来る限りの笑顔を作って彩の頬を袖口で拭いた。

「由美…。ありがとう…。ありがとう…」

彩は我慢しきれなくなっていた私を抱き締めてくれた。タケル、早く彩に帰ってあげて…。

愛してるよ…。何て言われても、何の慰め、昔はなつてたけど、今はもうなんない。逃げよう！ 店に追いかけてきても困るから店も辞めたしね。どうせ、あいつが借りてる部屋なんだから、いやもう。一応、クラブのオーナーで、あいつは、羽振りは良かったけど、その分、女にもモテた。キープされて部屋に囲われるのも悪くはなかったけど、ドツと疲れが出てきた。顔見るだけで、殴りたくなつた事が何度もあつた。

「仕事の為に寝たんだよ」

浮気がバレる度の台詞にも、もう…最初の頃の信憑性…いや、んなの信じる私が馬鹿。それに気付くまでに時間掛けた私は、単純にマヌケ。

「んな金貢がれたかつたら、ホストに戻れ！」

喧嘩の始まりは、こんなやり取りから。もう、止まらなかったから、もう住むところも決めてあつたから、荷物もそこに送つたから。後は部屋を出て、鍵をポストに返して終わり。

「うん、OK！」

鍵をドアポストに入れた私。大きめのバッグを抱えてドアに背を向けた。ちよつと、しばらく自由にやってみよ。

エレベーターが一階に着くまでに私は最後の決意をした。

「雨？ まあ…いいか」

マンションの出口で、雨を見上げた私は直ぐ近くの地下鉄の駅に駆け出した。

「本当に、ごめんなさい！」

由美の家の玄関で、私達に深々と頭を下げる涙声の美紀。私と由美は顔を見合わせて微笑んだ。皆、無事で良かったあ…。

「もういいから！ お腹減ったでしょ？ 皆でお好み焼き食べよ」

由美に家の中に押し上げられた美紀は口と鼻を両手で覆い、涙を溢していた。

「彩！ タケルをありがとう」

雄二の言葉が、私をタケルに抱き着かせた。

「お、おい！ いきなりなんだよ！」

「ハイハイ、じゃ、これは…俺が貰ってくから、後はゆっくりな」

雄二はタケルの手からコンビニの袋を取り上げ、家の中に入った。

「これ…何かの足しにしてくれよ」

雄二はコンビニの袋をテーブルの上に置いた。

「二人は？」

雄二は視線を玄関の方に流し、私の野暮ったかった質問の答えを伝えた。

ハイハイ、ごゆっくり…。

「あ！ 後で…智喜も来るよ」

「智喜にも、タケルにも、頭上がないね。雄二は」

「マジ、頭上がないよ」

雄二は頭を撫でて苦笑い。テーブルで、うなだれていた美紀に、私はコンビニの袋からジュースを抜き取り、グラスに注いで出した。

「美紀…。もういいよ。私達はさあ、助け合う仲間なんだから。だから、今度、私が何かトラブルしたら…。美紀が助けてよ」

美紀がいきなり顔を上げた。

「うん！ 何でも！ 何か困ってる事ない？」

「あ、う、うん、今…彩をタケルに盗られて困ってたたところだから…。お好み焼きの支度手伝って」

「うん！」

美紀は立ち上って腕まくりした。

「これ、エプロンね」

素直な子だよ。いい彼女見つけたねって、雄二、その傷どうした訳！？

私達は玄関先に座り込んでいた。

「殆ど…無傷で終わったよ」

タケルは傷ついた右手を左手で覆った。

「由美…。今夜、大丈夫なのか？」

「うん、お父さんとお母さん夜勤だった」

「そっか…。悪かったな。心配…掛けて」

タケルが私の前髪を指で梳いてくれた。

「由美が…こう言う時は野菜刻んでたら落ち着くんだよって」

「で、お好み焼きか？」

静かに吹き出した後、しばらくタケルを見ていたら、タケルも私を見ていてくれた。何分ぐらい経ったか分からなかったけど、タケルから唇をくれた。

もっと欲しい。今夜は離さない…。

唇を離し、立ち上がったタケルを追い掛け、私からタケルに唇を着けた。

「ほら！ あいつら絶対、キスしてるよ！ ほらほら」

制服のジャケット、汚れ切ったシャツとズボンを脱ぎ、パンツ一丁で私と由美から体中の擦り傷の手当を受けた雄二は由美のお父さんの部屋着を着て、リビングの窓から玄関の方を覗き見していた。

「な、何やってんの！？ 雄二も手伝ってよ」

キッチンを離れ、私は手招きする雄二を引っ張ろうとした。

「そうよ！ んな二人のキス見たって仕方ないじゃんって、美紀も見てんのかよ！？」

「由美、由美、何かうつとりくるよ。二人のチュー！ほらほら」

美紀が私に手招きする。

「ど、どねよ？」

て、私も見に行くし…。

雨色の瞳

「エッ？ あ、明日!？」

私は携帯の向こうのタケルに叫んだ。

「うん…。お袋の客の店で、しゃぶしゃぶ食おってね」

私は、かなり焦ってたけど、タケルの声は落ち着いてる。私が言い出した事なんだ。だから、絶対、動揺を悟られたくない。

「分かった。何時？」

「七時。一緒に行く」

「うん」

携帯を切った後、私はクローゼットに走る。

「こっしちゃんらないよ!」

タケルのお母さんと初対面。

「何着て行く？ ふああ…。いざとなったら、あー、こっしよ」

服をかき集めていたら、クローゼットの扉の鏡に、私の顔が映った。

「ダメだよ…焦っちゃ」

抱えていた服をバサツと床に落とす。私は深呼吸をして、鏡の中の顔を見詰めた。

「大丈夫大丈夫…。何とかなる。何とかなるんだから…。由美…。頑張るから、私」

鏡に語りかけ、私は自分自身を落ち着かせた。

タケルと付き合い始めて二日目の夜。タケルは前日と同じように私を曲がり角まで送ってくれた。

「明日：また八時に、あの曲がり角まで迎えに行くよ」

「うん」

次の日、またタケルに会えるまでの長い過酷な時間が苦痛。夜七時半にタケルの家を出た。離れたくない！わがままを心の中で叫ぶ私。俯き、タケルの手を握り締め、胸から湧き上がる本心を押し殺していたけど、帰り道、どうしても我慢出来なかった私は、その本心を、言葉ではなく、タケルと目が合う度に唇を求め、舌と舌を強烈に交じわらす行為で伝える。当然、人目もあつた。でも、タケルの部屋での「思いのまま」を継続していた私達は、その「二人の地軸」に誰の介入も許さなかった。

終着駅の曲がり角。足を止め、唇を尖らせた私。可愛くない。タケルのシャツの袖口を掴み俯くと、タケルは、そつと私を抱き寄せ、深いキスをくれる。タケルに抱き締められながら首の角度を入れ替える。その日の甘く激しい内容が思い起こされ、路上にも関わらず、

私はエッチの延長をしている気分陥った。マジ、このままだと。唇同士が糸を引き合って離れる。

「出た」

私の両肩に手を置いたタケルが私の顔を覗き込む。

「何が？」

「タケルが、今日、私の中に沢山くれたものが…出た」

掴んでいたタケルのダウンベストの裾を揺らしながら言った。タケルは微笑み、再び俯いていた私を抱き寄せ、私の髪を撫でながら囁く。

「じゃあ…。早く帰ってパンツ履き替えないと」

もう！ 何でそんな早く帰そうとすんだよ！ バカッ！ そりゃ、タケルの優しさってのは分かるけど…。私の両親に心配を掛けさせないように、私を早く帰そうとしているタケルの優し過ぎる配慮を理解しているつもりだけど…。これも、早くなんとかしなきゃねえ。タケルともっといたいよ。でないと親がウザくなってくる。

「うん」

仕方なく頭を上げた私に、タケルはまた唇をくれた。タケルが唇を離すと、私の乱れた髪を耳に掛ける。あー！ もう！ マジ、帰りたくない！

「じゃあ…。また明日」

長いよ。明日まで。

「うん、分かった。このままタケルの分身と仲良く帰ります」

タケルが着ていたクリーム地のバスケットチエックシャツの衿を直しながら私は答えた。

その日、私はタケルと決めた。春休み中、タケルのお母さんが休みの月曜日以外はタケルの家で時間の許す限り愛し合う事。学校が始まれば、タケルが迎えに来てくれて一緒に学校へ行く事。タケルがバイトの日以外は下校途中、私がタケルの家に寄る事。そして、毎週土日と祝日は必ず一緒にいる事を。二人で決めたって、ほとんど私の主導だったけど。

「俺…ここで折り返すから」

「うん、じゃまた…明日八時ね。でも…私がタケルの家に行こっかあ？ もう…行き方分かるから」

一秒でも長く一緒にいたい。出来るだけ、ゆっくり話した。

「いいよ、俺が迎えに来る。彩と一緒に歩くの好きだから。迎えだけじゃなく、毎日、送りもする。男の責任さ」

話すの早いよ！ タケル…。

「有難う。タケル。朝…ご飯は…私が作るからね」

「うん、楽しみに腹空かせとく」

少しの沈黙が二人の間に入る。

「行けよ。ちゃんと見てやるから」

タケルが両手をデニムパンツのポケットに突っ込んだ。

「じゃ…また明日」

私は、一步、二歩とタケルから離れたけど、やっぱり我慢出来ずにタケルに戻って飛び付き、この日、最後のキス。クドいと思われなくても仕方ないけど、こんな私を夢中にさせた、あなたにも責任あんだよ！ 分かってんかよ？ その後、ゆっくりだったらまた戻ってしまう自分自身を強制的に行かせる為、無理に足を早め、玄関に辿り着く。曲がり角に振り返ると、タケルが手を振っていた。これ地獄だよ！ 戻りたいっ！ また明日会えるのに、涙が浮かんできたから、私は思いつ切り手を振り、タケルを見詰めながら玄関に入った。

「ただいま！」

ダッシュでトイレへ。脱いだパンツをバッグの中に忍ばせる。これ、また後でこっそりお風呂で洗って…。部屋でドライヤーで乾かそ。昨日と一緒だよ。そうだなプキン持ってきたよ。エッチ用のナプキンね。いるいる。明日の朝、タケルとコンビニ寄って買お。で、タケルの部屋に置いとけばいいんだ。嫌がるかな？ あいつ。オシッコしながら考え付き、トイレシャワーのビデのスイッチを入れる。もう家だから、もう出で来てもらっちゃ困るんだ。ごめんね、タケルの分身。トイレトーパーをカラカラ巻き取った。

何故か周りを気にしながらトイレを出した後、パンツ無しで自分の部屋に駆け上がった私。部屋の中で、違うパンツを履き、部屋の窓から曲がり角を眺めたけど、当然、タケルの姿はもう無い。窓ガラ

すがまた曇り、映り込んだ私の顔を消した。また、明日になれば…。最後の溜息と一緒に窓ガラスから離れた私はバッグから携帯を取り出しメールをチェック。由美からメールが来てる。そうだ、由美に話さなきゃ。私は由美からのメールを開いた。

…タケルとどう？ 上手くいつてる？…

由美と直接話したい。メールの返事を打たず、由美へ携帯を掛ける。由美はすぐ携帯に出た。

「もしもし…」

「もしもし…彩だよ」

「彩…。会って…話したいんだけど…」

「うん、会って…。話そ」

その夜、私はバイトが休みだった由美と、よくタケル達と行く大通り沿いのファミレスで会った。話の終盤、私は由美にタケルのお母さんについて相談した。

「そりゃ、タケルがどう言おうと…。やっぱ、お母さんには会って挨拶しておかないとね」

分かってくれた由美はレモンスカッシュを吸い上げ、静かにグラスをテーブルに戻した。

「でも…。エッチしてる時に、その…彼氏のお母さんを想像するってのは…私にはまず有り得ないね」

その数分前、エッチ中にタケルのお母さんを想像し、意識してしまった私の不思議な現象と感覚を由美に説明すると、当然、由美には、「な、何それ？」と、一瞬、引かれてしまった。

「私って…変かなあ？」

ストローを指でいじる。

「変っていつかあ…？ 私の経験と今まで私が聞いた話では…ないね」

やっぱり、変って事じゃん。

「でも…それは…彩の優しい性格が出てて良いと思うよ。うん、彩なら有り得なくはないか」

目だけを上に向けて、由美はストローをくわえる。

「私だからかあ？」

私は眉間に皺を寄せてオレンジジュースを吸い上げた。

「彩って…タケルのママに会った事なかったんだ？」

「う、うん、由美…あるの？」

「うん…。去年の夏休み前にタケルのママの店で髪切って貰って。それから、ズツとタケルのママの店で髪切って貰ってるよ。お友達割引してくれるしさ」

そうなんだ…。私は、やや唇を尖らせ気味にストローをくわえた。

「あ、でも、初めて店行く前にさあ…。わ、私、誘ったよ。彩を。でも、彩、そんな時、タケルと喧嘩してて…」

ストローから口を外す。

「あ、思い出した！ タイミング悪かったよね。タケルと喧嘩中だった」

別に、由美に嫉妬は無かった私。溜息で微笑みを押し出し、ストローをいじり始める。

「で、タケルのお母さんって…どんな人？」

「むっちゃくちや綺麗」

由美が少し私に顔を近付けて言った。椅子の背もたれに体を伸ばす私。

「うわー！ 何かプレッシャーだよ」

「で、スツゴいい人だよ。スゴイ話が上手いし、明るくて…相手を緊張させるような人じゃないよ。素敵な人だよ」

「なら…私もいけるかな？」

ストローをいじりながら、テーブルに視線を下げる。

「いけるよ！ あのママなら。彩なら大丈夫だって」

自然に滲み出た笑顔を由美に上げた。

「彩…。もういい加減にしなよ」

放課後、由美から誰もいない屋上に呼び出された私はその唐突で静かな言葉に戸惑った。

「な、何の事よ？」

由美は屋上のフェンスを握り、私に背を向けたまま。夕日に染まった由美の長い髪が微かになびく。

「もう、彩とタケル見てたら…。言わずにいられないよ。もういい加減にタケルに告げたら？」

「由美…」

まだ由美は私に背を向けたまま。

少し癖掛かった長い髪をいつもツーサイドアップにしている小柄な由美。誰がどう見ても可愛くって…。いつでも、どこでも、男の子達によくモテる。

「同じ学校じゃあ…付き合い辛いから」

そんな由美は、合コンなんかで広く知り合った他校の男の子達の中から気に入った子を選んで浅い付き合いを繰り返していた。

「もういい加減、一人に絞んな」

説教じみた事を由美に言ってた私も、タケルと喧嘩してムシヤクシヤした時は、由美に誘われるがまま合コンに顔出してた。けど、私の場合は、男の子と知り合っても、キスどころか手も繋ぐのも嫌結局、何も出来ない。そんな憂さ晴らしは、かえって、喧嘩してるタケルのを頭から、神経から、心から離さない。

合コンでは、いつも白け顔で、誰かの下手くそなカラオケ聞きながらジューズ啜って私。ありがた迷惑にも、無愛想が好きに変な奴等もいて、その内の1人は、なんとかって言う頭良い高校でフェンシングやってる奴で、結構、学校の女子達の間でも話題になってる男だった。他に行けばいいのに、そいつは学校帰りに白々しく私を待ち伏せしたり、私も迂闊にメアドと携帯番号教えたもんだからメールや電話やらで、私に迫って来たけど、呆れ顔と溜息の私は、全く興味ないまま無視。でも、結構顔が広がったそいつはシカトしてた私に逆ギレして、「俺は彩と付き合ってたんだ」って、大嘘を私の学校の女子中心に触れ回った。由美からその事を聞いた私は流石にキレて、そいつ捕まえて、「ウゼエんだよ！ 私には好きな人がいるんだ！ 邪魔だから二度とツラ見せんな！」。怒鳴り散らしてやった。私の別顔を見せられ、ビビったそいつは諦めたけど、学校には、その嘘は残った。

「彩、気にする事ないよ。噂なんてすぐなくなる。私も、経験あるからね」

他の女子から私の噂を聞いても、否定し続けてくれた由美。それ

でも、一旦広がった噂は、そう簡単には消えない。それもこれも、軽く個人情報を読んだ私が良くない。

「タケル達には、私がちゃんと否定しとくから」

「あいつらには…何にも言わないで」

「エッ？ 何で？」

「いいの。あいつらには関係ない話だから」

不思議そうな顔していた由美の肩を笑顔で叩いた私。

私が合コンから浮いた話を持ち帰っても、「はいはい、モテていいねえ…」と、いつも憎たらしく受け流すタケル。どうせ、そんな噂聞いても無反応に決まってる。無反応な奴に、わざわざ否定も肯定もする必要なんてない。開き直った反面、もう懲りた私は、それから、二度と合コンなんて行かなくなった。そして、男達との広く浅い付き合いを笑ってごまかしながらも繰り返していた由美も、高一の三学期を迎える頃には合コンとそんな付き合いをしなくなっていた。

「彩…。だからもう素直になんなくて。中学から彩と付き合い合ってるから分かるんだよ。彩が自分抑え込んで無理してるって。このままじゃ、彩もタケルも意地張ったまんま幸せになれないよ！ 何で、意地張らなきゃなんないの？ 何で、タケルを見返そうなんて考えなきゃなんないの？」

そうだね。由美…。震える由美の背中が霞み始めた。

由美…。だから、私は素直になれた。タケルに素直になれた。これからも、何があっても、頑張っていける。鏡に向かって深呼吸。床に散乱した服を集めて抱え上げた。

「俺のバイクのライトに照らされるまで、この二人やってるんだぜ！」

智喜が皆の笑いを誘う。

由美の家。お好み焼きパーティーは、結構、盛り上がった。

雄二と美紀のカラオケボックスから始まった馴れ初め話に彩と由美が瞳を潤ませたと思ったら、調子に乗った雄二が二人の初エッチに話を及ぼせる。顔を赤らめた美紀が、「もうう！ バカッ！」。叫んで雄二の顔を両拳でグリグリした後は、当然、「で、おめえらの初エッチは？」って智喜が俺と彩に突っ込んだ。「あ、それ、私、知ってるう！」。元気よく手を挙げた由美を彩が立ち上がって、「ちよ、ちよと止めてよ！」って両手で由美を抑える。

まだこんな時間かあ…？ キッチンに掛けた時計を見た。ただ、俺は、あの騒然とこの平穏の間に過ぎ去った密度の濃い二時間の長さを体感していた。

「いやでも…素敵なキスだったよ」

美紀が両手で頬を覆い、視線を遠くに飛ばした。

「で、おめらは、どこで見てたんだよ？」

俺は顔を振りながら尋ねた。

「あんな玄関先の目立つところでやってたら、誰だつて見るよ！」

笑いながら答えた後、由美はウーロン茶を飲んだ。

「絶対、第一発見者は雄二だよ」

彩が、雄二に人差し指を上下させながら言った。

「あ、いや、俺は…ちょっと涼みに窓の方に行ったただけだったの」

雄二の目が泳ぐ。

「あ、雄二、智喜…。さつき、美紀とも話してたんだけどさあ。今夜、三人はうちで泊まってね」

由美が上手く笑い話の流れに乗って言うてくれた。

「俺ら三人つて…」

質問をしそうだった雄二に、その意味と空気を読んだ智喜が視線を送り、微かにその視線を俺と彩に流した。これで、皆、俺と彩が今晚、途中で抜ける事を把握してくれた。

「今晚で、俺…族辞める事にしたんだ」

智喜の言葉に、若干静まった場の空気が微妙に揺れる。皆は智喜に体を向けた。

「前から…考えてた事なんだけどよ。今夜で決めた。あ、でも今夜の件は、きつちり仲間に引き継いだから、心配いらねえよ。まあ、あそこまでやり込んだんだ。奴らも再起不能さ。念には念をで、あれから、奴ら一人づつ、カメラの前で反省させてやった。傑作ムービー撮って、より一層圧力掛けてやったから。もう大丈夫さ」

ムービー！？ そりゃ完璧。犯罪調書と同じだ。

「俺のじっちゃんにも、ばっちゃんにも、迷惑かけちゃったからさ。今後は、出来るだけ平和に生きるよ」

話し終わった智喜がコーラを一気に飲むと、由美が空いたグラスにコーラを注いだ。

「智喜みたいないい人に何で彼女いないの？」

美紀の唐突な質問が皆の苦笑を誘う。

「なーんでだろうねえ？ 世の中の女が見る目ねえんじゃないの？」

照れた智喜。皿に残ったお好み焼きにパクついた。

「由美…どうよ？」

「どおよって？ 何が？」

雄二の振りに由美がすぐに反応。

「い、いや…その…由美もフリーなんだし。バイト先も一緒だし。智喜の彼女に…」

「いやいやいやいや…」

智喜が握っていた箸を振った。

「私が嫌だつての！ それに、智喜は好きな人いるもんね？」

智喜はお好み焼きを喉に詰め、慌ててコーラを飲み込む。

「えっ！ 学校で？」

彩が由美と智喜を交互に見た。

「違う違う。うちのバイト先によく来る人。綺麗な年上姉さん。ねー、智喜？」

「い、いやっ、単なる憧れってか…。まだ真剣に話した事、一回しかないからよ」

「話した事あんだ？ 年上ねえ…。それガチポイント高めえよな？」

昔の癖で、俺は雄二を見る。

「年上！ いいんじゃない…」

雄二が乗りかけたけど、俺達は彩と美紀の鋭い視線と咳ばらいに止められる。まさか、あの智喜とこんな話が出るなんて…。

「美紀。今、家に電話したら？ 皆、いるしさ。賑やかなところで掛けた方がお父さん安心するよ」

由美が俺のグラスに烏龍茶を注ぎながら美紀に言った。今夜、美紀は由美姉さんと色々話し込むんだろうなあ。色々、聞いてもらえ。由美なら間違いない。

「じゃあ…ここで」

俺の斜め隣に座る美紀。バックから携帯を取り出し、家に電話を掛け始める。親父かあ？ 親父ねえ？

「もしもし、私だけ…。今、友達のところ。今夜、友達のところ…」

美紀が親父と話してる最中、俺は美紀から携帯を奪い取った。

「もしもし、親父か？ 久しぶり、タケルだよ」

美紀と皆は突然の俺の行動に固まる。

な、何で？ タケルと美紀の声が。突然、美紀の声がタケルの声に変わり、俺の体は膠着する。落ち着け！ 落ち着け！ ま、まず、タケルの説明を…。

「何でって？ 美紀に惚れられちゃってさあ。付き合う事になっち

まっつてさあ……」

一瞬、皆、吹き出したけど、美紀が笑いを堪えて俺の背中を叩いた。

「イツ！ いやいや、同じ学校なんだからさ。友達になっても不思議じゃねーだろ？」

同じ学校つてのは分かってるけど、本当に彼氏じゃないだろうなあ？

「彼氏？ 俺が？ 美紀みないな優しい子は俺には合わないって。俺の彼女はスンゲーいきついから」

一瞬、また皆、吹き出したけど、隣に座る彩が俺の背中を叩いた。

「イツ！」

俺は本棚の家族写真を見ていた。

「あ、有難う。タケル、タケルがあ……」

受話器が濡れ始める。

もしかして、泣いてんのかよ？ 勘弁してくれよ。

「あー、で、今夜、俺達の仲間の由美って子の家に美紀泊まるからさ。心配しなくていいよ。でも、由美が美紀に惚れてるらしいんで、相当、こいつらヤバ…」

一瞬、またまた皆、吹き出したけど、斜め向かいに座ってた由美が空のペットボトルで俺の頭を叩いた。

心配なんてする訳ない。タケルと美紀が友達同士になった。こんな親父なのに…。

「初めてなんだよ。美紀が外泊するって連絡くれたの」

はあ？ もうちよい、しっかりしてくれよ。親父。

「そ、そうなんだ。俺だけじゃない。美紀には、いい仲間が出来た。うん、分かった。じゃ、美紀に代わるよ」

頬を湿らせていた美紀に携帯を返す。

「もしもし…」

これで、全てOKだ。彩が涙目で俺を見詰めて微笑んでる。

「だからあ、タケルは彼氏じゃないって」

美紀の言葉に、またまたまたまた皆、吹き出した。

「でも、彼氏も出来たから、今度、紹介するね」

美紀の言葉に、またまたまたまたまた皆、また吹き出す。しかし、唯一、心配そうに俺の顔を見る雄一。その顔が可笑しくて俺一人、遠慮ない笑いを飛ばした。もう、おめえも腹決める！ 美紀が携帯を切った。

「パパが、皆に宜しくって」

一瞬で和やかになった。私は静かにタケルを見詰めていた。私の彼氏はいつも皆に優しい事するね。愛してる。タケル。

これで、美紀は誰にも遠慮なく、気兼ねなく、私達とタケルと付き合える。今夜、タケルの最後の仕事が終わった。私は向かいに座っていた彩を…。彩と同じような涙目で見詰め、笑顔を滲ませた。

「タケル…。ありがとう」

携帯を閉じた後、私はタケルに対して躊躇していた自分自身を恥

じた。この日、最後の涙をテーブルに落とし、完全に過去の私からさよならした。

「親父の事は、もう何も気にしなくていい。親父にも言ったように俺らは友達同士さ」

涙顔を綻ばせ、美紀は頷いてくれた。俺は、また性懲りもなく涙ぐんでやがった幸せ者の雄二に向かって、「ハ、ン、カ、チ」と声を出さずに口だけ動かした。慌てて、雄二はポケットを漁ってたけど、由美のお父さんの部屋着からは何も出て来ない。俺に苦笑いを返すだけだけの雄二。しょうがねえなあ。俺がポケットからハンカチを出しても良かったけど、ゲロ臭いのもちよつとだったから、由美に目で合図を送ると、鼻を吸ってテーブルを離れた由美。

「で…おめえらが何で泣くんだよ？」

俺は雄二と智喜に言った。由美がタオルを6枚持って帰って来た。い、いやいや、俺は泣いてねえんだけど…。ま、まあ、いや、取り敢えず、貰っとくよ。

「いや、つくづく、タケルって優しい奴だなってよ」

智喜のその威圧感ある顔に涙似合わないって。

「俺…しっかりしなきゃな」

雄二、今晚は格好良かったよ。美紀を宜しくな。

「シャツッ！」

俺は背伸びして立ち上がった。

「彩！ 行くぞ！」

「うん！」

涙を拭き終わった彩も立ち上がる。

由美が私にウインクしてくれた。さあ、今夜は、もう私だけのものだからね。タケル！

「大体、何で俺がおめえを迎えに行かなきゃいけないんだよ？ あれだけ男いるんだったら、誰かに送って貰えよ」

バイト帰りのタケルに連絡が取れ、合コン会場のボックスまで私を迎えに来て貰った。デニムパンツのポケットに両手をつ込み、ウォレットチェーンを揺らしながら、やや先に歩いていたタケルに私は追い付く。

「だって、クドい男ばっかだったんだから。『彼氏いるの？』って聞かれたら、いるって言うに決まってんじゃない！ 証拠見せねえと、あいつら信用しねえしよ」

閑散としたアーケード街に、二人の声と足音だけが響く。

「で、俺がその彼氏役かよ？ 他にいねえのかよ？」

「んな適当なの他にいねえよ！」

「適当！？ 俺は適当に扱われるのと普段着けない香水をプンプンさせてる女は大嫌いなんだよ」

確かに、コロンは着けていた。

「で…由美はいいのかよ？」

由美を心配して、何で私を心配しないんだよ？

「あん中に…ちょっとした由美の彼氏いるから大丈夫だよ」

「はいはい、あんたら、モテていいねえ」

いつものようにサツパリ言っつて、歩くスピードを速めたタケル。
また私はタケルに追い付いた。

「おめえだつてモテてんじゃねえか！ 首筋にへんなもん着けて学校来やがって」

「あれは、隣に座つてた女が洒落で吸い付いて来ただけだつて言つたら」

「フツ！ どんな洒落だよ？」

「どんな洒落受けようが、どんなブスな女に絡まれようが、合コン終わった後に俺は誰にも迷惑掛けた事ないね」

「じゃ、じゃあ…これは借りでいいよ。今度、私が、そっちの合コン終わった後、タケルを迎えに行つてやるよ」

「いらねえよ！ 合コンつてのはその後が楽しみなんだよ。邪魔されたくないね」

私は、一瞬、足を止めたけど、タケルは歩き続ける。

「あつ、そう！」

またタケルを追い掛けた。

「な、なら、断ればよかったじゃん！ 何で、わざわざ迎えに来たんだよ？」

溜息と一緒に、タケルは歩く速さを弱める。

「別に…。帰り道だったからよ」

タケルは鼻を指で擦った。

「正直言えよ！ 私が…心配だったんだろ？」

勇気を出して尋ねると、タケルがまた指で鼻を擦る。

「言っとけ！ 自惚れキツイ女だねえ。何で俺が彩の事心配しなき

「やいけないんだよ?」

「可愛いねえ! おめえは態度に出てんだよ」

「はい?」

「困った時、嘘ついた時、凶星突かれた時、いつも、おめえ、鼻、指で擦るじゃん」

「擦ってねえし」

そう言つて、また鼻を擦るタケルは、ハッと気付いて鼻を擦った人差し指を慌てて離す。

「バカじゃん! おめえ」

「ただの癖だよ!んな意味ねえよ!」

本当にただの癖かもね。タケルが私に追い付いた。

「香水嫌いなんだろ!? 寄るなよ!」

「嫌いじゃねえつての。着け慣れろつて話だ。もうちよいフルーテイ系にしろ。おめえにフローラルは合わねえ」

何よ!?! 以後、気を付けるよ! 手くらい繋げつてんだ!

「ねえ、タケル…。今晚どこ行く？」

由美の家を出て、しばらく、歩き、それまでの雰囲気冷ます為に入った駅前のカフェ。両手でタケルの右手を包むと、タケルは左手を私の右手の上に沿える。

「そっちなあ…。駅裏にちょっとしたホテルがあるから、そこ泊まるっか？」

タケルが窓の外を見た。私はタケルの左手の下から右手を抜き、タケルの両手を私の両手で包んだ。初めてのお泊りだね。

「タケル、行ったことあるんだ？」

私は業とらしく目を細めて、少し顎を突き出して言った。

「ね、ねえよ！ 電車乗ってたら、ちよこつとそこが見えただけっ
ての」

タケルが鼻を擦らないように、私はしっかりタケルの両手を握り締めていた。

金曜日の騒動が嘘のように月曜日が過ぎて行った。その日、俺達は不思議に…いや、自然に、あの騒動の話はしなかった。美紀も全くの別人になり、その天然キャラを活かし、雄二からツッコミを入

れられていた。

昼休み、食堂でパンを買い込んだ後、俺達の新しい「たまり場」となった体育館裏で、雄二と智喜と一緒に男同士のニヤニヤ話をしていたら、「あっ！やっぱりここだ！」と彩の声が響き、女三人に邪魔を入られる。今日は雨も降りそうにないや。

放課後、廊下でバツタリ由美に会う。

「おう！ 帰りか？」

「うん。彩なら、委員会行ったよ」

「聞ってるよ。バイトあるから先帰るって言ってある。智喜は、補習あるみたいだし。雄二は、美紀と帰ったよ」

「そつかあ…。じゃあ、私も帰るね」

「おう！ じゃ」

俺を通り過ぎた由美。徐々に俺の背中から由美の足音が離れて行く。

「由美！」

振り向き様に叫ぶと、足を止めた由美。ゆっくりと俺に振り返ってくれた。

「色々、ありがとくな。由美には、いつも助けられっぱなで」

教室から廊下に延びた夕日。由美の小さな体を包んだ。

「どうしたの？ タケル。急に、変だよ」

由美の微笑みが杏色に染まる。

「いや…。何となく、言いたくって」

由美は口に手を当て、笑いを隠す。

「じゃあね！ また明日」

「おう！ また…明日」

その夕日から由美の背中が抜けようとしていた。

「由美！」

クドい俺の呼び掛けに、吹き出して足を止め、笑顔のまま振り返ってくれた由美。肩から鞆を降ろした。

「なーに？ タケル！」

思わず、俺は俯く。

「あ、いや…。たまには…たまには、一緒に帰ろうか？」

顔を上げると、笑顔のままの由美が俺を待っていてくれた。

「うん！一緒に帰ろ！ タケル」

平穏な日々が戻ってきた。

何なの？ この明るくもなく暗くもない静かなロビーは？ 何か、こええ。

カフェを出た私とタケル。駅前の騒々しさが収まるまで歩き、駅裏に抜ける高架を潜る。そして、中高生達が騒ぐボックスとクラブがひしめく駅前の雰囲気とは、かなり掛け離れ、演歌っぽい歌声が漏れる駅裏の短いネオン街に着いた。タケルの腕にしがみ着く私。そのネオン街から街灯もまばらな路地に入ると、白い建物が、ぼんやりとした緑の照明の中に浮かんでいた。あれが、ホテル？ 結構、おっきいねえ。でも、何か、怪しい。コツコツとそのホテルの白い壁沿いに歩く。L字に突き出たホテルの入口が見えた。

「表…目立つからさ。裏口からの方がいいだろ？」

「何で、おめえ、こんな怪しい裏口知ってたよ？ この変態！」と、馬鹿のタケルに突っ込む余裕もなく緊張していた私は、「うん、うん」と頷き、その裏口からホテルの内部に入った。

「どの部屋にする？」

私達以外は誰もいない明るく怪しいロビー内。タケルは写真とポタンがいっぱい付いたパネルの前に私を連れて行った。へー、色々な部屋あるんだ？ これで選ぶようになってんだね。

「タケルに…任せる」

んなの、分かんねーから、そー言うしかねえよ。私はまたタケルの腕にしがみ着く。タケルがパネルのボタンを押して部屋を選び、私達はエレベーターに乗った。初めてのホテルでかなり動揺していたせいか、私はタケルがどんな部屋を選んだか全く覚えていなかった。エレベーターを降りると、正面の壁にオレンジ色の矢印がチカチカと点滅。それに合わせて、薄暗い廊下を左に曲がると、今度は部屋番号が点滅していた。あれが私達の部屋って事ね。なるほどねえ、これなら誰にも会わずに部屋まで来れるねえ。

部屋に入ると、そこは、まるで絵本に出てくるような薄ピンクの壁の部屋。真ん中にあったキングサイズベッドの上部には電話とテレビと何やらまた色んなボタンが付いた緑に光るパネル。カラオケも出来るみたいで、壁にはマイク二本が吊され、テーブルにはよくポックスで見るようなリモコンと歌本が置かれていた。バスルームはガラス張りで、部屋から中が丸見え状態。タケルとは何回もお風呂入ってたから別に恥ずかしくはない。何か、面白い。生まれて初めての不思議な部屋が私の気分を緊張から興奮に変える。私はタケルから離れ、そのキングサイズのベッドに飛び乗った。

「うわ！ 目茶苦茶おつきいねえ！ このベッド。ナニナニ？ これ」

ベッドのそばで微笑むタケルを尻目に、私はベッドの上の装置をいじる。部屋のライトが明るくなったり、暗くなったり、BGMが鳴ったり、消えたり、テレビのチャンネルが変えられたり、エアコンを調整出来たり、単純な操作ボタンだった。

「へー、凄い凄い」

枕元の電話が鳴る。タケルが受話器を取った。

「あ、はい…。泊まりです」

受話器を置いたタケル。私が、「誰？」と、尋ねたら、フロントからだったようで、「お泊まりですか？」って聞かれたらしい。そうだ、初めてタケルとお泊りなんだ。うっれしい！ 改めて、その事実を実感した私は完全にリラックス。ベットに仰向けになり、天井の鏡に映る自分自身を眺めた。

ベッドから降りた私はガラス越しにバスルームをチェックしに行く。

「おつきいねえ！ 二人で余裕じゃん」

振り返ると、タケルが照れ臭さそうに俯く。次に、私は冷蔵庫の上を設置されていたガラスケースを発見。何か、見たことないのが入ってる。好奇心に駆られて近付き、中身を見ると、グニヤグニヤいぼいぼの長い棒が数本入っている。

「何…これ？」

ソファーに腰を下ろしたタケルに尋ねたけど…。とてもおぞましい使用法を説明された。

「うっわ！ 有り得えないし」

ひんしゆくしながらガラスケースを離れた私。ソファーに座るタケルに飛び込んだ。

「おっ、おい！ 危ねえって」

私を受け止めてくれたタケルに、私はそつと唇を近付ける。タケルとの長く濃い絡み。それに合わせて、私は両腕をタケルの首に回した。やっと、落ち着けた…。

タケルが唇を離すと、私の唇から糸が引く。

「ゆっくり…愛し合おう。夜はまだ長いから」

私の頬を撫でながら、タケルが囁いた。いっぱいタケルと愛し合える。一晩中…。

「だね。今日は、しっかり抱き締めさせてもらおうよ。離さないから」

軽く自分の唇をタケルの唇に当てた。タケルは私の体から離れ、立ち上がる。

「一緒に風呂入ろう。疲れたろ？ 風呂入れてくる」

「あ、タケル座ってて。私が、お風呂入れるから」

タケルを止めて、バスルームへ向かう。

バスタブにお湯を入れている所をガラス越しにタケルに見られていた時は、やっぱり、ちょっと恥ずかしかった。髪を耳に掛け、含み笑いでタケルに手を振る。蛇口から勢いよく出るお湯。湯気がガラスを曇らせた。

バスルームを出て、洗面台で歯を磨こうと歯ブラシに手を伸ばし時。洗面所に入って来たタケルが私の背中に抱き着き、強引に、私を振り向かす。

「タケル、どうした…」

言葉を唇で塞がれ、激しく舌を絡められる。タケル…。体の強張りが溶かされた。

私の口から滑り落とした唇で首筋を吸いながらオツパイを柔らかく揉むタケル。私のインナーの裾を背中から捲り上げ、器用に片手でブラのホックを外すと、トップス、ブラ、インナーを全て一緒に取り去った。

上半身を表にした私を抱き締めてくれたタケルと再び激しく舌を絡ます。唾液にまみれたタケルの唇が乳首に落ちていく。乳首を吸いながら、タケルが私のジーンズのホックを外してジッパを下げると、タケルの唇と舌は私の下腹部へ。タケルは、一気に私のジーンズとパンティーを足元までずり下げた。

「ウツ」

自然に小さく漏れた声。ジーンズとパンティーを、タケルは足元から一本づつ丁寧に脱がせてくれた。タケルの機敏な動作によって全裸にされた私。競り上がってきたタケルを恥ずかしく抱き締める。しかし、その恥ずかしさとは裏腹に、私はタケルのパーカーを掴み、大急ぎでタケルを脱がしに掛かる。急激な私のサポートを受け、タケルは慌ただしく全て脱ぎ散らし、全裸になった。

もう私はタケルとエッチしたくて仕方ない。随分前から濡れていたアソコがその本能の証明。タケルの首に巻き付ける腕に力を入れる。口内の水分量を増やし、タケルの舌に絡み着く。口の中にピチャピチャ。バスルームからドボドボ。股間にはネチヨネチヨ。それぞれ音が共演している。

唇を離したタケルは、少し乱暴に私を後ろ向きにし、お尻を突き出させて洗面台に両手を付けさせた。

「アウウ…」

私のお尻の下にひざまづいたタケル。私に両脚を開かせ、股下に潜り込んでアソコを舐める。ヤバイ！

「まだ洗ってない！ 汚いよ。そこ」

その訴えは羞恥と快感に掻き消され、喘ぎに変えられる。

「アッウウアアアッ！」

由美の家を出る頃には…いや、その前から私のアソコは濡れていた。私の膣から滲み出た液体。パンツの生地に染み込み、濡れた生地が醸し出す独特な違和感を地肌に得ながら、私はタケルとホテルまで歩いた。

タケルは、いつも私を濡らす。学校でも、路上でも、皆と一緒に遊んでる時も、私は、いつも濡らされてる。タケルの澄み切った美しい瞳。いつも、優しく、寂しい色を滲ませてる。まるで、あの日の雨のように。

何故、そんなに優しいの？ なぜ、そんなに寂しいの？

心の中で呟く私に、あなたは、そっと静かに瞳を閉じる。あなたの瞳が開かれれば、私は、あなたの雨色の瞳に吸い込まれ、その雨の中で濡れるんだ。悔しい程、切ない程、耐えられない程、許して、震えて、素直にさせるんだから、あなたの瞳は。抱いて…。タケル。あの日の雨のように…。

充分過ぎる水分を含んだアソコ。繊細に動くタケルの舌先が私のクリの皮を器用にめくり上げ、その液を塗り付けるように、丹念にクリ本体を転がす。

「アッ！ タッ、ウッアッ！」

どよめく私に共鳴して、止めどなく流れる液をタケルが、ズーツと、吸い出す。洗面台の鏡に映し出される私の悶え顔。その恥ずかしさに逆らって、私の喘ぎはエコーの効くバスルームまで。

「お、お尻の穴まで…。そんな一生懸命…。マジ洗ってねえのに汚ねえよ！ タケルーツ！」

「いいんだ！ 彩のは何でも綺麗なんだ。美味しいんだ。愛してる…。彩」

タケルの吐息がお尻の穴に…。

「あ、愛してるっ！ 愛してるよ！ タケルツ！」

クリを指で弾きながら、タケルは私の肛門を舌先で攪り、舌全体でベロンと舐め上げ、舌先を萎め、挿入してグリングリン。繰り返す…。繰り返される…。

「も、もう自由にして！ おめえのもんだ！ この体。ぜ、全部、タケルのっ！ クッアアアウアアウクアア…。自由にして！ アアアツア、愛してる！」

鏡に映っている自分自身とタケルに叫び声を上げた。

私の基礎体温が高温相に上がると、四日間はイエローのヘアゴム。その四日間が過ぎると、ブルーのヘアゴム。今日はブルーのヘアゴム。安全日で避妊なんていらぬ。タケルと決めた安全日の告知方法。タケルは分かっているはず。だから、だから…。

「早くっ！ 入れてっ！ タケルツ！ 入れてっ！」

我慢の限界を超えた切願をタケルに叫び伝える。その言葉を受けたタケル。ついに立ち上がり、丁度いい高さにあった私の膾口にその固いものの先端を合わせた。

照準

タケルの照準が定まった瞬間、標的である私の膣を一気に突き上げた。

「グアッ！」

声が弾けたのと同時に、私の頭は上がり、上半身は弓なりに。私の子宮口に衝突したタケルの先端は、早速、膣内で機関銃のように動き、私の膣内に高速連続攻撃を与える。

「ウツハ、アアアアアアア…」

洗面台の鏡に映る私の下品な姿。その悶えと共に、その場をより卑猥に演出する。

「あああ…愛してる…。タタタケルッ！」

タケルは私のオツパイを鷲掴みにして上半身を洗面台から浮き上がらせた。直立しているのか傾いているのか分からない姿勢。お尻だけを突き出してタケルのチンポとの結合を維持していた私は、必死でタケルの首に腕を巻き付け、自分の顔を何とかタケルの顔に向けて唇を求める。

「愛してるよ…。あ、彩…」

重なり合った唇からタケルの声が漏れた。

「アッ！愛してるっ！タケルッ！アッ！アッ！アッ！アッ！アイッ！して

っ！るっ！」

タケルの突き上げに合わせて私は叫んだ。私のオツパイを鷲掴みにしてたタケルは、もう片方の手を私の内股からアソコに回し込み、クリを弄る。

「アッ、ウウウアアア…。き、気持ちいい…。タケルッ！」

私はタケルの腰の動きと指の振動に全てを預けた。

「す、凄いよっ！ アッウワウアアア…」

堪らず、私は洗面台に両手を戻したけど、直ぐに崩れて両肘を洗面台に掛けて体を支え、お尻を更に突き出す。タケルは円を描くような腰使いに変え、私のクリをニルニルと滑らせ、グリグリと強く押し込むと、プルンプルンと弾き、ブルブルと振るわせる。

「クーツ、ウウウアウウアーツ！」

その日、最初の絶頂を迎えようとしていた私。目の前の鏡に映り込んだ自分自身がどんな表情でその絶頂を迎えるのか、興味を抱き始めた。タケルの腰が円周運動から高速入出運動に戻る。

「タ、タケル…もう、もう、わ、私、イクよっ！」

「彩！ 俺もっ！ イキそうだ！」

タケルの高速な腰の動きとクリを撚る指の奮えは止まらない。

「アーツ！ タケル！ イイイグーツ！」

鏡の中の私は目を細め、口を半分開け、顎を上げて肩を奮わせている。こ、これが、私のイキ顔…。

「俺も、俺も、彩！ イクツ！」

私の奥深くにその先端が突き上げられ、「アツ！」と、私が声を上げると二人の動きが止まった。僅かな静寂。そして、大噴火。

「ウウツ、タ、タケル…」

私の中で出てる…。タケルの分身…。タケルの愛情…。熱い…。いっぱい出てる…。

タケルのその放出に連動され、私の全てが奮える。私は消え入りそうな意識の中で、私の排出液とタケルの精液が膣内で混合される感触を得ていた。

バスタブからお湯が溢れ落ちる音が聞こえた。二人からも熱いものが溢れ落ちた。

父兄用のガレージで、私はワンボックスカーの陰に潜んでいた誠を発見した。

「何してんのあいつ？」

入学式直後、誠は生徒達がざわめく校庭を一人眺めている。何で

？ タケルがこの学校に入学するなんて言っていないのに…。誠に駆け寄る私。

「誠！」

私の声に、誠は割と冷静に振り向いた。

「おう！ 久しぶり」

私から駆け寄って声を掛けたけど、誠の顔を見た途端、私はある程度の距離を元旦那との間に保って足を止めた。

「どうしてここに？」

鼻を擦る誠。

「おまえと芳恵を体育館で見て…まさかって思ったよ」

「ま、まさかって思ったのはこっちの方よ！」

苦笑いで私から校庭に、誠は顔を向ける。

「実は…うちのも…ここなんだ」

「エッ？」

一瞬、驚いたけど、その偶然に笑いが込み上げた。俯いて口に手を当てた私。自然に誠との間に保っていた距離が短くなる。

「ぐ、偶然って言うか…凄いやね」

「だよなあ。まさか、一緒の高校になるとはな」

「本当。タケルと雄二と美紀ちゃんがね…。声掛けてくれれば良かったのに」

私は軽く誠の胸を突いく。

「いやあ…。やっぱり掛け辛いよ。芳恵もいたからさ。元女房には」

誠はまた鼻を擦りながら言った。

「相変わらず、気使い屋ね。タケルには会ったの？」

「いや。気付かれてないみたいだし…。このままでいいよ」

溜息で顔を沈ませる誠を見て、タケルに対する誠の罪悪感を理解した私は微笑みを作り、黙って頷いた。

「美紀ちゃん…。元気にしてる？」

「うん、元気にしてる。あそこに…。いるよ」

誠は花壇の傍で一人俯いている娘を指差した。

「千佳のお葬式で見て以来だね…。大人っぽくなったから、気が付かなかった」

また苦笑い。誠は静かに頷く

「大人っぽくじゃなくて…大人しい娘でさ。友達もないみたいで。なかなか親父やるのも難しいよ」

「じゃ、タケルと雄二に言っところか？ 美紀ちゃんと友達になっ
てあげてって」

顔を上げて、誠は美紀ちゃんを眺めた。

「有難う。でも、あいつらに気遣いさせたくないから。あいつらに
美紀の事は言わないでくれよ。あいつらには、好きな友達作って高
校生活楽しんで欲しいから」

誠の父親としての気遣いを理解した私は、微笑みを浮かべて頷い
た。

「裕子！ 何してるの？ これから…。エッ！ 誠？ 何で？」

駆け寄って来た芳恵が誠を見て驚く。無理もないね。

「おう！ 久しぶり！ 相変わらず可愛いなあ…。芳恵」

「またまた、何言ってるのよ！」

「うん、元気だね！」

「相変わらず、あんたも格好いいよ。誠」

苦笑いを振り返えらせて、誠は私達に手を振った。

「千賀が生きてたら喜ぶだろうねえ…。美紀ちゃんの入学式」

校舎に振り向いた私は芳恵と一緒に歩き始めた。

「裕子は優しいね。千賀の事そう言えるなんて…私には考えらんない」

生徒達がいなくなり、閑散とした校庭を眺める。

「もう昔話よ…」

校庭から芳恵に顔を向ける。

「さっ！ 教室で緊張してる息子らの顔拝みに行こ」

私達は昔懐かしい雰囲気漂う校舎に入った。

「ハッハハハッ！ やるじゃない。タケルも」

受話器から裕子の笑い声が聞こえる。

「美紀とタケルが友達同士になってくれて。それに、タケル以外にも友達できたみたいだから」

「きつと、タケルの彼女の彩、友達由美、当然、雄二とも仲良くなってるでしょうね。私が言うのも何なんだけどさあ。美紀ちゃん、

楽しくなるよ。あの子達と友達になっただんなら」

突然の元亭主からの電話にも、裕子は賑やかに話してくれた。

「そ、そうかあ…。なら良かった。でもさあ、彼氏もできたって美紀が言うんだよ。」

「彼氏？ 彼氏のどこがいけないのよ？ あんた娘の事言えるの！
？ 佐紀に彼氏が出来た時と同じ事言わさないでよ！ 親父が彼氏くらいで何ビビってたよ！ しっかりしろ！」

最後は、久しぶりに裕子に怒られた。

タケルと二人で、バスタブの中に浮いていた。

足を伸ばせて寝転び、無理なく体をクルクルと回転させられる広く浅いバスタブの中。いつもタケルの家と一緒に風呂に入っている時のように、私がタケルの体を背もたれにする。柔らかく私の体を背中から抱き締めてくれるタケル。時折、手で湯を掬って私の胸に掛けてくれる。これ好き…。タケルの顔を包み、首を捻って頬に唇を着けた。

「お湯…温くない？」

「丁度いい湯加減。彩が入れてくれた風呂は最高」

タケルは私のオツパイを揉みながら首筋にキス。

「彩…」

「何？」

「心配掛けて、マジ、ごめんな。俺、いつも歯止め効かなくてさ」

「心配させられた後は、こつやってタケルと愛し合えるんだから、心配させられるのも…悪くないよ」

首を捻り、タケルに唇を求める。タケルは甘く舌を絡めてくれた。

「だから…今夜は…いっぱいタケルを愛させて」

タケルは強く私を抱き締める。

「俺の方が…いっぱい愛してあげるって」

「いや、私の方だって」

タケルの包容力が弱まった。

「俺だよ！」

「あ、た、し！」

少し腰を浮かせた私は軽くタケルの袋を握った。

「いててて！ わ、分かったよ。彩の自由にして」

タケルは笑ってお湯を救って顔を洗う。

「でも、さっきはビックリした。息なりタケル襲ってくるから」

クルツと体を回し、タケル覆い被さる。タケルが私の濡れた前髪を耳に掛けてくれた。

「我慢出来なかった。彩は、したくなかった？」

「したくてしたくて仕方なかった！」

恥ずかしさを隠す為、タケルに唇をぶつける。

「最近、俺らのエッチって息が合ってきたよな？ したいときも一緒だしな」

言われてみれば、そう。私のしたい時はいつもタケルはしてくれただ。その上、絶頂時のタイミングも最高。お互いの意識と体が常に疎通しているよう。

「だね！ 凄いよね。私達って。いつも求め合ってるんだよね？」

唇を離れた私はタケルの腕枕に頭を着けた。

「ああ…。いつもいつも求め合ってる。彩…」

片手でお湯を救ったタケルが顔を洗う。私はタケルを見上げてタケルの言葉を待った。

「彩は、いつも、俺に命をくれる。彩と離れてる俺は死んでも当然。何も無い。だから、彩は俺の命より大事な存在さ」

ダメだ！　また涙出そうになる。慌てて、私はお湯を手で掬って顔を拭う。

「私にとつても、タケルは私の命より大事な人だよ。タケルがいなきや、生きてたつてしようがない。私の方がタケルを愛してるんだからな！　よく覚えとけ！」

明らかに泣きながらツンと顎を上げ、徐に両腕をタケルの首に巻き付ける。タケルの野郎が鼻で笑いやがった。

「俺の方が愛してるに決まってるじゃん！　おめえの方こそ覚悟決めろ」

分ならず屋のタケルが私の胸元に軽くキス。

「違う違う！　絶対、わ、た、しっ！」

バスタブに激しい波が立つ。負けず嫌いの私はタケルに引き寄せられ、強く抱き締められて唇を押し付けられた。最高に幸せ…。

「彩…。愛してるよ」

私の呼吸の中で囁いてくれたタケル。私の体を浮き上がらせて胸に顔を埋めた。

「愛してる…。タケル」

タケルの頭を強く包んむ。

「知ってた？」

タケルが私の胸を舐める。

「何を？」

「撥りたい！」

「今日が金曜日だって事？」

「あ！ そうだ！」

「じゃ、明日も明後日もいっぱい愛し合えるじゃん！」

曜日感覚をなくすほど、不安な時間を過ごしていた事に気付く。

「そう言う事。今日入れて3日…。全て彩に捧げるよ」

「凄い！」

私は再びタケルを抱き締め、落ち着くまでその姿勢を保った。

「疲れたでしょ？ お風呂出たら、ベッドでマッサージしてやるよ」

タケルが私の胸から顔を上げる。

「そんなサービス…。彩姉さんから受けられるんすか？」

「あ！ お姉ちゃんって言えば…。丁度、今日、タケルのお姉ちゃんのお服着てたしね。お姉ちゃんのお服着てやってやるよ」

「いいよ！ そんな姉貴コスプレ！」

「タケルちゃん…」

指先をゆつくりタケルの鼻先から唇に滑り落とす。タケルは眉間に皺を寄せ、口を結んで私を眺める。

「お姉ちゃんに…」

タケルの唇を潤した指先で、ゆつくりとタケルの顎を撫でる

「全部任せなさい…」

タケルは眉をへの字にして私の指を払いのけた。

「いいつての！ おめえ」

笑いを奮わせて私を離そうとするタケルを力づくで私の胸に戻す。私はお湯の中で体を上下させてタケルの顔に胸を擦り付けてやった。

「駄目だよ。タケルちゃん！ あんな乱暴に、お姉ちゃんの服脱がしちゃ。そんなにお姉ちゃんのオッパイ吸いたかったの？ タケルちゃん！」

私の胸の中で更に奮え、お湯をブクブクさせているタケルの笑いが擦りたい。

「あー！ もうっ！ おめえマジやべえってよ！」

「キャハハハッ！」

どうしても、お風呂では茶目つ気を隠せない私。

チグノン掛かった肩までの髪。グレーのストールが美白な小顔をより引き立たせる。整った形のバストに黒のロールアップセーターがピッタリとフィット。引き締まったウエストとスラツと長い脚。革のタイトスカートが大人の雰囲気を漂わせせる。

由美が、「むちゃくちゃ綺麗」と、教えてくれた日からこの日まで、「お袋の写メなんて持つてる気持ち悪い男子高生なんていねえよ。じゃ、おめえ、自分の親父さんの写メ持つてんのかよ?」。正論をほざいたタケルを相手にせず、自分なりに色んな綺麗な人を想像したけど、どの想像も問題外。完璧過ぎ。私の乏しい想像の範疇なんて完全に越えてる。で、この香りは、No.19かな? お洒落…。こんな綺麗なお母さんをタケルとのエッチの時に…。私はなんて過ちを。

「こんばんは。始めまして」

自然に両手を重ね、少しだけ唇を上げた会釈。大人の真似事で着てみたレースワンピースの私は、湯気の向こうに立つ女性の気品に圧倒された。

「は、始めまして…。彩です」

そんな、緊張しなくても。改めて近くで見ると、タケルの彼女には勿体ないくらい可愛娘。細い肩を奮わせ、小さい顔を固くさせていたけど、その綺麗な瞳は私をしつかり捕らえていた。

「座ろうよ」

なるべく、俺は平然と言った。けど、彼女とお袋に挟まれた状況は想像以上に心地が悪い。俺を産んだ女と俺とエッチしてる女。昔オツパイ吸った女と今オツパイ吸ってる女。二人の女の間、これから何が起こるか分からねえ。先が読めねえ緊張。取り敢えずの愛想笑いを振り撒かなきゃいけないシチュエーション。「男なら経験しとかなきゃよ」と、ある程度、腹括ってアレンジした対面だった。1分も立たない内に「あー！甘かったあ！帰らせてえ！」。絶叫したかった。彩と目を合わせると、ぎこちない微笑が返ってくる。

タケル、頼むよ。私は何とかタケルに緊張感を表す笑顔の信号を送った。

「もう注文してあるからね。そんな固くなんなんでよ」

緊張してるの見破られちゃったよ。咄嗟に肩の力を抜こうとしても抜けない。目玉を左右させるだけ。

「は、はい」

顎を引いて視線だけ上げる。お母さんはテーブルに両肘を着き、細長い指を組んで微笑んでくれた。

「高校生の時…。始めて彼氏のお母さんと会った日、思いだすよ」

漸く、口元が柔らかくなった。

「お母さんも…あるんですか？」

「そりゃあるよ。私だって…それなりの恋愛したからね」

おえーっ！ きつもち悪い！ 自分のお袋の恋バナなんて聞きたくねえや。

お母さん、モテモテだったろうなあ…。こんな綺麗な人、誰もほつとかないよ。私は、お母さんに笑顔を返せた。

「やっぱり…緊張しますよね？」

「そりゃもうガチガチ。今の彩みたいに」

うわ！ 名前で呼ばれた。照れ笑いが、一瞬、俯く。お母さんの垢抜けた性格が徐々に私の緊張を解いてくれた。

「私も経験者だから、彩の気持ち良く分かるよ。お肉好き？」

「好きです」

「良かったあ。どんどん食べてねえ。あ、それと、私の事は…お母さんじゃなくなつて、何か別の適当な呼び方がいいよ。堅苦しくないやつ」

「じゃあ…ママって呼んで…いいですか？」

少し肩を萎めて怖々言った。

「ママ？ ハッ！ いいねそれ！ 私、ママって呼ばれた事ないから憧れてたんだ。ママで行こ」

笑った時の顎のライン。透き通った瞳。タケルに似てる。

「はい、じゃあ…ママで」

お肉と野菜が来た。

「それとさあ…。敬語はなしにしよう。堅苦しいのなし。彩、まず野菜入れよ」

ママがストールを取った。私はママと一緒に鍋に野菜を入れ始める。じゃ、軽く行こう。怖いけど言っちゃえ。

「じゃ、こんな感じで話すね。ママ」

素直な娘だ。益々、気に入った。

「うん。彩は…料理得意でしょ？」

「いや…それ程でも」

「得意なはずだよ。あれだけ、掃除得意なんだもん。掃除が得意な人は料理も得意なんだって」

「掃除って？」

「いつも…彩が帰った後、家の中と冷蔵庫の中が綺麗になってるもん。タケルにあんな事出来る訳ないから」

湯気以上の熱気を私は感じ、また顎を引いた。

「は、恥ずかしい。ごめんなさい。勝ってしちゃって」

「いやいや、そんな謝らないですよ。やってくれて、助かってるよ。タケルの彼女にしゃちゃ勿体ない、いい彼女だよ。」

いい彼女だなんて…。益々、湯気を熱く感じる。

「いや、そんなあ。家では、いつもお母さんに怒られっぱしだから」

ママと私は野菜を一通り入れ終えた。

ヨシ！ ほつて置く。俺はその方が平和に済むと思った。てか、俺だけ浮いてんじゃないかねえか。ま、いいや、早く食わせろ。

「タケル！」

わっ！ ビックリした！ お袋の声に慌てて顔を上げた。

「いい彼女だね！ 悪いけど、今日から、私、あんたより彩を大事にするからね。彩は、もう私の娘と一緒にだから」

「う、うん」

はいはい、どうぞどうぞって、彩、何泣いてるんだよ？ 俺はハンカチをポケットから取り出したけど、先に、お袋が彩にハンカチを彩に渡した。

誠のお母さんも、こうやって私を受け入れてくれた。「息子の好きな人は、私の好きな人だから。今日から、あんたは私の娘だよ」。お義母さんにそう言われた日、私は彩みたいに泣いた。6年前に義父を追うように逝った義母を…私は思い出していた。お義母さん、ちゃんと受け継ぎました。ありがとうございました。

「もう、彩が泣いたら私も泣きそうになるじゃん」

こうなるとはなあ…。笑ったり泣いたり、マジ、女ってのは忙しいなあ。仕方なく、俺はそのハンカチをお袋に渡した。早く、肉、しゃぶしゃぶしようぜ。

お風呂から出た後、私とタケルはホテルのロープを着て、ベッドへ寝転ろがり、いつものように抱き合っていた。落ち着く。タケルが腕枕し、私は、その温かさとし心地好さの中に染み入った。

「あの時…タケルを傘に入れて本当に良かったあ」

ホテルで抱き合うまでになった私達。その発展を実感し、唇を離れた私はタケルの胸に顔を埋める。

「そう言えば…彩…」

タケルの胸からむくむくと顔を上げた。

「何で、彩は、あの時、俺を傘に入れたんだ？」

顔をタケルの顔に近付ける。

「初めて、タケルを見た時から好きになって、キツカケ探ってたんだよ！ んなの聞かなくっても分かるだろ！」

照れ隠しに、タケルの脇に手を突っ込み擦ってやる。タケルは私の下でのたうち回った。

「ギャハハハハ！ ごめん！ ごめんなさい！ 止めてえー！」

「愛してるって言うてみるー！」

「愛してるーっ！ むちゃくちゃ愛してまーすー！」

「ヨーシ！ 許してやるよっ！」

攪る手を止めてた私は、またタケルに唇を着けた。

「ハハハハツ、と、とんでもねえ事するなあ」

は息を上げながらも、タケルは私を抱き寄せてくれた。

「さあ！ マッサージしてあげるよ」

唇を着けながら、私は微笑んだ。

「お願いします」

チュツと唇に音を鳴らし、私は体を起こしてベッドに座った。

「じゃ、後ろ向いて」

タケルは俯せになり、私はタケルの太股辺りに跨がる。さあ！

私もまた濡れてきた！ これから、ゆっくりタケルを癒してやるっ。

「かなり凝ってますねえ…お客さん」

タケルの腰を揉みながら言った。

「今日は色々だったからな…」

タケルは俯せになり枕の下に両手を入れ、目を閉じた。ゆっくりとタケルの腰から手を滑らせた私は広くて固いタケルの背中を揉む。

「マッサージが気持ち良いなんて…俺もオツサンじみてきた」

以前、タケルの家でマッサージしてあげた時、タケルは擦ったように体をくねらせていたけど、今、枕に顔を沈ませるタケルは気持ち良さそう。

「今日は、それだけお疲れなんだよ」私はタケルの首筋に唇を落とす。もつとタケルを癒してあげたい。大胆になっていい夜。筋肉が張ったタケルの二の腕は私の願望、いや、欲望を再び呼び覚まし、私の人格までも凌駕しそうになっていた。疲れたタケルが痛いけど、愛おしい。私はタケルから降りた。

「タケル、仰向けになって」

「うん？」

タケルは枕から顔を上げて私を見た。

「いいから、向いて！」

無理にタケルの肩を押し上げてタケルを仰向かせた。再び覆い被さった私はタケルにディープキスしながら、タケルのローブの紐を解く。

「おいおい…」

私の大胆な行動に、タケルは戸惑いの笑いを浮かべた。

「いいのー！」

奥襟を掴み、私は少し乱暴にタケルのローブを剥ぎ取った。テンションが上がって、二人で脱がせ合いならしたことがあるけど、私は初めて単独でタケルを全裸にした。今夜は行くよ！

タケルを見下ろしたまま、私は自分のローブの紐を解き、仰向けで私を恐々と眺めていたタケルに胸を強調するようにバツとローブを脱ぎ全裸になった。もう恥ずかしさは捨ててやる！ 覚悟しとけ！ タケル。てか、バツで強調できるほど胸ないんだけどね。全裸になった私はタケルの肌に戻り、唇をぶつけ、舌を重いつきり絡めながらタケルの乳首を指先で転がしてやる。普段とは全く逆転した行為。タケルに対する独占欲を晒した。

タケルは私のもんだ！ 誰にも触れさせない。鼻息を荒げた私は乳首を転がす指をそのままに、タケルの首筋を唇と舌で濡らしまくる。

「うっう…」

タケルが私の髪を撫でていた。唇と舌を下方に這わせ、辿り着いたタケルの胸元を私は何の断りも無く強烈に吸った。

「うっ！くっうっ…」

タケルの声と共に私の吸引力は強さを増す。前からしてみたかったんだよねえ。チュツと唇を離すと、タケルの胸元には赤く浮いた私の紋章が出来上がった。

「私の…印」

感慨深くその印を指で撫でる。颯爽気味な呆れ顔のタケルにペロツと舌を出した私。そのままその舌をタケルの乳首に当た。

「うあっ！」

タケルの頭が一瞬枕から浮いたけど、構わず、私は舌でタケルの乳首を転がし、もう片方の乳首を指で転がす。そして、一定の間隔で舌と指を入れ替え、万遍なく両方の乳首を潤す事に努めた。

「あ、彩…。愛してる…。彩」

「愛してるよ…。タケル」

タケルと上目遣いで目を合わせた私はチロチロ蠢く舌先をタケルに見せ付けるように乳首を転がし続ける。感じてるタケルの顔。可愛い。私の舌と唇は乳首を出発。さっきから目立っているタケルの固く反り返ったものに目標地点に定めた。

タケルの脇腹に唾液の曲線を作りながら、チンポの裏筋に中指を着けた。その中指をスーッと根元まで滑り落とし、ジワッと裏筋に返す私。

「ア、アッ！」

チンポがタケルの発声と共にビクツと痙攣を起こす。可愛いじゃん。オシッコが出る穴は湿り、粘り気のある汁が糸状に私の中指と人差し指に絡む。

鬱陶しい振動音が床に響く。気怠くベッドから腕を落として指先で探り、携帯を拾い上げた。

「雄二かよ」

彩に腕枕した俺。何の躊躇いもなく、彩と一緒に雄二からのメールを読み始めた。

…今夜7時。いつものクラブで合コンするぞ！ おめえのファンだつて娘も2人ほど来るからよ。楽しみにしてろー！！…

鼻で笑った後、俺は返事を打とうとした。

「ま、待って！ 何で、打とうと思ってんだよ？」 彩は心配そうな顔を俺に上げた。何、心配してんだよ？

「断り入れんだよ」

宥めるってほどじゃないけど、笑って彩にキス。

「ダ、ダメ！」

タケルの携帯を奪つ。タケルは驚いた顔を私に向けた。

「タケル…。合コン行けよ」

「はい？」

呆れ顔のタケル。私はタケルの胸元を見る。

「雄二が…折角、誘ってくれてんだから…行かなきゃまずいだろ」

タケルを見上げると、タケルは首を振った。

「んな事に気遣いすんなよ。俺にはもう…彩が」

気遣いじゃない。私はタケルの最愛でいたいけど、タケルの行動範囲を狭めてしまう凶々しい存在にはなりたくない。

「雄二とは、私より付き合い長いんだし。それに、私…タケルの事信用してるかさ。春休み入って、雄二と会うのも初めてなんだろう？雄二ともクラス別々になるかもしれないんだし。今夜は楽しんで来なよ」

笑顔を作って、タケルに携帯を返した。タケルが溜息をつく。

「雄二とだけならいいけど…。一応、合コンだから…。やっぱり止めてくよ」

返事を打とうとするタケル。私はタケルの親指に手を被せた。

「いいじゃん！ たまには合コンぐらいさあ」

私の言ってる事が真実だと理解して貰う為に、私はタケルの唇に自分の唇を重ねる。

「でも…逆の立場だったら。もし彩に合コン行かれたら、やっぱり、俺、嫌だよ」

タケルに唇を着けたまま笑った。

「私はもうそんなの行かないし。全く興味ないよ。由美も行かないしね。私の為に、タケルに男同士の付き合い壊して欲しくないんだよ。私はタケルにこうやって大切にされてる事感じられたら…。それだけで幸せだよ。だから…」

私に覆い被さったタケルは強く唇を押し込み、舌を絡める。信じてるから…。タケルが私から唇を離した。

「分かった。じゃ、行くよ。終わったらちゃんとメールするから」

ふわー！ 格好つけちゃったけど、不安は不安だよ。で、何？ あのタケルのファンって女どもは？ 私のタケルだからね！ 手出ししやがったらブン殴るだけじゃ済まねえからな！

窓ガラス

「何、そわそわしてんの？」

落ち着こうと自分の部屋入っても、直ぐに部屋を出て、意味もなく1階へ降り、キッチンを通って廊下を行ったり来たり、2階へ上がり、自分の部屋へ入って、また直ぐに部屋を出る。

その夜。いつものようにタケルが私を家まで送ってくれた。普段と何も変わらない夜にするはずだった。しかし、合コンへ向かうタケルを家の前で見送り、タケルの背中が私の視界から消えて以来、私の精神状態は、やや、いや、大いに不安定になり、家の中で、その意味がまるでない動きを延々と繰り返していた。

「騒いでも仕方ない。ヨシッ！ 落ち着こう！」

部屋のドアを強めに締める。けど、5分と持たない私。また部屋を飛び出し、慌ただしく階段を降りた。何で、こんな日に限って、由美はバイトなの？ キッチンの冷蔵庫を不自然に開け、目的がない物色をしていたら、ついにお母さんに捕まった。

「べ、別に…何でもないよ」

軽く笑ったお母さんが私を払いのけると、冷蔵庫から牛乳を取り出した。

「何にもない訳ないでしょ。携帯握りしめて何やってんの？」

携帯をサツと後ろに回しても無駄な抵抗。

「あんだ…お父さんとよく似てるよ。わっかかりやすい」

グラスを食器棚から取り出したお母さんは牛乳をグラスに注ぎ切り、パツクをごみ箱に捨てた。

「飲みな。イライラした時はミルクが1番効くんだよ」

黙ってグラスを受け取る。

「で…どんな男？」

「エツ？」

グラスが揺れて牛乳が零れそうになる。お母さんはエプロンのポケットからタバコを出し、くわえて火を点けた。

「ここ1週間、あんたの行動見てたら嫌でも分かるよ。気の強い彩をそれだけ夢中にさせる男なんだから…。きつと素敵な彼なんだろうねえ」

お母さんはタバコを流し台に向かって吹かし、灰皿を持ってテーブルに着いた。

「そ、そりゃ、素敵な彼氏に決まってるじゃん」

どうせいつかはバレる事に観念すると、お母さんは指にタバコを挟んだまま静かに笑った。

「そ、そりゃ野望つたかったね。で、セックスもしてるんでしょ？」

グラスを口に着けていた私は、また牛乳を零しそうになる。

「な、何よ！？ 息なり」

「わっかかりやすい！ やっぱりお父さんそっくりだ」

良かったあ！ お父さんはお風呂みたいだし。

「そりゃあ…。ちゃんと付き合ってる彼氏なんだしさ…」

バラす必要がない事にも観念し、牛乳を一口飲んだ。

「うん。お互い付き合ってたら自然な事だし。私も彩ぐらいの歳にはそう言うのあったからね。お互い様だよ」

「そうなんだあ」

私を18歳で産んでるお母さん。私くらいの歳にそう言うのが、あっても全く不思議じゃない。「お互い様」。お母さんの言葉に安堵した私は胸の支えが取れ、ゆっくりと牛乳を飲めた。これで、お母さんにはタケルの事をオープンに出来る。

「そんな素敵な彼氏に何イラついてるの？」

「彼氏…。同じ学校の子でタケルって言うんだけど…」

私は、その苛立ちの原因をお母さんに全て打ち明けた。お母さんはタバコの灰が落ちそうになるくらいまで私の話に聴き入ってくれ

た。タバコで灰皿の縁をポンポンと叩いて灰を落としたお母さん。気持ち良さ気にタバコを吹かす。

「偉い！」

お母さんはタバコを灰皿で揉み消した。

「それでこそ私の娘だよ！」

久しぶりに、お母さんに褒められた。褒められていい事なの？違和感を抱きながら牛乳をまた一口飲む。

「女の嫉妬なんて可愛いもんさ。でも、女の弊害なんて最低だよ。男の邪魔するような女になっちゃダメ。そんな女は最悪に嫌われる」

グラスの牛乳を全部飲んだ。私もそう思う。ちょっと笑って携帯をポケットに入れ、流し台でグラスを洗った。

「落ち着いた？」

「何となくね」

グラスを食器棚に返す。お母さんに話して良かった。

「お母さん……」

少し体が楽になった私。母さんに振り向く。

「ありがとう」

微笑んで頷いてくれたお母さん。私は静かに2階に上がった。

「マジいいのかよ？ 二次会行かなくて」

合コン会場のクラブを出て、少し歩く。人混みが消え、派手なネオンに代わって地味な街灯が俺達を照らしてた。

「いいよ。タケルが参加しなきゃどうせ盛り上がりかねえんだし」

疎らな光の線が引かれる車道に、時折、雄二は視線を流す。

「一緒さ。そんなの」

雄二は俺に視線を戻した。

「でも…彩に悪い事しちゃったよ。おめえら付き合い始めたって知ってた。俺、遠慮したのに」

「その彩が行けって言うんだから…。しょうがねえよ。雄二との付き合い合い大事にしろってさ」

頭を掻き、苦笑いしながら、雄二は何度も頷く。

「何か、彩らしいよな。それ。でも、マジ良かったよ。漸く、タケルと彩が上手くいってってくれてさ」

何も答えられず、ただ照れ臭く俯く。

「俺も…今夜で合コン卒業する。ナンパも終了」

雄二の意外な言葉に、俺は直ぐに頭を上げ、雄二に顔を向けた。

「マジで？」

「うん、俺も真剣に付き合える娘探そうかなって」

吹き出した俺はまた俯いた。

「おいおい！ マジだぜ！ まあ、見ててくれよ。彩みたいなすんげえ可愛い彼女見つけるからよ」

「てか、ターゲットな娘いんのかよ？」

「ターゲットてか…。まだ話もした事ないんだけど。まあ、その内、相談するよ」

オレンジ色の街灯に照らされ、笑顔を滲ませた雄二の横顔。俺は若干の信憑を感じた。大通りから細い街路に入る角で、雄二が足を止める。

「おっ！ タケル。おめえ…そっちじゃねえのか？」

雄二はその街路に顎を向けた。

「いや、違っけど」

「バカ、こう言う日は、わざわざ、女の家の前で電話すんだよ」

また照れて俯いた俺は、2、3度頷く。流石、雄二。

「やっぱ、そうしなきゃな。じゃ、行くわ」

「おう！　じゃあな」

俺達は軽く手を振り合った。

「雄二！」

俺の声に振り返える雄二。

「ありがとよ！」

「早く行け！　この幸せもんが！」

笑って手を振り上げ、背中を向けた雄二。口笛を夜道に滲みさせた。

「タ、タケル！　メ、メールだと思ってたからビックリしちゃったよ。あ、でも、タケルの声聞けて嬉しいよ」

携帯に飛び付いた後、私は裏返りそうな声を必死で制御する。

「俺も…彩の声聞きたかったから」

ベッドの上、両膝を曲げて体育座り。嬉しさで、携帯を持つ手が奮えてる。

「合コン…どうだった？」

聞かないと決めていた事を早々と聞いてしまった。あー、私はまだまだだあ…。

「それがさあ、全然、盛り上がらなくて。二次会止めて雄二と帰ってきちゃったよ」

私が邪魔しなかなあ？

「そ、そうなんだ」

「合コンしてたら…無性に彩に会いたくなつた。他の女見てたら、俺には彩しかいないって。彩みないに可愛い女…他にいねえからさ」
また、照れるような事を。

「何言ってるの！ まあ、嘘でも嬉しいよ」

「嘘なんかじゃねえよ。本当に、彩に会いたくって仕方なかった」

私も…会いたくて仕方ない。鼻の奥が痛くなってきた。泣いちゃダメだよ。本当に、タケルの声聞けて良かった。家の中で隠し切れなかった不安が携帯から聞こえるタケルの声で安心に変えられた。

「タケル、もう家？」

「まだ、家じゃないよ」

「家じゃない？…」

「実は…彩の家の前に来てて」

「こ、ここに？　ちょ、ちょっと待って」

慌ててベッドから降りた。私は部屋の窓に駆け寄り、カーテンを開け、内側から窓を叩く。

「タケル！　ここ！　2階見て！」

家の前で携帯を耳に当るタケルが私を見上げた。

「お、おう！　そこ？　彩の部屋？　顔見れて良かった」

「う、うん。ビックリした！　来てくれたんだ！　私もタケルの顔見れて良かった」

「彩…。やっぱり彩が1番可愛いよ」

「そ、そんなの…あつたり前じゃん」

それまで強気で押し込んでいた涙。自然と解放され湧き上がってくる。

「今夜…今夜、1番最後に1番愛してる人の顔見れた。彩…。愛してる」

「私も…私も愛してる。タケル。本当に…本当に来てくれてありがとう。最後にタケルの顔見れて幸せだよ」

窓ガラスが曇る。私は手の平で曇った窓ガラスを拭いた。

「じゃ！ おやすみ」

何故か、タケルは携帯を切った。エッ？ 窓から手を離し、私は湿った手の平を眺めた。タケルは、私が手を振っていると思ったんだ。雫の向こう、タケルは私に手を振りながら曲がり角に向かう。

「タケル…」

トレーナーの袖で涙を拭き、私は部屋を飛び出した。我慢なんてできっこない…。階段を駆け降りる。タケル！ 階段を降りて直ぐのキッチンにはタバコを吹かすお母さんの他に慌ただしい私を颯颯気味にチラツと見て、ビールのグラスに口を着けるお父さんがいた。私は両手でギュツと携帯を握り締め、ジツとお母さんを見詰める。タバコを灰皿で揉み消したお母さんは私と視線を合わせたままテーブルを離れ、冷蔵庫を開けた。

「彩…。丁度良かった。牛乳切れたからコンビニで買ってきてよ」

「う、うん！ 直ぐ行ってくる」

玄関を飛び出した。

手首にはめていたヘアゴムで髪を束ね、私はタケルの両脚の間に滑り込む。味わいたい。タケルのチンコを握り締め、その先端にむ

しゃぶりついた私はもう一度、上目遣いでタケルを眺めた。タケル、愛してる…。無言の愛情表現。タケルは頭の後ろで両手を組み、柔らかな瞳で私の視線を迎え入れてくれた。

タケルの尿道を舌先でほじる。その汁を汲み上げてグチュグチュと潜在意識の中にあつた全ての欲を最大限に表し、首を縦横無尽に振り、その先端に舌を絡ませて汁を啜り味わう私。顎が疲れ始めると、口からその先端を出し、濡れた唇をタケルの裏筋に着ける。タケルは、こうされるのが好き。その裏筋と尿道をチヨコチヨコ舌先で擦ってあげる。首を傾け、両膝をベッドに着いてお尻を突き上げた私は、まるで猫が背伸びをするようなポーズでタケルのチンコを食する。気持ち良くなって。もっともっと。私のタケル…。そうメッセージを込めて、タケルに薄い視線を送り続ける私はタケルの美しい瞳に溶かされる。

ベッド後方の壁は鏡張り。きつと、この姿勢なら、鏡に映る私の濡れたアソコと肛門がタケルから丸見えになつてはるはず。益々の興奮が私の恥ずかしさを呑み込む。タケルにもっと眺めて欲しい私は何気に腰をくねらせ、タケルの注目を引こうとした。いつも、二人きりの時間は素直でいさせて…。タケルのチンコは私のもの！誰にも渡さない！ てか、ココは、もう私の一部だから私が自由に出て当然。欲望任せに、私は、その先端からチンコを口中深く呑み込む。二つ握ってもまだ先端部分が突き出るくらいのサイズ。苦しくてっも、今日は最後まで呑み込んでやる！

「うつつうつつ…」

チンコの茎に涎の雫が蔦う。苦し涙が滲む目を閉じる。私はゆっくりとそれを呑み込み続け、限界を越えようと必死になつていた。行ける行ける…。頑張れ頑張れ…。暗闇の中で、鼻先にチヨコチヨコ触れるタケルの陰毛を感じた。もう少しだ！頑張れ！ぼんやり目を開ける。

「ウーン…」

あと1センチくらいで到達。いってやる！ 激しい吐き気に堪え、思い切つてグイッと頭を沈めると、カポツと喉の奥から変な音がした。タケルのチンコは根元まで、しっかりと私に呑み込まれた。オラァッ！ やつてやったよ！ 私だってやりや出来んだよ！ タケルのチンコを完全制覇した興奮と達成感に私の吐き気は緩和される。

「フーン…」

鼻息と涙を出しながら、ゆっくりとタケルのチンコを口から抜いた。ハァッ！ んなコラ！ どんなもんだ！ 糸が、2本、3本…。吐き出した先端部から私の口内に向かって伸びる。舌先でその糸を切った私は涎でドロドロになったチンコ全体をしつとりと扱き、タケルの尿道から流れ出る汁と私の涎を親指でクリクリと混ぜ合わせ、二人の潤滑油を調合した。

更に滑らかになった先端部から茎に指を絡めながら、私はやや口を開けてタケルに視線を送る。その眉間に皺寄せて堪えてるタケルの表情が可愛い。止まらない私の欲望は私の舌をもっと下方に這わせていった。タケルの二個のタマ。その内一個を指先で攪り、もう一個のタマを口の中に入れて転がす。まだまだ…。私は、まだ味わった事がない部分、タケルのその穴に好奇心と欲望を向かわせる。タケルの肛門を舐めたいっ！ タケルのタマを引っっこ抜くようにジユポツと音を立てて口から出した。私は、その袋をめくり上げて、袋と肛門の間に舌先を這わす。

「彩！ あっ、そ、そこいい！ 最高！」

OK！ タケルの評価を得た私は、より速く舌先をチロチロと動

かし、タケルの快感を助けた。

「うっ！ ああっああ…」

タケルの両脚が上がる。自分自身で両膝を抱え、お尻を上げたタケルは、まるでオシメを換えられる可愛い赤ちゃんよう。私が舐めやすい体勢になってくれた。タケルが愛しくて美味しくて堪んない。いつの間にかヘアゴムが髪から外れ、私は髪を振り乱していた。行くよ！ 肛門へ。タケルの肛門に薦った私の涎。万遍なく人差し指で肛門全体に広げ塗り込む。

「彩…」

鼻から抜けるようなタケルの声。私は奮わせた舌をタケルの肛門に滑り込ませた。

「あっ、彩！ そんなとこまでっ！ あっ、愛してる…。彩…」

「タケル…。私も愛してる。今夜は…私に自由にさせて…」

タケルは更にお尻を突き上げる。私はタケルのお尻を両手で広げ、タケルの肛門を味わう。タケル、いつもイッパイ私の肛門舐めてくれてありがとう。今夜は私がイッパイ舐めてあげるね。私が癒してあげるね。私に任せて。…

少し舌先を肛門に挿入させると、ビクツとタケルが肛門を膠着させたけど、吐息と一緒に静かに元に戻った。尖らせた舌先。ドリル状にグリグリと肛門を掘ってみた。

「うっ、あああ彩…。た、た、堪んない…」

片手でタケルのチンコを扱く。私はタケルの肛門を舐める舌先の強さと速さをより高め、親指でタケルの尿道から流れ出る汁をこね回す。

「アアアッ、彩っ、もう、もう、そんなんっ！」

私は、「これが仕上げ！」とばかりにタケルの肛門全体に唇を合わせ、ズーズーズズーと音を鳴らして吸い上げた。

「うっうっうっうっ…」

可愛く声を上げる私のタケル。全て吸いきった。唇をタケルの肛門から離し、上体をゆっくり起こすと、タケルは両膝を持ち上げていた両腕の力を抜き、静かに両脚を下ろした。

これ、きつと、タケルがいつも私にしてくれてるのより濃いねえ。放心状態のタケルを見下ろしながら微笑む。

遅番のバイトは深夜1時まで。店を出て、近くに止めたバイクに向かう途中、前方の電柱から物音。直角に曲げた体から伸ばした手を電柱に着き、誰かが吐いている。女？ どつかのお水だな。赤のレースミニ。ゲロと香水の交じった何とも例えようのない臭気。一見無造作に束ねられたカール掛かった長い茶髪。黒のボレロスーツの背面に回されたヴィトンのバッグ。ボレロスーツ？ 僅に電柱を通り過ぎ、俺は足を止めて振り返る。まさか？ 2、3度咳込み、体を起こした彼女。バッグから取り出したハンカチを口に当てた。大丈夫かあ？ どう見たって俺みたいながキとは不釣り合いのお

水の彼女。恐る恐る、彼女に向かって一歩踏み出す。その瞬間、彼女のヒールがぐらついた。ヤベツ！慌てて、駆け寄り、間に合った。俺は彼女の背中を支えた。

「だ、大丈夫すか？」

「う、ううん」

ブランデーの匂い。

「ああん、ごめんね。ありがたいと」

呂律が可笑しい。店で毎晩のように酔っ払いを見る俺。相当酔ってるって分かる。危なっかしい足取り。ぐらつくヒールで、彼女は俺に振り向こうとする。いつでもまた支えられるように、俺は彼女の両肩と俺の両手に触れるか、触れないかの間隔を作った。振り向いた彼女。やっぱり、あの人だ。

「あ、いつもお世話になってます。今…帰りつすか？」

客風の男と店に何度か来ていた彼女。店員の俺の事なんか覚えてないと思っただけ、俺は一応そう声を掛けた。

「うーん？」

彼女は目を細め、自分の顔を俺の顔に近付ける。い、いやいや…。俺は顔を引いた。

「あつ！思い出したあ！あのお兄ちゃんね」

どの兄ちゃんだよ？

「そ、その居酒屋さんの」

せ、正解！

「そうです。いつも、ありがとうございます」

店にいる時みたいに、俺は丁寧に頭を下げた。

「うんもう！ お店の外だからさあー、固い挨拶なーんて抜き抜き！ ねっ！」

俺の胸を叩いた彼女は、またヒールをぐらつかせた。

「あ、ああ、危ないっすよ」

両手を差し伸べたけど、彼女は俺の胸に倒れ込んだ。

「ごめえんね」

体を起こす彼女。彼女が完全に体を起こすまで、俺は彼女の両肩から両手を離さなかった。

「もう、お酒強くないのに、こんなあ仕事しちやってさあ。私もバカなんだよね」

彼女がキャバクラ嬢って事は、彼女を初めて店で見た時から察していた。

「いや、バカだなんて。そんな事ないっすよ。酔っつて事は、それだけ仕事熱心って事じゃないっすか。大変な仕事だと思えますよ。夜の仕事は」

上手い事言った自分に照れて頭を掻いた。

「大変だつて分かってくれるんだあ！ うわー！ お兄ちゃんみたいな若い子に分かって貰えてお姉ちゃん嬉しい！ お礼にラーメン奢ってあげる。お兄ちゃんの店の向かいにあつたでしょ。ラーメン屋さん。ヨシッ！ ラーメン行こ行こ！」

エーッ！ どうなってるの？

「いや、でも俺…」

「いいからいいから！ お姉ちゃんにつつきあいなさい！ さっき吐いちゃったからお腹へっちゃったよ」

意味分からずに、俺は彼女に腕を引っ張られて連れて行かれた。

「何それ！？ 無茶苦茶ラッキーじゃん！」

体育館裏。座り込んで顔を突き合わす男三人。智喜の話を聞いて、まず、雄二が仰向けに倒れて羨ましがる。

「いや、ラッキーかどうか？ てか、まだそれ一回キリだからよ」

「でも、おめえ、その…」

「小夜子さん」

智喜が俺より先に答えた。

「これからも会えるんだろ？」

「まあ、取り敢えず、番号とメールアドレスは交換したけど…会えるかどうか？ 何か、俺とタメの弟がいるみたいで、だから、俺、弟みてえな感じな訳よ」

雄二が体を起こした。

「それがまた、いいじゃん！ 年上のお姉ちゃんに弟みたいに可愛がってもらえてさあ」

「どうなんだろうなあ？」

こめかみを指で掻きながら、智喜が言った。俺は智喜の膝を叩き、智喜の方にやや体を寄せる。

「その彼女…可愛いんだろ？」

「可愛いってかあ…綺麗って言うやつ？」

「うっわ！ やっぱラッキーじゃん！ それ」

また雄二が仰向きになった。スケベ面も男同士だから気にする必要なし。俺は質問を続ける。

「それで…大人の女ってどんな匂い？」

気がつきゃ、俺の周りはタメの女ばっか。彩の事を頭に霞めながらも、取り敢えず、興味を優先させた。

口紅

ホテルと言う異空間は、益々と私の好奇心を膨張させる。大胆に悪戯したい。休む事なく、私は自主的にタケルに跨がり、少し腰を浮かせて、私のアソコにタケルのチンコが着くか着かないかの微妙な間隔を作った。こんな感じでいいよね。タケルの両脇の下に両手を着いた私はタケルに自分の体重が乗らないように覆い被さる。タケルの先端で私のクリを弄ったら？解放され切った本能は、普段、理性に包まれ発想すらない行為へ私自身を誘み、私の中に作られた別の私、いや、愛する人だけに見せられる本当の私を剥き出しにさせた。

微妙に下ろした腰をくねらせてチンコの先端をクリで探る私。見えないから…上手く引つ掛かるかなあ？ネチヨネチヨした感覚とチンコの先端部が私の腰の動きに合わせてアソコを搔き分け、搔き交せる。もうちょっと前！そつ、その辺り、そそ、来たっ！そこにクリが引つ掛かった。

「ウツウ…」

小さく漏らした私はタケルに深いキスを落とし、探り当てたポイントに腰を前後させ、クリに激しい摩擦を与える。思ったより気持ちいい…。

「タ、タケル…。これ気持ちいい？」

揺れて絡まるタケルの口の中で尋ねた。

「き、気持ちいい…。こ、今夜は彩のしたいように…したいように…。…」。…。

私の腰に両手を当てて、タケルは優しく言ってくれた。愛するタケルの汁が私のクリに塗り込まれている。誰に教えて貰った訳でもない。こ、これは、私の本能が開拓した行為。腰を前後する度に、私の固くなったクリにタケルの先端、多分、尿道口辺りが引つ掛かる。そのヤバイコリコリ感が私を新たな境地に運んだ。

「ウツ、ウツ、ウツ、ウツ、ウツ、ウツ、ウツ、ウツ…」

引つ掛かる度に零れる声。タケルの尿道口から私のクリ、脳に伝わる電波信号。き、気持ち良すぎっ！ ほ、欲しいっ！ タケルッ！ もうダメッ！ タケルから唇を離し、上半身を立たせた私は、早急に股下のタケルのチンコを握り、その先端を私の膣口に合わせたタケル…。タケルを見下ろし、一瞬、微笑みを浮かべる。私は一気に腰を降ろした。

「アゲッ！」

叫びが顎を上げ、天井に轟いた。

「あ、彩…」

下からタケルは私の両方のオツパイを揉み上げる。

「タケルッ！ 愛してるっ！ タケルッ！ 愛してるっ！」

振り乱される髪。私は腰を激しく前後し、狂ったように喚き散らす。

「アッ、アアアウガアウアアアクアアア…」

それでも足りない！ 両膝をベッドに立てた私は和式トイレでしやがむ格好になり、跳ねまくる。もっと、もっとタケルのチンコを感じたい！

「タケルッ！ タケルッ！ イイツ！ アッ！ イイツ！ タケルッ」

縦横に揺れる頭。常軌を逸した私は結合部からグチョングチョンと厭らしい音が発生。まだまだ…。腰で円を描く。何処か遠い世界にいるみたい。グルグルと私の意識も回る。

「フウウウ…アフウアアアうううフウウウ…」

「あ、彩…。凄いい…」

上半身を起こし、私を抱き締めてくれたタケルは激しい私の呼吸の中に舌を挿入。夢中で絡む私の舌にその動きを合わせる。

「思いつ切り愛し合おう。もう誰にも邪魔されないよ。彩…」

「タケル！ 離れないから！ いっぱいいっぱい愛して！」

「後は任しとけ！ 彩…。動くよ」

唇を離れた私はタケルの首にしがみ着く。

「来て！ タケル！」

タケルの運動が始まった。私の体は弾き上げられ、その断続的な

突き上げは、自然に私の体を浮かび上がらせる。バツコンバツコンと肉と肉がぶつかり合う音を部屋中に響かて。

「タケルッ！ アッ！ アッ！ アッ！ あいっ！ 愛してるっ！
タケルッ！」

何度叫んでも、叫び足りない。

「あ、愛し、愛してるよ！ 彩！」

タケルは私の上半身を倒しに掛かる。

「彩…。凄いよ…。彩…」

その結合を解かず、私に覆い被さったタケル。直ぐ様、クリを弾きながら、機関銃のようにチンコで私の子宮を撃ちまくる。必死で喘がずにはいられない。

「アーツ！ タケルーツ！ あっ、愛してるっ！ し、死んじゃうよっ！ タケルッ！ アッアアア…」

「彩…。彩…。愛してる…」

もう、もう、ダメえ…。早く子宮から快感の固まりを出したくて仕方ない。

「タ、タケル…。私、私、もう、もう…クアアアア…」

「い、いいよ。彩…。一緒に…一緒にいい」

二人の準備が出来た。

「ア、アアアアアッ、イクよ！ タケルーッ！」

「俺もっ！」

二人の体が縮まる。

「アッ！」

「フッ！」

タケル！ 頂戴！ 全部出して！ 心の叫びがタケルの瞳に吸い込まれる。タケルがフッと息を吐く。ドクンツと私の中で反復するタケルのチンコ。放たれたあ…。熱いタケルの精液…。最愛の人の精液が私の子宮に流れ込んで。女として、これほど、至福を感じられる時間はない。ああ…。まだまだ、私の中で脈打つタケルのチンポ。女として、これほど、最愛の人の温もりを感じられる時間はない。落ち着く私の呼吸と薄くなるタケルの瞳。全部、全部、頂戴。私のタケル…。

「彩…」

「出てるよ…。タケル。いっぱい出して…。いっぱい…」

最後の反復を終え、ゆっくりと私の上に倒れ込んだタケル。強く愛おしく抱き締めた。

「タケル…。愛してる」

首筋にタケルの荒い呼吸を感じる。

「彩…。いっぱい、いっぱい出た。俺の愛情が…彩の中に…」

私の首筋から顔を上げたタケルと、ねっとり、まったり、舌を絡め合いながら二人の体液が混ざり合うのを体感する。温かい……。タケル…。

私の頬を撫で、少し体を起こしたタケルはチンコを私から引き抜こうとする。私はタケルの腰に両脚をクロスさせてタケルのチンコを私の膣内に留めた。

「待てよ！」

タケルのキョトンした顔。それもまた可愛い。

「えっ？ どうした？」

「まだ出るだろ？」

唇を尖らせ、下から目を細めてタケルを睨む。

「も、もう無理だつて」

「フッ！」

タケルにクロスさせた両脚を引き寄せ、下腹に力を入れてタケルのチンコを膣内で締め付けてやる。

「ウッ！」

タケルが声を漏すと同時に、私の膣内でドクンとチンコ反復。残った精子が放たれた。ニヤツとする私。

「まだ出るじゃねえか！ 何、出し惜しみしてんじゃねえよ」

「出し惜しみって、おめえ…」

「フツ！」

また締め付ける。またドクンと私の中でタケルは精子を弾いた。

「嘘つくなよな！ まだ出るじゃん！」

「あのおめえ！ 出し惜しみしてんじゃねえよ！ 別に、業と…」

「ウラッ！」

情けないタケルの顔を見ながら、問答無用で、また中に圧を掛ける。

「彩ああ…」

証拠にもなく、またタケルはドクンとやった。

「今夜は、何が何でも最後まで絞り取ってやるよ！」

タケルの首に両腕を回して唇も引き寄せる。

「こりゃ確かに説明し辛いけどよ。別に業と残すような男いねえよ。」

男なら誰でも…出し後、ちよこつと残るもんだって」

「業とでないにしろハンパ許さねえ！ てめえ、覚悟しろ！」

両脚を絞り、歯を食いしばってお尻の穴に力を入れる。タケルは眉間に皺を寄せた。

「別に…ハンパでも…。出した後に…そうされると…うーん、擦りたいいい…」

そして、またタケルはドクンと私の中で絞り出す。

「愛してる…。タケル…」

「彩…。愛してるよ」

私に甘く絡むタケルの舌も説得力はない。

「フンッ！」

「コラ！ おめえまたっ！」

タケルの精液が打ち止めされるまで、負けず嫌いの私は気張り続けた。

口紅を明るくした彼女。ラーメン屋のトイレから、俺が待つカウ

ンターに戻ってきた。

「ハーツ！ 美味しい！」

カウンターに着くなり、彼女はグラスの水を一気に飲み干し、俺はカウンターに置かれていたポットを取る。口紅が着いた彼女のグラスに水を注いだ。

「ありがとう」

水を半分程飲んだ彼女。俺はグラスに水を継ぎ足す

「大丈夫すか？」

「う、うん。平気平気。今夜は…お客に飲まされ過ぎちゃってね。普段はこんなことないんだけどね」

「俺らと違って…お客さんに付き合わなきゃいけないから、大変すよね」

グラスに手を着けず、カウンターの上に両肘を着いた彼女はイヤリングを外して俺に顔を向けた。こんな近くで目が合うなんて。咄嗟に俺は彼女から視線を逸らし、グラスに手を伸ばした。

「そ、そうなのよ。お客に付き合ってたら大変よ。ま、私もまだ始めて2ヶ月だから慣れてないんだけどね」

「まだ、2ヶ月なんすか？」

「そつ。あつ！ もっと慣れてると思ったあ？」

カウンターに肘を滑らせ、彼女は俺の顔をやや下から見上げた。

「い、いえいえ」

水を口に含む。

「お兄ちゃんて…歳いくつ？」

「俺、17なつたところです」

「17って事は…高2だよな？」

「そうです」

「じゃ、私の弟と一緒にじゃん」

彼女はバッグを開けた。

「そつなんすか？ 弟さん、いらっしやるんですね」

「うん！ カツワイイ弟でさあ…。私の宝物なんだあ。まあ、今は、事情があつて会えないんだけどねえ」

バッグに手を突っ込みながら、顔を上げた彼女の瞳が少し潤んでいるように見えた。

「私ね、小夜子って言うんだ」

彼女がバッグから出した名刺を受け取る。その名刺には、バイト

先の近所にあるキャバクラの店名が彼女の名前と共に記されていた。

「俺…智喜って言います」

「じゃ、智ちゃんね。」

と、智ちゃん？

「宜しくね！ 智ちゃん！ 私さあ…友達いないから、智ちゃん、友達なつてよね」

小夜子さんは俺の肩を叩いた。怖いくらいラッキーな夜。鳥肌が立った。

「は、はい。宜しく、お願いします」

嬉しく返事した後、ラーメンが来た。

「さ、智ちゃん、食べよ食べよ」

小夜子さんは俺に箸を割って渡してくれた。にしても、綺麗な人だなあ。

春休みの余韻を残しきった始業式の朝。朦朧とした意識のままに、私は家を出た。

約束通り、曲がり角まで迎えに来てくれたタケル。嬉しいんだけど

ど、タケルの視線が、不思議なくらい不自然に感じる。カレカノになつてから初めての登校。何か、制服姿とタケルが、「それいいじゃん」って言つてくれたテールアップの髪が自棄にハズい。って言つてくれたテールアップの髪が自棄にハズい。

喧嘩友達から抜け切れず、もどかしさに気が狂いそうだった関係。耐えに耐えたんだから仕方ない。カレカノになつた途端に解放された遠慮ない気持ちは、止まらない、止められない具体的な愛情表現になり、春休みの間、ママが休みの月曜日以外は、体力がなくなるまでエッチしまくり。通学路、徐々に制服姿が目立ち始める。手を重ね合つて再会を喜ぶ女子達。じゃれ合つて走り回る男子達。いつもの坂道は、いつもよりざわめく雰囲気。ふと、胸元に目を落とす、自分の制服を見る。そう言えば、私、高校生だよ。そう、錯覚も起こすくらい、私は大人にされた。その実感があるから、尚、ハズい。通常の生活に戻される違和感が私に襲い掛かつていた。

「何だよ？ さつきから大人しいじゃん」

タケルは私の異変に気付いた様子。俯き加減の私の顔を覗き込む。うわ！ 慌てて顔を上げる。

「そ、そう？ 別に普通だよ」

変な笑いを作る私はやつぱり変。て、言つかあ、あんまり見られたらマジ恥ずかしいんだけど…。全く私なんて見られてないんだけど、私が、春休み、処女喪失して大人になったなんて、皆、知らないんだけど、何か私は周りが気になつてた。人意識過剰？ だろね。いつもの坂道、いつもの住宅街、いつもの学校、いつもの生徒達。皆、変わらないのに…変わってるのは私だけ。…私達以外にもカップルで学校来てる生徒いっぱいいるし。後、どうするんだよ？ タケルと学校で。学校でも、タケルは私の彼氏だけど、皆の前で、カ

レカノのラブラブな雰囲気でもいいの？ やっぱ、友達同士みたいに…。いやでも、やっぱ、タケルは私の彼氏なんだし…。

「マジ大丈夫かよ？ 気分でも悪いのか？」

タケルは、また俯く私を覗き込む。私は、また慌てて顔を上げ、タケルから視線を逸らす。

「いや、何でもないよ」

タケルの話に終始笑顔で頷き、時々、「そうなんだ」と、返事するだけ。と、相槌も入れていたけど、タケルの視線、周りへの意味ない警戒、そして、これからの心配事に神経を取られ意識が散漫し、その会話の内容はタケルに申し訳ないくらい覚えてなかった。

このままじゃ、学校でタケルと話せなくなるじゃん！ 困っていたら、後から声がした。

「彩！ おはよ！」

由美！ 助かった！

「おはよ！ 由美！」

いつもより声が大きい声。

「あつ！ ごめん！ お邪魔…だったかな？」

変に、気を使う由美にタケルが笑って答える。

「何言つてんだよ？ んなことねえよ」

そんなことない？ どう言う事よ？ ホツとした後の複雑な気持ち。やっぱ、変。取り敢えず、タケルと由美を見て笑った。

「由美…。シャンプー変えた？」

何で由美と話すのよ？ おめえの彼女誰だよ？ えっ？ 由美に嫉妬？ 訳が分からない。

「分かる？」

自分の髪を摘まんで鼻に当てる由美。

「ちよつと、スパイシー系にしてみたんだ」

女子のシャンプーにまで配慮するところが、おめえのモテる理由だよ。今度、私もシャンプー変えてきてやる。気が付かなかつたら、おめえ、ただじゃおかねえからな！ 無茶苦茶だった。

「彩…。どうしたの？ さっきから黙っちゃってさ」

「ごめん、由美。取り敢えず複雑なんだよ。私。」

「べ、別に…普通だよ」

何とか笑顔を作る。恥ずかしくってタケルと話せない私は、やっぱり、タケルと仲良く話せる由美に嫉妬していた。何で、由美にまで？ これから先どうすんの？

宙に浮いた気分で、やっと下足場へ。

こんなの続いたら、タケルに嫌われちゃうよ。溜息をついて上履きを履いている時、タケルがそっと私の傍へ来て耳打ち。

「やっぱ、その髪…似合ってる」

取り敢えず、シャンプーの件は許してやるよ。

タケルとは、別々のクラスになったけど、由美とは、またクラスメイトになれた。同じ学校で隣のクラスなんだし、行き来すればいいだけじゃん。それに、カレカノは別々のクラスがいいかも…。

意識散漫になりながらも、私は始業式を済ませて放課後まで堪えられた。でもまだ、恥ずかしくって、タケルと目を合わせられない。それでも、タケルが気になる。白々しくタケルの教室の前を通ると、タケルが楽しそうに他の女の子と喋っていた。

「喧嘩売ってのかよ？ あの野郎」

小声で怒鳴る。気になるんなら、いつものように、普通に、自然に、話し掛けに行けば良いのに…。昨日まで全裸晒して色んな事した私。学校と言う神聖な場所で、制服着て、真面目顔してる私を、最愛の彼氏はどう見るんだろ？ 不安と恥じらいを感じていた。変かな？ 私。これ、人意識過剰じゃなくて彼氏意識過剰じゃん。

放課後、私と由美は屋上にいた。

「で、どうでしたあ？ あれから春休みは」

フェンスに背中を着けた由美の隣で、私はフェンスを握り締めて俯く。

「どおって…。まあ」

「今日の彩…。マジ変だったよ。またタケルと喧嘩でもしたんじゃないかって思ったくらいだったから」

フェンスから背中を起こした由美は私と同じようにフェンスを握った。溜息の後、心配掛けていた由美に思い切って相談する事に…。私は朝から放課後までの私の複雑な精神状態を出来る限り詳細に説明した。

全て聞き終わった由美は、またフェンスに背中を着けて溜息をつく。

「なるほどねえ。でも…私にまで嫉妬されちゃあ。私がタケルと話し辛くなるよ」

そこは、話してなかった。けど、由美にバレてた。だから、今日、由美は私に気を使ってタケルと雄二の教室に行かなかったんだ。

「ごめん！ 由美由美には全然悪気ないんだよ。何か…タケルに照れてるのと嫉妬が入り混じってさあ…。訳分かんないんだよ…。私」
最後の方で、私は泣いてしまった。

「ちよ、ちよっと、彩」

背中に触れてくれた由美。私は思わず抱き着く。

「あ、彩ったら！分かるよ。その気持ち。私も…一応経験者だからさ」

由美の肩から顔を上げた。由美はポケットからハンカチを出して私の涙を拭きながら話し始めた。

「彩だけじゃないよ。その言う感情は。私も…初めて中学の時に好きだった人とそう言うことなっちゃった後はさ。今の彩と同じ気持ちなあって、何か、彼氏のこと意識し過ぎて、反って避けたり、避けてるんだけど気になったり…。あつたよ。そう言うの。変に人目も気になったしさ。初めてのエッチは、特に、そうなるんだよ。誰でも通る道だよ」

呆然としながらも、由美の話を真剣に聞いていた。

「でも…すぐ慣れる。彩はタケルの事…大好きなんですよ？」

由美を見詰めながら「う、うん」と、頷く。

「なら、タケルを信用してあげなっ」

由美がハンカチを私に渡してくれた。

「ご、ごめん、由美。私…由美にまで…。由美がタケルと話し辛くなったら、私…」また涙が出てきた。

「もうまたあ！今後もタケルとは…良い親友やらせてもらいますよ。それに…私とタケルの友情に…そんなことまで彩に入っ」

れてもね」

由美は恥ずかしいそいな微笑みをフェンスの外に向ける。私は涙を拭きながら由美を見詰めていた。ややこしい気分が晴れていく。由美が振り向いた。

「でももし…もし、タケルが彩をほったらかして浮気でもしたら、私がタケルをボコボコしてやるから」

由美が私の胸を軽く突いた。何も言わずに由美に飛び付く。

「ちよ、ちよつと、彩！ 私、タケルじゃないって！ うっ、もう！ しょーがないなあ」

溜息をついて、由美は私を抱き締め返してくれた。

朝

ホテルのベッドの中で、ふざけ合って擦りの応酬。負けそうになったタケルは、私の隙についてベッドを抜け出す。

「待て！ コラッ！」

布団をめくり上げ、私は上半身を起こす。全裸のタケルは、笑いながら振り返ったけど、ダラダラと両腕をぶらつかせてソファアールに腰を下ろす。手前の空いたスペースをパンパンと叩いた。

「こつち来て座れよ」

全裸なんてもう気になるはずがない。私はベッドを飛び出し、ソファアールに飛び込む。

「おめえ、逃げんなよなあ！」

「おっ！ 危ねえって！ おまえ」

タケルは私を受け止めてくれた。まだ欲求不満の私。タケルに覆い被さり、唇をぶつけて舌を絡めると、タケルは、私の胸に手を割り込ませてオツパイを揉み、もう片方の手で髪を撫でる。

「逃がさねえからな」

「心配しなくっても、何処にも逃げるとこねえよ」

タケルの瞳と力に、私は押し戻され、ソファアールに座らされた。

ソファーにもたれる私に覆い被り返したタケル。唇を私の首筋に滑らせ、私の乳首まで唾液のレールを作った。赤ちゃんのように健気に私の乳首をピチャピチャと吸い、コロコロと転がすタケルを眺める私は、堪らず声を漏らして、タケルの髪を撫で回した。乳首を離れ、床に膝ま付いたタケルは私の腰をグイッと引き寄せ、両脚をM字に開かせる。私はソファーの上で、タケルの顔面にアソコと肛門を突き出す姿勢になった。ちよつと、恥ずかしい…。

「アー、ハハハハッ！」

照れ隠しに、私は天井を仰いで笑う。タケルもクスクス笑っていたけど、私のクリをペロペロ舐め始め、突き出された肛門へも舌を進出させる。

「あつ！ ダメツ！ タケル…」

全然、ダメなんかじゃない。喜び楽しんでいた私。蠢くタケルの頭に両手を伸ばす。吸い付く唇からニユルツと伸びた舌がクリを転がす。

「ウアアウフアアア…。タケル…」

タケルは指を私の膣に挿入させ、以前から気になっていた膣内の気持ちいいポイントに若干曲げてた指を押し込み、擦り上げる。クリとそこ両方はヤバイ！

「アーウウ、アウアアーアウウアアア！」

舌でクリ、指でその部分、もう一方の手の指で私の肛門を攪り始める。三つ全て…。効き過ぎるっ！

「タ、タケル！ ウツ！ クツアウアーツ！ ウウワアアア…」

二回目のエッチが終わってサツとシャワー。タケルと添い寝し、ふざけて合っていた最中、既に私のアソコはヌルヌルを再発していた。にも関わらず、その大胆な姿勢で、タケルの激しい愛撫を受ける私。当然、いつもより早く絶頂感を迎えるだろう。呼吸が早くなる。顎が上がる。視界が霞む。思った通り、それが、やって来た。

「アツ、タケル！ またイクツ！ アツ、イクイクアーツ、イ、イ、イクツー！」

その瞬間、私のアソコから液体が噴出。少しだけソファアと床に飛び散ったみたいだったけど、タケルはタイミングよく指を抜き、私のアソコ全体を頬張って、その液体をゴクゴクと飲み始めた。あー、ゴメンねえ。タケル…。また飲ませちゃったよ。虚脱感しかない私は、何とかタケルの手を握り、タケルの喉の音を感じていた。ここまで愛してくれて、ありがとう。タケル。遠のく意識の中、感謝の気持ちも忘れない。

タケルはソファアの上にあつたバスタオルで、私のアソコと自分の口元を拭い、床とソファアを拭く。そ、それは、私が。我に返った時には、もうタケルは、私の横に座り、私の肩に腕を回していた。タケルの胸に顔を押し付ける。

「気持ちよかった？」

私の髪を撫で、キスするタケル。

「うん、最高」

顔をタケルの胸に押し付けたまま答えた私。眼下にはタケルのチンコが聳え立つ。仕返ししてやる。息を整えた私は、徐に、チンコに手を伸ばし、タケルの胸から滑り落とした顔をタケルの開かれた股間に埋めた。さあ、私の番だよ。覚悟しろよ！ タケル。パクツと先端を舌をローリングさ。

「アツ」

タケルの声が漏れたけど、私はチンコの先端に吸い付いたまま、ゆっくりとソファを下りて、タケルの両脚の間に入る。やり返してやるよっ！ ラーツ！ 一旦、先端を口から抜いた私は、タケルの両脚を押し開け、私がされたように、タケルの股間を私の顔面に引き寄せてやる。丸見え…。やってやる。上目遣いでタケルを見上げる。明らかに照れ隠し。タケルは苦笑いで髪を掻き上げた。主導権を掌握し、勢いづいた私。上目遣いをそのままに、タケルちゃんの裏筋と尿道の縫い目をチロチロする。

「うっうっ…」

可愛い声だね。その酸っぱい液の出具合は快調みたい。もっと出して…。願っただけじゃなく行動も。舌先を尿道に割り込ませた。

「ウツ！」

結構、ハズいんじゃないの？ これ。てか、ゲキヤバだよ。これ。生まれて初めて女子の前に晒す醜態。くどくど言うのも野望だ。誰だって、戸惑いよりも気持ち良さを優先させるよ。彩の妖艶な上目遣い。いつの間にか、彩は大人になってた。ま、ここは、彩姉さん

にお任せしよ。あつ！マジ気持ちいいんだけど。

タケルの上半身が微妙にのけ反った。まだまだ、こんなもんじゃねーよ！豹変していた自分自身に気付いていた私は、尿道を親指でキャップしてこね、舌をチンコの茎に滑らせて横舐め、横吸い。ニユルニユルの舌を巻き付けた。

チンコの根元まで舌を這わし、吸い付いて付け根を掘るように舐める。交互にタマタマを攪り、口に入れて舌で転がしながら、人差し指に尿道から流れ出るタケルの液と茎に残っていた私の涎を付け、その混合液をタケルの肛門に塗り付けて弄り回してやった。完全に常軌を逸した私。ここまで私を変えたのは、タケルだよ。責任取ってよね。

「彩…。凄いよ…」

タケルは気持ちよがってる。肛門をこねながら、再度、チンコの根元に吸い付くと、業と涎を口内に溜めて、チュー、チューと、音を立てて吸い、左の親指で裏筋を尿道に向かって押し上げるように弄った。

そつ、そんな、彩！もう、効きまくりだし…。全てを彩に委ねた俺は、曇った視界を天井に向ける。

さあ！肛門舐めよ！気合いが入る。もっとこっちだよ。タケ

ルの股間をより近く私の顔面に引き寄せた。チンコを扱き、肛門全体に唇を着けて吸い込み、舌を真ん中の穴に挿入させる。

「グッ、アアアアアッ！」

タケルのそんな声を聞くのは初めて。私は肛門に舌のドリルを回転させ、チンコを扱く速度を高める。

ダメ、ダメッ！ もうダメだって。

「彩。もう、俺！」

てか、イクとこ…。チンコから精液飛び出すの…。彩に見せるの、ハンパなくハズいんだけど…。参ったなあ。我慢の方が…。

あるアイデアが閃いた。私の口の中でタケルをいかせる。そして飲む。いける！ 一度、最愛のタケルのものを飲んでみたかったけど、それまでにチャンスがなかった。息なり、「飲んでいい？」。ても、引かれちゃ元もこないし…。これなら自然に飲める。このチャンスに絶対にモノにしたい。早く飲みたい。チンコの先端へしやぶりつき、頭を高速で上下させる。

「あ、彩…」

さあ、タケル…。いけっ！ 上目遣いで、タケルの感じている表情を眺め、更に、その上下運動を激しくする。タケルが我慢してい

るように見えた。これでもか！ タマタマを指先で転がす。

「彩、彩、ダメだー！」

タケルが顎を引く。ダメじゃねえっての！ もう少しだと実感。上下のスピードが更に速まる。

「イックツッ、アッ、イックウー！」

タケルのチンコが私の口の中で少し引かれ、直ぐに、突き出され、大量の精液が放出された。うおおお…。出てる出てる。凄く凄く。温かいタケルの分身が口内に充満。最後のドクンが弾くまで溢さないように含みきる。息を荒くするタケルがゆっくりとソファアの背もたれから頭を起こし、唾然な表情で、まだ先端をくわえ込んでいる私を見詰めた。

口の中だから、精液が飛び出るとこは見られなかったけど、これは、それ以上の問題だ。彩にそれは…

「あ、彩…。だ、出せ」

無理だろ…。てか、無理すんな。飲めねえよ。我に返った俺は彩を気遣う。あ、でも、こいつの性格上…。

絶対、イヤッ！ 冗談じゃねえよ！ やっと挿んだチャンスなんだから。それに、このまま飲むのも勿体ないね。先端を含んだまま、

舌を動かして、その液の味を味わう。うーん、苦いような…酸っぱいような…でも、甘みもあるような…。うん、なかなかいい感じじゃん。舌に精液を浸した私は、タケルを眺め、チンコの先端をくわえたまま…ゴックン。喉を鳴らして飲み込んだ。OK！ どうだ、タケル！ 飲んだぞ！

亀頭が吸い込まれ、彩の喉が鳴った。飲みやがった。いやまあ、いいんだけど…マジ、大丈夫かあ？ 彩はまだ亀頭をくわえてる。また彩の舌が亀頭に巻き付く。えっ！？ お、お掃除まで…。そこまでするう？

「う、ううう…」

いった直後のそこは…擦りたい。

眉間に皺を寄せたタケル。遠慮がちに声をだした。先端に舌を巻き付けて付着液を綺麗にし、最後までその味を堪能する私。タケルは、私の味わい行為の最中は顎を引き、苦しそうな表情で私を見詰めていた。その表情も可愛い。漸く、口からチンコの先端部を抜く。でも…何かまだ出そうな張り具合。納得いかないな。私はチンコの茎を握り、先端部へ絞り上げる。尿道からじんわりと、白いものが滲む。ほらあ、思った通りじゃん。ペロンと、それを舐め上げた。最後の一滴も無駄にはしない。

バスタオルで、チンチン全体を綺麗に拭き上げ、最後に先端にチユツと唇あげて完了。先端に唇をあげた瞬間、タケルは下半身をビクツとささせただけ、表情は満足そうだった。ソファに座り直したタケルの胸に競り上がり抱き着く。

「彩、大丈夫かあ？ よく飲めたなあ？」

鼓動が聞こえる。タケルは私の耳を触ってる。

「だってえ、タケルものは、みんな私のものだから」

タケルの匂い。安らぐ。

「愛してるよ…。彩」

更に強くタケルを抱き締めた。

「愛してる…。タケル。マジ、美味しかった」

眼下のタケルのチンコ。大人しくなつて可愛い。ツンツンツンツンと指で5回叩きながら、「ごち、そう、さま、で、し、た」と、囁いた。笑って私を引き上げるタケル。舌を絡め合った。初めて、タケルの精液を飲んだ。また一層、タケルと同化出来た。幸せと感動を噛み締める。タケルと私は、いかされたけど、二人の時は、いかせたくない。

気が付いたら、見慣れない天井。

体は動きそう。重たい上半身を片腕に力を入れて押し上げると、首に激しい痛みが走る。反射的に目を思い切り閉じた。どうなっ

んだろ？

首の痛さを堪え、暗闇の中で、思い起こしたけど、全く、状況が掴めない。大丈夫か？ 痛みが多少和らぎ、目を開けた。動けるか？ 俺はシーツに下半身を滑らせて、ベッドの下に足を降ろそうとした。痛！ また首に電気が走る。首を押さえ、深呼吸だけで治まった。素足を冷たい床に着け、再び、片腕に力を入れて腰を起こした。ベッドから立ち上がりその場所を見回すと、ドアの手前に洗面台。その洗面台の上に鏡が…。取り敢えず、あそこまで。ペタペタと洗面台まで歩けた。鏡に映る自分の顔。何か、老けたみたいだ。どうなってんだ？ 思い出さなきゃ…。また深呼吸をした。

由美と一緒に、笑いながら屋上から3階に降りた。

階段から廊下に出ると、丁度、鞆を抱えて雄二とタケルが教室から出て来た。

「ヨッ！」

由美に声を掛けたタケル。私には見向きもしない。私は少し俯いた。

「あ！ 雄二、この前言った曲。見つけたんだ。家にあるから一緒帰ろう」

私に目で合図を送りながら、由美は雄二に歩み寄る。

「悪い」と、思って由美を見る。俺を通り過ぎる時、由美は軽くウィンクした。

「あ！ あの曲な？ 由美あんなレア物CDよく見つけたな！ 一緒帰ろうぜ。じゃ、俺、先に由美と帰るわ」

意味ありげな笑顔をくれた雄二は、軽く俺達に手を振り、由美と一緒に由美の教室に入って行った。さあ、こっからだ。

「じゃあ…俺達も帰るか？」

「うん、鞆、取って来るから待ってて」

彩も俺を通り過ぎ、教室に入って行った。

「はっ！」

教室に入った途端の溜息に、由美と雄二が気付く。

「彩。同じ学校で付き合い始めると、彼女が冷たくなる。そんな事はよくある事。俺も昔、経験したからさ。同じ学校で彼氏の顔見るのが、女の子にとっていかに恥ずかしい事か。タケルは初めての経験だから…ちゃんと説明しといたよ」

タケルも雄二に相談してたんだ。隣で由美が笑ってた。

「それで…タケル、何て？」

雄二に慌てて聞いた。

「暫く、黙ってたけど…。彩の事好きだし、彩の事を考えながら頑張るってさ」

体の硬さが抜けた。

「ありがとう、雄二。タケルの野郎と帰りながら色々話してくる」

緊張から解かれた私は鞆を机から取り上げた。

「あんまり肩に力入れんなよ。彩はもうタケルの彼女なんだから…。タケルも、もう彩しか見てないからさ。余裕持っていけよ」

「そうそう。彩は、もうタケルの彼女。ドシツとしてればいいよ」

もう私達はカレカノなんだ。何も怖いものなんてない。天井に向かって吹き上げる息が爽快。

「ありがとう！じゃ、頑張ってください」

二人に軽く敬礼して教室を出た。

鞆を肩に掛け、教室から彩が走って来た。

「お待たせ！」

緊張していたけど、何とか笑顔を作る俺。しかし、彩は、さつきまでと人が違ったように明るい。

「帰える」

俺が言うと、首を回して周りに誰もいない事を確認した彩。鞆を落とし、俺に飛び付いてキスして来た。何だよ！？ 息なり！ 俺の鞆も肩から落ちる。でも、何故か、気持ちが楽になり、俺は彩を抱き締めた。

どうしても二人が気になる俺と由美。息を殺し、廊下側の窓から、微妙に頭を出してタケルと彩の様子を覗く。あれれ…。二人は抱き合ってキスの真っ只中。俺と由美は、慌てて窓から頭を引っ込めた。

「な、何なんだよ？ あいつら。俺らの一日返せってんだ」

「メデタシメデタシ。で、いいんじゃないの」

始業式の直ぐ後、「タケルと彩の様子が変だから、あんたはタケルと話して」って、由美から言われた俺。心配して損したよ。苦笑いしか出て来ない。

「ちゃんとタケルに話してくれて。私の合図メールに反応してタケルを廊下まで連れて来てくれた。」苦労さん。雄二、いい仕事だったよ」

涼しい顔の由美。鞆を机から取り、肩に掛けた。

「いい仕事ねえ。でも、あれってどうなの？ ソツコーじゃん」

由美が含み笑い。俺は傍の机に腰を掛けた。

「あんなもんだよ。まあ、今まで喧嘩友達だった二人だから…。二人きりの時とは違って、私達の前じゃ、色々戸惑う事ある。でも、私も雄二も経験したように、それは最初だけ。元々、仲良い二人。学校でもちゃんとカレカノやってけるよ」

「メデタシメデタシか…。でも、何か仕事の報酬もらわねえとなあ」
首を摩りながら、冗談ぽく言った。

「あーん。じゃあ、雄二君には…。私がチューしたげる」

「はい？」

唇を突き出し、迫ってくる由美の冗談。嫌！俺は慌てて机から飛び降り、由美の唇から逃げる。

「バカじゃねえのオマエ！」

鞆を抱えて逃げる俺に、由美の冗談が追い掛けて来る。

「雄二！ 逃げんな！ コラ！ してやるからジツとしてろ！」

教室から脱出する俺。

廊下で、タケルに前髪を梳かれていると、雄二が教室から飛び出して来た。

「おい！ 由美が変だつて！」

「彩、タケル。バイバイ！ ちょっと、雄二、待てコラ！」

由美が雄二を追い掛けて階段を駆け降りて行った。

「学校じゃ、俺らもあいつらみたいにいこうよ」

微笑むタケルに、私は、また軽くキス。

「うん！ でも、二人っきりの時は…。その分、思っきり甘えてやるからね。いい？」

「当然、じゃ、今から二人きりになり俺の家来るか？」

タケルは、また私の前髪を梳いてくれた。

「んなの言われなくても行くよ。お昼作っただげる」

タケルの腕を引いた。

「おまえの配慮が足らねえんだよ。学校で、彼氏を意識しねえ女の子いねえよ」。雄二の言葉がよく分かった。ホッとして反省していると、彩が、ポケットからハンカチを出した。

「これ、由美がタケルに返しといてってさ雨でスカートに泥跳ねた時、タケルから借りたって。」

あの時のハンカチだ。やっべえ。

「開いてみて」

彩が笑顔で俺を見上げた。諦めた俺。ハンカチを開けると、ハンカチには淡いキスマークが着いていた。

「由美が…」

彩が話し始める。

返すんならこそっと、返せってんだよ。

「このハンカチに私のキスマーク付けてタケルに返しとやれってさ。恥ずかしかったけど、屋上で由美に口紅借りてつけたよ」

そのキスマークを指で撫でる彩。由美にやられた。

「タケル…」

唇を尖らせて俯き、俺のジャケットの袖口を掴んだ彩。

「どっした？」

「濡れてる」

「エーッ!? なんとこで、おまえっ」

何でも、朝から濡れてて。学校来て、直ぐナプキン挟んだらしい。どうなんよ? それ。…

ホテルで、彩と狂おしく愛し合った一夜。

早朝、その疲労からまだ夢の中にいた俺。何? これ。ある違和感から、重たい瞼を薄ら薄ら開く。徐々に、その違和感は、下半身から伝わる彩の鼻息と共に、快感と至福に変わっていく。その拠点を見下ろすと、彩が俺のチンコをくわえ込み舌を絡めていた。

「あ、彩…」

俺の声に気付いた彩。一旦、口からチンコを抜き、「エへへ…」と、笑って舌を出す。可愛い過ぎる。彩はチンコにチュツと音を立ててキス。まったくわえ込む。早朝フェラ…。

「何か、変だと思ったあ…」

枕に頭を戻し、髪を掻き上げる。彩は、唇をペニスの根元に移動させ、舌をねっとり巻き付ける。

「だって…。私のお腹に固いものが当たるから起こされちゃったよ。だから、タケルがやりたくなっちゃったのかなって思ってたさ」

根元から亀頭に舌を競り上げる彩。亀頭をくわえ込み、舌をぐるぐるとローリング。

「アア…」

朝っぱらからでも声は漏れるさ。彩の可愛い勘違い。「男なら誰でも…朝は勃起するんだよ」。朝立と言う男の生理現象。敢えて、彩に説明しなかった。一夜を共に過ごせば、朝は、いつもフェラで起こして欲しい。男なら誰でも…自分の彼女にはそう願う。余計な事言つて、「何だ、そうなの」。女をしらせすのは、男として最低。

「気持ちいい？」

柔らかくペニスを扱き、彩が囁く。

「ああ、最高だよ。最高の起こされ方だよ」

体をお越し、彩は俺に跨がる。

「じゃあ…。朝は、いつも、こうやってタケルを起こしていい？」

ほら。余計な事さえ言わなければ、最後にはこうなる。朝っぱらからでもニヤつくぞ。

「いいよ。彩の好きなようにしろよ。俺のものは…全ておまえのもの」

俺に頬を撫でられた彩。俺に跨がったまま慣れた手つきでチンコ

を握り、自分の膣口に当てる。

「アウツ！」

そのまま腰を下ろした彩。フェラしながら濡れてたんだろ。スムーズに入った。

「タ、タケル……。あ、朝も、昼も、よ、夜も、は、離れないから……。タ、タケルの全ては、わ、私のものだからっ。アツ、ウアアア……」

朝から望を表にする彩。虚ろな瞳を俺の上で揺らし、舌の絡みと腰の動きを速める。寝るまで5回もしたのに……。この週末で、彩は、どこまで成長するんだろ？　楽しみで仕方ない。

防火壁

「また雨かあ…」

教室の窓に、雨が数本、透明の線を引く。携帯が振るえたみたいだ。ポケットから取り出した携帯を机の下で開いた。

…今夜、またラーメン食べに行く。あのゲロ電柱で待ってて…

小夜子さんから初めてのメール。授業中？ 関係ねえ。多分、気持ち悪い含み笑いだったろう。

…はい！ 待ってます…

返事を送る。

「なあ、タケル？」

食堂で、雄二が沈痛な表情を俺に向けた。さっきから智喜は気持ち悪いニヤつき顔で上の空だし、雄二は胃が痛そうな顔してる。今日は変な奴らだ。

「どうした？」

「雄二がそう言うんだ。取り敢えず、私はOKしたんだけど…。じ

や、今日中にタケルに筋通しとくって」

昼休み、私の机を囲んでお弁当。雄二がタケルにねえ……。美紀がフォークを止めて俯く。

「それなら大丈夫だよ。きっと、タケルなら、『おう、頑張ってるよ』みたいな感じだよ」

卵焼きを頬張りながら答えた。でも、何で、雄二がそんなにタケルに気遣うのかな？ 美紀は妹じゃなく友達だって、タケルは雄二にちゃんと言ってる訳だし、そこまで気遣う必要あんのかな？ 卵焼きをもがもがさせながら、美紀と由美に気付かれない程度、私は首を捻った。

「でも、いい意味で忘れてたよ。タケルって美紀のお兄ちゃんだったね」

「うん、私も忘れてた」

そう言っつて、笑いながら美紀はフォークでご飯を口に運んだ。そう、もう皆忘れてた事実なのに……？

「実はさあ……。親父さんに挨拶行こうと思ってんだけど……」

親父？ ああ、親父ね。そう言えば、美紀の親父って俺の親父だったよな。忘れてた。

「お、おう、いいんじゃない」

「エッ!? いいの?」

「んな、気遣うなよ。おまえらのこっちゃんえか。なあ?」

智喜に振り向くと、智喜は慌てて何処か遠くから視線を戻した。

「うん? お、おう」

グラスの水を一気に飲む智喜。どうしたの?

「おい、おめえ、さっきから変だぞ」

グラスをトレーに戻した智喜は、ぎこちなく首を振る。

「い、いや…。ゆ、雄二、しっかり挨拶してこねえとな」

一応、話は聞いてたか?

「いやでも…。取り敢えず、緊張するよ。親父さん…ビックリすんだろなあ」

雄二はカレーを口に運ぶ。

「何かあったら、俺が親父に言ってやるって。ガッツリ行ってこい」

雄二の肩を叩くと。漸く、雄二は笑顔を滲ませた。何で、雄二はそんな俺に気を遣うんだ?

「初めてだもん。彼氏をパパに合わせるなんてさあ。緊張するよ…。彩と由美は…緊張しなかった？」

「そりゃ緊張したよ。でも、最初だけだった。皆で、焼肉食べて…。お父さんもお母さんも…タケルと仲良くなってくれてさ。今じゃ、お父さん、お母さん、ついでに妹までタケルのファンだよ」

「それ、いいなあ」

美紀は私の机に両肘を着き、美紀は両手で頬を覆った。

「うちは、ママよりパパの方が彼氏気に入っちゃって。私、独りっ子だから男の子が恋しかったんだろねえ。もうとつくに別れてんのに、あいつとまた付き合えって言うんだよ。うちのパパ。無茶苦茶も良いところだよ」

由美の話に、私と美紀は吹き出した。

「でも、何で、男って…彼女の親に会いたくなるのかな？」

美紀の質問に、私と由美が顔を見合う。何でなんだろう？

「ほう、おめえも根性あんな。おめえから美紀に頼むなんてさ」

「まあ、こつこつ事はケジメだからさ」

今度は智喜に肩を叩かれ、雄二が得意げに答えた。いつもの調子

を取り戻した二人を眺め、俺は苦笑い。

「智喜もある？ 彼女の親に会った事」

俺がストローを噛みながら智喜に聞くと、智喜が頭の後ろを撫でた。

「あるある。無茶苦茶、緊張したよ」

雄二が智喜に顔を向ける。

「エッ？ おめえが緊張する事あんだ？ 想像出来ねえ」

「あれは誰でも緊張するぜ。向ここのオヤツサン、こええこええ」

智喜が怖がる？ その場景を想像して笑った。

「うちの親父なんて軽いもんだ。それに、おめえ、親父とは、ガキのころから知った仲じゃねえか。俺や智喜が経験した緊張には及ばないよ」

「ま、まあ、そうなんだけどさ」

分かってんなら、何にも俺に気兼ねする事ねえじゃん。さっさと言っ来て。ニヤニヤ雄二は自分の頭を撫でた。ん？ おめえにとつちゃ、そっちより…逆の方が大変じゃねえのか？

「雄二…。で、おめえは、いつオヤツさんとヨツチャンに美紀会わせるんだよ」

頭を撫でる手を止めた雄二。

「やっぱ…そっちの方が重要なんだよな。だから、タケル、また色々頼むわ」

テーブルに肘を着き、雄二は柄にもねえ真顔を俺に向けた。ああ、俺も経験者さ。色々アドバイスしてやるよ。

「おう、任しとけ！」

俺は雄二の肩を揺すった。

「美紀の事だ。おめえが美紀からリクエストされるぞ。なあ？」

同意を求める為に、智喜に顔を振る。

「だよな。当然、次は女のケジメってやつが来るぜ」

苦笑いの雄二に過去の自分を映していた。彩からお袋に会わせて欲しいって言われた時には、俺も今の雄二みてえな面してたんだろうな…。嬉しいような…。困ったような…。彩とお袋かあ…。仲良くなりやがって。その時、俺の思考が数分前に戻った。あ？ お袋？ 待てよ…。もしかして、雄二が氣遣ってるのは俺じゃなく…。

お弁当を食べ終わった私達。美紀が静かに顔を上げた。

「私も会いたいなあ…。雄二のパパとママに。彩て…。タケルのママと凄く仲良しなんでしょ？」

そりゃそうだよね…。私もタケルと付き合い始めた頃、ママに会いたかった。

「うん。時々、ママと女子会やってる」

「いいなあ…それ」

私は美紀に過去の自分を映して微笑んだ。ママとも凄く仲良くなれた…。その時、私の思考が数分前に戻った。マ、ママ？ 雄二が気遣ってるのは、タケルじゃなくて…。

「なれるよ。美紀がそう言う気持ちなら。ね、彩？」

「う、うん」

由美の振りに、内情を気付かれないように口元だけを上げて頷いた。その前にやんなきゃいけない事が…。美紀は不安な表情をパツと明るく変えた。きつと雄二は、まだご両親に美紀との事を報告してない。報告してたら、私とタケルが雄二のお母さんとお父さんと仲良しなママから、その話を突っ込まれてるはず。

「ヨッシ！ 私も彩みたいに彼氏のママと仲良くなれるように頑張る！」

笑顔で背伸びする美紀。こんな幸せな美紀を誰も止められない。ママはどう反応するかなあ？ タケルだけじゃなく私も美紀と友達になったって知ったら…。美紀と雄二が付き合い始めたって知ったら…。肝心な事をママに報告してない。取り敢えず、タケルに相談…。あいつ、真剣に考えるかなあ？ 笑顔を突き合わせて素敵な未

来話をする由美と美紀。私は愛想笑いで、時々、求められる同意に「そっだよな」と、返すだけ。

「雄二…。おめえ、もしかして…俺のお袋に気遣ってんのか？」

飯の後、智喜と「女とは？」何て議題で調子の良い話をかましてた雄二はキョトンとした顔を俺に向けた。

「そりゃ遣うよ。裕ちゃんにはガキン時から色々世話んなってるからよ。でも、タケルが上手く話してくれるんならOK」

思わず、テーブルに肘を着いて呆気に笑った俺。これで、漸く読めた。「また色々頼むわ」。さつき珍しく真顔で言った雄二。お袋を通してオヤッサンとヨツチャンに…。俺は、「おう、任しとけ」って返事した。雄二が俺に頼みたい全貌が明らかになった。髪を掻き上げて天井を仰ぎ見る。今更、引つ込められねえ。既に、雄二は智喜へバカ面を戻し、バカ話の続きをしている。雄二は、まだオヤッサンとヨツチャンに美紀の事を話してねえ。てか、雄二の性格上んな思い切った話出来ねえよな。で、お袋に…。そりゃ、気遣うはずだよ。笑うしかない。雄二が親父の会う話なんてのはスーパーサブ。美紀をオヤッサンとヨツチャンに会わす話がメイン。早とちつたあ…。どう、お袋に説明する？ お袋の性格なら…。でも、あんまり雄二を甘やかすのもなあ…。？ てめえの事は、てめえで筋通さすか。雄二と智喜の話に寄らず、一人、鼻を擦る俺。暫く、ほっておい。

「そりゃ、女の愛情には、男は誠意だよ。な、タケル？」

雄二が俺に顔を向けた。なら、おめえの誠意見せて貰おうじゃねえか。俺は、若干、テーブルに視線を落として笑いを含んだ。

「そろそろよ」

後は、彩だな。彩も、今頃、美紀から相談持ち掛けられてるはず。彩は彩で…お袋に気遣うはずだ。ややこしい。

閑散とした中、昨夜の余韻を残す揚げ物の臭い、店先に詰まれたビールケース、適当に散乱した酒瓶と霏掛かった灰色の景色にうるくつ数匹の猫。それらが、ただ静かに、初めて同じ朝を迎えた二人を囲んでいる。

551

「昨夜は、お疲れ様でした」

呟いて、パンケーキを刺したフォークを口に運んだ彩。俯いた顔と口にくえたフォークをそのままに、瞳だけを俺に上げた。

「もうー！ 見んなよ！」

何で？

「そりゃ見るだろ」

「ハズいつての」

苦笑いの俺はマフィンにかじりつき、彩は俺を上目遣いを残したまま大好きなオレンジジュースを吸い上げる。きつと、彩は朝の大胆な行為を思い返してんだ。ホテルから出た俺と彩。暫く歩いて、いつものマックに入り、夜から朝に掛けて大量消費したカロリーを補給していた。

「じゃ、見ねえよ」

マフィンで口を籠らせ、彩からソツポを向くと、彩は、慌ててオレンジジュースのカップをトレーに戻して席を立ち、わざわざ、俺の体が向いた方向に移動して、俺の目の前にしゃがんだ。

「やつぱ、見ろ」

「何なんだよ？ おめえ」

呆れてトレーにマフィンを戻す。立ち上がった彩は照れ臭さそうに下唇を噛み、俺の肩に腕を回して膝の上に腰を下ろした。当然、周りには他の客が数人いたけど…関係ない。俺がトレーのカップに手を伸ばすと、彩がサツとそのカップを取り去り、カップからアイスティーを吸い上げ、彩はトレーからアイスティーを口に含むと、口移しで俺に飲ませた。マジで、周りは関係ない。

「週末は、お袋の店忙しいから。8時には、お袋、家にいなくなる」

俺は腕時計をチラッと見た。

「もうそろそろ出る頃だ。彩は、こかれから俺ん家に寄って制服に着替えて、一旦、家に帰れよ」

眉間に皺を寄せ、唇を尖らせた彩が俺の頭を抱える。

「えー！ 何？ それ」

彩の胸の中で顔を上げた。

「親父さんとお袋さんが心配してると思うからさ。朝、顔見せとけよ。で、また直ぐ俺の家に来ればいいじゃん」

「何だ？ そんなこと気にしてたんだ？」

彩はデニムパンツの後ろポケットから携帯を取り出した。

「あ、お母さん？ うん…楽しかったよ。タケルも一緒だったからさ。うん、これから、タケルの家行くから…。うん、分かった。じゃあね」

何食わぬ顔で携帯を切った私。啞然とするタケルを見下ろした。

「マジ、いいの？」

「これは、タケルのお陰でもあるんだよ。この前、タケルが家に来て…。うちのお母さんもお父さんもタケルの事を気にいっちゃって完璧、交際認めたから」

タケルが更に私を引き寄せる。私はタケルに唇を落とした。

「じゃあ、食ったら行くか」

「うん、今日も…ゆっくり愛し合おう」

もう、私とタケルに周りの視線は関係なかった。

シャワーの後、クローゼットの前で、「服、選んでよ」。バスタオルを巻いた彩に言われた。俺は照れ笑いで姉貴のワインレッドのキャミを選んだ。中身は彼女でも外は姉貴。何かまた複雑だよなあ…。こう見ると…彩って姉貴に似てるのか？ いやいや、んな馬鹿な。

「上がこれなら…。下はママから貰ったシルクのパンツだ」

姉貴のキャミに…お袋からのパンツ…？ ま、まあ、良いけどさあ。俺は、バスタオルを取った彩を抱き寄せる。

「着替えなんて後にしよ」

唇を重ね、シャワーの時に業と焦らした償いをしようとした。

「もう…。ホテル出た時から濡れてたんだからね！」

彩の拗ねた微笑が俺をベッドに倒した。

リビングのソファアに座りテレビを見ていた俺は、キッチンカウンターに向こうにいる白のシルクパンティーの彩にチラチラ。でもお袋のエプロンと姉貴のキャミつてのが、妙に防火壁になり、また再発しそうになっていた男としての行動を躊躇させている。さつき、あれだけやったんだ。ちよい休憩。でも、気になるな。キッチンで包丁を持つ彩も、俺をチラチラ見る。目が合うと、「もう！ 何見てんだよ」。そう言われても、「その格好が反則なんだよ！」と、言い返すしかない。「おめえが選んだんだろがあ！」と、言われりや何も言えなくなった。

彩は何やらリズムを取り、ボウルの中のドレッシングを掻き混ぜる。

「タケル、このドレッシング味見してくれない？」

彩の料理の腕は、言っちゃ悪いけど、仕事中心のお袋より確か。その事を認めていたお袋は、彩の為に、いつも食材で冷蔵庫を満たしておいてくれる。彩は、ドレッシング、スープ、鍋の出汁、パスタソース等をスーパーで買わず、その日、その時、冷蔵庫にある材料と調味料を調合して作る。その味のセンスも凄いけど、包丁捌きもまた見事。玉ねぎのみじん切りや大根の桂剥きは鼻歌混じりで早い早い。調理は、3、4工程くらいを一度に捌いている感じで、どつかの料理番組もどき。流石、小学校低学年の頃から家事をさせられてるだけの事はある。

初めて、彩が作ってくれた料理は、白味噌を隠し味に使ったクリームシチュー。その美味さに感動した俺は、思わず、彩と彩のお母さんに感謝。「砂糖、塩、酢、醤油、味噌。どこの家庭にもある基本調味料をベースに。冷蔵庫の中を見て、何が出来るか考えるのは、そんなに難しいことじゃないよ」。彩はそう言うけど、俺にはサツパリ。とにかく、料理は彩に任せれば間違いない。ど素人の出

る幕はないよ。

「彩の味でいいよ」

「早く、味見してって」

ソファーから答えた俺に、彩は手招きした。いいのに。仕方なくソファーから腰を上げた。

キッチンで、彩の傍に立った俺。味見なんかより先に、足元から彩を見上げる。真っ直ぐに伸びた左脚と柔らかく曲げられ爪先をキツチンマットに立たせる右脚。艶張った太股を通過すると、程よく丸みを帯びたシルクのパンティ。括れた腰をワインレッドのキャミが覆う。微妙に膨らんだ胸を隠すエプロンも、こう見ると色っぽい。バレッタで髪を束ねる彩。ほつれ毛が下がり、うなじに産毛がそよぐ。少し俯いた彩は清楚感があり妙に神秘的。喧嘩ばやい女の子が…いつから、こんな大人になったんだろ？ 彼氏として愚問。

「もう、何見てんのよ？」

「い、いや、何にも」

顔を向けた彩から我に返された。少し笑った彩はボウルに入ったドレッシングに人差し指を着け、その指を俺の口元に近付けた。

「味みて…」

虚に俺を見詰める彩。舌を彩の指に絡ませる俺。少し、彩の口が開いている。チュツと音が鳴り、俺の唇から彩の指が抜かれた。

「どっ、おいし…」

もう本能を止められない。衝動的に、彩を抱き締めキス。何故か、彩は待つていたかのように俺を受け止めた。キッチン。普段と違う場所。ホテルと似ている。お袋のエプロンも姉貴のキャミも捲り上げた俺。んなのかまつちゃんねえ。直接、オツパイを掴んで揉む。首筋に吸い付き、彩の尻をパンティーの上から撫で回した。オツパイを揉んでいた右手を彩のパンティーのギャザー部に入れ、その茂みと陰烈を漁ると、大陰唇にまで滲み出していた愛液を潤滑油代わりにし、小陰唇に滑らせる中指を膣近辺まで減り込ませる。

「アッ！」

叫び声と同時に弓なりになった彩の体。片腕で支えた。「タケルと一緒にいる時は、いつも濡れてるのから…」。彩の言葉を再確認した俺はパンティーから手を抜き、身を屈めようとした。しかし、一瞬、彩が俺より早く身を屈めた。先に行かれた。彩は俺のスエツトパンツとトランクスを物凄い勢いで、足元まで引き下げた。問答無用。痛いくらいに勃起したチンコをくわえ込む。

「ウツ」

根元に舌を這わせ、舐めている所を強調するかのように、流し台に後ろ手を着く俺を上目遣いで見詰める彩。あのホテルで、彩は、完全に遠慮のないエッチに開眼していた。自分自身と俺をより卑猥にさせる妖艶な上目遣いも、彩がホテルでの解放感の中で、自然に習得したものに違いない。

「ウツアーツ」

俺の声を気にせず、彩は亀頭をスツポリくわえ込み、口内で、亀

頭をクチュクチュとローリングさせ、舌先で裏筋の縫い目を奮わす。右手で唾液が滴るチンコを扱き、左手で玉袋を下から鈴を鳴らすように賑わす。獲物を堪能する女獣になった彩。そのローリングと扱きを加速した。ヤバイ！このままじゃイッてしまう。危機感を得た俺は足元のスエットパンツとトランクスを蹴り脱ぎ、彩を脇下から持ち上げ、流し台の向かいに設置されたキッチンカウンターに腰を掛けさせた。濡れて陰門を浮かび上がらす彩のパンティーを剥ぎ取ると、長い両脚を開裂いた。

「タ、タケル！ な、舐めてっ！」

俺がしたい事。彩がされたい事。同じだ。キッチンカウンターの上で開かれた彩の陰門に膝ま付き、俺は膨張したクリを舌先で強く押し込む。

「アウツ！」

カウンターに後ろ手を着いた彩。天井に向かって叫び声を上げた。濡れに濡れた彩の陰門の甘味。俺の舌に絡まり、更なる供給を求めてズーズーと膣口を吸いまくり、小陰唇を舌先でレロレロと遊ぶと、当然、肛門もしつとりと潤む。彩…。激しくドリルし食する。

「アーツ！ アツウアアア…」

俺の食欲と性欲は増大され、クリに舌先で高速回転をかけながら膣に挿入した指をホテルで探し当てたGスポットへ押し上げる。

「アーツ！ タケルー！ あ、あ、愛してるっ！ してほしかったあ！ が、我慢できなかったあ！」

やっぱりそうか…。彩は、「味み」と言っつて俺を誘い出し、業と俺の性的興奮を引き出した事を健気に告白した。

「俺も愛してるよ。彩のココ…。とっつても美味しい」

クリを舐めながら囁いた。

「いや、いや、タケル！ 恥ずかしい！ アーッ！ タケル、もつと！」

「いや」は嘘。「もつと」が真実と、俺は、分かっていた。複雑な女子の心理なんて分かつてる。彩の腰が奮えてる。もう限界だろう。いつものようにイカせて飲んでやる。舌先でクリへの振動、指でGスポットへの刺激を強める。彩の肛門と膣口が引き締まる。もつとく来る。

「アアアアツ、イイイッ…」

ヨシ！ い、今だ！ 指を抜き去り、彩の陰門全体を頬張った。次の瞬間、彩の膣口が更に縮小。「アツ！」と漏れた声。僅かな空白の後、その門は開かれた。

「クーアー！」

ジュジュジュジュ…。俺の口内に潮が噴射され、口半分くらいまで溜ると、まずゴクンと飲み、また溜まるとゴクン。繰り返し飲み続けた。彩は体をガクガク痙攣させ、顎を突き上げて髪を振る。止められない放出を俺に任せていた。美味過ぎる…。俺が全て飲み尽くすと、彩の力みがスーッと抜けた。手の膏で口を拭き、立ち上がった俺は彩の腰に腕を回し、力ない彩の体を支えた。

キッチンカウンター

朝、いつものように曲がり門で彩を迎え、一緒に登校。静かな街路から賑やかな大通りに差し掛かる寸前、並んで歩いてた彩がピヨンと俺の前に出て振り返った。

「お父さんとお母さんがさ。タケル呼んで焼肉しよって」

付き合っつて早々。バスルームで俺が言い出した事。彩が叶えてくれた。焼肉ねえ…。この間、彩と外泊したのはばれてたりして。自分が言い出した事だけど、いざとなると…。彼女の両親に対面した経験がなかった俺。正直、困惑して余計な事が頭を過ぎる。

「いつよ?」

足を止めていた俺が歩き始めると、彩が腕を組んで来た。取り敢えず、俺は笑顔。だぶん、引き吊った愛想笑いになっていたと思う。

「明日の夜。タケル、バイトなかったよね?」

明日かよ? 心の準備が…。

「う、うん。OK!」

仕方…ねえよな。

「それだったら、先ず、お母さんの方だよ」

午前中、由美にメール。彩に内緒で、昼休み、自習室で相談する事に。放課後じゃなく昼休みって事もあり、自習室には俺と由美しかない。ただの相談なら雄二や智喜でも良かったけど…。色々深く考えなきゃいけない真面目な相談事は女に限る。そう言う時の女子目線、大人目線のアドバイスは最強。逆に、遊びが絡んだ不真面目な相談事は男しかいねえ。男の腑抜けた子供目線は遊びに最適。要するに、いかに男が真面目な相談に適してないか、自分が男だからよく分かる。

「お父さんじゃなくて…お母さん？」

「そりゃ、そうよ！ お母さんに気に入られたら。多少、お父さんに嫌われても、お母さんが仲を取り持ってくれるんだって。私だったら、彼氏にはパパよりママと仲良くなって欲しいよ」

溜息をつきながら視線を窓の外に。

「親父さんにも…嫌われたくねえんだけどなあ…。ねえねえ、彩のご両親ってどんな感じ？」

由美は顎を摘んで微笑む。

「お母さんもお父さんも凄い面白い人だよ。私が遊びに行ったら冗談ばっかだよ。凄い若いよ。二人ともまだ30代で…元ヤンばく。彩が、うちの両親はデキ婚って言ってた」

「何となくイメージが…」

自習室の机に腰を掛ける。

「でも、親父さんって気にするんじゃない？ こいつがうちの娘とエッチしてんのかって」

顎を摘まんだまま、俯いてクスクス笑う由美。

「かーんがえ過ぎだよ！ タケル」

由美は俺の胸を叩いた。

「あのパパなら大丈夫だって。ママも話分かる人だから。てか、あんた、そんな思っほど彩と過激なエッチしてるの？」

冗談ぽく、由美が言った。

「そんなあ…過激でも…」

鼻を指で擦ってしまった。ヤベツ！ もしかして、由美も俺の癖を？

「うわっ！ そりゃ、彩のパパに悪いと思うよね。2、3発殴られて来い！」

由美にも俺の癖を見抜かれていた。俺は首を撫でて苦笑いするしかなかった。

「取り敢えず…お母さんかあ…」

「そう。身嗜みと振る舞いは気を付けなよ。女ってさ、何だかんだ言っても第一印象で判断するから。男みたいに、じっくり中身なん

て見てくれないよ。シビアだからね。でも、それクリア出来れば、お母さんって言う最高の見方が付いてくれるよ。気合い入れて行な

「は、はい」

ほら、やっぱり、こう言う真面目な相談は女に限る。

丁度、良い高さにキッチンカウンターがある事を初めて知った。彩の弓なりになっていた上半身を起こし、俺は彩と見詰め合う。

「彩…。言いたくって仕方なかった事がある」

薄くなっていた彩の瞳が徐々に開かれる。

「何…?」

「彩…。結婚しよ」

彩の瞳に雫が滲み、一杯に溢れ、頬に零れる。彩は静かに俺の頬を撫でてくれた。

「タケル…。私を貰ってください」

決して衝動的ではない。間違いのない本心を、俺は彩に伝えた。

「愛してる…。いくら言っても言い足りない。ズツとタケルに愛し

てるって言っていたい。タケルと結婚したい。タケルの奥さんなり
たい」

涙の味がするキス。普通はしょっぱいけど、この時は甘く感じた。

「結婚しよ。彩…」

開かれた彩の両脚の中心。俺は、亀頭を当てる。

「タケル、結婚したら毎日だよ…。絶対、毎日エッチして」

息を荒くし、俺の首に両腕を回しながら囁いた彩。

「ああ、仕事で疲れてようが、顔も見たくなくなるような喧嘩しよ
うが、毎日、愛し合う。約束する。絶対、結婚しよ」

彩が唇をぶつけて来た。

「うん、絶対結婚しよ！ 愛してる…。タケル」

「愛してる…。彩！」

その焦点に亀頭を突き入れた。

「アーツー！！」

いつもより大きい彩の喘ぎ。またのけ反ろうとした彩の体を、俺
は片腕で支える。彩も必死で俺の首に捕まった。徐々に、俺は彩の
温室内にペニスの出し入れを加速させた。

「アアアアア、タケル、ああああ愛してる！ 愛してる！」

「愛してるよ。愛してるよ。あっ！」

その前の彩のフェラにいかされそうだったから……。もう、いきそうになつていた俺。顔の筋肉を和らげ、九九の九の段から暗唱して、その放出を抑える。俺より彩が辛そうだ。硬いカウンターの上で、彩に掛かっていた身体的な負担を除去する為、俺は、「結合異動」を試みる事にした。キッチンカウンターから5メートル、いや、6メートルぐらいの間隔。リビングのソファーに目標地点を決める。彩を楽にさせてやりたい。俺が、いつてしまう前に……。

「あ、彩……。後のソファーまで、このまま異動するよ。俺の首に腕回して、しっかり捕まっつてな。二人の呼吸が大事だから」

「うん、行こう！ タケルに着いて行きます」 頬を赤らめ、繋がったまま健気に頷いた彩。ピストン運動を一旦止めた。

「イツセイノーセつて言うから、セで腕に力入れて」

「わ、分かった……」

軽く彩にキスする。

「彩、行くよ。イツセイノーセツ！」

彩の尻を抱え上げたと同時に、彩も俺の首にギュツと力を入れた。俺と彩は絶妙なタイミングで駅弁スタイルになる。結合したまま彩の軽い体を運ぶの事は、そうハードじゃない。しかし、途中で、途中で、いきそうになるのを必死で我慢するのが超ハード。

「アッ、ア、ア、ア…」

体が揺れる度に、耳元で漏れる彩の可愛い喘ぎが聴覚効果をもたらしたし、俺の絶頂期を更に早めようとする。8、4、32。8、5、40。8、6、42。あつ、間違った！ ああ、もういいや！ も、もう、少しだ…。頑張れ頑張れ…。ヨシ！ つ、着いたあ。

長さ2メートルくらいのソファアの真上、チンコが彩の膣から抜けないように、俺は慎重に彩の体をソファアに下ろす。あれ？ 復活したか？ 彩を運んで来る途中、サキバシリが2、3滴放出され、本汁が引っ込んだんだ。ソファアの上で、ゆったりと両脚を開く彩。俺は彩の頬に手を当てる。彩も若干息を上げていた。

「彩、おまえ最高に綺麗だ。愛してる」

「タケル…。いっぱいいっぱい愛し合いたい。ふつつか者ですが…宜しく願います。今日からもうタケルの奥さんでいさせて」

何て可愛いんだ…。彩は微笑み、俺の腰に両脚を巻き付けた。

「いいよ。じゃ、今日から彩は俺の嫁さんだ」

また瞳から雫を溢す彩。さあ！ いくぞー！

「アウト！」

一気に彩の子宮口までペニスを突き入れた。彩の雫が飛び散る。す、凄いつ！ 出し入れをしながら彩のクリを指で奮わせた。機関銃のようなピストン運動。ソファアの背もたれから上半身を滑らせ、殆ど仰向けに寝ている状態の彩は激しく揺すられ喘ぎまくる。

「いいいよ、タタタケル！ ああああ愛してる！ アアアアアウアアアアアアアアアア…」

き、気持ち良過ぎる。彩の中は、お、奥にいくほど、し、締め付けが…。止まらなかった俺。激しく彩の舌に自分の舌を絡み付ける。まだ彩が着けていたお袋のエプロンと姉貴のキャミを取り去ると、俺もスエットの上着を脱ぎ捨て、二人とも全裸になった。彩のオツパイにしゃぶりつきながらも、まだまだクリへの刺激と膣へのピストン運動は衰えさせない。まだまだイケる！

「アアアア、またまたまた、イキそつ、タケル！アアアアアアアアアア…」

あ、やっぱり俺もイキぞ。更に奥深く亀頭を挿入させた俺は、その行き止まりで小刻みにペニスを振り、クリへはそのままの速さで刺激を維持。

「もつっ、もつ、ダメ、イイイイ…」

「俺もイイツ…あ、愛してる彩、イツ…」

「イグーツ、アーツ！！」

彩の声が轟いた瞬間、彩の中で、俺も大噴火。俺の放出と彩の放出が、二人の性器を同時にヒクヒク奮わせる。

「彩の…お母さんって、何か好きなものある？」

学校帰り、彩が不思議そうな顔で俺を見上げる。

「タバコかな？ マルボロライト。何で？」

流石に、タバコは持って行き辛いな…。

「いや、ほら明日。手ぶらで、彩の家にお邪魔するのもなあってさ」
彩がクスクスと笑う。

「気使わなくていいよ。うちのお父さんとお母さんは私の初彼に興味深々で、タケルが来てくれるだけで嬉しいんだから」

興味津々されんのが、一番プレッシャーなんだよ。本当に嬉しいがられてんのかなあ…。思わず、歩道から車道に溜息を吐いた。あ、しまった。

「タケル、もしかして、緊張してたりして？」

そりゃ、そう来るよな。こんな時に溜息すりゃあ。

「馬鹿言つなよ。俺も楽しみに決まってるじゃん」

鼻を擦っていた。あ、また、しまった！

「フッフッフ…。タケルのママとうちの両親と共通してるといあるんだよ」

少し顎を上げ、澄ました顔をした彩。

「共通？」

「うん、実は…うちもデキ婚なの」

由美が言っていた通りだ。うちのお袋は高校卒業寸前の18で妊娠して、19で姉貴を産んだ。彩のお父さんもお母さんも俺のお袋と
同じ年くらいだろ。

「じゃ、彩のお父さんもお母さんも若いんだ？」

由美からの情報以外では、彩の家が整備工場を営んでいる事と中
2の妹がいる事くらいしか知らない。何か、情けねえ彼氏だよなあ。
これは、彩の家族を知る良い機会だ。

「うん、お母さんは34。ママと一緒に39だよ」

「エッ？ お母さんが34って事は…」

彩が口に手を当て、小さく笑う。

「うん。だから、お母さん17で妊娠して18で私を産んだ事にな
るよね」

上には上がいるもんだ。

「うちのお父さんもお母さんも若いし、でき婚もしてるから子供の
恋愛に寛大なんだよ。確かに、お父さんには彼氏出来た事…報告
し辛かったけど。思い切って話したら、初彼、おめでとう！って喜

んでくれた」

彩と繋いでた手を少し振る。色々悪い方に考えていた。そんな不安が体から抜けていく。

タケルの雰囲気が変わった。タケルが喜んでいる事は繋いだ手の強さと振りで分かる。

「タケル。私、お父さんにもお母さんにもタケルの事、何でも話してるよ。タケルと取った写メやプリクラも見せてるし」

タケルが苦笑いで私を見下ろした。

「で、お父さん、お母さんは何て？」

「お母さんは…お父さんに似てカッコイイじゃんて。お父さんは…私の話聞いて、なかなか男気ある奴だなって」

照れて自分の頭を擦るタケルが可愛い。

「彩が、どんな話してたか気になるけど、悪い話じゃなさそうだし、安心したよ」

タケルの手の握りが、柔らかくなった。

「彩…。ありがとうな。正直、緊張してた」

「タケルが緊張しないように、私がセッティングしてあるから安心

して。それから、ママと会った事も…お父さんとお母さんに話したよ。私が凄くママに気に入られたって言ったら、二人とも凄く喜んでた」

「彩…。マジ、ありがとう」

また照れて俯くタケル。マジ、こいつ、可愛いね。丁度、通り掛かった公園裏の路地にタケル引きずり込む。

「お、おい！ 息なり、何だよ？」

「チューして」

目を閉じ、タケルに唇を上げる私。公園の木々を抜けて吹き込む風音。二人の唇の音を消してくれていた。

571

「涼子」

工場での仕事を終えた俺は、台所で女房に声を掛けた。

「何？」

彩と流し台で焼き肉の支度をする涼子。背を向けたまま返事をした。

「いや、別に…いや」

意味なく声を掛けた俺に、涼子と彩が顔を合わせてか細く笑う。

「お風呂入ってきたら」

「お、おう、そうだな」

首を擦りながら義故知なく笑い、俺は台所から居間を通り抜けて風呂場に向かう。朝から、いや、昨夜から、俺の緊張は続いている。昼間は、「社長！ 上がり過ぎつすよ。どうしちゃったんすか！？」。俺としたことが。「あ、悪い」。慌てて、ジャツキを降ろした。「今日、娘が彼氏連れてくるんで…」。何て、口が裂けても言えねえ。彩は16…。今思えば、涼子は15だったな。初めて、涼子が、街で一端の悪やつた俺の前に現れたのは。はあー、良い湯加減。親父になつたな…。俺も。

「ちよつとお！ 迷惑なんだけどねえ！ あんたらのバイクの音。家の裏で喧しいんだよ！」

スカジャン、ジーンズ、幼い顔にポニーテール。俺達が溜まり場にしていた店に怒鳴り込んで来た威勢の良い娘。

「お嬢ちゃん。ここは、おめえみてえなガキが来るとこじゃねえよ」

仲間の一人が、櫛でリーゼントを整えながら彼女に迫った。

「フツ！ 単コロ転がしまくって遊んでるガキにガキって言われる筋合いないね！」

仲間全員が立ち上がる。おやおや…。

「私みたいな小娘一人に何人の男が見栄切るっての！？ あんたら
どんな根性してんだよ？」

店の真ん中に、堂々と腕組みしていた娘。眉ひとつ微動だもさせない。仲間の「何だと、コラ！」が合図になる。店に響いていた派手なロツクはもう止んだ。タバコの煙が霧情に籠る空間。彼女を取り囲んだ仲間の輪が徐々に縮まった。涼しく澄んだ目つきの娘。まだ動かない。いい根性してやがる。タバコをくわえ、店のホールから離れたボックスで見物していた俺。

「待てよ！」

叫んでやると、仲間達が足を止めた。

「賢二！ 外にいる奴ら。単コ口吹かすの止めさせる」

「和巳さん！？」

賢二が振り返る。一吹かしたタバコをテーブルの灰皿で揉み消し、俺は両腕をソファアの背もたれに引っ掛けて黙った。

「わ、分かりました」

賢二がドアに走ると、仲間達は、そろそろとテーブルに戻り、彼女は一人、店の真ん中に取り残された。

「悪かったな。お嬢ちゃん」

俺は新しいタバコを口にくわえ、ジツポの音を鳴らした。

「話わかる奴が一人いて良かったよ！ 近所迷惑考えて遊びな」

腕組みしたまま消える彼女。俺は彼女の背中に煙を吹いた。なか
なかじゃねえか。あの娘。

それが、涼子との出会い。

「そこのお兄さん！ バイク乗せてよ！」

三日前の事が嘘のように、涼子がまた店に現れた。失笑する仲間
達。

「来な！」

俺は涼子をバイクの後ろに乗せてやった。

「お兄さんが真面目になったら、付き合っってもいいよ！」

バイクの後ろで叫ぶ涼子を笑い飛ばした俺。族を辞めて約束を守
ってもらったのは、それから1年後。

風呂から上がって、居間でテレビを見ながら髪を拭いてると、玄関のチャイムが鳴った。さあ！ お父さん、頑張る！

テーブルに着いたタケルは、やや、いや、大いに緊張していた様子。いつも羽織るだけのタッターソールチェックのシャツを第二ボタンまで締め、両手を両膝に着いて顎を引いている。

「タ、タケル、そんな緊張しなくても…」

見兼ねた私がタケルの耳元で囁く。

「そりゃ緊張するよ。彼女の親と初対面なんてさ。でも、写メで見るとより実物の方が断然カッコいいよね。お姉ちゃんには勿体ないよ」

斜め向かいに座る妹の緑。テーブルに両肘を着いて両手を頬に当てた。タケルは首を擦って苦笑い。私が緑を睨むと、緑は両手で口を覆って笑いを堪えた。

「緊張しなくていいのよ。タケル君、肉いっぱい食べてね」

「は、はい、ありがとうございます」

お母さんと私はテーブルの真ん中で肉を焼き始めた。

「どうだ？ 一杯いくか？」

冗談半分に、お父さんがビール瓶をタケルに向ける。

「ちよ、ちよつとお父さん！ タケルはまだ私と一緒に高校生だつて」

苦笑いを浮かべたお父さんはビール瓶の口を自分のグラスに当てた。

「あ、俺、注ぎます」

予想しなかった娘の彼氏からの申し出。俺はビール瓶を止めた。涼子と彩は、何故か、顔を寄せ合って笑いを堪えている。

「じゃあ…お願いしよっかな」

皆を見回した後、俺はビール瓶を彼に渡し、グラスを奮わさないように彼の前に差し出した。

「ちよつと、飲んだらいいじゃないか？」

彩が顰蹙したが、別に構わない。

「じゃ、俺も少しだけ頂きます」

なかなか、話分かる奴じゃねえか。

「そう来なきやなあ」

苦笑いする女3人を尻目に、俺は彼に泡が溢れるくらいビールを

注ぐ。

「お父さん！ 多いよそれ！」

彼の横で、彩がグラスを指差す。

「いいの。ビールってやつはチビチビ飲んでも美味くねえんだよ。俺がタケル君の歳には二日酔い連発だった」

「そんなお父さんみたいな悪と一緒にしないの」

緑の呆れに、妻と彩が口に手を当てて笑う。何だよ？ 二人ともいつも、そんな可愛い笑い方しないでよ。俺はグラスを掲げて、彼と乾杯。彼は喉を鳴らしながら一気にグラスを空けた。顔と同じで、飲みっぷりもカツコイイじゃねえか。

「タケル君は、家でも、お父さん相手に飲んでるのか？」

ホッと一息着いての軽い一言。しまった！。彩からタケル君は母子家庭だって聞いてたのに。やつちまったあ！ 一瞬、場が静寂し、涼子を見ると、涼子は肉を焼きながら眉間に皺を寄せて俺に眼を飛ばす。

「あ、俺、こつやって年上の…お父さんみたいな人と飲むの初めてなんですよ」

彼だけが下手打ちした俺に笑顔を返してくれた。

「だから…嬉しくって。親父とは…まだ一緒に酒飲んだ事ないですけど。でも、いつかは、親父と飲んでみたいと思ってるんですよ。」

「じやって」

親父さんと…そっかあ…息子っていいよなあ。一瞬で、彼に親しみを感じた。

「もう一杯、貰っていいですか？」

格好いい奴だ。俺はグラスに残ったビールを飲み干した。涼子を見ると、涼子は笑顔に変わっていた。

「ヨッシ！ そう来なきやな。俺も息子と飲んでみたいかったんだよ」

娘2人に目をやる。

「タケル君、今日は、親父と息子で行こう！」

彼が先にビールを注いでくれた。後輩の為に、学校一の悪をぶちのめしたって、彩から聞かされて…。なかなか男気ある奴だとは思ってたけど。それにこの素直さ持って来られたら…。俺は彼にビールを注ぎ返す。参った…。

「今日から、俺の事、親父って呼べよ」

「はい！ じゃ、僕の事はタケルって呼んで下さい」

俺はタケルと乾杯した。何で、彩が涙ぐんでるんだ？ 涼子を見ると、涼子も涙ぐんでいた。

「さあ、焼けたよ！ 彩、タケルにお肉入れてあげて」

お母さんの元気な声が響いた。タケルを見ると、緊張が解け、ちよつと赤くなつた笑顔を私にくれた。やっぱ私の彼氏って格好いいわ。

私は昔を思い出しながら和巳を眺めていた。

出会つた頃の和巳は、この街でも札付きの悪。私とは、いつも喧嘩ばかり。やっと、私の心情を理解してくれた和巳が悪を辞め、漸く、私達は付き合い始めた。私はまだ16歳で、今の彩と同じ年。自慢のリーゼント頭をスポーツ刈に変え、どっから見ても似合わないスーツを着た和巳。初めて、私の父と母に会つた和巳は慣れない正座をガクガク揺らし、汗びっしょりで緊張していた。

「もし、涼子が娘を産んだら、俺が涼子にしたように、おまえも娘を自由に生かしてやれ。娘が死ぬほど好きな男を連れて来たら、その男を息子と認めてやれ。それが出来るんなら、おまえを息子と認めてやる。将来、この工場、おまえに任せてやる」

もの心つく前に両親を事故で亡くし、親戚中をたらい回しにされ、孤独から逃げるように非行に走つた和巳。

「はい！ 約束します！ 必ず、必ず……」

父の言葉に、土下座しながら号泣する和巳。私のお腹の中には彩がいた。父と母は、お互い顔を合わせ、笑って私達を許してくれた。父は11年前に、母は10年前に他界。和巳は父との約束を忘れ

ていたかった。うちの旦那もまだまだ男気あんじゃん。だから、私は、ちよつと涙ぐんだ。

「で、二人つてもうエッチしちゃってるの？」

焼き肉を摘みながらの緑が……。何を唐突に！

「バ、バツカじゃない！？ あんた！」

タケルはビールを吹き出しかけ、私は両肩を上てオドオドするばかり。

「いっやあ！ おまえ涼子とそっくり！ わっかりやすい！」

お父さんは笑いながらグラスを口に着けた。

「そりゃ、しょうがないよ。私の娘なんだから」

平然とお母さんは答えた。もうちよと、止めてよー！ はっずかしい！ どう言う家族だよ？ タケルはピクピク笑いを浮かべ、ビールを飲んだ。

悪そうだけど、可愛い奴。それが、居酒屋で働いてる智喜への第一印象。面長で尖った顎、時々、見せる鋭い眼差し。そして、あど

けない笑顔。酔っ払った女の扱いも上手い。あの歳で、あの落ち着きは大したもん。スケベ心丸出しでヘラヘラ寄って来るオヤジとえらい違い。あれだけ冷静に扱われると、逆に安らぎを感じる。最近、安らいだ事なかったからねえ…。智喜の話じゃ、よく店のカウンタ―の中で喋ってる可愛い娘は彼女じゃないみたい。

弟とも、随分長く会ってなかったから、弟がどんだけ女の扱い上手くなってるのか分からないけど…。もし、智喜みただったら、頼もしい。智喜に弟の姿も映してた。

「今日は俺が奢りますから」

智喜はラーメン屋さんに歩こうとした。

「ねえねえ、今日はラーメン止めて…。うちに来ない？　ここから部屋近いから」

智喜ならいい。足を止めた智喜は目を丸くして振り向く。

「へ、部屋って?」

その驚きが、可愛い過ぎる。

「いいからいいから！　おいでおいで！」

棒立ちの智喜の腕を引っ張った。

「部屋行った!? それもう完璧じゃん!」

体育館裏。雄二が、また後に転んだ。

「へ、部屋には行ったんだけどさ。俺、何か、ガチガチなって…。
コーヒー飲んで…色々話して…。結局、何もなしに終わり」

「言ってる! おめえ!」

俺は手の膏で智喜の胸を張った。

「マ、マジだって! 何もねえよ」

「何もなかったも…。それ、次が無茶苦茶期待されんじゃん」

体を起こした雄二が言った。

「次ねえ?」

こめかみを指で掻く智喜。俺と雄二は智喜に顔を向ける。

「小夜子さん、何かすんげー失恋したみてえでさ。その男がとんでもねえ野郎で…。小夜子さんいるのに仕事にかこつけて浮気しまくりって野郎でさあ」

確かに、そんなの聞いたら、手は出し難いよな…。失恋話を聞かされた後、不思議に、男って性欲より同情を優先させちまうよな。俺は顎を撫でた。

「それホストってやつ?」

雄二が、さりげなく聞いた。

「うん。何かあ、ホスト上がりでクラブ経営してる野郎だって」

また智喜は、こめかみを搔く。

「取り敢えず…焦っちゃダメだな。先ずは、彼女の傷付いたハートを年下の優しさで包んでやるって作戦しかねえよな」

恋に対する彼女の恐怖心を取り除くところから始めて、後は、ジワジワと。流石、雄二。よく分かってやがる。雄二は同意を得ようと俺に顔を向けた。俺は小刻みに頷く。

「作戦つてもなあ…」

頭を撫でながらニヤくつ智喜。幸せそうな顔してやがって。俺は智喜に前のめりになる。

「ですよ。そんな時…その小夜子さんは、どんな大人の香りがしてたんだよ？」

「うーん、シャンプーと石鹸かな」

「エッ！？ 何で…シャンプーと石鹸？」

後ろ手を着き、空を見上げて言った智喜に、空かさず雄二が突っ込んだ。

「部屋入ったら…小夜子さん、ちょっと待っててってシャワー浴び

「だしたから」

「何だよ？ それ、完璧過ぎじゃん！」

雄二が、また後に倒れる。

「で、おめえ、何もなかったってよくほぎけるよな!？」

何だかんだでやってんだろ。こいつ。俺は、また智喜の胸を張った。

「マジ、何も、ねえってよ！」

ニヤケ顔の智喜は自分の両膝を叩いきながら言った。

「年上…。大人の女かあ…」

ボソツと俺が言っていると、背中で彩の声が…。

「あー！ やっぱり、ここだ！」

走て来る彩の後に、由美と美紀がバタバタと続いている。

「また子供達が来たよ」

またボソツと言うと、智喜と雄二は、うずくまって笑いを堪えた。

ブルーとバイオレット

学校のフェンスを通り過ぎ、T字路に差し掛かった所。周りに他の生徒はいない。私は立ち止まった。今日は、タケルがバイトに行く日。タケルはこのT字路を下ってバイト先に向かう。その前に、「ねえ、タケル。雄二と美紀の事なんだけど……」。相談を持ち掛けると、タケルは鼻で笑う。雄二から聞いているはず。

「およその見当は付くよ。雄二の野郎：俺を当てにしてんだよ。彩も美紀から相談されたんだろ？」

鞆を肩に掛け直し、両手をポケットに突っ込んで、タケルは車道に体を向けた。

「うん」

揃えた両手に鞆を提げ、私は俯いた。

「昼休みの後……じっくり考えたんだけど……」

タケルは体の向きを私に戻した。

「ほっときゃいいんなの」

重くなった雰囲気を内壊すように、タケルは、あっさり言って笑顔を見せた。「えー!？」と、当然、私は顔を突き出す。

「タ、タケル……」

タケルは笑顔のまま、私の腕をポンと叩き、唇を重ねた。誰かに見られてるかも？ ま、いいや。鞆を落として私はタケルの胸に両手を着いた。気分が落ち着く。タケルが唇を離し、目を開ける私。

「俺達は、こうやって自由にキス出来る。何で？」

唐突なタケルの質問。少し、おどおどと鞆を拾い上げ肩に掛けた。

「そりゃあ、お互い愛し合ってるから…」

タケルの右手を両手で包んで俯く。

「そうだよな。俺達は俺達だけで付き合うつて決めて、お互い、愛し合うようになった。誰の干渉も受けずに、自由に二人でやってこれた」

私は顔を上げた。

うわ！ またそんな大人びた目で俺を見上げる。ヤバい！ 勃起した。思わず、咳払い。視線を車道に流す。

一瞬、逸れたタケルの視線が私に戻ってきた。いつもの澄んだ瞳…。うつとりくる。

「でも、雄二と美紀はどうだ？ 何で、あいつらは俺のお袋や親父。それに、オヤッサンやヨツチャン…雄二の親父さんとお袋さんに気

を遣って、お互い、付き合わなきゃなんねえんだ？ 俺達は誰からも干渉受けず、誰にも気兼ねする事なく付き合えて愛し合えるのに、何で、あいつらはダメなんだ？」

俯き、目を左右させる私。

「そ、それは…雄二や美紀には私達と違う事情が…」

「その事情を作ったのは誰だ？」

顔を上げ、私はタケルの瞳の中に戻った。

「雄二や美紀が自分で撒いた種ならともかく、あいつらは極々自然に出会っただけさ。それに親の事情が後からくつついて来た。責任取るのは、あいつらじゃねえよ。責任取るのは親の方だろ？ 確かに、オヤツサンとヨツチャン…雄二の親父さんとお袋さんはうちのお袋のファンだ。だから、二人が付き合ってるって事実を知らば…反対するだろ。でも…あいつらは、んな小さい問題は捕らわれず、俺達みたいに愛し合い続けるよ。あんな修羅場を乗り越えてきたんだ。何があるうがあいつらは変わらない。親が認めよう認めまいが、あいつらには関係ねえ。親があいつらに入る余地はねえよ。親なんてほっときゃいい。良い歳こいて、親の顔色伺って結婚相手決めるような奴らもいるけど、んな奴らにはいつてやりたいね。『おめえら親と結婚して近親相姦でもしてるや。マザコン、ファザコン』って。彩も…気にする事はねえよ」

俺の腕を擦りながら、また彩がキリツと真剣でグラツと妖艶な瞳を上げた。

「俺達が誰と友達になろうが、一々、お袋の知ったこっちゃねえ。」

俺と美紀が友達になっただって親父に言ったのは、親父に責任取らず
為さ。小学生じゃあるまいし、お袋に報告する必要なんて全くない。
美紀がオヤツサンとヨツチャンに会えば、嫌でもお袋の耳に入るん
だ。お袋が美紀の事を俺達に聞いてきたら、その時…適当に答えて
やりゃいい」

だから、ヤバいってなその目付き。これからバイトなんだから。
あら、また立つてる。また、咳き込む俺。

「タケルらしいねえ…。俺達の親友は俺達を選ぶ」。か」

次の日。美紀が雄二と帰った後、私は教室で美紀に相談した。私
の前の席に座る由美。私の机に肘を着いて窓の外を見た。

「正論だよな」

私に顔を向けた由美。

「うん…。でも…こんな事になるんだったら、もうちょっと早くマ
マに『私も美紀と仲良くしてます』って報告しとけば良かった」

私は机に顔を着けた。

「確かに、彼氏ママに、『お父さんと愛人の間に生まれた娘と友
達になりました』。何て、言えないよね。でも…言わなきゃね」

彩はシャキツと机から顔を上げた。

「これは、タケルとタケルのママの問題じゃないよ。彩とタケルのママの問題だよ。彼女として…彼氏のママに言わなきゃいけない事は、きつちり言わないとね」

深呼吸をした彩。清々しい顔を下ろす。

「うん。これは、女同士の話。男に口挟ませないよ。今夜、ママと女子会やる予定だから…ちゃんと話す」

彩の二の腕をポンと叩いた。

「それでこそ彩！ タケルが何か言ったら、私がタケルにガツンと言ってやる。女のケジメに文句付けるなって。それに…彩も分かってると思うけど、何だかんだ言ってもタケルは二人をほっとかないよ。あいつは、そう言う奴だよ」

笑顔の彩は静かに頷いた。

この時には、この問題が私にまで関わってくる事になるなんて…まだ知るよしもなかった。

彩の膦からチンポを抜いた俺。一瞬、息が詰まりそうになる。ソファアの上、彩は自分の体を左側にゴロンと転がした。

「大丈夫かあ…？ タケル」

大きく息を吐いて、俺はソファ―に背中を埋めた。

「うん…」

俺の頬を撫でる彩の手を包めば、二人は殆ど同時にソファ―から滑り落ちた。

「ちょっと、ソファ―濡れちゃったかも？」

彩がソファ―に触れる。

「大丈夫。拭けばOK」

まだ息が荒い俺。彩に唇を近付けると、彩は瞳を閉じた。

彩の舌が俺の息を溶かしてくれていた。

「美味しい？」

ポークソテーと手製のイタリアンドレッシングを添えたパスタサラダ、ウインナー、ジャガイモ、玉葱のポトフ。お昼御飯。タケルはポークソテーから頬張った。

「ああ、いつものより上手いよ」

「豚肉があったからね。即席のソテーなんだけど」

私はサラダにフォークを突き刺す。

「今日は、何で、俺の隣に座ってるの？」

確かにそう。タケルと食事をする私。普通なら、タケルの向かいに座っている。

「だって…夫婦でしょ？」

照れ隠しにツンと顎を突き出して、サラダを口に運ぶ。昼日が射し込む夫婦になって初めての食卓。少しだけ、違いが欲しかった。

「じゃ、今日から、二人きりの時は、こんな感じで食事しよ。隣に彩がいてくれる方が落ち着くよ」

ポトフの入ったカップを、タケルは口に着ける。私は唇に着いたドレッシングを舌先で拭いた。

「私もタケルが隣にいてくれた方が落ち着く。こっちの方が、二人きりって実感が沸くからね」

「今まで…気が付かなかったよ。こっちの方が良いって」

サラダを頬張るタケル。フォークを持ったまま、私はテーブルに視線を落とした。

「タケルと…チューもし易いしね」

フォークをポークソテーのお皿に置き、タケルと見詰め合う。飲み掛けのポトフ。カップをテーブルに戻し、タケルは私に唇をくれ

た。

「たまには邪魔なの抜きで女同士で盛り上がりませんか？」

初めて、ママと会ったしゃぶしゃぶ屋さんで、苦笑いするタケルを無視して嬉しい提案をしてくれたママ。タケルがバイト中、時々、ママと私は二人だけの女子会をしている。この日の会場は、ママ行き着けのイタリアンカフェ。冗談とタケルの笑い話が飛び交う楽しい食事が終わり、美紀の事をママに打ち明けるタイミングを見計らっていた私。いざとなったら一言が出て来ない。カシスソーダをチビチビ吸う私。エスプレッソのカップをテーブルに戻したママ。カップに付いた口紅を指先で拭き取りながら、ママの視線が定まらな

った。

「彩…。聞きたい事があるんだけど…」

カップから離れた指を、テーブルの上で絡めるママ。

「どうしたの？ ママ」

ママを見詰めながら、私はカシスソーダのストローを口に着けた。

「あ、あのさあ。彩とタケルの友達…。美紀ちゃんの事なんだけど」

私は驚き、口からストローを溢した。

「マ、ママ、知ってたの？ タケルと私が美紀の友達になったって」「う、うん。タケルには言っていないんだけど。実は…あの人が連絡があつて。美紀ちゃんとタケルが友達になったって」

ママが言った「あの人」。タケルと美紀のお父さんだつてピンと来た。

「タケルだけ美紀ちゃんの友達なるなんて有り得ないから、きっと彩もつて。知ってるでしょ？ 私達と美紀のお母さんの事」

私はタケルの彼女。だから、お父さんと美紀のお母さんの事情を全て知つて当然。顎を白い指に乗せ、ママは微笑んでくれたけど、ママの気分を悪くさせたと思つた私は俯いて肩を萎めた。

「ごめん、ママ。美紀の事。先に、私がママに言わなきゃいけないか
つただけど…」

「そ、そんなのいいのよ。誰と友達になろうが、彩とタケルの自由
なんだから」

自由…。タケルはママと似てる。

「美紀ちゃん是我的事しらないけど、私と芳恵…あ、芳恵つてのは、雄二のお母さんなんだけどね。二人で美紀ちゃんのお母さんのお葬式で美紀ちゃん見たから。入学式で、私と芳恵、あの人に会つてね。その時も寂しそうに俯いてる美紀ちゃんを遠目に見て。二人で、タケルと雄二に美紀ちゃん紹介しようか？ つて、あの人に言つたく

らいだから。あの人が遠慮してなかったら…私達、タケル達に紹介してたよ。美紀ちゃん。だから、気になったの。その後、美紀ちゃん、彩やタケル達と仲良くしてるかって」

どうしたら、こんなサツパリした女性になれるんだろ？ 私は、まだまだだあ。益々、ママを尊敬する。カシスソーダを一口飲むと、私はママに笑顔を返した。

「うん、皆、とっても仲良し。で、美紀は凄い明るい娘だよ。冗談好きで、タケルと兄妹チューするくらいだから」

タケルの笑い話の延長。私は、美紀から「ゴメン！ 彩…」と、告白された事をママに話そうと決めた。顎から指を外し、両手を膝の上に置いたママ。

「な、何？ それ」

ママはきつと面白いネタを期待している。やや体をくの字に曲げ、ママは綺麗な顔をテーブルの上に突き出して次に来る笑いへ準備を整えた。ママならきつと大笑いする。

「タ、タケルとタケルのお姉ちゃんが…昔、キスした事あるんなら、妹の私もキスしないと不公平になるって。み、美紀…タケルと話してる時にタケルの隙突いてチュッてやつちやたの」

ストローを弄り、笑いを堪えて喋った。

「ハッハーツ！」

思った通り、ママは、周りを気にせず一拍。手を額に当てて大笑

い。

「き、気に入った！　そ、それ、私好みだよ！」

私も笑い飛ばしたエピソード。きっとママも笑ってくれると思っ
てた。

「そんな娘だよ。美紀は」

「な、何か、ゆ、雄二にお似合いだね」

美紀と雄二の事もママは……。またストローを口から溢し、見開い
た目をママに向けた。

「マ、ママ知ってるの？　雄二と美紀の事……」

ママも笑いを堪えて声を絞り出す。

「ふ、二人で仲良く腕組んで私の店の前、あ、歩いてんだもん。一
目瞭然よ」

「そうなんだ」

「そんな面白い娘なら、芳恵に安心して奨められるよ」

目尻をハンカチで掬いながら言うママ。私の心配事は全て吹き飛
び、一気にカシスソーダを吸い上げた。

「ねえねえ、ママ。雄二のお母さんって、どんな人？」

ママはハンカチに笑いを含む。

「む、昔、私と付き合う前、あの人がキスしようとしたら、タマキン蹴り上げたような人だよ」

周りを気にせず手を叩き、私は笑い声を上げた。

「な、なら、美紀にも安心して褒められるよハハハッ！」

体育館裏で踞って笑いを堪えていたら、子供達3人が、俺達の周りを囲んだ。後ろ手を着き、真後ろに立っていた彩を見上げた俺。今日は、ブルーの水玉ね。子供だねえ。

「何、男同士で嫌らしいそんな顔してさあ？」

美紀が突っ込んできた。

「大人の話さ」

雄二の返しに、俺と智喜は、また踞り、笑いを堪える。

「あー、キモいキモい」

そう由美が言つと、俺と智喜の肩を払いのけ、可愛いお尻を俺達の間割り込ませてきた。空かさず、俺は由美を見上げ、智喜と一緒に、由美の座るスペースを開ける。おっ！ バイオレットかよ。流石、由美姉さん、やるねえ。すると、彩が俺と雄二の間に、美紀

が智喜と雄二の間に割って入り、勝手に合コンスタイルの輪が完成された。

「何も嫌らしい話してねえよ。例の…智喜の彼女の話さ」

俺が言うと、一斉に、女三人が智喜に顔を向けた。智喜は首を伸ばし、おどおどと俺たちを見回す。

「お、おい、タケル！ か、彼女って何だよ？ ちょ、ちょとした知り合いなだけだよ」

「ちょっとした知り合いに…部屋まで連れて行かれるかあ？」

「エー！？」

後ろ手を着く、俺の暴露に、今度は、一斉に、女三人が声を上げた。由美を越えて、智喜が俺の膝を叩く。

「お、おいつ！ ち、違うだろ…あ、あれは…」

由美が俯いた智喜の顔を覗き込む。

「部屋いつちやったあ！？ あんな綺麗な人の部屋にあって…何にもなかったなんて事はないよね」

「い、いや、タケルと雄二にも言ったけどさ。ま、マジ、コーヒーご馳走なって終わりだって」

「な分けないよ…」

次は、女三人、同じ事を言つてのけ反る。

「見る、智喜。皆、信用しねえよ」

呆れ顔の雄二も、後ろ手を着いた。

「大人の女の人って…どんな感じなの？」

彩が智喜に聞いた。

「そりゃ、バリバリリードの激しいエッチに決まってるじゃん」

俺が代わりに答えてやると、彩が俺の右胸、由美が俺の左胸を思い切り叩く。

「イッテ！」

「いいいいいよ。この野郎、好きなだけ殴ってやって」

智喜も呆れて、後ろ手を着いた。大人の女ってどんな感じねえ…？ 間違つてもブルーの水玉なんて履かないのが大人の女だろ。彩の顔を見て、吹き出しかけた笑いを必死で堪えると、彩が眉間に皺を寄せて流し目。ヤベ、ヤベ。…

「そ、そう言う事じゃなくって…雰囲気だよ。雰囲気」

彩も大人の雰囲気に興味あんだ？ なかなか、可愛いところあんじやん。

「雰囲気…？ うーん、まあ、しっとりとして…いい感じかなあ」

ニヤニヤ赤面、スケベ顔の智喜。由美が智喜の膝を叩く。

「幸せそうな顔して！ 唯一、一人もんの私には毒だよ」

「で、智喜は、その大人の女性を…何回いかせたの？」

真顔で質問した美紀に、智喜が慌てて体を起こす。

「はいつ？ い、いかした？」

皆、爆笑。やっぱ、美紀の天然キャラは良い！ 後で、雄二に、美紀がどんなの履いてんのか、聞こ。

完全に、美紀は俺の妹と言う感覚は抜けていた。

洗面台で顔を洗った俺。少しだけ首の痛みが退いた。もう一度、冷静に部屋を見回すと、壁に服が掛けてあり、服の下には靴が揃えられている。こんな服着てたかなあ？ それとも誰かの服かあ？ 服のポケットを漁る。財布も携帯もない。まあ、いいや。取り敢えず、外の空気が吸いたい。ローブを脱ぎ捨て、その服に着替えた。

恐る恐る、部屋の扉を開くと、廊下には、白衣の人やら、俺と同じローブを着た人、ベッドに乗ったまま運ばれる人、点滴をぶら下げて歩く人、薬臭の中の慌ただし行き交い。間違いなく病院だ。廊下に出て、人の波に乗り、ゆらゆら。3と記された階段口に着く。こっちにしよう。俺はエレベーターで1階階まで降りた。

1階の広いロビー。皆、忙しいそう。どうする？ 初老の女性に声を掛けた。

「すみません。近くに…駅ありますか？」

「ああ、駅ならね…」

丁寧に教えて貰った駅は、散歩に丁度いい距離。行ってみよ。自動扉を抜けると、車の騒音、交差点を渡る人々の足音、近くから聞こえる踏切の音、店頭から漏れる話声や音楽、病院の方に向かって走る救急車のサイレン、街は眩しく、騒然としていた。どこなんだろう？ ころ。」

辿り着けた駅の切符売場。路線図に並ぶ駅名は知らないものばかり。立ちすくんでいると、誰かが、俺に声を掛けてきた。

· · Excuse me · I'm going to Shin
juku, but I'm quite first here ·
So, could you tell me which t
rain I might take? if you knew
it · · ·

俺にも分からない。駅員に聞けばいい。

· · Hold on please · Let me ask i
t to a station employee · · ·

改札口の駅員に尋ねに行く俺。

「新宿に行くには、どうしたらいいんですか？」

「ああ、それなら、1番ホームの特急に乗れば…。後10分で、新宿行きの特急が到着しますよ」

「はい、ありがとうございます」

その女性の所へ戻った。

Well, you have to go to No. 1 platform to take limited one bound for Shinjuku, arriving in 10 minutes...

Thanks a lot!!

No problem. Take care!!

笑顔で、スラッとした長身の女性を見送った。でも、何かが…変わった。それに気が付かなかった俺は、急に怖じけつき、辺りを見回し、駅から離れた。来た道ぐらい帰れるだろう。早く、彩に会いたい。

「で、兄妹チューはどんな味がしたの?」

学校帰り、いつものように俺の家に寄った彩。美紀の天然キャラを話題にしていたら、彩が、その流れで、俺が、「美紀っ!」って叫びたくなるような質問をしてきた。

「い、いや、あれは…」

息なりの事に、俺は口ごもるしなかい。ヤベ、女は男の口ごもりを一番嫌う。

「いいのいいの、美紀には…笑い飛ばしたから」

良かったあ！

「美紀らしいね。友達の彩には黙ってらんないから、言うよってさ」

あの天然少女！ 暴露しやがって…。

「いや、だからさあ…。姉貴とキス…」

「したことがあるから、妹ともでしょ？ うん、いいんじゃない」

澄ました顔の彩。明らかに見えない壁を作ってる。「いいのいいの」って、全然、嘘じゃん。彩はテーブルのオレンジジュースを飲んだ。

「わ、悪かったよ。そう、あれは、美紀と友達なる前でさあ。まだ感覚が兄妹の…」

テーブルに戻されるグラスの音が俺の言葉を遮った。

「タケル！」

「は、はい」

「キスしてよ」

「エッ？」

「キスしろってんだよ！」

わ、分かったよ。ゆっくりと彩の顔に自分の顔を近づけると、俺の首に両腕を絡め、彩は急激に俺の唇に吸い付き、舌をも吸い出す。徐々に、俺を引き込み、仰向けに倒れる彩に合わせて俺は彩に覆い被さった。息継ぎの為に、唇を、強引に離れた俺を、彩は許さず、また引き込こむ。激しい！

「彩って？」

息継ぎは無視され、彩の問答無用のキスが続く。完璧に嫉妬してやがる。やるしかねえな。そのまま、彩の制服のスカートを捲り上げ、ブルーの水玉パンティーをこねる。へヤゴムもブルーだ！ゴムいらねえ。

プレゼント

「変な感じだなあ…?」

小1の時から俺を可愛がってくれていたタケルの親父さん兼俺の彼女の美紀のお父さんが、俺と美紀が初エッチしたソファアに座り、苦笑いしながら自分の頭を撫でてる。

「雄二が…美紀の彼氏つてのもよ? 最初、美紀から聞いた時はビツクリどころじゃなかったよ」

「俺も…何て言ったら良いか…全くの偶然って言うかあ…」

美紀はキッチンでコーヒーを入れている。

「良い偶然さ」

頭から膝にポンと手を下ろす親父さん。安心と照れくささが交じった笑顔が滲み出た。

「最近、美紀…ああやって家事もしてくれるようになったんだ。おまえらと付き合い出してからな」 遠目で、美紀を眺める親父さんの横顔。昔から変わってない。

「俺よりもタケルの影響かな。タケルが俺ら引っ張っていつてくれるから」

親父の驚いた表情が俺に向いた。

「へー、タケルがねえ」

その表情も、昔のまま。

「何の話してんの？」

美紀がコーヒーを運んで来てくれた。

「タケルじゃなくって、雄二で良かったって話さ」

親父さんがコーヒーカップに手を着ける。

「タケルに…彩みたいな可愛い彼女がいなかったら…。私、タケルに行ってたかもね」

「おい！」

「ちよっ！」

親父さん俺。同時にコーヒーカップから口を離した。

「じよ、冗談よ」

ケロツとした美紀は俺の隣に座った。

「雄二、今日は寿司取ったから食ってけよ。それとちよとこっちも付き合えよ」

親父さんがグラスを持つ真似をした。

「パパァー！」

苦笑いする俺の隣で、美紀が顰蹙。

「親父さんがいいって言うてんだもん。飲み潰れるまで飲むよ」

仕方なく笑う美紀。

「そだな。飲み潰れたら…泊まって帰れ。昔、よく家泊まってたからな。一緒だよ」

「エツ？ 私の部屋で？」

美紀が目を輝かせ、コーヒを運んだトレーを抱き締る。

「それは…俺が先に酔い潰れたら。後は、おまえら自由にしているよ」

親父さんには敵わないから、無理って事。

「なら、私、ジャンジャン、パパにお酌するよ」

「いいねえ。彼氏そっちのけで、娘に酌して貰えるなんて最高だ」

タケルを差し置いて、俺が親父さんと飲むなんて、何か悪いなあ。

「親父さん、タケルとは飲んだ事あるの？」

「ないない。でも、親父とお袋が強いから、あいつもイケル口じゃねえか？ 雄二も強いかな？ 雄二のお袋さんも相当強いから」

親父さんは俺を指差しながら、美紀を見た。

「パパ、今日は…雄二を酔い潰そうと狙ってたんでしょ？ 私がいるからダメだよ。二人とも、ほどほどにしてもらうからね」

「ん？ ま、まあ、その狙いもあったんだけどな。それだけじゃなくって…。俺の古い悪友から娘の彼氏と飲んで、無茶苦茶楽しかったって話聞いてさ。俺も娘の彼氏と飲んでみたかった」

この時、俺は親父さんから美紀の彼氏として認めて貰った事を実感した。今夜は、最後まで、親父さんと付き合おう。

「あ、今度、私、雄二のお父さんとお母さんに会いに行くから、宜しくね」

俺と親父さんを交互に見る美紀。うわ！ ついに来たよ。

うわ！ ついに来たかあ。美紀が勇作と芳恵に…。雄二がここに来たんだから、次は、美紀があいつらと…。俺も覚悟してた。

俺の悪仲間だった勇作。高校を卒業して、家業を継ぐ為に都内の電気専門店で修業しに行った。勇作と付き合ってた芳恵は勇作を追って都内で就職。それから数年経って二人は結婚し、雄二が生まれ、雄二の小学校入学を機に、地元に戻って、勇作は芳恵と一緒に家業を継いだ。タケルと雄二も…俺達みたいに親友同士になってくれた。二人は高校生になって…、雄二が俺の娘の彼氏。コーヒーを飲み。俺は複雑ながらも、染々と安心していた。

「てか、美紀。おまえ、一度、会ってんだよ。雄二のご両親に」

「エーッ!? いつよ?」

美紀と雄二が身を乗り出した。

俺と千佳、裕子、勇作と芳恵の関係は、美紀から雄二と付き合い始めたと聞いた時に全て話していた。

「楽しい高校生活送ったんだね。」と、笑って言ってくれた美紀。

「お母さんのお葬式の時。雄二のご両親とタケルのお母さんが来てくれたから」

「そうなんだ。全然、覚えてないよ。雄二と付き合ってたから、挨拶しとくんだったなあ。タケルの…お母さんにも」

美紀の隣で、雄二が幸せそうにニヤけてやる。

「私も…彩みたいに彼氏のお母さんと仲良くできるかなあ?」

「エッ? タケルの彼女って…そんなに裕子と仲良いのか?」

次は、俺が身を乗り出した。

「仲良いつてもんじやないよ。話聞いてたら、タケルそっちのけで本当の親子みたいだよ」

雄二がコーヒーを飲む。裕子らしいなあ。俺はソファアに背中を戻した。

「私も夢なんだあ…。雄二そっちのけで雄二のお母さんと仲良くなるの。彩はスツゴい幸せもんだよ」

美紀がトレーを抱えて視線を遠くへ飛ばす。俺と雄二は視線を合わせ、お互いにそのプレッシャーを感じていた。美紀と芳恵…。あの時、こうなるとは夢にも思わなかった。

「あ、パパ」

「うん？」

「じゃ、今度、タケルと彩も家に呼ぼうよ」

「そりゃもう、いつでも…」

美紀と雄二が顔を合わせて微笑んだ。あの裕子に気に入られた娘ねえ？ どんな娘だあ…？ コーヒーをまた啜る俺。

「で、タケルの彼女ってどんな娘よ？」 美紀と雄二が、また顔を合わせて微笑んだ。

カーペットの上で、嫉妬心が生み出す16歳の強欲。

「タケル！ 抱いて！ いつもより激しくして！」

夢中で、彩のパンツのクロッチ部をこねる。湿っている。嫉妬しながらも濡れていたんだろう。ベッドに上がる為の余計な空白を数秒たりとも持ちたくない。

「兄妹チユーと、最愛の女とのキス比べさすのかよ!？」

制服のまま、俺は彩の首筋に吸い付く。

「分かつてる！ だけど、だけど…。妬いちゃう。私だけのタケルだもん！」

首筋から俺の頭を持ち上げ、舌を強行突入させた彩。俺の舌がついていけないほど口内で舌を回転させると、彩の口元から涎がしたり落ちる。彩…。もう言葉の間隔もなくなった。

十分過ぎる。彩の切なさを理解していた俺は下方へ体を落とし、彩の制服のスカートの中で弄る可愛いブルーの水玉パンツに顔を近付ける。良いよ。良過ぎるよ。このパンツ…。子供だなんて侮辱してごめん。ズツと可愛くいて、彩。あ、でも、大人の彩も見てみたい…。覚束ない心理。パンツのクロッチを摘み上げ、その隙間から彩の陰毛を掻き分け、大陰唇を指先でなぞる。薄らと、遠慮がちに、小陰唇が桃色の姿を見せた。濡れたて光ってるビラ二枚。

「タケル…。恥ずかしい…。パンツ汚れてる…」

全く関係ない。汚れててもいいんだ！ 逆に、汚れてるからいいんだ！ んなの、何回、彩のを舐めて飲んでるのか分かつてるのか？ パンツと音を鳴らし、クロッチを閉じた俺。パンツの上から彩の陰門全体を指先でなぞる。

「ウーッ、アー…」

彩の呻きが、いつも以上に俺の欲を擽る。クリにコットン生地を擦り込ませます。カーペットの上で、まだ制服のブレザーを着せられて

る彩。その上半身は波打ち、タータンチェックの膝上スカートを履かされていた両脚は、更に開き、得意のM字を描こうとしていた。

「タケル…。もっとお…」

後で、このパンツ欲しい…。パンツの上からクリを舐めると、染み出た愛液が生地の風味とブレンドされ微妙なビターハーモニーを醸し出す。変態？ 今に始まったこっちなえよ。

「アーツ！ 気持ちいい…。気持ちいい…」

彩は上の口と下の口で意思表示。パンツの上から…。美味しい…。クリをざらざらと舐め、膣口を親指で押し込み、こね続けていると、愛液を限界まで吸収し、透けたクロツチ部分の生地に愛らしい彩の陰門が浮かび上がる。ビチヨビチヨだ。何て綺麗なんだ。クロツチの隙間から指を侵入。大陰唇と小陰唇を撫で、滑り上げた指先がクリを騒がす。

「タ、タケルツ！ アツ、ウツ！」

益々と、彩のMは広がる。

「アーツ、ウツウツウツアア…」

クリに高速ビートをかけていた俺は指をそのままに、片手でベルトを外し、制服のズボンを下げる。かなり窮屈に押し込められていたペニスをトランクから抜き出した。行くぞ！ 上半身を垂直に起こし、彩の頭の傍に移動。カチカチのペニスを彩の口元に運んだ。快感に喘ぎながらも、直ぐにペニスの気配を感じた彩。直ぐにペニスを握り締め、鳴き声と共に亀頭を頼張る。うっうっ…。来たあ…。

舌を巻き付け、それでも足りないと思ったのか、尿道に舌先を擦り込ませた。…気持ち良すぎるっ！…

クリを弄られ、捲り上がったミニスカートからM字を作り、喘ぎを鼻息に変え、ハーモニカを吹くように、唇を左右に滑らさせてペニスを横舐め。卑猥過ぎる制服姿の彩を、暫く、頭上から眺めていた。

彩の吸い口が俺の亀頭まで競り上がる。うっ！ 思わず、俺はクロツチから手を抜き去った。

「タケル…」

裏筋をチロチロしながら、俺を見上げる透き通った瞳は、その幼い制服姿を消し去るほど、妖艶で挑発的。彩は、裏筋を舌先で上下左右にコチヨコチヨと悪戯し、業とらしく自分の舌の動きをレロレロと俺に見せ付けている。マジ、それ、ちょっと。見詰められながらされると…。俺の我慢汁が彩の唇に糸を引かせた。

堂々としたフェラ。眉間に皺を寄せて力む俺を澄んだ瞳で見詰めたまま、唇に伸びたその糸を器用に舌先で絡め取り、口の中に巻き込む彩。彩は…もう大人だ。攻守のバランス、俺を欲情させる振る舞いと目付きに醸す貫禄。それらを、彩は俺とのセックスの中で自然に身に付けていた。彩を甘く見て、子供扱いしていた自分自身を恥じた。制服のまま、彩とエッチした事はあるけど、制服のまま、彩にフェラされた事はない。彩を嫉妬させちまった代償は、想像以上にデカい。来週から学校で制服の彩を見ただけで…ヤバくなるんじゃない…。不安を感じるほど、普段ではない彩の大胆な姿に魅了されていた。もう、脱がそう。

ペニスを彩の口から抜いた。まだ舐めていたかったのか？ 少し唇を尖らせ、物欲しげな視線で俺を見上げる彩。溜まんねえよ。その瞳。彩の両肩を抱き、俺は彩を起こした。

「彩、脱ごう。裸で愛し合おう」

「うん、脱がせて…。タケル」

彩に唇を着けた俺は彩の肩からブレザーを引き落とし、大急ぎでブラウスのボタンを外す。彩は俺からジャケットを脱がし、シャツのボタンに手を掛ける。俺は彩から唇を離れた。

「彩…。頼みがあるんだけど…」

「なーに？ タケル」

ボタンを外しながら、彩はチラツと俺を見上げた。思い切って言うてみよ。

「今、彩が…履いてるパンツ…頂戴！」

「エーッ！」

ボタンから手を離れた彩は一瞬だけ間を空け、俺を見上げた。

「やーだよ！ んなあ」

若干、腰を引いて、困った笑いを浮かべる彩。これなら、いける。

「いいじゃん！ どうせ…んな濡れてたら、履いて帰れないんだしさあ」

笑って言い返した。彩は最後のボタンを外した。

「何で…パンツなの？」

「何で？ って言われても…。ぶっちゃけで欲しいから」

彩は引いた腰を微妙にくねらせる。唇を尖らせた笑い顔がまた可愛い。

「汚れてるもん！ 洗濯したのならいいけど」

洗濯したやつなんて意味ねえってんだよ。彩を引き寄せ、唇を着けた。

「コンビニで新しいの買ってやるって」

てか、チンポ出しながら、こんな事お願いする俺は変態を通り過ぎてるよな。彩は唇を離れた。

「エー！ じゃ、何の為か、ちゃんと行ってよね」

何かにつけて女は理由を求めてきやがる。理由ねえ…？ 取り敢えず、熱意を伝えてみよ。

「そ、そりゃ、愛してる人とズツと一緒にいたいから…。彩のパンツを部屋にキープしておく事によってだな。たとえ…離れていても、彩と過ごしてるような気分になれるんだよ」

んなもんでいいのか？

「そーなの？」

微笑んで、上目遣いの彩。

「そ、そうに決まってるだろ」

彩は俺の首に両腕を回す。

「じゃあ…。タケルにプレゼントするよ」

OK！

「マジで！　ありがとう」

彩に唇を着け、思い切り舌を回転させた。

「その代わりに…」

彩の言葉が俺の舌の回転を弱める。

「コンビニまでちゃんとガードしてよね。スカート短いんだからさ」

「んなの当たり前じゃん！　鉄壁ガードさ」

また舌の回転を速めた。

「それと…」

また舌の回転を弱めた。

「今日は…これから…目一杯感じさせてよ」

「あつたり前だろ！」

ブラのホックを外した。

バイトが終わり、小夜子さんと一緒にコンビニに寄り、夜食やら、飲み物やら、彼女のパンストを買い込む。

部屋に帰ると、いつも、彼女はシャワーを浴び、仕事の疲れを洗い落とす。シャワーの音と彼女の鼻歌。俺は、テレビを見ながら彼女を待つ。その後は、彼女と冗談雑談だけで、それ以上は何もない。彼女は、その辺にいる安い女じゃないから。別に、何の我慢もなく、彼女との一時を過ごしてる。

彼女の部屋を出るのは、いつも3時くらい。次の日の学校は流石にキツく、授業中、居眠りもする。しかし、週に1回か2回の夢は、その夢にも彼女の笑顔を登場させる。

「ねえねえ、智ちゃん」

髪を乾かし終わった彼女はテーブルに置かれた鏡を見ながら、黒のヘアバンドを着けた。ピンクの部屋着の彼女。顔に化粧水を付け始める。

「何？」

足を投げ出し、俺はベッドにもたれてテレビを見ていた。

「今度の土曜って空いてる？」

すっぴんの彼女も綺麗。

「うん、バイトないよ」

「じゃ、うちで鍋しない？」

もうボクシングの試合結果なんて、どうでもいい。俺はベッドから体を起こした。

「うん！　するする」

彼女は化粧水のキャップを閉じた。

「弟…誘ってみよっかなって。ほら、智ちゃんと同い年って言うってた私の弟」

テーブルに両肘を乗せた。

「会ってみたいなあ…。小夜子さんの弟に」

テーブルに頬杖を着く彼女。俺に彼女顔が近付いた。

「弟も智ちゃんみたいにモテそうなタイプだからさ。たぶん彼女いると思うんだけど、それなら、弟の彼女も誘ってさ」

それって、小夜子さんと俺、弟と弟の彼女、カップルカップルって事かよ？

「うん！　皆で鍋しようよ。俺、いるもの買って来るよ」

「OK！　しょしょ」

彼女はコンビニの袋から取り出した烏龍茶を俺に差し出した。カップルとカップルと言うシチュエーションに、俺は堪らなく興奮していた。

全裸で体を重ねる事が、何故、こつも癒されるのか？ 直接、肌から伝わる体温を感じ合えるから。汗の匂いが性的刺激になるから。無防備な露出が信頼関係を高揚させるから。色々と無駄口叩く奴らがいるけど…。逆に聞いてやる。「そんな機械的な解釈が成立するんなら、親子でもセックス出来るのか？ 兄妹ならどうだ？」 そりゃ、「出来る」って言う変質者もいるだろうけど、そんな奴らは論外。金払ってしかエッチ出来ないような男に、その辺のエッチだけしたい男を漁る不細工極まりない女に、「可愛そうに。本物の愛情が籠ったエッチを知らずに」って言つてやる。全裸のまま真実の快樂と至福を得られるは、本当に愛してる人とだけ。他人と血を越えた愛情を交わす。そこは、親子も兄妹も入れない場所。愛し合うもの同士にしか入れない聖域。

最愛の彩を溶かしている今。改めて実感出来る。「切れない関係より、切れる、切られる関係だ」俺は絶対に彩との関係を切らさない。何があるうが。命を掛けられるのは、彩が元々他人だから。将来、俺達に子供が生まれても、その信念は、真髄は、決して変わらない。最愛の人は、血縁なんて全くない妻だけ。いつかは去っていく子供。去り際に「元気だな。じゃまた」で、いいんじゃない。夫婦第一主義を唱えるこの国の法律も最高さ。他人との関係を重んじる俺の理論には、国の後押しがある。誰にも逆らえない。

彩がもついでこうしてる…。

「アツ、アーツ、タ、タケルーツ、イツ、イツグーツ！」

彩にだから出来るんだ。

「気持ちよかったあ…。タケル」

全ての発散の余韻を激しい呼吸に乗せて、俺に舌を絡める彩。

「約束、忘れんなよ」

腕を彩の頭の下に敷く俺も息が荒い。

「分かってるよ。私の…パンツでしょ？」

「そっ」

乱れた彩の髪を耳に掛けた。

「毎日…。それ、学校持って来いよな」

瞳を細めて唇を萎めた彩。俺は慌てて唇を外した。

「んなもんできつかよ!」

「何だよ？ 鞆の底に入れとけよ！ いつも一緒にいたいって言ったのおめえだろ？ 私自身は…タケルとクラス別なんだから。私のパンツは…授業中ズツとタケルと一緒にいさせてあげて」

完璧な正論に反論出来ない。俺は天井に顔を向け、呆れてクスクスと笑うだけ。

「な、何が可笑しいんだよ？」

俺に覆い被さり、彩は唇を着けてきた。

「なら皆に見せて自慢してやる。彩から貰ったってな。雄二と智喜…羨ましがるぜえ」

俺の上でキスしたまま、彩は目をキョロキョロさせる。

「あ、いや、やっぱり、パンツは…部屋に保管しとけ」

「嫌だよ！絶対持つてく。変態と言われようが、自慢してやる」

「や、やだって！」

彩は俺の口の中に叫んだ。

「じゃ、ブラも頂戴」

「わ、分かったよ。や、やるから、絶対持つてくんない！」

「ハイイ！」

久しぶりに彩に勝った。

久しぶりに、俺の部屋で、彩から英語を教えて貰ってたら、鞆の底からあの日の水族館のチケットが二枚出てきた。

「あつ！ これ、すっかり忘れてた」

鞆から取り出したチケットを見せると、彩は俺の問題集に走らせていた赤ペンを止めた。

「あー！ 勿体ない！ いっちゃんおつよ」

「じゃ、今週末どう？ 土曜」

「うん。OK！ 私、ジンベイ鮫見たいんだよね」

赤ペンを握った手を顎に当てる彩。

「ジンベイ鮫？」

春休み直前、例の図書館の近くにオープンされた水族館。春休み中の繁忙期から閑散期に入り、週末土曜日でも比較的空いている。

広く、薄暗く、静寂な雰囲気を漂わせていた水族館のメインホール内は、壁一面に嵌め込まれた映画のスクリーンのような水槽の光だけで照らされ、その水槽の中には、彩が見たくて仕方なかった体長8メートルのジンベイ鮫が、優雅に、静かに泳いでる。

周りに人がいなくなり、静かなホール内に二人きりになっても、彩は、そのジンベイ鮫から目を離さなかった。

「彩…」

水色の光とジンベエ鮫が作る微かな波動が、彩の横顔にさざ波の模様を浮かべている

「綺麗だなあ…」

一瞬、彩に見取れた。

「綺麗よねえ…。おつきくて、ゆっくり泳いでて、私も海の中いるみたいだよ」

彩はジンベイ鮫を見ながら言った。そっちじゃねんだけど。

「あ、彩…」

もう一度、彩を呼んだ。

「何？」

ジンベイ鮫に視線を向けたまま、彩は顔だけを若干俺の方に向けた。

「ここで…もう一回、プロポーズしていいか？」

彩が、漸く、視線も顔も体も俺に向ける。水槽の中で、ジンベイ鮫が俺と彩の前をゆっくり泳ぎ過ぎた。

「もう一回？」

静かに微笑む彩。

「だって、この前はエッチしながらだったからさ。ま、この前は、この前で素直に良かったけど。別な形で、彩にプロポーズしたい

から」

繋がれた左手をそのままに、彩の右手が俺の左手を取る。俺と彩は両手を取り合って向かい合わせになった。水色の光の中、彩の瞳がキラキラと輝く。一生に一度の瞬間に改まった俺。相当、緊張してたけど、少し咳ばらいをして彩の瞳を見詰めながら、プロポーズを始めた。

「どんな事があっても離さない。どんな激しい喧嘩しても一緒にいたい。一生、彩を愛してく。今、それだけしか約束できないけど……俺と結婚してくれ」

ジンベイ鮫が、もう一度、俺と彩の傍を泳ぐ。彩の瞳から水色の雫が一本の線になって頬に流れた。

「タケルだけいてくれたら……。何にもいらないよ。何があっても、私は絶対にタケルから離れない。愛してる。私をタケルのお嫁さんにしてください」

彩を引き寄せた俺は、しっかりと彩を受け止め、強く抱き締めた。ホールの出口付近で、モップを持ち、三角巾を被った初老の女性が笑顔で何度も頷き、抱き合う俺と彩を眺めていてくれた。

「クラッチ盤だと思ったよ。サードで上がらなかったから。こんな古い車、よく直してくれたね」

「部品は中古しかなかったっすけど、完璧に直してます」

「ありがとう。直ると思わなかったから嬉しいよ」

バンパーを取り外していると、背中から聞き覚えの音が。まさか？　しゃがんだまま振り返った俺。どつかで見た野郎が180SXの傍で、うちの若い工員と話している。嘘だろ？

「少々、お待ちください。お釣りと領収書お持ちします」

野郎の車が搬入された日には、丁度、得意先へ納車に行つて、俺は工場にいなかった。らしい車乗りやがって…。近づく俺の気配に、野郎はゆっくりと顔を向けた。僅か5メートルもない野郎との間隔。21年の歳月を埋めようと、俺は空きそうになっていた口を結び、何を話そうか？　色々と頭の中で考えながら野郎との間隔を詰めた。

最初は、野郎も呆然としてやがった。無理もねえ。けど、近づく俺に微笑みながらファイティングポーズを取る野郎。

あの雨の夜。野郎から店に電話が入った。

「よう、ボンボンチームのリーダーさんよ。俺に何のようだ？」

店のピンク電話の受話器に向かってタバコを吹かす俺。

「おう、テカテカチームのリーダーさん。そろそろ、おめえとサシでケリ着けてやるよ」

冷静な声。氷野郎が。まだ火が点くタバコをそのまま握り潰した。

そのころ、この街には、最大勢力であった俺のチームや他の雑魚チームから街を守るとの大義名分で、各学校の成績優秀者が集結したチームが存在していた。最初は、ボンボンどもの暇潰しと相手にもしなかったが、野郎が頭張るようになり、ボンボンどもに喧嘩を教え、行動指揮を取るようになってからは、徐々に総員数が増え、勢力も増大。勿論、革ジャンにリーゼント、踵の尖った革靴、ロックとバイクを主流とした俺のチームは、チェック柄のシャツとチノパンにローファーシューズ、適当に染めて垂らした前髪でポップスなんて聞きやがるニヤけたチームを毛嫌いし、何かと正義感ぶつた奴らと対立していた。

常に団体行動を欠かさない野郎のチーム。それを束ね、一気に相手を畳み掛ける野郎の統率力と実行力に、粒じや負けてなかったけど、正直、俺のチームは押されてた。何時だったか……。チーム戦で相手が砂浜を指定して来やがった。どこだろうと捻り潰してやる！馬鹿な俺達。意気揚々と革ジャン、革パンツに革靴の重装備で乗り込んだ。奴らはTシャツにチノパン姿の軽装備。俺達は壊滅寸前までやられちまった。そりゃ、唯でさえ動きが取り辛い砂浜。軽装備の方が有利に決まつてる。おまけに、砂にタイヤが捕られて、こっちはオハコのバイクも使えない。そこでの野郎の指揮は天才的だった。突撃をかます俺達に対して、三列に構える奴ら。一列目が俺達をかわす。二列目もかわす。残った三列目が俺達を受ける。一列目と二列目の奴らが俺達の後ろから襲って来る。奴らに囲まれた俺達は、あつと言う間に海に押され、革ジャン、革スボン、革靴が塩水に浸かって死に体にされた。あん時は、流石に、命カラガラ、微妙に荒れた海から逃げるしかなかった俺達。けど、野郎は俺達に追いつき、いい勝負した相手を追うもんじゃない撃ちを掛けようとしなかった。「いい勝負した相手を追うもんじゃないやねえ！」って、てめえの仲間にはぎきやがった野郎。一瞬、野郎を格好よく感じたのも、大いに俺のプライドを傷付けた。

ああ言う頭いい野郎は死ぬ程ム力つく！ やつと、あん時の借りが返せる。しかもサシで。仲間の制止を振り切る俺。「ついて来る奴は殺すぞ！」と、言い残し、バイクのアクセルを捻った。

場所は、湾岸道路沿いの河川敷の公園。場所には気を付けねえとな。今度は、俺がおめえを沈めてやる。豪雨の中、バイクを走らせた。

河川敷の公園。奴は傘の中にいた。

「おめえ、まだ分かつちやねえのか？ 革ジャン、革パンツ、重装備は喧嘩に不利だつて。おまけにこんな雨に濡れてよ。重くねえか？ 体」

息なり、俺に学習能力がないとぬかしやがる野郎。傘の中、目だけを光らせて、野郎は不適な笑いを浮かべる。氷野郎が。

「るっせ！ この格好で、おめえに勝たなきゃ意味ねえんだよ！」

「なら、心置きなく…ブチのめしてやる。来いよ」

俺に手招きし、野郎は傘を投げ捨てた。それを合図に、俺は猛然と野郎に突進し、タックル。しかし、野郎は俺の頭を抑え込んで耐える。この体勢…ヤバイ！ 野郎の膝が俺の顔を捕らる。目の前でフラッシュが焚かれた。俺は上体を反らして後退り。次の瞬間、雨を裂く拳が、よるめきながらもスエーする俺の顔を掠めた。危ねえ！ まともに喰らったら終わってた。涼しくも鋭い野郎の目。息も乱さず、立ちほだかる氷柱。手強い。一旦、俺は奴から距離を取った。

「どうした？ テカテカ。足に来てんじゃねーのか？ タックルつてのは至近距離でやんなきゃ効果ねえんだよ」

ゆつくりと、俺の右に回り込み、距離を詰め始める野郎。両手を垂らし、一見、まるで戦闘意欲がないように見える。違う！ 触れるもんなら切り付けられる。静かな迫力。舌舐めずりしながら、ゆつくりと獲物を狙う獣。野郎の鋭い眼差しは、しっかりと俺を捕らえてる。

「教えといてやるよ！ 喧嘩は相手の利き腕と同じ方向に回り込むんだ」

濡れた髪を掻き上げ、少し笑って俯いた野郎。チャンスか？

「るっせ！」

踏み込んで、野郎の顔面に右ストレートを放つ。右に回り込んだ野郎に難無く避けられる。チャンスじゃねえ！ 誘き寄せだ！ これじゃ左でガード出来ねえ。難なく、野郎のカウンターフックが俺の顎をえぐり、俺は吹き飛ばされた。

「隙を見せた相手ほど、気を付けなきゃよっ」

格好だけじゃねえってのは、認めてやるよ。水溜まりの中で顎を擦る俺。野郎は、それまで俺が力だけで擦伏せてきた連中とは訳が違った。口から流れ出る血を拭い、立ち上がったけど、完全に足に came 来た。

「ほら、ここだ！ 来い！」

野郎に向かって突進。もう理屈じゃねえ！ 野郎のシャツを掴んだ俺は、やっと野郎の顔面に一発返せた。効いてんのか？ 何もな

かったように顔を返して微笑む野郎。

「そつだ。強い相手にゃ接近戦だ。でも、こいつに気を付ける」

またフラッシュが焚かれた。ズドンと野郎の頭突きが俺の鼻に減り込む。

「倒れそうになっても相手にしがみつけ！」

野郎の奴の言う通り、俺は野郎のシャツを離さなかった。必死に倒れそうだった体を右足一本で踏ん張った俺は、その右走に弾みをつけてもう一発、奴の顔面に拳を放った。まだ倒れねえ！

「ヨシッ！ 打ち合いでいくぞ。テカテカ！」

野郎は俺の革ジャンの衿を掴んで俺に一発入れた。

「うらあっ！」

俺も一発返す。野郎の拳が来る。俺もまた返す。野郎もまた返す。また俺も…。野郎もまた…。拳の応酬。血みどろになりながら、何発殴り合ったか分からない。気が付けば、お互い膝を着いたまま、力のない拳を繰り返していた。最後のパンチが同時に入り、俺は前のめりに倒れた。

俯せの体をやっと仰向けに転がすと、微かに微笑む野郎が立っていた。雨に濡れながら俺を見下ろす野郎の目。鋭さは消え、何故か寂しい目に。もう、立てねえ…。負けだ。どうにでもしろ。観念した時、野郎が大の字で倒れていた俺の傍で膝まずいた。

「頼みがある……」

寝ながら野郎に顔を向ける俺。

「俺はチームを抜ける。だから、おめえに俺のチームの奴ら守って貰いてえんだ。頼めんのは……おめえしかいねえ」

勝つてな事ほざきやがって！　これが、最初で最後のサシにしようつてか？　雨を見上げて黙り込んでやった。野郎は立ち上がり、背中を向けた。勝ち逃げかよ？

「抜けるだっ！？」

遠ざかる野郎の背中に叫んだ。

「女の為にさ！」

女だと？　俺は、まだ立てなかった。

「おめえも、そんな女ができたら分かる。所詮、俺ら男は、どう足掻こうと女には勝てねえ！」

野郎の背中が雨に溶けた。俺は落ちてくる雨に向かい、負け惜しみを上げるだけ。

野郎とは、それっきり。それから、俺のチームの奴らと雑魚チームの奴らに、俺は野郎のチームに一切手を出さない事を誓わせた。それが、野郎が最後に言った「守ってほしい……」の意味に当て嵌まる事だと理解した。負けた惨めさ、悔しさも当然あったけど、それ以上に、生まれて初めて、本気で死ぬほど殴り合った野郎からの願いを受ける義理みたいなの……責任みたいなの……面子みたいなのを感じ

た。

野郎が抜けた後、程なくして、野郎のチームは解散した。その寂しさが…悔しかった。

「所詮、俺ら男は、どう足掻こうと女には勝てねえ」。野郎の言った意味が分かったのは、それから暫く後だった。

「昨日の事みてえだな？」

野郎の胸を軽く拳で突いた。

「ああ、まさかまさかだ」

お互い、歳は喰ったが、口調は変わってない。

「おめえ…ここで？」

野郎が工場の中を見回した。

「おう、婿入りしてな。お義父さんが亡くなって…。それから俺が任されてんだ。そっちは？」

「デパートで営業やってる」

「おめえ、子供は？」

「うん…。三人。おめえは？」

「娘二人だ」

「そうかあ。お互い…親父になっちまったな」

苦笑いの野郎が俺の胸を突き返した。

「だな。近くか？」

「ああ、こいつで10分くらいだ」

野郎は愛車に親指を差しながら答えた。俺は年月を逆算するのに精一杯。気前のいい言葉が出て来ない。この街に住んでいれば…またいつか会える。

「また寄るよ。一杯やるつや」

頭を掻きながら頷く俺。

「おう、そうしよ。車出すよ。前で待っててくれ」

俺は野郎の車の運転席に乗り込み、エンジンキーを回した。

「何か、水くせえなあ…」

エンジンを切り、俺はドアを開けて顔を出した。

「誠！ もうちょっと時間あるか？俺のゼファー見てけよ。最近、リストアしたんだ」

誠は目を輝かせて戻って来た。

じゃ、ちよつとトイレに……。敗者の彩は、まだ俺に覆い被さつて
る。

「彩、ちよつとどいてくれ」

彩の両肩を軽く押した。

「やだ」

ボソツと低い声で言っ、彩は俺の首に両腕を巻き付けた。はあ？

「ちよつと、トイレだつて」

起き上がるつとする俺。

「やだ、つってんだろ！」

体重をドシツと掛けて、彩は俺を押し返す。

「何言つてんだよ？ 漏れるだろが」

彩の悪ふざけに、それでもまだ冷静を保っていた。

「漏らしゃいいじゃん」

俺の胸に顔を埋め、またボソツと冗談をかます彩。思わず、鼻で

笑う。

「もう分かったから、退けよ」

再度、起き上がろうとしたけど、彩は俺の首を離さず、更に、俺の腰を両腿でサンドしてしがみ着く。亀か？ おめえ。

「やだつての！ 愛してるから、1秒でも離さねえよ！」

「バカ言つな！ トイレは別だ！ マジ漏れるってんだ」

彩の腰を押し、俺の体から彩を離そうとしたけど、強固に体を密着させ、彩は僅かな隙間も与えない。エーッ？

「マ、マジ、ヤバいつての！」

「おめえ、愛してる私といつも一緒にいたいって言ったろ？ おめえ、自分の言った事に責任持てよな！ 私は絶対に離さないっての！」

彩は俺の唇に吸い付いた。

「あ、彩！ ト、トイレだって。直ぐ帰って来るって！」

「関係ねえよ！ 愛してんのかよ！？」

益々、腕の力と舌の絡めを強める彩。

「あ、愛してるに決まってるだろ！」

「私のパンツと一緒にいてえんなら、生身の私はどーなんだよ?」

そう来たか?

「そ、そりゃ、い、一緒にいたいよ」

「なら、ジツとしてろ!」

もうダメだ! かまっちゃらんねえ。漏れる!

「ダメだったの!」

強引に体を俯せにし、ベッドに着いた両手で体を押し上げて起きようとした。

「イヤヤー!」

部屋中に響き渡る彩の声。

「バ、バカか? てめえわ!」

「ああ、女は皆、男に惚れりゃバカになんだよ! ここで、タレろ!
私が責任持つからタレろ!」

「な、なんの責任だったの!??」

やっとの事で、俺は上半身を起こした。けど、彩は俺の首から離れない。

「もうっ! イッ、イヤだったの! バカ、この野郎!」

ヤツ、ヤバいつての！背中を掻く彩を無視し、俺はベッドから足を下ろす。まだ離れない彩を背負う形で立ち上がった。しょうがねえなあ！

「イツヤアアア！！」

彩は俺の腰に両脚をクロスさせて背中にしがみ着く。

「んの野郎！ ぜってえ離れてやんねえよ！」

「勝手にしろ！」

切羽詰まっていた俺は彩を背負ったまま部屋を出た。全裸の俺は、全裸の彩を背負って階段を駆け降りる。何でこうなるんだよ！？

「ぜ、絶対離れねえ、は、離れねえんだよ！ は、離れてたまるかっての！」

俺の背中揺れる彩。家中に響き渡る声を吐き散らす。俺は必死でトイレに駆け込み、急いで蓋を開け、彩を背負ったまま放尿。うー、間に合ったあ！ あー、負けだも。どう足掻こうが女には勝てねえ…。

「結構、可愛いんだね。オシッコしてる姿」

やっと俺の背中から降りた彩はシラツとした顔をして俺の放尿を覗き込む。

「今度は、おめえの放尿を直見してやるからな」

負け惜しみだった。

「おめえ、エッチの時、よく見てるじゃん」

「あれは殆ど潮。ちゃんとしゃがんでやってるナチュラルなオシッコ見たいの！」

「意味分かんね！」

トイレでも、全裸の二人。

「裕ちゃん、終わったよ」

配送帰りの勇作。閉店後、以前から頼んでた店のパソコンの改修作業に来てくれた。

「これで、バッチリだよ。ソフトはバージョンアップして、エクセル経由のデータは変わらないなら……」

従業員は皆帰り、店内は私と勇作だけ。

「後、モデムに合わせて、セキュリティはSSL通して……受信も送信も予約は……」

勇作の説明。私には意味不明。

「取り敢えず、使い方は一緒なんでしょ？」

「うん、一緒一緒」

「なら、いいや。コーヒーでいい？」

「サンキュー！」

勇作は店の待合に入った。

「裕ちゃん！ 芳恵から聞いたよ」

店奥の給湯室で、コーヒーを入れていた私に勇作の声が届く。

「はいはい、何の話か分かりますよ」

呟いた私はカップにコーヒーを注ぐ。彩との約束。白い湯気を上げるコーヒーを見ながら、女子会での事を思い返していた。

美紀ちゃんの話で盛り上がる私と彩の女子会。息なり、彩が俯いた。

「ママから雄二のお父さんとお母さんに二人の事を言っただけで欲しいんだ。美紀は凄く雄二のお父さんとお母さんに会いたがってる。でも、タケルも雄二も…二人の事を言い辛いみたいだから。今のままじゃ、美紀はいつまで経っても、雄二のお父さんとお母さんに会えないよ。ママと私みたいに…。雄二のお母さんと女子会するのが美紀の夢なんだ」

涙を溢す彩。私は握っていたハンカチを渡した。

「彩、任しときな。私が芳恵と勇作をきっちり説得するよ。たとえ、芳恵と勇作、あの人が反対しても、私は雄二と美紀ちゃんの見方。タケルなんかが間に入れない。私と彩で美紀ちゃんの夢を叶えてあげよ」

「ママ…」

テーブルの上で、私は彩の…いや、娘の手を握った。友達の為此こまで…。流石、私の見込んだ娘だ。

次の日、早速、芳恵が店に来た。丁度いい。

「いつもの感じでお願い」

ケープを被り、鏡の前に座った芳恵。準備OK。芳恵の髪を霧吹きで濡らし始めた。彩との女子会の少し前、腕を組ながら仲良く歩いてた雄二と美紀ちゃんを偶然見た私。芳恵に告げ口みたいな事はしなかったけど、この日はかりは、彩の為にも…。美紀ちゃんの為にも…。雄二とタケル…？ ま、あいつらどうでもいいや。芳恵の髪を切りながら、まずは、いつものように勇作と雄二の愚痴を「しようがないねえ」、「分かるそれ」、「何考えてんだろ」と、笑顔の中に、時々、颯々気味の相槌も忘れずに聞く。芳恵の溜息で話が途切れた。今しかない。「ねえ、芳恵…」。声のトーンを下げ、出来るだけ前置きを長くし、穏和な状況を作りつつ、雄二と美紀ちゃんの事を芳恵に打ち明け始めた私。芳恵は必ず私に余計な気を遣う。それが一番厄介。サバサバした笑いも交えてるのに、どうやら無駄鏡の中で、唇を奮わせて目をキョロキョロ。芳恵の慌てようが分かる。お願いだから、そんな血相変えないでよ。

「それ本当の話？」

我慢が限界を越えた様子。芳恵が私に振り向こうとした。慌てて、ハサミと櫛を芳恵の髪から離れた。

「ちょ、ちょと、じつとしててよ！ 髪切れないじゃない」

両手で挟んだ芳恵の頭をルツと鏡に向けた。

「彩に聞いたから確かよ。同じ学校なんだし、あり得る話よ。そんなに驚く事ないじゃない」

芳恵の髪を梳かし直し、ハサミを入れると、芳恵は視線を落とすた。

「ごめん…。裕子。あの馬鹿息子。最近、何かニヤニヤ顔晒してると思ったら。美紀ちゃんと…。直ぐに止めさすよ」

真剣な眼差しを上げる芳恵。ほら来た。でも、いくら親でも二人を別れさす権限なんて絶対ない。雄二は私の息子同然。また芳恵の髪からハサミと櫛を引いた私は鏡の中で芳恵と目を合わせた。

「ちょと、芳恵！ あんた自分の息子を不幸にしてどうするつもり！？ 息子の彼女選ぶのは、あんたじゃないよ！」

少し大きな私の声に店の中が静まった。慌てて、私は周りに会釈する。

久しぶりに裕子に怒られた私。顎を引いて、鏡の中の裕子を恐る

恐る見上げた。裕子は周りに目配りし、私と目を合わせて咳払い。ペロツと舌を出して笑ってくれた。怒った後、いつも裕子は何もなかったように振る舞う。誰もが認める綺麗な顔立ちと均一が取れたスタイルだけじゃない。強弱がはつりとし、切り替えが早い性格も高校時代からの裕子の魅力。

「芳恵…」

私の髪にハサミと櫛を戻した裕子が静かに語り始めるた。

「あんたも勇作のお母さんに認めて貰って勇作と幸せになれたんだよ。今度は、あんたの番だよ」

そう言われると…。でも、事情が違う。私は小さく息を吐いた。

「タケルと美紀ちゃんが友達になったから、きっと雄二も美紀ちゃんの友達になってるはずって、裕子から聞いた時…正直、複雑だった。確かに、入学式の時は、雄二とタケルに美紀ちゃんを紹介しようかって、誠に言ったけど…。本気で言った裕子には悪いけど、あれは、その場の取り繕いだった。美紀ちゃんには何の罪もない事は分かってる。でも、私は…今でも千佳が許せない。裕子に促されなかつたら、私も勇作も千佳のお葬式に行つてなかつた。たとえ、裕子が許しても…私は千佳を許せない」

思った以上に厄介だね。無理矢理説き伏せて、この場限りにしたくない。私は露骨な苦笑いを鏡に映して溜息。誠と千佳の事は、もう何にも気にしてないって何千何万回も言っただけどなあ。いい加減、信用してよ。可愛い顔立ちで誰からも好かれた芳恵。顔に似

合わない頑固な性格は昔も今も変わらない。そのアンバランスが芳惠の魅力なだけどね。

「誠が言っただけどねえ。最初、タケルが美紀ちゃんと友達になっただけで誠に言っただけだよ。でも、変だと思わない？」

芳惠の前髪を揃える為に、私は芳惠に顔を近付けた。

「うん。タケルも雄二も美紀ちゃん存在を知らなかったはずなのにね。タケルから誠に…。もしかして…美紀ちゃんの方から？」

顔を上げて鏡の中の芳惠を見た。

「そうとしか考えられない。美紀ちゃんの方から自分の事をあの子達に話したんだよ。美紀ちゃんの方が先にタケルと父親だけが同じ兄妹だって気付いた」

芳惠の前髪を櫛で整え、カットを進める。

「どうやって気付いたんだろ？ 入学式での誠の様子じゃ、とても誠からタケルの事を美紀ちゃんに話すと思えないし」

「女の子って男の子なんかよりズツと鋭いからね。どんな些細な事でも見逃さないよ。まして、相手は、あの分かり易い誠だよ」

頭が揺れないように、芳惠は小さく吹き出した。

「誠なら仕方ないか」

「それだけ…美紀ちゃんはタケル達と友達になりたかったんだよ。」

早くにお母さんを亡くして寂しかったんだよ。美紀ちゃんには何も罪はない。私も…芳恵の言う通りだと思う」

芳恵はまた視線を下げた。もうそろそろカットも仕上がる。この件も仕上げに入るか。

「ねえ、芳恵。今、芳恵が気遣わなきゃいけないのは、腕に職があつて一人でも生きていける私みたいなアラフォー女じゃないよ。美紀ちゃんの夢ってね。私と彩みたいに…彼氏のお母さんと仲良くなつて、彼氏ほつたらかして、お母さんと一緒に女子会する事なんだつて」

「裕子…」

「あんたが気遣わないといけないのは、そんな夢をもってる娘じゃないの？ あんたを求めている娘じゃないの？ あんたの大切な一人息子の大切な彼女じゃないの？」

カットが仕上がった。私は傍のキャビンからタオルを取り、芳恵に渡した。

「芳恵。娘の育て方くらい、私が教えてあげるって」

タオルで顔を覆う芳恵。私が肩を叩くと、何度も頷いてくれた。芳恵が終わって、次は勇作。勇作が店に来たのはパソコンの事なんかじゃない。昨日の今日。白々しいタイミング。そんな私って怖いかなあ？ 確かに、昔から勇作にはよく説教してやってるけどねえ。含み笑いで、私はコーヒを待合のテーブルに置いた。

「うちの坊主が…とんでもねえことしやがって…」

「流石、夫婦ねえ。芳恵と同じ事言ってる」

紺の野球キャプを取り、頭を掻く勇作。

「いや、俺も…芳恵から聞いた時はビックリして喉に飯に詰めちま
ったよ」

吹き出す私。芳恵の時みたいに神経を使う必要はない。類は友を
呼ぶ。勇作は誠と一緒に。常に楽観的。組んだ足の上に肘を着き、指
に顎に乗せた私は薄ら笑みを浮かべて勇作と話す。

「何で、そんなビックリするの？ 雄二と美紀ちゃんは極自然に同
じ学校で出会って付き合い始めた。これ、勇作と芳恵と一緒にだよ」

「そ、そう言われちゃうとさあ…」

ゆっくりとカップを持ち上げてコーヒを啜った勇作。カップを
戻しながら、私に困惑を向ける。

「でもさあ…。美紀ちゃんって、その…誠と千佳の…」

やれやれ。顎から指を外す。

「いいのそんな事」

私は勇作の膝を叩いた。

「芳恵にも言っただけど…。こんな年増女に気遣う暇あるんなら、自
分の息子の事を心配してやんなよ。雄二は私にとっても息子みない

なもんだよ。母親の私がいって言ってんだから、それでいいの」

勇作はまた頭を掻く

「裕ちゃんには助けられっぱなだよ。あの芳恵をよく説得してくれたよ」

膝を抱えて、私は照れ笑い。

「それよりさあ。雄二が美紀ちゃん連れてくるかも…いや、間違いないで連れて来るよ」

私は勇作の肩から埃を払った。

「そ、それなんだよね。俺ら、雄二の奴に彼女紹介してもらった事ねえからさあ…」

「女の子は隅々まで見るからね。そんな帽子の形が付いた頭してちゃ一発でお父さん嫌われるよ」

勇作の髪を手櫛で梳かしてやった。

「今度、髪…きつちりしてくれる？」

「任しときな！ お父さん」

勇作の胸を叩く私。勇作は苦笑いでコーヒークップを口に着けた。男は単純で女より楽。

「彩の話じゃあ…。凄い明るくて面白い娘らしいよ。美紀ちゃん。

話聞いてたら、芳恵のキャラに似てるよ」「

腕組みし、首を傾げる勇作。

「本当かよ？ 何で、芳恵に似てる娘なんだよ？」

「そりゃ、雄二が、あんたの息子だからでしょ！」

勇作の頭を突いた。

プロポーズした後、妻と二人で、水族館の直ぐ向かいにあるショッピングセンターに行き、妻に結婚記念のプレゼントを买おうと思った。けど…結局、遠慮がちで至って物欲がない妻と女のプレゼント購入にセンスがない俺は記念の品を見つけられなかった。

「折角、朝、コンビニで金引き出したんだけど…。これじゃなあ」

ショッピングセンターのフードコート。俺はちゃんぽんを啜る。

「お金。ちゃんと貯金しといた方がいいって」

「もう女房風かよ？」

「あつたり前じゃん。もうタケルの奥さんなんだから」

澄まし顔の妻。オムライスを口に運んだ。

「でも…。あの指輪可愛くかった？」

「いいって。あんな高い指輪。ここ、奢って貰ったから、それだけで十分です」

4980円が高い？ まあ、いい女房なんだろうなあ。旦那に金を使わせなんだから。彩を見詰めたまま、ちゃんぽんを啜る。

「でも、いつか、無茶苦茶高価な指輪贈ってやるから。楽しみにしとけよ」

「そんな、お金や見栄えじゃないって。意味がないとね。指輪も良いけど…。意味がある物なら、全くお金からない物でもいいよ」

「全くタダってのもなあ…」

ちゃんぽんを端でつまんで、スープにしゃぶしゃぶ。俺は何となく微笑んでちゃんぽんを啜った。

「でも、それって、金で買えないってやつだから…。ガチで難しくねえ？」

頷きながら、口の中でオムライスをもガモガさせる妻。オレンジジュースを吸い上げた。

「うん。だから、今も、これから先も、タケルだけいてくれれば十分。タケル以外は…何にもいらない」

照れて微笑むしかない。

「そりゃ、俺も彩だけいてくれりゃあ…それ以上、何にもいらねえよ」

妻は静かにカップをテーブルに戻した。

「愛してます。タケル」

「マジ、今日、プロポーズして良かった。愛してる」

俯いた妻。妻の肩に腕を回し、引き寄せて唇を重ねると、俺達の後ろに座ってた家族連れのアラサーっぽいお母さんの咳ばらいが聞こえた。悔しかつたら、おめえもやってみろ！ やりたくても旦那から相手にされねえんだろ。体裁ぶつた欲求不満レス女が。周りなんて関係ない二人だけの空間。唇を妻から離しても、俺と妻は互いの額を着けていた。

「そっだ」

「何？」

妻から額を離す。

「今日は…あれ、買おう」

「またあ…。何買うの？」

怪しく、俺の顔を覗き込む妻。

「彩の下着。この前、彩から下着買って新品買ってやるって約束し

たる？ あの日、彩が恥ずかしいって言って、結局、何処にも寄らずにノーパンノーブラで帰ったじゃん。ここで約束果たさせてくれよ」

「エー！　ここでえ？」

両腿の下に両手を突っ込み、肩を絞る妻。

「うん。やっぱ、人道上、お返しはしねえとな。食ったら行くぞ」

そそくさと烏龍茶を吸いきり、立ち上がる。俺の好奇心は妻のTバック姿を映し出していた。

制服デート

「気分でも…悪いのか？」

「いや、元気だよ」

「なら、良かった。ちょっと気になってから」

「…」

「マジ、元気なら良かった」

「うん」

「週末、どっか行くのか？」

「別に…どこにも行かないよ」

「そっか」

「うん。どこにも…行かない」

「俺も…どこにも行かないよ」

「ねえ？」

「ん？」

「良かったら…週末、どっか行く？」

「俺と?」

「いや、やっぱり止めとく」

「何それ?」

「じゃ、どっか行く?」

「うーん」

「何それ?」

「マジ、大丈夫か?」

「うん、大丈夫」

薄気味悪く所々に立つ9等身のマネキン達は不気味の谷。洗濯したてのシーツのような匂いが漂う彩り豊かな空間。客も店員も女ばかり。そりゃそうだよな。さっきから首を動かさず目だけを動かして周りを気にする俺。男子高生にとって、女性用下着売場がこんなに居心地悪い所だと思わなかった。

エスカレーターを降りるまで億劫な顔をしていた妻は下着売場に着くなり、「ねえねえ、これ見て。可愛い!」別人のようにテンションを上げた。妻に下着売場中を引きずり回わされ、俺は、「もう勘弁してくれ」と、言わんばかりの愛想笑い。

「私、下着見るの大好きなんだ。部屋のクローゼットにパンツ専用の引き出しがあつてさ。一枚づつロールパンみたいに丸めて整理してんだよね。ブラも形崩れないように…」

てか、おめえ、声デケエつうの。店員が俺達を眺め、明らかに含み笑いをしていた。俺は鼻を擦りながら俯く。

「うわ！ これ、私の好きなドット柄。しかも、フリルギャザーだよ」

んな、広げんなって。

「タケルはTバック好きなんだよね？ どこにあるんだろつねえ？」

またデカイ声で。俺の手を握ったまま、ピョンピョン飛び跳ねて周りを見回す妻。はっずかしい！ また俯く。

「多分…もつと奥かな？ 行ってみよ」

妻は俺の手を引く。わ、分かった！ もう限界。

「あ、彩」

足を止めて振り向いた妻。

「悪いけど…。俺、エスカレーターの横のベンチで待ってるわ」

ニヤついて、妻は俯いた俺の顔を覗き込んだ

「あれ？ タケルもしかして恥ずかしいんじゃない？」

普段なら「バカ言え！ 俺、誰だと思ってんだよ？」って挑発に乗ってやるけど、場所的雰囲気俺を素直にさせる。

「う、うん。かなりな。慣れてねえからさ。こつ言つ所は」

オドオドと周りを見回した夫。「何よ？ 今更…」って言いたい所だったけど、冷静に周りを見たら…男にはちよつとキツイ。しょうがない。笑顔で溜息をついた私。

「分かった！ 私の趣味で良かったら、私が選んでくるよ。ベンチで待ってて」

ホッとした夫が可愛い。

「お、おう。彩に任せる」

ウォレットチェーンを引いてジーンズの後ろポケットから財布を抜いた夫。一万円札を私に渡そうとした。

「お、多いよ」

「女の下着の値段なんて分かんねえから…」

「パンツだけなら、3千円でも多いよ」

「なら、ブラも買って来いよ。きよ、今日は、新婚初夜みたいなも

んだからさ」

俯きながら、夫はチラツと視線を上げた。新婚初夜ねえ。私は二
ンマリ。

「分かった。じゃあ、無理しない程度に買ってきて来るね」

私は夫から一万円札を受け取った。

妻は俺に手を振って売場の奥に消えていった。やっとここから抜
かれるよ。首を擦り、息を吐いた。さてと、エスカレーターねえ？
殆ど俯いてたから、方向音痴に。こっちでいいか。早く、脱出し
たかった。

実は私もTバック履いてみたかったんだよね。家じゃ、お母さん
の手前、やっぱり履けないから。売場の奥へ行くに連れて、際どい下
着が多くなってきた。裸同然のマネキンに目を奪われる。これGス
トリングってやつだよ。殆ど紐じゃん。

オッシ！ エスカレーターあった。

「タケル！」

エスカレーター横のベンチに向かっていた俺を、誰かが呼び止め

た。

「ちょっと、いい!？」

路肩に停まる赤いハッチバックのコンパクトカー。校門を出て直ぐ。俺に声を掛けた人の頭が微かに運転席側の窓から見えた。きつと、道でも聞かれるんだろ。歩道で足を止めると、助手席側のパワーウィンドが下りた。ふわりと上がる甘い香り。

「は、はい」

中腰になり、車内に目を向ける俺。運転席に座る女性は見た感じで俺のお袋と同一年くらい。髪はショートカットで服はベージュのオフタートルネックのセーター。小顔で綺麗な人。

「2年B組の長池由美に、これ渡して来て欲しいんだけど…。いいかな?」

運転席から腕を伸ばし、カエルのキーホルダーが付いた鍵を俺に差し出す彼女。彼女の正体。もう分かった。もう分かった。俺は鍵を受け取った。

「由美の…お母さんですよ。俺…由美の友達の…」

「タケル君でしょ?」

由美のお袋さんとは初対面。

「何で…俺の事を？」

「この前、偶然、由美とタケル君が学校から帰ってるの見て。誰？
あのカツコイイ子。彼氏？ って由美に聞いたら、彩の彼氏のタケル君だって」

んな、カツコイイかな？ 俺。思わず、頭を撫でて照れ笑い。

「そう…なんすか」

「良かった。タケル君が、丁度、出てきてくれて」

その日、彩は月一の委員会活動。由美は彩と一緒に帰りたいらしく彩を教室で待っていた。雄二と美紀は一緒に帰ったし、智喜はいつもの補修。バイトが入ってた俺は一人で校門を出た。

「由美、もう帰っちゃったかな？ あの娘、鍵忘れちゃって」

「あー、いや、まだ教室にいますよ。俺、これ渡して来ます」

腕時計をチラッと見て、俺は校舎に走って戻った。

3階まで階段を駆け登り、廊下を走って由美の教室に着くと、由美は机に顔を伏せて爆睡状態。足音を殺して机に迫り、俺は由美の脇腹を指でチョンと突いてやった。

「アーツ！」

叫び声を上げて机から頭を上げた由美。一瞬、訳が分からず辺りをキョロキョロ見回す。

「へっ？ えっ？ なっ？」

やっと傍に立つ俺に気付いて、由美は、ゆっくりと俺を見上げた。

「おはよ」

「もうー！ ビックリすんじゃない！」

「ビックリしたのは、こっちだよ。デケエ声」

まだ眠たそうな由美の瞳。

「で、何よ？」

由美は目を擦る。

「ほら、これ」

ポケットから鍵とハンカチを由美の机に置いた。

「えっ？ 何で？」

「校門の前で、由美のお袋さんに会ったよ。これ、渡しといてくれるって」

「そ、そうなんだ。ありがとう」

「綺麗なお袋さんだな。じゃ、俺、バイトあるから急ぐわ。おやすみ」

由美の肩を叩き、俺は教室を後にした。

走って教室を出るタケル。鍵は分かるけど…ハンカチ？ もしかして…？ 私は口元に触れる。

「ヤバい。涎が…」

慌てて、タケルのハンカチを口元に当てた。

校門を出ると、まだお袋さんの車が止まっていた。

「渡して来ましたよ」

「ありがとう助かった。タケル君…よかったら送っていいか？」

「で、でも…」

「急いでるんでしょう？ さっき学校に戻る前、タケル君、腕時計見たから」

確かに急いでいた。

「じゃ、お願いします。バイト先、そんな遠くないんで」

「うん、乗って乗って」

にしても、いい香り。俺はドアを開けた。

下りのエスカレーター。俺は俯き視線を左右に振っていた妻の顔を覗き込んだ。

「どうした？」

「う、うん…」

俺の手をギュッと強く握り締め、唇を萎めた妻。上目遣いで俺を見た。よく見ると、若干、内股にもなっている。例のサインだ。エスカレーターの降り口が迫り、俺と妻は、その階でエスカレーターを降りた。

「ゴメンね。タケル…」

妻は下着の入った紙袋をブラブラさせて俯いた。

「いや、俺もだから…」

「また人目も気にせず俺達はキス。」

「いいのか？ 俺ら新婚で…ここで…」

「私は…別に…。てか、新婚だから、ありじゃない？」

「考え方によってはそうかも。妻の髪を耳に掛ける。」

「じゃ、行くか？」

「うん」

そして、俺と妻は以前と同類の場所に向かった。

これが、初制服デート。学校帰りに寄った場所はショッピングセンター。私の買い物にタケルを付き合わせたけど、正直言って、別に、欲しい物はなかった。強いて言えば、雑誌で見て可愛いと思っただレスシフォンのミニスカートもどきがあれば買おうかなって程度。ぶっちゃけ、買い物は、「そんな、学校の行き帰りだけじゃ、つまんないよ」と、学校で由美と話題になった制服デートにタケルを誘い出す為の口実。

まだ付き合い始める前、タケルと二人で、学校帰りによくマツクやファミレスに寄ったけど、「そんな友達同士の頃の寄り道なんて数に入れちゃだめ。制服デートって言うのは…中学と高校の時にしか出来ない貴重なデートなんだから」。由美の言う通り、タケルと貴重なデートを経験しておかないと。完全に感化された私。タケ

ルのバイトがない日、学校が終われば、タケルの家で愛し合う事が一番の幸せ。私の…一番したい事。でも、折角、カレカノになったんだから、一度くらい制服デートもしたかった。

あっち見て、こっち見て、服広げて「うーん」って首傾げて、何も買わずにまたウロウロ。何件、ショップの梯子させる気だ？ 女の買い物ってのは、これだから疲れんだよ。俺は欠伸しかない。取り敢えず、彩に手を引かせて主導権を託していた。

「タケル…」

彩が足を止めた。やっと何か買うのか？ 咄嗟に、笑顔を取り繕った。

「さっきのあれ…」

今までいっぱい見過ぎて…いや、正直、見てなかったんで分かん。

「どれ？」

「グラフィック柄のシャツ…」

んなの、あつたような…なかったような…。鼻水を啜った。まあ、彩に似合っただらば、何でもいいや。

「タケルに似合うんじゃない？」

俺かよ!?

「いや…。俺のは、いいよ」

頭を撫でながら、また無理矢理に笑顔を作る。

「うーん」

歩き始めようとした彩。俺は彩の手を軽く引いた。

「彩…」

疲れのピーク。歩きたくない。

「下のフードコートで休憩しない？ 喉渴いたよ」

「うん！ 行こ行こ」

この上ない笑顔で、俺の腕にしがみ着く彩。

「歩きつぱなで、私も休憩したかったんだよね。早く、言ってよ」

「はあ？」と呆れ顔を作る間も与えて貰えない。彩は思い切り俺の腕を引っ張った。

「早く、行こ行こ」

一息つき、コーラのカップを片手に眺めたのは灰色にうねる雲。
西日が入る気配もない。フードコートのウインドに、雫が透明の線
を成した。

「雨かあ…」

「大丈夫だよ。私…傘持つてるから」

漠然と雨を見詰めるタケル。

「彩には、本当、いつも感謝してんだ。傘…いつも持つてる彼女っ
て素敵だよ。何時でも何処でも、安心出来る」

黙って微笑み、テーブルの上のタケルの手を握った。雨から私に
戻ったタケル。タケルの瞳が、また雨色に変わった。ほんの一瞬に
吸い込まれ、濡らされた私。今すぐ抱いて欲しい。雨のように…。
タケルの左手を包む私の両手。握り締め、タケルを見詰める。ただ
黙って気持ちを伝えようとした。抱いて欲しい気持ちを。

フードコートに着いても、賑やかに話をしていた彩。雨を見た途
端に静かになり、ただ、口を薄く開けて俺を見詰める。白い頬に
雨の影が映った。微かに奮える透き通った瞳。くわえたストローを
そのままに、俺は動けなくなる。その奥に揺らめく妖気が俺に手招
きしていた。今すぐ…彩を抱きたい。彩の手首を握り、俺は彩を

引き上げた。

「行く」

急に立ち上がったタケル。分かってくれた？

私はタケルに引っ張られてフードコートを出た。無言のまま、タケルは私の手を引いて何かを探している様子。タケルの足が止まった。

「彩…。今すぐしたい…」

タケルを見詰め、黙って頷く。もう私も限界。ズツと前から濡れていた。

「ちょっと、待ってて」

私を残し、トイレエリアの中に入ったタケル。多目的トイレの中を覗いていた。そっか、あそこなら出来る。きっと、出来る。

多目的トイレの引戸を開けた俺。中の様子伺う。広い。綺麗だ。いける。

タケルが戻って来た。

「あの中いけるよ」

興奮が止まらない。濡れたパンツが地肌に密着する不快感に耐える私。自然に息が荒くなる。

「う、うん。タ、タケル。私…も、もう…」

呟くと、タケルの制服のジャケット、その裾を掴んで、くねりそうな腰に力を込めた。

「彩…。先に行って中で待っていてくれ。二人で一緒に入るのはヤバいから…。俺は様子見ながらノック…」

「分かった」

最後までタケルの言葉を聞かず、私はそこに走った。早く着てね。タケル…。中に入り、引戸に鍵を掛けるとパツと明かりが点いた。そして、直ぐにノックが。タケル！ 引戸に振り返った。鍵を外すと、部屋が暗くなり、中に入って来たタケルが後ろ手に鍵を掛けると、また中が明るくなった。

「良かった。周りに人いなく…」

タケルの言葉を最後まで聞かず、私はタケルの唇に吸い付き、舌を挿入した。もう、何も言わないで…。もう、何も言わせない…。二人の肩から鞆が落ちる。

首を交互に傾け合い、激しく唇と舌を交わす俺と彩。呼吸の交換をそのままに、俺はクルクルと彩の体をソシアルダンスのように回

転させて、壁に収納されているベビーベッドの傍まで運ぶ。殆ど、手探り状態。片手でベビーベッドの留め具を外す。一旦、唇を彩から離れた俺は脇の下から彩を抱え上げ、壁から倒れたベビーベッドの上に座らた。チェックのスカートに手を突っ込み、急ぎ早に彩のパンツをずり下げようとする俺。彩はベッドに後ろ手を着く。右脚だけをパンツから抜いた。左脚に引つ掛かる白地にピンクのドット柄のパンツ。自由になった両脚を大きく開ける彩。ベルトを外し、俺はズボンとトランクスを足元まで押し下げた。靴が邪魔。右足の靴を脱ぐ序でに、ズボンとトランクスを右足から引っこ抜いた。下半身を露にした二人はまた唇を求め合う。彩が俺の首に両腕を回すと、俺は彩の陰門を指でなぞる。こんなに濡れてるなんて。オシッコ漏らしたみたいだ。

「ウッフウウ…」

唇と唇の隙間から漏れる彩の微かな声。俺の指の動きが速くなり、今度は下の口からクチュクチュと湿った音が漏れる。堪らず、俺から唇と両腕を離し、再び、後ろ手を着いた彩。両脚を更に高く上げてベビーベッドの上でM字を作った。案外、ベビーベッドは頑丈。もう俺も我慢が…。入れよう。俺は彩の腰を手前に引き寄せた。

「ウーッ！」

タケルが固く張ったチンコを私の中に突き入れてくれた瞬間、引戸のスモークガラスに人影が映った。ヤバイ！ 反射的に後ろ手を外し、タケルに抱き着いた私。タケルの唇に吸い付き、その喘ぎを殺した。唇を離せない。こ、声が漏れる。アッ、突かれてる！ ウツ、アアアア、ベビーベッドが軋んでるうつつ…。

俺の両脇の下に両腕を回し込み、ジャケットの肩部にしがみ着く彩。「ウウウ…」と、小さく漏れる声は、突き上げから来る喘ぎ声を押し殺し、堪えている様子。場所はショッピングセンターのトイレの中。引戸の向こうには、ここで起こってる事をまるで知らない買い物…。そりゃ、いつもみたいな喘ぎは上げられない。彩、我慢できるか？ 彩が堪えれば堪えるほど、彩の下半身に力が入り、俺のペニスには、かなりの膣圧が掛かる。キツイ！ ガチキツイ！ ペニスを加速させると、彩は俺から両腕を解いた。その眉間に皺を寄せる表情、健気で可愛い過ぎる。

彩の白いVネックセーターとブラウスを捲り上げた俺はブラの間隙に手をつ突っ込んで、小さく可愛いオツパイを揉みながらコリコリに固くなったつぶらな乳首を指に挟む。俺の突き上げは激しくなる一方。

「クウウウウウ…」

ヤ、ヤバい！ 声が…。歯を食いしばり堪えるしかなかったけど、タケルの悪戯な指が私のクリをこね始めた。も、も、もう無理…。でも、もっとして欲しい…。思いつきり複雑だった。

んな、密着部分を露にされて、クリ弄らずにいられないっての。顔を真っ赤にして堪える彩。今にも悲鳴を上げそう。もう、これしかない。一旦、ペニスのスピードを和らげた俺は着ていたジャケット

トのポケットからハンカチを取り出した。

「あ、彩…。こ、これ噛んだら楽になるよ」

なるほど！ これなら声を殺せる。タケル、優しい。

「わ、分かった」

口を開けると、タケルがハンカチをくわえさせてくれた。さあ！
どうぞ！ タケル。気合いを入れ直し、ンカチを噛み締める私。
私の無言の訴えが通じたのか、タケルはクリを弾きながら激しく出し入れを繰り返す。

「う、ううううーっうーっう…」

声と一緒に唾液もハンカチに染み込む。ゲキ、ゲキ気持ち、気持ちいい…。声を殺さないといけない場所。引戸の向こうから子供の声が聞こえる場所。賑やかなシヨツピングセンターの中にあるトイレ。ひやひやの緊張感が逆に興奮材になるなんて想像もつかなかった。またタケルよって新境地に導かれた私。絶え間なくタケルから受ける膣とクリへの連続攻撃にハンカチはベタベタ。もうダメ…。子宮が熱い。私は興奮の固まりをお産しようとしていた。

「イフそう…。ダグル…（イキそう…。タケル…）」

ハンカチに染み込む声。

「俺も、俺もイクよ。あ、彩…」

「ダグル…。あいふてる…（タケル…。愛してる…）」

「愛してるよ…。あ、彩…」

ベッドが軋む…。も、もう…。

「イフツッ！」

「イクツッ！」

揺れと軋みが止まる。頂戴！ 口からハンカチが落ち、体の強張りが解けると、タケルが私の奥に分身の放出を始めた。ああ、ドクドク出てる。私の中にタケルの愛情がいっぱい出てる…。

「愛してる…」

「愛してるよ」

私のお尻の穴に、二人の体液が蔦っていた。

制服と下着を脱ぎ散らかし、開放感を得ながら遠慮なく喘ぎ、悶える。それから約1時間後の私はタケルのベッドで体を弓なりにし、再度、膣内にタケルの熱い放出を受けていた。

「愛してるよ…。彩」

「タケル…。あ、愛してる」

タケルの体は私の下にある。

「でも…」

「何？」

タケルに覆い被さる私。

「トイレシャワーでアソコを洗い流してた彩って…無茶苦茶可愛いかったよ」

思い出された恥ずかしさが顔を熱くする。

「るっせ！ バカ！」

タケルの胸を叩く。

「イツ！ もー、褒めてんだよ」

「恥ずかしいっての！」

タケルの肩に吸い付いた私をタケルは優しく撫でてくれた。

「離れてやんないからな。このまんま」

「このまんまだと…。中でまた元気になるよ」

タケルの肩から顔を上げた。

「げーんきになーれ」

腰を回転させながら、私は唇と舌をタケルに落とした。

「で、どうだった？ 初制服デート」

次の日、早速、由美に捕まった私は前日の事情聴取を受けた。

「うん…。まあ…」

廊下の壁に体を向けて俯いた。

「どうだったのよ？」

由美は私の顔を覗き込む。

「はっはーん。キスくらいは…してるよね？ その顔は」

「うん…」

微妙な返事の後も、私は顔を上げなかった。鋭い由美。私の困惑しきった表情を見過ごすはずがない。

「もしかして、やっちゃった!？」

昔から由美には嘘をつけない私。一瞬、声を大きくした由美に「シッ!」と、自分の口到人差し指を当てて周りを見た。

「こ、声おっきいって」

由美も周りに目配りした。

「で、でも、昨日はタケルと買い物行ったんだよね？ あ、じゃあ、その後、タケルの家でラブラブ？ いやいや、私も照れるよ」「

周りに配慮しながら、由美は含み笑いをしたけど、私は微笑まず、まだ俯いたまま。

ん？ おかしい。困った時、いつも、彩は俯いて唇を尖らせる。

「タケルの部屋でもなさげだねえ。もしかして…あんたら行くところ行っちゃったとか？ 制服のままホテルはヤバイよ」「

つい、追求したくなるのが私の悪い癖。

「いや。そう…じゃなくって…」

首を傾げながら、私はまた彩の顔を覗き込んだ。

「タケルの部屋でもホテルでもなかったら、何処で…したの？」

由美はごまかせない。でも、由美だからいいや。

「ちょっと、由美」「

「ど、どうしたの？」

私は由美の耳を両手で覆い、ショッピングセンターでの事を耳打ちした。

彩のキャラから想像出来ない話の内容。私の耳から両手を離れた彩に啞然を向けた。

「そ、そんな過激な事。そ、それに、昨日の話題は制服デートだよ。それ制服デートじゃなくて制服エッチじゃん。しかも場所が…」

「おお、由美。今日も相変わらず可愛いなあ！」

振り返れば、スケベのタケル。

「この野獣！」

「エッ？ な、何？ おめえ、また何かしたのかよ？」

意味が分からず驚いたタケル。傍の雄二を見ると、雄二は慌ただしく首を振った。

「おめえ、知ってんだろ？ 最近、俺、大人しいの」

真面目ぶった雄二の表情にタケルが吹き出した。

「はいはい、極々最近な」

「そうそう、極々最近、俺は変わったの」

私と彩は溜息と笑顔を合わせた。

赤ワイン

「ありがとうね。タケル君。私、今日、休みなんだけど、仕事の傍ら勉強してて、これから介護教室があつてね。旦那も出張行つてるし。あの娘が帰つて来る時には家に誰もいないから。昔、ポストに鍵入れてて空き巣に入られた事があつてね。だから、学校まで鍵渡しに…」

看護師をしていると言う由美のお袋さん。ベージュのロールアップを白衣に変えた姿も見たい。歩道に並んだ街路樹が列を成した影を車道に落とす。マラソン人を軽やかに追い抜かす車。カーステレオから流れるジャズが車内の甘い香りを引き立たせていた。

「なら、丁度良かったですよ。俺、出て来て」

由美のお袋さんも何度か給油したことがあるバイト先のガスタンドへ道案内は不要。ワインレッドに染まった爪。袋さんはジャズに合わせて指をハンドルにタップさせている。

「彩もいい彼氏捕まえたねえ。可愛くつていい娘でしょ？ 彩は。うちに遊びに来た時、いつも私を手伝ってくれるのよ」

彩らしい。あいつは、何か年上の女の人からモテる素質があるのかな？ 助手席で苦笑いする俺。

「普段は…喧しい娘ですよ。彩は」

「喧しいって言うのは、それだけ明るくて元気があつて彼氏を飽きさせないって事じゃない」

「おめえ、洒落んなんねえよ!」。 「いつやらしい男!」。 「チユーしたかったんだもん!」。 普段、あいつら女子が放射する喧しさ、品のなさ、図々しさ、騒然とした日常の中で浴び続ける稲妻のようなスペクトル。 落ち着き冷静な大人の女性は、それと全く掛け離れた温和で柔軟な曲線を与えてくれる。これが、女性と女子の違いだよ。 あいつらキャピキャピ女子はもうちょい頑張れよ。 そうだ、由美のお袋さんだったよな。 忘れてた。

「彩はどうか分かんないですけど、俺は初対面のお母さんに相当猫被ってますから。 普段はこんな真面目じゃいですよ」

袋さんが笑う。 赤い口紅。 一瞬見せた無邪気な横顔もまた良い。

「由美が言ってたわ。 タケル君は女の子に慣れてて、いつも優しいって」

「慣れてる? 優しい? 俺、どっちかって言うと…女の子に合わせるのが苦手な方なんですけどね」

信号で止まる車。 少し青み掛かった二重瞼にマスカラで整えた長い睫毛。 運転席から透き通った瞳が俺に流れて来た。 由美…。 もうちょい早くお袋さん紹介してくれよ。

「やたら女の子に合わせて優しさ振り撒く男の子より、一番優しくされたい、一番話を聞いて欲しい時に、どうした? って肩叩いてくれる男の子に女の子は弱いよ。 要は…数よりタイミングね。 タイミングを分かっている男の子を、女の子は優しくて女の子に慣れるって思うもんよ。 タケル君は…タイミング外さないタイプでしょ」

恥ずかしくなり、お袋さんの瞳から目を逸らす俺。

「タイミング…？ はあ…？」

俺が自分の頭を撫でると、信号が青に変わり、車が走り出す。

「でも計った事ないですよ。そんなタイミング」

まだお袋さんが笑ってたから、俺は苦笑いした。

「なら、モテる素質があるんだ。格好いい上に、女の子に慣れてて優しい。他の男の子が羨ましがるよ」

「いつやあ…」

俯いて鼻を擦った。

お袋さんは褒めるのが上手い。これも大人の女性の嗜みだろう。

「由美。最近、学校でどう？」

何気に、お袋さんが話題を変えてくれた。

「頼りになる娘ですよ。由美は。いつも、俺、世話になって、よく彩の事も相談するんすよ」

運転しながら、お袋さんがチラッと俺を見た。

「そうなの？ あの娘、そんな相談なんかに乗ってくれるような娘？」

「え、ええ。俺の友達の雄二って奴も智喜って奴も由美を頼りにしてますよ。あいつの方こそモテルんじゃないっすか？」

苦笑いしたお袋さん。髪を軽く掻き上げた。

「そうなんだ？ 家じゃあ…。最近、あの娘、難しくってね。今朝も、私と喧嘩して家飛び出して行って。あの娘、家に鍵忘れてんのよ。何度か校門の前で、あの娘にメール打っただけどね。拗ねてるのか何だか？ メール返して来ないし」

拗ねてはなかっただろう。ただ爆睡中の由美。メールに気付かなかったのは確か。お陰で、俺はお袋さんに送って貰えた。由美と喧嘩があ…。もしかして、鍵なんてのは口実で、由美の事を気に掛けたお袋さんは学校まで由美の様子を見に来たのかも。だったら、優しいお袋さんだ。こんな綺麗で優しいお袋さんと喧嘩した由美が悪い。以上！ また信号で車が止まり、交差点越しにバイト先の看板が見えた。

「タケル君。今日、バイト何時に終わるの？」

「10時です」

何気に答えた。

「じゃあ、ご飯はそれからなんだ。お腹空かない？」

「空きますけど、もう慣れちゃいました」

「良かったら…。今晚、うちでご飯食べない？」

「えっ？ いいんすか？」

「うん。来て来て」

お袋さんが俺の肩を軽くタップした。友達のお袋さんからの誘い。何の問題もない。

「はい。じゃ、お伺いします」

「うん。じゃあ、バイト終わったら電話して。迎えに行くよ。車、降りる前に携帯の番号教えるよ」

ラッキー！ 綺麗なお母さんと飯食える。食い気以外にそんな色気も、なきにしもあらず。信号が青に変わった。由美、家居るか？ お袋さんと喧嘩してんなら、今夜くらい夜遊びして来いよ。

678

「ごめんね。家にまでお邪魔しちゃってさあ」

「全然OK！ こう言う時はお互い持ちつ持たれつ。今度、私がお母さんとトラブったら由美の家に避難するよ」

私のベッドに着いていた後ろ手を外し、由美は前のめりになった。

「もう、いつくらでも来て。朝まで話聞いてあげる」

テーブルで髪を括り直す私。

「朝まで寝かせないよ」

「男に言っただけだよ。その台詞」

吹き出した瞬間、下からお母さんの声が聞こえた。

委員会が終わわり、教室へ戻ると、由美が無くしたはずの鍵をチラチラさせていた。

「あったの？」

「落としたと思ったから焦ったよ。ポストにでも入れといてくれたらいいのにさ。わざわざ、うちのママ、学校まで持って来るんだから。下で…タケルがうちのママに会ったみたいで」

自分の机に向かっていて私。机の手前で由美に振り向いた。

「タケルが？」

「うん。で、タケルが持って来てくれた。さっき携帯見たら、何度か、うちのママからメール来てただけだ。彩が委員会行った後、私、熟睡してて気が付かなかったよ」

「でも、真紀さん、よくタケル分かったよね？」

机から取り上げた鞆を肩に掛け、私は由美の机に近寄った。

「この前、うちのママにタケルと一緒に帰っていると見られて。それで…あの子、彼氏？ って聞かれてさあ。違うよ！ あれは、彩の彼氏で、タケルって子だよって」

一拍して笑い声を上げた。

「ハハッ！ そう言う事ね。でも家おいだよ。直ぐ近所なんだし。話聞いてあげるよ。由美の分も夕飯作つといてって、お母さんにメール打っちゃたしさ」

薄らと涙を浮かべ、唇を奮わせる由美。

「ちょっと、そんな事で泣かないでよ」

由美の握り締めてたハンカチを奪い、私は由美の涙を拭く。

「親子喧嘩なんて、うちでもしよっちゅうだしさ」

「ありがと…。マジ嬉しい」

俯いて微笑んだ私。由美にハンカチを返し、由美の腕を撫でた。

「帰ろ」

風邪気味で…。バイト中、楽しみが先行した挙げ句の仮病。いつもより1時間早くバイトを上がらせて貰った。

彩に「終わったよメール」打たなきゃ…。ま、由美の家で打と。由美が居そなのが…。邪魔だよなあ。ぶつぶつとお袋さんに教えて貰った携帯番号を押す。

お袋さんに連絡が着くと、10分もせず車 came。

「すみません。今日、スタンドが暇で早く上がらせられて」

乗り込んだ車。夕方の甘い香水の香りから美味そうな焼鳥の匂いに変わっていた。

「ご苦労様。あれから、近所の焼鳥屋さんに電話掛けて焼鳥予約しといたの。9時に取りに来るって言うておいて良かった。まだ由美帰ってないけど…二人で食べてましょ」

由美まだ帰ってない？ あいつも気が付く奴じゃん。ゆっくり夜遊びに深けつてくれ。車が夜道を走り出す。

「ちよつとくらい良いでしょ。焼鳥に合うから」

家に着き、キッチンに通されると、お袋さんは冷蔵庫から取り出した深緑のボトルにクルクルとコークスクリューを擦じ込み、慣れた手つきでポンとコルク栓を抜いた。

「はい、これ」

背後の食器棚からグラスを取り出し、俺に差し出すお袋さん。

「うわ！ 俺、初めてっすよ」

摘むグラスが若干奮える。ただ微笑んだお袋さんは俺のグラスに真っ赤なワインを注いでくれた。何か、映画みたいじゃん。こんな感じでいいのか？ どう気取ってみても、ビールを注ぐ手と変わらない。袋さんにご返杯した後、お袋さんが俺のグラスに自分のグラスを着けてくれた。チーンと響く音は、大人への入口が開いた合図とも思っておこう。

「頂きます」

生まれて初めてのワイン。渋い風味が口の中に染み渡る。まだ飲み込まず、舌の上で転がす。グラスの越しに袋さんと目が合い、俺はその成熟感を呑み込んだ。

「どう？ 美味しい？」

お袋さんは指で包んだグラスをテーブルに置く。

「ビールと違って何か凄いしつとりしてますよね」

全く酒の味なんて分かんないくせに。

立ち上がり、テーブルで、焼き鳥を大皿に盛り付けたお袋さんは、「これも食べて。介護教室から帰ってきて直ぐ作ったのよ」。ツナサラダとおにぎりを覆っていたラップを取り去った。

「頂きます」

先ずは焼き鳥に手を伸ばす。

「あ、タケル。もう敬語なしね。彩みたいに気楽に喋ってよ」

斜め向かいの椅子にお袋さんは腰を下ろした。是非是非。焼き鳥を食い干切りながら頷いく俺。

「は、はい。じゃ、じゃなくて…。うん、分かった」

「そうそう、それでいい」

足を組み、お袋さんはグラスを掴まむ。

「うち、男の子がないから。一度、タケルみたいな男の子と飲んでみたかったのよね」

グラスに口を着けるお袋さん。

「俺なんかで良かったら…いくらでも。あ、そう言えば、俺、お袋と飲んだことないなあ」

掴まんだグラスを二度、三度回し、口を着けた。

「たまには一緒に飲んであげたら？」

お袋さんがグラスのワインを一気に飲み干すと、俺はお袋さんのグラスにワインを注いだ。

「でも、タケルのお母さんって、ほんと綺麗ね」

「えっ？俺のお袋知ってんの？」

意味深な表情で、お袋さんは自分の髪を摘んだ。お袋の店に来た

んだ。

「由美のお奨めでね。いつもタケルのお母さんの店でカットして貰ってるの」

「じゃ、いつもお世話になってます」

軽く会釈し、摘まんだグラスを口に着け、ワインを転がした。

「うちのお袋も由美の事、明るくてしっかりした娘だつて褒めてたよ。あ、その時、お袋も由美を俺の彼女つて勘違いしたっけ」

唇に指を着けて、お袋さんは笑いを押さえる。

「外面はいい娘なんだけどえねえ。由美。家では生意気なだけ」

お袋さんもワインを口に運ぶ。

「由美と…何があつたの？」

お袋さんに喧嘩の原因を聞いてみた俺。残ったワインを一気に飲み、グラスを空けると、お袋さんは俺のグラスにボトルを傾けた。

「私が…。無理に由美を温泉旅行に誘ったから、由美が、イヤだよそんなのって。それで喧嘩なつてねえ…。バカな親子でしょ？」

余りにも他愛ない理由に、軽く吹き出し、俺は焼き鳥を口から溢しかけた。

「お、温泉？ 俺的には、お袋と二人きりで温泉なんて無理だけど。

女同士って…また違うから。一緒に行ってもOKかなって思うけどなあ」

「まあでも、今考えたら、由美はもう高校生なんだし。小さい時みたいにはいかないわよねえ」

少し視線を遠くに飛ばし、グラスに口を着けた後、お袋さんは立ち上がり、テーブルを離れた。意外に由美はお母さんに甘えるタイプかと思ってたけど。違うみたいだ。ワインを啜っていると、お袋さんが帰ってきた。

「これ見る？」

含み笑いをするお袋さんから、なににない？ と、俺は分厚いアルバムを受け取った。白の表紙がやや黄色く変色している。アルバムを開いた瞬間、電話が鳴り、再び、お袋さんはテーブルを離れた。…

「行ってやれ行ってやれ！ 温泉くらいさ」

お父さんは何でも遠慮なくぶっちゃける由美のファン。お母さんの性格と由美の性格って似てる。二人を見比べて、私はいつも一人笑います。ご飯が終わった後、その由美からビールを注がれて、お父さんは上機嫌。私はお父さんがまた下らない親父ギャグに紛らせて私に関する余計な話をしないか、確り、傍で監視していた。

「でもさあ、高校生になって親と旅行？ 由美姉も辛いよ。あんま

り口説くされたら、そりゃ喧嘩になるよ」

私も妹の縁と同意見。

「まだまだ、子供扱いされちゃってんだよね。私」

由美はスプーンでアイスを救って口に入れる。

「あ、そうだ、由美。今度、俺の古い友達連れて、おまえのバイト先の居酒屋行くから場所教えといてくれよ」

お母さんが流し台から振り返った。

「和巳と一緒にバイク見てた…。あの…」

「誠」

「そうそう、誠さん。悪やった頃の和巳がボコボコにやられた人だったよね？」

エプロンで手を拭きながらテーブルに近付くお母さんと不自然に眉を掻くお父さん。私達は顔を見合わせて微笑んだ。

「お父さん、ボコボコにやられちゃったんだ？」

私が笑いながら尋ねると、お父さんが口に着けかけたグラスを下ろした。

「ボコボコは言い過ぎだったの。勝負がもつれて、最後の最後で…優しい俺が負けてやったんだよ」

お父さんとお母さんが目を合わせて微笑んだ。

「和ちゃんのライバルねえ。私：会ってみたいよ」

「おう！ 来週、おまえの店行くから。でも、野郎に惚れんなよ。由美は俺のもんなんだから」

お母さん、緑、私、三人は顰蹙を合わせた。変な親父に笑ってやってくる優しい由美。

「由美。もう今晚はうち泊まっちゃいなよ。10時回ったからさ。私が、真紀ちゃんに電話しといてやるから」

「由美、そうしよそうしよ」

隣に座る由美の腕を引っ張り、私は由美を促した。今夜は寝かせない。

「じゃあ、お願いします」

急に改まって、由美は頭を下げた。

「由美姉、今晚は私の部屋で寝てよね。ちょっと…聞いて貰いたい話あるから」

私は、ダメダメ！と、緑に首を振り、由美の腕を抱き寄せた。

「じゃ、俺と寝よっか？」

優しい由美は笑ってくれたけど、バカ！　のお母さんの一言で消沈した恥ずかしい親父。

「緑って…好きな人いるの？」

きつと緑が由美に聞いて貰いたい事って、その類いの話だろ。なら、今ここですればいい。今夜、緑が枕を抱えて私の部屋に来ないように、私は先手を打った。アイスを頬張る緑。恥ずかしそうに頷いた。

「緑、好きな人いるんだ。学校？」

緑は由美に首を振った。テーブルを離れた母さん。由美に目で合図しながら電話を掛け始めた。空のグラスをテーブルに戻すお父さん。

「全く、皆、色気付きやがってよ」

「そりゃ、和ちゃん。この歳になれば、皆、色々あるよ」

真木さんに連絡が着いた様子。電話で真木さんと話すお母さんをチラチラと見ながら、由美はお父さんのグラスにビールを注ぐ。

「安心しろ。由美の男は俺が見つけてやるから」

「で、由美、今夜うちで…」

お母さんの声を聞きながら、私は面白半分に緑を追求する。

「学校じゃない？　まだ塾にも行ってないんだし。それ、どこの誰

よ？」

アイスのカップに視線を落とす緑。電話で喋るお母さん。

「タケル君」

緑とお母さんの声が重なった。どう言う事？ 私と由美は顔を合
わせた。

「エーッ!？」

振り返り、驚くしかない俺に手を振りながら姉貴が迫る。

「何？ 驚いた顔して」

「いや、そりゃ、驚かない方が…」

「おかしいよね」

俺の言葉を取った姉貴。バックと紙袋を揺らしながら、エスカ
レーター横のベンチに腰を掛けた。

「姉貴…。店：休みなの？」

「な、訳ないよ」

姉貴に続き、ベンチに座る俺。姉貴はバックからガムを取り出し、俺に差し出した。

「な、訳なかったら…」

ガムを一枚抜く。

「何で、ここに？」

ガムを口に入れ、姉貴はクチュクチュと口を動かす。

「そう言われると思ったからさ。声掛けるのどうしようかと思ったんだけどねえ。でも…タケルの顔見たら…」

妖しい微笑みと視線を俺に流す姉貴。何か悪い予感が…。

「我慢出来なかった！」

息なり、姉貴が抱き着いてきた。

「うわ！ あ、姉貴！ 苦しい。苦しいって」

フフフ…。無邪気に笑い、俺を離す姉貴。俺は首を擦りながら周りを見回す。

「んな、人前で何ってんだよ！？」

ガムを剥いて、口にほり込んだ。

「フン！ 久しぶりなんだし、照れなくっていいじゃない」

ツンと顎を上げてソッポを向く。昔から変わらない姉貴の素振り。

「マジ、姉貴、何してんの？」

姉貴はゆっくりと顔を戻した。

「仕事…。辞めちゃってさ」

「はい？」

「お母さんには…内緒だからね」

少し唇を尖らせた姉貴の表情が声と一緒に沈んだ。しょうがねえな。俺はお袋には言わない事を決めた。

「んな…。言える訳ねえよ」

「ありがとう！ タケルーツ！」

「また！ 何！？」

顔を上げ、また息なり姉貴が抱き着いて来た。その肩越しに紙袋をぶら下げ、例の澄んだ目で俺を睨む妻。ち、違うよ！ 違うって。彩！

「何か、気がおめえなあ」

部屋のクローゼットの前、俺のシャツの襟を直しながら、彩は俺を見上げた。

「でも、ママは笑ってたよ。タケルも顔見せといた方がいいって。それに相手は父親なんだし、いつ会っても自由だからって。ヨシ！

OK！ 格好いい」

いつもより大人っぽいベージュのVネックラインのブラウスに落ち着いた紺のフェミンのミニスカート。彩が軽く唇を着けた。そんな大人っぽい格好で上目遣いされちゃあ。また、したくなるじゃねえか。今日は朝から5回もしたのに…。俺はその不純な思いを自分の腰と一緒に彩から引いた。

「親父は…俺より彩に興味深々なんだよ。だから…」

「だから、気合い入ってんだよ。行こ行こ」

俺の手を引く彩。

「あんまり気使つなよ」

「タケルが一緒だから安心」

俺と彩は部屋を出た。

「それ、マジな話？」

俺は後ろ手を着き、まともに顔を顰めた。

「うん…。今朝、美紀から聞いて…。タケルに確約取ってって」

昼休みの体育館裏。雄二と智喜と一緒に、いつものようにニヤケ顔を付き合わせてボーイズトークをしていたら、息なり、雄二が、「親父さんが、この土曜にタケルと彩を自宅に…」と話してきた。

「確約って？ また、おめえ…」

後ろ手を着きながら、智喜に顔を振り、助けを求めた。

「でも、しょうがねえよな。まあ、親父さんも息子の彼女には興味深々だろうし」

智喜に向かって後ろ手を離した。

「やっぱそうだろ？ 親父は俺なんかより彩の方だつてよ」

智喜が眉を掻く。

「そりゃ、娘の彼氏、雄二に会った後は息子の彼女、彩もって思っただろな」

また後ろ手を着いて溜息を吹き上げた。

「この話…彩も知ってんの？」

頭を下ろし、俺は雄二を見た。

「うん、多分。美紀から話行ってると思う」

「彩の事だ。この話聞いたら、大喜びするぜ。」

お弁当の後、私の机を囲む由美と美紀。

「マジ!? 行っているの? 今度の土曜だよな」

「うん、彩とタケルが良かったら、連れて来いって」

「彩、良かったねえ。いい話じゃん」

私の手を揺する由美。

「でも…何か緊張しちゃうなあ!」

そう言いつつ、私は完全に笑顔で背伸びした。

「彩の顔見てたら全然緊張ないじゃん」

その通り。私の嬉しがつてる顔を指差して笑う美紀。

「ねえねえ、タケルもこの話知ってるの?」

由美が美紀に聞いてくれた。

「うん。朝、雄二に言ったから。雄二からタケルにいつてると思っ
よ」

タケルの事だから。この話聞いたら、嫌がるだろうなあ。

「全く進展なしさ。週に1、2回、部屋にお邪魔するだけ。て言う
か、今は何も無い方がいいよ。何か起こして…折角のいい感じを崩
したくねえからさ」

苦笑いして首を撫でる智喜。小夜子さんとはまだ微妙な関係みた
いだ。雄二が智喜に上半身を寄せた。

「その辺のジワジワ感がゆっくりしてて大人の恋愛って感じじゃん」

「んな、大袈裟なもんでもねえけどな」

智喜が後ろ手を着く。

「で、この前は、どんな香り…」

「タケルーツ！」

いつもの俺の質問を途中で遮る由美の声が響く。振り返ると、い
つもの3人が騒々しく俺達に迫って来た。

「あいつらはジワジワ感ゼロだな」

俺の小声に、またうずくまってウケる雄二と智喜。

夫の部屋。両脚を床に伸ばし、ベッドの縁に背中を倒した私。美味しい…。被さってきた夫の唇を堪能する。その粘液と熱波の中で床に転がる小さな紙袋を引き寄せ、私は夫から見えるように、その紙袋を私の顔と夫の顔の隙間近くで掲げた。

「着けてみる？」

夫の視線がその紙袋に流れる。

「うん」

返事に合わせて唇と舌を離し、夫は私から体を起こした。

紙袋から下着が入ったナイロンバッグを取り出した私。傍で夫はただ黙って私の手元を見詰めていた。ナイロンバッグ剥いた私はライトピンク地にダルメ柄のＴバックショーツ、ショーツとお揃いのシームレスタイプのブラを夫に見せた。

「いいじゃん」

「でしょ？ 何か凄い紐みたいなやつもあつたけどね…。余りにも過激で」

夫にショーツを渡す。

「こつこつ言う可愛い系のが…」

夫は目の前でショーツを開けた。

「いいんじゃない。あんまり過激なのもさあ」

「うん。ブラはこんな感じ」

ブラを胸に当てて、夫に見せる。

「すっげえいい」

「じゃ、着けてみましょう」

「う、うん」

立ち上がった私に、少し、顔を強張らせた夫がショーツを返す。プロポーズを受けて、事実上、タケルと結婚し、彼の妻になった私。特別な日には特別大胆な事がしたい。

俺の真正面に立った妻。髪を耳に掛け、はにかんだ笑顔を見せる。デニムのミニスカートのホックを外してジッパーを下げた。おお、いいじゃんいいんじゃない。いつもより鼓動が高鳴る。そして、妻は長い両脚をスカートから抜く。やるねえ！ 彩さん！ 飛び掛かりたい。片膝を抱えて早まる気持ちを必死で押さえる。軽く息を吐き、背中をベッドの縁に着けた俺は冷静を死守しながら妻の絶景を眺めた。

「やっば何かハズいねえ！」

白地にブルーのピンストライプ柄。パンツに親指を掛けた妻がその動作を止めた。こんな時はどんな言葉を掛けたらいいんだろ？
そう可愛く恥ずかしがられると、オープニングの興奮が和らぎ、逆に、こつちが恥ずかしくなる。下唇を擦り、俺は少し笑って視線を落とした。

「ヨシ！ いったちやお」

何も言わなかった事が反って効果的だったようだ。男は黙って……。妻は親指に掛けたパンツを足元まで下げた。うっほ！ 相変わらず見事なシャドー！ 滲みかけたスケベ面を咳払いで消し去る。男は黙って……。顔を薄いピンクに染めた妻。また垂れ下がった前髪を耳に掛け、足元まで下がったパンツから右脚を抜き、左脚も抜いた。少々長い俺の沈黙に痺れを切らしたのか。それとも極限まできた恥ずかしさを紛らす為か。妻は脱いだパンツを丸め、ウラ！と俺の顔面目掛けて投げつけた。お！ と俺はそれをナイスキャッチ。

「それ、広げんなよ！」

妻の忠告。言われたらやりたくなるのが普通の人間。兩人差し指と親指で、俺はそのクシャパンを広げ、なるほど……。と中を覗き込む。

「洒落なんねえっての！」

ノーパンの妻。俺からパンツを引つたくると、背後にポイと投げ捨てた。

「あ！ 勿体ない」

「何が、勿体ねえんだ！？ おめえ、しっかりこっち見てろ！」

はいはい、見ますよ。ライトグレーのチエニツクにノーパンの妻。いいねえ…。俺が見とれていると、妻は割と速い動作でＴバッグシヨーツに右脚、左脚を通し、その恥ずかしい茂み部分までサツと上げた。初めて見る妻のＴバッグ姿。

「似合っじゃん。可愛いよ」

「マジイ？」

下を向いて、妻はＴバッグを確認した。

「うん、マジ似合っよ」

髪を掻き上げながら、妻は照れ笑い見せた。

「上も着けよつか？」

断る理由なんて何もない。妻はチエニツクを脱ぎ、ピンストライプのブラを外した。そのＴバッグに小振りのオツパイ。溜まらん。後ろ向いてブラを恥ずかしそうに着ける姿もまた…。

「どっつ？」

慣れた手つきで真新しいブラを着け、妻は俺に振り向いた。装着完了。微妙に幼さが残る体に大人を纏った16歳の妻。少し肩を強張らせ、指先をピンツと伸ばして直立。括れラインは幼くないか。

見事だ。

「ゲキいいんじゃない！ ちょっと後ろ向いて」

「うん」

前のめりになった俺の眼前で、しっかりとTの字が妻の尻に食い込んでいる。

「カツワイイ！」

「ハズいつてのー！」

限界だった私はのけ反った夫に飛び込んで唇を落とした。

「マジ、可愛いよ。彩…」

「本当に…?」

「ああ…」

夫は私の乱れた髪を耳に掛けてくれた。

ダルメ柄

甘味な夫の唇と舌。私は夫が競り上がるベッドにそのまま吸い寄せられた。結婚して初めて、夫婦の慣熟な性交が始まるうとしていた。

ベッドで俺に覆い被さった妻。自分だけが際どい下着姿であるの事に不平等を感じた様。重なった唇を尖らせて俺を脱がしにかかる。

私の中には、まだ、あのトイレでの大胆なセックスの余韻が残っている。だから、その余韻を凌駕するような刺激が欲しい。もっと乱れたい…。唇と舌を離すことなく、夫のボタンを外す私。

両手を妻のＴバックの中に滑り込ませた俺。

「ウッ」

妻は小さく漏らす。俺は左手で妻の尻を撫で、右手の中指でその肛門をなぞる。

「ウウッ」

第三ボタンまで進んだ妻の手が止まりかける。いくよ。彩…。もう既に、涌き出る蜜液によって潤う肛門。蠢く中指がその源泉に導かれる。

「アハッ！」

全てのボタンを外し終わった妻。俺の中指に引き上げられるように尻を突き上げ始める。

体育館裏で、ボーイズトークに水を刺された俺達。苦笑いのまま、女三人に囲まれ、また強制的に合コン仕様の男女交互の輪を作られる。

出鼻は、当然、俺と由美のお袋さんの話。呆れながらも饒舌に話す由美に、俺以外は笑顔を領かせる。雄二と智喜には報告済みだけど、参ったなあ…。俺は終止俯いたまま。

「で、タケルは2時くらいまで由美のお袋さんに付き合ってたんだよな？」

雄二がニヤケ面を向けたと同時に、俺は頭の後ろを軽くトントンと叩きながら顔を上げた。

「朝…。気が付いたらソファで寝てたよ」

「でも、由美のお袋さんって優しいよな。夜中まで付き合ってくれなんてさ」

智喜……。どっちかって言うと、俺が付き合わされたんだけど……。と、反論出来る状況じゃない。

「由美に似てて綺麗で優しくって。最高のお母さんだよ」

上手いこと彩が答えると、一斉に注目を浴びた由美。

「い、いやいや。外面だけはいいんだって。うちのママは。も、もう、昨日…タケルとママに乗せられちゃって、今週末はママと温泉だよ。私」

また可愛い膨れ面を俺に向ける由美。皆がクスクスと笑う。最近、由美も色々お疲れだろうし。温泉で、のんびりお袋さんに甘えてこいよ。でもいいよなあ。あんな綺麗なお袋さんと露天風呂。混浴だったら俺も一緒に……。厭らしい光景が頭に浮かんだ瞬間、彩と目が合い、不自然な咳払いをする俺。

「で、次は、美紀のお父さんだからね。タケル」

俺の隙を突いて、話を切り替えた彩。次は、俺が一斉に皆の注目を浴びる。由美のお母さんと騒げて、美紀のお父さんと騒げねえ、なんて言えねえ。美紀のお父さんって俺の親父なんだけど…。上手いタイミングと言葉使いで、また彩にやられた。

「タケル。マジ来てよね…。私の家でも盛り上がってよね」

俺に唇を尖らせた美紀。変にモテてきた。

「おう、行くよ。もう…禁酒したけど」

「それ、親父さんの前じゃ無理だろ」

幸せそうに笑い出す雄二。言ってる。

全裸にされた俺。妻に覆い被さり返し、唾液交換を施しながら妻の背中に右腕を忍び込ませた。

夫のその要望に応じ、少し背中を浮かせる私。ブラのホックを、夫が先で弾く。

妻のブラを取り去り、可愛い乳首に軽く唇で挨拶した。次の狙いは愛蜜が染み込んだダルメ柄のTバック。俺は徐々にその生地に向かって唇と舌を落としていった。

夫が落ちてく……。自分の体を私の両脚の間に入れた夫。Tバックで脚開いてる……。こうなることは分かっていた。けど……。恥ずかしい。やや下唇を噛んで笑顔を作り、私は夫と目を合わせる。

まだ子供ばさのこる表情と大人のＴバックからはみ出す陰毛。その妖出されたアンバランスに、俺は妙な色っぽさを感じた。「幼稚と円熟ほど…噛み合いがいいもんねえよ」。雄二が言ったのはこの事か…。両膝を押し下げ、妻の股間に平伏した俺は、まるで女神に土下座する下部の様。参った…。女から生まれた男。どう足掻こうが女に敵わない。

太ももを撫で上げ、Ｔバックのサイドギャザーに入った夫の暖かい手。その手を私のお尻に回わそうとする夫に、私は少し腰を浮かて応えた。気持ちいい…。夫は柔らかくお尻を揉みほぐしてくれた。

俺は空いた左手を蜜液が染み込まされたＴバックのクrotch部に滑り込ませた。もう陰毛まで濡れてる。

タケル…。濡れてるでしょ？ 早く、あなたを迎えたい。更に大きく脚を開ける私。

そのプロセスに従わせようと、逸る気持ちを押し殺す。妻の尻から右手を、サイドギャザーから左手を抜き、小さく深呼吸をした俺。妻の胸元辺りまで競り上がり、今度はフロントギャザーから右手を入れる。先ず、薬指と人差し指で妻の大陰唇を押し広げ、むにゅっ

と小陰唇を浮上させた。ぬるぬる過ぎて、気を抜けば間違いなく指が滑る。次に、陰列に這わせた中指を膣に押し込んだ。

「アツアツ！」

その感覚と共に声を漏らした私。夫の髪を夢中で撫でる。タケル…。熱いよ。あなたの指…。

くにゅぶちゅと膣内で蠢かし、十分に潤わせた中指を最終地点である固く剥き出された妻の小さな突起物へにゆるっと滑り上げた。

「ウアツ！」

私のクリに生命を与えようとしていた夫。して！ タケル！ 微弱な吐息に合わせて揺らめいていた私の腰が高く跳ね上がった。

クロツチの湿りと地肌の濡れに挟まれた手と指。いい感触。俺は少し手を浮かせてクロツチの中を覗いた。あ、泡立ってる！ 愛らしい妻の小陰唇に俺の下品な中指を挟んでみる。ぬちゅぬちゅと滑らせ、クリに戻しす。窮屈そうに押し込まれるクリに更に振動を与えた。

「アツ！ イイツ！ 凄いつ！ アーツ！」

私は堪らず枕から頭を上げた。

「タ、タケル…。あ、愛してる…。あああ、愛してる！ アアアア…」

「彩…。愛してるよ」

右手を抜き、顔をＴバックに近付けた俺は妻の愛蜜が染み込んだクロツチを吸った。まだまだ、いかせない。まだまだ、遊びたい。そして、フロントギャザー部分を吊り上げ、クロツチを妻の陰門に食い込ませる。おお！ 可愛い食い込みが！

「ギャー！ ハ、ハズいつ！ タ、タケル。それ…あり？」

急な食い込みに驚いた私。何だか、夫を見下ろしケラケラ笑った。

「まあ、折角なんだし…。いいんじゃない？」

夫と目が合う。割と夫は冷静。

「毛…はみ出してるんじゃない？」

「はみ出してるねえ」

「わー！ もうっ！」

叫んだだけで、隠そうとしない私。結構、楽しんでた。もう好きにして下さい。あなたの妻ですから。私は枕に頭を戻した。

観念した妻を見て、内心、ホツとした。「はみ毛」なんてＴバック履いた時点ですてる。俺が眺めてるのは「はみ陰」だ。クロッチからぼつてりとはみ出た大陰唇。右の肉から舌を着ける。

「クッ！」

声と共に浮く妻の下半身。

「フアアアアア…」

右肉、左肉…。万遍なく唾液でベタベタにしてやる。まだまだいけるな。フロントギャザーを更に吊り上げる。どうだ！

じんわりにゆるにゆると妻の小陰唇もクロッチからはみ出し、クリの形状も浮かび上がった。厭らしい。何の遠慮もなくはみ出た小陰唇を啜る俺。生きがいい…。ふるんふるんだ。ビートを加えた舌先でクロッチの生地越しにクリを突いてやる。

「ウーン、ハアア、ウーンアアウ…」

何とも悩ましい妻の音が漏れた。よし、もういいだろ。窮屈になりすぎた妻の陰部を解放させてやる。俺は指をＴバックのサイドに掛け、妻の長い脚からＴバックを抜き去った。出た！ 熟成しきつ

てる！

その濡れ汚れたTバックを、夫は目の前にぶら下げて眺めている。

「ウラッ！ おめえ、コラッ！」

慌てて上半身を起こしてた私は、それを夫から引つたくる

「おめえ、もういいってんだよ！」

それを丸めてテーブルの向こうに放り投げた。

「あー！ さつき、履いてるとこあれだけみたんだから…生脱ぎしたやつも見せてや」

私は夫を薙ぎ倒した。

「生脱いだやつは別物！」

夫に逆襲を始めようとする私。

「彩…。ごめんね…。巻き込んだみたいでさあ」

待ち合わせた駅前のコーヒーストップ。テーブルを挟んで、美紀

が俯く。

「彩だけじゃねえぞ……」

アイスコーヒーを吸うタケル。

「やっぱ、ニゲー」

「無理してブラックで飲むからよ」

容器のキャップを開け、タケルのグラスにシロップを注いでやる私。美紀と目が合い。お互いクスツと溢した。

「雄二は…お父さんとお母さんと何時に店来るの？」

初めて雄二のご両親に会う美紀。さきつから、ストローをクルクル回して落ち着かない様子。美紀がご両親に会う場所は由美と智喜のバイト先。全て、タケルが段取りした。

「7時」

タケルは腕時計を見た。

「今夜はあいつの方が緊張するんじゃないか」

そう言えば、私がママと初めて会った夜、終始、タケル緊張気味だったような。こう言う対面式は男の方が緊張するみたい。

「ありがとう。タケル。今夜は皆と一緒にだからマジで心強いよ」

美紀の表情が明るくなった。

「雄二の親父さんとお袋さん。親父の友達で面白くって優しい人らだ。何も心配する事ねえよ」

乱暴に玄関のドアが開く音。ただいまあ！ おじやまします！

どっかで聞いた声。結構、酔ったから、もうどうでもいいや。二人分の慌ただしい足音が俺の鼓膜を叩き、そんな騒々しくしなくつたて、廊下から俺とお袋さんに押し寄せる。

「お帰り！」

アルバムを閉じた俺。まだ振り返らない。ま、正直言って、振り返り辛い。

「真紀さん、こんばんは」

「いらっしゃい。彩」

真紀さん？ 俺の女はそんなお袋さんと親しいの？

「タケルツ！」

どっちの声か分らない。どっちでもいいか。ここは…明るくいこ。グラスを掲げて勢いよく振り返った。

「メリークリスマス！」

「……」

んな真顔しなくても。多分、どっちかが、何やってんの？ って
言っただろなあ。

「何やってんの？」

彩だった。

「マジ、何やってんの？」

次は由美。

「あ！ 何なのもう！」

また慌ただしい足音を轟かせ、お、おめえこそ、何だよ！ 突進
して来た由美。テーブルの上のアルバムをサツと取り上げた。

「タ、タケル…。あんた、まさか、全部見たんじゃないでしょうね
？」

胸にアルバムを抱え、由美は彩の所まで戻った。

「ぜ、全部って…。色んな意味で全部かな」

ウツとワインを口から零しかけたお袋さん。

「もー！ 信じらんない！」

「子供の時のだからいいじゃない」

お袋さん、いや、真紀さんがグラスに口を着け直した。

「そう、まだツルツルのな」

また真紀さんはワインを口から零しかけた。

「も、バ、バカ！」

顔を赤く染めた由美。同じく顔を赤く染めた真紀さん。流石、親子。こう見ればよく似てる。

タケルの奴。調子に乗りやがって…。真紀さんいなきゃ、由美と二人でボコボコだよ。私は由美の手を引いてテーブルに寄った。

「いったい、どれくらい飲んだの？ タケル」

由美と並んで真紀さんの向かいに座った私。斜め隣のタケルに顔を近付けた。

「真紀さんと…。ワインを少々…」

空になったボトル二本と半分ほど減ったボトル一本がテーブルの上に並んでいる。私には、それがタケルの言う少々に値するのか、分からない。

「彩、ジュースがいい？それとも…これ？」

真紀さんがワインのボトルを両手で掲げた。

「あ、ジュースで…」

「決まってんでしょそんなの」

溜息の勢いで由美が立ち上がり、冷蔵庫を開けた。

「グレープとオレンジ、どっちする？」

「グレープ！」

馬鹿タケル。

「おめえじゃねえよ！」

由美がタケルに振り返ると、ワイングラス片手のタケルと真紀さん、二人が顔を突き合わせて笑いを堪えていた。この雰囲気だと、相当、タケルは真紀さんと打ち解けてる。ペットボトル2本とグラス2脚をテーブルの上に置き、私を見ながら、こっち？ こっち？ と、ボトルを指す由美。私は、こっち。と、オレンジを選ぶ。

「今晚、彩、泊まるからね」

グラスにジュースを注ぎながら、由美が真紀さんに言ってくれた。

「こっち泊まる事だったの？ いいよいいよ。今夜は皆でパーツと行っちゃおー！」

「えっ？ 皆って？ タケルも？」

「当然じゃない！ 大丈夫、彩は由美に預けるから。タケルはあ…私が離さない。ねー？」

真紀さんがタケルに首を斜めにして笑顔を送ると、タケルも首を斜めにして笑顔で答えた。マジ、調子に乗りやがって…。こいつ。由美と苦笑いを合わせるだけの私。

「ねえ、真紀さん。真紀さんはそんなに彩の親父さんとお袋さんと親しいの？」

グラスをテーブルに戻したタケル。

「いや、さっき電話で、彩のお袋さんの事、涼ちゃんって呼んでたから」

私も由美も、まだそこまで、タケルに説明してなかった。

「私も旦那も…。元々、こっちが地元なんだけどね。結婚して、直ぐ旦那の仕事の都合で引っ越したの。で、由美が中2の時にこっち帰って来て。それからすぐ和ちゃんと涼子ちゃんと知り合ったから…もう3年になるよね。付き合い」

私と由美を見た真紀さん。私達は同時に頷いた。

「中2の時に三崎中に転校してきて、直ぐ、彩と仲良くなって。彩の家に遊びに行くようになって、彩も家に来るようになって…って感じ」

「そんなやつてるうちに親同士も仲良くなつてね。きっかけは、今日みたいに涼ちゃんから由美を泊めてあげたいからって電話があった。その時、涼ちゃん、かなり酔ってたさ」

タケルが私を見た。恥ずかしくなった私は下を向いて笑いを堪えた。

「涼ちゃんに『お近付きの印に、お母さんも家に来て一緒に飲みませんか?』って誘われて。私も無遠慮な人間だからさ。『じゃあ、お邪魔します』って。それで、彩の家で、涼ちゃんと和ちゃん同意気投合して仲良くなったの」

「あんどきも、ママ、酔っ払って。恥ずかしかったよ」

笑って焼鳥を頬張り、焼鳥が盛られたお皿を私と由美に差し出したタケル。お腹一杯の私達は揃って首を振った。

「なるほどねえ。家族ぐるみかあ?」

タケルが真紀さんにワインを注ぐ。

「だから、タケルと雄二と一緒にだよ。由美と私は」

「そう言われると、イメージつくよ」

タケルにワインを注いでやると、タケルは傾けたグラスを照れ臭さそうに眺めた。タケルにワイン注いだの初めてだ。

グレープソーダを飲み干した由美がタケルに顔を向けた。

「雄二も私と同じ一人っ子だったよね?」

「うん。だから、兄弟が恋しいんだろなあ。真紀さん、こいつら学校でもマジ姉妹みたいだから」

「知ってる知ってる。私も…もうちょい頑張つて、もう一人産めば良かったんだけど…。旦那がどうもセックス嫌いみたいで」 ワインを口から吹き出しそうになったタケル。私は由美に注いでいたグレープソーダを零しかける。

「ママッ！」

赤くなつた由美を尻目に、真紀さんは口に手を当てて笑いを堪えていた。

「もう、本当、有り得ない親だよ。タケルのところは、確か…お姉ちゃんだったよね？」

親子喧嘩はどこ吹く風。由美も半分以上笑ってる。

「お、おう。姉貴は、もう二十歳で都内で美容師やってる」

「私さあ…。タケルのお姉ちゃんには凄い興味あんだよね。ママに似てたら凄い綺麗なんじゃない？」

ママを知ってる由美と真紀さんが頷いた。

「弟から姉貴は評価し辛いけど…。でも、中学高校ん時は…モテてた方かな」

「なら綺麗なんじゃない？」

由美が言うと、うんうん、私と真紀さんが頷いた。

「マジ、俺は評価出来ない。性格は…お袋似かな。親父や俺じゃねえのは確か」

益々、興味が湧いてきた。

「あ、でも、真紀さんみたいな感じもあるよ。うちの姉貴」

「エー！」

真紀さんが驚き、私と由美を見た。

大人の責任

吐息と体液が入り交じった一日は長いキスで幕を閉じる。ゆっくり家に入る彩の背中を見届けても、直ぐに玄関のドアが開き、彩はまた俺に手を振る。後ろ歩きしながら、俺は彩に手を振り返さず。毎日会えるのに…。名残は、その笑顔の残像と共に、次の日、彩に会うまで尽きない。これで終わり？ そんな訳ない。曲がり角の手前で、また振り返ると、二階の部屋から手を振る彩。別れたばかりなのに、今すぐ抱き締りたい。もう少し長くキスしとけば良かった。彩は…そんな女。ポケットの中で携帯が振えて、誰？ 彩は携帯を握ってないのに。空気読めない携帯を開けると、雄二からのメールだった。「家にいる。助けてくれ…」。携帯の角で頭を掻き、俺は彩にメールを打つ。「雄二が助けてくれってさ」。直ぐ、彩から返事が来た。「早く、行ってあげて」。携帯を握りしめ、二階から俺を眺める彩。「は、や、く」。彩の口が動いた。彩は…そんな女。

「おう、タケル！ 最近、女と遊び過ぎて、チンチン擦り減らしてらって話じゃねえか」

街の電気屋は大型量販店に押されると思われがちだけど、この下品な雄二のオヤツサンの店はその辺の小売店とは違う。

大型量販店に「これ修理したいんですけど…」と、テレビを持ち込んで、「テレビは修理されるより買われた方が…」って、店員から言葉巧に新品を売り付けられるのがオチ。しかし、オヤツサンは、冷蔵庫、炊飯器、洗濯機、掃除機、電子レンジなんてのは勿論の事、液晶テレビ、DVD、ブルーレイ、パソコン等の精密機器まで、ことごとく出張修理する。嘘か本当か、本人曰く、電気自動車

や発電所も修理出来るってんだから大したもの。

修理業だけじゃない。パソコンへソフトのダウンロードやセキユリティーの設定。お年寄り宅の電球や外灯の交換。子供からビデオの予約頼まれたんだけど、リモコン片手にアフトしてのお母さんへのヘルプ。ここまでならまだ良いけど、食器棚の蝶番の交換。雨樋や風呂釜の掃除。下水の詰まり取り。モテない女へ男を紹介。「それ電気屋の仕事かよ?」と、突っ込みたくなる仕事も、街の便利屋として熟してる。でも、そう言う大型量販店には決してない献身的なサービスもあって、電気製品はオヤツサンのとこでしか買わないって言う固定客から愛されてるのも事実。とにかく、仕事熱心であり、面白いオヤツサンだ。

「だから、よくオヤツサンに風呂入れて貰ってた時のサイズに戻っちまったよ」

「それ、おめえ、相当じゃねえか!」

シャッターが半分閉められた店。オヤツサンさんと笑ってたら、奥からヨツチャンが登場し、俺と親父さんは笑いを頬張る。

「あんたら、また馬鹿な事言っつてさあ」

「だって、タケルがチンチン…」

「ちげえよ、それ、オヤツサンが…」

「タケルの野郎がスケベでまた…」

「もう、いいから!」

ヨツチャンの一喝で、オヤツサンと俺は完璧に黙った。

「でえ…雄二の様子は？」

野球帽を脱いだオヤツサンさんが、恐々、ヨツチャンに聞くと、ヨツチャンは天井を見上げて溜息をついた。

「部屋籠って出て来ないよ。タケルとしか話さないってさ」

ヨツチャンは俺に視線を落とし、俺も溜息をつく。

「それってさあ…例の件？」

オヤツサンとヨツチャンが顔を見合わせた。

「タケル…。取り敢えず…上がれよ。店じゃ、なんだし」

オヤツサンが店の奥に顔を向けた。

「う、うん」

オヤツサンとヨツチャンと一緒に奥玄関に向かう俺。

「タケル、ご飯は？」

ヨツチャンが気を使ってくれた。

「今日は…彼女が…」

「ほー、そりゃ、おめえ、チンチン擦り減ら…」

「何、また馬鹿な事言ってるの！」

ヨツチャンにまた止められたオヤッサン。俺は吹き出す。

「じゃ、おめえ、風呂入ってけよ」

オヤッサンが俺の背中を叩いた。

「あ、それも…今日、彼女と…」

「そりゃ、あんた、チンチン擦り減らすよ！」

「おめえが言ってるじゃねえか！」

最後は、オヤッサンがヨツチャンに突っ込んだ。

「入るぞ」

雄二の部屋に入り、俺はベッドで寝そべる雄二を眺めながら机から椅子を引つ張り出した。何、拗ねてんだよ？ 椅子の背もたれを前に向け、腰を下ろした。

「相変わらず、ヨツちゃんのミンチカツうめえよな。彩に飯作って貰ったんだけど、思わず、匂いに負けちゃ…」

「タケル」

俺の話を途中で切り、雄二がベッドから体を起こした。

「どう思う？」

椅子から腰を上げた俺。カーペットに両足を投げ出して後ろ手を着いた。

「俺のお袋とは話終わってるみてえだけど、オヤッサンもヨツチャンも、美紀が俺の妹って事が引つ掛かっているみたいで、俺に気遣ってくれてるみてえだな。んなのどうでもいい話なんだけどよ」

「だろ？ だろ？」

ベッドから降り、俺に迫る雄二。

「タケルは、んな事気にしじゃないって、俺がいくら言っても信じねえんだよ」

「で、今度…。おめえが美紀を紹介する日に同席してくれって言われたよ。ついでに彩もって」

俺の真横に座った雄二は自分の頭を撫で始めた。

「い、いや、俺はさあ。タケルに迷惑掛けるから…止めるって言ったんだよ」

「はあ？」

俺は投げ出していた両足を引き、上半身を雄二に迫らせた。

「お、俺が、下で聞いた話と違うぞ。オヤッサンもヨツチャンも、

それは、おめえのリクエストだって言ってたぞ」

「あ、いや、ただ俺は、二人がいてくれた方がいいんじゃないかって。なら、親父もお袋も、それいいじゃねーかって。でも、やっぱり、タケルに迷惑かけちゃうからって言ったら。親父が、ほう、それならタケルに直接聞いてやるよって。で、俺が、なら勝手にしろよ！俺はタケルとしか話ししねえよ！って部屋に……」

「わ、分かった！ いやいや、分かんねえけど、取り敢えずっ」

俺の顔の間近まで迫った雄二の顔を両手でサンドした。

「話がややこしくなって、オヤツサンとヨツチャンと喧嘩になったって訳だよな？」

サンドされた雄二の顔がウンウンと頷く。呆れて雄二の顔から両手を話し、俺はまた後ろ手を着いた。

「先週、親父の家に行った時は息子つてもんだったけど。今回、俺はどう言うポジションなんだ？」

力が抜けた俺はカーペットの上に仰向けに寝そべった。

「だから……美紀の兄貴って事で……」

「だから、言ったべ。俺は美紀の友達だってよ」

「じゃあ、俺の友達代表って事で」

「結婚式かっつての？」

苦笑いし、雄二はまた頭を撫で始めた。

「いや、実はさあ…」

「わーってるよ。この話の大元は美紀だろ？」

「バ、バレた？」

寝そべったまま、俺は呆れ笑い。

「彩もって話が出た瞬間、そう直感したよ。そりゃ美紀にとっちや心強いもんなあ。んな時に彩がいてくれたらよ」

体を起こし、俺は雄二と向かい合わせになった。

「それに、オヤッサンさんもヨツチャンも…。何か、彩に興味あるみたいだし。いや、タイミング見て俺が彩に話してみるよ」

「タケル…。恩に着るよ。俺もおめえがいてくれた方が」

「ったくよ…」

苦笑いを終え、天井に溜息を撒き散らした俺。話すか…。

「雄二…。おめえに別件で話があんだよ」

「な、何だよ？」

俺は雄二に顔を近付けた。

水族館でプロポーズし、ショッピングセンターに寄って下着を買った。二人でシャワーを浴びた後、普通なら、その下着を着ける。しかし、妻は着けないどころか、全裸から元の服に戻った。一旦リセットした妻。その詫び錆びをつけた妻の気持ちを理解した俺は急がなかった。俺の部屋で、俺の目の前で、元の状態からしんみりと新しい下着を着けたい健気な妻の冒険心を静観した。結果は俺の予想通り。慌てちゃダメって事。濡れた体を拭いて全裸から鼻歌混じりにさくさくと大人の下着を着けられても、はあ？ 男は色気の欠片も感じない。待ったお陰で、蛍光灯の下でピンクに染まった体に大人の下着を通す妻を眺めながら、穏やかに欲情が降りそそぐ溜息混じりの一時を過ごせた。

少し微笑んだだけ。逆さになり、俺の顔を堂々と跨いで69を形成する妻。これも主婦の貫禄だろう。旦那に陰門を晒す。そんな些細な事に一々躊躇ってたら主婦なんてやってられない。妻はよく分かっている。

俺の眼前に突き付けられた陰門。大陰唇に陰毛がへばり付くほど、てかてかと濡れ、潤んだ小陰唇が陰列からちよっぴりとはみ出ている。よくあるアンモニア臭など感じさせず、それはただ神秘なる艶美を醸していた。感動もほどほどに、頂きに掛かると、妻が先に俺のチンコをくわえ込んだ。

女に安らぎを与えてくれる時間、フェラの時間。トイレの中、突

き上げられる轟轟に下半身を力ませて沈黙で耐える静かな興奮を堪能した私だったけど、慌ただしい行為の中で、無情にも省かれた女が安らげる時、フェラの時。味わいたくて、呑み込みたくて、落ちてきたくて仕方なかった私。耐えられず、バスルームで膝ま着いて夫のチンポをくわえ込んだ。うん、元気元気。チンコの勃起度で、毎日、夫の健康状態を計るのは妻の役目。元気がなかったら元気にするのも妻の仕事。夫のお尻を両手で掴み、激しく首を回転させると、夫の苦しそうな顔を見上げた。感じてくれる。後は、部屋でゆっくりと私の着替えを見て欲しい。夫を興奮がさせたまま、チンコを口から出した。それでも、つつん触る先つぽから糸を引かせる名残をバスルームに遺した。

まだ足りない、まだしたい、女に安堵、至福、活力を与えてくれるフェラ。チンコを感慨深く口内に沈める私。夫の舌がわ、私のピラを攪り、ク、クリに…。私はタケルの妻。女の業を遠慮なく夫に剥き出すと決めた。妻に…。妻になって遠慮なんてしてられない。このチンコは私のもの。だ、だから、つ、妻の私には、ウツクククク、クリが熱い、そ、そ事実を、そんなグリグリしたら吐き出しそうに…。お、夫に思い知らせる権利があ、あるうつつ…。それは、幼い発想かもしれない。負けずに私は舌を先に執着させ、頭を振るった。でも、私は幼い発想ほど素直な発想はないと、常々、心に体に染み込ませている。

「うつつふつつ…」

夫は声と一緒に吐息を私の膣に吹き込んでくれた。

「ウウツ」

いつものように、いや、いつも以上に私はねちっこく尿道から湧き出る液を舌でチンコの先端に塗した。夫はこの液の事、何て言っ

てたっけ？ 足らなくなったら、舌先を尿道に割り込ませる。すると夫は、ウツウツ、と下半身に力を込め、その液体を搾り出す。思い出した！ この液は、「我慢汁」だ。夫を我慢させていた状況に私の主婦欲は更に増大増強していった。もし、夫の肛門に指を突っ込んだら？ 妖しい露がその茎に蔦う。

俺と彩、アーケード街の入口で雄二と落ち合って美紀の家に向かった。アーケード街にあるお袋の店に差し掛かった俺達。止せばいいのに、彩がウインド越しにお袋へ手を振る。当然、お袋が店から飛んで出てくる。

「あんたら、ちゃんとして行きなよ」

店先で、お袋が俺と雄二を見上げた。男どもは相変わらず信用されてない様。

「ま、彩と美紀ちゃんが付いてるから大丈夫だろね」

ほらね。女の方が信用あるみたい。雄二を見ると、また泣きそうな顔してる。この幸せもんが。

「親父さんが…裕ちゃんに宜しくって」

親父も気使うんだ？

「雄二…。勇作と芳恵にはもう話してあるから。早く、美紀ちゃん

を二人に紹介してあげな。私があの人には反対させないから…何かあったら、私に言っといで！」

雄二の背中を叩くお袋。ああ、もう話したのね。それで雄二が俺に、「タケル、ありがとうなあ」ってほざいてたのか。俺は訳分かんず、「お、おう…」って感じだったけど…。雄二は俺がお袋に美紀の事を進言したと思ってる。まあ、いいや、それならそれで。感謝されるのは悪い気しない。でも誰がお袋に言ったんだ？

もうここまで来ると、ママは綺麗通り越して格好いい。

「ねえ、ママ、ママ」

私は両方の人差し指で自分を差し、ママに買って貰った白にレモンイエローのVネックラインのブラウスと紺のフェミニンのミニを見せた。

「あ、似合う似合う！ 試着した時よりも…やっぱり表で見たほうがいいね」

ブラウスの胸ポケットからコームを抜いたママ。私の髪を梳かし、サイドを少し束ねて後ろに流してくれた。

早く、行こうよ。苦笑いの俺は雄二に顔を向け、進行方向に首を振った。

「お袋、行くわ」

「う、うん。ああ、今夜、彩は家に泊まりだからね」

「はい？」

「もうママから私のお母さんに連絡済みだから。今夜はママの部屋でママと一緒に寝るからね」

お袋の腕にしがみつく彩。こいつら、可笑しくねえ？ 雄二がクスと笑う。

「俺が目指すのはこれだよ。裕ちゃん」

何言ってるんだ？ おめえは。頭を掻いた。

「私に任せなってる！」

また、お袋は雄二の背中を叩く。勝手にしろ。

「どつぞどつぞ、自由だ。さあ、行くぞ」

彩の腕を取り、雄二の背中を押して、俺は歩き始めた。

「タケル、あんたもしっかりね！」

極軽く、お袋に手を振った。

アーケード街を抜けて暫く歩く。賑やかさと騒がしさが消え、駅の発着ベルの音も遠ざかると、辺りは静かな住宅街に変わった。

「ここら辺だと…美紀は並木中か？」

「うん、タケルの元カノと一緒に」

何の遠慮もなく雄二が答えた。また余計な事を…。

「おめえ、人の事言えんのか？ おめえの元カノも…」

「るっせ！ 早く行くぞ！」

ほら、来た。その服とおよそ似つかわしくない声を上げた彩。俺と雄二は一瞬で黙った。

「あそこあそこ」

雄二が指差した住宅街の一角。以前から親父が乗っていた、確かシルビアって言う車が停まっていた。来たか…。少し握力を強めた彩と見詰め合って、その心の準備をした。

「んな緊張すんなよ。友達の家じゃん」

だよな。気付いた俺と彩は振り向いた雄二に笑顔を見せた。

夫の肛門に指を突っ込めば、きっと夫も私の肛門に…。一瞬、不安が過つたけど、あくまでも一瞬。なら、突っ込んでよ。そんなの夫婦だから当然。その既成事実にも何もかもが消し去られた。一旦、口からすぼんとチンコの抜いた私。その先端と茎に付着された私の唾液と夫の我慢汁の混合液を人差し指の先に塗りたくり、それでも足りなりと感じたから、口から唾の固まりをその指先に落とした。でも、ウツ、アツクウ…、私のクリを掻き混ぜる夫の、アツアア…、舌先が加速したから、私は…私は、ウツ、アアアアア…、負けそうになる。

「ウツククワアアウツアア…」

必死で意識を立て直した私は夫のチンコの先端を口内にパクツと戻す。くちゆくちゆさせながら、玉袋を捲り上げて濡れた指先を夫の肛門まで這わした。そ、そんな音立ててじゆるじゆるしたらあ…き、効くううう…。負けない！ タケル！ 覚悟しろ！ そして、肛門全体にその潤滑油を塗り始めた。

ウツ！ 彩が、彩がそんな？ しかし、そんな疑問符を掻い潜つた妻の指先は直ぐに俺の不安を期待に変えた。当然、俺もやってやる。夫婦だから何でもありだ。

妻の膣深く人差し指を挿入した俺は位置確認が容易になった上付きのGスポットにその指先で押し込んだ。

「ウツンンンンンウウウウ…」

俺の亀頭を頬張りながら、妻が膣を縮ませる。俺は指をぬぽつと膣から抜く。指は白く濁ったときとの愛蜜で濡れている。すうーっと、その指を妻の肛門に滑り上げ、丹念に、その愛蜜を肛門に塗り付けた。

「フツウツン…」

やっぱり、夫は来てくれた。籠る呼吸の中、その同調行為に感激すら覚えた私。ゆっくりと濡れた指先を肛門に沈める。いっけえ！

玄関に入ると、懐かしい親父の匂いいつもの美紀の香りがした。

「元気そうだな」

「まあ…ぼちぼちやってるよ」

俺の袖口を軽く引つ張る彩。

「あ、紹介するよ。彼女の彩。美紀や雄二とも友達なんだ」

「初めまして。彩です」

「初めまして。タケルと美紀の父です」

畏まった俺と彩を傍で眺めていた美紀と雄二がクスツと零す。

それは後のお楽しみ。と、美紀も雄二も彼女の携帯画像を見せてくれなかった。揃えた両手に白いバッグを下げる彼女。恥ずかしそうに下を向き、細い肩を極僅かに奮わせる。緊張しながらも、彼女は澄みきった瞳と優しい笑顔を上げた。勿体ぶった美紀と雄二の気持ちがよく分かる。二人とも、いい意味で俺を驚かせたかったんだ。参ったよ。想像以上に可愛い娘。いや、綺麗と言ってもいい。タケルもやるもんだ。あれ？ 何処と似たるのかな？

「親父さん…。緊張してたりして？」

「バ、バカやる。んなしてねえよ」

雄二にハツとさせられ、首を撫でながら目を泳がせた俺を皆が笑う。一瞬で、場が和やかになった。

「上がれよ」

ブラシユアップさせた前髪、パイソン柄のジップアップカットソーにデニムパンツ。不良っぽいところが、うちのお父さんと似ている。それが、私がタケルと美紀のお父さんから受けた最初の印象。

「お邪魔します」

靴を揃えて脱ぎ、玄関を上がった私。少し緊張が和らいだ。

「彩、早く早く」

美紀に腕を掴まれた私。お父さんに会釈すると、私はそのまま美紀にリビングまで引っ張っていかれた。

二つの微光が一本の精線になった。美紀に引っ張られながら俺に流した視線。大人っぽい。タケルの趣味は俺と似てる。

「彩ちゃんって…何処と無く佐紀に似てねえか？」

似てるって言っても優雅さは彼女の方が上。佐紀どころか、高校時代の裕子も負ける。俺はタケルと雄二に顔を向けた。彼女のご両親、美形同士なんだ。

姉貴？ 雄二が指を鳴らして俺を見た。

「言われてみれば…裕ちゃんより佐紀姉だ」

ないない。と、俺は笑って首を振った。

「どっちにも似てねえよ。冗談だろ？」

雄二と親父が見合っただけ。

「タケルが裕ちゃんに似てる彼女選んだと思ってさ。敢えて突っ込まなかつたけど…佐紀姉の方があつたよ」

やや上を向いて、俺はまた首を振った。腕を組む親父。

「うん…。確かに裕子もちよつと雰囲気あるけど、どっちかって言う佐紀だな。彩ちゃんは」

言ってるよ、もう。

「周りの誰かに似た人を彼女に選ぶってよく言うじゃん。だから、彩も似てて不思議じゃねえって」

偉く饒舌で、幸せなニヤケを浮かべる雄二。久しぶりだよ。こつやって三人で話すの。

「おいおい、俺はマザコンでもシスコンでもねえよ。そんなの言うんだったら…美紀は…」

親父の顔を見た。俯き、含み笑いを頷かせる親父。俺は指を鳴らし返した。

「似てるよな」

親父の含み笑いが意味する人と俺の頭の中に浮かんだ人は同じ。誰に？ と、キョトンとする雄二。

「ヨツチャン。そっくりじゃん」

俺が言ってやると、雄二が俺と親父を交互に見た。

「に、似てねえよ！ じよ、冗談止めてくれよ」

俺と同じ事を言う雄二。そのしかめっ面を眺めながら、俺は何の

違和感なく親父と話せた事に安堵していた。

「ちょっと、あんた達！ そんなところで何やってんの！？」

奥から響く美紀の声。

「ほら、あれヨツチャンじゃん？」

「いやいやいや」

パパの後ろに付いて、雄二とタケルが何やらケラケラと、リビングに入って来た。

「美紀……」

私に近寄って耳元で囁くタケル。

「これが…例のソファーか？」

由美の家で、雄二の馬鹿が暴露した事覚えてやがる。

「バ、バカ」

小さく零して、大きくタケルの背中を叩いた。

「イツ！」

皆が私とタケルに振り向いたけど、私は笑顔でごまかした。

オードブル類、サンドイッチ、寿司、揚げ物等々。ソファに囲まれたテーブルにぎっしりと並べられていた。

「親父、スゲエなあ」

俺の斜め向かい座った親父。微笑ませた顔を上げた。

「今日休みだんだんだけど…。昼間、美紀と一緒に俺のデパート行って買って来たんだ」

「親父、デパート勤めだったよな」

「もう忘れたのかよ？」

「忘れてねえよ。確か…営業課長補佐だったけ？」

「営業課長だよ」

「そ、そりゃあ、昇進おめでとうございます」

「有難うございます」

「でも、週末忙しいのによく休み取れたよね」

「まあ、有給休暇も貯まっていたからなあ」

私は、暫く、隣に座るタケルとお父さんの親子の会話に聴き入っていた。多分：いや、絶対、お父さんの方が嬉しいだろね。斜め向かいに座わる美紀。少しだけ涙ぐんでる。美紀は見たかったんだ。タケルとお父さんが仲良く話してるところ。そう思うと、私も涙をこみ上げそうになる。

「じゃあ、皆で乾杯しよ！ 用意してくるね」

鼻を噉って、美紀が立ち上がった。

「美紀。私、手伝うよ」

「有難う。じゃ、お願い」

私は美紀とキッチンに向かった。

「いい彼女見つけたなあ」

キッチンに美紀と一緒に立つ彩ちゅんの背中を見ながらタケルに呟いた。

「うん。あいつには…感謝してる」

彼女に感謝か…。暫く見ない内に、タケルの横顔は男を滲ませるようになっていた。だから、俺は少しだけ天井を仰ぎ見た。

「雄二！ それ違うって…」

気が付いたら、雄二もキッチンに移動していて、美紀に使われていた。

「あの二人…良い感じだろ？」

「ああ。雄二が、いつもああやって美紀の相手してくれるから、俺も安心して仕事行けるよ」

うん、あいつらも、親父が仕事してる間、安心してセックスしますよ。言葉と笑いを口に含む俺。

「そ、それ、マジ話!?!」

雄二が後ろ手を着く。驚かれても仕方ない真実。

「間違いねえよ」

ゆっくりと体を起こし、雄二はそのまま項垂れる。

「今後…どうすりゃあ?」

俺は溜息をついて天井を仰いだ。

「結局：俺達が首突っ込んでいい話かどうかって事だ」

「う、うん」

「雄二…。あいつらには、この事実を知る権利があると思う。たとえ、あいつらが、この事実を知っても、別に、今までと何にも変わらねえと思う」

天井から視線を戻した。

「でもなあ…。大人の責任って何だろなあ？」

顔を上げた雄二。

「大人の…責任？」

部屋の時計の音と一階から響くオヤツサンの笑い声が聞こえていた。

「もし、大人達が美紀と俺との関係を俺達が知る前に話して行ったら…。おめえも、美紀も、俺も、無駄で過酷な時間を過ごさずに済んだ。大人達は、その沈黙を俺達に対する気遣いって言うかもしねえ。けど、俺に言わせれば、それは、大人達が自分達だけで勝手に解釈した最も無責任な問題回避手段さ。俺達に対する後ろめたさを和らげる為にする逃避手段さ。俺達に対しての威厳を損なわない為にする常套手段さ。大人達の気遣い。それは、言い訳以外のなんでもねえよ」

オヤツサンの笑い声はしなくなったけど、代わりにヨツチャンの怒鳴り声が響いていた。俺はまた天井を仰ぐ。

「雄二…。彩が、美紀が、由美が、いつも俺達とふざけ合いながらも俺達みないなガキに教えてくれてるんじゃないかねえのか？ 大人の責任つてのは…」

雄二が顔を上げ、俺が顔を下ろした。ヨツちゃんの怒鳴りが止み、また時計の音が聞こえ始めた。

「決して逃げない事だつて」

そして、俺達は静かに微笑み合った。

夫の肛門に指を沈めると同時に、何か温かい、いや、どちらかと言えば熱い感覚が私の肛門に走った。来た！

「ウツンンン…」

少し最初から入り過ぎたかもしれない。妻が俺の肛門に指を挿入したショックが俺の指に若干強い突進力を与えたのは確か。じわじわと行くか。俺はクリを転がす舌先を指先が挿入された妻の肛門に移動させ、指と肛門の密着部分を舐めて水分を与えた。

うわわわ、入ってくう…。堪えられず、チンコを口から抜いた。しつかりしないと。私はさすがのようにチンコの根元に唇を合わせる。私も入れないと…。夫の肛門に第二間接位まで指を押し込むと、徐々に夫が内股になっていった。

マ、マジ、ヤバい！ 熱い。妻の肛門は第二間接まで指を呑み込んでけど、俺の忍耐が切れそうに。うっ！ まだ入ってく！ ヤ、ヤバッす！ 流石に、俺は妻の肛門から指を抜いた。

「彩…」

完敗。主婦は凄い。虚脱感の上に被さる妻の肛門。ゆっくりと俺の指が残した空気穴を閉じようとしていた。

何か、ぬぼつとした感覚。夫の指が肛門から抜かれた様子。お、終わった。か、勝った！ 静かな歓喜と共に、私も肛門から指を抜く。夫が私のお尻をぺたぺたと叩き、「解除」、いや「降参」の合図を送った。

夫の体から降りた私はベッドの上に座り込んだ。

「汗かいたよ」

「俺もさ」

半身を起こした夫。ベッドの下から拾い上げたティッシュボックス

からテッシュュを抜き取った。

「指かして」

指を出すと、夫が綺麗に拭いてくれた。

「いつも優しいんだね。タケル」

テッシュュを抜き取り、夫の指を拭こうとすると、夫はサッとその指を口に入れやがった。

「おめえ、バカか！？ 吐け！」

チュツと音を立て、指を口から抜く変態夫。

「ああ、美味しい」

「んな訳ねえだろ！」

ギャー！ 私はゴシゴシと、テッシュュが千切れるまで夫の指を拭いた。しょうがねえ野郎だよ。唇をくれながら、夫は静かに私をベツドに倒す。けど、憎めない奴…。

「バカなタケルも…愛してる」

「愛してるよ…。彩の全部を愛してる」

私に覆い被さった夫は潤いきった臍にチンコの先端を合わせた。

愛し過ぎて…

「お父さん、どうぞ」

タケルと席を換わった彼女が俺にビールを注いでくれる。

「あ、どうも…」

「何、パパ、緊張してんの？」

サンドイッチを頬張りながら美紀が言った。

「緊張なんてしてないよ」

しかし、若干、奮えるグラスはごまかせない。そりゃ、緊張はするよ。

私はタケルの空いたグラスにビールを注いだ。

「やっぱり、似てるよな」

私の顔を覗き込んだタケル。雄二に顔を向けた。

「な、何？」

私も雄二に顔を向けたけど、雄二はグラスを持ったまま苦笑いで俯いた。

「何よ？ 気になるって」

私はタケルを見た。

「美紀が似てるんだよ。昔、親父が好きだった人に」

飲んでいたビールを零し掛ける雄二。えー？ とパパを見ると、
パパは眉を掻いた。

「お父さんの好きだった人って？」

彩がパパに尋ねた。

「あ、いやあ…」

「親父は、昔々、雄二のお袋さんに惚れてたの」

同時に笑い出した私と彩。私はタケルに見開いた。

「て、事は？」

「そう、美紀が雄二のお袋さんに似てんだよ。俺も今日まで気が付
かなかつたけど…。俺にビール注いでくれた表情が…ヨッちゃん、
雄二のお袋さんに似てた」

「へー、そうなんだ」

どんな人なんだろ？ ずっと空想していた人が私に似てる。嬉し
くなり、まだ苦笑いしてた雄二に笑顔を向けた。

タケルの取り皿に唐揚げとお寿司を乗せた。

「美紀に似てるんなら、雄二のお母さんって綺麗なんだ」

両肩を上げて恥ずかしそうな顔をする美紀。雄二も恥ずかしそうに、グラスをテーブルに戻した。

「ヨツチャンは綺麗だよ。なあ、親父？」

お寿司で口を籠らせたタケル。雄二からお父さんに顔を向けた。

「お、おう…」

笑っているのか困っているのか、お父さんがグラスに口を着ける。お父さんが好きになるくらいなんだから、綺麗に違いない。

「いいなあ。美紀。彼氏のお母さんと似てるなんてさ」

「皆、勘違いするなよ。好きだっただけで、別に、付き合ってた訳じゃないからさ」

笑い出す私達。思い出した！ ママから聞いた話。お父さんが雄二のお母さんにキスしようとした時、雄二のお母さんがお父さんのあそこを蹴り上げたって。私の笑い声が一際大きくなった。楽しい高校生活だったんだろうねえ。

「彩ちゃん。飲む？」

笑いながら、お父さんがビール瓶を指した。よし、飲んじゃえ。

「はい、頂きます」

「エッ？」

意外な彩の返事。顔を見合った俺と雄二を尻目に美紀がキッチンに立った。

「じゃ、私も飲んじゃお。グラス持ってくるね」

「エッ？」

雄二が美紀の背中に目を向けた。

「何だ、おめえら、自分の彼女が飲んでるところ見たことないのかよ？」

俺と雄二を交互に見た親父に、俺らは一様に首を振る。美紀がグラスを二脚持つて戻って来た。

「飲ましてやんないとき。おめえら、注いでやれ」

美紀からグラスを受け取った彩。マジ、大丈夫なの？ 彩は余裕の笑顔。恐々、彩のグラスにビールを注ぐ俺。雄二も美紀の顔をチラチラ見ながらビールを注ぐ。最後に、彩が親父のグラスを満たして準備完了。

「彩。今夜は、ガツンといこうよ」

「オツケ！」

「そう、こねえとな」

かんぱーい！ 彩と美紀と親父、三人は一気にビールを空けた。

「カーツ！」

「美味しいっ！」

「さいっこう！」

俺と雄二は口を開けて啞然を突き合わせた。

「あ、お父さん。私の事は、彩って呼んでくださいね」

彩が親父にビールを注ぐ。

「う、うん。じゃあ、俺もお父さんじゃなしに何か別の……」

「なら、私と一緒に、パパでいいんじゃない？」

美紀は空のグラスを雄二に差し出す。お、おう……。たじろぐ雄二がビールを注ぐ。相当、美紀はイケる口だ。

「だって、彩はタケルのお母さんの事をママって呼んでるんですよ？ なら、パパの事はパパでいいじゃん」

うん、パパが一番呼び易い。

「じゃあ、パパって呼びます」

屈託のない笑顔。素直な性格。物怖じしない度胸。裕子が気に入るはずだ。

「うん。じゃあ、それで」

明らかに、親父は照れてグラスに口を着けた。彩が俺のグラスに瓶を傾ける。

「じゃ、ついでに、面倒臭い敬語も止めちゃえよ」

彩に返杯しながら言った。

「だよだよ。彩だけ、パパに畏まる事ないよ」

「俺も…そっちの方がいいや」

俺に目を合わせ、瓶を持ち、彩は親父に振り向いた。

「じゃ、パパ、もう一杯いこ」

「そこなきやよ」

彩にグラスを差し出す親父。そして、親父に注ぎ終わると、彩は

雄二のグラスにビールを注ぎ始めた。

「やっぱ、似てるわ」

ビールを注がれながら、雄二が俺に視線を移した。来たよ。こいつの逆襲が。

「エッ？」

当然、見開いた彩は、親父、美紀、俺の順に顔を向けた。苦笑いを俯かせる俺。

「もしかして、彩もタケルのママに似てるとか？」

寿司をパクつきながら美紀が雄二に尋ねた。

「うん、裕ちゃん…タケルのお袋さんにも似てるんだけど。それ以上、タケルのお姉ちゃんに似てるんだよね」

「エッ？ エッ？」

私はタケルとパパを見た。タケルは俯いたままだったけど、パパは含み笑いで頷いた。以前から興味があったタケルのお姉ちゃん。雄二はママにも似てるって言ったけど、それは最高のお世辞。でも、タケル曰く、お姉ちゃんは真紀さんに似てるって話。なら、お姉ちゃんも相当綺麗なはず。そんな、綺麗なお姉ちゃんに、私が似てて

いいの？ 恥ずかしさより嬉しさが勝った。一人、細く微笑んだ私。最愛の人のお姉ちゃんに、私が似ている。

「へー、そうなんだ？ タケル、言ってくれないんだもん」

タケルに少し尖らせた唇を向けた。

「いや、だって、俺は似てると思ってねえもん」

てめえの彼女が綺麗なお姉ちゃんに似てるって言われたんだから、認めるよなあ！ 私はタケルよりパパと雄二を信じる事にした。

「じゃ、それって、私のお姉ちゃんって事だよな？」

美紀の粹な一言。パパの顔が綻んだ。

「そう言う事だよな。今、佐紀姉…タケルのお姉ちゃんは都内で美容師しててさ。それがまた綺麗なお姉ちゃんなんだよ。ね？」

雄二がタケルとパパをみた。二人とも、鼻を擦った。やっぱり、親子だ。似てる。

「そりゃ、彩と似てるんなら、綺麗だよ。私も会ってみたいなあ。お姉ちゃんに」

グラスを両手で包んだ美紀。一瞬、場が静かになった。

「おう。じゃ、姉貴に言つといてやるよ。姉貴の奴。妹、欲しがつてたからさ。俺と美紀は友達同士だけど、姉貴とは勝手にしてくれ」
タケルの粹な言葉に、美紀がグラスを眺めながら涙を溜めた。

「俺が言うのも何なんだけどさ。気さくな姉貴なんだよ。昔、シャワーからマツパで出てきた姉貴が廊下でバツタリ雄二に遭遇してさ。『お母さんの次に見た裸の女が私って事はタケルと一緒にじゃん』って笑い飛ばして雄二の肩叩くような姉貴なんだから」

「ハハッ！」

私が手を叩いてウケると、えー！ と、美紀の顔が一瞬で笑顔に変わった。最高のお姉ちゃんだ。

「あ、あれは、完璧事故だよ。事故」

慌てて、雄二が身を乗り出す。ママから伝言を美紀に伝えるのはこのタイミングしかない。

「美紀。ママが、今度、美紀ちゃんを連れておいでって。物凄いやツパリしたママだから、今度、由美と一緒にママの店に髪切りに行かない？ 色々、雄二の情報も知ってるママだから」

パパに顔を向けると、パパはそのままの笑顔で頷いてくれた。

「うん！ ママに会ってみたい。ママの店、連れてって」

はいはい。女同士、勝手にしてくれよ。俺は半分くらいビールを飲んで、グラスをテーブルに戻した。

「雄二、知らねえぞ。お袋が美紀に色々聞かれてポロって喋ってもな」

「あ、それ、いやあ…」

「何？ 聞かれちゃ困る事あるの？」

美紀が雄二に唇を尖らせた。

「美紀、私もママにタケルの事、まだ聞き足りてないから。一緒に聞こ」

また、墓穴掘ったよ。調子こくもんじゃねえな。彩が苦笑いの俺を飛び越え、美紀にビール瓶を差し向けた。

「聞こ聞こ。彩、今日は飲むよ」

「飲も飲も」

しょうがねえなあ。こいつら。グビグビやる二人を眺めながら俺は立ち上がった。彩も、相当、イケる口だな。

「ちよとトイレ」

リビングのドアを指差す親父。

「そこ出て、左の突き当たりだ」

リビングを出る寸前、極自然に、俺の視線はドア傍の本棚に置かれた写真に流れた。家族写真？　そして、ドアノブを握ったまま足が止まり、口が半分開いた。

「タケル。それ、私とパパとママ」

ソファから美紀が言った。

「お、おう。綺麗なお袋さんだよな」

不自然にならないように、美紀と親父に笑顔を向けてドアを開けた俺。リビングを出て、二歩、三歩、廊下を進み、閉められたドアに振り返った。

「嘘だろ？」

ドアの向こうから賑やかな笑い声が聞こえていた。

「アアッ！」

その挿入は、部屋、いや、外部にも轟くほどの悲鳴を妻から引き出した。

「タケルッ！　キ、キテッ！」

妻の要望に応えるが如く、チンコを急加速させた俺は玉袋が妻の肛門にぺたぺたばこばここと当たるほど強烈に振るう。腰なんか抜けてもかまわねえ！

「フクアアアクアアア…」

吐息と喘ぎを巻き上げ、眉間を絞りながら俺を見詰める妻は俺の二の腕をしっかりと掴んだ。俺は愛情を妻の一点に集中させる。

「す、凄い！ アッアアアア、タケルツ！ 凄い！」

玉袋がにちゃにちゃと湿る。今日の俺はこんなもんじゃねえ。更なる増強増幅を求めた俺。上半身を起こして妻の両腕を掴み、妻を強く引き寄せ、亀頭を子宮口により激しく衝突させ、狂おしく突進を繰り返す。それでも、妻は俺の目から焦点を外さない。

「ウツ、タ、タケル、タケルツ！ タア、アウ、タウ、アアアア、ン…」

愛欲に突かれながら、妻は上口から何語かわからない奇語を漏らしていた。そして、妻の下口からは何度かわからない妖液がしたっている。

「タ、タ、ケル…。つつ、潰れるっ！ アッウツ、タタタ、ケル…」

温かい…。きゅっきゅとチンコを締め付けてくれる妻の膺。彩の、彩のここから生まれたかった。お、お袋なんかより、あ、彩から生まれたかった。妻の両腕を離し、俺は妻に唇を落とす。

「ウッフウウン…」

俺の頭を抱き、ねっとり絡む妻の舌。チンコだけじゃなく、か、体全部を彩に入りたい。命懸けで男が女を愛した時、その男はその女の子供になる。きつとそうなる…。再び上半身を立たせた俺は妻の両足首を掴み、妻の長い両脚を天井に向けてピタツと揃えた。彩、行くぞ！そして、妻の両脚をぱかっつとY字に裂き、乱打を続ける。

「アアアアウウアンアアア…」

妻の喘ぎと共に部屋全体が酔うほど揺れる。そのY字の間で、大胆に、可憐に髪を乱す妻。

堪んない…。ぼやけて霞む空間。夫だけがはっきりと見える。

「タケルッ！ あああ、愛してる！ もっと、キテッ！ もっとっ！
アーッ！ タケルッッ！！」

常軌なんて逸していた。邪魔な髪を掻き上げる。

「あ、愛してるよ。ウツ、ウ、ああ、彩…」

バイクのハンドルを握るようなグリップで、妻の両足首を握り直した俺。やや前のめりになり、その結合部の密着度を高め、その突進力を強めた。

「アーツ！ もう、タツ、タケル！ イツク、イクよ！ アーツ！」

女は男と違って短時間で何回でもいける。本来なら、俺もここでイク準備をする。まだ、足りなかった。また頭の中で九九を暗唱する。

「イツ、イツ、アツ、イツグアー！！！」

いつもより激しく波打ち、噴射した絶頂。てか、え？ いつもなら、ここで熱い分身をくれる夫がまだ私の中で動いている。そ、そんな、タケル。私、もうイツだから、続けたら、く、擦りたい！

「タケルウウウウ……」

枕に顔を埋めた。

ドクンとカウパー液（我慢汁）のみが放出。ドクドクドクとしたメインの放出は抑えられ、その分、持続力が増強された。ヨシ！ 体を垂直に戻した。妻の右脚を左肩に担ぐ。俺は比較的緩やかに斜め向きになった妻に腰を振るった。

「アアアウワーウウウ……」

呻きを上げる妻の横顔に乱れた髪がほどよく付着している。綺麗……。鮮やかな桃色に剥けた妻のクリを心地いい揺れを消すことなく親指で掻き鳴らす。

「タケル…。イイイ、アツ、アアア…。き、気持ちイイイ…」

体力を回復させる間、俺は帆掛船の形になった細い体の妻にゆっくりと風を送りながら、クリを弾く親指に一定のリズムを与えながら、妻の子宮から湧き出る愛蜜を亀頭で感じながら、陰毛と陰毛の擦れ合いを、凹肉と凸肉の噛み合いを、愛液と我慢汁の絡み合いを薄れがちな意識中で堪能していた。

「ウクアア…。タケル…。ど、どうしようもない。どうしようもないほど…。あ、あ愛してるううう！ タケルウウウ…」

「あああ、愛してる。俺も…俺も…どうしようもないほど…」

美しく靡く妻。充電完了。妻の左脚も肩に担ぐ俺。両肩に妻の両膝を担いだまま体重を掛けて妻に覆い被さった。殆ど天井を向かされた妻の陰門にチンコを杭のように落としてやる。

「アー！！タケルツ！そ、そんな、ウツ、アツ、アツ、アツ、アアツアツアツ…」

チンコを落とし続ける俺に見開く妻。

「素敵だよ…。彩…」

妻への思いの丈。俺はその一点に集中させ、息継ぎも忘れるほど、奥歯が砕けそうになるほど、腰が抜けそうになるほど、そのワンシリンダーの動力速度を上げ、妻の膣内温度を更に高めようと励んだ。

「ダメツ！ マジツ、グアーツ！ し、死ぬよっ、アーツ！ タケ

ルウウウ…」

発狂状態の妻。唇に髪を纏わり付かせて訴える。その訴えは俺の玉袋が妻の肛門にばんばんばんばんと当たる音に打ち消された。

「あ、愛してるよ！ 彩…。もっと、もっと、愛し、愛したいんだ！」

「あー、愛してるっ、タケルッ！ ダメ、ま、また、来てる！ アッ！！ま、またああああ…。来るっっっっっ…」

気張る妻を突き乱すチンポに乳褐色の粘液が絡み付く。濃ゆい！額から流れる汗が鼻先に蔦って、彩の胸にポタポタと落ちた。

「イツ、イクッ、タケルッ！ アッ、イイイクーツ！」

妻が干切れるほどシーツを握り締めると、結合部が妻の潮で大爆発。まだまだ、俺は、いかねえよ。亭主の強さ見せてやる！ 妻の両脚を揃えて横倒しにする。顔に飛び散った潮と流れ出る自分の汗を手の平で拭った俺。腰を掴み上げ、結合したまま妻を後ろ向きにした。

「じゃあね。涼ちゃん」

電話を切ったお袋さん。電話で、俺がどこのここのって言ったよ。ような。

「彩のお母さんから。由美が彩と一緒に帰ってくるって」

焼鳥片手にアルバムを見ていた俺に、お袋さんが言った。

「えっ？ 彩も？」

「今…由美が彩の家にいるみたいでさ」

お袋さんのグラスにワインを注ぐ。彩が来るかあ…。ま、いいや。

「な、何で、タケルが家にいるの？」

電話を掛けていた涼子さんに、慌てて振り向いた。

「真紀ちゃん…。ちよ、ちよっと、待てね」

涼子さんが電話を保留にする。

「何か、真紀ちゃんの誘いで、由美の家でご飯食べてるみたいよ」

「マ、ママの誘い？」

グラスをテーブルに戻ながら笑いだす和ちゃん。

「タケルの野郎。俺が思った通りだ。ああ言うタイプの野郎は年上からモテるんだよ」

彩に顔を戻す私。

「お、お母さん。予定変更。今夜は、私が由美の家泊まるよ。」

私と顔を合わせたまま言ってくれた彩。私が頷いくと、涼子さんも笑いながら保留を解除した。

「キヤハハハ！ これ俺が見ていいの？」

オシメを替えられて丸出しにされている由美の写真を指し、俺は笑っていた。

「まあ、赤ちゃんの時だからねえ。いいんじゃない」

グラスを揺らし、足を組み換えるお袋さん。

「今の由美とはまた違う可愛さがあるよね。この入浴写真なんて…無茶苦茶可愛いよ」

俺はまたお袋さんにワインを注がれた。

「この時は…ほんと可愛かったんだけどねえ」

写真の由美の顔を指でなぞるお袋さん。寂しい目だった。由美に言っただけ。温泉くらい行ってやれって。

「この綺麗な人は？」

由美のアルバムの中で不自然に浮いた一枚の写真。一人で写る長い髪の女性の写真を指差した。

「あ、それ、私の妹。遠縁になっちゃったまま…亡くなったわ。探しても一枚しかなかったから。由美が会わずじまいのおばちゃんの写真だから、由美のアルバムに張らしてもらったの」

お袋さんの目は沈んだまま。聞くんじゃなかった。グラスのワインを空けた。

「いけるねえ！ タケル」

俺にボトルに残ったワインを注ぎ切ったお袋さん。立ち上がり、冷蔵庫から新しいボトルを取り出した。

「スゴッ！ スゴ過ぎーっ！」

夫はまだ元気。ベッドで後ろ向きにされ、もう既に2回もいかされていた私は思わず叫んだ。

「愛してるよ」

「愛してる…。タケル」

その言葉の交換によって柔らかくなった私の腰を掴み、夫は怒涛の攻撃を始めた。

「アーツ！ タケルツ、も、もう、こ、壊れるっ。こ、こ、壊れるーっ！ アー、ウアアアアア…」

ぐちゅぐちゅ入り乱れる。私の内股に手を回し込み、夫はクリを弾く。

「も、も、マジで、マ、マジで、し、死ぬよ！ タケルツ！ い、一緒に、一緒に、死んでっ！ グアーツ！！」

もう少しだ！ 彩。もう少し、頑張れ…。そう願い続けながら狂って血走った出し入れと弄りを繰り返す。勢い余ってチンコが抜け、スツと言う音が妻の膣から鳴った。チツ、俺としたことが。急いで、勢いよくチンコを再挿入。ブリツブクツ。大きな膣ナラが響いた。

「イヤツ！ もうっ！」

両腕をベッドに立て、頭を上げた妻は尻を突き出したまま俺に振り向いた。やっぱ、まだ膣ナラは恥ずかしいんだ。この際、慣れさせる必要があると感じた俺。また、ゆっくりとチンコを膣から抜き、スツと膣に空気を取り入れると、一気に突き入れた。ブーッスプーッ。いい音。チンコにも響く。また、もう一回抜いて突く。ブーッスプーッ。で、もう一回。スプーッブーッ

「いい加減しろ！ この野郎！」

笑い混じりの怒声を発した妻。

「だ、だって、な、鳴るんだもん」

俺のゼーゼーとした声も笑い混じり。

「おめえが鳴らしてんだろ！」

バレた？ 罵声の中でも、肛門を見せる妻が意地らしく素敵。

「ヨシ！ 気を取り直して…」

チンコが膣から抜けない程度に引く。

「行くぞ！」

突入すれば、プリップ、まだ空気が入ってた。可愛い残響と共に、再び、そのエンジンを点火させ、俺は猛スピードでピストンを繰り返した。妻の肛門が俺の出し入れに合わせて、結んで開いてしてる。可愛い過ぎる！

タケルのバカ。でも…。

「愛してる！ 世界でい、一番、一番、愛してる！ タ、タケル、アッ、愛してる。アアアウウウ…」

「愛、愛してる…。あ、彩…」

また汗が妻の尻や肛門に落ちる。俺の視界が徐々に白く雲っ

く。酸欠か？ 一瞬、頭を過ぎったけど、最早、マシンと化した俺の体。得に、腰とペニスは制御不能。unstopableとはこの事。妻がまだ愛液と言うガソリンを供給してくれる限り、喘ぎや呻きと言う声援を送ってくれる限り、俺は止めたく…いや、止まらない。

「ウウウウツガーッアッガーッ！ もっともっと、も、もっと、ちょ、ちょうだい！ タケルーツ！」

もう狂乱と言う他なかった私は夢中…いや、無中になっていた。タ、タケル！ 過ぎすぎだよ。また、また、来てるから、いや、も、もう、来るうっうっう…。

「タケル、アーツ！ また、イイイツ…」

「俺も、俺も、限界だ！」

「アーツ！」

「クーツ！」

雄叫びと雌叫びが時間を止め、真っ白な空間の中に俺の心音と共鳴した精液がただドクドクと注ぎ込まれていた。体が、意識が、もう駄目だあ…。流れでる精液が俺から生気を奪っていく。妻に全てを出し尽くした俺。緩々と静々と歪んだ視界に漂っていた妻の背中に吸い込まれていった。

私の背中に緩く弾かれた夫の体が真横に転がった。

「タケル!？」

上半身を起こした私は夫の体を揺する。

「タケルって？」

「彩…。だ、大丈夫だから…」

仰向けになり、唇を変色させて息を奮わす夫。その言葉に信憑性などない。

「大丈夫じゃねえよ！」

あんなに激しくしたから、こんなに…。私はテーブルに置きっぱなしにしていたアイスティーのグラスに目を向けた。

「タケル…。ちょ、ちよつと、待ってな」

ベッドを降りた瞬間、ブリブリとまた変な音が鳴ったけど、そんな事はどうでもよい。私はテーブルからグラスを取り、もう氷が溶けきつて薄くなったアイスティーを頬っぺたが膨らみ切るまで口に含んでベッドのそばにひざまづいた。

「うー、うん…」

夫の頭を包みながら、私はアイスティーを口移して少しづつ夫に注入した。喉かゴクゴクと音を立て、薄くなってた瞳がまるで水を得て生き返る花のように徐々に色を取り戻した。大丈夫かな？ 私

の髪に触れる夫。OK！アイステイーを全て注入した私は夫から唇を離した。

「彩…。愛してるよ…。ありがとう」

「愛してるよ…。タケル…。大丈夫？」

「ああ…。気持ちよかった？」

「うん。3回も…。いかされたもん」

夫の頬を指で撫でながら、私は再び夫に唇を落とした。

彩…。これが亭主の力だ。

帰り道

ルーズに纏めたシニヨンヘア。白と紺のポーター柄でパプ袖のＴシャツ。ボトムスはアンクルストラップの編み込みサンダルにスキニーデニムを合わせてる。取り敢えず、誰よ？ その女。

まだ、夫は私に気付いてない。徐々に近付くに連れて、「タケルは、年上にモテるタイプ：」お父さんの言葉、「うん、あの甘いマスクと目つきは私でもかなりくるねえ：」かなり年上のお母さんの言葉、「タケルはカツコ優しい！ 彩いなきや、私の愛人にしてる」由美に鬨ぎされながらの酔った真紀さんの言葉、ついでに「ねえ、お姉ちゃん：。タケル君、貰っていい？」緑の無理、それら諸々が私の頭から沸き出す。私がいるのに、いい根性してんじやい。悔しいけどかなり綺麗なその女の前に立ってやる。証拠にもなく新婚初日に他の女に抱き着かれてる夫。やっと気付きやがって、何か私に言い訳始めそう。

「あ、彩！」

私は無言。私達、新婚じゃなかったの？ 下着が入った袋を握り締めた。夫を離し、私に振り向く女。

「あ！ タケルの彼女？」

タケル？ そ、そうですね、何か？ 何故か、タケルも女も微笑んでる。

「うん、紹介すよ」

衿を直しながら、夫が立ち上がった。

「嫁さんの彩」

嫁さんねえ？ ちょっと嬉しい。

「彩…」

何よ？ まだ無言の私。

「俺の姉貴」

へー、タケルの、エーツ！？ 目が大きく開いた。

「偶然、会っちゃってさ。もう本当…」

夫が何か言ってたけど、私は慌てて手櫛で髪を直し、笑顔を作った。

「は、初めまして。あ、彩です」

「わー！ 初めまして！ 私、タケルのお姉ちゃんの佐紀」

立ち上がって、私に駆け寄るお姉ちゃん。私がずっと興味を持ち続けてた人。お姉ちゃんは私の腕を取り、口をぱくぱくさせて何か言いたげだった夫を無視し、私をベンチに座らせた。殆どすっぴんだけど、噂以上に綺麗な人。

「タケル！ かわついい彼女だね」

「あ、ありがとう」

夫が周りを気にしながら俯いた。

「彩ちゃんは…タケルと同じ学校？」

「は、はい、同じ学校で同じ学年です」

傍で見るお姉ちゃんのみ。タケルとママに似てる。

「じゃ、毎日、会えるからいいね。マジ可愛い彼女だあ。お姉ちゃん嬉しいよ。タケル」

苦笑いしていた夫を見上げながら私の肩に腕を回して抱き寄せてくれたお姉ちゃん。性格もママ似だ。良かったあ！ 念願のお姉ちゃんに会えて。夫がまた周りを見回す。

「あ、姉貴。皆…見てるよ」

「あ、そ、そう」

お姉ちゃんは私の肩から腕を離す。

「タケル…。いいじゃん。周りの目なんて気にしなくってさ」

私はお姉ちゃんの腕に自分の腕を絡める。お姉ちゃんはクスッと微笑んで私の肩に頭を着けてくれた。

「彩ちゃんみたいなの可愛くて素直な娘がタケルの彼女で嬉しい」

「そ、そんな…」

髪を撫でながら俯いた。本当に、私とお姉ちゃんって似てるのかな？ 似てるんなら嬉しい。

「私ねえ…。こうやってタケルの彼女と腕組んで話するの夢だったんだあ。今日…その夢が叶うなんて思わなかったよ」

ああ、ダメだ。そんな優しく言われたら、涙出る。私の肩から顔を上げて、感慨深げに遠くを見詰めるお姉ちゃんの横顔。私は太股に力を入れて涙を押し込んだ。

「ねえねえ。彩ちゃん、今度、私の部屋に遊びにおいでよ」

夫の顔なんて見上げず、即決。

「は、はい！ 行きます」

勝手にしろ。苦笑いを上向ける俺。

「姉貴、こっちに部屋あんのかよ？」

姉貴の隣に腰を掛けた。

「うん、もつ…3カ月なるよ」

「エッ？ 3カ月も」

都合が悪くなると、姉貴は俺からソッポを向いて妻と話を続けた。

て、事は帰ってきて3カ月かよ？ んなの連絡ぐらいくれよってんだよ。手を取り合って話す二人。雄二や親父が言うように、こう見たらやつぱり似てのかなあ？

「じゃさあ、今日、うち来ない？」

え？ 今日？ 二人に顔を向けた。

「行きます行きます」

姉貴が俺に振り向いた。

「丁度さあ。今日、友達と私の部屋で鍋する約束してたの。で、タケルも誘おうと思ってたんだけど、メールも携帯も繋がらなかったし。夕方、家に電話しても誰も出ないし。諦めてたんだよ。ここで会えて良かったよ」

俺、家に掛かってきた電話なんて全く出ねえしな。夜はお袋がいるから掛け辛い。でも変だな？

「お、俺、だいぶ前にメアドと番号変えたって姉貴にメールしたよ」

「そうだったけ？」

サッパリと返した姉貴。またソツポを向いて妻と話を再開する。相変わらず、人のメール見ねえなあ。まあ、今日は彩も俺も予定ねえけどさあ。

「ねえねえ、彩は、どんなお鍋好き？」

もう、ちゃん外してるよ。

「お姉ちゃんに任せるよ」

で、おめえは、もう、お姉ちゃんかよ？ 女二人の稲妻のような会話に口なんて挟める予知ない。好きにしるよ。って、もうアドと番号交換してんのかよ!？

「始めまして。美紀です」

「始めまして。彩です」

若い女の子に慣れていない私。人生初の経験に笑っていいやら、澄ましていいやら。顔の筋肉が痛い。美紀ちゃん、あの誠と千佳の娘で息子の彼女。彩ちゃん、あの裕子を感服させた娘で息子みたいなタケルの彼女。二人とも可愛い。

「こんばんは。雄二の母です」

何だか、父兄会のようになった私の挨拶。勇作とタケルがぐすつと溢す。もう仕方ないでしょ。

「あ、始めまして…。雄二の父です」

畏まった45度の挨拶。タケルと顔を合わせてぐすつとやってしまっ

袖にギャザーが入った薄紫のタートルニットのセーターに黒のス
キニーパンツ。ショートヘヤの雄二のお母さんはパパとタケルが言
つてたように綺麗。麻のジャケットと黒のインナー。ショートウル
フぽいヘヤのお父さんは雄二に似ている。雄二のお父さんとお母さ
んの照れ臭さそうな笑顔を眺め、私は幾分落ち着き、隣にいてくれ
た彩と少しはにかんで店に入った。

「こつちこつち。座ろ座ろ」

タケルが私達を手招きする。

「あ、ちょ、ちつと待って。じゃあ…雄二と美紀は向かい合わせで
奥行つてくれ」

タケルの言うがままに、私と雄二は6人掛けのテーブルの一番奥
に着く。ここは、タケルに任そう。

「で…オヤツサンは雄二の隣で。ヨツチヤンは美紀の隣。彩はそこ
で、俺はこつで。OK」

お袋を美紀と彩で挟み、親父と対面にさせる。こつすると、お袋
は初対面の二人と話し易いし、箸休め程度に向かいの親父とも喋れ
る。お袋を主体に席位置を決めるなんて、流石、タケルだ。親父じ
やない。お袋の気分次第で、この会の動向が決まると読んだタケル
は正解。合コンなんかで席位置を決めるのは俺の楽しみだったけど、
彼女と親が初対面するような娯楽性のない会で、とても、それだけ
の余裕を持てる精神状態でなかった。

「おお、この位置いいよな。皆の顔、見易いからよ。おまえも若い子に挟まれたら、目立つねえ」

単純な親父はこれでいい。

「ど、どう言う意味で目立つんだよ!？」

お袋が親父に返すと両隣の美紀と彩が普段見せない上品さで、口に手を当てて笑った。つくづく、タケルと彩がいてくれて良かった。もし、二人がいなかったら、親に何を喋られるか分からない、連続緊張の中、きつと、俺は飯を黙々と食らい続け、ただ一向に時が過ぎるのを待ち、俯いた美紀は親に顔を上げるタイミングさえ掴めなかっただろう。タケルが親父越しに、沈黙していた俺へ顔を突き出してきた。

「雄二、後は頼んだぞ。おめえらがメインだからな」

んな寂しい事言つなよ。先輩。

「い、いや。そう言われちゃうとさあ……」

漸く喋れた俺は頭を撫でて作り笑い。

「もう、しょうがない子だねえ」

お袋が美紀に笑顔を向けた。美紀も笑顔を合わす。もし、タケルがこれを狙って俺に話を振ったのなら、タケルは紛れもなく天才だ。

「雄二」

タケルがお通しを持って来てくれた由美と智喜に顔を向けた。そ
だ。ここは俺が紹介しないと。

「この前、話した由美と智喜。ここでバイトしてんだ」

親父とお袋が立ち上がる。そ、そんな丁寧にしなくても…。

「いつも、雄二がお世話になってます」

親父が挨拶すると、頭を下げるお袋。いや、ほんと世話になって
るよ。

「いえいえ、こちらこそお世話になってます。今夜は楽しんでいっ
て下さい」

いつもと全く違う上品で素敵なお顔をみせた由美。

「始めまして。智喜です」

「あら、カッコイイ子だねえ！ 彼女いるの？」

「い、いや…。いないっす」

突拍子もないお袋の質問に困った智喜がエプロンを握り締めて俯
いた。

「ヨツチャン、ダメだよ。今夜はオヤツサンと俺らがいるんだから、
他の男に目移りしちゃ」

タケルが上手く皆を笑わせくてれた。やっぱり、何か汗かくよ。

「お飲みもから先にお伺いします」

笑い終わった俺達を見て、オーダーを取り始める由美。

「おまえら、飲む？」

その「飲む？」の意味が酒と把握した俺。雄二と一緒に首を振った。この前から飲み過ぎだよ。俺。

「美紀ちゃんと彩ちゃんは…何飲む？」

雄二のお母さんも美紀と私に尋ねてくれた。烏龍茶で、と答えた美紀に私も、と合わせるこうやって見ると、美紀と雄二のお母さんの横顔は確かに似てる。

「じゃあ、生中二つに烏龍茶二つとコーラ二つ」

お母さんが由美にオーダーを告げた。

「この前言った通り…二人…似てんだろ？」

隣のオヤッサンに囁くと、ヨッチャンと美紀をちらちらと眺めた。

「言われてみればなあ…」

俺とオヤツサンのひそひそ話にヨツチャンが反応する。

「何また二人で？ この二人…。いつも、いつやらしい笑いすんのよ」

お母さんが美紀と私を交互に見ると、私達は俯いて笑った。

「雄二、オヤツサンも認めたぜ」

その意味を把握した雄二。テーブルに肘を突いて苦笑いする。ヨツチャンが不思議な顔をした。

「何よ？ あんたら」

彩を見ると、彩も意味を理解している様子。俯いて笑いを堪えていた。

「いや、この前、美紀の家に遊びに行った時、親父と俺が言ったんだよ。ヨツチャンと美紀が似てるって」

顔を合わせるお母さんと美紀。

「ま、まあ。この歳になって美紀ちゃんみたいな可愛い娘と似てるって言われたら…嬉しいけどね」

両肩を上げた美紀。顔が赤く微笑んだ。

「俺は…似てないって思うんだけどね」

お通しの枝豆を摘みながら美紀を見詰める雄二。

「うん、確かに美紀ちゃん可愛いから…勿体ねえよな」

「何が勿体ないのよ!？」

お父さんとお母さんのやり取り。美紀と私の笑いを誘う。

今日、美紀は上品過ぎる。ここは、俺しか振れねえな。

「こいつら、今日は大人しいけど…普段は強烈なんだよ。な? な?」

俺は美紀と彩に顔を向けた。

タケルが気を使っていたのが分かった。

「ちょ、ちょっと、強烈はないでしょ? 雄二のお父さんとお母さ

んと会うのが初めてだから、緊張してるだけだつて。ねー、美紀？」

「うん、なかなか緊張して言葉が…」

由美が飲み物を持って来てくれた。

「何でも話してくれていいよ。雄二とタケルの恥ずかしい話。何でも喋ってあげる」

美紀と私の笑いを誘ってくれるお母さん。

親父の背中を越して俺の腰を突き、タケルがテーブルの隅に立ってかけられてたメニューを指した。

「これ？」

俺は頷くタケルにメニューを渡した。

タケルが由美を見上げた。

「あ、ついでに、この娘も、やっかましいんだよ」

「な、何言ってるのよ!？」

テーブルに飲み物を置いた由美がトレーでタケルを叩く真似をする。

「女の子はねえ。こつやつて元気な方がいいの。あんたらも、暗い子猫みたいな女の子が好きないじゃないでしょ」

お母さんがビールのジョッキを両手で包みながら言った。

「そりゃ、もう、俺もタケルも父親と一緒に。猛獣マニアだよ」

「うちらは猛獣かよ？」

いつものように雄二に突っ込む美紀。

俺が渡したメニューを広げたヨツチャン。

「美紀、彩、何食べる？ 遠慮しないでね」

いい感じで、ヨツチャンがちゃん付けを止める。一瞬、顔を見合わせた美紀と彩。二人は微笑んで、真ん中のヨツチャンに寄ってメニューを覗き込んだ。

「出来るだけ名前は呼び捨てで」。この日の為に、私は裕子からアドバイスを貰ってた。「初めて彼氏の両親と会った日を思い出したら、相手の心境が分かるでしょ？ 息子の彼女の緊張を解くのは母親の役目だよ」。だよ。裕子の言葉を思い出した私。あの日、勇作のお母さんの優しい笑顔と気さくな雰囲気私を緊張から救ってくれた。今度は、私が息子の彼女を救う番。

何気にメニューから目を外し、彩と由美の顔を見たら、二人とも静かに頷いてくれた。よし！ 前進した。

久しぶりに若い娘を相手にしてる芳惠を見た。昔はよく、佐紀と楽しくやってたなあ。うちは坊主一人だから、昔から芳惠の奴、女の子育てたがってたからなあ。

「オヤッサン、どうしたの？」

「あ、いやいや、おまえらも遠慮なしに食べよ」

店の扉が見易い位置に座った俺。扉が開く度、客に目を向ける。メニューに目を落とした瞬間、また扉の開く音。目を向けると…。来てくれた。漸く、その人が来てくれた。

内股になり、ベッドの下から取ったティッシュボックス。取り急ぎ、ティッシュを5枚抜いて股間に挟む。うわわわ、大量じゃん。私はティッシュを挟んだまま、またティッシュを5枚抜き取り夫のチンコを眺めた。

「タケル…。チンコふやけちゃってるよ」

チンコにティッシュを当てた。

「そりゃもう頑張ったから。彩…。大丈夫？」

まだ高揚感がなかった夫。頭だけを低く上げた。

「大丈夫ってか…。最高だった。あんな凄いエッチ初めてだったからさ」

これまた高揚感が無くなった可愛くふにやったチンコを笑顔の私は拭き続ける。

「彩…。擦ったくなっちきた」

「我慢してる。もうちょいだからよ」

内股気味の夫はか細く笑ってた。チンコを綺麗に拭き上げ、お約束のチューをチンコの先端に落とす。

「うんが！」 夫が腰を引く。もう大丈夫かな？ 試しにチンコを絞り上げると、先から、またじんわり滲み出てくる精液。何だよ？ まだあんじゃねえか。ペロンとその勿体ない絞り汁を舌で掬い上げた。

「うほっ！」

腰を突き上げる夫。

「びしょびしょじゃん」

チンコを完璧に仕上げた私は汗塗れになった夫の胸に触れた。

「ちょっと待ってね」

夫のチンコを拭いたティッシュを私の股間に補充し、押し込んだ。エコでいいや。下腹部に力を入れ、夫の分身を絞り出しながらアソコを綺麗に拭き、丸めたティッシュをごみ箱にシユート。

「よいしょっと」

立ち上がった私。クローゼットに行き、扉を開けてバスタオルを二枚取り出す。

「ほんと、ご苦労様でした」

ベッドの上に戻った私は夫の胸をバスタオルで拭きながら夫の唇に自分の唇を落とした。

「もう喉渴いてない？」

「うん、大丈夫」

「後で…一緒にシャワー浴びよ」

「うん、浴びよ」

唇を離し、夫の体を拭き上げた私。別のバスタオルを私の液が染み込んで地図になったシーツの上に敷いた。

「彩…。こっちおいで」

髪を後ろに流した私は夫の腕へ堕ちていった。

「愛してるよ…。…」

そつと唇が重なる。

「愛してるよ…。タケル…」

唇を着けたまま夫の頬を指で撫でた。

「マジ…凄かった」

「新婚だからさ。テンション上がったよ。でも、こんな毎回は無理だな」

舌の絡みを強めた。

「毎回こんなエッチだったら…奥さんとしてタケルの体心配しちゃうよ。でも、無茶苦茶気持ちよかった。連続で3回いったからね」

夫が柔らかく微笑むと、その瞳の輝きが微かに薄くなる。

「女はさあ…。それ出来るんだよ。男は一発終わったら、ちょっと次まで時間掛かるから、連続でいけない」

「そうなんだ。だから…こんな、チンコ、可愛くしなっちゃってんだね？」

夫がクスクスと笑う。

「そうそう。だから、一発に掛ける思いが強いんだ。男は」

舌をチロチロさせて笑いながら夫の髪をバスタオルで拭く。

「楽しみだね？ 今夜のお姉ちゃんとの鍋パーティー」

「うん…。楽しみは楽しみんだけどさあ…」

夫の目が沈んだ。

「姉貴がお袋に黙って店辞めちまってるだろ？ 今、何してるのか聞いても、上手くはぐらかされちゃったしさ」

「心配？」

私の髪を撫でてくれる夫。

「心配は心配だけど、姉貴にしちゃあ、弟の俺から色々干渉されるのも嫌だろ。それに、男の俺に話せないような事もあるだろうし…。姉貴と弟ってのは微妙で難しいよ」

「弟は微妙でも…妹なら？」

「美紀？ いや、まだ姉貴は美紀の事しら…」

私の視線と笑顔に夫が気付いた。

「そっか。俺と結婚したんだから彩も…」

「妹だよ」

夫に体を密着させると、夫は私のお尻を撫でてくれた。

「そんなに姉貴と仲良くなりたいの？」

「お姉ちゃん欲しいのは美紀だけじゃないよ。私も欲しいし。由美も一人っ子だから、きつとお姉ちゃん欲しいと思うよ」

「おまえら3人に姉貴かあ？ スゲエなあ」

私の肛門をなぞる夫の指。少し固さを取り戻したチンコに私は気付く。

「シャワー浴びに行こ。私：早くお姉ちゃんところ行ってお手伝いしたいから」

唇と指を離れた夫が体を起こした。

「彩…。愛してる以上の言葉ってあるのかな？ もし、あったら、彩に伝えたいんだけど」

汗を残す夫の背中に飛び付いた。

「それが愛してる以上の言葉だよ」

朝、学校でメールを送ったら、午後一で返事がきた。

一緒に学校を出た彩を家まで送った後、俺は待ち合わせ場所に指定した駅に程近いイタリアンカフェに急ぐ。バイトまで1時間ちょい。十分だ。

「連絡着いたから。今日、話してくる」

雄二は自分の席から俺を見上げた。

「どう言っつ反応するかなあ？」

ポケットに手をつ突っ込み、溜息をつきながら窓の外を眺めた。

「驚くだろうけど…。俺らの仲間に関わることを。真剣に話してくる」

机に向かって溜息をつく雄二。

「タケル。あいつらが…この事知ったら…？」

「何も変わらないさ。俺とおめえで変えさせない」

雄二は笑顔を上げる。

夜が主体のその店。閑散とした店内に窓から夕日が差し込む。

「あれから彩に怒られたんじゃない？」

テーブルを挟んで、真紀さんは、あの日と変わらない素敵な笑顔
をくれた。

「次の日、散々、小言吐かれたよ」

口に手を当てて笑う真紀さんを眺めながら、俺はアイスコーヒ―
を注文した。

「で、真紀さん……。話なんだけど……」

真顔になった俺。真紀さんは口から手を離した。

バイトが終わり、白い息を両手に吹き掛け、国道を渡った俺。夜
10時過ぎ。閉じられたシャッターだらけの商店街を抜けて駅裏に
出た。いつもの帰り道。駅裏に、たった一軒だけ立つラブホテルの
前を通り過ぎ、寂れたネオン街に差し掛かった。何？ 慌ただしい
足音に気付き、俺は足を止めた。そのラブホテルの裏口に通じる路
地から猛然と飛び出して来た影。白い息と共にネオンの中に染み入
るうとしていた。ツーサイドアップにした長い癖っ毛。見慣れた小
さな後ろ姿。間違いない。

「由美！」

俺が叫ぶと、その背中は一瞬と止まり、恐る恐る振り返った。

「タケル…」

偶然出くわした由美に、俺はダウンジャケットに両手を突っ込み、笑顔を浮かばせて歩み寄る。

「こんなところで何してんだよ？」

由美の白いダッフルコートに紫のネオンが映り込んでいる。え？
ダウンジャケットから両手を出して、俺は足を止めた。白い息を
吹き上げながら小刻みに奮える口。頬はマスカラでくすんでいる。
由美…。ゆっくりと俺は由美に近寄った。

「タケル…」

小さく俺の名を呼んだ由美。力尽きるように膝から堕ちる。

「由美！」

慌てて、駆け寄る。何とか間に合い、俺は由美を両腕で支えた。

「どうしたんだよ!?!」

由美は奮える唇と白い息を俺に上げた。

「タケル…。ちょっとでいいから胸貸して…」

相当だな。

「あ、ああ、好きなだけ使え」

由美の嗚咽が俺の胸に倒れた。

窓際のテーブルで、林檎を剥いている由美。俺は視線を由美から病室の天井に移した。

「由美……。俺：変か？」

時計の音と由美の足音しか聞こえない。

「由美……」

ベッドの傍に立った由美は皿に盛った林檎にフォークを刺した。

カプチーノ

俺達の注文を取る由美はカウンターの隅に座った真紀さんに気付いていない。気付いたら、きつと驚くぜ…。テーブルの端にいた俺に気付いた真紀さん。手を軽く振ってくれた。

「ご注文繰り返します…」

由美はテーブルから厨房に戻る時に必ず真紀さんに気付く。俺は由美の反応に対して心の準備をした。以上で？喜んで！と元氣よくテーブルを離れる由美。いよいよだ。由美の事だから、きつとデカイ声上げる。

「ママァッ!!」

ほらあ！由美の声に反応し、ヨツチャンと美紀が振り返り、オヤッサンと雄二が椅子から少し身を起こした。で、俺は次の反応を待つ

「真紀姉…」

ヨツチャンが呟く。

「真紀ちゃん？」

啞然と言うオヤッサンを尻目に、俺と雄二は頷き合った。

「え？ 由美のお母さんなんでしょ？」

美紀が呟くと、ヨツチャンとオヤツサンが慌てて美紀を見た。口を開けたまま、ゆっくり俺に振り返った彩。オヤツサンが俺と雄二にキヨロキヨロと視線を振る。

「雄二…。タケル…。真紀ちゃんって、由美ちゃんのお母さんなの？」

「真紀ちゃん？ 真紀姉？ あれ？ 親父もお袋も…由美のお袋さんの事知ってるの？」

眉間に皺を寄せて親父さんに返す雄二、白々しいけど、まあいや。

「む、昔…ちよつとな」

オヤツサンがビールのジョッキに視線を落とした。

「まあまあ、話は後にして、乾杯しない？」

俺はグラスを掲げた。

「息なり、どうしちゃったの？ ママ」

「娘の仕事っぷり見に来ただけだよ」

「珍しい」

厨房から、智喜がカウンターに来た。

「あ、紹介かいすんね…」

「また格好いい子だねえ。由美の彼氏？」

「いやいやいやいや…」

一緒に首を振る私と智喜。

「友達の、智喜」

「初めまして。智喜っす。タケルから由美のお母さんの事聞きました。綺麗な人だって聞いてたんで…。想像以上に綺麗なお母さんでびっくりしました」

「何言ってるのよ!」

照れ笑いの私。智喜の胸を叩いた。

「コラコラ! 自分の母親が褒められてんのに何してるのよ」「何か恥ずかしいじゃん。あ、偶然、タケルと彩も来てんだよね。まだママ会った事ない美紀と雄二も来てるから。後で、紹介するよ。それと、雄二のお父さんとお母さんも来てるから」

「うん、勇作と芳恵でしょ? よく知ってるから」

「エーッ!?!」

一緒に叫んだ私と智喜。

「この前、彩と親父の家に遊びに行ったんだ。そこで、偶然、親父の家族写真見て…」

俺を見詰めたまま、カプチーノを飲む真紀さん。

「由美のアルバムの中にいた人が親父の家族写真に写ってた。真紀さんの…妹さん」

真紀さんは驚かない。やっぱりそうか…。

「タケル…。ごめんね。私は最初から分かった。あなたが裕子と誠の息子だって」

察しがついていた。俺も驚かない。アイスコーヒーが来た。

「聞きたいだ。お袋と親父と…真紀さんの妹さんの事」

真紀さんは俯いて暫く黙り、少し微笑んだ後、話し始めた。

「裕子、誠、私の妹の千佳がまだ高校生だった頃。三人とも仲良くってねえ。よく私の家に来て騒いでた」

真紀さんを見詰めたまま、俺はアイスコーヒーにストローを刺した。

「そして、ある日を境に、裕子と誠が付き合い始めた。千佳も誠の

事が好きだったけど…こればかりはどうしようもない事だった」

グラスを持ち上げ、俺はアイスコーヒーを吸った。

「で、お袋が高校卒業直前に妊娠した」

カプチーノのカップから口を離し、真紀さんは頷いた。

「高校卒業して裕子と誠は結婚したわ。裕子は出産後、誠のお母さんの後を継いで美容師になって。誠はデパートに勤め始めて。千佳は大学へ行った」

アイスコーヒーからストローを抜き、直接グラスに口を着けた。

「誠と千佳は18年前、偶然、誠のデパートで再会して」

そこまで聞けば十分。真紀さんに笑顔を送った。

「真紀さん、ありがとう。なかなかこう言う事は、親に聞き辛くて」

真紀さんは少し顔を俺に近付けた。

「タケル。これは完全に千佳の罪だよ。千佳は誠が結婚してるの分かってた。私と両親が千賀の妊娠を知った時、千賀は父親の名前を言わなかった。出産後、千佳は一人で子供育てたいからって、直ぐに家を出て…」

アイスコーヒーを一気に飲んだ。

「千佳が家を出て三年後、私は千賀の父親が誠つて事を知ったの。私は激怒して千佳と絶縁した。千佳が亡くなったの知ってもお葬式にも行かなかった。だって、裕子も私にとっては妹みたいな存在だったから。自分の親友の旦那と不倫して、その子供を産むなんて事した千賀を許せなかった」

「1番の罪人は…俺の親父だよ。」

テーブルにのめり込み、俺に訴えていた真紀さんは力を抜いて椅子に背中を戻した。

「親父は拒絶できたはずだよ。それをしなかった親父はお袋と千賀さんを不幸にした。ただ、俺は親父を恨んじやないよ。大人の事情に自分の感情まで振り回されたくない。俺…親父好きだよ。何か憎めねえよ。あの人」

俺が笑ってグラスの氷を口に含み、ガリガリ嚙ると、真紀さんはバッグからハンカチを取り出した。

「由美は…この事を知ってるの？」

ハンカチを目に当て、首を振る真紀さん。

「由美の奨めで、裕子の店に行った時はびっくりした。まさか、裕子の店だと思わなかったから。でも、裕子は何の躊躇いもなく私に…私に抱き着いてきてくれた。でも、由美が私の娘つて事は言えなかった」

「俺と由美の仲を心配してくれたんだ？俺と由美がこの事実を知ったら、俺達が俺の親父と由美の伯母さんの事を知ったら、お互い

避け出すと思つた？」

鼻水を啜りながら、真紀さんは頷いた。微笑んで首を振る俺。

「そんなの有り得ないよ。何があつても、俺と由美は親友同士だよ」

目からハンカチを離した真紀さんは微笑んでくれた。

「真紀さん。俺らの入学式には来なかつたの？」

「う、うん。丁度、日勤の日で、旦那が行つたわ」

「それで、気がつかなかつたんだ」

「な、何を？」

「親父も来てたんだ」

真紀さんは視線を左右に振つた。

「そ、そりゃ、タケルの父親なんだから、入学式には……」

「いや、俺の父親としてじゃなく……」

夕日が差し込み窓に、真紀さんは顔を向ける。

「タケルの父親としてじゃなく？」

そして、ゆっくりと俺に夕日に染まつた顔を戻した。

「もしかして…千賀の娘」

俺が頷くと、真紀さんの目と口が微妙に開いた。

「美紀って言うんだ。もう兄妹なんて関係度外視した俺の親友さ。俺の親友って事は由美や彩の親友でもある。それと、雄二って知ってるよね？」

「勇作と芳恵の…」

「そう。今、雄二は美紀と付き合ってる」

真紀さんの笑顔が夕日に染まった。

「きつと…千賀さんもお袋も、真紀さんの事が大好きだったんだろね。だから、二人とも自分の娘に真紀さんとよく似た名前つけたんじゃないの？」

笑いながら、真紀さんはハンカチを目に当てた。

「タケル…。大した奴だね。こんな年上の女泣かすんだから」

「自信になりました」

「バツカ！」

眉間を絞る笑い方が由美と美紀にそっくりだ。

「今度、由美のバイト先で美紀が雄二の両親と会うんだ。俺も彩と一緒に行くから、真紀さん…会ってみる？」

暫く考え、真紀さんはカプチーノを飲み干した。

「どの面提げて姪に会ったらいいか分かんないけど、会ってみよっか」

乾杯の後、私達は雄二のお父さんから真紀さんが美紀のお母さんのお姉さん、つまり、美紀の伯母さんだと聞かされた。

「彩！ 美紀！」

そして、慌ててテーブルに戻ってきた由美の顔を見て、皆、笑った。きっと、真紀さんから同じ事を聞いたんだろ。

「こ、これって、運命的なものを感じますよね？」

皆が私を見た。

「美紀と雄二は会おうべきして出会った。そう言う運命だったと思います。タケルも雄二も智喜も美紀も由美も私も皆、会おうべきして出会った。この世界に偶然なんてないかも。きっと何か運命的なものがあつたから繋がりを持ってたんだと感じます」

流石、あの裕子が認めた娘だ。きつちり、纏めてくれた。

「彩の言う通りだよ。そう考えれば、何も不思議な事ないよ」

美紀に顔を向けると、美紀は何の動揺も感じさせない、可愛らしい笑顔を浮かべて頷いた。私が千佳から美紀を預かりたい。

「オヤッサン、ヨツチャン…。どう？ こつなりや真紀さんも一緒に？」

「お、おう、そりゃもう…。その代わり、おめえら、俺の昔話は真紀ちゃんに聞くなよ」

「それ、聞けって言うてるようなもんだよ！」

ヨツチャンの突っ込みに皆が大爆笑。

「じゃ、俺、ちょっと呼んでくるわ」

由美、大丈夫かな？ 私は由美を見上げた。

彩、大丈夫だよ。私は心配そうに顔を上げた彩に微笑んで頷き、タケルと一緒にテーブルを離れた。

「タ、タケル…」

私の小声に、タケルが振り向いた。上目遣いで見詰める私。

「由美…」

タケルは私の視線の意味を理解してくれた様子。笑顔をくれた。

「俺達はどっからどう見ても血は繋がっちゃねえよ」

「だ、だよ。良かったあ！」

二人ともテーブルとカウンターに声が漏れないように少し寄り添って話した。

「考えたら分かるじゃねえか」

私の腕を叩くタケル。私は俯いて息を吐く。

「いや、ママから話聞いた時、私…頭混乱しちゃってさあ」

タケルはクスクスと溢す。

「血縁あるのは由美と美紀と俺だけだよ」

「だから、その言い方がややこしいって。最初、私もそう考えて頭こんがらがったんだから。血縁があるのは私と美紀、美紀とタケルだよ。分けて言わないと」

タケルが何度も頷いた。

「そ、そう、そう言うことだよ。俺と由美の間には、血縁より確かな友情しかない」

由美の笑顔に涙が混じった。

「今だけ…あんたを抱き締めてキスでもしてやりたいよ」

「知ってると思うけど…そう言うのを一番嫌う人がそこで俺達を見る」

俺が振り返った先には俺達に手を振る真紀さんがいた。

ママを送った後、朝食をタケルの部屋に運ぶ。メニューはタケルの好きなウインナーのポトフ、ママに褒めて貰ったヨーグルトドレッシングのサラダ、半熟の目玉焼きとトースト。

朝食を乗せたトレーを片手で支えながら部屋のドアを開ける。まだベッドで爆睡するタケル。静かにトレーをテーブルを置き、寝息を立てるタケルに振り返った私。そっと抜き足でベッドに歩み寄り、布団に潜り込んで、タケルのトランクスを下ろす。お約束だからね。ぼろっと飛び出す、朝から元気なタケルのチンコ、ぎんぎんに固い。我慢なんて出来ない。私はその先端をくわえこんで舌をくちゅくちゅと鳴らした。微妙に、動き始めるタケルの太股。徐々に寝息が、うふうふう…、吐息に変わる。もっと感じて。尿道から滲み出す我

慢汁を啜りながら、邪魔な布団を捲り上げ、右手で玉を転がした。チンコの裏筋に這わせる舌を根元まで滑り落とし、パクツとその茎を唇でくわえてコリコリと舌で鳴らす。我慢汁が根元まで…。スエツトパンツと下着を脱ぎ捨て、下半身を露にした私はタケルのトラックスを足元から取り去った。

「彩…。おはよ」

完全に目を覚ましたタケル。私はタケルの両足の間に入り、チンコを口に含んだままタケルに視線を上げる。

「うはあよう…」

口からチンコを出し、その裏にチュツと音を立てた。

「朝ご飯出来てるけど…」

またチンコを口に含み、突き上げた尻を微妙に振る妻。朝飯なんて後にして、早くしたい。妻のサインは分かった。昨日の夜、妻がお袋の部屋で寝てくれたお陰で、一人でゆっくり考えられた。夕イミングはどうであれ、俺は親父の家で分かった新たな事実を妻に話そうと思った。

「彩が先に決まってるんだろ」

したくて堪らなかった。スエツトを脱ぎ、全裸になって、タケル

に覆い被さる私。

「彩……。その前に、話しておきたい事がある」

チンコを膣に押し当てたまま、私は動きを止めた。

雄二は親父の家に泊まるらしい。後片付けも終り、9時を回って、そろそろ、帰るか？ うん、と頷く彩と一緒に玄関に立った。玄関まで俺と彩を送ってくれる皆。親父がいるから、雄二は美紀とセックス出来ねえんじゃあ……。ま、親父が寝静まりや、美紀の部屋に忍び込んで、このスケベならやるだろ。意味付きの肘で雄二を突くと、その意味が分かったのか、スケベ野郎がまた鼻の下を伸ばしてニンマリしやがった。好きにしろや。幸せもんが。

「お構い無しで悪かったな」

満足そうに腹を擦りながら微笑む親父。

「いやいや十分だったよ」

「パパ、美紀、雄二。ありがとう。最高に楽しめた」

「今度は由美も一緒に皆でパーツとやろうよ！」

「彩から手を離れた美紀。俺と彩は靴を履いた。」

「美紀、雄二、じあな」

雄二の腕を叩くと、ハイ、タケル、ちょっと顔の赤い美紀が俺に唇を突き出す。当然、バカ、と一蹴する。ケラケラと笑う雄二と親父、そして、彩も。親父がズボンの後ろポケットから封筒を取り出した。

「タケル。これ…二人のデート代の足しにしてくれ」

彩と顔を見合せた。

「ありがとう。貰っとくよ」

もう一度、彩と顔を見合せ、軽く微笑んだ。

「おい、美紀。兄ちゃんからの小遣いだ。二人のデート代の足しにしる」

親父から受け取った封筒を美紀に差し出した。

「いや、や、そ、それは、タ、タケル、おまえに！」

「そ、そだよ。タケルのだよ。ダメダメダメ…」

親父は言葉詰まりになり、美紀は両手を振って封筒を受け取らない。

「俺は一旦受け取ったんだ。後はどうしようも俺の勝手さ。ほい、美紀」

俺は美紀の手を取り、封筒を握らせた。

「じゃ、行こっか」

彩に顔を向ける。

「うん」

「いつでも遊びに来いよ」

親父に軽く手を振って、彩の手を強く握り、玄関を出た。

「マジ、今夜：お袋の部屋で寝るの？」

ピンクに頬を染めた彩を覗き込んだ。こう言つ変色した彩とエツチしてえんだけどなあ。

「うん、ママと寝るの楽しみなんだよねえ」

彩が俺の腕にしがみついてきた。嬉しそうな顔しやがって。雲でぼんやりとさせられた月が苦笑いする俺の複雑さを代わりに語ってくれているようだった。

居酒屋からの帰り道。握っていた俺の手を離れた彩。徐にその手を俺の二の腕に滑り込ませ、胸を押し付けて来た。

「タケルは…分かってたんだよね？」

俺を見上げる彩の顔。車のヘッドライトに照らされた。

店奥の広いテーブルに移動した。飲み好きで賑やかで姐御肌の真紀さんに場を盛り上げられ、真紀さんとヨツチャンに挟まれた美紀と彩も遠慮なしに笑い声を上げていた。俺は真紀さんに赤ワインを注いだ。

「お、タケルも行くよ！」

俺からボトルを取り上げた真紀さん。来たよ…。ボトル注文する時に人数分のグラス頼むから変だと思ったんだよ。顔を寄せ合って笑いを堪える彩と美紀を眺められながら、観念して、俺はグラスを摘み上げる。わわわ、多いつて。

「ほい、次、雄二行くよ」

真紀さんはビールを飲むオヤツサンを越し、雄二にボトルを差し向けた。

「え？俺もつすか？」

「あつたりめえだろ！おめえ、真紀ちゃんの酒飲めねえってのか？」

相当、オヤツサンは真紀さんに頭上がんない様子。

「いやいや、そんなそんな」

落ち着かない視線の雄二がグラスを上げると、彩と美紀が堪らず笑い声を出した。

「よしよし。皆、いい子達だよ」

三人は乾杯し、グラスに口を着けた。ワイン見る度に真紀さんの顔思い出すよ。

「真紀姉…」

神妙な面持ちでヨツチャンが真紀さんに話し掛け、一瞬静かになる。

「真紀姉を…千佳だと思ってお願いがあるんだけど…」

皆の顔を見回した真紀さんがヨツチャンに顔を向けた。

「ど、どうしたの？ 芳恵」

「美紀を…私に頂戴」

ヨツチャン…。驚いて見開いた美紀。その瞳に見る見る涙が溜まる。彩の涙も溢れだした。

「私が…千佳と仲たがいでないでなきゃ、私が美紀を…」

俯いた真紀さんはバッグからハンカチを取り出した。

「本当に、ごめんね。美紀」

真紀さんはハンカチで目を押さえ、美紀は首を振って応えるのがやっと。

「私の姪っ子の事、美紀の事、宜しくお願いします」

多分、いや絶対に雄二は泣いてる。フツと雄二に振り向いた。ほらあ！ 笑いを堪える為に俯いて悲しく見せた不届き者の俺。オヤツサンも泣いてるし。じわじわ顔を上げると、可愛いなあ。ハンカチで涙を拭く彩。抱き締めて押し倒してえなあ。場違いな所で欲情してしまった。

「じゃ、今日から美紀は雄二なんかより大事な私の娘だからね」

美紀の泣き顔もなかなかイケるよね。あー、んな、おしぼりで鼻擦ってるような雄二にや勿体ない。ハンカチを離して姿勢を直し、目を真っ赤にさせながら、美紀が見事な笑顔でお辞儀した。

「はい、宜しくお願いします。ママ」

ヨツチャンが微妙に笑って大いに泣いた。

「美紀、美紀。こっちもパパって呼んでやってよ」

小声で言った俺は隣のオヤツサンに顔を向ける。

「パパ。宜しくお願いします」

「は、は、はい」

オドオドしながら、姿勢を正すオヤッサン。こう言う所が雄二にそっくりだよ。

「オヤッサン、どう？ 生まれて初めてパパって呼ばれた感想は？」

「いやもう、生まれ変わったよ。親父とか…オヤッサンとか…オッサン臭いのばっかだったからよ」

そう言えば、俺の姉貴も、オヤッサンって呼んでたよな。俯いて吹き出した。

「あんたがオッサンだから仕方ないだろ！」

ハンカチから顔を上げたヨッチャンの突っ込みに、泣きながら爆笑する皆。ヨシ！ 作戦終了だ。俺は、一人、ワインを飲んだ。

雄二と美紀にも…俺と彩のようになって欲しかった。

「まだ、雄二のパパやママがタケルやママに遠慮して完全に美紀を受け入れてなかった事。タケルは分かってたんでしょ」

再び、彩は俺の手を握り、歩き始めた。

「ああ。だから、方法を探してたんだよ。どうやったら…オヤツサンやヨツチャンが素直に美紀を受け入れてくれるかって」

ほつとくぞ、と言いつつ、ほつとなかいタケル。私は分かったた。

「タケルから…実は由美と美紀が従姉妹同士だって聞かされた時。何冗談言ってるだろって思ったよ」

私はまたタケルの腕に自分の腕を絡めて縋り付いた。

「本当は姐御の真紀さんから美紀をお願いって、オヤツサンとヨツチャンに言っただけだよって。俺が真紀さんをお願いしてたんだけどさ。まさか、ヨツチャンから言うとはなあ。ま、結果オーライだよ」

足を止めてタケルの両手を握り、私はタケルと向かい合わせになった。

「タケルは…本当に友達思いなんだね。タケルのそう言うところ素敵だよ」

「彼女思いつてところも忘れんなよな」

「それは、いつも感じてる。忘れる訳ないじゃん」

少し長いキスの後、私はタケルの腕を取って歩き始めた。

「いらっしゃーい！」

マンションの部屋から出て来たお姉ちゃん。コンビニの袋をぶら下げる夫を抱き締めた。髪をブラウンのヘアバンドで束ねたお姉ちゃんはピンクのスエット上下で完全部屋着。部屋着で素顔のお姉ちゃんも可愛い。

「ちよ、ちよっと、姉貴、く、苦しいって」

いいじゃんいいじゃん、と夫を揺すりながら、お姉ちゃんは笑いを堪える私を見た。

「こんばんわ」

私が会釈すると、お姉ちゃんは直ぐに夫を払いのけ、私の手を取った。

「彩！ ささ、入って入って」

首を擦り、啞然とする夫を置き去りにし、お姉ちゃんは私を部屋に引き入れてくれた。

こっつ見るとこいつら似てるかあ？

姉貴の寄せ鍋を食うのは久しぶり。姉貴がまだ家にいた頃、仕事で忙しいお袋に代わって姉貴は、よく冷蔵庫にあるものを何でも鍋

にぶち込んで、寄せ鍋と称して俺に食わせてくれた。確かに、それは旨いと言えたもんじゃなかったけど、姉貴なりの努力を感じさせられた寄せ鍋で…。十分に俺の腹を満たしてくれた。だから、この日も、味よりも懐かしさを噛み締めるつもりだったけど。

「お姉ちゃん。私、出汁取るっか？」

「彩、出汁取れるの？」

「うん！」

「じゃ、お願い」

間違いなく上がる鍋の質。違う期待に切り替える俺。出汁取りに醤油以外の調味料を使った事のない姉貴は、直ぐ妻に鍋を譲った。出汁鰹や昆布など出汁取りの基本材料等を姉貴が持ち合わせていない事を知った妻は具材の海老、鱈、ハマグリ、烏ガラを少量づつ鍋で煮込み、汁が煮えて濁りが出てきた所で砂糖と醤油で味を整え、烏ガラ魚貝の出汁を作り上げた。そして、煮えた出汁に野菜類と余った肉、魚貝類を入れ、相変わらずの鮮やかな手捌きで妻は鍋を完成させた。

「凄い！ 彩、やるねえ！」

終始、鍋を覗き込んでいた姉貴は妻に感心していた。

「お口に合つかどうか…」

大人びた口調で、妻が照れる。

「そう言えば、姉貴の友達？ 彼氏？ 来るんじゃないの？」

烏龍茶を一口飲んで、姉貴に尋ねた。

「ま、まだあ…友達だよ。今から行ってくつて、さっきメールあったから、もう直ぐ来るよ」

久しぶりに姉貴の照れ顔を見た。

「あ！ 来る前に…写メ見たい？」

「見せて見せて」

先に反応する妻。両肩を上げて含み笑いだした姉貴はポケットから携帯を取り出し、ボタンを押して操作した。

「タケルと…彩と…同い年の子なんだけどね」

姉貴は携帯を彩に渡しし、どんな野郎だよ？ 妻に擦り寄った。

へ？ 携帯から顔を上げた俺と妻が見合った瞬間、姉貴の部屋のインターホンが鳴った。

柔軟性

「そこなら…分かる」

「おう。じゃあ、土曜の7時でどうだ？」

誠に連絡を入れ、由美のバイト先の居酒屋で会う約束をした。見ても聞いても虫唾が走った野郎と一緒にむ。今はお互い親父。21年の成長がお互いを認めさせてくれた。思いに更けながら携帯を切った俺。

どんな酒になっても酒じゃ負けねえ。当日を心待ちにした俺は10分程前に店に入った。店を見回しても、まだ誠はいない。いつも野郎に先越されてらな。勝負は先手必勝だよ。カウンターに着いた俺は昔の敵を一人笑いで待っていた。

「和ちゃん！ いらっしやい」

由美が肩を揉んできてくれた。

「おう。由美、今日は野郎二人世話んなるぜ」

「うん、ゆっくりしてっよ。あ、紹介するね。友達の…」

カウンターから振り向くと、どっかで見た奴が立っていた。

「おめえ…。確か、賢二んところで…会った事あるよな？」

「は、はい、智喜です。いや、あの、和巳んが…彩の、いや、彩さんのお父さんなんて…。全く、知りませんでした」

間にいた由美が俺と智喜を交互に見た。

「ふ、二人とも…知り合い？」

「お、おう、俺の昔からの弟分で賢二って奴がいてな。そいつが智喜の事、自分の弟…いや、もう息子みてえに可愛がつてんだよ。で、賢二の家で…な？」

おしぼりで手を拭きながら、俺は直立不動で緊張していた智喜を見上げた。

「はい、和巳さんに初めて会わして貰って…あの伝説の方ですから…。お、俺、緊張して何喋ったか、よく覚えてないです」

「んな大袈裟なもんじゃねえよ！ 伝説なんてよ。賢二の野郎が大袈裟に言っつてやがるだけさ」

由美が口に手を当てて笑う。

「んな、和ちゃん、悪だったんだ？」

「昔の話だよ。もう引退して長いからな。智喜も引退したんだよな？」

「はい、タケルと会って、族は…もう。」

タケル…？ 彩が言っつた事を思い出した。

「タケルと会っつて…。もしかして、タケルの野郎と一戦やった

「つてのは、おめえか？」

「いやー、と頭を撫でる智喜。」

「そうそう、もう凄かったんだから二人の喧嘩。彩と呆れてたよ」

「俺は頷きながら笑った。」

「もう勘弁してくれよ。由美。タケルには…何やっても敵わないっす。」

族の頭にそう言わせるなんて、タケルの野郎も大した奴だ。自分の息子を褒められているようで、妙に照れ臭い。

「おう、今日、誠が来るんだよ。智喜も賢二から名前くらい聞いた事あるよな？」

「え？ あ、あの誠さんすか？ いや、でも和巳さんとは…」

「おう、そうだ。今夜、ここでケリつけんだよ」

業と昔の低音を響かせた。

「い、いや、そ、それ…」

「嘘だよ。それこそ昔話だ。20年以上も経ちゃあ、昔の敵は今日の友ってな」

智喜の胸を拳で突いた。

ビックリしたあ！ 喧嘩で無類の強さを誇った和巳さんが唯一負けた勝負…。それこそ伝説化している和巳さんと誠さんの豪雨の決闘。賢二さんから、和巳さんが未だに虎視眈々と誠さんとのリベンジマッチを狙っていると聞かされていた俺は鋭い眼差しと声を交えた和巳さんの冗談に一瞬、体が奮えた。でも、どんな人だよ？ 誠さんって。緊張の反面、伝説のツーショットに心ときめかせた。

「こ、今夜は…俺が和巳さんと誠さんを接待させて貰います。何でも言っただけで…」

「気使わなくていいよ。由美と二人で好きなもん食って飲んろ。俺の奢りだからよ」

「あ、ありがとうございます」

「ありがと！ 和ちゃん」

由美が和巳さんの広い背中から離れた。んな、おまえ、和ちゃんて、誰だと思っただよ？ しかし、いざとなった時の彩の迫力は和巳さん譲りだよな。そりゃ、和巳さんの娘だったら怖いはずだよ。厨房に戻る俺と由美。その時、店の扉が開いた。

「おう、誠！ こっちだ」

この人が…。

姉貴が立ち上がった。

「来た来た」

俺はまだ彩と顔を見合わせていた。ドアの開く音がする。

「智ちゃん！ 入って入って」

「智ちゃん？ 俺と彩は同時に吹き出した。

「もう弟と弟の彼女が来てんだよね。彼女、無茶苦茶可愛い…」

姉貴の声と二人の足音が近付いて来る。彩にウィンクすると、彩はまた吹き出し、俺達はその瞬間へ準備をした。

「タケル！ 彩！」

そりゃ驚くよな。俺も彩もやっと遠慮なく笑えた。傑作過ぎだよ。智喜が落としたビニール袋から缶ビールが俺の足元へ転がった。

「智喜、こんばんわー！」

彩がいつもと変わらない笑顔で言うと、俺は缶ビールを拾い上げた。

「取り敢えず…」

缶を開ける俺。

「乾杯しようや！ 智喜」

言葉がない姉貴。無理もない。俺達と智喜を交互に見ていた。

妻の陰核、尿道、蜜壺、菊門。俺の唇と舌が止まらなくなって、もうどれくらい経つんだろ。俺は妻の体内から湧出するエキスをひたすら味わっていた。

「タケル…。ウンツ、ウウウア…。き、き、気持ちいい…」

シーツを握り締める妻。そんな時間の感覚は情念を混じらせる妻の呼吸によって遙か彼方へ吹き飛ばされる。

「タケル…。ああ、愛してるうつつ…。もっと、アツ！ あ、愛して…。か、体が…。う、浮かんでる…」

妻の両腿を引き寄せる。体を小刻みに痙攣させ異空間に吸収されようとしていた妻を必死で繋ぎ止めていた。

「愛してる…。彩…。彩のここ…。綺麗で素敵すぎるよ…。俺だけの…。美味しい…。俺だけの…。もんだよ…。彩…。素敵だよ…。蜜が…。蜜が…。止まらない。お尻の、お尻の穴まで…。か、可愛く動いてるよ…。クリも…。クリも…。固く、桃色に…。染まってる…」

出来るだけ卑猥に、明確に、舌と唇の働きを止める事なく妻の恥ずかしい部分の状況を説明した。

「タケル…。は、アッ、恥ずかしいよ…。タケル…。で、でも…気持ち、イツ、いい…」

まだまだ味わい足りない。時を寄せ付けない俺の欲は益々とその執着を強めていった。

「いつもみたいにリラックスしなよ。智ちゃん！」

乾杯の後、缶チューハイ片手の姉貴が智喜の背中を叩いた。

「智喜らしくないよ。学校の時みたいにさ、明るくやるつよ」

智喜の小鉢を取り、鍋の具を入れる妻。

「この鍋の出汁ねえ。彩が作ってくれたんだよ」

姉貴は白菜を頬張った。

「うーん、美味しい！」

やっと遠慮がちに笑う智喜。実に面白い光景。姉貴と智喜がねえ…。

「姉貴、今、キャバクラで働いてるんだっけ？」

ビールを飲み、俺は口の中に入れた白菜を冷ました。

「え？ 何で知ってんの？」

「この野郎がさ、いつも体育館の裏で姉貴の話ばっかするんだよ。智喜のバイト先の近くのキャバクラで働いてんだろ？」

「お、お母さんには…ぜ、絶対内緒だからね」

視線を下げ、姉貴はチューハイを一口飲んだ。

「言える訳ねえっての」

打って変わった笑顔を向ける姉貴。

「ありがと。流石、私の可愛い弟」

チューハイと一緒に笑いを飲み込こむ妻。

「でも、それが姉貴とは知らずに、俺も雄二も興味深々だったよ。んと、バカだよ。俺ら」

俺はビールの缶を口に着けた。

「タケル！」

息なり正座した智喜に、ビールを溢しそうになる。

「ゴメン！ お、俺…小夜子さんが、おめえのお姉ちゃんなんて知らなかったんだ」

んな謝る事でも何でもねえよ。落ち着いてビールを飲んだ。

「店じゃあ、姉貴は小夜子ってんだ？ 何か小夜子ってピンと来ねえよあ…。姉貴の本名は佐紀って言うんだ」

「佐紀…さん」

恐る恐る智喜が顔を上げる。

「んで、おめえは雄二か!？」

「ハッハハハハ…!」

唯一、その意味が分かる妻がお声を上げて笑った。あの時、雄二もこんな感じだったよ。

「姉貴…。こいつ、見掛けはこええけど、無茶苦茶仲間思いで良い奴なんだよ。俺もこいつに助けられた事あんだ。これからも、智喜と仲良くしてやってくれよ」

「夕、タケル…」

何、おめえ、また雄二みてえに泣いてんだよ？ しょうがねえ野郎だな。

タケルならきつとそう言うと思った。

「うん！」

お姉ちゃんが智喜と腕を組んだ。

「私…。智ちゃんといるとスツゴい癒されちゃうんだあ」

「お、俺も…癒されちゃいます」

涙ぐみかけた私。夫と見詰め合い、両肩を上げて微笑むと、直ぐ智喜に顔を向けた。

「智喜、体育館の裏でタケルとどんな話してたの？」

私が智喜に聞くと、夫が口からビールを零した。

「あ、いや、それは…」

言い辛らそうな智喜。きよろきよろと目玉を動かした。

「へー、私も聞きたいねえ。私にどんな興味持ってくれてたの？」

「いや、きよ、興味ってかさあ…。何？ ほら？ 相談だよ。俺と雄二は智喜の相談に乗ってただけだって。な、智喜？」

「お、おう、うまあ…んな…感じだったよな」

智喜のたどたどしい反応。夫の言った事が嘘と分かったけど、興味の対象がお姉ちゃんだったと言う愉快的結末に免じて、私は何も追求しない事にした。バツカでえ！ 鶏肉を頬張った。

「あ、そう言えば、雄二の奴、元気にしてるの？」

お姉ちゃんに私達三人は頷いた。

「それがさあ…。雄二の奴、俺らの妹と付き合ってたんだよ」

「え？ 妹？」

視線を合わせた私と智喜。自然に小鉢とお箸をテーブルに置いた。

「親父がお袋と別れた後、再婚して…」

「お父さんが再婚したってのは…何となく知ってるけど」

「うん…。それで…」

お姉ちゃんに美紀の事を説明し始めた夫。大丈夫、お姉ちゃんならきつと分かってくれはず。夫の話と煮え立つ鍋の音。私と智喜はただ黙って聞いていた。夫は美紀と雄二の出会いから由美と美紀の関係まで、全て、お姉ちゃんに話し終えた。

「そっかあ」

チューハイを一口飲んだお姉ちゃん。

「智喜にも、雄二にも、彩にも、由美にも…私達は感謝しなきゃいけないね。私達の妹を救ってくれたんだから。今度さあ、皆でここおいでよ。皆で鍋やろつよ」

良かった…。湯気の向こう、お姉ちゃんの笑顔が更に曇る。お姉

ちゃん…。

「ああ、そうしょ。美紀も姉貴に会いたがってる」

「タケル…。私には妹が二人も出来たよ」

お姉ちゃんが私を見てくれた。

「今日、モールで彩の事を何て私に紹介したか覚えてる？」

「うん、俺の嫁さんって」

照れ臭くなって俯く私。

「今日、彩にプロポーズして、彩がOKしてくれたから、もう俺の嫁さんじゃん」

私は背筋を伸ばして正座していた。

「マジで!?!」

智喜がお姉ちゃんと私達を交互に見た。

「カツコイイよなあ。おめえらあ」

「じゃあ、もう彩は私の大切な妹。タケルなんかより大事な妹」

「また、お袋と同じ事言ってるし」

私の涙が顎から膝に落ちた。

「あー、もうダメじゃん！ タケル。彩を泣かしちゃ」

お姉ちゃんが立ち上がった。

「お、俺、泣かしてねえよ！」

私に寄って来てくれたお姉ちゃん。スエットの袖を伸ばして私の涙を拭いてくれた。

妻と姉貴に気付かれないよう、俺は擦り寄ってきた智喜と頭を突き合わせて小声で喋る。

「おめえ、今夜はとことん付き合えよな」

俺が掲げた缶に智喜は自分の缶を着けた。

「おう、お供しやすよ」

缶を口に着ける前に、智喜は妻と姉貴をそつと眺めた。

「にしても、似てるよなあ。二人」

顔を寄せ合って、何やら話し込んでる妻と姉貴。

「おめえもそう思う？ 親父と雄二からも言われたよ」
智喜がビールと笑いを口に含んだ。

「智喜…。俺は昔から姉貴見てきたから分かるんだ。姉貴はいつも正直だ。姉貴もおめえに惚れてるよ。俺達は何があるつと仲間だ。雄二が美紀と付き合う時にも同じ事言った。俺に遠慮する事は何もねえよ。姉貴の事…宜しくな」

静かに俯く智喜。

「タケル…。俺みてえなので…いいのか？」

「おめえだからいいんだよ」

智喜は缶を握り締めた手を目に着けた。もう、また泣く。この野郎だけは。

「今度さあ、美紀と由美呼んで、皆で女子会しない？ 面倒臭い男ほっといてさ」

「うん、やるやる！ お姉ちゃん！」 何、また調子いい事を…。俯いて首を振った。勝手にしてくれ。

「智喜。おめえ、マジで最後まで付き合えよ」

「お、おう、そりゃもう…。今夜はトコトンだよ」

妻の陰門から唇と舌を離した。まだ満たされされない煩惱は衝動となり、怒涛の如く妻に押し寄せる。

「タケル！ な、何！？」

一気に陰門が天井を向くまで妻の両腿を押し上げた。

夫によって押し上げられた下半身。両脚は頭の方に押さえ付けられ、更にM字、いや、私から見ればW字に開脚された。

「エーッ！？ タケル！」

後ろ回りの途中のような姿勢になった私。アソコが完全に上向きに。何すんじゃない！？ 夫の顔が開かれた股間から昇って来た。ハ、ハズッ！

「彩、大丈夫大丈夫」

あなた、大丈夫って言葉だけで全て乗り切ってない？

「大丈夫つつても…」

小学生の頃から立位体前屈なら30？を余裕で越せるくらい体に柔軟性があり、後転なら軽々と10回は連続で出来るくらいマット運動が得意な私はその歪つな姿勢を維持させる事に体力的な困難はなかった。と言うか…どちらかと言うと、楽勝だったけど、やっぱり、初めての姿勢に対しての緊張感、違和感、羞恥心はかなりあった。所謂、体力的な問題より精神的な問題。わ、私が自分で自分のアソコを眺める事になる…。

「タケル…。ちこつと恥ずかしいよ」

まだ私の下半身は強張っていた。

カウンターに来た往年の敵と俺は生まれて初めて握手をした。この手で何発殴られたか？

「この手で何発殴られたか？　こんな固い手…いてえはずだよ」

野郎は俺が言いたかった事を先に言いやがった。

「何言ってるんだよ！　そりゃこっちの台詞じゃねえか」

俺が手を振りほくと、笑った誠はカウンターの椅子を引いて腰を掛けた。

「いらっしゃいませ！」

由美がお通しとおしぼりを運んで来た。

「誠…紹介しとくよ」

「和ちゃんの愛人です」

「馬鹿。それは極秘だって言ったろ」

「あ、ごめん、和ちゃん」

冗談と分かっていた誠はおしぼりで手を拭きながらニタニタと俺と由美のやり取りを聞いていた。

「娘の親友の由美だ。うちによく遊びに来るんだよ。もう俺の娘みたいなものだ」

「おめえの事だから…愛人つてのも有りがちだよな」

「何言つてやんだよ!」

俺は笑って誠の腕を叩いた。

「和ちゃんはモテ過ぎて、私みたいな子供は相手してくれないんですよ」

「モテ過ぎるのは…昔から変わってねえんじゃねえのか?」

肘で俺の腕を突く誠。

「誠も相当モテたって聞いてたぞ」

「お二人とも、今も相当格好いいですよ。私のお父さんと大違い」

笑顔で両肩を上げる由美。

「取り敢えず…ビールでいいか? 誠」

「おう、乾杯しようや」

「生二つな」

「喜んで！ 生二丁！」

由美がカウンターの中の智喜に声を掛けた。

「はい、喜んで！」

「誠。こいつも紹介しとくよ」

カウンターの智喜に顎を差した。

「昔…うちで特攻隊長やった賢二って覚えてるか？」

「おお、覚えてるよ。よく喧嘩売られたからな」

「フハハハ…。その賢二の弟分で智喜ってんだ」

「は、初めまして。智喜って言います」

カウンターの中でぴんと背筋を伸ばし、智喜が深々と頭を下げた。

「あの賢二の…。そう言やあ、どことなく賢二に似てるよな」

「いや、とんでもないです」

この人が、当時、最強と恐れられてた和巳さんを唯一負かし、特

攻隊長の賢二さんを病院送りにした伝説の男。魔氷と呼ばれた誠さん。

「智喜つて…言ったな？」

「は、はい」

「幾つだ？」

「じゅ、17です。高2です」

「高2かあ…。うちの坊主とタメだな」

誠さんの表情は穏やかだけど、一瞬、俺を見上げた目は涼しく透き通り、妙な威圧感があった。本当だったんだ。「あいつに眼つけられると背筋が凍りついて動けなくなる。唯一、殺されると思ったよ。和巴さんが炎なら、マジあつは氷だ」。俺にしみじみ語った賢二さん。俺はお通しを作りながら思い返していた。今夜は炎と氷の競演か。

「お通しです」

若干震える手で、俺はカウンターに小鉢を置いた。

「そつ言やあ、おめえ、別れたカミさんとの間に子供いたんだよな？」

「娘と坊主だ。娘はもう成人してるんだけど…坊主はまだ高校生だ」

由美がビールを運んで来た。この間、うちの工場で、誠から複雑な事情は聞いていた。

「昔：おめえにいつちよ前の事言った割には…この様だよ」

乾杯前に誠の目が暗く沈んだ。

「な、何言ってるんだよ！？ 人間生きてりゃ色んな事ある。さっ、乾杯しようや！」

俺がジョッキを掲げると、誠に笑顔が戻った。

「おう！ 今夜はトコトン行こうや。勝負してやってもいいぞ」

「上等！」

俺達は21年分の思いをジョッキに響かせた。

「大丈夫。俺に任せろよ」

そんな格好よく言われると…。いつも以上に、私は夫の美しい瞳に洗脳され、その妖しくも優しい自然光が醸す魔法の催眠によって私の全身は溶かされた。

「うん…」

虚脱感と一緒に微笑み浮かべた私。夫の頬を撫で、その中国雑技団ツクな姿勢を維持する。自由に舐めて。

力を抜いた上、妻は自ら白く長い両脚を抱え、その逆立たせた体位を保つ。最高に大胆且つ美しく妻。何と言ったら？ いや、言葉なんてない。彩の根性はタダもんじゃねえ。取りま、頂きやす。俺は妻の小陰唇に舌を割り込ませる。

「フツウフアアウツフウ…」

私の割れ目に波打ち、によるよると蠢く夫の舌。ふわわうわわ…。何か凄い事に。舌が別の生き物になってる。割れ目を両手で更に広げる夫。実際に舐められるところを見た事がなかった私はその羞恥心よりも好奇心と夫の瞳が招く求心力に引き寄せらる。

「タケル…。い、いつも、そ、そうやって舐めてくれるの?」

「うん、こつやって舐めてる」

ほら、こんな感じ、こんな感じ、と私に見せ付けながらぺろぺろ舐める夫。

「クアアアクフンウウ…」

「こんなのもある」

舌使いを変えた夫。今度は舌全体を使って、アソコ全体をより丹念に下から上にべろんべろんと舐める。

「タケル…。い、厭らしいいいいい…。ウフウウクフフ…」

卑猥なW字の頂点。目前で絡み合うタケルの舌とちよっぴりはみ出た私のビラビラ。そんな一生懸命に、そんな過激に、そんな…。

眉間に力を込めながら、妻が自分の陰門を眺めてる。感じてる。ヨシ！ クリだ！ 舌先でその保護皮を剥いた俺は妻が眺められ易いようにクリ本体をぐいっと舌先で掘り起こした。

ピンクに光る小さな豆のような物体。アソコの一番手前からゆくくと浮かび上がってきた。

「えー！？ な、何？ それ」

夫の瞳が私を包んでいてくれたから、私の驚愕は直ぐに癒された。でも、照れるう…。

「これ？」

その部分を夫がチロチロすると、いつもの快感が走る。

「アッハ、ウツアイウウウ…。分かった！ それが、いつものそれ

だよね？」

「そう、クリ」

舌を離れた夫は指でそのクリを押し上げ、くにゅくにゅ動かしながら私に見せる。そんなぷるぷるしてんだあ。でも、気持ちいいい。

「見たこと…ないの？」

「ないないない…んなの」

お尻を上げながら首を振るのも滑稽かな？

「別に、自分のだから…お風呂で鏡使って見ればいいじゃん」

夫がクリを弾く。

「エッ、アツ、イイヤだよ。ん、んなの…。アツ、じ、自分で…み、見るなんてえええ…」

「じゃ、こつ言つのも見せてやるよ」

クリを弾くのを止めた夫はその指をゆっくり膣に沈ませた。

「うわわわ…凄い凄い凄い」

根元まで埋もれた夫の指を見た私は下から見開いた。

「結構…スムーズに入るだろ？」

「うん！ 私、ナプキンしか使った事ないからさあ。マジ入るもんなんだね」

いつも夫は指を入れてるけど、実際に見ると迫力がある。その割とスムーズな挿入に女として成長と神秘を感じた。そりゃ、あんなぶつといチンコが入るんだから、指くらい楽勝だと思うけど。あー、でも凄い。

タケルの指が中でぐちゅぐちゅ動き出した。

「イツウ、タ、アア、ケル、アアアイアウ…」

感じる私の体。更に屈曲する。

「もう一本いってみよ」

人差し指を抜き、中指を加えたタケルは指二本を膣に挿入。

「ウウウウ…ワワワワ…。 凄いいいいい…」

夫が入れているのではなく、まるで私の膣が夫の二本指を吸収しているように見えた。

「意外とね…。中は柔らかくって伸縮性あるんだよ。彩は…自分で入れた事ないの？」

「ないないないない！ 怖い怖い怖い怖い」

真顔で聞いてきた夫に何度も首を小刻みに振った。

「女の子でも…自分で弄るの好きな娘いるからさま、別に。ま、自分で弄っても、おかしいこつちやないけどね」

「いやいやいやいや…。私は…至って真面目なんで…」

首以外に手も振った私。この格好で真面目って言っても説得力ないけどね。夫が膣内で二本の指を加速さ、親指でクリをこねた。ききき、効くうううう…。

「タツ、タケル…。ああ愛してるう…。タタタタケルウアアア…」

膣の中に埋もれさせた二本の指をクロスさせ、夫は何度も人差し指と中指の上下を入れ替える。

「彩…。あ、愛してるよ…。中、彩の中、凄い柔らかくって、あつたかいよ…。ここから俺達の赤ちゃん出てくるんだね？ 彩…」

タケル…。夫のその素敵な言葉と清んだ瞳が私に激情を呼んだ。

「あ、愛してる…そ、そうだよ…。タ、タケルとわ、私の赤ちゃんがそ、そこから…出てくるんだよ！ アッ！ で、でも…あ、赤ちゃん生まれても…わ、私を一番にしてね」

夫がぬぼっと膣から指を抜いた。

「ウウ…」

そして、私の腰を両手で掴み、夫は再びアソコに顔を埋めた。

「当たり前だろ…。彩を越えられる存在なんてこの世にもあの世にも存在しねえよ。彩は…彩は…俺や子供の命以上に…大事な人さ」

「私も…私もタケルが1番だよ…。子供生まれても…タケルが1番だよ。愛してる…。タケル…」

「愛してるよ…。彩…」

私の肛門に温かな舌を着けた夫は肛門からクリにゆっくりと舌なめずり。

「クウウウウ…。アッ！」

枕に沈みそうになった頭を必死で起こし、夫の瞳の中に留まる私の両膝を更に引き寄せてクリから肛門に戻った夫の舌を視線で追い掛ける。タケルは私の肛門をどうやって舐めてるのかな？ 自分で自分の肛門を見るのも初めて。思ったより、つぶらで良かった。私の注目に気付いた夫は恥ずかしさを包み込んでくれるような穏和な笑顔をくれた。今すぐ舐めて…。夫の舌先がその小さな穴に触れた。

「フツアア…」

微かに裏返つ声。両腕の力を和らげてしまったけど、もう両脚を引き寄せなくてもその変形姿勢をキープ出来た。

ポーズトーク

開脚後転も連続10回は自信ある。全然、苦じゃない。何の躊躇いもなく私は陰毛を押さえて、肛門への視界をよりクリアーにする。そこも見たい！ 待っていたかのように、夫は両手で私のお尻を開け、固く窄めた舌を全開になった肛門に突っ込んだ。

「ウツ！」

容赦なく肛門をほじり続ける夫の舌先。

「タケル…あ、あつたかいよ…凄い…ウツ、き、気持ちいい…す、凄いよ…」

私の肛門、汚い部分へひた向きに舌を動かす夫。そんな…一生懸命に…。神秘的な魅光を瞳から発していた。綺麗、タケル、綺麗で堪らない。肛門が熱く蕩けそうになる。滲み出る唾液が肛門に潤み、蛍光灯の光を浴びてきらきらと輝く。

「イ、イイ…。タケル…。アツ、お、美味しい？タケル…」

「美味しいよ…。甘いよ…。最高だよ…。彩…」

唇を肛門に被せた夫はズズズと音を立てて吸い上げた。

「フツハアウウフアア…」

夫は指でクリを奏でる。火照った体が子宮を押し上げ、吐く息が絶頂を引き出す。もう我慢なんて出来なく…。

「そ、そんな！ タケルッ！ アッ、イクよ、ウツ、アッ、イイイ
…」

この姿勢でいけば、噴火する！ ヤバい！ でも我慢なんて出来なく…。 激しさと優しさを見事にコントラストさせた夫の攻撃。私の肛門とクリから全身に激情を波及させる。

「イ、イイク！ アッ、イクから、タ、タケル、お、お願い！
避ける！ ウツ、アッ、イックワー！」

夫の唇が私のアソコを覆う。

「アウアッウー！」

説明し難い放出感。それでも清んでいる夫の瞳に、私は全てを注ぎ込んだ。で、出てる…。出してるうっうっ…。あつたかいよ…。んと、タケルの奴、器用に飲みやがって…。夫の喉から伝わる振動に合わせて私の体もヒクヒクと痙攣する。出してる間も、私は決して最愛の夫から目を離さない。

「愛してる…。タケル…。もう…言葉なんかで伝え切れないよう。
タケル…」

夫が息なり唇を離した。

「あ、ダメ！ まだ！」

最後の噴き出しが噴水のように舞い上がる。

「あ、彩！」

私の顔面と開いた口にその液が落ちてきた。

「ふえー！」

声を出して体を起こすと、夫がベッドの下からバスタオルを拾い上げ、顔面を拭いてくれた。

「大丈夫かよ？」

「ま、まあ、いいや。自分のだからね」

私の顔を拭き終わった夫は唇で私を押し倒した。

「彩…」

「来て…。タケル…」

熱く固く勇ましい夫のチンコが私の膣に突入する。

「マジな話？ それ！ ハハハハハ…！ 最高にウケる話があるって言うからよ。キャハハハ！ それ、最高過ぎじゃんかよ！ たくよ」

放課後まで楽しみに溜めておいた智喜と姉貴のネタ。いつもの体

育館裏で雄二に喋ると、雄二はまた背中を倒して腹を抱えた。

「もう、格好悪いの何のって…」

苦笑いしながら、智喜が頭を搔く。

「格好悪いのは…俺も一緒だ。てめえの姉貴に興奮して色々智喜に話聞いてたんだからよ」

雄二は体を起こし、智喜の膝を叩いた。

「俺も格好悪いよ！ 面識バリバリある佐紀姉に興味津々だったんだからよ。傑作じゃねえか」

智喜の苦笑いは止まらない。

「で、智喜…。おめえ、佐紀姉と…どうすんの？」

「それは…」

智喜が視線を俺に送ると、雄二も俺に顔を向けた。まだ俺に遠慮してんのかよ？

「智喜が姉貴に惚れてるんなら…俺なんて出る幕ねえよ。智喜、あれから…姉貴んとこに泊まったんじゃねえのかよ？」

雄二が俺と智喜を交互に見た。

「と、智喜…。て、事は…」

慌てて首を振る智喜。

「いやいやいや、勘弁してくれよ。タケルと佐紀さんに飲まされ続けて…。ダウンして寝ちまって…。気が付いたら朝だったよ」

俺は俯く智喜の顔を覗き込んだ。

「て、事は、おめえ、朝から姉貴とやっちゃったの？」

智喜が顔を上げて、俺と雄二を交互に見た。

「あ、ある訳ねえだろ！ 朝、ハンパなく気分悪くって。トイレで吐いた後、佐紀さんに朝飯ご馳走になつて帰ったよ」

雄二が自分の膝に肘を着いて頬杖をした。

「俺らん中じゃさあ…。智喜が一番真面目だよな。あんな綺麗な佐紀姉と朝まで一緒にいて、何もしねえんだからよ」

後ろ手をついた俺は微笑んで溜息ついた。

「でも、ボヤボヤしてたら、姉貴の方が痺れ切らすぜ」

智喜が俺に顔を向けた。

「マ、マジで？」

「心配ならサッサと決めちまえよ。俺は…早くおめえに姉貴と付き合つて欲しいんだよ」

智喜が泣きそうな顔をする。でも、何で雄二が涙ぐむかは不明。二人とも純情な奴らだよなあ。

「おーい！」

いつもの妻の声と三人分の足音が俺の背中から響く。

「智喜…。あいつらからも突っ込まれんぜ。どうせ彩から話いつてるからよ」

体を起こして嘔くと、智喜が頭を抱えた。

「うっわああ…」

「そりや来るぜ。ハハハハ…」

雄二が鼻を噉り、笑い声を上げた。

「ハイハイハイ、今日のメインは智喜君ね」

顔を伏せる智喜の背中に回った由美。智喜の両肩を両手で握った。

「話は分かってるよ」

諦めた智喜が顔を上げると、由美が俺と智喜の間に座ろうとした。今日はネイビーかよ。由美姉さん、いつもやるねえ。由美が座る直前に俺は空かさず後ろ手を着いていた。

「ゴメンねえ。智喜。私、皆に喋っちゃったけど、これからは皆、智喜の味方だから」

「はいはい、有難うございます。」

全く悪びれる様子もなく、妻が俺と雄二の間に座り込んできた。

ライトイエローにピンクのギンガム。なかなか可愛いじゃん。でも、おめえがこっち座ったら美紀のが…。美紀が雄二と智喜の間に座った。見えねえ…。

「で、智喜は…お姉ちゃんと何回やったの？」

「だから、やってねえよ！」

いつもの美紀の唐突な質問に皆が大爆笑した。

あつたかい。蕩けそつだ。を妻の潤い切った膣に根元までチンコを沈めた。

「彩…。いくぞ」

私は鋭く光った夫の瞳。

「来て…」

緩やかな曲線を引き、少し抜かれた夫のチンコが一本の閃光とな

って私の子宮に命中した。

「ウアッ!」

余りの衝突の強さに体が前のめりになり、夢中に夫の唇を引き込んだ。

「ウツウフアウウ…」

揺らぐ夫の瞳に包まれ、私は夫の両脇に両腕を回し込み、唾液を絡み合わせる。

「彩…。き、綺麗だよ。ち、膣が熱い…」

「タケル…。あ、愛してる…。もっと…ち、チンコ…ちようだいっ
いい…」

躊躇いなしの卑猥な言葉。愛し合う二人の哄がベッドに立ち上がり、部屋に立ち籠った。夫の唇が慌ただしく乳首に落ちると、私はオッパイを必死で押し上げる。

「美味しいよ…。彩のオッパイ…堪えないよ…。母乳出してほ、ほ
しい…」

無理な事を言う夫は存分に私の乳首を吸い上げ、狂おしいままにそれを舌で転がす。

「タケルの…タケルの赤ちゃん産んだら…の、飲まして、ああ、あげるね…。いっぱい、いっぱい飲んで…」

未来を語り、夫の髪を掻き乱した。夫が私の体を抱き起こす。夫の首に両腕を回して舌をフル稼働させる私。

「欲しいよ…。い、今すぐ…。俺と彩の赤ちゃん…」

腰を上下させてタケルをサポートする。

「だ、ダメだよ…。しょ、将来の楽しみに、と、とっておかないと…」

そんなの嘘。私も欲しい！ 今すぐタケルの赤ちゃんを妊娠したい！ あなたの妻として…。その押し殺した本心が夫を押し倒す。

「タケル！ アッ！」

上体を反らして後ろ手を着いた私は思い切って両脚を開き、自ら、私達の結合部を夫に曝した。

「見て！ タケル！」

夫婦間のセックス。夫に対する独占欲を形にして表現したかった私は割と平気にその開けっ広げを展開出来た。

格好いいよな。何も言っていないのに大胆な言動を取った妻に感動した。

「彩…。枕取って…」

「うん…」

彩が投げてくれた枕を頭の下に敷き、その枕の下に両腕を突っ込む。その長い両脚を大きく開け、健気な表情と妖しい眼光を揺らしながら突き出した腰を上下させる妻をただ興奮しきりに眺めてた。すんげえよ！ ぐちよぐちよもいとこじゃねえか！ チンコに絡む妻の白い溶液が美しい。妻に教えていない体位。妻の本能が生み出した自然な大胆さだろう。

「タ、タケル…。わ、私…凄い感じ、感じてるよ…。凄い、ぬ、濡れてるうつつあああ…」

「よく見えるよ…。彩…。素敵だよ…。ク、クリが綺麗に立ってるう…」

クリに親指を差し込んで転がすと、妻は顎を上げて更に腰を揺らす。

「フツアアア…スススゴイツ…アアア…」

もっとだっ！

「うつつうつつ…」

親指をより強く速く振るわせた。

「イイツ！ タケルツ！ アウツウウイイ…」

まだまだ！ 寸前で親指を離す。顎を下げた妻は唇を可愛らしく尖らせ、物欲しそうに俺を見詰めた。

「そのまま…後ろ向けよ」

尖らった唇を和らげ、笑顔を滲ませながら、妻は後ろ手を離して上半身を起こす。

「こんな…感じ…?」

結合したまま妻は慎重に体を回していった。

私が完全に夫に背を向けると膣の中で夫のチンコが捻られ、ぐにゅと回転した。

「ウフ…」

私は前屈みになり夫の両脚の間に手を着いた。

「上下していいん？」

「う、うん…」

上下運動を施すと、膣の下側を擦られる、さっきと違う感覚を得られた。

「アアッウンンン…イウウンウウウウ…」

ゴム鞠のように跳ねる妻の尻。妻が腰を上げる度に膣の内皮がチ

ンコを引き上げ、まるで、膣が違つ生き物のようにチンコに吸い付いているように見えた。可愛い…。俺は開閉を繰り返す妻の肛門に親を這わせてみた。

「タケル！ アツ！」

妻が肛門を絞ると、膣圧も上がり、その吸引力も増した。いい感じだ。

夢中になる！ 夫がどんな光景を眺めているのか、大体の想像がつく。最高に高められた私の興奮。無意識にお尻をより速く強く上下させていた。

「タケル、タケル、し、死んでも、はっ、はっ、は、離れない！」

後ろからオツパイを両手で掴み、私を引き寄せる夫。エーッ！ 夫を下敷きにして仰向けになった私。夫は両膝を私の両脚の内側に引っ掛けた。どうするの？ そのまま、夫が両膝を広げると、私の両脚も大きく開かされた。容赦ない夫の上下運動が来る。

「ス、スゴイッ！ タケルッ！」

首を捻って夫の唇を求めると、夫は私の口の中に舌を挿入してくれた。そして、再びクリに夫の指の感触を得る。

「アツ！ アアアツウツンアアア…」

オツパイを握られ、激しくクリを弾かれる私はまるで楽器のよう

に天井に向かって呻きを奏でた。私も攻めてやる！ 私は右手を伸ばし、夫の玉袋を掴んだ。

堪えられん！ リズミカルに妻が俺の玉を揉み上げる。

「タケル！ いかせてっ！ も、もう、ダメッ！ アッ、ダメッ！」
俺もダメだ。

「いいよ…。彩…。一緒に…」

「タ、タ、タケルッ！ イイイツ、ウツ、イッグアーツ！」

私の両肩が窄み、夫の熱い生命体が私の奥で産声を上げた。

「ウアアアア…。感じる…。タケルの精液…。私の…。私の中に…」

一気に溶かされる体。 マジ、死んでもいい…。

「タケル！」

駅から病院に戻った俺は誰かに呼び止められた。振り返ると、真紀さん…、悲壮感を漂わせる真紀さんが俺の両腕を掴んだ。

「タケル！ あ、あんた、もう歩けるの？」

「ここ…真紀さんの病院だったの？」

俺の両腕から白衣の真紀さんは両手を離した。

「う、うん。あんた…本当にいいの？」

軽く笑った。

「見ての通りさ」

「じゃ、じゃあ、取り敢えず…先生に検査して貰うようにするから、部屋戻ってて」

慌ただしく、病院のロビーを去る真紀さん。白衣の真紀さんも眩し過ぎじゃん。真紀さんの後ろ姿を暫く眺め、エレベーターに向かった。

ベッドの上で散々暴れ捲った後は、空気清浄機の音と徐々に静寂さを取り戻しつつある呼吸が入り交じり、部屋の中を旋回する。

「タケル…」

競り上がってきた妻が俺の腕に倒れこみ、二人は口移しの会話を始めた。

「凄かった。あんなの始めてだったから…」

「まんぐり返しの事？」

ちよつと渋めに低音を響かせて言ったけど、ブツハハハハ！と妻の爆笑が一気に俺の口内を乱した。そんなウケるかな？

「な、何？そ、その…」

「まんぐり返し」

「ハッ！ ハッハハハ…。ま、真顔で言うなつての！ で、でんぐり返りじゃないの？」

いくら格好よく言っても無駄。妻は無邪気な笑顔を俺に覆い被せる。

「違うよ。でんぐり返りつてのはそのままグルッて回るけど、まんぐり返しつてのは、ああやって途中で止ってここを…」

どさくさに妻の陰列を指でなぞる。

「天井に向ける形が、まんぐり返し。言えば、ちっちゃい子が後ろ回り出来なくて困った姿勢だ」

「キヤー！ ハハハハ…。わ、私…後ろ回りぐらいできるしい！」

「じゃ、やってみてよ」

「ちょっと、待ってよ」

負けず嫌いの妻。ベッドを降りて、カーペットの上でしゃがみ、両手を前にして構えた。

「見てろよ」

ついさっきまで散々暴れて、こいつの体力は底無しかよ。全裸の妻は綺麗につま先を揃えた後転をくると見事に決めた。

「おー！ スゲエスゲエ！」

拍手してやると、妻は俺の腕に飛び戻った。

「おめえ、やるねえ」

多少、息を荒げた妻。

「んなのらつくしょうだつて！ で…そ、その呼び名…何とかなんねえのかよ？ まんぐりはねえだろ！ フハハハ…」

妻の乱れた笑いが口移しに伝染した。

「ハハハハッ！ 昔からそう言う呼び名だからしょうがねえだろ」

「まんぐり返し」の逆パターンで、「ちんぐり返し」ってのもあるけど…妻が聞けば、妻の性格上、絶対に、「やらせる！おめえ！」と、来るのが分かり切っていた俺はその説明を控えた。

「んじゃ、彩が何か別の呼び名付けてみるよ」

じゃあ……、と妻の黒目が上を向く。

「ビラビラ返りは？」

何じゃそりゃ？

「キャハハハ！ そ、そっちのがエロいってよ！」

「そ、そかな？」

「そつだよ……」

妻の前髪を耳に掛けた。

「初めて見たよ。タケルが私の舐めてくれてるの……」

腕枕に力を入れ、妻と俺の唇の密着度を高める。

「で……感想は？」

夫の瞳が更に近くなった。

「一見、グロかったけど……スッゴい丹念に一生懸命舐めてくれてたから、凄い愛されてる実感がしたよ」

夫の頭に腕を回し、よりオツパイを夫に密着させた。

「愛してるよ。彩……。最高の嫁さんだよ」

「タケル…。愛してる…。最高の旦那様。一緒に住み始めたら…。毎日エッチだからね」

「あつたりめえだよ。欠かさずだ」

「もし欠かしそうになったら…。私が無理矢理くわえて上から入れ込んでやつからな」

主婦の権限。本気を分からせる為に夫のチンコを握った。

「どっぞどっぞ…」

「浮気なんてしやがったから、ここ噛み砕いて口の中でミンチにして食ってやる」

握ったチンコを振る。

「浮気なんてする訳ねえから全く心配してねえよ」

「タケル…」

呼吸が和らいだ。

「ん？」

「愛し過ぎたら…。自分の事なんてどっつてもよくなよ」

夫の頭を包むと、二人の唇と舌が空気清浄機の音より大きく響く。

「自分の事をどうでもよくなった彩を…俺がしっかり命懸けで守ってやるから安心してろよ」

タケルの瞳の中、私はまた雨に濡らされた。

「まあ、まんぐり返しも夫婦なら皆するから。しない夫婦ないていなくらい極々普通の行為だから、安心してろ」

また夫のチンコを握る私。

「エー？ じゃあ、うちのお父さんとお母さんもするっ？」

「んなの、するに決まってんじゃねえか。こんなのエッチとセットみてえなもんだよ」

そりゃ、夫婦だからするよね。

「じゃ、今度頼んで見せてもらおっかな」

夫が私の口の中に吹き出したと同時にテーブルの上の携帯が振動した。私の唇から離れ、はあー、と息を吐いて上半身を起こす夫。

「彩…。おめえの携帯も鳴ってるぞ」

午前中に降り出した雨が午後まで続き、俺達、野郎三人は教室で燻った。

「タケルんとこ…明日、どうすんの？」

その週末、俺のお袋とオヤッサンとヨツチャンは地元の振興会主催の慰安旅行で伊豆に行く予定だった。

「彩がうちに泊まりに来るよ。うちのお袋も彩の親父さんもお袋さんも了承済み」

隣の机で雄二が頬杖した。

「いいよなあ…。タケルんとはもう婚約してんだもんなあ。そりゃ、親も安心して泊まりOKですよ」

俺の前の席に座っていた智喜が長い両足を机間に放り出した。

「ならよ。雄二も美紀にプロポーズしちゃえよ」

智喜の提案に頷き、俺は雄二を見た。

「そりゃ…俺もそうしたいよ」

躊躇すると思った雄二。その意外な言葉に、俺と智喜は口を開けてお互いの顔を見合った。

「男だよ…。雄二」

智喜は両足を引っ込めて雄二に顔を突き出す。

「美紀がさあ、タケルが彩にプロポーズしたっての聞いて…。それ

から、もう目に見えて、無言で俺に値だつてるの分かるんだよね。プロポーズ」

俺は雄二を眺めながら頼杖を着いた。

「幸せもんがあ。後は…タイミングってやつか？」

困っているのか、照れてるのか、視線が定まらない雄二。

「ま、まあ、んな感じ。と、あとは…場所だよ。水族館はタケルに盗られちまつたしなあ…」

頭の後ろで両手を組んで、雄二は俺と智喜に目を合わせる事なく天井を見上げた。

「実はさあ、ここだけの話なんだけどよ…」

小声に切り替え、机から体を起こして前のめりになった俺に、雄二と智喜も体を前のめりにさせた。俺は二人に水族館が彩への最初のプロポーズの場所ではなく、最初のプロポーズはキッチンでの激しいエツチの最中だった事実をその状況も踏まえて生々しく具体的に告白した。

話終えると、雄二と智喜は俺が告白している最中に溜めた笑いを体をのけ反らすせて爆発させた。

「キャハハハッハ！ ヤバよ！ それ！」

「グハハハハ！ そ、それもある意味、男だよな！」

「いやまあ…勢いってヤツさ」

「スнгеエ勢いじゃねえか！」

智喜が嬉しそうに首を撫でた。

「その勢いとエッチテクニク。パクっていいっすか？先輩！」

涙目の雄二が真面目顔を作った。

「どうぞどうぞ！でも、女いかさねえとダメだぞ。女はいつて初めてエッチされながらのプロポーズを信用するんだよ」

「あ！それは…自信ある」

雄二の自信に、一瞬、顔を見合った俺と智喜は爆笑した。

「な、何だよ！？おめえら、俺のエッチ見たことねえくせによ！」

雄二も爆つてやがる。敢えて、突っ込なかったが、過去、雄二と便所女二人相手にして4Pした時、俺は雄二のエッチを見た。けど…そんなてえしたもんだったかなあ？雄二のエッチ。

「み、美紀っていくの？」

笑いの中、俺が雄二に聞いた。

「真面目な話…。美紀っていき易い体質だと思うんだよね。あいつ、大体、一エッチ一絶頂はかますよ」

「ほー！スゲエじゃん」

智喜が首から手を離す。

「それ言うんなら、この前、彩なんて一エッチ三絶頂だったぜ」

「先輩！」

「先生！」

雄二と智喜が同時に叫んだ。

「いやいや、俺も真面目な話…。彩もいき易い体質なんじゃねえねかな」

雄二の真面目なプロポーズの話から完全に脱線し、俺達は完璧にためえらの女を吊り上げたエロトークをしていた。なあなあ、美紀のフェラってどうよ？ いや、結構、それが上手くて…。止めようがなく盛り上がる。

「何かよう…おめえらから、んな具体的なフェラ話聞いたら…。俺、彩と美紀に顔合わし辛くなるべ！」

智喜が額に手を当てて、ひくひく笑いながら言うと、俺と雄二は踏ん張り返って笑い合った。あいつらがこの話聞いてりゃ大激怒で済まねえだろうなあ。でも、男同士っていいよなあ。こう言う話で友情を深め合えるんだからよ。昨日、彼女と何回やった？ おめえの女ってフェラ上手いの？ 喘ぎ声はでかい方？ 手マンとクンニだったらどっちが気持ちよがる？ いったら潮噴く？ 男は皆てめえらの女を肴にしてこう言う話で幸せ感じるもんだ。女の前じゃ見せられねえ顔だよ。

「で…姉貴はどんな感じ？」

俺は机に肩肘を着いて、智喜を見上げた。

「そ、それ聞きてえ！」

雄二が手を一つ叩いて智喜に指を差した。

「い、いや、それはよ…」

俯いて頭を掻く智喜。智喜の躊躇に、俺は首を伸ばす。

「あ、おめえ、きつたねえな！俺らの話、散々聞いときやがって、そりゃねえだろ！」

「いや、まあ、ちょっとだけあるけどね…」

エツ？ と雄二が前のめりになると、俺も智喜も釣られて前のめりになり、三人とも顔を突き付け合った。

「それってさあ、チンポの先をちよつとだけパクってされたって意味？ そ、それとも…」

俺達は搾り出すような笑いを床に垂らし始めた。

「さ、先をちよ、ちよつとだけ…い、入れたって意味？」

「そ、そうだよ！ おめえどつちだよ」

「ま、真面目に…い、言つと…両方かな…」

「な、何がちょこつとだよ！ おめえ！ 姉貴とやってんじゃねえか！」

「そりゃもう何回も佐紀姉のマンション泊まってんだから、しほっただいだっての」

「あー！ ばらしまつたよ…！」

普段厳つく見える智喜が幼く可愛い、で、気持ち悪い笑顔を滲ませやがった。

「言ってる！ 何がちょこつとだよ！」

うずくまりながら、照れ臭さそうに、幸せそうに智喜が首を撫でていた。

「由美って…：どうなんだろうな？」

小声で、雄二が新しい議題を発動すると、智喜が顔を上げた。

「濃そうな感じするけどなあ」

「何が濃いなの？」

エッ？ その由美の声で、俺達が一斉に頭げ上げると、聳え立つ三人のお嬢様。

「いっやらしい！ 男同士でうずくまってヒソヒソ話」

由美が智喜の前の机に腰を掛ける。どうやら内容は漏れてねえみたいだ。あつぶねえあつぶねえ。

「い、いや…。今日の食堂のお茶？ 濃かったて話で…」

俺がそう言って流した視線に、雄二と智喜が小刻みに頷く。

「まあいいや。どうせまたくだんない話でしょ」

いや、本当くだんない事なんすよ。彩たん。

「雄二…。パパにもう言ってるからね」

美紀が雄二に寄った。

「何を？」

「土曜日。雄二とこ泊まるって」

「マジで？ 泊まりに来てくれるんだ」

雄二のジャケットの袖口を掴んで、恥ずかしそうに頷く美紀。

「さっき…ママにも連絡したんだ」

「えっ？ お袋に？」

美紀もなかなかやるなあ。俺の机に腰を掛けた妻を見上げると、妻は含み笑いを俺に被せた。

「家に泊まらせて貰うんだから…ちゃんとママにも言うっておかないと…」

うん、雄二んところはヨッチャンがOKって言ったら全てOK。オヤッサンはいいから。由美と視線が合うと、由美は笑顔で頷いた。

「お袋…何て？」

雄二は不安そうに小さく言っつて美紀を見上げた。

「ご飯の材料、冷蔵庫に入れとくから、宜しくっつて」

妻と由美が顔を合わせて微笑んだ。きつと、美紀はこのお姉さん二人に支えられながら恐る恐るヨッチャンに電話したんだろうな。にしても、ヨッチャンは相変わらず格好いいよな。雄二の野郎がニヤニヤしてやがる。

「雄二。じゃ、明日、キッチンで例の件…」

俺が言つと、意味を把握した智喜が焦った雄二の顔を見ながら吹き出した。何？ 何？ 何？ と女子三人は俺たちに視線を振る。何でもねえよ、と一蹴し、俺は窓の外を眺めた。雨だったよなあ…。窓から視線を戻した俺は妻を見上げた。

「帰えろ」

雨宿り

「あの180は年代もんだよなあ…」

「おもめえのゼファーもてえしたもんじゃないか…」

誠はジャケットを脱ぎ、椅子の背もたれに掛けた。

「今度、おめえ180と俺のゼファーで湾岸流すか？」

「何だよ？ チキンレースか？」

「上等じゃねえか。受けて立ってやるよ」

酒が進むに連れ、俺と誠は饒舌に互いの腕を突き合いながら話を盛り上げた。

「こんなにつめえ酒なら…もっと早く仲良くなっとくんだったな？
誠」

ジヨツキを一気に空けた俺。誠はじつとジヨツキを見詰めた。

「神様って奴が…このタイミングを見計らってくれたんだろな。最初、血生臭え方が後々仲良くなれるってもんだよ」

誠もジヨツキを一気に空けた。こっちいくか？ と俺が人差し指と親指でお猪口を象ると、いこいこ、と誠。

「智喜！ 熱爛二本だ」

「喜んで！」

由美が唐揚げを運んで来てくれた。

「おう、誠。由美、彼氏いねえんだよ。いい男いたら紹介してやってくれよ。うちの工員じゃダメってんだよ」

「だって…皆年上なんだもん。私には合わないって」

俺と誠の間で、由美が両肩を上げてトレーを抱えると、誠は由美とカウンターの間の智喜を交互に見た。

「あれ？ 二人…カップルじゃないの？」

「いえいえいえいえ…」

由美と智喜が同時に首を振る。

「あ、違うんだ。二人とも仲良さげだったんで、付き合ってたのになって思ったよ」

「勘弁して下さいよ」

カウンターの内で、智喜は苦笑する。

「私が勘弁だよ！」

由美が怒鳴ると、俺と誠は顔を合わせて笑った。

「うちの坊主も高二なんだけど…彼女いなきゃ紹介出来ただけだなあ」

俺は唐揚げを箸で摘まみ、口に運んだ。別れたカミさんとの息子が。仲良いいみてえだな。

「ほ、ほりゃ、高二にもなって、い、いねえほうがおかしいよ。残念だったな。由美」

熱い唐揚げで口を籠らせながら、俺は由美を見た。

「あー、残念！ きつと誠さんの息子さんなら格好いい息子さんなんでしょうね。彼女もきつと可愛い娘なんだろうなあ…」

「うちの坊主はどうでも…。この前、坊主と一緒に家に遊びに来た彼女は可愛い娘だったよ。気立てもいい娘さあ。きつと親御さんの教育が出来てんだだろうなあ。うちの坊主にや勿体ない」

「そんな彼女さんなら…私、完敗すよ」

「いやいや、由美ちゃんも負けてないよ」

誠も熱い唐揚げを口に入れた。

「なあ、誠。今度、息子も連れて来い。親父の昔話、俺にさせるよ」

「ほれこそ、か、勘弁だ」

唐揚げを口に籠らせて、誠が微笑んだ。

「息子って、おめえに似てるの？」

「どうだろ？ 前のカミさんに似じゃねえかなあ…。あ、そうだ」
背もたれに掛かったジャケット。誠はその胸ポケットを手を突っ込んだ。

「坊主の…写真見る？」

「見たい見たい！」

俺より先に由美が反応した。誠は携帯を取り出して操作し始める。

「高校の入学式で…ちょこつと撮ってなあ…」

「おおおう、どんな息子だよ？」

カウンターに肩肘を着き、俺は携帯を操作していた誠に向かって体を伸ばした。

「これこれ、恥ずかしいんだけどな」

誠が差し出した携帯を受け取った俺は由美と頭を寄せ合った。

「しょうがねえなあ…」

バイト帰り、急な土砂降りに見舞われ、高架下に飛び込む。雨を見上げながらポケットから携帯を取り出した。

…雨だ！　さいあくー！…

俺は溜息混じりに妻にメールを送った。

…だいじょうぶ？…

直ぐに返事が来た。

…今、高架下で雨宿り中…

…あの高架でしょ？　迎えにいこつかあ？…

…いいよ、直ぐ止みそうだから…

そう妻に返事をして、また雨を見上げた。高架の向いに立つビルの灯りに照らされて止めどなく落ちる雨。本降りの様子で、直ぐに止みそうな雨じゃない。

「ついてねえなあ…」

濡れたジャケットの衿を直した。

「タケル！」

飛沫が弾け散る車道を隔て、透明のビニール傘を差した娘が俺に手を振る。

肩に掛けたブレイドヘア、白とベージュのボーダー柄のカーディ

ガン。

「水月…」

行き交う車の流れが止まると、水月は雨を弾く車道を横切り、高架下に走り込んで来た。

「久しぶり！」

息を上げて傘を閉る水月。

「おお！ 久しぶり！ 元気だった？」

「うん！ タケルは？」

「相変わらずだよ」

「雨宿り？」

「ああ、バイト帰りに降られちゃって。おまえ…どっかの帰りか？」

「塾帰り」

そう言えば、俺達はまだもう高二。

「感心だな。俺はまだ…受験なんてぼんやりしてるよ」

俯いて、水月はくすつと零す。

「タケルらしいね。マイペースで」

雨を見上げる水月。苦笑いが止んだ俺もまた雨を見上げた。

「あの時と…一緒だね」

雨から落とした視線。水月の横顔に流れた。

「ああ、一緒だな」

行き交う車の流れが止まると、高架下に漏れ落ちる雫の音が俺を昔に運んだ。

「雄二、悪い。頭痛くなってきたから先帰るわ」

甲高く耳障りな笑い声を振り撒き、やたらと絡み付いて来やがる女を相手しきれず、俺は見え見えの嘘を残してコンパ会場のボックスから逃げ去った。

「疲れるだけだったの。クソブス女が」

独り文句でエレベーターを降りた俺。そのビルの出口に着いた。

「益々、ついてねえなあ…。来た時にゃ降ってなかったのによ」

溜息も程々に、雨を恨めしく見上げた。

「雨宿り？」

聞き覚えがない声。振り返ってみた。肩に掛けた長いブレイドヘア、白地に黒のスカル刺繍のタンクトップワンピ。こんな大人しくて可愛い娘、俺らの部屋にはいなかった。

雨宿り？ あの夜、単純な私の言葉に振り返ったタケルの瞳。その寂しげな瞳に自分自身を映した私。雨宿り？ この夜も、タケルはあの夜と同じ瞳を私にくれた。

「私達って…雨に縁があるのかなあ？ 出会いも雨で…再会も雨だもんね」

「て、事は、俺ら雨男と雨女なんだよ」

吹き出し、タケルに顔を上げた。

「タケルだけが雨男なんだよ。私、遠足も修学旅行も雨になった事ないもん」

「マジ？ 俺、遠足なんて晴れだった日の方が少ないぜ。中学の修学旅行なんて、こんな感じの雨だったよ」

「ほらあ！ やっぱタケルが雨男じゃん」

私達は久しぶりに笑い合えた。

「上で、合コンだったの？」

私の質問に彼はまた雨を見上げた。

「うん。そっちは？」

「私も」

私は彼の横に並んだ。

「合コン、面白くなかったんだ？」

ぼそつと言って、彼の横顔を見た。

「面白かったら逃げて来たりしねえよ。そっちは？」

「私も…。あんまりウザいから出て来ちゃた」

私を見た彼。寂しい瞳が雨と一緒に降って来る。

「そっか。お互いについてねえ日だな」

ふつと零してまた雨を見上げる彼。初めて会ったのに懐かしさを感じる。友達や親、周りに流され続けてる今の私じゃなく、自由で無邪気だった昔の私が、本当の私が彼の瞳に映っていた。もう失い

たくない。じゃ、俺…とシャツの襟を立て、彼が雨の中へ逃げ
行きそうになる。本当の私も逃げて行く。もう逃がしたくない。行
くんなら私も…。行こ！ と私は無我夢中で彼の手を取った。

「お、おい！」

私の衝動に驚いた彼。次第に、私が引つ張る彼の腕が軽くなり、
私達は手と手を取り合って激しい雨の中を駆け抜けた。これが本当
の私。雨が今を洗い流し、彼が過去に返してくれた。

「しょうがねえな！ おめえ！」

息が上がり始めた頃、タケルが私の肩を抱き寄せてくれた。離さ
ないで！ どれだけ彷徨ったか分からない。びしょ濡れの二人はホ
テルの部屋にいた。

思い出。その恥ずかしさ。俯いて足元の水溜まりを見詰めると、
タケルの溜息が聞こえた。

「去年の…夏休みが終わって直ぐだったよな？」

私は何も言わずに頷いた。

ずぶ濡れのまま絡み合い、ブレイドは解かれて濡れた髪が顔に付着する。雨の匂いが染み付いた慌ただしいキスの応酬。体に纏わり付いていたものは全て剥ぎ取られ、全裸の私はベッドに放り出された。薄暗い部屋に浮かび上がった、初めて見る全裸の男は初めて一瞬で引かれた人もの。

何の躊躇いも見せない私。全身に唇を這わされ、私の体は更に濡らされた。この人だからいいと開いた両脚。初めての痛みが走る。暫くは経験した事ない揺らぎにシーツを掴まえていたけど、次第に激しくなる雨音に合わせて霞んでいく彼の瞳に心細くなり、必死に彼を引き寄せて抱き締めた。無作為な呼吸の中で覚束ない時間が流れ、私の胸に何か飛び散って全てが終わっても、部屋の中に雨が降り続けた。

「俺…タケルっ言うんだ」

隣に寝転がる全裸のタケル。その息はまだ荒い。

「私…水月」

私達は初めて名前を交わした。

俯いていた水月が肩を奮わせて笑いを込み上げた。

「な、何だよ？」

俺も釣られて笑うと、水月が明るく弾ける笑顔を上げた。

「本当！ 懐かしいねえ」

「うん、つい最近なんだけど…懐かしいよ」

そう言いつつも、水月の笑顔に郷愁よりも安堵を感じていた。幸せそうで良かった。

一緒に広いバスタブに浸り、私の背中を抱き締めしてくれるタケル。

「タケル…。私と…付き合って」

遊びの範疇なら、どうせ断られても憾みようがない生まれて初めての告白。私はお湯の中に口を隠した。

「いいよ…。水月」

タケルに振り返えった私は湯気に霞んで消えそうなタケルの瞳を追い掛け、勇気を振り絞って自分からケルの呼吸を直接吸い込んだ。でも、不安が…。直ぐに呼吸を離す。

「その『いいよ』ってどっちの『いいよ』？ Yesの『いいよ』？ Noの『いいよ』？」

タケルは笑いを濡れた手で拭う。

「勿論、Yesの方さ」

「タケル…」

私はタケルに覆われ、波のようにつねるお湯の中、タケルは二度目をくれた。私で、いいんだね？ はしたなく漏れる声がバスルームに反響する。まだ痛みが残る不安定な興奮に身を委ねながら、私は夢中で初めての彼氏を掴まえていた。ついていて…いいんだね？ 愛していいんだね？ 一途になっていいんだね？

「口に出すよ…」

タケルに尽くしたい。タケルの安らぎになりたい。だから、頷いた。タケルがくれたものをその答として口で受け止めた私はタケルの女として全て飲み尽くした。

バスルームで拙いながらも俺の全身を洗ってくれた水月。

「私…これからタケルにいっぱい尽くしたいから、何でも言ってよ」

ロープの腰紐も結ばずにベッド上がり、水月は正座して俺を見上げた。

「今まで尽くされたって感じた事ねえから…。どんな事言ったらいいかわかんねえよ」

ベッドに腰を掛けた俺に、水月が飛び付いてきた。

「じゃあ…私が尽くされるってどんなのか教えてあげる」

肩越しに唇を求めてきた水月に俺は唇を着ける。そのまま体の向きを変え、水月を俺の膝の上に座らせた。唇を離し、俺の両肩を両手で掴んだ水月が俺を見詰める。いいのか？俺…。遅すぎた自問。自答出来ないまま、一瞬、彩の顔と水月の顔が重なり、罪悪感めいた心情と共に水月をベッドに倒した。曖昧な気分は複雑さを消し去るにはほど遠い。俺なんて直ぐ愛想つかされるさ。最終的に、そう見通した俺は水月の首筋に唇を落とす。

「初めて朝帰りして、親にキレられて最悪だったよ」

雨から振り返った水月は少し上目遣いの笑顔をくれた。水月から目を逸らした俺は苦笑いを雨に向けた。

「ごめん。水月が…あんまり可愛かったから、あの夜は帰したくなかったんだ」

「上手い事言って！」

俺の胸を叩いた水月。

「でも…今となったら、嘘でも嬉しいよ」

水月はまた雨に帰る。

「泊まりの後は、いつも怒られてたんじゃない？」

「うん、最初は喧嘩ばっかだったけど、そのうち親も諦めたよ」

そして、また水月は雨から戻った。

「迷惑掛けちゃったよな…。水月には」

うつん、と笑顔で首を振る水月が雨よりも優しく映った。

「早く来いよ！ 映画だろ？」

俺の後ろをとろとろ歩く水月に気怠く振り返った。別にいつ別れてもいい相手と言えばそれまで。

「あんたが…見たくなかったら別にいいよ。あんたの家行こ」

初めての朝以来、水月は俺の事を「あんた…」と呼ぶようになっていた。

はあ？ 俺は映画見に行きてえよ。一向に喧嘩友達から進展しない彩との関係を時には壊滅的に、時には有意義に感じていた俺にとって体の相性も良く、献身的に俺の我が儘を聞いてくれる水月は彼女と言うよりは従順なセフレに近い女。まあでも、別にいいや。

「じゃあ、そうしよ。そのコンビニで飯買って行こ」

手を繋いでやるだけで、笑顔になる水月。遣り繰りし易い女。

「映画見に行きたいって我が儘言っでごめん。あんたが映画嫌いな
の分かつとくべきだった」

別に映画は嫌いじゃない。面倒臭かった俺は水月にそう思わしと
いてやった。

タケルと一緒にいられるだけで、それだけで、私は幸せだった。

「おまえ…いちごオーレ好きだったよな？ それにツナサンドと…
みかんゼリーだったよな？」

「う、うん」

振り向いたタケル。その優しい瞳が堪らなかった。

「ここは…私が払うよ」

「男に恥かかすなよ」

「い、ごめん」

いつもタケルに甘えてる私。

「持つよ」

「いいっての」

もっと尽くしたい私は常に自分の不甲斐なさを感じていた。

合コンを抜けた後の話を廊下の隅でひそひそすと、何だよ!?

それ、と雄二は髪の毛を掻き毟って悔しがった。

「おめえも、あの娘やっちまったんだろ？ あのボックスですつと話込んでた娘」

「いやあ…。それ言われちゃうとさあ…」

ニヤニヤの雄二。ポケットから取り出した携帯を開けて、操作し始めた。

「その…行澤女子の…水月って娘…」

そして、雄二は俺に画像を見せた。

「この娘？」

思わず、雄二の携帯を引つたかった。

「おめえ、どっから仕入れたんだよ!？ これ」

「テニス部の村上って奴からだよ」

周りを見ながら雄二は俺から携帯を奪い返した。

「そいつもサッカー部の結城って奴からもらったらしいんだけど…。結構、うちで部活やってる連中には出回ってるみたいだぜ」

「へー、そうなの？」

俺はポケットに手を突っ込み廊下の壁に背中を着けた。

「こう言う大人しそうで可愛い娘は普段汗臭い連中をグツとさせるタイプなんだよ。まあでも…この写真見たら俺も来るけね。俺が相手してた女なんかよりずっと可愛いじゃん。俺の悔しがる訳分かるだろ？」

雄二も壁に背中を着けた。

「確かに可愛いけど…そんなモテる娘だとは知らなかったよ」

「で、ラッキーなおめえはそんなモテる娘と、いつもみてえにワンナイトラブストーリーかよ？」

俺の腕を肘で突いた雄二はニヤニヤを続けた。

「最初は…そのつもりだったんだけどよ」

真顔に変わった雄二が俯く俺を覗き込んだ。

「マジ付き合いますの？」

溜息と顔を上げると、雄二も顔を上げる。

「彩…どうすんだよ？」

ふつと鼻息を吹いた。

「どうするもこうするも…あいつには関係ねえよ。それに、あいつ…彼氏いるって話じゃん」

雄二が俺に顔を向けた。

「か、関係ないつつつても…。彩の彼氏の話は俺も聞いた事あるけど、あれは根も葉もない噂だよ。彩に限ってそんな…。おめえだつて分かって…」

「取り敢えず」

雄二の話を途中で切った。

「この話はいつらには内緒な」

俺は雄二の腕をぼんと叩き、教室に消えた。

「洗濯とか掃除とか何でも言っつてよね。私、何でもするから」

何でもするつつつてもなあ…。家に着き、部屋の中で脱ぎ捨てた制服のジャケットを水月はハンガーに掛け、皺を伸ばしてクローゼ

ツトの中に吊した。

「じゃあ…」

俺が言いかけると、水月は直ぐにクローゼットから駆け寄って、俺を見上げる。はええなあ。

「袋から烏龍茶取ってくれ」

「わ、分かった」

テーブルの上の袋から水月は烏龍茶のペットボトルを取り出し、キャップを外して俺に渡した。誰が今飲むって言ったんだよ？ で、何でそんな幸せそうな顔してんだよ？ 烏龍茶をゴクゴク飲み込み、ボトルを水月に戻した。

「直ぐシャワー浴びるから、おまえも後から来いよ」

顔を赤らめ、指を絡めて俯く水月。恥ずかしがるような仲かよ？

「分かった」

恥ずかしかったから、私は少し俯いて嬉しさを隠した。タケルが半分ほどドアを開けて振り返った。

「一緒に来るか？」

タケルの瞳に一瞬で吸い込まれた。

「うん！」

急いで駆け寄り、タケルに抱き締められた私はずっと待っていたキスの中で完全に解かされた。

水月は濡れた傘をくるくると絞ってボタンを締めた。

「マジだせ」

ポケットから取り出したハンカチを水月に渡す。

「本当？」

濡れた手を拭いたハンカチで拭く水月。

「おう、ほんとにおまえと映画見たかったよ」

俺は照れを雨に追いやる。

「でも…あの時、タケル、スツゴい機嫌悪そうだったから」

そう言やあ、彩と一戦した後だったようなあ。

「でも、あんたとなら、何処でも、何でも、楽しかったよ」

水月は俺の事を昔のように「あんた」と呼んでくれた。益々と照れながら振り向いた。

「水月…」

俯いていた水月は顔を起こした。

「訳分かんなかったよな？ 俺」

優しく微笑む水月に、俺は笑顔を合わせられなかった。

「だから、私…あんたを一生懸命愛せたんだと思う」

雨に戻らなかった水月に俺は笑顔に戻せた。

シャワーから噴き出すお湯が一握り半ほどの水月の乳房に跳ね上がり、バスルームに吐息混じりの飛沫を撒き散らしている。

「うっ…」

漏らす水月を無視して乳房を弄り回し、乳首を親指で押し上げて吸い付た。ここはどうだ？ 空いた左手で水月の陰部を撫でる。やってやる。従順窮まりない水月なら絶対に拒否らない。まだ経験が浅い女には非道と見なされる要望。俺は水月に出す事にした。乳首から顔を上げる。

「剃るぞ」

バレッタで束ねた髪。その解れ毛を顔の輪郭に湿り付かせる水月。白く立ち籠める湯気の中、ぼんやりと瞳を開けて薄らと微笑み、うん、と返事をした。おめえが拒否る訳ねえ。

「待つてる」

水月を残してバスルーム出た俺は洗面台の引き出しからお袋が簡易的に前髪を整える為に使っていたプロ仕様のハサミとT型シェーバーを取り出す。お袋なんかには遠慮しなかった。落とした箸をそのまま出しても、相手に見られてなきや、それは清潔な箸だ。

取り敢えず、ふるちんの俺。急いでバスルームに戻り、瞳を潤ませて俺を待っていた水月にキスしてやった。

「ここに座れ」

渋めに言った俺は差し出した風呂椅子に水月を座らせ、剃った陰毛が流れ易いように排水口の水切り蓋を外す。

「脚開いて…バスタブの縁に後ろ手で掴まって腰を突き出せ」

「う、うん」

タケルが私のアソコを綺麗にしてくれる。恥ずかしさよりも幸福が勝っていた。タケルに従い、私は限界まで脚を広げ、大切な部分を突き出した。

「こんな…感じ？」

「いい眺めだ。水月」

硬く目を閉じた私は鼻から息を抜き、少し微笑んでタケルに応えた。いつぱい見て。あんだ…。

俺は遠慮も糞もなく水月の陰毛にハサミを入れる。

「こつやって…予め短くしておく…剃り易くなるんだ」

「あんだ…。搦ったくなってくるね」

ハサミを進める。排水口に、黒い陰毛が渦を巻き出した。

「こんなんで搦ったいって言ってちゃ、剃る時…堪んなくなるぞ」

「だよな…」

刈り込まれる陰毛。ハサミの音に合わせて次第に露になる局部がぶるぶると奮えてやがる。

「うっうっ…。あ、あんだ…」

クリ周辺に密集した陰毛を短く整えていると、ついに水月が唇を舌で潤しながら厭らしい声を漏らした。もしかして、この女も濡れてんじゃねえのか？ 試しに、人差し指と親指で陰列を開ける。その肉ビラがねちよつと糸を引きながら剥離した。

悪魔以下

「で、話ってなんだよ？」

放課後、俺はサッカー部の結城って奴から中庭へ呼び出された。

「タケル君」

部活前の結城はジャージ姿。忙しい時に呼び出すなんてご苦労さんなこつたよ。話の内容について見当がついてた俺はポケットに手をつ突っ込んで校舎の壁にもたれ、ふてぶてしく顔を結城から背けた。

「おめえ…俺とタメだろ。なら、わざわざ君付け止めろや。おめえ名前なんてんだ？」

「正也、だけど…」

「じゃあ、タケルって呼べや。正也」

短い髪をフロントで立たせ、額にニキビを散らす如何にもなスポーツ少年。顔を向けると、正也は浅黒い端正な顔を俯かせた。

「じゃあ…タケル。冴子から聞いたんだけど…」

「冴子？ 誰それ？」

「水月の友達で…」

冴子？ ああ、一度、水月から紹介されたブス。まあ、どうせ俺

について良い話は聞いてねえだろ。回りくどく核心に入った正也に溜息を吐き出す。

「で、何？」

「水月は中学の時から冴子と僕の試合を見に来てくれてた…」

益々、回りくどい野郎。しかめ面で頭を掻く。

「それなのに…水月は最近、試合を見に来てくれなくなった。メルをしても返事がないし。それで…冴子に聞いたら、水月がうちの学校のタケルって子と付き合い始めたって。こんな事言ったら気を悪くすると思うけど…君達の良い噂聞かないから。だから…」

君達？ 複数になってるって事は、もう一人は雄二にちげえねえな。ふふっ、と鼻で笑ってやったら、正也は途中で話を止め、勇ましくも俺を睨みつけた。

「おめえに何の関係があるんだ？」

俺に一步近付いた正也。

「中途半端な付き合いだったら止めて欲しいんだ」

くだんねえ野郎。また鼻で笑い、頭を撫でて俯いた。

「彼女は…水月は…俺の大切な人なんだ。まだ、憧れの段階だけど、いずれは真剣に交際しようと思ってる」

格好よく決めてるつもりかよ？ 堪んねえな。こいつ。

「おめえ…言う相手間違ってんじゃないかねえのか？」

顔を上げた俺。俺と目が合うと、正也は視線を沈ませた。

「今までの話で分かったのは、おめえが水月に一方的に惚れてるって事だけだ。でも、肝心の水月はどこにいるんだ？ 水月の気持ちはどこにあんだよ？ おめえが独りよがり俺に吐いても何も進展しねえよ」

眉間に皺を寄せて、正也は拳を握り締める。

「だから…いずれ…」

「いずれも今も関係ねえよ！ その様子じゃあ…何度も水月に取り入ろうとしたんだろうなあ。そうだろ？」

正也は顔を上げ、息を吸い込んだ。

「で、いつもはぐらかされてる。違うか？」

また眉間に皺寄せて、正也は俯いた。

「図星のようだな。正也」

正也はおどおどした視線だけを上げた。

「んな自分の不甲斐なさを俺に八つ当たりされても、俺は何て答えりゃいいんだ？」

「そ、そんな八つ当たりなんて…。み、水月に対する俺の真剣な気持ちやタケルに伝えたかっただけだよ。もし…タケルが水月を悪戯に掻き乱してるんなら…水月が可哀相だから」

バカか？ こいつ。首を振って呆れ笑いするしかない。

「おめえのそんなボランティア精神は俺に言わせりゃ、ふざけんだ。水月が可哀相そうだ？ 水月がおめえに助けってくれって言ったのかよ？」

「あ、い、いや、その…」

頭をかくかく小刻みに揺らし、正也は言葉を探していた。何だ？ こいつ。

「み、水月みたいな…は、恥ずかしがりやは…そんな事言わないよ」

恥ずかしがりや？ はいはい。

「水月がこんな俺に満足してんだよ。こんな俺に尽くしまくってんだよ。ほって置いてやれよ。正也」

唇を奮わす正也に歩み寄った。

「正也よー！」

そして、正也の両腕をぽんと叩いて掴んだ。

「おめえはいい奴だ。でも、おめえ…童貞だろ？」

はっと上がった端正な顔も奮えていた。

「そ、そんな…」

目玉を左右させる正也をせせら笑い、俺は両手を正也の両腕から離した。

「わっかり易い野郎だな！ おめえは」

言葉を無くした正也はまた俯いた。

「めえら部活やってる連中にとっちゃ、水月はアイドルしれねえけど…おめえら勘違いしてる」

鼻息を荒げ、正也はまた俺を睨みつけた。何、熱くなってんだ。ばーか。構わず続けた。

「どうせ、おめえら童貞保ってるなっさけねえ連中は汚れを知らねえ純白の女神様みてえに水月をイメージしてんだろ？」

惚けた顔を上げた正也をまた鼻で笑ってやる。

「そつだろなあ…。俺から言わしゃあ、有り得ねえの一言だ。おいおい、まさか、水月が俺と付き合っても、まだ処女だと思ってるじゃねえだろなあ？」

へっ、と正也の小声が漏れた。

「み、水月が…ま、まさか、そんな…水月みたいな綺麗な娘が…そんな…事するなんて。遊び人のタケルと…そ、そんな事するよう

な娘じゃない」

爆笑に変えるような、俺の予想を見事についた、おめでたい事をほざきやがった。くすくすと遠慮がちに漏れていた笑いが、もうダメだ！ 堪えられない爆笑に変わる。

「フツハハハハツ！ バ、バカかおめえ！ か、勘弁してくれよ！ 正也」

その笑いを抑える為に、俺は正也の肩に腕を回した。

「水月は…俺と会ったその日にセックスするような女だぜ。ついでに言うと、先に声掛けてきたのは水月の方だ。俺は何もしちゃいねえ。どうあつても、おめえに見向きもしなかった水月が、初対面の俺に、遊び人の俺に声掛けてきたんだよ。で、そくそくと俺に処女捧げやがった。それが現実だ！ 男前！」

「う、嘘だ！」

ぎよつとして俺を見た、その正也の間抜けな顔が可笑しくて仕方ないかった俺。また沸き上がる爆笑を何とか押さえ込んで、正也の耳元で囁く。

「水月は合ったその日に俺のチンポにしゃぶりついて、精液がぶ飲みするような女さ。とてもそれまで処女だったとは思えねえくれえスケベな女だ。今じゃ、俺のケツの穴も自発的に舐めるような女になった。それが…おめえが好き勝手に幻想を抱いた女の素顔だ」

ここまで言われて、殴つても来ない正也を、俺は完全にかからなかった。

「嘘もいい加減にしろよ！　あの水月が…」

「しょうがねえ野郎だな…」

正也の肩に腕を回したまま、ジャケットのポケットから携帯を取り出し、画像を開いた。ラブホのベッドの上で、純粹極まりない水月と軟派極まりない俺が仲良く全裸でシーツに包まり、ピースしている画像。ほら証拠だ、と馬鹿極まりない正也に見せてやった。

「こ、こ、これ…み、み…」

「正真正銘。水月だ」

正也は大きく開けた目と半開きの口をその画像に落とし込んでいた。

「確かに、こつ見ると…チロツと乳輪がはみ出でて、水月も可愛いよな？　俺も…結構、格好いいだろ？　んなジツと見るなよ。恥ずかしいじゃんか」

青ざめた正也の顔に白々しい苦笑いを浴びせながら携帯をポケットに戻し、正也…、と正也の肩ぽんぽんと叩いた。

「そうしょげんなよ。別に、水月に限ったこつちゃねえ。女なんて表面で判断するもんじゃねえよ。んなくだんねえ夢なんか抱いて、それが幻滅した時は…そう。今みてえな気分になる。今後、おまえは好きで好きで堪らない水月の顔を想像する度に俺の顔も想像するんだ。水月と俺がどんな風により合って激しいエッチをやりまくってるか想像するんだ。水月が俺のチンポに食らいついてる光景を

想像するんだ。まして、直接、水月の顔見た日にゃあ…その想像はよりリアル感を増すぜ。試合どころじゃねえぞ。どうぞどうぞ、その夜は家でシコシコオナニーに励めよ。んな気分になりたくなくなかったら、今後、女の上面にくだらねえ幻想を描かないこった」

口を開けっ放しにして、正也は涙を滲ませた。ゲキキモな奴！ヤバいくらい水月に惚れ込んでやる。

「早くすつきり童貞捨てて女の免疫付ける。よかつたら、相手できる女紹介すんぜ」

けらけらと正也の胸を叩くと、涙の固まりが正也の目から零れた。

「ま、頑張れや！ 男前！」

最後に正也の頭を撫でてやり、俺はその場を後にした。

校舎に入る直前、正也に振り返る。夕日と吹奏楽部の演奏が入り込む中庭で、長い影を落として正也がうなだれていた。なかなか絵になる青春じゃねえか。あんないい奴を悲しませやがって。水月の奴、今日は泣くまで、いや、泣いてもお仕置きだ。欠伸をかましなから、俺は校舎に消えた。

あの頃の俺は…悪魔以下。

「グツハハハハッ！ ハンパねえバカじゃん！ そいつ。で…紹介してやったの？」

廊下で、俺からその話をひそひそされた雄二は、内緒話だったのに腹を抱えて遠慮なしに笑いやがった。まあいいけど。

「あの野郎。次の日、早々、『昨日の件、お願いします』って目血走らせて来るからよ」

「ハツハハハ…。最高じゃん。で、だ、誰、紹介してやったの？」

ほらほら、と手の甲で雄二の胸を打った。

「夏休み…クラブで」

ハイハイハイ、と人差し指を差す雄二。

「あの便器女二人組ね。あいつらのどっち？」

「取り敢えず…背の低い方が時間あるみてえだったからよ。メールで話つけてやったよ」

雄二がまた笑いを絞り出す。

「フツハハハハツ！ で、でもいいのかよ？ 俺とおめえが散々4Pした女の片割れだよ。あの野郎、初エッチだろ？」

右手をポケットに突っ込み、左手で頭を撫でて胸を張った。

「上等上等。こっちは完全ボランティアで世話してやったんだ。感謝してほしいぜ」

「ガハハハツ！ 傑作じゃねえか！ それ」

また腹を抱えた雄二。そりゃ、俺達の良い噂なんて立つ訳ねえよ。

「あー！ また、いつやらしく男同士で笑い合ってる」

彩の声。一斉に笑いを口に含み、俺達は振り向いた。

悪魔以下って言うのも…おこがましい話。

「おまえ…彼氏は？」

「いないいない。今、それどころじゃないよ」

鞆を肩に掛け直し、水月はまた雨に振り向き、俺から離れて、また直ぐ俺に戻ってきた。

「あんたは？」

「うん…まあ…」

俯いて答えた俺に水月は更に近寄った。

「ちょっとだけ…妬くかな」

慌てて顔を上げると、そこに水月の笑顔があった。

「嘘だよ！ 元彼の今カノに妬くわけないよ」

長いブレイドの髪を指で弄る水月。

「でも…冗談抜きで、私、今でも…」

真顔になり、水月が視線を逸らす。な、何？ その後の言葉が怖くなり、一瞬、心臓が止まりそうになる。

「ツルツルなんだ！」

俺に視線を戻しながらの突拍子もない水月の言葉に、俺の心拍数は一気に上がった。ぶひつと吹き出し、堪らず爆笑する。

「ハハハハハハッ！」

「ひ、酷い！ 笑う事ないでしょ！」

笑ってる水月に安心した。

「で、でも、何で…そ、そんな？」

「一度剃ると…てか、剃られると…」

口を尖らせた水月は上目遣いで俺を睨む。おれは頭を撫でた。

「あ、どうも…ごめんなさい」

「あー！ もう私が恥ずかしくなってきたー！」

俯いて肩を奮わせ、水月は笑いを堪えてた。

「マ、マジ…一度剃られちゃうと…生えて、生えてくる時に違和感あるんだよね」

「そ、そうなんだ」

「後…あなたとのいい思い出だからね」

傘を後ろ手に回し、笑顔を突き出した水月が元気そうで、俺は嬉しかった。

水月は息を吸い込んで目と口を閉じた。綺麗に短く水月の陰毛をトリムした俺は石鹸をこねてシャボンを作り、そのシャボンを地肌に擦り込ませるように陰毛全体に塗る。ぴんと伸ばした爪先か膨ら脛に、うっうん、と声を漏らしながら奮えを伝わらせる水月。そんな怖がるこっちゃんえだろ。お湯を張った洗面器にT型シェーバーを浸した。

「今から剃る」

水月は控えめに、う、うん、と頷いた。頷く恥ずかしい格好させられてる割には随分としおらしい声を出しやがる。俺は風呂椅子の上で突き出された水月の股間を覗き込んだ。

「水月、行くぞ。動いたら怪我するからジツとしてろ」

ペンシルグリップに持ち替えたシェーバーを水月の左側大陰唇の下部へ合わせると、水月がふーつと息を吐き、その強張りど奮えが止んだ。俺はその毛並みに反る感じでじょりつと水月の地肌を押し込んだシェーバーを外側へ進める。

「うっ！」

一瞬、水月の尻が風呂椅子から少し浮いた。

「動くな！」

「ご、ごめん！ あんた」

水月がまた息を吐きながら静かに尻を風呂椅子に沈めた。

「ジツとしてろよ…」

じょりじょりとシェーバーを進めて大陰唇を横断させた。

「いい感じだ」

大陰唇を押し開けて言った。

「あんた…」

水月が突き出す陰部には幅3？ほどの白いストライプが斜めに描かれていた。綺麗な剃り後を眺めながら洗面器のお湯にシェーバーを漬け、その二枚刃に詰まった残毛を落とす。

「この調子で行くぞ」

「うん…。あんた」

そして、大まかな部分、両側の大陰唇と恥丘部分の陰毛を剃り上げていった。

「外側から内側へ向かって剃毛する奴がいるけど…」

また下半身を強張らす水月。その緊張感を少しでも和らげる為、俺は水月に語り掛けながら剃毛を続けた。

「しかし、それじゃあ、外側から内側に向かって伸びる陰毛に剃刀が引っ掛からず…上手く剃れない」

また毛が刃に詰まり、洗面器のお湯で毛をびちゃびちゃと洗い落とし、ふうーと息をついて剃毛を再開する。

「拳げ句…シェーバーを何度も往復させて、女の大事な部分を傷付けてしまう」

慎重に進むシェーバーに、水月の陰部は見る見るはげ山にされていく。

「女の部分に極力負担掛けず…最少往復回数で剃毛するには…」

バスルームの床に這いつくばるように、更に水月の陰門へ顔を近づけ、俺はより慎重に大陰唇と小陰唇の溝を剃る。

「毛並みに反って、こうやって内側から外側に剃刀を移動させてやるんだ」

陰列から水月の愛液が滲み出てきた。こんな緊張してても感じてやがる。厭らしい娘だ。まあ、愛液も潤滑剤代わりになって丁度いいか。

「やっぱり…優しいんだね。あんた」

て、訳じゃねえけど。水月の勘違いを鼻で笑ってやった。危ねえなあ。刃が歪むだろがあ。

「ま、一応…美容師の息子だからよ」

優しい俺は水月に勘違いさせとく事にした。

「そっか…だから、あんた詳しいんだね」

頭を起こし、薄く目を開けて俺を見た水月がくすつと笑って、また目を閉じると、俺は左人差し指をその濡れた陰門に沈めてやった。

「あっ！」

「おいおい！ 動くなって」

そう言っても、俺はその指をくちゅくちゅ動かす。

「ごめん…あ、あんた…うつつ、あんたあ…うぶつつ…」

堪える水月は体感を鼻息に変えて発散していた。よく堪えてるお

めえにご褒美だよ。若干の溜息で指を抜いた俺はその指にぎとぎと
付着した愛液を水月の肛門に塗り込んだ。

「こども、行っとくぜ」

水月の縮んだ肛門襞を左人差し指と親指で引き延ばすと、俺はその
極々薄い産毛をさらさらとソフトに剃り始めた。

「ふっ、っつぷっつぷっつっ…」

ケツの毛剃られて感じる女。薄ら笑いを浮かべ、シェーバーを洗
面器の縁でトントンと二回叩いた。

「シャーツ!」

後は、キューピーちゃんのちよろ毛のように残ったクリ周辺の集
毛だけ。

「今からは…絶対動くんじゃねえぞ! クリ周りの細かい毛だから
よ。動いたらクリが削ぎ取られちまっぞ」

「分かった…。あんたの好きにして…」

また固く目と口を閉じた水月。健気な水月の表情は虐めたくなる
ような可愛さがある。

「おめえ…息してる?」

水月の胸が息を吐き出す音と共に萎んだ。

「思わず、止めちゃうよ」

俺を見下ろした水月は照れているのか、笑っているのか分からない、情けない表情を浮かべていた。可愛い奴だよ。眼下にある水月の陰部を眺めながら笑い出す俺。

「クハハハハ……。と、止めちゃダメだ。止めたら、我慢出来ずに、はーって息吐き出した時、体が動いて剃り口がぶれちまうだろ。反って危ねえよ」

そのまま笑顔で見上げてやると、水月も完全に笑顔になって目を閉じた。

「分かった。ゆっくり息するよ」

しょうがねえ奴だな。マジで笑っちゃったけど、俺は首を回して気を取り直した。

「ヨシ！ 行くぞ」

「うん」

再び、水月の股間に顔を接近させて左人差し指と中指でぬるぬるした陰門を開け、クリに刃先が触れないようにシエーバーを進めた。俺の息が止まっちゃうよ。細けいなあ。これ。目を細め、息を殺しながら、俺はそのメンタルな作業を続けた。

散々泣いた後、

「で、どんな娘なの？」

散々泣いた後、涙を拭き終わった私はタケルにハンカチを返すついでに話題を変えた。

「はい？」

タケルは驚いた顔を見せるだけで、私が差し出すハンカチを受けとらなかつた。

「新しい女。出来たんでしょ？」

テーブル越しに、私はそのハンカチをタケルの胸ポケットに突っ込んでやった。

「んなのいやしねえよ」

鼻を擦って、タケルは俯いた。やっぱり。

「口ではごまかせても…制服についた匂いまでのごまかせないよ」

困った瞳だけを上げたタケル。

「ハンカチにまで同じ匂いが染み込んでた」

胸ポケットからハンカチを抜いて、くんくんとタケルは匂いを嗅ぐ。犬か？ おまえは。

「最近、タケルの様子がおかしいから。雄二に聞いたんだけど…雄二は口を割らなかつた」

テーブルに肘をついて笑顔を送ってやると、タケルは諦めた様子の溜息をつき、ハンカチをトレーの上に放り出し、参ったなあ…と視線を逸らしながらコーラのカップを取った。

「由美姉さんにはハンパな嘘も愛の告白もかませねえや」

何言ってるの、と苦笑いを一つついた私もアイステイーのカップを取る。

「私だけじゃない。彩も…」

アイステイーを吸い上げた私に、タケルはストローをくわえたまま静かに瞳を留めていた。

「もう直ぐ気付くよ」

私はトレーにカップを戻した。

「おめえ、雄二と同じ事言いそうだな」

「言わない」

二人の間に流れる少しの沈黙。私は真顔をタケルから離さなかつた。何でも話すって約束だよ。無言の伝達をすると、タケルは笑みを浮かべて何度も頷いた。

「正直…。その娘の事まだ好きかどうか…分かんねえよ」

タケルの言葉に、ある意味安心す私。

「でも、その娘はタケルの制服とハンカチに自分の匂い染み込ませるほど…タケルの事好きなんだろうね」

タケルは苦笑いを溢し、カップを取った。

「彩も直ぐ気付くってか…直ぐに噂立ってバレると思うよ。その娘、うちで部活やってる連中に結構人気あるみたいでさ。何でも、その娘の友達がサッカーやらテニスやら部活の試合見るの好きみたいで、その友達に付き合っって試合会場回ってたら人気者になったみたいだよ」

「まさか、その娘って…行澤女子の水月って娘？」

タケルは急に咳込んでストローを口から離れた。

「ゆ、由美。し、知ってんの？」

「うん…。うちのクラスにも部活やってる男子いっぱいいるからさ。噂と携帯画像くらい入ってくるよ」

「そうなんだ」

また苦笑いを溢したタケルはコーラを飲み直した。

「どっかで…知り合ったの？」

私はストローを口に着ける前にタケルに尋ねた。

「合コン会場抜け出した後…ビルの下で雨宿りしてたら、別の合コン抜け出して来たあいつに声掛けられたんだよ」

私も咳込んだ。

「そ、それ、ぎゃ、逆ナンってやつ?」

「ま、きっかけはんな感じだったけど…。でも…その後、ホテル連れ込んだのは…」

「は、はいはいはい…」

カップを手にする私。

「自分で言うのも変だけどさ。何であんな大人しそうな娘がって思っよ」

「タケル。それは、大人しそうな娘の方がってやつよ」

口の中が自然に乾く。くわえたストローから勢いよくアイステイを吸い上げた。

「そんなもんだろな。でも、由美より健全な娘だろ?」

吹き出し掛けたアイステイを必死に飲み込んだ私。体を捻って笑いを搾り出した。

「キヤハハハ！ それ酷くない!？」

タケルは笑顔を私から逸らし表情を曇らせる。

「確かに、俺は酷いねえ…。好きかどうか分らない相手とズルズルしてる。相手を待つてるだけで、自分から行動起こそうとしない。相手を蔑ろにしてるのと一緒だよ」

私は笑顔を膝元へ落としたりした。

「タケルの言う通り…。うちら似てるよね」

私とタケルは静かに顔を合わせた。

「由美も…そうか？」

「うん。いつも…情や雰囲気の流れちゃうんだよね。寂しがり屋なんだよ。結局」

そして、私達は苦笑いを寄せ合った。

「どっかに…自分を繋いどける場所ねえかな？」

「あるよ」

「どっかに？」

「うちらで…お互い繋ぎ合えばいいんじゃない？ 似た者同士でさ」

柔らかく沈むタケルの瞳。

「ありがとう。由美」

「お礼言うのは私の方だよ。私も全力でタケルを助ける。これから…私に何でも相談してよ」

少し涙ぐむと、タケルはトレーの上からハンカチを取り上げた。

「いらないよ！　んな他の女の匂いが染み付いたやつ！」

吹き出したタケルを尻目に、私は目尻を濡らしながら照れ笑いを飛ばし、ポケットから自分のハンカチを取り出した。

バスルームから出た俺は水月に唇をくれてやりながら洗面台の前に…。水月の腰に巻かれたバスタオルを取り去り、洗面台の鏡に水月の後ろ向きの裸体を映す。唇を離れた俺に、水月は再び唇を求めてきたけど、俺は調子付いた水月から業と唇を引いて拒否。

「そこに足乗せろや」

「うん…」

上目遣った微笑で返事をした水月。洗面台の上に爪先をやや奮わせて左脚を乗せた。ほう、いい感じじゃねえか。証拠にもなく水月は自らのパイパン（無毛性器）をその鏡に曝す。つるんつるんで微妙に青光ってやがる。

バスルームで水月に散々しゃぶらせ、一旦、落ち着きを取り戻していたチンコが復活のむく立ち。窮屈になったバスタオルを腰から

取り去りつた。

「ちゃんと見てなきゃダメじゃねえか」

目を閉じていた水月ははっと目を開けた。その白く細い背中から左手で乳房を包み、右の人差し指と中指でパイパンを滑らかしながら耳元で、可愛いな、と低く囁く。水月がじんわりと微笑んだ。

「あんだ…恥ずかしいよ」

長い腕を俺の首に回し込み、水月は俺の唇に甘息を吹き付ける。

「感想は？」

「うっふうん…。何か…つるつるの小学生に戻ったみたい…。あっうっふ…」

「触り心地…いいよ…」

「あんだああ…うああんだああ…」

愛液が溢れ始めた陰門に中指を沈ませる。

「どこに指が入ってた？ この前、ここが何て言うところか教えてやったろ？」

水月が固くした唇を俺に着けようとしたけど、俺は寸前で唇を引き、お預けを食らわせた。

「お、おま…ん、こ…うっふうああ…」

湿った水月の唇。こ褒美に俺の唇やると、水月は舌なめずり。

「いやらしいなあ…。ちゃんと鏡見てろよ」

水月は鏡に視線と吐息を反射させた。

「あんた…。あ…。か、感じる…。あんた…。感じるよ…」

膣内に埋もれた指。その蠢きに合わせて、水月は下品にも腰を振る。

「しょうがねえなあ…。後…どこ触って欲しいんだ？」

鏡の中、水月が唇と眉間を絞った。

「どこだ？」

「クリ…」

間近にいても聞き取り辛い声。

「ちゃんと行って!」

ぴちやぴちやが響くほど、箸で生卵を掻き混ぜるが如く中指の振動を過激にする俺。

「クッ！ クリトリスッ！ くうわあああああっふっあああ…あんたああああ！」

絶句ついでに絶叫しやがった。

「初めからそれぐらいでけえ声で言えよ……」

中指を膣からクリにヌル上げる。

「うやっー！」

「ほら、よく見て。こんな勃起して……。ほら、ほら、水月のクリ」

押し上げて剥き出したピンクのクリ。鏡に映し出した。

「ほら、見て。コリコリの厭らしいクリ。見て、ほら、ほら……」

腰をくねらす水月に見せ付ける。

「うつつ、あああ、あん、あんた……はずか、恥ずかしい……あんた……うつつ、あんた……」

中指を狂わせる。

「何色だこれ？ ん？ ん？ 言ってみる？ ん？ ん？ 何色だこれ？ どんな色だ？ これ？ ん？」

「ピ、ピンクうつつああ……。厭らしいピンクッあああんたあ……。ああ愛してるうつつ……」

何も答えず、俺はただひらすら水月のピンクリをこね回し、弾き、摘んで遊んだ。

「あなた…も、もう…あなたっ、わ、私…ももう…」

洗面台に乗せた水月の左脚。その太股が奮える。いつの間にか、髪に留めていたバレッタも落とされ、ブレイドが解かれて垂れ下がった長い髪が背中揺らめいている。こんなんでいかれちゃ困るんだよ。仕方なく、中指をクリから離し、ふうふう…、洗面台に乗せられた水月の左脚を床に降ろしてやった。振り向いた水月は微かに唇を尖らせ、物欲しげな表情を見せた。そう拗ねんたの。

「洗面台に両手着けるや」

「うん」

「ここはこうだっ！」

俺は水月の腰を引いて、尻を突き出させた。

「いい格好だ」

背後から水月の股間にいきり立ったチンコを差し込んだ俺は水月の内股から回し込んだ右手でチンコを掬い上げ、チンコの茎部分を水月の無毛陰列に添わせる。準備OK。その状態で、腰を振り、挿入せずに、愛液塗れのつるにゆる陰列にチンコの茎を擦り込んだ。

「ああ…。あなた…。あ、あああ…。あなたああ…」

水月の生暖かい息で鏡が曇る。きまぐつてやがる！ 水月の尻からくねり上がらせた左手。乳房を揉みだいてやると、程なくして、ねっちょんぐつちょんと厭らしい水月の愛液がチンコの茎に絡みだし、その心地好さを増していった。

「あつ、あなた…。ほ、欲しい…。あ、あなた…。欲しいよ…。あああつあなた…」

嫌だね。頭を回して眼前の鏡を曇らす水月の訴えを内心で退けた俺。水月の股座からチンコを抜いた。何だよ？ 体を起こして振り返った水月は生意気に潤んだ瞳で俺を見詰めていた。水月から視線を背け、床からバスタオルを拾い上げてねとねとにされたチンコを拭き、そのバスタオルを首に掛ける。何、ぼーっと突っ立ってんだよ？ 水月のバスタオルとバレツタも拾い、水月に渡してやった。もう終わりだつての。まだ目で俺を追い、その困った表情を変えずにいた水月。しょうがねえ女だなあ…。俺は腰に手を当てて溜息をついた。

「上行くけど…。抱いて上がってやるうか？」

「うん！ あなた！」

調子いい笑顔を戻しやがった水月は俺に擦り寄って俺の肩に右腕回す。水月の膝裏に右腕を回し込んで、うつこらしよ、お姫様抱っこしてやった。んな、上目遣いで見るなって…。わ、分かったよ。キスだろ？ ほら。

「あなた、マジ優しかったよ」

上目遣いのまま、ハンカチで肩口の雨水を払ってくれた水月。

「いやあ、優しかなかったよ」

水月はそのハンカチを俺の顔の前に掲げた。

「こう言う、さりげないあなたの優しさは昔も今も変わってないよ」

そう言や、それ、俺のハンカチだったよな。

「ズツと白々しい優しさを演じて安売りしてる男はいっぱいいる。でも、本当の優しさは自分自身でも気が付かないもんだよ。あんた…気付いてなかったでしょ？」

雨に視線を移し、俺は照れて笑った。

「こんな事言ったら何だけど…全く優しくした記憶ないよ。本当、今更ながら申し訳ない」

「だから、あんた、自分では気付いてなかったただけだって」

少し俯き、微笑みを隠した水月は襟も拭いてくれた。

別にいいやって感じだけで、至って無作為にベッドまで運ばれた水月。ベッドの上、直ぐに覆い被さらず、俺は水月の両足首を掴んで両脚をV字に裂き、洗面台の時と違うアングルでパイパン拝見した。青光する性器からはみ出る、ぬる付いたピンクのビラとビラ。

その裂け目に透明な汁が滲んでる。

「いい眺めじゃねえか」 上下させる俺の目付きが余程嫌な様子で、水月はそのパイパンを両手で覆おう。

「触るな！」

「ごめん！」

俺の掛け声で、ブルツと身を奮わせた水月はパツと両手を開いた。

「眺めが良かった事は……」

水月の左足首から右手を離す。

「綺麗って……」

右中指と人差し指を、水月の右足首を握り締めたまま内股にぞらせると、水月は口を半開きにして顎を突き上げた。

「事じゃねえか」

洗面台での行為でテカリきった水月の無毛大陰唇に、その中指と人差し指をそよがせる。

「うっはあああ……あんたあ……うれ……しい……あんた……」

スケベな陰列から愛蜜が垂れると、人差し指で救い取り、親指を重ねた。

「水月…」

ゆっくりと開かれる水月の瞼に合わせて重なった二本の指をゆっくり開ければ、キラキラした透明の糸が引かれた。

「何だあ…？ これは」

顎を引いて眉間を絞り、水月は両肘で二つの乳房を寄せ合わせて額に手の甲を当てて、笑ってる？ 照れてる？ 可愛く困った表情を作る。

「あんたあ…」

何、ぶってんだ？ 両脚開いてパイパンを曝しておきながら、そんな白々しい態度を取る水月を俺が許す訳ない。

「この前、教えてやったる！？ ちゃんと言えよ！」

「まんじる…」

何とか耳に届いた声。

「どんな時に出るんだった！？」

「愛してる人の前で…厭らしい事考えた時に」

ん？ 「男の前で…厭らしい事…」って教えたんだけどな。ま、いつか。

「ちゃんと答えられるじゃねえか」

水月の右足首を離れた俺は水月に顔を近付け、そのねとった指を口に入れ、ジユバツと音をさせて引き抜いた。

「水月のだからうめえよ」

「あんた…。嬉しい…」

別に取り立てて褒めてやった訳でもなかったけど、単純な水月は瞳を潤ませ、ゆっくりと俺に右手を伸ばした。調子付くなつての。俺の頬に届きかけた水月の右手を左手で止めた俺。チンコの先から滲み出たカウパー液を右人差し指で掬い取る。食らえ！ 水月の半開きになった口に、その人差し指を放り込んでやると、水月は俺の目を見詰めたままそれに舌を巻き付けた。スケベ過ぎる！

「美味しい…。あんた…」

意味分かんねえ。変質女が！ 吸い付く水月の唇から人差し指を引き抜くと、ちゅぱつと音が鳴った。何だ？ この女…。半分呆れながら、俺は水月の両脚の間に体を沈め、石鹸の香りがまだ残るパンパンに顔を近付けた。

「もつと開けて見せろ！」

「うん…。あんた」

頼りない声だが行動は真逆。水月は大きく両脚を開け、やや腰を浮かせて俺の眼前にパイパンを曝け出す。

「我ながら…。いい感じに剃れたな。アップで見ると、可愛いツルツ

ルピカピカの子供みてえな大陰唇の中に厭らしいブルブルビラビラの大人びた小陰唇が咲いてやがる」

専門家風に顎を摘まみながら低音を意識し、俺は水月が無毛になり不安感を抱く箇所を詳細に説明してやる。

「肛門も…産毛が無くなって綺麗になった。いい光沢だ。うん、悪くない」

「あんだ…。マジ…恥ずかしいよ…」

恥ずかしいと言う割には愛蜜が溢れ出すパイパン。

「別に…恥ずかしがる事ねえじゃねえか。もう俺ら二人は他人じゃねえんだから」

タケルが他人じゃないって言うてくれた…。声に出せない静かな歡喜が枕に染みる。

「あんだ…。愛してる…。あんだ…」

ぐずり始めた水月を股ぐら越しに眺めた。何か泣くような事いったか？俺。ま、まあ、いいや。再びツル門に目を落とすと、その汁玉が肛門に滑り落ちた。上のからも下からも雫。忙しい女だな。可愛いからある程度は許してやるけどよ…。

「あんたの嫉妬深さも魅力だったよ」

「マジで？ 確かに…嫉妬は激しかったけど…。迷惑してたんじゃないの？」

高架の壁に背中を着けた俺を追って、水月も壁に背中を着けた。

「あそこまで、自分の感情を剥き出しにして素直になってくれる男なかなかいないよ。素直な感情を押し殺してクールぶるのが格好いって勘違いしてる男ばっかだからさ」

水月は肩に掛かったブレイドの髪に触れながら俯いた。妙に照れ臭くなった俺。ポケットに手をつ込み、顔をやや上に向けた。

「感情だけで…言葉で上手く伝えられなかったもんな。俺」

「分かってた…」

水月に顔を下ろすと、水月は笑顔を上げてくれた。

「あんたが照れ屋で上手く言葉で伝えきれない事」

雨音を背にして、水月はまたそつと髪に触れた。

「別に…構わねえんだぜ。俺は」

水月をメールで俺の部屋に呼び出した。

「あんた…。何の事？」

慌ただしく足音を響かせ、階段を駆け登って来た水月はこの上ない笑顔でドアを開けた。

「あんた！」

その水月の笑顔に逆らうかのように、片膝を立ててベッドの縁に背中を着け、虚ろな目付きを演じた俺はその目付きを爪先辺りに落とす。

「あんた…」

俺が作り出す異様な空気を感じ取り、肩を萎めて表情を一边させた水月は鞆の肩紐とコンビニの袋を握り締めたままゆっくりと歩み寄り、上目遣いを残して俺の傍にゆっくり腰を降ろした。

「で、何買ってきたんだよ？」

漸く水月は鞆の肩紐を外し、コンビニの袋を漁った。

「あんた好きな烏龍茶とツナおにぎりと…お菓子…」

「俺の好きなのはコーラとエビマヨおにぎりだ」

確かに前は烏龍茶飲んでツナおにぎりを食らっていたけど、関係なかった。

「ご、ごめん…。あんだ。でも良かった。コーラとエビマヨも買ってきたんだよ。コーラとエビマヨも好きだもんね。あんだ」

抜かりねえ女だ。

「で…何かあったの？」

溜息をつき、水月に顔を上げると、水月はわざわざキャップを開けてコーラのペットボトルのキャップを俺に差し出した。調子崩さしやがって…。仏頂面で、水月からボトルを取り、一気にコーラを飲んでボトルを降ろすと、剥かれたおにぎりが俺を待っていた。マジ、隙ねえな…。おにぎりを引たくり、口に詰め込んだ。あー！ やっぱ、おにぎりにゃ烏龍茶だった。クソ！

「あんだ…」

水月の心配そうな上目遣いは続く。そろそろ始めるか…。もう一度、溜息について準備を整えた。

「おめえ…結城正也って野郎知ってるよな？」

水月は口に着け掛けた烏龍茶のペットボトルを下ろした。

「知ってるけど…」

視線を左右させながら答えた水月。

「どんな関係だよ？ 別に、構わねえんだせ。俺は」「あんだ…。
何の事？ 言ってる意味が分かんないよ。構わないって…。そんな
…何にも関係ないよ」

ペットボトルにキャップを戻し、ど、どおしちったの？ と水月
は前のめりになって顔を俺に近付ける。キモイ！ 俺は左膝を降ろ
して右膝を立て、水月から顔を背けて閉じられたカーテンを眺めた。
「パンツ脱げよ」

重い空気の中、息なり過ぎる要望。水月がどう応えるか、水月の
従順度を計ってみたかった。

「そんなのいくらでも脱ぐよ！」

どん、どん、騒々しい音が床に響く。水月が立ち上がった様子。
こいつ変だな。いくらでもって、おめえ、パンツ何枚履いてんだ？
バカかおめえ！ 込み上げる笑いを堪えて水月に振り向いた。潤
んだ瞳。俺を見詰めながら水月は堂々と制服のプリーツスカートの中
から水色のパンツを下ろし、右足、左足と引き抜くと、そのくし
やった生脱ぎパンツをスカートのポケットに隠した。あんま面白く
ねえ。握り拳を口に当てて、まだ水月は突っ立ったまま。

脚の付け根から浮き上がった水月の大腿骨をくわえ、舌を奮わせて唇を這わせる俺。水月の股関節に思い切り吸い付いてやった。

「うっうっうっ…」

俺の吸い付きに、水月が遠慮がちに声を漏らしす。もういいだろ…。

「うっ！」

チュツ、と音を響かせて唇を離すと、水月の股間に赤く浮かんだ痕がはつきりと残った。

「いい感じに着いたぞ。俺のキスマーク」

「嬉しい…。あなたのキスマークが私に…」

そんなんで涙声になるんじゃないよ。マジ単純な女だ。構わず、俺は我ながら綺麗に剃り上げて桃剥けにしてやった水月のクリを親指で押し上げて奮わせた。

「次は…何して欲しい…？」

益々の蜜がトクトク…いや、ドクドクと肛門に流れ、シートまで濡らす。

「ふっああああなた…。な、舐めてくっくください…。あなたあああ…」

「正直でよろしい」

水月のパイパンに、俺は鼻先を接近させ、つるつた大陰唇の片肉に舌面を着ける。バスルームじゃフェラが気持ちよ過ぎて、洗面台じゃ弄り倒しと擦り付けに没頭して、結局、舐め回すの忘れちゃったからなあ。なるほど、舌触りはこんな感じかあ…。水月の唾液と俺の唾液の混合物によって潤滑された無毛地帯は、確かにつるつるとした舌触りだったが、その汁を嚙りきって多少ぬめり気が和らいだその地帯に舌面をやや強めに押し込むと、微妙なザラザラ感が伝わった。

ツルツル感とザラザラ感。舌の強弱具合により、それらのどちらかを自分の好みと気分で選択出来る事を初めて知った。結論を言うとな、ツルツルとザラザラの両方好きな俺にとってパイパンは格好の代物、名器。そんなどうでも良い事を考えながら、何の罪悪感も遠慮もなしに舌面で水月のスケベ液を丹念に万遍なく、その妙感のある大陰唇に引き伸ばした。

「うっああうっふあああんだ…」

外側だけで悶えやがって。ひりひり感も気持ちいいってか？まだ中身があんのに、そんな枕掴んで感じやがって、まあ…。少し沈み気味になった水月の下半身。

「もつと脚上げろや！」

「うん。あんだ…」

両膝を膝裏から抱え上げた水月。嫁には行けねえほどの従順さ。蛍光灯の明かりを反射した艶々の大陰唇に圧迫され、ぷるつと窮屈そうにはみ出た生きのいい小陰唇を眺めながら、まるで生命体だ、膣から流れ落ちる溶液の中で健気な開閉を繰り返す小菊、水月の肛

門に、俺は不安定な曲線を描く舌先を落とし込ませた。

「うっうっあああ！ うっうっうふふっうっうっうっ」

産毛も無くなり、綺麗に仕上がった肛門。固く尖らせた舌をくるくるれるれると可能な限り蠢かす。甘くて美味しい…。涎がシートに落ちる。

「うっうっう…。あなた…。あ、あつたかいいいい…。あなたああ…」

吸ったらどうなる？ 思い立ったらすぐ行動。ズッズッズズー、音が進ると、くっうっうっう…。水月が赤面を上げる。

「ああああなた…。あつい…。あなた…。ききき、気持ちいい…。うっうっうあうっうっうっ」

まだまだ…。縦横無尽の勢いのまま舌先を肛門の中に強く押し込んで奮わせた。

「うっうっうっあうっうっうっ…あうっうっ、んたあ…。と、解けるうっうっ…。解けるうっうっうっうっ」

奮える太股。水月は俺の髪を撫で回す。それでも不満足だった俺。水月の尻を両手で裂き、肛門ヒダを伸ばして溝までも舌で綺麗にしてやった。

「すすごいよっうっう…。あなたああ…。あ、愛してるっうっうっ…」

「どこ舐めてやってんだ？」

「ああ、あ、なる…」

搾り出しやがった。これでいいだろ。宙に浮く水月の両脚を下ろさせた俺は会陰（膣と肛門の間）に這う舌先を更にも上昇させて小さく口を開く水月の蜜壺に挿入し、丹念に舐め始めた。あんた…。あんた…。私、私…。ああ…。と俺の指に自分の指を絡めてきやがった水月。仕方なく水月の手を握ってやる。壺口に唇を合わせてちゅーちゅーと蜜液を吸い込みながら水月の剥きくりを親指で弾くと、穏やかに波打っていた水月の体へ一気にスイッチが入り、弓なりに軋む。

「あっ！ あああっあんっ！ うっ！ うっああああっんたっああっ！ うああああ…」

惚れ込んでしまいそうになる神経を、俺は必死で押さえ込んでいた。

支配欲

予想外に堂々とパンツを脱ぎ、涙顔にも関わらず俺を精悍に見下ろす水月に退屈した。

「もういいや」

俺の肩に落ちるノーパンの水月。

「言って！ あいつが何なの！？」

「うっせ！ なら言ってみよ。」

「水月…。水月よう…」

水月の髪からヘアゴムを取り去り、別に意味もなくブレイドを解いてやると、あんだ…。水月は恐々と俺の肩から顔を上げた。

「今日、あの正也って馬鹿が俺を呼び出しやがってな…。水月は俺に惚れてるから、別れろって抜かしやがんだよ。おめえら相当仲いいみてえだな？」

ダークグリーンのカーテンにまた顔を向ける。光や景色は遠さないが音は透す。うるせえ小鳥の囀りが聞こえてた。

「惚れてるかあ…」

やや上を見て、溜息をついた。

「おう、分かった。なら、どうぞどうぞ、惚れてください。おめえもてえした女だな。誰と二股掛けてんだよ？」

奮える水月の息遣いに合わせて、俺の体も微妙に震えてきた。

「あんた…。き、聞いて。あんた…」

絞り出さる水月の掠れた涙声。顔を背けたまま、うるせえよ、と一蹴した。

「そんな仲いいなんて有り得ないよ！ 冴子と付き合っただけの馬鹿の試合見に行っただけだよ。あいつに入れ込んでんのは冴子の方だよ！」

従順な女は疑われる事が死ぬほど嫌らしい。

「嘘も休み休みに言えよ！ コラ！ 別れてやる。もう、ごめんだよ」「あんた…。何でそんな事言うの？ あ、有り得ない！ わ、私が二股なんて有り得ないよ！ わ、私はあんただけだよ。死んでもあんただけだよ。あんた…。信じてよ。お願いだから信じてよ。ねえ、あんた。別れるなんて言わないでよ。信じてよ。あんた…。あんた…」

俺の別れるって言葉に過剰反応し、涙を振り撒きながら俺を揺らす水月。何、必死こいてんだ？ バーカ！ コーラが胃から喉に逆流されて気分が悪い。やっぱりのブスが正也に。にしても、あんなブスとおめえが並んだ日にゃあ、男100人中100人がおめえに行くだろが。水月があんな青春一直線の童貞野郎に興味なんて持つ訳がない。全て分かった。じゃ何で？ 簡単だよ。言い掛かりをつけて水月を面白半分にしたがる、堪らなくエロスを醸す遊びを

楽しみたかっただけ。神様はこんな余暇を許してくれないだろうが、悪魔なら許してくれるだろう。

俺の体を揺するのを止め、ハーハーと呼吸を繰り返して、ズツ、ズツと鼻水を啜る水月は疲れた様子。乱れた髪をそのままに、手を床に着いてうなだれた。フツ、詠え向きつてのはこの事だ。コーラを一口飲んで笑いを体内に納めた俺は静かにペットボトルを床に置いた。即興で作った鬘をゆっくりと水月に向け、溜息を吹き掛ける。面白い。

「どうだかねえ？　口では何とでも言えるからよ」

「あんた…」

水月は俺に顔を上げた。頬と唇に髪をへばり付かせるポロポロの涙顔が妙に俺の サディズム sadism に火を点ける。

「じゃ、何で！？　あの馬鹿が必死こいて俺に水月と別れてくれって縋って来やがったんだ？　俺が何であんな野郎からおめと別れるってほざかれなきゃなんねーんだよ！？　おめえとあの野郎がいい仲だからじゃねえのか？」

涙も吹かず、青紫に変色した唇を奮わせる水月は何か言いたげ。俺の迫力に圧され言葉なんて出るはずがない。水月はただ啞然と俺を見詰めたまま小刻みに首を振って、無言で、それを否定した。

「おめえがああの野郎と俺を二股掛けてるって事はバレてんだよ！　ふざけた真似すんじゃないぞ！」

怒鳴っても嫉妬なんてない、と自分に言い聞かせる。あるのは、水月に対する魔王的な支配欲だけ。

蒼白した顔を俺に向けたまま、鞆を引き寄せた水月は、慌ただし

く、その鞆の中を漁って携帯を取り出した。きつと、正也に携帯を掛けて怒鳴り散らすつもりだろう。血走った目。乱れ舞う髪。奮える両手で必死に操作される携帯。パンツも履かずにこの女、愉快過ぎる。

「ほう、あの野郎の番号持つてるなんて、相当仲良しじゃねえのか？」

厭味つたらしい声色。演技を忘れて何かマジで腹が立ってきた俺。やっぱり嫉妬もあつたかも。

携帯を叩く指を止めた水月は顔を更にクシャクシャにした。暫くの沈黙。空気清浄器の音だけが流れる部屋。

「ごめん…。あなた…」

「はあ？」

「私…あいつと番号とメアド交換してた。でもそれは昔…」

メアドだあ？ 番号だあ？ いくら過去とは言え、俺の女があんなキモい童貞野郎と…。頭の中で何かが切れた。

「昔も今もねえだろが！！」

ポケットから引き抜いたハンカチを、ふざける！ と余りにも正直にほざいた水月に投げ付けると、いやっ！ と水月は顔を背けて携帯を床に落とした。もう嫉妬は隠せない。

「消せ！ んな汚ねえ番号もメアドも消せっ！ 着信も発信もあの野郎のは全て消せっ！」

「い、今すぐ消す！ 消すから、あ、あんだ…」

俺から決して視線を外そうとしない水月。動揺なんて生易しもんじゃない、完全に恐怖に駆られてる。床に落ちた携帯を、水月は、あたふたと、覚束ない10本の指で探る。あんだ、あんだ…、と掻き寄せる携帯。許してえ、お願いだから…あんだ…、と奮える手になかなか携帯が収まらない。バカが。死ぬまでやってる。やっと携帯を握れた水月。

「ちゃ、ちゃんと消すから…」

涙なんて拭く暇がない必死の形相。水月は俺の肩に自分の顔を擦り寄せて、無理矢理、俺にがくがく奮える携帯画面を見せる。

「こ、こんなの、関係、関係ない。ほら、ね、あんだ、こ、こども、ちゃ、ちゃんと、こども、ほら、消すから、ね、ね、あんだ…」

水月の涙が俺の肩を濡らす。堪らない溜息が吐かれ、俺は携帯を水月から奪い取った。

「へー！ 『今度、映画行こうよ』。つい最近のメールじゃねえか？ で、行った訳？」

「い、行ってる訳、な、ないよ！ む、無視に決まってるじゃん！ そ、そんなの、あ、有り得ない。あ、あんな馬鹿とな、何で…」

完全に声を裏返す水月は呂律をも狂わせていた。

メールの返事が来ないと、俺は正也から聞いていた。腹が立つのは水月があ野郎の番号やメールアドレスをキープしてた。そこだけ。呆れ顔の俺は水月の膝の上に携帯を放る。

「う、ごめんね、あ、あなた…」

膝の上から携帯を拾い上げた水月は再び俺の肩に擦り寄り、携帯画面を俺に見せる。全く無意味な行為を続けた。

「ゆ、許して、あなた…。ぜ、ぜ、全部、け、消すから…ほら、み見て。お願いだから…見てよ…。あなたああ…。な、何でもするか…許して…」

至って無表情だった俺はペットボトルを口に着け、そんな水月の必死さを鼻で笑ってやった。

「まだ全部消すんじゃないぞ」

「えっ？」

しおらしい声を漏らし、水月は顔を上げた。水月の携帯に正也からのメールが受信されないように、正也からの電話が着信できないように、拒否設定する必要がある。それには正也のメアドと携帯番号自体を受信着信拒否設定する必要がある。俺もウザい女、何人分拒否設定してやった事か。メアドも番号も全部消されたら拒否設定できない。冷静だった俺は水月に徹底を求めた。

「全部消す前に…。あの野郎のメアドと番号を拒否設定しろや。やり方くらい分かるよな？」

「そ、そうだよな。ちゃんとちゃんとせつ、設定するから、ほら、み、見て…あなた…」

何、必死こいてんだ？ こいつ。見てどうしろってんだ？ 薄ら笑いのまま、俺はまたコーラを一口飲む。水月は全ての作業を終えた様子で、ボーツと湿った顔を晒していた。

「言つとくけど…あいつに全て言つてやつたぜ」

俺は何気に水月の膝元に落ちていたハンカチを拾い上げて、その涙を拭いてやった。

「おめえと出会った日にソッコウして…。今じゃ、おめえは俺のケツの穴まで舐める女だって。この前、ラブホで撮った画像も見せてやったよ」

怒ると思つた水月はハンカチの中からホツとしたような笑顔を見せる。何だ？ この女。

「あんだ…。有難う。そこまでしてくれたんだ」

変な女。水月の顔を拭いてやりながらまた笑いを頬に含んだ。

「ああ…。手こずらせやがって。あんなカスみてえな男と二度と関わり持つんじゃねえぞ」

俺の方が段ちでカスと自覚はしていた。

「うん！ 絶対、死んでも、あんたしか見ないよ」

死んでどうやって俺を見るってんだ？ この女、本当にあんな偏差値高い学校行ってんのか？ 親の教育がなつてねえんだろ…。ノーパンのまま涙に咽せる水月がスカートから剥き出す太股。俺は

勃起を促された。

「許してやるよ。信じてやるよ」

出し抜けに勃起しながらも遠くを見詰めて渋く決めたつもりのはハンカチを水月の膝に投げ捨て、ペットボトルに手を伸ばした。

「あんだ！」

水月が俺の首に飛び付いてきやがった。イツテーツ！ その瞬間、水月の膝が俺の勃起チンコに入り、悲鳴も差し込まれる激痛が走った。

「ごめん！ ごめん、あんだあああ…。もう、もう二度とあんだに疑われるような事しないからああああ…。死んでもしないからあああ…」

号泣し、しょっぱい唇を俺に着ける水月。激痛に堪える俺。俺が、し、死ぬうつつ…。

「あ、ああんだ…。あ、ああうん…。んんんんあ…。いい、いきそ、あんだあああ…」

左親指で剥きクリをこね回しながら、濡れ壺に右人差し指と中指をやや上向きに曲げて挿入し、高速で出し入れ。

「まだ！ まだ我慢しろ！が、我慢しろっ！」

可愛さ余って憎さ百倍。放心する水月に我慢なんて無理だと分かっ
つていても、その変則的な愛慾の中で、水月を嬲り者にしたかった。
尽くしたきゃ尽くさせてやる！ その分、俺の奴隷にしてやるよ！
覚悟しろ！

「ウツラアアーツ！」

頭の中で神経が乱れ狂う。額に滲む汗を拭く暇なんてない。人差
し指と中指のピストル運動と親指のバイブレーション運動を増強さ
る事だけに注力した。

「あっあああなたっ！ ダメツ！ あなたっ！ あいつ！ 愛して
っるっ！ あなたーっ！」

水月は放心を越えて錯乱。

「い、行くぞ！ ま、まだ行くぞうっつ…。水月いいい…」

人差し指と中指の角度をより高く上げ、ザラザラするGスポによ
り強い破壊力を与えてやる。水月が腰を浮かせると、くぶつと空気が
入り、膣内空洞が形成された。ヨシ！ 機を突いてGスポを思い
切り押し込む。その瞬間、膣からピシャと俺の頬に水月の潮が飛ん
だ。来そうだ。俺は枕元に外れ落ちていたバスタオルを咄嗟に水月
の尻下に挟込んだ。これでOK。その噴出への準備を整えた俺は心
置きなく腕が抜けそうになるくらいそのピストンを加速させる。

「だっ、出せ！ み、水月っ！」

またGスポに2本指を押し込み、乱れ狂わす。

「あ、あんたっ！ いっ、いくっ！ アンターツ！！」

弓なりになる水月の絶叫が俺の鼓膜と部屋の天井を奮わせる。デ、デケエ声だなあ！ 外で買い物帰りのおばちゃんが振り帰ってんじやねえかあ？ 流石に、一瞬引いたけど、まだまだ出るだろ、と掻き上げを継続した。

「で、出てるうっうっ…。あんたああ…。出てるうっうっ…」

水月は自ら抱え上げた膝を痙攣させている。掻き乱される俺の2本指に合わせて、ぴしゃばしゃと水月の膣口からきらきら飛び散る無色透明なイキ潮。その飛距離は30センチほど上空にあった俺の顔面まで到達した。

「よしよし…。出てる出てる」

「あんた…。気持ちいい…。さいごうつに、しあわせだよ。あんた…。」

バスタオル…。あんまり意味なかった。全てを出し尽くした水月を見計らい、俺はそのバスタオルを抜いた。まあいけるか…。汗と潮でまみれた面を湿っていない部分で拭いた俺は濡れ壺に入れた指をそのままに、ベッドに目を落とす。そこまでシートは濡れてねえな。ゆっくりと抜いた2本指と入れ替えるように水月のパイパンにバスタオルを当て行い、何気に笑顔を送ると、水月は、恥ずかし気に額に手の甲を着けた。

「こんなお漏らししやがって…。見てみる」

笑顔のまま、その濡れた2本指を水月の顔に近付けてやると、水月は両肩を上げ、うっとり微笑んだ。

「あんだ…。凄い…」

何故、俺は笑顔なんだろう？ 分からないまま、まだ半開きの水月の口に2本指を入れてやる。水月は俺を眺めながらその2本指に舌を絡めた。

「もっと違うモノに…その舌絡めてえか？」

「うん。あんだ…」

水月はやんわりとした微笑みと妖しい光を帯びた瞳を見せた。

「一緒に帰る！」

「お、おう」

普段と変わらない笑顔の彩は下足場で若干よそよそしく視線を逸らした俺に声を掛けてきた。吹奏学部の演奏が微かに響く校舎。気のせいに違いないけど、その演奏がいつもより静かに聞こえた。彩は…気付いてる様子。

「もう直ぐ、中間テストだね」

「だな」

「勉強してる？」

「ぼちぼち」

雨上がりの下り坂に夕日が当たり、眩しいほどオレンジ色に輝く。街路樹が所々に長い影を落とし、通学路の歩道と2車線の車道を挟んで、学校のグラウンドフェンスの向かいに広がる住宅地からは子供達のはしゃぐ声が微かに漏れる。きつと今日はカレーだな。どっかの家から夕飯の匂いが漂っていた。普段とあんまり雰囲気が変わらない帰り道。普段と変わってたのは、ぎこちなくなつた彩との会話だけ。

「A組のタケル君が行澤女子の水月で娘と付き合ってるらしいよ」

女子のトイレトーク。

「知ってる！うちのクラスで男子が悔しがってたよ」

鏡に向かって髪を直した後、リップクリームを着けながら聞き耳を立てていた。男子の良い情報、悪い情報は女子しかいない場所、女子トイレで確実に入ってくる。殆どの男子はその事実を知らない。男どもってマジ平和過ぎだよ。

「女子達も悔しがってる娘多いよ。タケル君だもんね」

「あんたもそうなんでしょ？」

「そう言うあんただって！」

くだんねえ！ リップを塗り終えた私はやや強めにドアを開けて
トイレを飛び出した。

「何だよ！？ さっきから元気ねえなあ！ いい加減にしろよ！」

俯いて歩いていると、息なり、彩が前に飛び出して俺を止めた。何
だよ？ と溜息を歩道から車道に向ける。

「別に普通だよ」

「普通じゃねえよ！ 教室でも何か私によそよそしいしさ。今も…
全然、話弾ませようとしねえじゃねえか！」

「おめえと一緒に帰ろって誘ってきたんだろ！？ おめえが話弾ま
せるように努力しろよ！ さっきから勉強の話ばっかだよ。面白く
ともなんともねえよ！」

前に立ち塞がる彩を通り過ぎる時、肩に掛けた鞆が彩の腕に当た
ったけど、別に気にしなかった。

「タケルって！」

叫んでやると私の背中、タケルの足音が止まった。

「意外とモテんだね？」

「はい？」

同時に振り返った私達は共に笑顔を見せ合えた。

「トイレで、女の子達が話してたよ。タケル君で格好いいねえってさ」

澄ましてタケルを追い越してやった。

「因みに…誰それ？」

駆け寄ったタケルを苦笑いと鼻息で蹴散らして歩き続ける私。

「女いる奴が他に目くれんじゃねえよ！」

言っちゃった後に気が滅入った。鼻を擦りながら歩道から車道に逃げていくタケルの困った表情が、いつも通りの憎めないタケルの苦笑いが、ちよつとだけ私の気持ちを穏やかにした。私達は親友同士なんだ…。歩きながら、タケルが私の顔を覗き込んだ。

「彩…」

「な、何よ？」

やや怒り顔を作ってしまった私からタケルは逃げるようにサッと

顔を上げた。

「やっぱいいや」

「言えよ！」

私が迫るとタケルはまた鼻を擦った。

「マジ、今度のテストやべえんだよね…」

自然に胸の中から笑顔が押し上げられた。

「てか、英語だけなんだけどよ」

「もしかして…またノート貸してほしいって話？」

「う、うん。まあそんな感じ」

「どおしよっかなあ…」

足を止めて背を向けた私に、タケルは回り込んできた。

「も、勿論、ただって訳じゃないぜ。マック連れてくよ」

「マックねえ…」

「あ！ じゃあ、ファミレス」

「ファミレスねえ…」

つんと顎を上げて、私は歩きだした。

「頼むよー。彩ああ…」

私の鞆を揺らす困ったタケル。夕日が坂道を下る二人を暖かく、楽しく包んでいた。今晩は泣くと思う。でも、素直じゃない私も悪い。そりゃタケルに彼女が出来ても仕方ないよ。いつかきつと素直になれる日まで、タケルと喧嘩しながら、タケルの親友であり続けながら堪えるしかない…。

益々憎めない、益々おどけてくるタケルに、馬鹿な私は…益々惚れ込んだ。

「何をくわえてえんだ？」

「あんたの…チンチン」

俺の2本指を口に入れたまま答えた水月。

「俺のチンチンをどうしたいって？」

「あんたのチンチンを…しゃぶりたい」

鼻で笑ってやった後、しゃぶらせてやるよ、と仰向けに寝転んでやると、水月は猛然と体を起こす。飢えてやがる…。天井に向かって聳え立ち、銀光色を放つ俺のチンコに、水月は先ず吐息を浴びせた。

「しつとりと味わえよ」

「うん…。あなた…」

髪を肩に掛けて首筋を表にし、尻を突き上げて俺のギンマラに食らい付く…。その容姿はまさに女豹と呼ぶに値する。ねっとり根元に絡む水月の舌。うつつ…。やるじゃねえか。ほどよい振動をぶるぶると茎に伝えながら競り上がった舌先が裏筋を擦る。疲れが消えていく…。唇を窄めて、尿道からしたるカウパー液（我慢汁）をじゅるじゅる啜る水月。片時も、俺から上目遣いを外さない。俺の教えを脱し、水月が独自発展させたフェラ。き、来てる…。舌が尿道に…。溜息つかせるほど上手い。

タケルの塊…。私の為にこんな大きく…。勇ましく…。はち切れんばかりに成長してくれたタケルの愛情。その塊が私の口内で脈打ち、その先から流れる甘い汗が私の舌を躍らす。ごめんねえ。あなた…。フェラ上手くなって…。もっと努力して、あなたの為に上手くなるよ。それでも、私の拙いフェラに優しい瞳をくれるタケル。タケルの女として、最高の幸せを実感しながらタケルの全てを濡らす私。あなた…。愛してる…。

マジ、いつの間にこんな上手くなってやがんだ。唾液でぎとぎとになったギンマラを握り締めた水月は何故か感慨深げに亀頭に頬擦りした。

「あんだ…。あんだ…」

来まくってやがる。そして、怪しい眼光を漂わせて、水月は再びギンマラを呑み込み、頭を周回させながら亀頭全体に舌を巻き付かせた。そんなに腹ぺこだったのかよ？うんつと下っ腹に力を込め、俺は更にカウパー液を搾り出してやった。

「う、美味しいか？」

少し、水月の唇と俺の亀頭の間隔が空く。

「ふん。ほいしいよ。ふあんだ…」

籠った声も熱い。

満たされて溢れた幸福が涎となって唇から漏れ、雫となってタケルの塊に流れ落ちていく。

この潤んだ尿道。

この尖ったかり首。

この張った裏筋。

この勇ましい塊。

全てに舌を這わせた私は幸福を逃さないように、タケルの塊をまた呑み込む。

口の中のもの。全て私のもの…。

頬が窪んで目の色が違う。突き上げた尻も揺れている。その一目瞭然な女欲は水月自身に一定のリズム感、吸引力、じゆるじゆるの上下運動、フェラしながらも右手で玉袋を撫で回し、左の中指で俺の肛門をそよがせる余裕を与えていた。

ヤベ、んな、高速にじゅばじゅばされちゃ、いつちまうだろが！俺は「止め」の合図と「次」の合図を無言で送る為に自分の両脚を抱え上げた。いつもの合図を受けた水月はギンマラから唇を離し、顔を更に下方へ潜り込ませて左右の睾丸を交互に口に含み、エロ舌を万遍なく絡ませた。なかなかソフトにやれるようになってきたな…。つくづく慣れつてもものは恐ろしいもの。

じゅぽつと玉を吐き出した玉袋と肛門の間を、水月が…、男なら皆、そ、そこは最高にぶるぶる来て気持ちいいんだよ、まるで蟻が這うように舌先で擦り始めると、ギンマラは別の生命体のようにびくびくと反復運動を起こした。相当、ノリノリになってやがる。水月の蟻舌は列を進め、俺の肛門に辿り着く。

ふーっと息を吐くと共に水月の生暖かい舌面が肛門全体にくるくる回り、にゆるにやると蠢く。水月が発するその熱波よってとろとろに溶かされる下半身の筋肉を、俺は必死に引き込んだ。尻を高く上げて俺の肛門を食らう、獣と化した水月。いい眺めの中で、水月はギンマラへ指を纏れさせて扱き、舌を固めて肛門をほじり、やがて、水月の執着心はずーずーと狂った吸引を作りだした。枕に落ちた俺の意識は悔しくも癒しくも蛍光灯の中に消えいりそうに…。ダメだあ…。限界。

ゆつくりと両脚を降ろすと、俺の股間から唇をテカらせて顔を上げた水月に外人ぼく人差し指を上向きに動かし、無言で…、Come up!…の指示を出す。これまでのセックスで、水月は

その指示の意味を熟知していた。それが純粹に……Come up
!……(こつちへ来い!)の意味ではなく、……Turn y
our ass to put fucking your we
t pussy on god damn my face in
69 style !……(69だ! おめえのケツ向けて、
ゲキ濡れ陰門を俺の顔に乗せる!)と意味する事を。薄ら気な笑み
を浮かべ、水月は躊躇いどころか、待つてましたと言わんばかりの
勢いで逆さになり、俺の顔を跨いで自らのパイパンと肛門を晒け出
した。69を女にやらせる時、いつも思う。もし俺が女であっても、
男の顔を跨いで陰門と肛門をドアップで曝すなんて死んでも出来
ねえ。実際、お産の時に分娩台に乗って赤の他人の前で脚開げられ
る、くそ根性持つてる女だから、こんな平気だよ、と成せる技か
……? 恥ずかしさを忘れるぐらい気分が高揚し、ただ貪欲に気持ち
よくなりたいだけなのか……? それとも、それほどその男を好きなの
か……? 69……。男なら誰でも、こんな常識外の下品極まりない
行為を平然と熟す女どもにそう疑問を抱く。ま、何れにしても、女
つて奴は大したもんだ。色々大変だね。女の子。つくづく……男で
よかった。

タケルの女として、タケルから何を要求されようとも、それら全
てに対して私は躊躇なんてしない。それら全てが私の……女としての
幸せだから。タケル……。いっぱい愛して……。私もいっぱい愛したい。

俺の鼻先に当たりそうになつてる肛門は襞の本数がカウント出来
るほど、鮮明にその形状を見せ付けている。蜜液が隅々まで浸りき
った、無毛なる大陰唇は厚みのあるぶるぶるの二枚肉を元氣いっぱ

いに露出。小陰唇はゼリー状化：いや、液化化されていると言っても過言じゃない。水月の息遣いに合わせて遠慮がちに、閉じて開いて…、と呼吸しているように見える壺口は乳褐色に濁らせた涎を垂らし、やや減り込んだ尿道の円らな姿は憤ましげに見えて可愛い。最後尾に存在するクリは蜜液の流れを受けながらも水月の興奮の証として気高く濡れ皮から立ち上がった。

水月の内股に両手を回し込んで尻を裂き、その恥部を視姦してやっていた僅かの間、待ちきれなかったのか、水月が先に俺のギンマラをくわえ込んだ。経験ある奴なら分かると思うけど、女の口にマラを包まれて舌を縦横無尽に動かされ、更には吸い込まれて手放しで上下される事がどれくらい気持ちいいか。その行為を69で展開されればどうなるか。全ての男は：そう、その快感に堪える為、目と鼻の先にある陰門に全ての欲望を狂い咲かすしかない。

行くぜ！ 気合いを入れ直した俺。強烈な勢いで水月のクリを吸い出した。くくくくくくうう…と、チンポに伝わる水月の呻き声。ほぼ真空状態になったクリに舌先を死ぬ気で絡み付けた。

「うはははうああんた…。あああうはああ…」

水月はギンマラを吐き出し、頭と喘ぎを上げて尻を奮わせる。そんなに感じやがって…。俺はクリにじゅぶつと音を立てて唇と舌を引き離した。

「水月…。凄く美味しいよ。素敵だよ。水月…可愛いよ」

たまに吐く甘い言葉も性的興奮を向上させると知っていたから。

「あんだああ…。嬉しい…。幸せだよ…。あんだ…。あうあう

ああははうああ…」

私のアソコに吹き込まれたタケルの温かい言葉が子宮に流入して興奮剤へと変わり、私はタケルの塊を再び吸い込み、より欲深い運動を繰り返した。この先っぽの滑らかな舌触り。この甘酸っぱい汁。この愛情の塊をもつと奥に収めたい。恋し過ぎて、愛し過ぎて。私、歯止めが効かない…。收拾がつかない…。もつともつと、恋しい愛しいあなたに尽くさせて…。もつともつと、こんな私をあなた色に染めて…。あなた…。口いっぱい頬張りながら、タケルの熱い息とぬる付いて回転する舌を感じながら、再び、揺るがない誓いを立てる私。

あなた

クリを親指で弄りちやくりながらピンク色の壺口から蜜液を直飲みしていた俺は鼻先を攪る湿った肛門も堪能したくなり、水月の尻を鷲掴んで、ぐいつと引き下げた。緊張を促したのか、きゅつと窄んだその小菊。結構、可愛い。十二分に唾液を染み込ませた舌を強く押し込むと、くうつ、とチンポを頬張りながら漏す水月。構わず、俺は舌を固くしたまま、ずるつと舐め上げた。

「うっうん…」

少し大きめに漏れた水月の呻き。クリを弄り回す親指を止めず、俺は水月の肛門の内皮を尖らせた舌先で掘り返すように味わい続けた。

「うっうん…。はんたあ…。うんうん…。はんたあ…。い、いぎそ…。はんたあ…。うんうん…」

くわえているタケルの塊で声が籠る。

このスタイルで初めて絶頂に達した日。我慢出来ず、タケルの塊から口を離してタケルの太股に縋り付いた。

「そんなに俺のチンポが嫌いか？」

「そ、そんな嫌いだなって！ 大好きに決まってるじゃん」

「ま、いいや」

苦い経験が私の脳裏に過る。あの日、気持ち良すぎて、思わず、口から出してしまった私。溜息をつけてベッドから身を起こしたタケルに猛省した。好きで好きで堪らないタケルのチンチン。もう絶対に離さない！ 遠ざかる意識の中、無我夢中で私はタケルの塊をくわえた。でも、タケルは…。

これでいかれちゃ、また顔中潮だらけになっちまうだろが。慌てて、俺は肛門から舌を、クリから指を離し、水月の尻を軽くペタペタと叩き「69解除」の合図を送った。

俺の顔面から降りて、振り返った水月は唇を濡らし、虚ろで哀しい目付き。上半身を起こした俺は水月を抱き寄せて唇を押し付けてやった。

ベッドから降りず、私に唇をくれるタケル。蠢くタケルの舌と一緒に、私は安堵を得た。愛してる…。あなた…。

「次…何が欲しいんだ？」

そんなの決まってる。欲しいものは一つ。私は目を開けた。

「チンチン…。あなたのチンチンが欲しい」

俺の首に腕を回し、瞳を潤ませて哀願する水月。その両肩を掴ん

だ俺は唇を着けたまま、静かに水月をベッドへ倒した。水月は俺から瞳を離そうとしない。赤らんだ頬と勃起した乳首を軽く指先で撫でてやった後、俺は水月の長い両脚を掴んで最大に広げ、女の神経が集中する壺へ痛いぐらい膨張したチンコを突き入れた。

「うあっ!!」

一気に子宮口にまで達する。ぬるぬるだあ…。チンコに絡む水月の粘膜。あたたかい…。チンコを包む水月の熱。気持ちいい…。膣内でチンコの動きが自然と速くなり、更に親指でクリを弾き上げてやる。

「あ、あんたっ！ あああっ、いいっく！ あんたあああ…」

そんなにいきてえんなら…。

「いいよ…。み、水月…。いっちまええええ…」

腰と指を休める事なく、再度、水月の尻の下にバスタオルを噛ませた。

私の恥ずかしい絶頂をタケルの綺麗な瞳が迎えられる。もう限界！

「あっ！ あんたあ！！ いっいぐっ！！ あんたああああああ
！！」

タケルへの愛情表現として、私は最大級の呻き声を上げた。タケルの瞳が私を覆う。

デ、デケエよ。声。マジ鼓膜つぶれちゃうよ。外で子供がすつ転ぶぞ。宥めるつもりで、俺は水月に唇を落とした。俺は…どうやっていこうか？ 取り敢えず、上半身を起こして水月の右足首を救い上げた俺はチンコが抜けない様、慎重に、水月の右脚を左側へ移動させた。チンコは絶対に抜かねえ。次に、水月の腰を掴み、持ち上げ、手前にぐい引きした。

「あつ！」

一発声を上げた水月が両腕をベッドに立てりゃ、バックスタイルの完成。

「撃つぞ！」

「来てっ！ あんた！」

その括れを掴んだまま、フルパワーとフルスピードで腰を振り乱してチンコを水月の蜜壺に狂い撃つ。

「み、水月いいいいああああ…」

二の腕に筋肉が浮き出し、こめかみの血管が切れそうになる。オーガズム直後の干上がった小休止から、水月は轟きを取り戻す。

「うっわわああうわわあああ！ うっあはわああ…」

「み、みみ水月！ す、凄いかっ！？ ききき、気持ちいいか！？

み、み水月いいい！」

「あんたっ！！ ききき気持ちいいい…。すすす凄いいいよっつい…。ああああんたあああ…」

水月とは反面、それでも満足でなかった俺は上半身を倒し、ベッドのヘッドボードを掴んだ。力の限り、目一杯、自分の体をヘッドボードに引き寄せ、何をどうしようともこれ以上進まないところまでチンコを水月の蜜壺へ押し込み、腰を振るわせた。

「あんたああっ！！ 愛してるっっ！！」

俺の勢いに圧されて、水月は腰をジワジワと沈ませる。

「ま、まだだっ！ み、水月！ まだっ、まだだあああ…」

ついに水月はうつ伏せに倒れ、「寝そべりバッグ」の体勢に。腕がちぎれそうになるぐらいヘッドボードを掴み、水月の尻の弾力に逆らいながら必死でその割れ目に腰をめり込ませる俺。

「あんたあああ…どうにでもおおお…どうにでもしてえええ…あんたあああ…」

湿気じみた空気。沸き上がる無色の蒸気。振動と心拍の間で視界が淀む意識。視界が紅蓮に染みて紺碧を帯び藍紫に変わる。

「み、水月…」

十分なカウパー液が水月の中で放出され、射精に対する耐久性は高められたが、握力と腕力が低下し、その体勢を維持させる事が困難になりつつあった。畜生！酸欠も心配。もうダメだ！俺は水月の蜜壺からぎとったチンコを抜き去った。

「ウツ！」

寝転がり、熱気が舞い立つ体を一旦冷やそうとしたが、俺の突進により覚醒した隣の女豹が、あんた！襲って来た。

怒涛の如く押し寄せた水月は乱れた髪を掻き上げて俺に跨がり、股間下の獲物を握り締め、もう好きにしるや、俺を怪しく見下ろすと、腰を沈める。

「あんた…」

今度は私がタケルを燃やしたい。私の常軌を打ち砕き、本能を呼び覚ましてくれたタケルを。

奥に突き当たるタケルの塊。私は子宮に下ろした全ての愛情を伝える為、淫らに見られてても仕方ないくらい下品に腰を振り乱す。

「あんたあ…。あんたあ…。あんたっ！」

当たる…当たる…。

揺れる…揺れる…。

堕ちる…堕ちる…。

歪められる部屋の天井。途切れそうになる呼吸。愛しくてどうしようもないタケルに視線を落とせば、タケルの澄み切った瞳が私

に新鮮な酸素と更なる欲望を与えてくれる。

止まらない…。止めたくない…。

取り付かれたように腰を前後に揺らす水月。その結合分からは粘液と粘液が絡む湿った音が漏れ、俺の陰毛には水月のパイパンから零れる乳褐色の本気汁が大量付着。この女！多少、体力が充電された俺は上半身を起こし、卑猥に波打つ水月の括れに両腕を回した。

「あなた…」

小さく鳴きながら俺の唇を奪いに来た水月。

「愛してる…。あなた」

「愛してるよ…。水月」

単純な言葉のご褒美くらいなら、いつでももくれてやれる。

愛してる、とタケルが初めて言うてくれた。

「あなた、愛してる！もっともっと、あなたに愛されるよじつに、もっともっと尽くすよ。あなた…」

タケルからの初めての嘔きが私の胸から至福を噴出させ、私は改めてタケルへの献身を誓い、そのあふれ返った思いは涙となり、タケルの背中に落ちる。

「あんだ！ あんだ！」

力いっぱい号泣をタケルにしがみ付かせた。

んな耳元でうるせえよ。水月を押し倒し、座位から正常位の体勢に戻る。そろそろ、いつてやるよ。ベッドに両手を着いた俺は、クチュクチュ、と漏れる音が掻き消されるくらい、おっぴろげられたツルマンヘチンコの動力を加速させた。

「うっはあああああっ！ うあんあんだああ…」

快感しながら涙を散らす水月の横顔。歯を食いしばりながら腰を振り続ける俺。もっと、強くだっ！ もっと速くだっ！ ついに、俺は体を倒して水月の頭を抱え込んだ。

「あんだ！ いいい、まああ、またいいいきそっ！ あんだっ！」

ああ、好きなだけいつちまえっ！ 俺の耳元で騒ぎ立てる水月をシカトし、呼吸も出来ないくらいの連打連打。水月と一緒にいつてやる！ さあ、どこで出す？ 水月の生理は2日前に終わってる。なら、初中出し。いいだろ。今後、また水月が中出しを迫ったら避妊錠剤でも使つてやる。ヨッシャ！ 気合いが入り、俺は両腕を立てて上半身を浮かせた。

「くわわわ…あんだああくうういっぐー！」

「俺もっ！　いくぞーっ！」

最後の力を振り絞り、蜜壺深く、うっ！　とチンコを突き上げると、ぶちっとなで何かが切れる感覚が起こった。

「あっ！」

予告なし、突発的な中出しに、涙目を見開く水月。

初めて、タケルが精子を私の中にくれた。私の中で、ドクドクドクと波打ち、小さな生命を放ち続けてくれるタケルの塊に私の絶頂感は温かく包まれる。だまだ不器用で足手まといになってるこんな女を、その放出の母体を選んでくれた優しいタケル。幸せ過ぎる涙に噎せて、息も視界も覚束ない。私の上に堕ちてくる、自分自身の命なんかより大切なタケルをただただ抱き締める事しか出来ない。ごめんね。あんだ。大切な命の素をあんだから貰ってるのに、私はあんだに何も返せない。これからまた、あんだに相應しい女になれるように命懸けで努力するから、今だけは幸せに泣かせて。あんだ…。

水月にしがみ付かれ、体を起こそうにも起こせない俺。仕方なく、頭だけを無理矢理動かし、水月に唇を着けて口内を舌で潤してやる。徐々に水月の腕の力が解かれ、やっと体を浮かせられた。こめかみに涙目からこぼれた雫の跡を滲ませながら俺を眺める水月。可愛げ

あるじゃねえか。もう一度、唇を落としてやった。体を垂直に起こした俺は全て放出しきったチンコを水月から抜こうとしたが、水月の涙目にまた引き戻された。普段の俺なら、そんな水月を気にせずにさっさと次に神経を移動させる。少しだけ、水月に心を許したのか？ 何故、今日は中出し？ エッチしながらも最後までだけは冷静さを失わずに対象していたのに…。義理を見せて快感を得るくらいなら、いつも通りで良いはずなのに？

水月は、一瞬、俺を激情させた。水月を愛し始めたのか？ 分からない。ただ、最愛の人への罪悪感や距離感不思議となかった。

長い瞑想…いや、迷走のが終わり、チンコを水月から抜くと、う！ あ！ と二人同時に声を漏らした。水月の膣から肛門へ落ちる勾玉のような白液の固まりを、濃い…、俺はただ漠然と眺めていた。

タケルのおんな笑顔見たことなかった。

「タケルを…見てたんだ？」

夕日が反射される坂道。手を目の上に翳さないと校門が見えないくらい眩しい三崎校の通学路。下校するタケルを待ち伏せ…いや、勝手に学校まで来て、タケルが学校から帰る姿を見たかっただけ。

タケルが坂道から下りて来た…。全てを曝け出し合ったタケルの姿形なら百メートル…いや、目を閉じていても臭気と気配だけで分かる。少し目立つ街路樹。その陰から慌てて坂道を駆け下りて、

飛び込んだ丁字路角の公園。誰か、女の子と一緒に？ 通り過ぎる笑顔のタケルとその娘を公園のコンクリート管の後に身を潜めて眺めていた。タケル…。静かにコンクリート管から身を起こした私は楽しそうにじゃれ合う二人の背中を目で追う。私がタケルの彼女なのに…。何で？ 髪を撫でる風が弱気な私をせせら笑う。背中からの声に気付いて振り返ると、三崎高の制服を着た娘が微かに揺れるブランコに腰掛けていた。

「タケルを見てたんでしょ？」

ブランコを降りた彼女。私に歩み寄る。

「……」

顎を引き、鞆の肩紐を握り締めて、私は彼女を見詰めるだけ。

「答えなくても分かるよ。ずっと後で見てたから」

公園に駆け込んだ時は焦りから全く彼女に気が付かなかった。

「それ、行澤女子の制服だよね？」

「そう…だけど…」

何故か怯えて細かく後退り。

「私はタケルと同じ三崎高で、名前は…」

シャギー掛かったセミロングの髪。可愛い彼女。

「美紀」

初めて会った私に、何の躊躇いも屈託もない笑顔を向けてくれた。

「私は…水月」

何の意味もない私の怯えを、美紀の笑顔が徐々に和ませた。

俺の提言で、剃毛後も水月自身によって綺麗にお手入れされ、つるつるに照かる陰門からはちよっぴりピンクの小陰唇がはみ出る。

「こんなにされてまで何で俺について来るんだ？」

正也についての執拗な追及が終わり、長いキスの中で、俺から口移しで命ぜられたオナニーを曝す水月。ベッドの傍に座り込んで、ただ漠然と水月のその行為を、いや、好意で呼んだほうがいいかも取り敢えず、見学する俺。ベッドの上で背中を壁に着けて、制服のプリーツスカートから生脚をM字に開け、曝け出されたパイパンを指で弄り回す水月は泣くどころか、口と瞳を半開きにした、例の厭らしい表情を浮かばせ、おまけに妖しくなまめかしい吐息まで漏らす始末。エロいどころの話じゃない。当然、手持ちふぎたの水月の左手は制服のブラウスをたくし上げ、緩んだブラに手を突っ込んでオッパイを揉み上げている。

「あなた…」

俺の問い掛けに指を止めかけた水月。俺が体をのめり込ませ、ベッドに両肘を着いて、そのM字の真ん中に顔を寄せると、クチュクチュとした音を奏で直す。主に働く指は人差し指、中指、薬指の三本。人差し指と中指の間に右ビラ、中指と薬指の間に左ビラがにゆるついて挟み込まれ、中指だけを、うっふああ…、と蜜壺に深く挿入し、くっ、ううあああ…、暫く壺内で動めかし、うっあうう…、ぬめり上げて、あ、ううあ、うううあああうあああ…、クリを掻き鳴らす。限度等は存在しない水月の自己陶醉にベッドだけではなく部屋全体が生々しく揺れている。眺めている内に、またギラつく中指は陰門を下り、埋もれ、見えなくなる。見上げた水月は妖気漂う瞳と吐息を俺に向けていた。

「恥ずかしいか？」

「うっ、ううん。あんたああ…」

嘘の答えを強調するかのように、水月は蜜壺からクチュツと音を漏らせて、また中指をクリまで泳がせた。恥ずかしい女が会陰、肛門までも蜜壺で湿らせ、呼吸にシンク口させて肛門を開閉させるはずはない。要するに俺は水月の上の口より下の口を信じた。

「な、訳ねえだろ。こんな濡らしやがって」

「は、あ、あんたああ…うわうう…」

水月の没頭は続いたけど、あからさまなものも、時間が経ち、新鮮さがなくなれば退屈と白けを誘う。所謂、陳腐化。いい勉強させられた。俺は溜息で反動を付けて立ち上がった。

「いいよもっ」

少々、顔面に熱さを感じていた俺は斜め後ろ、机の傍に置かれた空気清浄器に歩み寄り、吹き出す清風に顔を当てて涼んだ。水月は俺の指示に従わず…と言うか、その行為にはまり込んで、何も耳に入っていない。その場から距離をとっても、水月の喘ぎと湿った音は止まなかった。しょうがねえ女だ。呆れ笑いを吹かした俺はベッド傍まで戻り、目を閉じたままその行為を続ける水月を見下ろした。不思議な女だ。

次は苦笑いが吹き出された。俺の気配にも水月は気付かない。俺はベッド下からティッシュボックスを拾い上げた。

「もういいって！」

やや大きめの声と同時にそのティッシュボックスを開かれた水月の両脚の間にポンと投げ置くと、漸く、水月はハッと目を開き、濡れ指を止めた。水月は我を取り戻し、困った上目遣いで俺を見詰めて、捲れ上がったブラとブラウスを下げた。

「あんだ…」

シユシユシユ…。ティッシュを抜いた水月は、はにかんでそのティッシュを股間に当てる。

何故か、その水月の表情と仕様に愛嬌を感じ…。俺は軽く微笑んで俯き、水月に背を向けてベッドに腰を下ろした。パイパンは拭き易いらしい。俺の背後で、体を起こした水月はベッドを降りて、ミニテーブル横のゴミ箱に丸めた使用済みティッシュを捨てに行った。

「没頭してたじゃねえか？」

水月は口を強く結んで俺を見詰めたまま頷き、ベッド腰を下ろして、俺の肩に縋る。

「うん…。頑張った」

顔を近付けた水月に唇をやる。舌と舌が絡むに連れて両手が俺の肩を覆い、俺は水月の腰に片手を回し、その落ち着かない絡みを緩めた。

「初めてのオナニーじゃないな？」

俺の質問に大きく瞳を開けた水月。凶星のようだ。

「見りゃ分かるよ。慣れ過ぎてる」

気が付くと、水月の右手が俺の股間に触れている。

「あんと付き合い始めて…。あんたを思うだけで…。そんな気分になるから」

なかなか、可愛いところある。ズボンの上から、水月のはチンコをまさぐり始めた。これも女ならではの恥ずかしさの表現か？

「そんな気分の時は、一人でやるんだな？」

瞳を閉じた水月は左手で俺の頭を抱く。

「うん…」

そんなやりてえんなら仕方ない。腹も減るはず。もう6時を回っ

てる。これから、一発やり終わったら、いい時間になる。バイト料入ったし、水月をファミレス連れてってやる。

空気清浄器の音だけが響く部屋。制服のまま、水月をベッドに押し倒した。

「家どこ？」

「図書館の近く」

「じゃ、駅前まで一緒に帰ろっか？」

「う、うん……」

学校と駅に挟まれた丘。庭付きの鉄筋住宅が立ち並んでる。この家も芝生の手入れが行き届いていて、緑が夕日を浴びてキラキラと輝いていた。Ｔシャツと短パン姿でジョギングする外国人。庭で三輪車に乗る男の子とその子をしゃがんで見詰める若いお母さん。そんな平和な情景とは正反対の空気が水月から漂ってた。

一緒に帰る事にしたけど、哀しい目を濡れた道に落とす水月は一方向的に話す私に、時々、愛想笑いを見せるだけ。彼氏が他の女と楽しそうに歩いているのを目の当たりにしたら、どんなタフな娘でも雰囲気暗くなる。でも、反って、一緒に哀れむ方が益々と水月の雰囲気悪くすると私は思った。

「水月！ 赤だよ！」

横断歩道で、水月の鞆を引っ張った私は、既に水月の事を呼び捨てに切り替えてた。

「あ！ ゴメン。美紀ちゃん」

水月は、まだちゃん付けのまま。

「水月…。私も…経験者だからさ」

「えっ？」

行き交う車の音に掻き消されそうな水月の声。

「ああ、やって…。彼氏が他の女と楽しそうに歩いているの何度も何度も見た。昨日も…見ちゃった。止せばいいのに付けてやったら、二人共、ホテルに消えてった」

「美紀ちゃん…」

「あの公園で泣いてたら、水月が飛び込んで来て…」

信号が青に変わったけど、二人とも歩き出そうとしなかった。

「まるで、自分自身を見てるようだったから…。だから、水月に声掛けたの」

「……」

言葉が出そうでも、出ない。口を結んで道路にチラチラと視線を動

かす水月が痛いけに見えた。

「私…。タケルとは全く関係ない娘だから安心して。ただ、学校が一緒なだけだし。タケルとは口聞いた事ないから」

水月を安心させるつもりで言ったけど…。

「じゃあ、何でタケルの事を？」

水月にそう返されると、答えに困った。

「タケル…。め、目立つ奴だからさ。結構、学校でも有名人で…。それで…名前と顔だけ知ってる」

妹なんて言ったら、水月は引くに決まってる。

「そうなんだ…」

「水月、メル友なんない？」

信号がまた赤に変わった。そのタイミングで鞆から携帯を取り出した。

「うん！ 美紀」

水月も鞆から携帯を出す。もう後一つ交差点を越えれば、駅に着く。駅前の通りが水月との別れ道。漸く、水月は明るい笑顔をくれた。

ピンクの部屋

窓越しに車のライトが一本…二本…三本目と四本目は、ほぼ同時に尾を引いた。窓に映る、俺を見詰めたままの水月の横顔に気付き、視線だけを戻すつもりが、溜め息もついでに…。何語か分からない静かな曲が流れるファミレス。閑散とした中、まだまだ頼りない二人の会話。

「食ったか？」

「お腹一杯」

たらこスパゲッティとサラダのセット。相変わらず粗食な水月。てか、女って、こんなもんか？

「遠慮すんじゃないぞ。バイト料入ったからさ」

ハンバーグとエビフライのコンビセットに大盛りライスとサラダ。俺はこんなもんだ。

「これ以上、食べたらんないよ」

水月はオレンジジュースと氷が入ったグラスをストローでカラカラと混ぜ、いつもの上目遣い。

「幸せか？」

何気に聞く俺。グラスに視線を落とす水月。浮かんだ水月の笑顔に、俺は覚束ない微笑みを合わせた。

「うん。幸せだよ。あんたと一緒なら…いつだって幸せだよ」

可愛く、健気な水月。どうしようもなく、流される俺。

「今週末…空けとけよ。お袋、友達と温泉行くみたいで。家誰もいないから泊まりに来い」

泊まりはいつもあのラブホテルだったのに、次はタケルの家に、二人きり…。ファミレスを出る直前。テーブル越しに、私は目を輝かせてタケルへ顔を近付けた。

「うん！ じゃ、私がごはん作るよ。あんた、何が好き？」

「おまえが作るもんなら何でもいいよ。早く出よ。どっかで…キスしたい。ここじゃ無理だろ」

立ち上がり、テーブルを離れるタケルの笑顔を必死で追い掛け、腕に絡み着いた。

「あんた…」

ファミレスを出た途端、オレンジの外灯に照らされたガレージで私達は狂おしく唇を求め合った。タケルの固い塊を感じ、息継ぎもままならない。あんた…死んでもいいよ。あんた…。しつとりと濡れてきた。

帰り際、隣の教室からタケルとちっちゃくて可愛い娘が至って重苦しい空気を漂わせ、階段に消えて行った。私のクラスでも、タケルの女子人気は高い。だから、あの娘ともう一人の娘にクラスの女子達は羨ましがってる。私？ タケルは身内だからね。それに、この前、メル友になった娘の彼氏。異性として特別な感情なんてある訳ない。水月には、メル友になった事をタケルに内緒にしといて、って約束した。水月も、そっちの方が良かったみたい。あれから、お互いの彼氏の話はしない。私が敢えてタケルの事聞かないから。私が昭の事話すと滅入るから。そんな事考えながら、私は、フラフラとタケルとその娘を尾行。厭らしい行動とは分かってたけど、足と気分が勝手にタケルの後に続いた。上靴だから、足音は消し易い。まだ少し生徒が残る3階から静かな屋上を通じる階段は内緒話には打ってつけの場所。目の前の踊り場を曲がれば二人がいる。乾いた空気の中、二人の会話が漏れる。踊り場の手前で足を止めた。二人からは私は見えない。息を吸い込み、コンクリートの手摺りにそっと背中を着けた。

下校前、由美に呼び止められた。彩は委員会。雄二はバイト。大体、話の察しはついてた。由美と俺は3階と屋上を繋ぐ階段へ。ひんやりと冷たい空気が漂い、人気がまるでない階段。珍しく吹奏楽部の演奏は響いてない。その代わり、グラウンドから野球部のだるつか、サッカー部のだるつか、掛け声がコンクリートで囲まれた空間に響いてる。あとは、屋上のドア窓から微かに光が落ちているだけ。

「こんな所でおまえに告られるとは思わなかったよ」

面白くない冗談と最近使い過ぎて腰を階段に下ろす。

「期待させたんならゴメンね。生憎、いちいち告らなくても男には不自由しないタイプだから」

由美は苦笑いを誘う返し文句と小生意気な腕組みを階段の手摺りに倒した。

「で…話って？」

髪を掻き上げる俺。由美は溜息をコンクリートに染み入らせる。

「タケル…。最近、調子悪いみたいだね」

元気に振る舞ってるつもりだけど…。彩には通じて、流石、男を良く知る由美に空元気は通じねえ。

「最近、生理が止まなくなってるな」

苦し紛れの冗談を俯かせても、由美の苦笑いは聞こえて来ない。

由実が俺の隣に座り、俺を覗き込んだ。

「男が授業中、窓の外眺めながら溜息なんて気持ち悪い事する？マジで、あんた、生理じゃないの？」

由美の観察力は俺以上だ。参ったよ。女の事を、女に見透かされる。人が良い奴なら、実はよう…って話すだろうけど、そんな性格

でも気分でもない。

「彼女と…どうなのよ？」

ほら来た。俺はって腰を上げた。

「タケル…」

「あれから…幸せにやってるよ。俺らラブラブだ。悪いな。心配掛けて」

鞆を肩に担ぎ、階段を降りようとする俺。これも空元気？ そうだな。幸せならもっと明るく言える。

「元気に見えねえ時だって…またにはあるよ。言ってくれて、ありがとう。明日から、もうちょっと元気に見られるように頑張るよ」

そんな逃げ口上を由美姉さんが黙って見過ごしてくれるはずがない。

「タケル！」

由実が叫ぶ。取り敢えず、足を止めてみた。

「あれ嘘かよ！？ 何でも話すって約束したでしょ？ 私達、似た者同士じゃなかったの？ タケル！ 私を一人ぼっちにしないでよ！」

背中から由美の噺り泣きが聞こえる。堪んねえなあ。溜息を振り返らせた。階段を登り直し、両手で顔を覆う由美の隣に腰を下ろし、

ポケットからハンカチを出した。

「匂い… ついてるかもしんねえけど…」

俺のハンカチを引つたくる由美。

「バカ！ そう言う中途半端な優しさが女をダメにすんだよ！ 男なら泣いてる女なんて振り切れ！」

格好いい事言うねえ。おまえ。

単純に負けた。実は誰かに… 聞いて欲しかった。そんな正直な気持ちを親友に見せれない俺は病んでる。そう自覚すれば、鞆と一緒に肩の荷が下りて気分が晴れた。ちょっと照れ笑いして、泣いてる由美を眺めてた。

話そう。出来る限り…。

由美が泣いていたから、話しやすかったかも。水月の献身に甘え過ぎている事。どうしても、水月に辛く当たってしまう事。少し反省して少しでも優しくしてしまう事。そして、水月を愛する事が怖くなってる自分の事。唯一、話せなかったのは、俺の気持ちは彩にあり、彩がいるから水月を完全に愛したくない、水月が単なる彩の代わり。女にとっては最低の酷聞。何でも話すって約束を破った事になる。ごめんな。由美。これが俺の背いっばいなんだ。

「女も男も相手によって人格を変えられる。タケル…。あんだ、男だからあんまり鏡見ないだろうけど… 最近、怖いよ。顔」

泣き止んで、私はハンカチを返そうとしたけど、首と手を振り、タケルは私にハンカチをそのまま持ち続ける事を勧めた。

「エッチも…やってる時は気持ちいいんだけどさ。やり終わったら虚しさだけしか残らねえ。その後は…罪悪感に襲われる。水月は、そんな俺の感情に気付いちやないけど…。完璧に悪魔だよ。俺。モヤモヤを振り払おうとして…」

私は階段に後ろ手を着いた。勿論、溜息も。

「で、またエッチするんでしょ？ あんた、それ、最悪のパターンじゃん」

そう、最悪。もし、相談相手が彩だったら…間違いなく張り倒され、一生絶交されていただろう。ま、ちゃんと相談相手くらい分別するけど。

「ごめんな…。女のおまえに…全ての女を敵に回すような相談してよ」

「何でも相談し合っつて約束したからさ。こつ言つ時は、私が女なんて思わないですよ。て言うかあ…女の私だから女の気持ち分かる。何でも聞いてよ…」

階段から起き上がりざまに、由美は俺の背中に気合いを入れてくれた。

「タケル…。あなた、無理して彼女からフラれようとしてない？」

苦笑いで俯き、鼻を擦る。男のわっかかり易い凶星隠し。

「あんたがフってあげな。タケル」

そんな悲しい瞳しないで。タケル…。

「それが…あなたの責任だよ。酷い男になる事を怖れちゃだめだよ。中途半端に終わらせちゃダメだよ。そう言う娘は中途半端にされちゃうと…まだ脈があるって、まだまだ私は愛されてるんだって逆に勘違いしちゃうからね。あなた、自分の事を悪魔って思ってるかもしれないけど…そう言う悪魔の顔から、時々、覗かせる優しい微笑みに女って弱いんだよ。悪魔になるんなら…とことん悪魔になんだよ。それが、彼女の為でもあるんだよ」

もう十分。相当、重傷みたいだね。タケル…。私にとって、あなたは唯一の希望。何でか分からないけど、大声上げて泣きそうだった。足音を消すのに苦労したけど、私は階段を降りた。どうやら、タケルは私が思っている以上に優しい奴。私に出来る事？ 何かあるはず。タケルの優しさが麻痺する前に、タケルが昭みたいな完全な悪魔に変わるまでに何とかしなきゃ。

まるで、由美は水月に会った事があるようだった。きっと、色んな女、色んな男を見て来たんだろう。俺は感心を交えた苦笑いを階

段にもたれさせた。

彩の委員会がもう直ぐ終わる時間。学校を出た俺達は、由美の提案で、由美の家に行く事に……。帰り道は、気分転換もあって自然に重い話はしなかった。それと、他の生徒も回りにいたから、変に人目を気にしたのも事実。直ぐ前に歩いてる女は隣のクラスの女で、噂話好きで有名なブスだ。格好つけたって仕方ないけど、由美は察してくれた。でも、お互い無言……。ても変だし。

「由美……。おまえ、シャンプー変えた？」

不自然に、通り過ぎる車へ視線移動。

「うっん、変えてないけど……。匂い違う？」

由美は長い髪を摘まんて鼻に着けた。いいねえ！　そう言う女の子ばい仕種。

「うわ！　見て見て！　激カワじゃん！」

散歩させられてるチワワを指差す俺は、普段、全く仔犬なんて興味を示さない。

「あー！　マジ可愛い」

そう言う由美もかなり可愛い。

他愛もない会話の繰り返し。正直、そりゃ緊張もあった。女の家にお邪魔するのは初めてじゃなかったけど、「今日、うち、パパも

ママも夜勤で、誰もいないからさ」由美の一言が、何か妙な緊張感を俺に浴びせた。由美は親友。当然、下心なんてない。けど…俺は水月の話を忘れるくらい期待…いやいや、緊張してた。

車が行き交う賑やかな通りから静かな街路に入り、暫く歩くと由美の家に着いた。ん？ この通り真つ直ぐ行けば…あそこに出るんじゃないかあ？

「あれ？ 由美の家って彩の家と近くない？」

「うん。近いよ。ここから歩いて彩の家まで5分くらいじゃないかな」

彩と由美は同じ中学。不思議じゃねえよな。でも、それがまた緊張させるよね。由美の家は、玄関のドアが大きく、水色の壁が艶やかな輸入住宅ぽい造り。由美は鞆の中からカエルのキーホルダーが付いた鍵を取り出し、玄関の白いドアを開けた。

「入って入って」

「お邪魔しまーす」

誰もいないって本当だったんだ。時計の音だけが、静かな家中に響く。

「ちょっとここで待っててね」

玄関を上がった俺は由美に止められた。

「部屋上がって、ダッシュで着替えてくるから」

「お、おう」

由美は、玄関直ぐ傍の階段を掛け昇る。うお！家の壁と同じ水色のパンツ！覗いた訳がじゃない。見上げたら見えただけ。口説いようだけど、俺は間違いなく緊張してた。何の期待も無しに。

慌ただしくベビーカーを押す若いお母さん、走り回る子供達、ベシで寛ぐお年寄りの方々。駅から歩いて10分と掛からない、住宅地の真ん中にあるショッピングセンターは夕飯前のピークを迎えていた。高校生の私達も寄り道デートや友達同士との暇潰しに使い、ゲーセンや雑貨屋には制服姿が目立つ。皆、何でこんなに幸せそうなんだろう？同じ高校生でも私は随分と歳こいてるみたい。アイスクリームショップで仲良く手を繋ぐカップルを見ながら、ふとそう思う。

タケルとあの娘の話盗み聞きした後、少しだけ涙を拭いて、教室に戻った。何が出来るか分からない。でも、とにかく、水月と話さない…。直ぐに、私は鞆から携帯を…。え？着信が？水月からだ。思った矢先ってのはこの事。

フードコートは、さながら学校の食堂。水月は私を見つけると手を振った。私も手を振り、メロンソーダだけ買って、水月が待つテーブルへ向かった。

「ごめん、待った？」

「ううん、さっき来たばかりだから」

私と目を合わさず、ストローを弄りる水月。

「あれから…どう？」

水月は顔を上げた。水月は私の質問の意味が分かった様子で、口元をキュツと結び、ストローを弄る指を止めた。

「うん…まあ…」

メールじゃ語れない。水月に会わなきゃ。

…会いたいんだけど…

思った矢先の水月からメール。きつと、タケルと何かあったんだ。水月は、また指を動かし始める。

「どうしたの？ 入んなよ？」

テーブルとその上に置かれてる鏡のフレーム、机の上のペン立て、ドライヤー、タンス、ベッドのシーツ、枕カバーにティディベア、まあ綺麗にピンクピンクピンク…。こうピンクで装飾すりゃあ、木目調の壁、黒のミニカーペットと白い机が逆に目立つ。グレーのチュ

ニックとデニムのミニに着替え、2階から降りてきた由美。また、「ちよつと待ってて」と、グレイプソーダとグラスを乗せたトレイを運んで来た。「あ、俺、持つよ」。「いいよいいよ、上がって上がって」。そして、上がった先。薄暗い階段から息なり眩しくなる。ピンクに染まる由美の部屋。一歩間違えりゃラブホの部屋じゃねえか？ ドアの前で唾然を食らった。

「もう！ 入いんなって」

由美は照れ笑いだろうか？ ミニテーブルにペットボトルとグラスを並べた。

「あ、ああ…」

俺も照れ臭くなった。カーペットの上に鞆を下ろし、テーブルの傍に腰を下ろした。

「男…」

「え？」と、見上げた俺に、由美はグラスにソーダを注ぐ手と言葉を止め、クスツと微笑んだ。

「男…部屋に入れるの初めてなんだ。だから、緊張しちゃっよ」

「うっそー！ 今まで…彼氏とかは？」

「入れない入れない」

それぞれのグラスにソーダを注ぎ終わった由美は一息ついて、テーブルの上に両肘を着き、頬を両手で覆う。由美のチュニツクの袖

がやや長く、手に掛かっているのが子供ぽくて可愛い。俺はグラスに手を伸ばした。

「いったただきまーす。マジで、俺が初めて？」

「うん。何かあ、好きな男には部屋見せたくなくってさ。ま、タケルにならないかって…」

確かに、男がこのピンクだらけのド派手な部屋見たら引くよな。ただ、意外な一面見られたって喜ぶ男もいるかも。もう一度、由美の部屋を見回す。俺は口に含んだソーダをグイッと飲み込んだ。

「そりゃ…どうも。由美…。ピンク好きだったんだ？ 前にピンク似合わないって言ってなかったっけ？」

由美が一拍して笑い出す。

「ハッハハハ！ 確かに、この部屋見たら、ピンク狂いだと思うよね。私さあ、ピンクを身に付けるのは嫌いなんだけど、ピンクを眺めるのは好きなんだよねえ」

また口に含んだソーダを飲む。益々、女つてのが分からん。

「で、タケル…。さっきの話の続き…」

別に忘れてた訳じゃなかったけど、本題を突かれた俺は後ろ手を着いて溜息を上げた。つい最近の事も話してみるか…。

「実は…火曜にちよっと水月ともめてさ。ま、もめたって言っても俺が一方的に言い掛かりを吹っ掛けて…。あわよくば別れ話に持つ

てこつとしたんだけど…。ボロボロに泣き喚かれてさ…」

「で、またエッチしたんだ？」

後ろ手を外し、頭を撫でるタケル。黙っていても、その答えを言ってるようなもの。

「男って、どうしてこつも女の涙に弱いんだろねえ。だから、女に舐められんのよ。涙を女の最強の武器にさせてんのは男だよ。で、ボロボロの女相手にはっげしいエッチしたんでしょ？」

やっぱり、由美には敵わねえな。尤もな事言う男前過ぎる娘。でも、あの時に限ってじゃねえけど、あんな制服着せたまんまの激しいエッチの内容まで言ったら、エッチの前にオナニーまでさせちまたって言ったら、流石の由美もドン引きする。視線をピンクだらけの落ち着かない部屋に游がせ、ソーダを啜り、口の乾きを潤す俺。

「それでもねえよ。優しいエッチしましたよ」

嘘付くしかしようがねえ。

自棄に丁寧に言うところと女の私から見ても羨ましいくらい綺麗な瞳が定まってるのが嘘丸出しじゃん。あ、ああ…で、こいつまた鼻擦ってるよ。どうして、男って嘘下手なんだろうねえ？ 絶

対、こいつは、とんでもない過激なエッチしてるよ。ま、どうでもいい話だけどね。含み笑いで、私はグラスを取った。

え？ でも、待ってよ…。

タケルの親友やってる私がタケルの本音に気付くくらいなんだ。で、事は…タケルの彼女やってる水月もタケルの本音に気付いてるかもね？ いや、こんな単純な男は気付かれて当然。なら、この話は…。

「タケル…。あんたが思うほど、複雑な話じゃないかもねえ」

グラスに口を着ける私。キョトンとした顔のタケルは体を起こし、テーブルに肘を付いた。マジ、単純で可愛い男だよ。女舐めてる。

女は分かる

…お袋、8時には家いないから、9時に来い。部屋で寝てるから勝手に上がって来ていいぞ…

いつものように、水月からのメールの返事は1分以内。こいつ、携帯抱いて生活してんじゃねえのか？

…わかった！ 楽しみにしてるね…

楽しみにかあ…。携帯を閉じ、部屋の天井を見上げる。ん？ 勃起に気付いた俺は溜息の代わりに苦笑い。どうなってんだ？ 俺の神経？ 頭の後ろを撫で、誰もいない部屋を見回した。別に、変じやねえか…？ 一応、水月と付き合ってる訳だし、彼女の水月に勃起するのは健全じゃん。なら堂々と、明日はこうしよう、ああしよう。水月のパイパンとスリムな白い裸体を想像しながら勃起して良いんじゃないのか？ 後ろ手を着き、また天井を仰いだ。いや待てよ。ここで、自問するって事態が、もう水月を彼女として見てないって事だ。そうだよ、セフレとしてしか見てないって事だよ。俺の事を真剣に考え、献身的に尽くす水月に対して、もはや性欲しかない俺。決して健全ではない、不純な勃起をかます俺。水月の誕生日っていつだ？ お父さんは何やってる人だ？ お母さんは専業主婦？ 兄弟は？ 好きな服や音楽は？ 得意な学課は？ クリスマスどうする？ 思えば、この3か月の間に俺の誕生日も過ぎた。「このお返しは高いからね」。まだ誕生日が来てない彩からはチエーン付きの財布。「これには匂い着けるじゃないよ」。由美から貰ったレノマのハンカチには俺が由美の誕生日にやったラブパスポートの香水がたっぷり振り掛けられていた。「ハッピーバースデー。もうそろそろ切れる頃だろ」。ニタニタ雄二は俺のポケットに避妊錠剤を

忍ばせやがった。彼女の水月からは…誕生日なんて話してねえから、当然、何も無い。彼氏として何にも聞けてねえ…。何にも話せてねえ…。会えばただエッチするだけ。ただ水月に甘えてるだけ。楽でしょうがない。やっぱり、由美が言うように形相が変わるくらい悪魔になったんだ。体中から二酸化炭素を撒き散らしても、その一部には酸素が充満し元気。明日は、またやりまくれる…。その元気な化身が、悪魔の化身が、俺を見上げて唸ってやがる。時計の音が微かに弾く妄想空間。

「行ってくるね！」

下からお袋の音がしたような…。ベッドの中で、爆睡から一瞬醒める。テーブルの上の時計をチラッと…まだ9時前。後、1時間もある。枕に顔を戻した。

ゴソゴソとした物音とジワジワ競り上がる重み。枕から顔を起こすと、生暖かい空気が俺に吹き込まれた。唇に纏わり付いた感触が消えると、涼しい酸素を得られた。視力は薄ら薄ら回復の兆し。温かい体と反比例された冷たい手が俺のトランクスの中をまさぐり、朝立を迎えていたペニスを握り締める。漸く、俺の視界は完全に開けた。

「おはよ…。あんだ」

水月は、もう全裸。気が早いねえ。

「おはよ」

目を擦り、水月の窪みに手を回す。相変わらず…良い体してやが

る。あ、いけねえ。今日と明日は優しくなるって、昨日、寝る前、自分に言い聞かせたんだ。水月に唇を重ね、たま飛び抜けそうだった邪心、邪念を静めた。シャンプーの香り…。きつと、朝からシャワー浴びて気合い入れて来たんだろ。欲情？ そりゃ、男ならするだろ。寝惚けててもなあ。

「あんだ…。朝ごはん買って来たよ。あんたが好きなエビマヨおにぎりとコーラ」

「ありがとう」

何で、朝からコーラなんだよ？ 苦笑いついでに髪を掻き上げ、水月をゴロンと隣に寝かせて腕枕してやる。水月はまだペニスを離さない。マツパ…寒いだろ？ 仰向けに寝たままの状態で、俺はベツドの下からエアコンのリモコンを拾い上げる。室温…23度。マツパならこれくらい…。スイッチを入れた。

「あんだ…。ごはん食べる？」

そう言っても、親指で俺の尿道を騒ぐ水月。少し尖った唇。薄らぐ瞳。その格好、動作、表情が、「朝ごはんなんか食べないで！今すぐ…」と、暗唱している。いつものように意地悪して、「お預け」を食らわす事は出来た。毎朝起こる男の生理現象。情けなくも、そんな朝立ちを逸脱し、ただ単に興奮の象徴とされたペニス。その興奮の証拠を握られている俺は貪欲、飽食な全裸女に太刀打ちなど出来ない。

「んなの後だよ。舐めてくれ」

初めて、恥じる事なく、水月に素直になった。待ってましたの如

く頷いた水月は、布団まで捲り上げて俺の体の上をペニスに向かつて滑り落ちる。上半身だけ少し浮かせてTシャツを脱いだ。水月は俺の両脚からトランクスを引きく。部屋の中に循環され始めた温風が水月のうなじに漂う産毛を浚うと、俺のペニスはくわえられた。

「私…タケルの重荷になってる」

フードコートのだわめきを感じなくなった。顔を上げた水月とは逆に、私は俯いた。きつと、水月は、ズツと前からそれに気付いた。でも、タケルの事がどうしようもなく好きだから、ズツとズツと無理矢理、心の中でタケルに対する気持ち揺らぎないものにしてたんだ。男が口に出さなくても…女は分かる。男の気持ちなんて手に取るように分かる。私も彼氏の気持ちなんて嫌ほど分かる。いや！ 泣いちゃえ。私は水月に顔を上げた。

至って膨れつつらを上げた私。

「んな怒んなよ…」

ざわめくフードコートの中、タケルの呆れ顔が苛つく神経を逆撫でした。タケルが隣の智喜に顔を向け、助けを求め。

「ま、まあ…雄二も…」

女を宥めるのが下手な男二人。

「悪気がない方が悪いんだって！」

タケルと雄二は顔を見合せた。オレンジジュースを吸って余裕の表情を見せたけど、内心は雄二の事が気になってた。

タケルお奨めのイタリアンカフェ。二人でデート中、雄二の携帯にメール。別に、そのメールには興味なかったけど、携帯を開けた雄二のその焦った表情に興味した。女からだ。目玉を左右に奮わし、鼻の開けた間抜け顔。おまけに背筋までピンと伸ばして不自然な咳払い。動揺丸出しの雄二。「誰から?」。笑顔で聞いてやったのに…。女からなら女って言うて欲しかった。なら、私も、「雄二ってまだモテるんだ!?」って笑い話にしてやるつもりだった。「タケルからだよ。また智喜の店遊びに行こうぜって」。目が寄ってる。頼むからもつと嘘上手くなってよ。甘やかし過ぎた私も悪い。そろそろ嘘なしでいこうよ。テーブル越しに、私は雄二から携帯を引いた。あつ!」。声を上げる雄二。『由香里』雄二の携帯画面に残ってた名前。「嘘つきだいきらい!」。その携帯を雄二に投げつけた私は、「ちよ、ちよつと、美紀!」背中て叫ぶ雄二を置き去った。

今朝、取り敢えず、いつもの待ち合わせ場所。いつものバス停の前を通ると、「よっ!」。引き吊った笑顔のバカ雄二。無視してやっただけに決まってる。私も…可愛くなかったかも…。せめて、言い訳くらい聞いてやっても…。あ、いや、甘やかしは良くないね。

「そんなに怒ってんなら…仕方ねえな」

ボソツと言ったタケルに、私と智喜は顔を上げた。

「タケル…。仕方ねえって言うのもさあ…」

智喜は肩を萎め、コーラのカップに手を伸ばす。私を宥めようとへ面ってたタケルのニヤニヤは、口を結び、顎を引いた真剣な表情に変わってた。

「いや、どう考えても、今回の事は雄二が悪い。美紀の言う通り、ためえの彼女に嘘ついちゃいけねえよ。そりゃ、信頼損ねても仕方ねえよ」

そうあからさまに言われると…。口を尖らして、また俯く。

「智喜、もし…もし、姉貴に、そんなシチュエーションで嘘つかれてみる。おめえも美紀と同じ気持ちになんねえか？　もし、彩にそんな事された日にゃ、俺、大暴れして収集つかなくなるぜ。相手に対して真剣になれば真剣になるほど、正直になんきやいけねえんだよ。腹六部しか見せねえ事が本当の愛情なんてほざきやがる奴は、所詮、相手の事なんかより自分の事が可愛くてしようがねえ奴だ。んな奴が言う『愛してる』って言葉は…フツ！　笑わすよ。そんな『愛してる』は、可愛くてしようがねえ自分自身に言ってる言葉だ。本当に相手の事を愛してるんなら、自分なんかより相手を大事にするだろ？　嘘なんかで相手を蔑ろにして自分を守ってどうすんだよ？　美紀が怒って雄二と別れるんならしようがねえよ」

言い終わり、烏龍茶を吸い上げたタケルは、カップを勢いよくテーブルに戻した。いや、誰も別れるなんて…。でも、タケルの正論

に、私は何も言えなくなるほど納得し、癒された。肩の力が抜け、
膠着気味の顔に笑顔が戻った。私が先ず雄二に素直になる。正直に
なる。まだまだ、私も雄二に対してぶっちゃんけてないところがあった。
嘘なしに付き合うのは確かに難しいけど、嘘つきたくなったらタケ
ルの言葉を思いだそ。

「美紀…」

タケルは私の笑顔に気付いた様子で、タケルも笑顔を返してくれ
た。欲しい！ その瞳…。きっと、その吸い込まれそうになる瞳は
お母さん似なんだよね。うちのパパにはないもん。うちのパパにあ
つたらなあ…。私、貰えてたかも。

「お、おい、どうしたんだよ？」

「え！ いや、何にも」

一瞬止まった私の時間をタケルに感付かれ、タケルが言いたい事
を遮ってしまった。恥ずかしい！ クールダウン。ジュースを飲む。

「タケル…。今言った事、何かに書いてくれねえか？ ちょっと、
勉強したいんで」

タケルは呆れ顔を沈めてクスクス笑う。

「智喜…。お、おめえは大丈夫だ。姉貴が言ってたよ。私が智ちゃ
んに惚れたのは、智ちゃんがバリバリ素直で、嘘つかない、真っ直
ぐな男だからだって」

「そ、そんな事…い、言われちゃってた訳…」

智喜は両手を両膝に着き、ギョツと体を絞ってジワジワと強面な顔を赤らめた。かつわいい！ やっぱり、智喜って一番うぶじゃん！ 私とタケルは顔を見合せて笑った。

「美紀！ 幸せもんはほつとこうぜ！」

「ほんと！ 彼氏と喧嘩中の私にとっちゃ刺激がキツ過ぎるよ」

「お、おめえらそんな！ お、俺の話はまた後でいいよ」

私達三人の笑いが修まり、少し間が空いた。

「その女って… たぶん、雄二の… 昔のセフレかなんかだろうね」

そう言ってジューズを吸った。タケルがやや視線を上げ、智喜は視線を下げた。二人は知ってるはず。二人は雄二から相談受けてるはず。だから、私がここにいるんだから。二人の態度で、もうバレバレ。私の予測的中。雄二からは、まだ何も聞いてないけど… てか、もう何にも聞くつもりない。雄二の元カノの話は雄二からもう聴取済み。聞いたら、あいつ、割りとニコニコしながら話した。聞いてないのはセフレの事だけ。だから、雄二はあんなに焦ったんだ。でも、そんな彼氏の過去にキレた私は、まだまだ幼い。誰にだって過去はある。私にも… ある。窓に映る自分の顔に向けて自己反省… 雄二？ ショッピングセンターのガレージの中、彩と由美に連れられ、肩を落ししながら歩く雄二。

向かいのタケルが私の視線の先に気付き、窓越しに三人を見た。

「話… 終わったみてえだな」

立ち上がった智喜も窓の外を見た。

「来た来た。野郎の顔見てみるよ。お母さんに怒られた小学生みたいな顔してやがる」

智喜の指摘に、タケルと私が吹き出す。

「じゃ、雄二は…」

「そう、雄二は彩と由美が引き取った。で、俺と智喜が美紀を」

知らなかった。でも、嬉しい。雄二と話しても喧嘩になって終わり。一時、引き離して貰った方が良かった。私は二人に笑顔を向けた。

「俺と智喜は…あんまり役に立たなかったけどよ。ま、雄二のあの顔付きじゃあ…。相当、あの二人に説教がまされたみてえだな」

「あー、こええ！ あんな怖い姉さん二人に詰められちゃ…想像しただけで背筋凍るよ」

智喜がタケルの肩を叩き、椅子に座る。私は顎を上げ、上目遣いで二人を眺めた。

「もし…タケルと智喜が彼女という時に…昔のセフレからメールが来たらどうする？」

タケルと智喜が顔を見合わず。

「な、んな、俺はセフレなんて作った事ないもん。有りようがない」

タケルが鼻を擦る。

「お、俺も…こう見えても…女だっけには今も昔も、ま、真面目でさ」

智喜は顎を撫でた。因みに、雄二が嘘つく時は目が寄る。わっかり易いんだよ。何が嘘つくんだよ！分殺で嘘ついてるじゃん。タケル、あんた知らない事だけど、私は、あんたがセフレ扱いしてた娘とまだメル友なんだからね！二人に聞こえるように溜息つくと、また二人は可愛い顔を見合せた。ま、いいか、バレバレの男の嘘なんて嘘になってないんだから。正直な男ども。

「彩も…お姉ちゃんも…元カノの事、突っ込んだりしないんだ？」

二人が同時に上を向いた。男ってどうしてこんな同じ行動とるんだろ？

「そう言えば…ねえな。姉貴ある？」

「ないないない」

「元カノとか昔のセフレの話をもに聞けば聞くほど、『こいつ、俺の過去に嫉妬してんだ。可愛いところあるじゃん』って、男を思い上がらせるだけ」。そう言ってくれた由美は正しい。彩やお姉ちゃんみたいに、もう私は自分の男を思い上がらせない。

「お！来た来た」 タケルの声と視線に合わせて、フードコート
の入口に振り向いた。手を振る彩と由美に手を振り返す。二人の後
ろで雄二が肩をす簿め、また引き吊り笑い。バーカ！白々しく口

を尖らせてそっぽ向いてやった。

「じゃ、俺達はこの辺で。智喜、行くぞ」

「おう」

タケルと智喜が鞆を肩に掛け、カップをテーブルから取り上げて立ち上がった。

「ちよ、ちよつと、待ってよ！」

二人は背中を向けて手を振るだけ。あーあ、雄二と一緒に、またあのイタリアンカフェ行つてやり直そ。カプチーノ…飲み損ねたからね。

タケルの塊を深く飲み込んだ私。タケルの手招きのままに、お尻を向けてタケルの顔を跨ぐ。タケルが私の内股から両腕を回し、両手でお尻を被った。

「うっっ」

直ぐにタケルの熱い舌を感じた。私は口内圧力を強め、そのグラインドを続ける。欲しかった。本当に恋しかった。今日、爆発させる為に、昨晚はオナニーを控えた。だから、タケルの部屋に来て、まだベッドに寝てるタケルに見取れるがままに欲情。全裸になった。布団に潜り込んだ瞬間に感じた固い固いタケルの塊。我慢出来ず、

夢中で握り締めた。そんな下品な私を笑顔で許してくれた優しいタケル。あんた…愛してる。

うっ！ 感じる。タケルの暖かい息を、蠢く舌を。アソコに。タケルの濡れた舌が両方の大陰唇をスムーズに滑る。ツルツルのアソコ。最初、恥ずかしかつた。「可愛かったよ。水月のツルツルのアソコ」。剃られた日の帰り際に、タケルがくれた一言。今後ツルツルを通すと決め、以来、お風呂で、お手入れをする私。うっ！ 小陰唇がズズーツと音を上げ、タケルの唇に吸い込まれた。「色と大きさ。いい感じだよ」。ラブホテルで迎えた二度目の朝、乱れたベッドの上で、タケルから褒めて貰った二枚のビラ。いつも綺麗に保ちたいから、トイレの時には、いつもウェットティッシュを使う。

背中を撫でるエアコンの温風。心地良く私のフェラリズムを助長している。タケルの先から汁が…美味しい。もっと欲しくて舌先を尿道に擦り込ませる。

「うっう」

タケルの声が漏れたみたい。あんたの女だよ。あんたの自由にして！ あ、あんたああ…。タケルの裏筋に舌先を奮わせる私の気持ちに通じたのか、タケルは私のクリに舌を巻き付けてくれた。私も負けずにタケルの先に舌を巻き付ける。

「小さく固くなってる。可愛い突起だ」

今、タケルが私のクリを評価してくれた。私の細部まで褒めてくれるタケル。ああっ！ その刺激に溜まらず、私は口からタケルの塊を出した。

「あ、あんた…。あ、愛してる…あんた…」

クリへのクニユクニユが私のお尻を微妙に奮わせる。タケルのチンチンを扱きながら再び先を口に含む。それでも、その快感から逃れられない。チンチンから手を離れた私は両手をベッドに着き、吸引を強め、腕立て伏せするようにチュパチュパと頭を上下した。

ヤバい！ 朝、充滿されたものが全部出そうだ。

クリから舌を離す。まだまだ一回戦目だ。先は長い。そんな最初から飛ばさなくても。俺は舌を水月の肛門に滑り上げた。

刺激が落ち着いた。私は上下の運動を止め、またチンチンに手を添え、付け根に舌を着ける。タケルが私のお尻の穴を溶かし始めた。あんだ…。あつたかい…。タケルの玉を救い上げてキスする。玉を口に含んだ私は私の唾液とタケルの汁にまみれたチンチンの先を指で騒がせた。

もうダメだ！ 朝は女にかなわねえ。俺はペタペタと水月の尻を叩き、いつもの合図を出すと、水月は俺の顔から陰門と肛門を離脱させる。休ませる間も無く、水月は俺に競り上がって来た。物欲しそうな瞳と切ない吐息。俺を見詰めたまま水月はヘアゴムを抜き、長いブレイドの髪を解いた。いつもの願望を伝える水月の合図。何も言わなくても分かる。だから、俺も笑顔で答えた。俺に股がった水月。やや前屈みなり、左手をベッドに着けると、右手がギンマラを握る。

「うっっ」

水月の腰が沈んだ。

「美紀…。私、タケルを…」

ハンカチで涙を拭くと、水月もハンカチで目を押さえてた。そこまで、タケルを。

「マジで？」

「女は男の事を分かるからねえ。自分では気付いてないと思うけど… あんたは特に分かり易い。彼女でない私があんたの気持ちに気付いて、彼女の水月があんたの気持ちに気付かない訳ないって。タケルが思うほど複雑な話じゃない。要するに、あんたが何も言わなくても、あんたが別れたがってるって事は水月にバレてるよ」

由美はテーブルの上のグラスを両手で包んだ。

「気付かれてても…こいつは俺の責任だ。明日、明後日でケリ着けるよ」

グラスに口を着けると、由美はテーブルに身を乗り出す。

「ねえ、タケル…。水月に無茶させないでね。私も女だから、水月の気持ち分かる」

戻したグラスに、由美がグレープソーダを注ぐ。見回したピンクの部屋。もう、目が慣れてきた。眩しくない。

「由美…。おまえも無茶すんなよ」

由美の注ぐグレープソーダが止まった。

「う、うん。わ、私は…大丈夫。何かあったら…直ぐにタケルに相談するから」

古くさいか？ 俺は黙って小指を出す。テーブルの上で、由美が俺の小指をそっと取った。

タケルの上で、突き刺され揺れる私。愛情、欲情、非情…。タケルと別れるんなら、タケルを殺してやりたい…。髪を掻き上げ、タケルを見下ろす。

全裸の天使

確かに、水月は俺とタメ。しかし、今、俺の上で腰を振り乱し、自らの膣内でペニスに粘液を絡ませ女性性は、高校一年の幼稚さなど微塵も感じさせない妖気を舞い立たせてる。朝だと言うのに、湿った空気と鼻息混じりの鳴き声が漂う薄暗い一室。カーテンの隙間から朝日が伸び、水月の白い乳房の上に光のラインを作ってる。綺麗だ…。括れた腰がグルグルと旋回。不安定な上半身を支えるべく、俺は水月の乳房を下から鷲掴む。柔かい…。ブレイドの跡を残す長い髪をまた掻き上げた水月。

「あんだ…」

俺を見下ろす妖しい瞳。

「愛してる…」

乳房から括れに滑る俺の両手も、水月の妖舞を止められない。なら、もっと踊らせよう。右手の親指が水月のクリをつま弾く。

「愛してるよ…。水月」

「あ、あん、あんだあ…あああうああ愛してる…」

縮まる水月の肩。前後運動が加速。何とも比喩出来ない厭らしい粘着音に導かれ、チラツと見た結合部。溶けたマシユマロのような粘液が俺のペニスに絡み、水月の小陰唇が俺の陰毛に糸を引いていた。かなり興奮してる。そのパイパンに挟まれ、呑み込まれ、おもちゃにされて乱暴に揺すられるペニスが可哀想。負けてはいられない

い。水月を、俺の女を先にいかせよう。つま弾く指をより速く掻き鳴らす俺。「もう先がないのなら、より優しくしよ。悪魔の顔は奥に隠そう」。昨日、考え付いた今日と明後日のモットー。しかし、そんな義務感、ヤバいくらいに消え失せようとしていた。本当に、水月を…。親指がちぎれそう。腰が砕けそう。水月…。

「あ、愛してる！ み、水月いいいい…」

「あんだ…い、いくよ…。あんだあつ！ 愛してるっ！ あつ！
いついくっ！」

弓なりになった水月の体、突き出された乳房、後方に垂れ下がる長い髪。

「うっ…」

俺も限界だった。温かい水月の中に…。少し、早い放出だけど、元々、ギンギンに朝立かましてたチンポを襲われたんだから仕方ない。にしても、よく出る。ヤバいくらいドクドク出る。水月の中で…最高にいい。

「あんだ…」

乱れ散った水月の体が俺の上に墜ちる。バサツと顔を掛かった水月の髪を指で分けると、一雫、首筋に感じた。

「美紀…」

泣き出した美紀にハンカチを渡そう私はブレザーのポケットに手を入れた。

「大丈夫大丈夫」

私に手を降った美紀は自分のハンカチをポケットから出した。四つ織りのハンカチの縁を目に当てて涙を染み取る美紀。私が泣かしちゃった？ 申し訳なく肩を萎めると、美紀はハンカチを握り締め、ソーダを飲んだ。ストローから離れた美紀の唇が笑う。

「ごめんごめん」

何もなかったような美紀の笑顔。きつと、美紀は彼氏の事を思い浮かべたんだ。美紀もきつと悩んでるに違いない。そう理解した私は美紀に何も尋ねなかった。

タケルの本心を水月は見抜いてる。そんな水月に、「大丈夫だよ…」、何て 慰めは反って逆効果。悲しい眼差しを落とし、またストローに指を戻した水月。私もぶっちゃけで答えるしかない。

「水月…。水月がそう思うんなら…」

水月の指が止まり、視線が上がる。女の私もドキツとするような上目遣い。この目で見られたら…。この娘、モテるよ。で、かなり情熱的。なかなか相手を離さない目。私は何故か咳払いした。

「水月の取れる方法は二つに一つ」

「二つに一つ…」

視線は流れたけど、指はそのまま。水月の追い詰められた精神状態が分かる。

「水月…。水月がタケルの事を凄く愛してるの分かる。だから、タケルの事を知ろうとする。でも、知れば知るほど…。タケルの気持ち水月から離れていつてる事が分かるんだよね？」

私に戻った水月の瞳は潤みきり、水月はハンカチをポケットから出して目に当てた。水月の唇が強く結ばれる。目にハンカチを着けたまま水月が頷く。続け辛い。でも、続けなきゃ。水月とタケルを解放させる為に。

「いっぱいタケルを愛したい。尽くしたい。これからも…ズツとズツと…。でも、タケルは変わらない。分かるんだ。タケルは私の後ろに誰かを見てる。タケルに抱かれる度に分かる」

あの激しいセックス。その最中に見詰めるタケルの瞳はいつも悲しい。まるで、何かを、誰かを打ち消すような激しいセックス。タケルと一緒に帰ってたあの娘？ そうかもしれない…。なら、私は代わりでもいい。でも、タケルの気持ちは？ タケルが辛かったら…。私はタケルの重みになるだけ。ここ最近、まともに眠れてない。

ここで、水月から引いちゃダメ。まず、落ち着こう。ソーダのス

トローに口を着けた。隣のテーブルから中学生風の娘がチラチラ私達を見てる。賑やかなフードコートに涙は似合わないかもしれないけど。何よ？ ストローを噛んだまま睨んでやると、その娘は肩を竦めて視線を逸らす。かまっちゃらんない。ソーダを吸って水月を見詰めた。

「水月…」

長い睫毛を涙で湿らす水月が顔を上げる。テーブルの向こうに私がいるように思え、一瞬、声が詰まった。

「二つの内の一つは…このままの関係を維持させて、タケル方から去って行くの待つ」

水月は鼻水を啜り、ハンカチを鼻の下に当てた。

「もう一つは…」

ハンカチを離れた水月。覚悟を決めた様子。綺麗な顔を私に向けた。

「水月から…さよならする事だよ」

タケルを愛して止まない。水月にとって一番怖いのは、愛する人が憎しみの対象になる事。別れたくない余りに愛する人を傷付けてしまう事。「重荷になってる…」。その言葉の中に水月の複雑な感情が凝縮されている。タケルの事を憎みたくない水月が選ぶ方は…明白。愛したまんまで終んなよ。私みたいに憎しみに変わらせないで。また、涙が滲む。私はテーブルの向こうにいる私自身を見られなかった。

別れるなら、タケルを殺してやりたい。こんなに私を夢中にさせたタケルが憎い。ひた向きな愛情が、憎愛に変わろうとしている。ひた向きなまま、純粹にタケルを愛したまま終わろう。私は枕で涙を拭った。涙は終わり。勇気を出してタケルに顔を上げた。

タケルの瞳…。凄い綺麗。私のタケル。

「水月…。素敵だったよ。愛してる」

タケルは私の髪を耳に掛けてくれた。タケルの表情が優しい。また涙が出そうだったけど、下っ腹に力を入れた。タケルのチンチンがドクンと私の中で脈打ち、精液がまた出たみたい。お互い、顔を見合わせて小さく笑い、私はキスを落とした。さあ、言おう。ちゃんと、タケルの目を見て言わなきゃ。髪を掻き上げた。

「あんだ…。私と結婚して。私をタケルの奥さんにして」

お願い！ 「うん」って言って。

「いいよ。結婚しよ」

悲しくない、優しいタケルの瞳。私の頬を撫でるタケル。ここで終われたら、でも、終わらしちゃいけない。一瞬だけ、奥歯を噛んだ。

「今日、結婚して…明日、離婚して」

沈黙の中、僅かなエアコンの音。私はタケルの瞳をただ見詰める。ただ、静かにタケルの言葉を待った。エアコンの音だけじゃなかった。タケルの鼓動もすっかり聞こえていた。

お願い…。「うん」って言って。私のタケル…。

「うん、離婚しよ…」

タケルの瞳は優しいまま。優しい私のタケル…。もう、限界。私は、またタケルの首筋に堕ちた。

「あんた！　だ、だから…今日と明日、思いつ切り、愛し合お！　今日と明日…あんたの奥さんとして、最後に、いっぱいいっぱい尽くさせて…。あんたあつ！」

最後は声になってたかどうか…。でも、タケルは私の決断を強く抱き締めてくれた。

苛立ちを単に水月に八つ当たりしていただけ。水月をいたぶる事でストレス解消。でも、愛してた。複雑な男の事情をどう説明しよう？　とにかく、謝らないと…。

「水月…」

真っ赤に晴れた目。ピンクの鼻先。水月は俺の首筋から顔を上げた。直ぐには、話せない。水月の唇を引き寄せた。しよっぱい舌が和らぐと、漸く、話が出来そう。

「俺…おまえに謝らないない。おまえに辛く当たってばっかだっ

た」

水月が唇を上げる。まだ鼻が赤らんでいたけど、吹っ切れた笑顔。

「辛いなんて思ったことないよ。あんたには好きな人がいる。その娘と上手くいかないから、きつと、あんたは私に八つ当たりしてくれてるんだらなって…。私に当たり散らす事で、あんたが、その娘の事を忘れてくれるんなら…。当たられれば当たられるほど…。最後に、完全に、その娘の事を忘れてくれるって希望があったから、辛いなんて思わなかったよ」

俺の胸に顔を着ける水月。水月の髪：いい香り。由美の言った通りだ。惚れぬいた男の事は、男が沈黙を通して分る。女には嘘つけない。水月を抱く腕に力を入れて溜息を押し込んだ。

「俺は本物の悪魔になった。人格が失われた。でも…水月…。不思議だよ。そんな悪魔になっても、段々、おまえの事…」

「あんた」

俺の胸から顔を上げて、水月が俺の言葉を遮った。

「私みたいな馬鹿な女にとって一番辛い事は…愛してる人に後悔させる事だよ。一時の感情に流されれば、必ず後悔する。その後は不幸しかない。私…私、あんたの事を死ぬほど、いや、死んでも、あんたの事を愛してる。これ以上、あんたの…愛してどうしようもない人の重荷になりたくない。あんたを憎しみたくない。あんたを私の最愛のまままでいさせて…」

また落ちてきた水月の唇。部屋が温かくなってきた。もうエアコンはいらない。水月の体温で十分。外が雲ってきたようだ。カーテ

ンの隙間から入り込んでいた光のラインが消え、薄暗さが増した部屋に取り残された二人。微かに聞こえる子供のはしゃぎ声と車のクラクション。終わった…。また溜息を押し殺した。

それから、タケルと一緒にシャワーを浴びに一階へ。

「二人きりだから、ズツと真っ裸でいよ」

「だね。夫婦なんだから」

「来いよ」

吹っ切れた私の体は軽く、弾んでタケルの胸に飛び込む。今日と明後日はタケルの奥さんとしていられる。タケルの悲しく沈んだ瞳は、優しく温かい瞳に変わっていた。そんな瞳されたら…。シャワーの中、また大きくなったタケルのチンチンを握る。タケルとの最後の二日間、思い作りなんてしたくない。一生分のタケルを体中に染み込ませたい。タケルが私にとって最初で…。最後の…。もう誰も愛さない。シャワーの中で、交わし合う唇と舌が…。愛せる訳ない。私が握るタケルのチンチンが脈打ってる。首筋にタケルの唇が這う。温水が弾かれるオツパイはタケルの柔い手の中に…。そつと目を開けると、喚起窓から日が入り、シャワーの飛沫がタケルの肩に虹をかけている。綺麗…。後ろに向かされた私はタイル壁に両手を着いた。脚を開き、お知り突き出してタケルの愛情をおねだり。

「あっ！」

突き上げたれたら一気に脱力。タケルが私のオツパイを掴んでく

れる。湯気に意識を奪われないように、私は思い切り声を反響させた。

部屋でチンポを水月の膣から抜くと、チンポ自体がマシユマロみたいになった。

「ごめん！ あんた…。それ、私のだよね？」

「おめえしかいねえよ」

今までになかった水月の明るい笑顔。本当なら、俺は彼氏として、何時でも、何処でも、彼女の水月にそんな明るい笑顔を作らせる努力をしなければならなかった。頭を擦り、ベッドに腰掛けると、再び、カーテンの隙間から光が…。

「シャワー行こ。あんた」

俺の手を引く水月。

まだ一回目が終わって10分…？ 20分…？ しかし、俺はバスルームで復活した。水月との最後の二日間。この水月の勢いは俺を離しそうにない。俺も止まりそうにない。俺と水月は…やってやっつてやりまくる。

バスルームから出たても、水月は俺から離れない。体を拭き、抱き着いてきた水月とキスしながら全裸でリビングへ。

「お昼作るね。あんた」

テーブルの椅子に掛けられてた袋のエプロンを全裸のままの水月に着けてやる。ヤバイ…。それでキッチンに立たれると…。昼飯なんてどうでもいい。

「あんだ…。また濡れてきた」

えっ？ 俺より先に。包丁を持つ水月が振り返った。

恥ずかしくなんかない。素直になりたい。私達は夫婦。リビングのソファーに座り、テレビを見ていたタケル。真顔で振り返った私に、笑顔で立ち上がる全裸のタケル。もうタケルのチンチンは勇ましく反り返ってる。欲しい…。包丁を捨てた私はリビングに駆け出す。タケルに膝ま付き、その勇ましいチンチンをくわえた。タケルがエプロンの腰紐を摘まむ。

俺は、水月は、もう…。もう、遠慮も何にもない。何も着けない水月をカーペットの上に押し倒す。エアコンは入れてなかったけど、シャワー後で、二人の体は…。いや、シャワーだけの問題じゃない。興奮だ。こんなに温かいのは。水月のパイパン…。もうこんなに露が溢れてる。ジュルジュル鳴らせば、また、水月の声が…。

「あ、あんだ…。あっうあああ、欲しいい…」

大きく水月の両脚を開くと、また俺は水月に戻った。

お昼を食べた後、私は業とテーブルからフォークを落とした。テーブルの下かに潜り込む私。その目的はフォークを拾う事じゃない。やっぱり…。テーブルの下。タケルのチンチンは立っていた。食事の中、お皿から上がるタケルの視線。「おめえ…。料理上手いじゃん」と、微笑に綺麗な瞳、目玉焼きを頬張る口、唇に着いた黄身を舐める舌。向かいに座るタケルを眺め、アソコに湿気を感じてた私。タケルも興奮してる。テーブルの下、四つん這いで吸い寄せられた私は、タケルのチンチンを頬張る。

コラ、水月。テーブルの下で、舌を出して笑った水を俺はテーブルから引き出す。長いキス。ぼんやりと虚無感を漂わせ、俺を見詰めていた。きつと、欲情している。俺は分かった。唇から抜いたフォークを業とテーブルに落とした事も。可愛い水月をソファに運んだ。

部屋に戻った私達。途中、疲れて昼寝。タケルの汗の匂いに抱かれて夢の中でも興奮。先に起きてタケルの寝顔に唇を合わせた。覆い被さる私。夕飯までに5回、愛し合う。まだ、まだだよ…。あんた…。もつと、あんたに…。あんたに染めて。私はあんたになりたい。一生、あんたに染まったまま生きたい。

夕飯はリビングのテーブルで。カーペットの上に座り込んだタケルの上に私が座る。勿論、タケルのチンチンは私の中に…。か、重なっただまま、セツ、セツクスしながら…。口…。口移しでタケルに食べさせてあげる。

何度やってもやっても、俺のチンコはほんの僅かな休息だけで復活。水月の妖気は冷めず、妖炎が燃え上がる。夕飯の後、片付けをする水月はキッチンから俺に笑顔を送る。

「部屋で待ってる」

「終わったら、直ぐ行くよ」

「愛してるよ。直ぐ来いよ」

「うん、愛してる…。あんた」

水月から体を離せば冷える。部屋に戻った俺はエアコンのスイッチを入れ、カーテンを開けた。街灯が三つ、夜道を照らしてる。道を挟んで、斜め前の家、2階の窓に人影が。別に見られてもいいや。窓ガラスに、全裸の俺と一緒に映る時計は8時を回ったとこ。

そう言えば、今日は一度も携帯を見てない。今日、こうなる事を読んでいた俺。セックス中のメールほど野暮なものはない。昨日の夜から電源切って机の上に置いたまんま。携帯の電源を入れる。メールが2通。

…どう？ 取り込み中ならごめんね。まあ、詳しい事は、また月曜聞くよ… 由美から。

…どう考えても、あんたが悪いよ！ 謝る気がなあんなら… 何かごちゃごちゃ書いてある。彩からの長い長いメール。

女二人…。明後日、また学校で会えるのに。何故か、懐かしさを感じさせる女二人。いるとウザくなる事もあるけど、いなきや寂しい。こいつらからは…やっぱ、離れらんねえ。戻ろう。この肉欲にふける生活は、明日で終わり。昨日、色々考えた部屋を見回す俺。窓ガラスに映る俺のチンコは昨日と一緒。勃起してる。一人で苦笑いしてカーテンを閉じた。昨日と違った事が一つ。俺の感情。明日で終わるけど…水月に対する思いは、昨日のような薄ら惚けた中途半端なものじゃない。水月は俺の彼女だ。今日の水月の振る舞いを感じて分かる。俺の全てを連れて行くこととしている。思い出ではなく。俺自身を体の中に入れて連れて行くこととしている。俺に出来る事…。全ての欲を水月に出し切る事だ。階段を登って来る水月の足音が聞こえる。また抱き締めよう。水月を。俺を連れて行っていいよ。丁度、いい感じに部屋が暖まった。ドアが開く。

「あんだ…」

全裸の天使が俺を漆黒の世界から戻してくれる。

まだ雨は止まない。飛沫が上がる路面もそのまま。雨と一緒に、思いつきと笑顔も尽きない。相変わらず、可愛い水月。その上目遣いには、今でもドキツとするよ。ポケットの中で、俺の携帯が振える。

「彼女だ？」

俺ってやっぱ分かりやすいみたい。携帯を開けた俺の表情を水月に読まれた。上目遣いのままに笑顔を突き出す水月に、今更、嘘な

んで。

「うん、迎えに来るってな。もう近くまで来てるらっし」

女だから

「寒くないか？」

シャワーで流したようだ。揉む水月の尻が湿って冷たい。水月は握り締めていたバスタオルを落とした。

「あんだと一緒にだから寒くないよ」

首に回る水月の両手。絡む二枚の舌。アナルには蜜液が染み出ている。

「もうこうなに…」

お尻の穴から前にめり込むタケルの指。むずむずアソコが溶かされる。唇を離れた私はタケルの胸に頭を着けて奮える。立ってらない。タケルの二の腕を掴み、背後のベッドに体を落とすと、タケルが覆い被り、また激しく舌を求め会う二人。涎の線が私の頬に引かれた。首筋からオツパイにタケルは落ちていく。シャワーを浴びながら決めた…。両脚が開かれる。アソコを割るタケルの舌先。私の腰は浮き上がり、タケルの舌が醸す動きに合わせてくねる。クりに舌が押し付けられた。

「くっつうあああんだ…」

一気に押し下げられてベッドにめり込む腰。お尻に生暖かいものを感じた。もうそんなに濡れているんだ。もう一度、腰を浮かせる

と、タケルの舌がその露の後を追い、私の肛門に到着。

「うっああくっくっ…」

露を啜りながら、タケルの舌が丹念に肛門を解放させる。今しか言えない。タケルに…シャワーを浴びながら決めた事を。私はシートを握り締めた。

「あつ、あんたああ…お、お願いいい…そこに入れてええ…」

まだタケルにあげてない所。全てをタケルに捧げ、タケルの全てを吸収して、私は消えたい。一生、タケルしか愛さない。頂戴！タケルの舌が止まっても、私はシートを握り締め続けた。

「ちよつと、待ってる」

私の体を離れたタケルはベッドを下り、急ぎばやに部屋を出ていった。

夏、クラブで俺と雄二に迫って来やがった年上の淫乱女二人。ラブホで4Pパーティーしてたら、雄二がバスルームからシャンプー持って来た。こいつ何考えてんだ？自分がやってた女の肛門にそのシャンプー塗りたくった雄二。そう言う事か。雄二はシャンプーを俺に投げ渡した。俺もシャンプーを真下にいた女の肛門に塗り込んだ。そんなふざけたアナルセックスなら経験ある。けど…水月にはシャンプーって訳にはいかない。洗面台にお袋のベビローションが。お袋？一々、ベビローションの量まで覚えちゃねえよ。でも、笑うよ。てめえのベビローションを、てめえの息子がアナル

セックスに使用するなんてよ。ま、知らぬは親ばかりなりつてのは、どこの世界でも、10代の子供と親の間に存在するもの。バカな親どもよ。何も知らずに幸せでいてくれや。何も知らさない事が親孝行行ってやつさ。階段を駆け降りた全裸の俺。暗い廊下に明かりも灯さず、洗面台に向かった。

脱衣場に入ると、流石に暗い。明かりを灯す。洗面台にお袋のベビローションを発見。アナルの後は風呂に入らないと。バスルームに入り、空のバスタブに栓をして自動お湯はりのスイッチをオン。蛇口から上がる白い湯気を確認し、バスルームから出た俺は、バスタオル二枚を小脇に挟み、洗面台からベビローションを取り、部屋に駆け戻る。水月…。今夜はおまえの願いを彼氏として全て叶えてやる。待ってる！

強く開けられるドア。直ぐ、部屋に戻って来たタケルは息荒く何やら握り締めていた。

「あんだ…」

「あの、ちっちゃくて可愛い彼女でしょ？」

「え？」

ちっちゃくて？ 携帯から水月に顔を向けた。

「今更の告白なんだけど…。あなたの顔がどうしても見たくつてね。あなたの学校の近くで、あなたを待ち伏せした事があるんだ。その時…あなたとその娘がとつても楽しそうに歩いて来た。慌てて、近くの公園に隠れたよ。可愛い彼女じゃん」

恥ずかしそうに俯く水月。きっと、水月は由美が俺のイマカノと思ってる。由美には悪いけど…。俺は否定しなかった。

「そっかあ。気が付かなかったよ」

俺も恥ずかしくなり俯いた。一步…二歩、水月が俺から離れていく。

「水月…。お尻に入れるには潤滑材が必要だ。これを使う」

ギンギンに勃起したチンコが今か今かと肉ヒダの感触を待ちわびていた。しかし、今回は前ではなく後ろのヒダ。ベッドの傍で仁王立ちした俺のお袋ベビーローションを水月に見せると、水月はベッドから体をお越し、俺のチンコにしゃぶり着いた。ベッドの上で、潤しく絡み付く舌と四つん這いになり、悩ましく揺れる尻。くうう…。堪らん…。俺はローションとバスタオルをベッドに投げ捨てた。水月はチンコを頬擦りしチンコに息を吹き付ける。

「あなた…あなたのこのオチンチン…」

チンコを茎にキスをし、舌で掬い上げながら、水月は自分の願望

を上目遣いに乗せる。

「私の口にもアソコにも入った。唯一、入ってないところに欲しい…。全て、あんたに任せるよ。全て、あんたに染めて…」

水月を抱き起こしてキス。そのままベッドに押し倒す。

「チンコを入れ易くする為に、先ず、肛門にローション塗って指でマッサージしながら拡張させる。いいな？」

「うん…。あんた」

水月の頭の下から抜いた枕にバスタオルを巻き付けて、水月の尻の下に敷く。分娩用意を完了した妊婦のように両脚を大きく開け、胸の下で十本の指を組んだ水月。息を吐き、覚悟を決めた幼い女。その眼差しは清らかで美しい。露出された水月の肛門は、いつも以上に、その赤らんだパイパンに似合って見えた。

ローションのキャップを親指で弾き開けた俺は右人差し指と中指にとりどろのローションを落とす。二本の指から溢れたローションは上手く水月の肛門へ零れた。一瞬、ブルツと震えた水月の下半身ローションのキャップ口から俺の二本指を通して水月の可愛らしい肛門まで、蛍光灯の明かりに照らされた綺麗な透明のラインが出来た。

透明なローションの表面張力が形成された水月の肛門に、十二分に潤滑作用を得た二本指を擦り着ける。

「うっあ…」

半開きにされた水月の口が上がった。少し両脚も浮く。俺は丹念に水月の肛門にローションを染み込ませるように指を多少押し込み

気味に周回させる。神経が集中する肛門を軟化させる為のマッサージ。黒い女の尻を抱え、バックからアナルにブチ込んでた雄二は、「本当ならシャンプーも温めといた方が効果的なんだけどな」と、眉間を力ませて専門的な事をほざいてた。今から考えりゃ、アナルセックスなんて突発的な事に用意万端など出来る訳がない。温まってなけりゃ、摩擦と体温で温めるしかない。確かに、あの時は、どうでもいい女にマッサージもそこそこだったから、俺も…痛かった。てか、シャンプーってのも強引な話。水月は、そんな女じゃない。俺の彼女だ。丹念に優しく施す。

指の回転を速めるとネチャネチャと音。ローションが泡立ち、白く濁る。

「うっふうくふうっ…あんだ…」

瞳を閉じた水月は指の動きに合わせて尻を回転させる。もう表面は柔いだろう。俺は指と水月の肛門にローションを補充した。問題は中だ。

「水月。このまま指を中に入れて拡張するよ」

「うん、あんだ…して…」

薄らぎながらも、全く色褪せるていない水月の瞳。俺の唇で覗らされた。

時計回りに中指を一周…二周…三周目の途中でじんわりと肛門に埋もれさせた。

「ふっっ」

また震えそうになった下半身を、水月は両膝を抱えて止めた。し

かし、肛門には微妙に力みが入り、中指の行く手を拒んだ。水月が息を吐くと、肛門が緩んだ。今だ。第二間接まで入れる。

「うふうふう…」

衝撃は最初だけ。徐々に何とも言えない暖かみが肛門を覆うはず。水月の下半身には、もう力みは入らなかった。いつまでも無視されているクリが可哀想。肛門に挿入させた中指をそのままに、俺は親指で水月のクリを攪る。

「あ、うああうふうああああ…」

水月は下半身の変わりに首を小刻みに奮わせる。今の内に…。俺は中指全てを肛門に挿入させた。

「中指…。全部入ったよ。水月…」

「う、うん、あなた…」

水月の返事と同時に、親指をクリから膣に滑り込ませた。

「あっ！」

水月の頭が一瞬上がった。中指が肛門。親指が膣。肛門と膣の間の内壁を中指と親指で摘まむ俺。それぞれの指を蠢かせると、流石に、水月は両膝を抱えながら下半身を奮わせる。小振りなオッパイもブルブル騒ぎ始めた。

「あ、あなたあ…す、すご、すごいいい！ お、おかしくなるうふう…。あなたあああ、愛してるうふうふう…」

「愛してるよ…。水月」

内壁は…そんなに厚くないな。触った感じは…2センチないくらいの厚さ。肛門内と膈内。それぞれ柔らかいから、より薄く感じる。こんな内壁があるなんて…女の体って不思議だああ…。内壁を摘まみながら中指と親指を出し入れする俺。

「うっ、あっあああっ、くっあああっくうっくうっ…」

夏はここまでしなかった。とにかく、あの真っ黒な便器女の肛門に突っ込む事しか考えなかった。でも、良かった。初めて、女体の密部を堪能出来た女が水月で…。改めて水月に唇を落とし、俺は親指と中指を水月の肛門から抜いた。

中指一本じゃ、まだまだ不十分。チンポの直径にはほど遠く、拡張した事にはならない。じゃ、何でしたんだ？ 心中で、一人突っ込みをかまして、思わず、水月の口の中に吹き出した。

「何よ？ あんた。恥ずかしいじゃん」

ポンと俺の肩を叩く水月。こんな普通のカップルトークをもっと早く引き出さなかった彼氏の俺が悪いんだ…。吹き出しの後に反省し、水月の前髪を梳いた。

「何でもないよ。おまえが可愛から…。水月、誕生日いつだったけ？」

「3月9日だよ」

「じゃ、まだ15だよな。ごめんな。こんな事は…おまえの彼氏として、一番初めに聞かなきゃいけなかったんだけど…」

今度は水月が俺の口の中へ吹き出した。

「あなたの誕生日は？」

「10月16日」

薄らぐ水月の瞳。水月は俺の頬を撫でる。

「ごめん…。あなた。私が彼女として、あなたの誕生日聞かなかった。もう…済んじゃったね」

一旦、水月から唇を離し、またチュツとキスを落とした。

「いいんだよ。小学生になってから…。お袋も…『誕生日、おめでとう』なんて言ってくれねえから」

また水月は俺の頬を撫でた。

「なら…尚更、私は、ちゃんと聞くべきだった」

湿っぽいのは止めよう。

「今夜と明日で…お互いの誕生日パーティーしよう。ついでにクリスマスもバレンタインもやっちゃお」

水月の瞳が和らぎを取り戻した

「うん、しよ。あなた。一辺にやっちゃお」

乳首が小指の先のように硬くなった水月のオッパイを包む俺。

「ケーキの代わりに…何がいい？」

サイの牙のように固くなった俺のチンポを包む水月。

「これに決まってるじゃん。頂戴…お尻に。あんた」

また唇を、水月に落としたり。

「まずは、俺が水月から誕生日のプレゼント貰っていいの？」

「違う。まずは、私があんたからプレゼント貰うんだよ」

お互いの口の中に吹き出す。

「プレゼント交換でいいんじゃない？」

ゆつくりと、水月は俺の頭を包んだ。

「うん…。あんた」

「水月…。さつきは中指一本だったけど、次は中指と人差し指、二本で拡張するよ。大丈夫か？」

「大丈夫…。あんたのしたいように…して」

体を起こした俺は中指、人差し指、そして、水月の肛門にローションを補充。ちよつと量減り過ぎかあ？ ま、明日、ドラッグスト

アで置っておこ。また、指を肛門に周回。二本指をクロスさせて少し挿入。

「くっ！」

奮えず、水月は更に両脚を抱え上げる。半分まで挿入出来た。行けそうだ。ググツと指の根元まで…。

「くふっくっ…」

完入した。後は、拡張行為。俺はクロスさせた中指と人差し指を肛門内部で上下を入れ替える。

「うっ、くっくっ、うっ、う、う、うっ…」

入れ替える度に、漏れる水月の声。肛門内部で、スムーズに指の入れ換えが行えるようになった。刺激を与えれば与えるほど増す肛門の凝縮性に逆らい、俺は二本指を出来る限り開けた。二本指の間に来た空洞を目視。拡張だ。開かれた二本指を右に…。

「うー、ふふっくっ…」

左に…。

「くー、ふふっくっ…」

回転させた。もういいだろ。ゆっくりと、ねっとりど、二本指を抜くと、プスッと可愛い音。

拡張完了。

「水月、入れるよ」

「入れて…。あんた」

吐息が激しい水月。俺はビンビンのチンコにローションを垂らし、ヌルヌル扱いて、チンコ全体にローションを馴染ませる。水月の肛門にもローションを補充。念のために枕の下にもバスタオルを敷いた。

準備完了。

「水月…。今から入れるから…。息を吐いてくれ。肛門が柔らかくなる」

水月の肛門に亀頭を当てる俺。

「わかった…」

ふーっと膨らむ水月の頬と共に水月の肛門が微かに広がった。今だ！グチュとした感触。亀頭が水月の肛門に挿入された。

「うっく！」

水月が歯を食い縛ると、肛門が締まる。キツイ！

痛い！突き通されるよいな処女の時の痛みとまた違い、張り裂けそうそうな痛みが…。でも…第一の処女もタケル。第二の処女も

タケル。二つの処女を最愛の人に捧げられた喜びが、激痛を凌駕し、最高の感激に変わる。これで、これで、たとえ、タケルと離れてても…タケルは永遠に私の中にいる…。

「愛してる…。あなた」

「み、水月…あ、愛してる。もっと行くよ。息を吐いて…」

「き、来て…。あなた…」

胸一杯に息を溜め、私は頬を膨らませ、これ以上ない量の息を吐く。

「い、行くよ！」

至福の突進を受け入れる。

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ…あなたあああ…」

根元まで…は、入ったあ…。しっかりと俺のチンポを収納した水月の肛門。し、締まるう…。

「う、動くよ…。水月」

「動いて…。いっぱい…いっぱい…動いて…あなた…」

凄い緊縮感が…チンポに…。あんな便器女なんかと比べもんじゃない…。俺はゆっくりと水月の肛門にチンポの出し入れを繰り返

す。クリを弾けば、膣から流れる蜜液がチンコの根元に蔦うつう…。

「くくくうつうあくうつああ…」

「水月…。入ってる…。水月…。おまえの肛門に俺のチンポが…う、ああ…き、気持ち…気持ちいい…あ、愛してるよ…入ってるよ…愛情がいっぱい入ってるよ…」

嬉しくて…幸せで…。シーツに零れる雫。グイグイと私の肛門に食い込むタケルの愛。

「愛してる…あんた…す、凄く…さ、最高に…し、あつうふあああ、あ、幸せだよ。うあくくくうつあああんたああ…」

タケルの動きが速くなる。熱いい…。肛門が…熱くて熱くて…。う、うんちでそうう…。両膝を抱き上げる両手に力を込め、顔を膠着させて必死で我慢する私。流石に、女の子として…そ、それだけはああああ…。

肛門は膣と違い、内部に子宮口のような肉壁がない。通常の膣でのセックスでは、亀頭がその肉壁に当たり、擦られ、快感を得た男は射精する。肛門内部は、「直腸」。所謂、空洞。物理的にアナルセックスの場合、男は「当たり」と「擦れ」ではなく、肛門自体による「締めり」、「締め付け」によって快感を得て、射精しなければならぬ。「締め付け」が嫌いな奴らの中には、アナルセックス

をしてても、なかなかいかされず、途中で諦めて膣に入れ直す雄二
みないな奴もいる。俺？ 擦りも締め付けも…大好き。しかも、水
月の肛門の締め付けはハンパない。ローションが…。ローションが
ぐちゃぐちゃと白く濁ってる。気張る水月の横顔に汗の粒が流れて
る。クリから指を離してベッドに両手を着いた。し、締まるっつ…。
俺…も、もう…。

「み、水月…。い、いくよ…。お、おまえの肛門中でだ、出すよ…
水月いいい…」

最後の力を振り絞り、ピストンを加速。

「あ、あんたあああ…だ、だ、出してえええ…ちよう、頂戴いい！
私この、肛門のな、な、中にいいい…」

限界！ 天井に顔を上げる。

「い、いくっつっつっ！」

肛門内で破裂が起こった。出、出てる…。肛門内射精は、膣内射
精のように肉壁に当たり、じんわりと内部で広がる精液の生暖かい
感触を得る事は出来ない。その代わり、空洞の中で、精液がピュ
ッピュッと飛び散る感覚。広範囲に精液を飛び散らせている爽快感
が得られる。

いい感じ…。俺は水月の上に倒れた。

タケル長いキスが私を活性させる。終わった…。全てにタケルを
受け入れた…。タケルが体を起こし、チンチンを抜こうとする。大

丈夫かなあ…。漏れてないかなあ…。心配極まりない私はベッドに両肘をつけて半身を起こした。

ぬぼつと水月の肛門から抜いた肛門。肛門がチンコに馴染み。チンコを抜いてもパカッと大きな穴が残ったまま。なかなか、元に戻ろうとしない。チンコに付着されたローションは、やや黄土色に…。これは仕方ない。

「あんた…大丈夫…？」

潤んだ瞳。不安な顔を上げる水月。開けっ広げられた股間、剥き出しの肛門とのコントラストが可愛いくて溜まらん。事実を語れば、水月がショックを受ける。言えねえ。

「大丈夫。何ともなっていないよ」

俺も普通に優しくなった。昨日までの俺なら、「おめえ、えれえことなってるぞ！」って、水月を泣かしてただろう。

「ちょっと、中、綺麗にするよ」

水月の尻の下に敷いた枕を外す。

「う、うん…」

安心したのが、水月は両肘を外し、ベッドに頭を下ろした。俺は枕に巻いたバスタオルと枕の下に敷いたバスタオルを取り去る。ややローションが付いた二枚のバスタオルをくしゃくしゃにしてロー

シヨンだらけの水月の肛門の下へ。これで、ヨシ。開きぱなの肛門に再び中指を挿入。中で、やや曲げた中指を抜くと、グチュグチュ…鈍い音。

「うっうっ…」

漏れる水月の声と共に黄土色の溶液が流れ出た。ヤバイヤバイ。直ぐにバスタオルを肛門に当て、その溶液を拭った。後でまた、バスタブの中で指突っ込んで洗ってやる。取り敢えず…このバスタオルは破棄だな。綺麗に拭き取れた。臭いも…殆どない。マツサージが効いたようで、出血もない様子で安心。あ、忘れてた。二枚の内一枚、バスタオルを抜いて、チンコを拭う俺。笑顔を水月に向けると、水月も笑顔を返してくれた。そこには、極自然でなセックス直後の恋人同士の姿と一時の静けさしかない。俺はバスタオルでチンコを押さえたまま、ベッドを下りた。

「水月…。風呂行こ。下行った時に、お湯張ってきたから」

「うん、行こ」

「手、貸せよ」

水月の手を引っ張り、抱き寄せる。

「あんだ…。今夜は寝かせないからね」

「望む所さ…思いっきり愛し合お」

「愛してる…私のおんた」

「俺も愛してる…水月」

その言葉通り…その夜、私とタケルは寝ずに愛し合った。肉体と肉体を絡め合い…溶かし合い…時間が経つのも忘れた。全裸のタケルが開いたカーテン。朝日がタケルの背中に透けた。綺麗…。ベッドから飛び出し、カーテンを開けたまま、斜めに入る光線の中で愛し合う二人。私の決断に間違いはない。永遠にタケルは私の中に…。誰にも邪魔されない。邪魔しようがない私の思い。タケルの下で上でタケルの魂を受け入れて揺れ続ける私の肉体。バスルームで一度だけ飲んだだけ。後は全て中に貰った。妊娠？ 関係ない。妊娠すれば誰が何と言おうと、学校なんか止めて産めばいい。最愛の子供を産める事は…女としての最高の幸せ。タケルには黙って、タケルの分身を私が育てる。でも、それから一ヶ月も経たない内に生理が来て…。トイレの中で声を殺して泣き濡れた。タケルの赤ちやんを産めなかった。

朝も昼も愛し合い…。そして、また日が落ちてお別れの時間が来た。もう悔いなんて…なかった。

「家まで送ってくよ」

玄関を出て、俺と水月、つい30分ほど前まで愛し合ってた二人は両手を繋いで、その別れを待った。水月…。今日は、全く涙を見せてない。今も笑顔が白い息の向こうで揺れている。

「いい。ここで…いいよ。離れ辛くなるから」

「分かった…」

二本の白い息が一本になった。

「元気でな…。水月」

寒さなど感じさせない暖かい水月の瞳がまた白い息に曇る。気前いい言葉なんて出てくるはずがない。繋いだ二人の手が離れた。

「元気でね…。あんだ」

背中を向けて歩き出す水月。振り返らない水月な一つ目の街灯を越えた。まだ振り返らない。二つ目の街灯も越えた。振り返れよ。水月…。二つ目の街灯と三つ目の街灯の間で、水月の足が止まった。振り返ってくれ…。最後に、ごめんって言わせてくれよ。白い息が舞い上がり、急に、駆け出す水月。三つ目の街灯を越えた水月の背中は闇夜に消えた。街灯の下、微かに残された白い息も…今、消えてなくなった。

「シャキッとしなさいよ！」

コンクリートで囲まれた、あの階段。吹奏楽部の演奏と由美の声が反響した。

「してますよ。シャキッとピシッと」

階段に肩肘を着いて、足を投げ出してやった俺。

「どうして、男って奴は…女と別れた後、俺は別れましたよって顔すんだろね」

俺の横で腕を組む由美が勇まし過ぎる。

「あんなけ、別れる、別れられないで悩んでた奴がさあ…。いざ、別れたらどんより顔になるんだもん。んな、寂しい思いすんなら別れんたっての。タケル、鏡見た？ あんなの顔から悪魔の形相は消えたけど、代わって疲れはてた親父顔になってるよ」

俺は溜息で頭を掻くだけ。

「女は…全てお見通し。いつでも自分から幕を引ける。男が悟った時にはもう遅い。結果…フラれたのはタケルの方。以後、女を舐めない事だね」

俺の肩をポンと叩いて、由美は立ち上がり、階段を降りかけた。

「あ、由美」

キョトンと振り返った由美。

「俺の話は済んだけどよ。おまえの話はどうなってんだよ？」

明らかに寂しさを牧らわす笑顔。

「私も…女だから」

階段を降りていく由美の背中が勇まし過ぎた。

「じゃ、私は退散するよ」

傘を開けようとする水月。

「水月…」

水月が雨から振り返った。

「気を付けて帰れよ」

雨を背にする水月の笑顔は、初めて会った時のような、寂しさを無理に打ち消すような笑顔じゃなく、本当の笑顔のような…。そんな気がした。

「うん！ 元気でね。あんた」

「おまえも…元気でな」

永遠に愛してる…。傘を開けた私。最後の言葉を雨に溶かした。

高架下から車道を越え、歩道に入った水月の背中。車が数台通り、また飛沫が上がる。街灯に照らされた雨と飛沫の中に水月の背中が薄れる。振り返りもせず、雨から来た水月が雨に帰っていく。もうすぐ見えなくなる…。見えなく…になった。そして、直ぐに、水月の残像の中から妻が現れた。高架下にいる俺を見つめ、傘の中で、手を振る妻。妻に手を振り返し、雨を見上げた俺。雨雲に霞んだ水月が、さよなら、と言ってた。

Ｔ字路

下足場で靴を履き替えるタケル。

「タケル、帰り？」

雄二はまだ教室で他の女子達と調子よく戯言の掛け合い。代表委員の彩は入学式の打ち合わせで先生達と体育館。バイトがあるタケルは一人で教室を出た。

私は下足場に降りるタケルの後を追って声を掛けた。

「ああ」

「じゃ、一緒に帰ろう」

タケルと一緒に校門を出る頃、もう夕日が緩い下り坂をオレンジ色に染め、街路樹と走り回る子供達に長い影を引かせていた。「何でも躊躇う事なくタケルに話す」。そう心に決めていた私。この日どうしてもタケルに話したい事があった。でも、息なりは無理。取っ掛かりを探す為に、出だしは、その授業の話、期末テストの話等々。次は何の話を…？ 俯き考えていると、二人とも、ただ並んで歩くだけになった。取っ掛かりなんて無理。苦笑いをを上げれば、周りにはタケル以外誰もいない。バイトへ行くタケルと別れるＴ字路が迫る。坂の下に広がる静かな住宅地。西日を反射させる屋根の列を眺めながら、私はその核心に触れる。

「タケル。彩と…最近どう？」

タケルは歩行を緩めた。

「どつって、まあ、相変わらず喧嘩して、学校で収まりきらなかったらマックやファミレスやらで延長戦する仲さ」

「好きなんですよ？」

私の一言で、タケルは立ち止まった。私はタケルの前に出で振り返った。

「もういいんじゃない？ タケル」

「もういいって、何が？」

軽く微笑んで、私から目を逸らすタケル。真意を伝えたい一心で、私はタケルを見詰めた。空白に包まれる私達。口火を切ったのはタケルの方。

「もう嫌われてるよ。この前も…あの様だしさ」

溜息をつきながら、タケルは俯いた。

「傑作だったよ。血相変えて彩を追い掛けてくタケル」

チラツと私を見るタケル。私はタケルとの間に開いていた一步を半歩だけ縮めた。

「タケル、言ったよね？ 私達似てるって。私達だけじゃないよ。彩も私達と一緒にだよ。意地っ張りで、寂しがり屋で、悩み事一人で抱えて苦しんで…。彩も私達とそっくりだよ。だから…」

私も俯いた。

「タケル、素直になんなよ。お互い好きで好きで堪らないのに、お互い意地っ張りです直じやないから喧嘩ばっか。あんたは、その苛立ちを他の女で紛らわしてる。でも…本当の気持ちは紛らわしきれない」

タケルに顔を上げ、思い切り息を吸い込んだ。

「そんな事じゃ、いつまで経っても苦しみから逃れられない。いつまで経っても幸せになれないよ。1番好きになっちゃいけない人を…」

泣かずに言おうと決めていたのに…。もう無理。

「1番好きになった。タケルも、彩も、私みたいに重傷じゃないじゃん。お互い、素直になって好き合っていいんだよ」

夕日に染まったタケルの顔が滲んで霞む。涙が頬を蔦って顎先から落ちた。掠れた声で、私は続ける。

「タ、タケルと彩は…わ、私に色んなものくれた。私はあんたら二人の親友だから分かる。彩も、彩もタケルが大好きなんだよ。喧嘩してても、タケルが好きで好きで堪らないんだよ。タケルと彩は私にとって最高の親友。たがら…だから、二人には幸せになってほしい。お願い。タケル。彩と幸せになって」

黙って私にハンカチを差し出したタケル。タケルのハンカチを目に当て、涙に噎せる私。落ち着きを取り戻すまで、タケルが私の背中を撫でてくれた。やっぱり優しい奴。ハンカチに鼻水も付いたよ。

もう大丈夫。ちゃんと喋れそう。湿った顔をタケルに上げた。

「私に…彩と話させて」

タケルは私の背中から手を離れた。

「話すって…?」

「率直に言えば、私が彩を素直にさせて、ちゃんとタケルと付き合うように促すの」

「いや、でも、それ…」

目をキョロキョロさせるタケル。

「じゃ、あんたが彩に告げるの?」

タケルの胸を人差し指で突きながら言うと、タケルは頭の後ろを撫でた。

「それは…」

鼻で笑って、私はタケルから顔を背けた。

「喧嘩友達に息なり色気出して告り辛いつて気持ちも分かるけど、そうやってウジウジしてる内に、あんた、彩とまた喧嘩繰り返して拳げ句は他の女で気紛らわすんだよ。もう分かっている。彩も彩で…頑固で素直じゃないしねえ。あんたみたいな男と私みたいな女は適当にストレス発散出来るけど、彩みたいな純情な娘には無理」

いつの間にか、いつもの口調に戻っていた私。腕を組んでタケルを見上げた。

「俺も…純情な方なんだけどなあ」

真面目な会話の中で、さりげなく、熱を帯びてきた相手を鼻で笑わせ、落ち着かせてくれるのもタケルの魅力なのかもしれない。

「誰かが中に入らないと、事が進まないよ。その役は…私しかないでしょ。余計なお世話だって言われても私はやるからね。もう、見ちゃらんないよ。あんたら」

顎を引いて、鼻を擦るタケル。

「タケル…」

少し歪んだタケルの襟を直してやった。

「あんたは…分かってたはずだよ。あんな噂がデマだって。あんたや私のように、彩が合コンみたいなどで適当な相手見つけられるタイプの娘じゃないって…あんたは分かってたはず。彩は…先ず自分から好きにならなきゃダメなタイプ。そんなところで相手の口説きに乗るような娘じゃない。あんたや雄二みたいに遊びと女に慣れる男は、何にでもキャピキャピ嬉しがって首突っ込んで来るようなバカな女や空想妄想だけで女にまるで慣れてない童貞君みたいに、噂だけを鵜呑みにするような事しない。ちゃんと、その娘自身とその噂を照らし合わせて判断してくれる。噂を聞いているはずなのに、あんたも雄二も冷静だったね。あんたら、何一つ、私に聞いて来なかった。あんたら分かってくれてる。ちょっとだけ尊敬したよ」

ポケットに両手を突っ込み、タケルは苦笑いを逸らした。

「雄二は尊敬に値するかも知れねえけど…。俺は尊敬なんてされる男じゃねえよ。俺は…彩に彼氏なんていねえの分かってて、彼氏と行ってこいよって水族館のチケット二枚渡すような奴だぜ。まあ、他のものにしてよ」って、結局、返されちまったけどな。あ、なんか、チケット二枚あるから、俺と一緒に行くか？ 春休みオーブンするらしいから」

絶対イヤ！ ならない加減な余り物チケット。誰が喜んで行く？ あの時の尊敬返せ！ ま、まあ、いいや、また熱が籠ってきたとこだから、丁度良かったよ。当然、鼻で息で蹴散らしてやる。

「あんたら可愛いよ。どうにかして、彩の方から彼氏なんていないって言って欲しかったんでしょ？ 彩は彩で、タケルをヤキモキさせたかったんだよ。頑固者同士の間起きる『すれ違い』だよ」

「すれ違いってか…」

上がったタケルの瞳。

私はタケルから目を逸らさない。

「タケルは彩の事…図星突かれれば突かれるほど意地っ張りになる娘だと思ってたんでしょ？ まあ、確かに、彩には、そう思わせちゃうとこある…かもしれない。『おまえに彼氏なんていないの分かっているよ』って言って、素直に『うん、いないよ』って言うてくれるかどうか？ タケルは悩んでたと思う。もし、『ちゃんと彼氏いるし。ラブラブだよ』。何て、彩に言われちゃあ。たとえ、それが嘘でも、彩と今以上に距離が開いて、今以上に付き合い辛くなるって思ってたたんでしょ？ でも、それは、タケルの取り越し苦労。

彩はそこまでバカじゃないよ。きつと、彩は…あんたが気付いてくれるの待ってるよ」

タケルはまた鼻を擦った。

カウンター席に座るタケルのパパも鼻を擦った。やっぱり親子だ。よく似てる。カウンターの中にいる智喜は苦笑いと言うより悲壮な笑いを私に向けた。そりゃそうよね。余りにも唐突過ぎる彼女のお父さんとの対面。引き吊る智喜の顔を眺めて吹き出しかけた私。

「いや、何て言ったら…うちの坊主が…」

クスクス笑う和ちゃんはパパの肩をポンと叩いた。

「何にも気にする事ねえじゃねえか！ と、言うかあ、タケルがおめえの息子で良かった。おめえの息子に俺の娘持つてかれて…マジ良かった」

渋い大人の笑顔を浮かべたパパ。カウンターに両肘を着いて静かに頷いた。

「有り難う。そう言われると…嬉しいよ」

「よせよ！ 最強の敵に礼なんて言われると気味悪いよ。タケルと付き合いだしてから、彩が毎日幸せをそうで…。タケルのパパとも仲良くなったてな。おめえん家で世話になったみてえで、礼言いた

いのはこっちの方さ」

「和ちゃん格好いい！」

私は思わず和ちゃんの背中に抱き着いた。

「お、おう、今頃、気付いたか!？」

「おめえら、マジな話、付き合ってるじゃねえのか？」

目を丸くして、パパが私と和ちゃんを交互に指差した。よく考えたら、パパは私のママの妹の旦那さん。て、事はどうなるの？ ま、いいや、パパにもやっちゃえ。

「誠さんも格好いい！」

パパの背中にも抱き着いた。

「お、おい、和巳！」

「知らねえぞ！ 由美にくつつかれたら二度と離してもらえねえんだから」

パパの背中がクスクス奮えた。

「照れくせえよ。何か、新しい娘が出来たみてえでな」

パパの背中から、私は舌を出して離れた。

「由美って呼んで下さいね。誠さん。私は…彩みたいに誠さんの事、

パパって呼んでいいですか？」

カウンターに肩肘を着いて、和ちゃんがケラケラする。

「パ、パパってのいいよな。そっちの方が愛人関係みてえじゃねえか。誠」

パパは赤らんだ顔をおしぼりで拭いた。

「しょうがねえなあ…。じゃ、俺の事も、さん付け止めてくれよ。和巳と話す時みてえに気さくにしてくれ。タケルの友達なら…美紀とも友達だろ？」

「うん、美紀ともスツゴい仲いいよ。ね？ 智喜」

「あ、ああ」

見上げた智喜はまだ緊張気味。無理もない。私はパパの言葉に甘えて、早速、気さくな口調に切り替えた。

「美紀って…？」

下唇を撫でた和ちゃん。和ちゃんは美紀の事知らないんだ。苦笑いのパパは頭を撫でた。

「いやあ、この前、話した件。俺の元嫁さんと亡くなった嫁さん。元嫁さんの子供がタケルで。亡くなった嫁さんの子供が美紀ってんだ」

「じゃ、おめえ。おめえの娘も…」

「ああ、こいつらと同じ学校行つてんだ。全くの偶然さ。美紀は夕ケルとも、彩や由美や智喜とも友達さ」

「何だよ。そう言う事かよ」

笑いながら、和ちゃんはお猪口の中の熱燗を空けた。

「で、おめえ、勇作って覚えてるか？」

パパも熱燗を空け、私はカウンターからお猪口を取り、二人にお酌した。

「おめえんところの連中は大体覚えてる。勇作って…おめえといつもツルんでた、ちよつと男前な奴だろ？」

「ああ、そいつの息子と美紀が付き合ってるんだ」

「ほう…」

お猪口を持ちながら、和ちゃんが天井を見上げ、静かに顔を下ろした。

「不思議なもんだよなあ…。俺の娘とおめえの息子。おめえの娘と俺の娘。あの頃から…俺達は運命で繋がれてたんだろなあ」

「あんな雨ん中、ずぶ濡れになつて血みどろになつて殴り合ったおめえと俺を、どっかで神様が見てくれてたんだ。呆れた神様が、しょうがねえクソガキ二人にプレゼントしてくれたんだろ。この運命を」

二人はお猪口を合わせて一気に熱燗を空けた。男っていいよね。

「和ちゃん、パパ、運命を感じた友達の事を何て言うか知ってる？」

同時に、私へ顔を向けた二人。

「親友って言うんだよ」

照れくさそうに二人は下を向いてクスクス笑い合った。

「今夜、彩のやつ、タケルんとこに泊まりに行ってたよ。若い時俺もカアちゃんとそうやって恋愛したんだ。タケルと彩にもそうやって恋愛して欲しい。今夜だけじゃないねえよ。彩のやつ、おめえの元カアちゃんに、飯連れてって貰ったり、服買って貰ったり、本当、可愛がって貰ってたなあ。よく泊まりに行ってるよ」

また和ちゃんは格好いい事言う。パパはおしぼりを額に当ててクスクス笑いだした。何で、パパが笑ってるのか、理解出来た私は俯いて笑いを堪えた。少し頭を上げると、智喜も顔を横に向けて笑いを堪えてた。

「じゃ、勇作夫婦と一緒に、俺の元嫁さんも温泉行ってんだな。そう言うことか。いや、昨日の夜、美紀から雄二んとこに泊まりたいって言われてな。おう、行ってこいって、二つ返事してやったよ。俺は昔：お袋から言われたんだ。世の中は順送り、あんたの順番が回って来た時に首を縦に振れないような我儘な男には死んでもなるんじゃないよってな。俺もそうやって恋愛して：子宝に恵まれたんだ。おめえと一緒にさ。子供にもそうやって恋愛して欲しい。俺の元嫁さんも：おめえや俺と考え方一緒だ」

パパも素敵。少しだけ涙ぐんだ私。和ちゃんとパパがお酌し合い、グイッと喉を鳴らした。

「誠…。いつそ、あいつら、ここに呼ぶか？」

「上等。親父の生きざま見せてやる」

和ちゃんが私に目で合図した。そう来なきや。

「智喜。今から四人来る、って、あんた、何泣いてんの!？」

「お、お二人に…感動して…。俺も…お二人みたいになりたいです。勉強なりました」

深々と頭を下げる智喜。

「勘弁してくれよ」

唐揚げを頬張るパパ。

「何、ほざいてんだよ。おめえ」

呆れて頭を撫でる和ちゃん。

「じゃ、四人に連絡取ってみる」

二人の肩に触れ、店の厨房に戻る私。私にも親友と呼べる仲間がいる。また私はあの頃を思い出していた。

「取り越し苦労するほど…彩の事が好きなんだよ。朝起きて寝るまで。いや、夢の中でも、タケルは彩の事を思ってる」

タケルは私を見詰めるだけで何も答えない。

「女の些細な仕草で女の内情を理解出来るあんた。その優しさで彩を包んであげな」

頷いたのか、頷いてないのか、微妙にタケルの頭が下がった。私はタケルの胸を叩いて笑顔を上げた。

「後は、私に任せな。私が彩にタケルを誘うように仕向けるから」

指で眉を掻き、猜疑心を匂わせるタケルの表示。

「んな事…出来るの？」

早く、彩に全て話さなきゃいけない。腕を組み直し、私は頷く。

「うん。色んな意味で悪いようにしないから。タケルはジツとしてればいいよ」

「で…いつ？」

そう言われるとねえ。私は頭を掻いた。

「まあ…近々」

タケルの溜息から笑顔が滲み出す。

「じゃ、ジツとしとくよ」

「うん、信用してて」

タケルが腕時計をチラッと見た。

「バイト行くわ」

私とタケルは直ぐ目の前の丁字路まで歩いた。

「じゃ、気を付けてね」

「おう、由美も気を付けて帰れよ」

私は立ち止まり、タケルは道路を渡って丁字路から坂を下りていった。夕日がタケルから長い影を引く。

「タケル！ このハンカチにキスマーク付けて返してやるよ！」

タケルは背中を向けたまま手を振った。

全裸でベッドを下りた俺。軽くストレッチをし、テーブルから俺

と妻の携帯を取り上げた。妻の携帯をベッドで寝そべる妻に投げ渡した。俺の携帯には由美からのメール。この時間に珍しい。俺はメールを開けた。

「はい？」

「はあ？」

俺と上半身をベットから起こしていた妻は同時に声を上げて顔を見合った。

「彩のは…誰から？」

「由美から」

口をポカンと空けた妻。

「俺のも…由美から。俺の親父と彩の親父さんが…店で飲んでる」

「今から来てつて。タケル…。どう言う事？」

自然に目玉が左右に振れ、なかなか口から言葉がでて来ない。ふと、下を見ると、ベッドを出るまで半立ち状態だったチンコが縮み切っていた。

「ど、どう言う事って…」

ベッドに腰を掛けると、妻が擦り寄って来た。プニユプニユと柔らかい妻のオツパイが腕に当たるけど、俺のチンコはまるで無反応。まあ、さっき、やったところなんで反応しないのは仕方ないんだけど…。いや、そんな事はどうでもいいや。妻に顔を向けた。

「偶然、由美達の店で会ったんじゃない？ お父さんとパパ」

「偶然会ったとしても…二人は面識ねえ。由美も智喜も、俺の親父の顔は知らねよ」

「じゃ、何で？」

「由美に事情聞くか？」

何故か、妻は笑いだした。

「取り敢えず、店に行ってみよ。由美、バイト中だから携帯出られないって。きつと、メールもこそつと打ってくれたんだよ。私達の外に、美紀と雄二にも送ってる。ほら、四人に同じ内容のメールを一斉に送ってる」

彩の携帯を見ると、彩のアドレスの他に、俺、雄二、美紀のアドレスが宛先欄に記されていた。由美は短時間で完璧に俺達四人へ伝えられたんだ。

「わ、分かった。行く」

彩に顔を向けた瞬間、俺の携帯が振動した。着信は雄二から。俺の携帯を見て、妻がクスツと漏らす。もう話は分かってるよ。あいつらと、どっかで待ち合わせて一緒に行く。苦笑いで、俺は携帯に出た。

脈打つ

家に着いたら、もう0時を回っていた。またこれも週明けの笑い話のネタになるだろう。少し酔った妻。唇はレモン酎ハイの風味。手を取り合って玄関を上がると、「シャワー浴びよ」。妻に両手を引っ張られる。親父と親父さん……。妻が言うように、俺達は生まれる前からこうやって繋がれていたんだ。この手を絶対離さない。

「タ、タケル……」

携帯から雄二の奮える声。俺の携帯に妻が耳を着けた。俺達もうつろち着き、諦めている。

「話は分かってるよ。おめえ、何してた？」

「美紀とセックス」

パーンといい音が携帯から聞こえた。俺と妻は顔を合わせて笑う。

「イッテ！ お、おめえは？」

「舐められてた」

今度は俺の背中にパーンと音が響いた。俺の、イッテ！ に、妻が、バカ！ 雄二と美紀の笑い声が聞こえる。

「美紀に聞いても、さっぱり分かんねえ」

「俺も彩も分からねえ。由美も智喜も親父には面識ない。親父と親父さんに聞かなきゃしょうがねえよ。おめえの家からの方が、あの居酒屋に近いな。今から彩とそっち行くわ。ズボン履いて待ってる。一緒に行こ」

「お、おお。じゃ待ってる」

携帯を切って、妻と笑顔を寄せ合う。

「行こ」

「うん」

「取り敢えず由美にメール打つといてくれ。今から四人お伺いしますって」

「分かった」

部屋に散乱した服を拾い始めた。

廊下から、私と夫は服を脱ぎ散らかし、下品なままバスルームに到着。ノブを捻るとシャワーベッドから冷たい水が落ちてきた。

「冷たい！」

また夫の唇へ吸い付く。夫の柔らかい舌と暖かい肌。そして、熱く固いチンコ。欲しい……。居酒屋にいる時から、夫が欲しかった。お父さんやパパがいても関係ない。愉快に笑う夫。夫の瞳が私に辿り着く度に子宮は擦られ、アソコが力み、パンツに染みるものを感じた。今、その夫が私の腕の中に……。飛沫の中で、夫の瞳が雨色に変わる。私の体から徐々に湯気が上がった。

由美と智喜バイト先、居酒屋の前に着いた俺達四人は顔を見合せ、頷き合う。

皆、珍しく神妙な顔。無理もない扉の向こうには、今まで想像もしなかったコンビが酒を交わしてる。怖くない訳がない。往生際が悪い溜息を吐き、俺が扉を開けた。

「おっ！ 待ってました」

来たあ……。カウンターから彩の親父さんの声。その後ろで、俺と同じように苦笑いで頭を撫でる俺の親父。二人とも、もう顔が赤い。俺の背中から彩と美紀が飛び出した。

「お父さん！」

「パパ！」

ピタッと合った二人の声に、親父さんと親父が笑顔を合わせた。

「誠。娘さんか？」

親父さんが親父に振り向く。親父を呼び捨てにする親父さん。たまたま店で意気投合した雰囲気じゃない。美紀が親父さんに素早く寄る。

「父がいつもお世話になっております。彩ちゃんの友達的美紀です」
きつちりした挨拶。美紀が深々と親父さんに頭を下げた。親父さんも姿勢を正す。

「は、始めまして…。彩の父です」

息なり改まった親父さんを見て、彩がブツと吹き出して俺達に振り返った。

「可愛い娘さんだなあ。勇作の息子と付き合ってたって？」

「えっ？」

親父さんの言葉に驚駭を上げる美紀。俺と彩は一斉に雄二を見た。オヤツサンも関わってる？ 相当、複雑な話だぞ。口をパクパクさせ俺と彩を交互に見た雄二は親父さんの元へ駆け寄る。

「父がいつもお世話になっております」

美紀と同じように頭を下げる雄二。一体どうなってんだ？

「参ったなあ…」

親父さんは苦笑いを親父に向けた。

「さあさあ、こんなところ突っ立ってないで」

由美が俺の背中を押した。全く意味が分かんねえ。俺の小声に由美は笑顔を向けるだけ。

「和ちゃん！ パパ！ 奥のテーブルに移って」

由美も親父の事、パパって呼んでる。

「ヨッシ！ 今日は飲もうや。タケル、彩。来い来い」

立ち上がって雄二の肩を叩く親父さんと俺と彩に愛想笑いを向ける親父。

「行こ。タケル」

俺の腕を取る妻はもう笑顔になってる。親父さんに頭を撫でられて美紀も笑ってた。分けわからん状況に、女つてのはよく順応出来るなあ。まだ顔を引き吊らせる俺と雄二。カウンターの中に泣きそうな顔の智喜がいた。分かっているよ。由美に案内されて店奥の座敷テーブルに向かう親父さんと親父。二人の背中を眺めながらカウンターに覆い被さると、智喜が顔を近付けてきた。

「ここに来る前に姉貴の事は箝口令敷いた。安心してろ」

「サ、サンキュー」

智喜の肩を叩き、俺は妻と一緒にテーブルに向かった。

泡だらけの二人。その戯れに応える息遣いが激しさを増していた。

「タケル…。欲しかったあ…」

私のクリで遊ぶ夫の指。自然に腰はくねる。当然に夫のチンコを握る。少し酔っただけなのに…。夫が与えてくれる熱が体内のアルコールを増強させ、私の本能を沸点まで高めていた。もう今夜は二人だけ。絡まる舌。蕩けるアソコ。早まる気持ち。

「欲しい…。早く…。早く頂戴。タケル…」

「何が欲しいの？」

意地悪な夫の質問。私は扱きを速めた。

「これ…」

目を開けると、夫の瞳に吸い込まれた。

「これじゃ分からないよ」

夫の指が速まる。

「ウツアアウアアア…。タ、タケルのチ、チンコが欲しいっ！は、早くっ！早くっ！入れて！欲しい！」

力なく私は夫に倒れた。

親父さんと親父。「飲め飲め」「食べ食べ」。間の手を交えての話は出来すぎた酔っ払いの戯言、狂言ではなかった。俺、おめえ、んの野郎、この馬鹿、和巳、誠、代名詞と固有名詞で掛け合い、親父がボケて、親父さんが突っ込む。息子、娘、その彼氏、彼女に囲まれ、身振り手振りで実話、昔話、血生臭い武勇伝を披露する二人あどけなく嬉しそうな親父二人の顔。口を開けっぱなの俺達だったけど、次第に、妻も美紀も不思議で呆れる過去の出来事を受け入れた様子。

「お父さん、それ馬鹿じゃん！」

「パパ、格好つけだったんだね!？」

酎ハイ片手に二人の肩を叩いていた。女二人が愉快ならそれでいい、口に出せない男同士の相槌めいた笑みを突き合わせ、そんな複雑な境遇の枠組みなんてどうでもいい、上手くて少し苦いビールで白髭を作る俺と雄二。

「こいつらよりかは俺達の方が格好いいって」

「そりゃそうよ。まだまだ青いよ。こいつら」

親父二人の戯言と狂言に、しょうがねえな。と、呆れて付き合っ

た。にしても、妻が可愛い。時折、俺を気に掛ける瞳が堪らん。これからもう一回って場面で呼び出された無念に、俺の相棒がズボンの中で怒りを露にしていた。男なんてこんなもん。どんな話を誰から突き付けられようが欲情する時はする。対象が妻なら健全な発情と言えるだろう。タイミングがずれた俺の笑いに、また妻の瞳が来た。マジ堪らん。

「えっ！？ 由美ってそうなの？」

親父の驚いた声。何の話？ どうやら、何気に雄二が由美の事を親父に話したらしい。

「ごめん。パパ。私、言うタイミング逃してた」

「お父さん。そう言えば私も言っただけじゃなかったね。真紀さんの事」

ああ、由美と美紀の話ね。妻と美紀だけじゃない。俺も含めて殆ど最近の奴らは、一々、余計な話を親にしない。

「そんな驚かなくてもさ。よくある事じゃん。姉妹同士が遠縁になりゃ、お互いの子供の顔知らないままって話。偶然、美紀と由美が同じ学校だったって事さ」

俺がサッパリ言うと、親父さんが笑って親父の肩を叩いた。

「タケルの言う通りだ。偶然は続くよ。でも、あの真紀ちゃんがおめえのカミさんの姉ちゃんなんて」

「こっちも驚いたよ。あの真紀姉と和巳が知り合いなんてなあ。真紀姉にも…色々迷惑掛けちゃったしな。今度また、ゆっくり飲みて

えな」

「おう。じゃ、俺がセツティングするよ。今度、うちのカミさんと真紀ちゃん、出来たらよ、タケルのお母さんと雄二んとも呼ぼうや。こいつら抜きで親同士で行こ」

「いいな。それ。あいつら呼んだら皆来るぜ」

ほらこうなる。雄二…。だから、俺達は親に余計な話をしねえんだよ。知らねえぞ…。またヨツチャンが暴走してもよう。キャラ的に親父さんと合いそうだし。泣きそうなのか、笑っているか、雄二がまた一つ学習したようだ。勝手にしてくれ。

「お、おう、彩。もうそろそろ、由美と智喜、バイト終わりだろ。

あいつら、今夜は早番って言ってたから。呼んでやれよ」

「うん。分かった」

座敷テーブルを離れる間際、俺に瞳を浴びせる妻。また俺の相棒が怒り始めた。

いきり立ち…脈打つ。夫のチンポが実に勇ましく頼もしい。私を後ろに向けにする夫。私は両手をタイル壁に着き、お尻を突き出しておねだり。早く！ 夫のチンコが一気に子宮口にまで突入された。

「ウクツ！ タケルウウウ…欲しかったああああ…欲しくて死にそ

うだったああああ…」

「うっ、ああ、お、俺も欲しかったあ…あ、彩が欲しくて…堪らなかったああ…。あ、愛してる。彩ああ…」

「もっともっとおおお…し、してええ…タケルウウウ…。愛、愛してるうっ…」

速い出し入れ。あ、当たる。し、し子宮にあ、当たるう…。夫の首に腕を掛けて唇を寄せる私。吸い付く夫の唇。舌を絡め合うと、またクリに刺激が。ダ、ダメ！ 夫が出し入れしながらクリをかき回す。堪らず夫の唇から離れ、再び、タイル壁に両手を戻した。

「そ、そこっ！ アツ、タケルツ！ クウウウウ…。そ、そんな、コロコロされたらっ！」

夫は空いた手でオツパイをこね回す。蠢かさられるクリと鋭く押し引きされる膣。き、気持ちいい…。もう何にももらえない…。ジユクジユクとハアハアとタイル壁に反響される音と声が厭らしく私のリズムを助長する。今夜は…こ、これで終わりじゃない。まだまだ続く…。あ、朝まで…。いや、明日も続く…。は、離さない…。

「タケルツ！ イクーツ！」

「由美…。言ってくれよ。あの真紀姉の娘だって知らずに口説くと

「ごだったよ」

私からお酌を受けたパパ。もうバカ！と、容赦ない美紀の張りにパパはお猪口からお酒を溢しかけ、慌てて口を着けた。和ちゃんと雄二はバカ笑い。タケルは苦笑いで鼻を擦る。

和ちゃんとパパの話が盛り上がったし。それに、親同士の間関係なんて…私達には関係ないよねって美紀と話してたから。彩と美紀と一緒に含み笑いをする私。これが…私達。さっきから智喜が黙りこくってる。飲めよ。タケルに促されても、ああ…。って下を見る智喜。まだ緊張してんのかな？ 智喜が息なり正座した。

「誠さん！ お嬢さんとお付き合いさせて頂いております」

ビールを吹き出しかけるタケル。焼鳥を溢す雄二。啞然を突き合わす私達。

「全く、あれには驚いたよなあ…」

バスルームで発散させた後、夫の部屋に戻った私達。ベッドの中、私はタケルの腕枕で暫しの休憩。でも、しっかりとタケルのチンコは私の手中にあった。

「智喜も…ホツとしたんじゃない」

夫のチンコが手中に収まりが良くなるくらいまで伸びた。いい感じ…。したばかり。でも関係ない。くにゅくにゅを遠慮なく繰り返す。

返す。

「でも、これからだよなあ…。姉貴」

夫が私に唇を着けると、私は舌を挿入する。

「大丈夫…。パパなら」

私の乳首を親指で弾く夫。益々に、舌が潤う。

「親父さんも乗ってくれそうだし…。頼もしいよ」

もうすっかり元の固さを取り戻したチンコ。その先から我慢汁がほとばる。

「舐めていい？」

「ああ」

夫が布団を捲ると、私のチンコにしゃぶり着いた。すべすべした舌触り。凄く落ち着く。愛があるから、何千回、何万回、一生舐め続けても飽きない味。私に活力を与えてくれるエキス。可愛いタマタマが手の平で転がる。お尻を突き上げ、はしたなさも夢中の表現の内。鼻息を漏らしながらチンコを深く食する。うふう…。吐息つく夫を見上げれば、薄く光る瞳が降り注ぐ。甘酸っぱい汁で被われた私の舌が無意識に絡みついた。

「上手くなっただな…。彩」

夫が頭の下に両腕を敷く。私は初フェラを思い出した。夫にコー

チングしてもらいながらのぎこちない下手くそなフェラ。本当に、夫に迷惑かけた。一旦、チンコを口から抜き、小さく笑った。

「タケルが…上手くさせたんだよ」

悪戯に、尿道と裏筋の継ぎ目に舌をれるる左右させる。

「俺、そこまで詳しく教えちゃないぜ」

優しく微笑む夫。その瞳、その輝きは私の子宮に胎動を与え、籠った熱によってアソコは溶かされる。触らなくても分かる。アソコがもつとろとろな事くらい。汁が甘い。癖になるなんて生易しいものじゃない。そんな物質的な麻薬じみたものじゃない。あくまでも自然に、血を沸き立たせ、肉を潤す。夫は私の…本能そのもの。素直じゃなきゃいられない本能そのもの。舌の揺めきを止められない。

「女なら誰でも…最高に愛してる人を最高に気持ちよくさせたい」

女にとって、フェラは無言の愛情表現。零に沿って裏筋を這い、茎を撫でる舌。

「だから、タケルが私を上手くさせたんだよ」

血管がはち切れそうなくらい元気。茎を奮わせ、舌は根元に絡んだ。

「俺も…彩を最高に気持ちよくさせたい。永遠に…。お尻…こつち向けな」

最初は、恥ずかしくって、お尻を向けるまで膨大な時間を要した。

今は、舐めて！ いっぱい舐めて！ 待ち望んだ思いを爆発させ、迅速にお尻を夫に向けられる。

69。眼前、鼻先に突き付けられた妻の陰門。小陰唇とクリが原型を留めないほど蜜液に浸かり蕩けている。無接触でこれだけ。妻がフェラで俺に愛情を伝え、俺がそれを受ける。妻の濡れ具合と我慢汁をしたらす俺の勃起は、その以心伝心の賜物。妻の口内運動が激しく熱くなる。うくうく…。先ず、桃色たる小陰唇の内皮に形成された愛蜜の膜を舌で拭う。ウツ！ 妻の肛門が締まったが満遍なく両ヒラと膣口を食した俺はクリに舌先を触れさせた。

「ウッフッフッフッフッフ…」

鼻息と吐息。どちらでもいい。ただフェラをしたい。ただクンニされたい。味わう液と味わられる液。二極の愛撫と一極の愛情意識が沈まないように、少し吸い口を強め、激しく上下を繰り返した。

「美紀…。親父は姉貴と智喜の事をまだ知らないんだよな？」

「言っていない言っていない。お姉ちゃん…タケルのママに内緒でこっち帰って来てるんでしょ？ パパに言っちゃったら、パパからタケ

ルのママの耳に入っちゃうかもしれないし」

美紀はよく分かってくれていた。

「じゃ、取り敢えず、店の中では姉貴の事は禁句にしといてくれ」

妻と由美は余計な事は絶対に言わないと分かっていた俺。来る前、雄二中心に敷いた箝口令。姉貴の彼氏、智喜が言っちまうとはなあ…。相手が姉貴でなかったら…。最高に格好いいんだけどなあ…。どうして男はいつも余計な事言っただよ？ 頼むから、女を見習えよ。悪の世界って体育会系以上の年功序列制度があるようだ。智喜からしてみりゃあ、一分一秒でも大先輩の親父と親父さんに、娘と付き合ってる。娘の彼氏の姉貴と付き合ってる。報告したい気持ちは分かるけど…。

「と、智喜…。俺のお嬢さんって二人いるんだけど…。こっちは…」

親父が苦笑いの美紀を見る。

「こっちだろ」

で、頭を掻く雄二に顔を向ける親父。

「て…事は…佐紀の方が？」

「は、はい」

まだ正座の智喜。まだ視線も上げない。そんな智喜を見て、何故か、親父さんが親父に改まった。

「誠…。こいつは両親を早くに亡くしてて…。俺と境遇が似てる。族も足洗って、じいちゃんとはあちゃんと暮らしてて、今、二人に孝行してる優しい野郎だ。こいつは俺の直系だ。俺と賢二が智喜の親代わりだ。おめえに面と向かって、娘さんと付き合ってるってほざいた根性買ってやって…。智喜を許してやってくれねえか」

「よせよ！」

笑って、親父が親父さんの背中を叩いた。

「いい男じゃねえか！ 智喜みてえな野郎が佐紀の彼氏で良かった。俺は何も出来ねえ親父だった。俺が言うこっちゃんえが、佐紀の事…宜しく頼むよ」

涙する智喜…。ここで終われば美談で終わる。そろそろ、俺の頭にお袋の顔が浮かぶ。

「智喜、智喜。誠に酌しねえか」

「はい、失礼します」

「で、智喜…。おめえ、佐紀とは…遠距離なの？」

「あ！」

漸く、自分の失態に気付いた智喜が俺を見た。ついでに、他四人も俺を見た。出た！ 最後は俺頼みになるんだよな。ああ…。しよつがねえなあ…。てか、勘弁してくれよ。本当もう…。わ、分かった！ よし！ いいやいいや。ま、まあ、いいや。言うか。

「親父…。その事なんだけどさあ…。あ、姉貴の奴…こつち帰って来てんだよ」

何れ、お袋と姉貴の間を埋めなきゃいけないと思ってた。でも、俺だけじゃ無理。諦めた。

69は夫から終わらせた。唇を素手で拭き、私は夫に抱き着く。ガソリンが充満された子宮。もう発射を待てない。夫に覆い被さり、チンコを掴んだ私。直ぐ様、チンコを膣に収め、存分に腰を振るった。お、奥にあ、当たるう…。堪んない…。髪が邪魔になり、適当に掻き上げる。まだ邪魔。面倒臭いから、馬乗りのまま素早く束ねた髪を手首にはめたヘヤゴムを抜いて括る。これで大丈夫。私は猛威を取り戻した。下から夫がクリを弄る。こ、これ、好きいい…。更に威力を増す腰。息は荒かったけど、全く疲れなんて感じなかった。

「クフウウイアアアクアアア…タケルウウウ…愛してるううう」

「愛してるよ。彩…。じ、自分で弄ってみる？」

夫がクリから指を離すと、腰の動きが緩まった。自分で？自分でクリを？入れられながらオナニーを、今だかつて経験がないオナニーを夫に見せる。夫婦に躊躇いは禁物。恥ずかしくって仕方ない。でも…夫に初めてのオナニーを見せたい願望に羞恥心は勝てない。

「やり方…教えてくれる？」

「勿論」

その瞳…。マジ反則だよ。私はクりに指を…。

緩やかな曲線

愛し合っている時にしか絶対無理。だから、したい。中指をそつとクリに触れさせた。感想？ 昔々、お風呂の中で好奇心に駆かれ、ちよんと触れた事はあるけど、その時よりも大きくなっているような…。夫から慣らされたせいだろうか？ 昔、触れた時のように、ずきんと肩が上がらない。恐ろしいほど、ぬるぬる。豆をぬるぬるにさせた、所謂、何だろ？ 納豆みたいな…。いや、納豆の粒ほど大きくないから、わ、分かんない。夫に、教えてね、って頼んだんだけど、まだ黙ってるスケベな夫。仕方ないから…。取り敢えず、こんなもんかなって、ぷにゅぷにゅしてる自分が怖い。けど…。き、きき気持ちよ、よくうつつ…。な、何か…。

「喋ってくんない!？」

完全に目を開けて、私は夫を見下ろした。

「い、いやいや、教えようかって思ってたら、彩がどんどん先に進んじゃうからさあ」

た、確かにそうだけど。

「一生懸命やってんだから、評価くらいしろよな!」

評価って言い方に、厭らしさを感じた私。指を止め、額に手を当てて笑いを堪える。

「お、おうおう。んなクスクスしたら中でチンコがキュッキュッキュ引き吊る! なんだよ? 評価ってよ」

堪えられない。

「バツカ！ もう！」

夫の胸を叩く。夫がイッテ！ と声を上げると同時に、私は夫に倒れ込んだ。

「上手くやってたんで言う事なかっただけさ」

赤らんだ夫の胸に唇を着ける。夫は私の髪を撫でてくれていた、

「ほんとにい…？」

「うん。そんな難しくないだろ？ ほら、ホテルで、彩が擦り付けてたろ？ あれと一緒にだよ」

「あ、あれは、タケルのチンコにクリを擦り付けてただけだから。やっぱり、指で弄るのは違うよ」

夫の胸から上げた唇。夫の唇に落とした。

「じゃ、指でするのは初めて？」

「決まってるじゃん。んなの一人で出来ねえよ。それに、私にはタケルがいるんだから、一人です…：…必要ないしさ」

私の唇の中で、夫が笑う。

「したくなったらいつでも言えよ。俺はいつでもOKだから」

私は夫から唇を上げた。

「分かったあ」

「でも…今日は彩のオナニー見てみたいよ」

私の頬を撫でる夫。その透き通った瞳には勝てない。軽く落としたりキス。私は笑顔で、うん、と頷いた。

美容師を辞めて都内から地元に戻って来て、一人暮らししながらキャバクラで働いている。俺は姉貴の状況を親父と親父さんに話した。

「タケル、それ…お母さん、知ってんの？」

口近くで、親父さんは猪口を静止させていた。

「それが…姉貴に口止めされてて。お袋にはまだ」

智喜と同じように、俺は俯いた。

「心配すんな。裕子に喋ったりしねえよ」

お猪口に手を伸ばした親父。親父さんが酒を注いだ。

「俺が心配してんのは裕子と佐紀の親子関係だ。何れはバレる事。キャバクラがいけねえって言ってんじゃねえけど…バレる前に佐紀から裕子に話した方が、勝手に美容師辞めた事も含めて裕子も聞く耳持つと思うんだ」

確かに、親父の言う通り。でも、姉貴がまごついてる以上、無理だろ。お猪口の酒を飲み干す親父。今度は彩が親父に酒を注ぎ、二人は静かに笑顔を合わせた。

「まあ、タケルも知ってると思うけど、あの二人は性格が似てるんだ。似てるもの同士は普段仲良いんだけど、一つ食い違つと、もうお互い引かねえ」

苦笑いしながら親父さんがお猪口を空けた。

「分かるよ。うちのアカチャンとこいつも一緒。な？」

酒を注ぐ彩に尋ねる親父さん。女3人が笑いを溢した。

「そ、そうだね。私もお母さんと仲良いけど、喧嘩になると口説くなる。でも、夫婦喧嘩よりはましだよ」

「何言ってるんだよ！」

彩の返しに、皆の笑いが揃った。

「喧嘩するってのは…それだけ仲が良いって証拠だよな？」

美紀が隣に座る雄二に顔を向けた。また幸せそうに頭を撫でる雄

「お前らも喧嘩すんの？」

親父が向かいに座る二人に視線を振りながら言った。

「するする。大概は、俺が謝っちゃうけどさ」

「弱ええな。おめえ」

親父が微笑んでお猪口に口を着けると、美紀は肩を窄めて舌を出した。

「じゃ、雄二は俺と一緒にだな。俺もアカチャンに謝っちゃう方だから」

親父さんが言うつと、また皆クスクスとやりだす。

「でも、一番、喧嘩激しいのはこの二人」

由美が俺と彩に顔を向けると、雄二、美紀、智喜が笑いながら何度も頷いた。親父さんのお猪口が止まった。

「おめえらもするんだあ？」

「するする。彩が頑固だからさ」

「違うよ！ タケルが頑固なんだよ！」

「なに言ってるんだよ！ おめえに比べりゃ、俺なんて可愛いもんだっての」

「自分で自分を可愛いなんてよく言えるよね!？」

「ほら、いつもこんな感じだから」

また由美が俺と彩に顔を向けた。

「でも、仲良いんだよねー」

由美が顔を斜めに向けると、俺と彩は苦笑いを俯かせ、また皆の笑いを誘った。

「しょうがねえ。奴らだな」

親父さんは呆れ笑いに酒を流し込んだ。

「可愛いもんだよ」

親父もお猪口を空けると、智喜が二人に酒を注ぐ。智喜の横顔を眺め、俺は極最近の智喜を見返していた。そう言えば…。

体育館裏、卑猥な話が途切れ、熱った顔を冷やしにかかった俺達三人。立てた片膝に肘を乗せた智喜が前日降った雨でまだ湿り気を残す裏庭に視線を移しながら、「タケルのお袋さんて…どんな人？」と、やや恥ずかしそうに聞いてきた。俺だって、雄二だって、誰だって彼女の親に興味を持つ。しかし、実の親がない智喜にとつて、自分の彼女の親とは一般的な興味を越えた存在だと思った。

「お袋？ 俺が言うのもなんだけど…不思議な人だよ」

智喜の視線が俺達に戻った。意外な答えだった様で、大きめに目を開いた智喜。微笑んではいたけど、やや驚いていた。

「怒ったと思ったら、もう笑ってる、笑ったと思ったら、もう泣いてる不思議な人だよ」

後ろ手を着く俺に、雄二が笑顔を頷かせた。

「智喜…。姉貴に何も言わなくていいから、今度、お袋いる時、家に遊びに来いよ。俺とおめえの間には姉貴はいねえからよ」

「お、おう…」

智喜は照れ臭そうに微笑んで首を撫でた。

姉貴の事もある。お袋と雄二みたいに、智喜もお袋と…。俺がやんないとな。

「脚を大きく開いて…上体を後ろに」

「うん」

素直に従う妻。繋がったままの状態が開かれた長い両脚の谷間から俺のチンコをくわえ込んだ程好い毛量の柔貝と小さく潜んでいた桃色の真珠が曝け出された。艶やかに彩られた妻の可愛らしいクリ。枕の下に両腕を敷き、その結合を眺めただけで、俺の汁が妻の中で少々先走る。

「彩…。その体勢で、さっきみたいに弄れる」

「う、うん。やってみる」

何時までも、何処までも素直な妻は目を閉じたままクリに中指を合わせた。

股間の底にまだ溜まっていた羞恥も解放された両脚と共に消え失せた。もう後は全てを夫に見せ付けるのみ。クリに乗せた私の中指が周回を始めると、二人しかいない真夜中の秘室に、およそ似つかわしい吐息と粘着性のある音が漏れる。目…目なんて開けて…られない、ない私。中指の蠢きが速くうっ、っ、強くななるうっ…。夫のチ、チンコにな、中指がああ…当たる度に…つな、繋がってるじっ、実感がああ…。ヤヤヤバイ！こ、声だだ出してええ、いいいんだよねええ？

「ウクアー！ かか、感じるうっ…タケルウウウ…」

指が止まらない。より深い暗闇に私は堕ちていく。

「智喜…。分かった。姉貴がどう言おうが、俺がお袋に話す。姉貴ももつ二十歳だ。理由はどうあれ、お袋も姉貴の自由認めるだろ。おめえの事もお袋に話しておくよ」

頂垂れる智喜。目が合った彩が頷いた。

「おう、ちよつと待て。タケル」

親父さんが空のお猪口をテーブルに戻すと、場が静かになった。

「そいつは…タケルの仕事じゃねえな。そいつは…お姉ちゃんの彼氏、智喜の仕事だ。タケルも雄二も彼女の親に筋通してんだ。智喜も一緒だ」

親父さんに顔を上げる智喜。久しぶりに智喜の真顔を見たような。

「おめえは彼女の親父、彼女の弟に筋通した。なら、次は誰だ？彼女のお袋さんだろ。てめえの彼女がお袋さんに話し辛かったら、おめえが仲持つてやりゆあい。そいつがおめえの男としての仕事だ」

天井を見上げた。なるほど…。そうすりゃ、お袋に対して智喜の株も上がる。そっちの方がいいな。俺は智喜の肩を叩いた。

「智喜。出過ぎて悪かったな」

不安そうな笑顔を浮かべる智喜。大丈夫かあ？ ま、何でも力に

なる。俺が親父さんに酒を注ぐと、俺の性格をよく分かってくれる親父さんが笑って頷いてくれた。にしてもよく飲む二人だな。親父のお猪口に酒を注ぎきると、俺は徳利を振った。

「親父さん。どうする?」

「おう、二合貰おうや。お猪口…」

思わず、俺は雄二と顔を合わせた。余計な事を聞いたかな?

「和巳。男どもの分貰つとけよ。こいつらにはビールや酎ハイなんて可愛らしいの似合わねえよ」

親父がお猪口を空ける。

「よし! いこいこ。じゃ、二合じゃたんねえな。三合だ」

親父さんが由美を見た。

「お猪口も三つ追加ね。注文してくる」

由美がテーブルを立った。結構、飲まされるのかなあ? 俺は不安を右、左、雄二と智喜に振った。

妻の腰がクリをこねる中指にくねくねと揺らめかされている。時折、妻が眉間に力を込めると、俺のチンコが妻の膣内でくきゅっと

締め付けられた。

「タケル…。ど、どうなってるうつつ？ わたしいい…」

目を閉じる妻。周回運動での最中、いつの間にかヘアゴムが外れ、髪を振り乱している。ぬるぬるのチンコから潤滑油代わりに愛蜜と我慢汁の混合液をさりげなく中指で掠り取り、クリに塗りたくる。そんな妻に教える事は何も無い。

「いいよ…。上手いよ…。彩…」

ここまでしてくれる、見せてくれる妻。結婚して良かった。保護皮から突き出たクリが中指に押し上げられ潰されそうになってる。それでも健気に持ち前の弾力性を発揮し、中指からくにくぶちゅと滑って顔を出す桃クリ。そこいらの女ならともかく、妻だから下品さなんて微塵も感じない。両脚を広げ、悶えながらも堂々と自慰を見せる主婦の風格は尊敬に値する。どれだけの奥さんが旦那の為にここまで披露するんだろう。何の工夫も努力もしない怠慢主婦は旦那から飽きられて欲情の対象外にされてるのにも気付かず、単に旦那の精力が低下したと思いついて、退屈なセックスの夫婦生活を送ってるに違いない。つくづく彩が女房で良かった。男を凡ゆる面で幸せに出来る女房だから、男はその数億倍、いや、それ以上、女房を幸せにしようと思ふんだ。それを分かかってない独り善がりの女が、主婦がこの世には多過ぎる。精々、不幸せになってくれ。幸福感に抱かれ、まだまだ揺れてくれている妻を見上げる俺。妻は俺の命より大切な存在。

夫のチンコと私の指で粘液にまみれた愛欲。私だけが満足してる

んじゃないかな？

「フアウウアウウ…」

夫は感じてるのかな？ 空気に染み入り、また滲み出す呻き声中、ゆっくり、怖々と目を開けた。タケル…。消えそうな輝きを保ち、柔らかく緩やかな曲線を放つ夫の瞳が私を包んだ。湿った唇が夫に落ちる。私は絶頂の準備に入った。

俺の胸から顔を上げた由美。

「どうしたんだよ？」

肩を揺すつても白い息と涙以外は出て来ない。

「立てるか？」

鼻水を啜りながら由美は頷いた。由美の両手を掴んだ俺。慎重に由美を立たせると、由美は力なく俺の胸に倒れた。相当を通り越してる。

由美の肩を抱き、寂れたネオン街から高架を潜り抜け、駅に向かって歩く。二人の白い息が舞い上がり、時折の信号待ちで、奮える由美の二の腕を擦って暖めた。ひくひくと涙を溢す由美。とても、まともに話せる状態じゃない。全く意味が分からず、由美の肩を抱いたまま駅前のコーヒーショップに入った。

直ぐ様、テーブルにハンカチを投げ出す俺。凍てつく寒さで由美の涙は殆ど気化し、アイシャドーが滲んで頬がくすんでいる。らしくねえ由美。店員が来て、俺はコーヒー、由美は消え入りそうな声でミルクティーを注文した。マジ、らしくねえ。由美の涙を見るのはこれで二度目。いい加減にしろよ。マックで恥ずかしそうに俯いて隠した涙を見て、俺は気丈な由美の意地を感じた。恥を捨て、すがり付かせる二度目の、この涙は由美姉さんらしくなく動揺を誘う。どうすりゃいいんだ。テーブルを挟み、二人は他の客の会話が飛び交いざわめく店内でまだ沈黙のまま。窓越しに眺めた街に冬の塵が舞い始めた。もう冬休みも終わりか…。俯く由美の横顔が雪に似合うってのもらしくない。おお、雪だ、て言っても、多分、由美は無反応だと思い、言うのを止める。コーヒーとミルクティーが運ばれて来た。話してみよう。

「で、何があつたんだよ？」

固く口と気持ちを閉ざす由美。悲壮を越えた無表情。いい加減にしろよ。心配で堪らなくなった俺が多少苛立つと、テーブルが微かに震え、気が付いて握り拳を膝に移した。

「心配してんのが分からねえのか？ いいから話させて」

無表情の由美。また涙が頬に零れる。

「可愛い顔が益々黒くなって台無しだったの」

いつもなら、ぐすつと笑う由美。俺のハンカチで涙を拭いた。

「タケル、怖いよ」

苛立ちを見破られていた。鼻を嚙りながら、漸く、由美が喋った。取り敢えず、安心の溜息を吐いた。

「怖いのはこっちだよ。声掛けて近付いてみりゃあ、息なり、胸貸してって泣き付かれてよ。あんな薄気味悪い駅裏で、何やってんだよ?」

また鼻を嚙り、口を尖らせて、由美は横を向いた。

「なあ…由美。いつからそんな女の子ばい仕種するようになったんだよ?」

俺は、「私は女の子だよ!」って叫ぶ由美を期待した。

「女の子かあ…」

ティーカップを両手で包む、どうやら期待外れの寂しい由美。

「女の子止めたくなつたよ。何が楽しんだよ? 女の子つて。今度、生まれ変わって来る時には、ちゃんと付けて出てきてやるよ」

面白い事は面白いが、先ず、笑えなかった。

「由美…。生まれ変わるうがどうしようが、や、約束はま、守って貰うぞ」

舌が上手く回らず、コーヒーを一口飲む俺。不思議に苦くない。

「言えよ。何があつたんだ?」

「タケル…。ありがとう。ちゃんと言うよ。タケルと約束…」

由美の声が籠もり始める。

「約束したんだから。タケルにはちゃんと話すよ」

紅茶にミルクと砂糖を入れ、スプーンでかき混ぜる、由美の指を見詰めていた。

「私…」

ゆっくりと視線を上げる俺。コーヒーの湯気の向こうで、由美の唇が奮えていた。由美の声は小さく聞き取り辛かったけど、由美の言葉は、はっきり聞こえた。コーヒーの湯気が溜息で消し飛ばされ、またテーブルが震えだす。

「あの野郎か？ あのコンビニの…コンビニのオーナーか？」

顎先に溜まる雫。俯く由美の無言がその答えだった。

「あの野郎…。殺してやる」

由美が顔を上げると、顎先の涙が由美のカップの中に落ちた。

「だ、だから、タケルには言いたくなかった。あんた優しいから絶対怒って逆上すると思ったから。でも、でも、約束だから。あんたと私の…」

窓の外を眺めながら鼻で笑い、余りにもふざけた話に呆れてみたものの、そんなまやかし行為で自制心を保てられない。逆上？ 上等じゃねえか！

「でも、安心して。もう終わったから。さつきね。16の小娘と別れんのにラブホなんか選んじゃがってさあ。らしい奴だよ。札束入った封筒渡しやがって。最後に思い出作ろって抱き着いて来やがるから、ふざけんなって、あいつの顔面に札束ぶちまけて、ホテル飛び出して来てやったよ」

俺を安心させようと、らしく気丈に振る舞う由美。必死で下手くそな笑顔を作っていたけど、また由美の顎先から雫がカップに落ちた。

「終わった！？ 何も終わっちゃねえよ！」

怒り任せに立ち上がると、背後に押された椅子が濁音を上げる。周りを気にする余裕なんて持てなかった。

「そいつんどこ行くぞ！」

「タケル……」

頬を濡らしながら啞然と口を開け、由美は千円札をテーブルに投げ出した俺を見上げていた。

「おめえのバイト先だな？ あの野郎がいるのは。あそこのコンビニでいいんだな？」

由美を残し、俺は店を飛び出した。

どんな時も、何があっても、

指の動きが速まるにつれ、私の子宮もタケルのチンコに速く揺らされる。うつつうつつ…。声か吐息が分からない。内部と外部に挟まれ、興奮の解放へ向かう。夫の唇から離れた私は再び髪を掻き上げ、止められない弄りを繰り返す。下から夫が突き上げてきた。

「タ、タケル…。わ、わ、私…。い、いきそつつう…」

気が遠退く…。もう私自身が何をしているのか、その事実が頭に存在しなくやった。そんなのどうでもいい…。

「い、いって、いいよ…。あ、彩…」

「う、うつつん…」

太股に力が入り、指がラストスパートを掛けた。

「こ、こりこりす、するつつ…。いいい、いくつつう！」

降り乱れる髪が唇に纏わりつく。激しい痙攣の後、アッ！と最後を漏らした私は乱れた呼吸を夫に倒した。髪を手櫛で梳かしてくれる夫に顔を上げられない。一潮去った直後は恥ずかしさを呼ぶ。今回、半分は自分でいったから堪んない。まだ息が荒いけど、こう言う時はこれしかない。

「何か喋れっつてんだよ！」

色気をかなぐり捨てた平手打ちを夫の胸に浴びせて顔を上げる。

「イテえな！ 本当もっ！」

「何か言えよなあ……」

そのまま唇を落としてやった。

「言えって……？ 感想言えばいいの？」

「いや、やっぱりいいや」

言われなくなかった。自分で言えと言ったくせに、女はいつも複雑。

「何だよ？ それ」

夫がまた髪を撫でてくれた。

「でも… 凄い可愛かったよ」

夫の左手は私のお尻の上に。静かに波打つチンコ。いきたての私は擦ったく腰を動かす。

「オッパイ吸う？」

「うん」

私はオッパイを持ち上げて夫の口に乳首を運んだ。夜はまだまだ続く。今夜は夫を寝かせない。

賑わいの輪がテーブルごとに作られ、話し声が騒音となって飛び交う昼休みの食堂。へー、意外意外、あいつら付き合ってたんだあ？
ねえねえ、今度の合コンさあ、格好いい子来るらしいよ。最悪、次の試合、一回戦目からシードだよ。他のグループに聞き耳なんか立てず、周りの連中はこれでもかとそれぞれの話題に没頭してる。真面目な話をする場合は静かな場所より喧しい場所の方が反って目立たず落ち着ける。それに、男三人が静かな所で顔を突き合わすとその雰囲気はどうしても女の子の話に俺達を仕向け、環境的に騒々しさが打ってつけの場合がある。

その日、必須の話題が何か分かってた俺達は誰が口火を切るかと、時折、牽制めいた視線を振り合うだけで、飯の間は周りとは正反対に静かだった。飯が終わる頃、さてと、やっぱ俺しかいねえのか、口火を切る決心をし、俺はパックのコーヒー牛乳を吸って口の中を潤した。

「由美からの提案なんだけど…」

ストローくわえたままのな雄二、スプーンを持ったままの智喜、二人が俺に顔を向けた。

「うーん、俺は…いいと思うんだけどよ」

牛乳のパックをテーブルに置く雄二。

「悪いなあ…。俺の為に」

智喜はスプーンを皿に返した。

「何言ってるんだよ。俺も雄二も、この煩わしさを乗り越えて女と幸せにやっつてんだ。にしても、どうして女つてのは、いつも提案するだけで、後は男に丸投げなんだよ？ 由美と首を縦に振った他二人も、あいつらどこにいるんだよ？」

思わず、周りを見回した。

「多分、弁当食ってんじゃないか」

現実味溢れる雄二の答えに真顔を向けると、雄二が呑気そうな笑顔で頭を撫でやがる。

「あ！ そうだ！」

雄二が頭を撫でるのを止めた。また下らねえ事言うんじゃないかな？

「今日、美紀が彩と一緒に裕ちゃんの店に髪切りに行くだろ？」

「何かそんなの言ってたような……」

ストローをくわえた。

「そんな時、俺も一緒に行くからさあ。さりげなく、裕ちゃんに、今度、タケルと一緒に新しい友達紹介するから、四人で飯食わねえって誘つところか？」

顔を見合わせる俺と智喜。

「い、いや、タケルは自分の親を誘い辛いだろうし。一面識ない智喜が息なり行っても、はあ？ って思われちゃうからよ。一番、ナチユラルなの俺じゃん」

たまにはいい事言うじゃねえか。雄二君。

「ゆ、雄二。そりゃありがてえよ。やってくれるか？」

彼女なら別だけど。正直、友達紹介するから飯食おうなんて大人びた事をお袋に言い辛かった。

「お、おう。ストーリー的にはこうだよ。俺が智喜って新しい友達にタケルのお袋さんってバリバリ綺麗なんだぜって話したら、凄い裕ちゃんに興味持って、是非、会いたいつて言ってたから、タケルは嫌がると思うけど、最近、俺、裕ちゃん飯食ってないからさ……」

「今度、ご飯食べに行こうよ」

カットが終わり、ショートシャギーになった美紀の髪。思わず見惚れ、可愛い過ぎじゃん、と言うと、もう恥ずかしいよ、と照れ隠しに俺の胸を叩く美紀。裕ちゃんはマジシヤンかよ？ 話す事を忘れかけた。ヤバイヤバイ……。頭を振って意識を取り戻し、店の待合室で裕ちゃんに段取り通り話をしようとした。

「こんな可愛い彼女がいるのに、こんなオバサン誘っていいの？」

白を貴重とした壁、艶々しい茶色のフローリングに楕円を帯びた
ベージュの椅子、八面ある鏡の間隔にはそれぞれ一輪挿しのカラブ
ランカ、ピアノ曲とフローラルな香りは癒しの媚薬。業種が違つと
は言え、お袋の甲高い声が鳴り響くうちのがさついた電気屋とは偉
い違い。相変わらずシンプルかつお洒落な裕ちゃんの店に入るなり、
裕ちゃんの明るい性格が美紀を巻き込んでくれた。

「いらつしゃい！ 美紀ちゃんね。雄二！ 可愛い彼女だね。おい
でおいで、髪切つてあげる」

美紀は何も言えないまま、裕ちゃんに腕を取られて連れて行かれ
た。

「雄二。後は…ママに任そ」

俺の肩を叩く彩と一緒に待合の椅子に座つた。

「私も心配なつてついてきちゃったけど、タケルの言う通り、何に
も心配いらなかったね。見て見て、あの嬉しそうな美紀の顔」

裕ちゃんと笑顔で話しながら髪を梳かされる美紀。安心の溜息で、
俺は背もたれに背中を着けた。

「取り越し苦労だつたよ」

「ママだから、なせる技だろね」

「ほんと、そう思うよ。佐紀姉と智喜はどうだろな？」

彩が笑いを溢した。

「タケルから聞いたけど、雄二がママを誘うんだってね。タケルの奴：自分の母親なら自分で誘えばいいのに。この前も、温泉からママが帰って来た時に、うちのお父さんが言った事なんて気にせずママに智喜とお姉ちゃんの事言っちゃえはって言ったたら、『もうちよっと様子見ようや』って、何か、タケルの奴、ママによそよそしいんだよね」

俺も溢した。

「俺もそうだけどさあ。男って、この歳になれば母親とは改まって話し辛いもんだよ。俺も家じゃ：お袋と喋んねえもんなあ」

「だから、母親の愛情が息子の彼女に流れるんだよね。私も将来そうなりそうだよ」

髪を掻き上げ、笑いなが頷いた。

「裕ちゃんを尊敬する彩なら、間違いなくそうなるね」

「彩！ ちょっとちょっと」

裕ちゃんが彩を呼ぶと、はい！ と彩は立ち上がり、俺に手を振って美紀と裕ちゃんに駆け出した。また裕ちゃん、俺の暴露しねえだろなあ？ 別の心配が芽生え出す。

「今度、私は私でママと彩と由美で女子会するからね」

彩と裕ちゃんに挟まれ、二人と腕を組む美紀。俺が居眠りしてる間に、もうそんな仲良くなってるし。カットの腕だけじゃない。裕ちゃんのなせる技だよ。

「こ、こつちも三人だしさ。智喜ってこれまた格好いい奴でさ」

「格好いいの…？ ならちよつと見てみたいね」

格好いいに靡いた裕ちゃん。

「で、いつ？」

完璧。

「今度の土曜でどう？ 裕ちゃんが店終わってから」

「う、うん。土曜なら、いいよ」

一仕事が終わわり、満足の笑顔が浮かんだ。にしても、そのショー
トシャギーは反則だろ。チンコ立つし。てか、立ったし。

妻同伴で美紀が初めてお袋の店に髪を切りに行く。やや緊張気味の美紀。昨日、お袋に言ったら、ほんとに！？ 楽しみい！ 美紀が来てくれるんだ、と、十代かよ？ て、突っ込みたくなるような

喜びよう。だから大丈夫だよ、と妻に言っておいた。別件もあり二人について行く雄二。取り敢えず…俺はパス。友達同士でお袋の店なんか押し掛けたくない。由美、智喜と俺は、智喜の補修が終わり次第、結果報告を受けに、妻達とマックで合流。それでいい。

教室で何もする事なく、鞆を抱えての頬杖。窓越しに眺めたのはオレンジに染り、生徒達の掛け声を響かせるグラウンド。何が楽しくて、あいつらは部活なんかやってんだろ？　そう思えば、生暖かい風が俺の髪を撫でた。

「ちよつといい？」

顔を上げれば由美。教室で話せねえ事かよ？　ポケットに手を突っ込みながら由美の背中に着く俺。久しぶりに、三階から屋上に繋がる階段に連れていかれた。

「何だよ？」

階段に座り込み仰ぎ見た高いコンクリートの天井。腰を落とした階段は、あの頃より柔らかかで温かだった。

「まずは、ごめんねって言いたかった。折角：今回、タケルは何もなくて済んだのにさ。『男三人でママに会えばいいのに』って。まさか、私がぼそつと言った事に彩と美紀も賛成するとは思わなかった。和ちゃんの計らいで、今回はタケルは何もしなくて済んだのにさ」

そんな事なら教室でも…。体をお越した俺。額に手を当てて笑いを漏らした。

「別に、謝るこっちゃねえよ。親父さんは後輩の智喜に激を飛ばし

ただけだよ。親父さんも分かっている。俺が入らなきゃ話が進まないって。それに、姉貴の事は最終的にお袋から俺に確認が入る。なら、最初から話に絡んでた方が良さ。俺が気を揉むのは智喜の事だけ。あいつが姉貴と上手くいってくれりゃあそれでいい」

階段に後ろ手を着き、今度は由美が天井を仰いだ。

「タケル…。最近、疲れてない？ こう続け様に色んな事が起こるとさ」

由美が体を起こした。そんな悲壮な顔すんなよ。やせ我慢。妻に通じても由美に通じるか？

「疲れてなんかねえよ。毎日、楽しく過ごしてるよ」

笑って言ったけど、由美の真顔は揺らがない。

「嘘つき」

由美は顔を伏せた。やっぱ無理か…。

「あんた優しいから、私達に心配掛けないように、ぶっちゃけ言わないだけでよ。彩にはなおさら言えないよね。彼女に言えない事は私が聞いてやんなきゃって思ってただけど。今回は…私がタケルに負担掛けたよね」

顔を上げた由美。泣いてなかったから安心した。

「負担？ 仲間の為にする事さ。負担なんて思っちゆないよ。俺は平気。俺なんてどうでもいいから他の奴ら心配してやれよ」

由美の背中を軽く叩いた。

「やだよ」

俺から目を背け、漸く微笑んだ由美。

「男って意地っ張り。特に、タケルはね。彩にも言えない、タケルの我慢を聞いてあげられるのは私だけだと思ってるから。あんたを一人ぼっちにしないのが私の役目だよ」

由美に背中を叩き返された。俯いた苦笑いで照れ臭さを隠す俺。

「由美も…。最近、どうよ？」

「どおよって？」

膝を抱えて、由美はキョトンと俺に顔を向けた。

「あれから…。だよ。あの時…。おまえの言った事。マジ、男、作んねえのかよ？」

少しの間も空けず、由美は可愛い笑顔を頷かせた。

「モテるのに…。勿体ない」

両肘を階段に着き、投げ出した両足を重ねた。

「それは…。いくらタケルでも変えられない私の決心。あ！それが一番タケルの負担になるかもね。でも…」

膝を抱えながら、由美は笑顔を沈ませた。

「お願いだから、そこだけバカでいさせてよ」

肩を奮わせ、由美が涙を堪えている。

「そうやって、由美は何でも素直に返事してくれるよな」

少し鼻を噉り、由美が俺に顔向けた。

「もう約束なんての超えて、タケルには自然に何でも答えられるようになったよ。あんたといえるだけで安心する。と、同時に…不思議なもんだねえ。あんたの事が何でも分かるようになってきたよ。意地張らないで、私には正直になんな。あんた…かなり弱ってるはずだよ」

明らかに無理して笑う由美。まだ俺はやせ我慢を続けた。由美が言うように男の意地？ そうだろな。多分…。

「弱ってる？ まさか。心配してくれんのは嬉しいけど、さっきも言ったように、俺は至って元気だ。彩に聞いてみるよ」

黙って俺を見詰める由美。何でも話すって約束したのに…。由美の視線がそう語ってる。その瞳から一滴落ちた。ここでまた女の武器かよ。でも言えない。卑怯な俺の罪悪感が投げ出していた両足を引っ込めさせた。

「ああ…。確かに、ちょっと、寝不足なだけで、一日ぐっすり寝たら、もっと元気になるよ」

髪を掻き上げ、笑顔で取り繕う。

「ハンカチ、見せな」

俺から笑顔が消えた。透明感のある無表情、真っ直ぐな視線のまま言った由美。もう一滴、由美の瞳から流れる。

「あんだ……。今日、うちの教室横切って何度もトイレ行ってたよね？ 私が泣いたら、直ぐにハンカチ取り出すあんだが今日に限ってハンカチ出さない。ハ、ハンカチ、見せな」

また無理に笑って、由実から視線を逸らした。

「忘れたんだよ。今朝、寝坊して焦ってハンカチ忘れてさ」

鼻を擦ってしまった。

「いい加減にしろ！ おめえ！」

怒鳴った由美。正直、妻より怖い。小さな体を俺に覆い被す由美は俺のジャケットのポケットに手を突っ込んだ。

「止める！ 何すんだ！」

「ふざけんな！ 出せ！」

女の子相手に本気で抵抗出来ない。由美はポケットからハンカチを引っ張り出した。

「何これ？」

血に染まるハンカチを握る由美の手が奮えていた。俺は何も言えずに俯く。

「何これって聞いてんだよ！」

そのハンカチを俺の胸元に突きつける由美。唇も体も奮えてた。

「鼻血。授業中、興奮しちゃってさ」

往生際の悪い冗談が由美に通じる訳がない。真っ赤に染まるハンカチがまだ俺の胸元で奮えていた。

「タケル……」

小さな声に合わせて顔を上げる。濡れた瞳が俺の言い訳を消し、迫る吐息が俺の脅えを包み込んだ。

温かいものが俺の首筋に絡んだ……。何すんだ？ 温かいものが俺の唇に着いた……。これって？ 温かいものが俺の舌先に触れた……。え？ 動きが取れない空白。はあ？ 女って何でこう突拍子もないんだよ？ 啞然の中で静かに開く由美の瞳。

「嘘つき。血の味がするよ」

俺の頬を撫で、由美は自分の額を俺の額に残していた。

「大丈夫だって」

残り香に酔いそうになり、無理矢理、意識を我に返す。ハンカチを引ったくった俺は慌てて体を離し、由美に背を向けた。

「こんなの大したこっちゃ」

「バカ！ んな訳ないでしょ！？」

背中に感じる由美の重みと息遣い。

「びよ、病院行ってよ。お、願いだから…。夕、タケルにもしもの、もしもの事あつたら…。わ、私…。うちのママの病院、病院行く。タケル…」

「由美…。俺もおまえのバカ許してやる。だから、おまえも俺のバカ許してくれ。こんなんで病院なんて行ってみる。入院しろなんて言われてみる。智喜と姉貴の事…。俺がやんなきゃ誰がやんだよ！？ お願いだから、彩には…。彩には内緒にしといてくれ。あいつに心配かけたくないんだよ。。これが終わったら必ず病院行くから」

何て、バカな奴。私の比じゃないよ。彩に…。心配かけたくないばかりに…。仲間に体張るって自分の体がどうなってもいいの？ 私の涙と上擦る息がタケルの背中に染み込んでいく。

「無理、無理だと思ったら…。またこんな事があつたら…。必ず、私に言つて！ 彩にも…。皆にも…。言わないから、私と病院行くんだよ！ 約束、約束して！」

「約束する。無理はしねえよ」

血吐いとして、何が無理しないだよ？ 怖さをタケルの背中にし
がみ着かせいた。

「由美…。気持ち良すぎなんだけど、おまえのオツパイ」

ん？ 胸元に目を落とした。

「ギャー！」

こいつだけはこんな時に露骨に言いやがって！ 慌てて、タケル
の背中から体を離して胸を両腕で覆った。頭を撫でながら、タケル
が私に振り向く。

「で…あのキスは…？」

「もういっての…！」

胸を覆ったまま、体を丸くした。かなり赤面してたと思う。

「チエ、チエツクしただけだよ！ あんたが嘘つくからさ」

「大胆なチエツク方法だな。口の中に血の味が残ってるもんかねえ
？ あれ吐いたの昼飯の後だったけど…。んな残ってるもんなんだ
なあ」

残ってる訳ないよ！ 何て言えない。

「そ、それも…皆には絶対内緒だからね！」

「決まってるんだろ！ 二人の…秘密さ」

小さく丸くなった私を抱き寄せるタケル。またこいつ優しいから…。夢中で私はタケルを抱き着いた。またオツパイもくつついてたけど、どうでもいい。優しいタケルは自分が病んでる事を絶対、彩に言わない。どんな時も、何があっても、彩を守るタケル。なら、タケルは、どんな時も、何があっても、私が守る。

「そろそろ、智喜の補修が終わる時間だ。行こ」

「うん」

絶対、私が守る。

別世界

夕方、帰宅ラッシュ前、駅に程近いマックは昼間と比べて空いている。いつもならセットを注文するレジカウンター。オレンジジュースのスモールだけ注文した俺に、食欲ねえのかよ？ と智喜。ああ、と何気に答えると、智喜の背中から心配そうに顔を出した由美と目が合った。大丈夫だって…。作り笑顔を送っても、由美は表情を変えてくれない。心配すんなって…。

レジカウンター横の階段を上がると、窓際の奥角のテーブルから、先に来ていた妻、雄二と美紀が手を振る。さりげなく由美を見たのは智喜と教室で会った時と同じ『内緒だ』の念の為のサイン。それよか、おお！ 美紀が一段と可愛くなってる。俺達の注目に気付いた美紀は、はにかんだ笑顔を隣に座る雄二の肩に被せた。勿体ねえよ。雄二には。

「美紀い！ 可愛すぎじゃん！」

前のめりになる由美の第一声に美紀が雄二の肩から顔を上げた。見せて見せて、と由美が雄二越しに美紀を手招きする。美紀は雄二と席を入れ替わり、そりゃ自分の彼女が皆に誉められりゃうれしいよなあ、ニヤニヤ照れる雄二を窓際に追いやった。

「マジ可愛い！」

美紀の髪を撫でる由美。マックに入って階段を上がるまでの暗い表情でなくなった。

「ママのお陰だよ」

美紀が俺のお袋の事を「ママ」と呼んだ美紀。妻と目を合わすと、妻の笑顔が頷いた。口では、大丈夫だ、と言っておきながら、ほっとした安心感に包まれ、俺の膝に置かれた妻の右手に自分の左手を被せる。いつもより妻の手を温かく貴く感じた。ありがとう、と耳元で囁く。より近くなった変わらぬ綺麗で優しい妻の笑顔と瞳に、らしくなく泣きそうになった。気分を変える為に、雄二！と斜め向かいに座る幸せ野郎に上げた顔を、感想は？と真向かいに座る美紀に向けた。

美紀の髪を触りながら、私はタケルに目を向けた。いつもの声色をタケルは無理して出してる。

「まあ…可愛いんじゃない」

雄二が恥ずかしそうに頭を撫でて美紀を見た。

「まあって事ないでしょ！超可愛くなったよ。美紀」

空かさず彩が言うと、雄二は顔を赤らめて肩を窄める。タケルが隣に座る智喜を見て、直ぐに視線を雄二に返した。

「どうなった？」

「完璧。今週の土曜に裕ちゃんと三人で飯食う事になったよ。新しい友達紹介するってしたら、裕ちゃん、ノリノリだったぜ」

俯き加減で話を聞いていた智喜が雄二に顔を上げた。

「雄二…。ありがとう」

「当日は俺とタケルが全面サポートするけどよ。締めるのは智喜だからよ。格好いいとこ見せてくれよ」

智喜はテーブルに向かって大きく息を吐き、自分の手の平にパンチした。

「おう、気合い入れてくぜ」

低音を響かせた智喜。

「あんた、喧嘩しにいくんじゃないだからさ」

私が見つ込むと、智喜は呆れ笑いする皆に、あ、ああ、ああ…、おどおどと顔を振り、首を撫でて苦笑い。

「それだけ気合い入ってりや大丈夫だろ」

タケルが隣に座る智喜の背中を軽く叩いた。タケルとまた目が合い、笑いが自然に止みそうになった。いけない！ 咄嗟に気持ちを立て直す。

「もう！ 気合い入れすぎてパンクしないでよ！ 智喜」

私は業とらしい顰蹙を作り、皆の笑いを誘い出した。彩はタケルの体の事を気付いてない。何とか私がタケルを助けなきゃ。

度々、沈む由美の表情。よく考えれば、久しぶりだ。由美のあんな顔見るの。ほんと泣き虫なくせに、いつも強がる由美。やつぱり、俺に似てる。妻が俺のオレンジジュースのカップに、オレンジなんて珍しくない？ ストロウを刺してくれた。いつも、コーラか烏龍茶。ただ微笑んで答えた。ママってさあ…。美紀がお袋の話をすると、智喜が、うんうん、と相槌を入れながら熱心に聞く。俺ももう少しお袋の話を智喜にしといてやるんだったなあ。姉貴もお袋の話なんてしねえだろし。また、むかつきが俺を襲う。うっ、と一瞬前のめりになりかけ、由美を見た。あっ、と言いそうだった由美に眉間を絞ると、由美は半開きの口をゆっくり閉じた。なんとか膝に力を込めてむかつきを堪え、妻を見ると、ねえねえ、ママって最高なんだよ、雄二、美紀、智喜とお袋の話に没頭してくれていた。気付かれてない。これでいい。六人でのいるのに、まるで…。裕ちゃんて、そう言うところ可愛いよね、雄二の声がする。俺、何か自信湧いてきた、智喜が言う。大丈夫大丈夫！ と美紀。絶対、智喜ならいけるよ、妻も応える。まるで、俺と由美が別世界にいるような…。別世界かあ？ そう言えばあの日もこのマックだった。カップを取り、ストローに口を着ける前、極々、小さい笑みを由美に送った。うん？ と皆に気付かれない程度に目を見開いた由美。フツ、いい感じかも。さあ、気分を戻そう。オレンジジュースを吸い込んだ。

「じゃ、そろそろお袋と姉貴の内緒話しよか」

「それ、肝心！ 聞かせろよ」

当然、反応し、俺の肩を手の甲で弾く智喜。

「この場に及んで内緒事なしだよ！」

妻が俺の膝を打つ。

「別に内緒事でもねえんだけど」

一瞬、タケルが私だけに笑った。あの日、あの時の事を思い出したのかな？ このマックには何度も来てるけど…確かにあの日は特別だったよね。タケルの空元気。とことん付き合ってた。さあ、私も気分変えよ！ ストローから口を外した。

「ちゃんと話しなさいよ！ タケル！」

明日はいよいよ俺達三人とお袋が…。少しだけ神経質になってる俺の為に、今夜、家に泊まってくれる妻。お袋と何をそんなに話す事があるのか？ 女同士の話は止まらない。止められない。最近、二人の女子会の場所はもっぱら俺の家。で、その後、妻が泊まっていくのがパターン。バイトが終わり、妻にメールを打つと、…今、タケルの家にいる。早く帰って来て…、度々あるこんな返事は疲れた俺に笑みを溢させる。俺があんまり喋らなくなったから、お袋も寂しいのかな？ 妻はそんなお袋を察してくれてるのだろうか？ 彩の作ってくれるご飯美味しいんだもん、とお袋。ママと話したら、楽しくて時間忘れるよ、と妻も言う。ま、勝手にしてくれよ、みたいな感じの俺。

平日でも週に二、三回は家で女子会してる二人。親父さんとお袋さんに、最近、彩が家に入り浸りになっちゃって…、と話しても、「んな事気にしてどうすんだよ。彩はおめえにくれてやったんだから

よ」「そうよ。私と和巳も若い時には同じ事してたんだから。それより、どう？ この髪。裕ちゃんにやってもらったの」「自分だけぬけぬけと裕ちゃんの店行きやがってよ。俺にも裕ちゃん紹介しろよな」と引き吊り笑う俺の前で全く意に返さず、いつの間にか、お袋の事を「裕ちゃん」と呼ぶ親父さんとお袋さんに気遣いは無用のようだ。

先寝るわ、と、風呂から上がった俺は髪を拭きながらリビングで話し込む妻とお袋に告げ、二階に上がった。あれから、吐血は来ない。もう二度と来ないのか？ また来るのか？ もしまた来たらどうなるのか？ 何で、ああなつまつたのか？ 全く分からない。とにかく、明日だ。部屋に着くと、開けっ放しなってるカーテン。首に掛けられたタオルと無造作に濡れた髪。俺の姿が窓ガラスに映ってた。何か歳いったみたい。カーテンを閉じた俺はテレビを付ける気分でもなく、部屋の明かりを消した。下から妻とお袋の笑い声が聞こえる。妻の幸せを守るのが…俺の責任。

「食わねえのかよ？」

タケルは私のトレーに顎を差した。

「お礼に…マック奢るよ」

「何も、お礼される事なんてないよ。いいよ」

タケルを下足場で捕まえた私。指に引っ掛けた鞆を背中に回し、タケルは何故か急いでる。

「じゃな」

タケルのバイトがない日くらい知っていた私はタケルの腕を掴んで真剣な眼差しを上げた。

「いいから来てよ」

「食欲ないんだ」

「そう。じゃあ、貰うよ」

私のかじり放しのチキンバーガーをトレーから取り上げてかぶり付いたタケル。吹き出して、私はオレンジジュースを吸った。

「元気になったな。やっぱり由美姉さんは…そうでなきゃな。あ、一つ約束するの忘れてた」

猛スピードでチキンバーガーを食べ終わったタケルが紙ナプキンで口を拭いた。

「あ、心配しなくていいよ。彩と雄二には絶対…」

私の話しの途中で吹き出したタケルは直ぐにコーラを吸った。

「それもまあそうなんだけど…もっと別のこったよ」

違う？ 私は恥ずかしくなって俯いた。

「な、何？」

タケルの薄いブラウンの瞳が私を捕らえた。

「この前も似たような事言ったけど、今後は、絶対一人で悩み抱えないで、何でも俺に相談しろ。彩や雄二に言えない事でも俺だけにぶつちやける。俺は全力で由美を助ける。それだけ約束しろ」

肩を窄めて微笑んだ私はタケルの真剣な表情に見惚れた。うん、とストローを指先で弄りながら笑顔で頷くと、タケルの瞳が柔らかくなった。

「タケルも…約束してよね。」

「何を？」

「タケルも何でもぶつちやけてよ。私に。今日みたいに…。学校で、私によそよそしくするの止めてよね」

タケルのカップがズズーツと音を出す。タケルがカップをトレ―に置いて私を見た。

「い、いつ、俺が…由美によそよそしくしたんだよ？」

視線を上下させながら、私は恐々話し始めた。

「い、いつって？ 昨日といい、今日といい、きつき誘っても断る

うとするし…。トータル的に見て、冬休み明けてからこの二日間…ぶつちやけ、何かタケル、私に変だったから。そ、そりゃ…仕方ないとは…思っけど…」

タケルが溜息つきながら私から視線を逸らし、なくなったコーラを吸い上げようとし、カップをカラカラ振ってトレーに戻した。

「ゴメン…。確かにそうだったよな。気をつけるよ」

タケルの瞳が溜息に霞む。

「い、いや、そんな…謝るほどの事じゃないんだけど…」

俯いたタケル。自分の首を撫でた。

「実は…よそよそしくなったのは…ちゃんと理由があるんだけど…」

またストローを弄りながら私は視線を膝に落とした。

「どんな…理由？」

「聞きたいの？ 言いたくねえんだけど…」

「言って！」

やや鋭くした視線と尖った唇をタケルに向けると、タケルは顔を上げた。

コーヒーショップを出た俺。興奮混じりの白い息が舞い上がる。冗談も程々にしろ！ スケベ中年が。誰の親友傷付けてると思ってるんだ！？ マジ殺してやる。

「タケルーツ！」

後ろから由美の声。関係ねえ。俺は振り返らなかった。

「まっ、待ってっ！」

はや歩きの俺に追い付いた由美は俺の腕を掴み、引き寄せた。

「止めても無駄だよ！」

由美の手を振りほどこうとする。小さな由美。その全体重を掛けて俺の腕にしがみついた。

「もっ、タケル！ 嫌だって！ タ、タケルを巻き込んだら、わ、私、生きてないよ！」

泣きわめく由美に、どうなってんだよ？ 俺の抵抗は消された。

「来て！ 来てよ！」

由美は必死に俺をビルとビルの間引き込んだ。

「タ、タケルツ！ もういいんだよ！ バイトも辞めたんだよ！ 終わったんだから」

俺の両腕をビルの壁に押し付けた由美。赤く染まった鼻と止めどない涙。見ちゃらんねえ。

「畜生が！」

見上げた夜空から下らなく舞い降りる雪。

「何がいいんだ？ こっちは大事な親友傷付けられてんだよ。何が終わったんだ？」

俺を見上げる茫然自失の由美。俺を押さえ付ける力が弱まる。

「タケル……」

ダウンジャケットに落ちる由美の雫を見ると、俺の殺気も消え失せた。

「分かったよ……」

ビルとビルの暗い隙間。由美と俺の白い息が舞い上がる。

「いつの話だ？」

顔に落ちる雪。不思議に冷たくなかった。

「1週間前……」

胸で凍える由美の小さな声を包んだ。

「寒く…ないか？」

少しでも暖めてやりたかった。

「タケル…。今晚一緒にいて」

白い息が止んだ。

「来ちゃったけど…別に意味ないからさ」

つい1時間ほど前に飛び出した場所。無節操？ 同じホテルに違う男と不自然…いや、話の流れ上なら自然に戻って来た私。

「初めてだよ。ラブホに入って女から意味ねえからって言われたのさ」

ピンクのソファアールに座り、ジャケットを脱いだタケルは来る前にコンビニで買ったおにぎりを頬張り、烏龍茶を飲んだ。

「ムードも何もねえ奴」

私は傍のベッドに腰を下ろす。

「風呂入れよ」

「タケルと一緒に？」

「バーカ！」

照れ笑いも出る。ベッドから腰を上げてソファーに移り、タケルの隣でコートを脱いだ。

「お、飲めよ」

タケルはコンビニの袋からミルクティーのペットボトルを取り出した。

「ありがとう」

「食わねえ？ おにぎり5個にサンドイッチも買ったからさ。遠慮すんなよ」

「買い過ぎだって」

私が笑うとタケルも笑う。

「あいつと一緒に食べたからね。夕御飯」

ペットボトルのキャップを捻るとタケルが溜息をついた。

「俺さあ。由美が一人になったら何しでかすかかんねえと思って…。それで、心配だったから、一緒にここ来たんだよ」

言われなくっても分かっていますよ。タケルに目を合わせず、ミルクティーを一口、二口飲んだ。

「俺、飯食って風呂浴びたら、このソファーで寝るから。由美はそのベッドであっただまって寝ろよ」

烏龍茶を一口飲むと、タケルは二個目のおにぎりを剥いた。

「私って…そんな魅力ないんだね？」

あっけらかんとしたタケル。意地悪な質問もしたくなる。私は業とらしく唇を窄め、横目でタケルを見た。

タケルとホテルに入る前、当然、彩の顔が浮かんだ。私はこれを一生の秘密にすると無言で誓い。別に、私が何も言わなくても、優しいタケルもこの事について一生口を噤むと、確信していた。要するに、計算高い私だったかも…。

「魅力？ 今、由美姉さんに出して欲しいのは魅力じゃねえよ。元気だけだよ」

タケルは軽く肘で私の二の腕を突いた。やっぱり優しい奴。水月と別れて一見どんよりと気怠くなったタケル。でも、感じる娘は感じるはず、「タケル君って、最近、優しくなって、また一段と格好よくなったよね」。最近、女子トイレで小耳に挟んだ。私もそう思う。タケルはまた一段と優しくなってる。そりゃこいつモテるわ。ミルクティーをがぶがぶと飲んだ。あー、美味しい！

「タケルってさ…」

ペットボトルをテーブルに置いた私に顔を向けたタケル。疲れたような、悲しいような、人恋しいような、一瞬見せたその瞳はとも16歳の男の子のものじゃなかった。前から思ってたけど、改めて見ると綺麗な瞳だね。薄いブラウン。

「な、何？」

「あ、いや、何でもない」

見惚れて言いたかった事を失った。何で見惚れなきゃなんないの？ ヤバいよ。私。またペットボトルに手を伸ばした。おにぎりを2個食べ終わり、タケルが立ち上がった。

「へっ！」

一瞬、ドキツとしてペットボトルを持ったまま身を引いた。

「おいおい、歯磨きだって」

ビックリしたあ！ てか、何でビックリしなきゃいけないの？ ペットボトルに口を着けた。

暫くして、落ち着きを取り戻すと、タケルが部屋から見えるガラス張りのバスルームに頭れてバスタブにお湯を張り始めた。それくらい、私がやるよ。私は慌ててバスルームに向かった。

「タ、タケル、いいよ。私やるからさあ」

バスルームに入った私はタケルの背中に向かって言った。蛇口から吹き出るお湯が湯気に変わる。

「もう終わったよ。ちょっと熱めにしといたから、お湯張れたら…先入れよ」

タケルはガラス越しにベッドルームを眺めた。

「俺は…トイレに籠っとくから」

バスルームに籠り始めた湯気。タケルが私に振り向いた瞬間、その湯気に薄いブラウンの瞳が透ける。その瞳に吸い込まれそうな気持ちと鼓動。ヤバいつて！ 肩を絞り、私は無理に視線をタケルから逸らした。

「出るぞ」

早く通り過ぎて！ 立ち竦む私は心の中で叫んだ。その叫び通りに、タケルが私を通り過ぎようとした。やっぱり行かないで！ 心の叫びが脆くも正反対に変わった。

「お、おい！ どうしたんだよ！？」

気が付いたら、私はタケルの胸にいた。もう無理…。

「今夜だけでいいから！ 今夜で全部忘れるから！ 明日になったら死んでも友達に戻るから…。だから…」

何言ってるの？ 私…。恐る恐るタケルを見上げたら、薄いブラウンの瞳に湯気が回り込みそうに…。

「由美…。俺…」

どうしても、その後を言っただけ貸して欲しくなかった。

「タケル！ ちょっとでいいから…唇だけ貸して！」

滲み始めた視界の中で、俯いて少し笑ったタケルの瞳が迫り、唇を上げた私は吸い込まれ、何も見えなくなった。タケル…。タケル

の唇がそつと私の唇に触れたかと思うと、タケルは強く私の腰を引き寄せてくれた。だから、私はタケル首に両腕を回した。タケルの熱い息。その中からゆっくりと温かい舌が私の口に入ってくる。もつと…。タケルの舌の導きで自分の舌を動かし始める私。夢中に重なりなり合う唇同士と絡み合う舌同士の音が私の鼓動とバスルームに響くお湯の音を越えて伝わり、私に安らぎを与えてくれる。欲しい…。首の角度を何度も入れ替え、その吸引と絡みを強めながらタケルの髪を掻き乱していた私はタケルの唇、舌、そして吐息から醸し出される卑猥な想像に犯されようとしていた。私…。タケルに密着させていた胸がまた激しく鳴り、その響きが確実に私の下半身、恥骨あたりを奮わす。揺らめいて…。薄く目を開け、湯気の中に細く浮かぶタケルの瞳を見てしまった私は完全に溶かされてた。濡れる…。抜けていく感覚が液体となって染み出し、更に激しくなる私の吐息をタケルが吸入してくれる。だから…。過去の男達なんかと比べるなんて馬鹿馬鹿しい。セックス以上の充実感。かつて経験した事がない絶頂感に包まれようとしていた。私…。も、もつと、ま、まだ離したくない。タ、タケルは答えて…。答えてくれたから、唇と、舌が熱く、は、激しくなつて、私、私の吐息も…。セックスでも…。いったことないのに！ 我慢なんて仕切れなかった私の体は反り返り、唇と舌を固くした私は必死にタケルの両肩を掴む。イツ、イクツ！ 真つ暗な空間で神経が痙攣する。途切れてしまいそうな息と初めての絶頂をタケルの中に送り込んだ。こ、これが、イクつて事…。消えそうな呼吸を繰り返し、倒れそうになっていた私の体をゆっくり起こしてくれたタケル。凄く静かに自分の唇を私の唇から離れた。

「あ、溢れてる」

うん。私…溢れてる。私を解放したタケルは慌ててバスタブに駆け寄りお湯を止めた。

「由美、足濡れてるって」

「あ、う、うん」

呆然しない私。お、おい、とタケルは私の腕を掴んでバスルームを出た。

「しょうがねえなあ」

洗面台の下にあったバスケットの中から、タケルはバスタオルを出して私に渡してくれた。

「出たら…トイレ、ノックしろよ」

バスルームからの湯気に霞むタケルの背中をただ見詰める私。どうなってるの？ トイレのドアがバタンと閉められた途端、私は意識を取り戻した。そりゃあいつモテるわ。曇り始めた洗面台の鏡に振り向いた。

「はっずかしい…」

小さく叫び、そのまましゃがみ込む。エッ！？ 何この感触。直ぐに立ち上がり、キャロットスカートのホックを外してジツパーを下ろすと、パンツの中に手を突っ込んでアソコをまさぐった。

「濡れてる通り越して漏らしてるよ」

私はスカートとパンツを同時に脱ぎ捨ててボーダーチュニツクのトップスとキャミも一緒に上半身から抜いた。

「これ洗わないと…」

パンツをキャロットスカートから抜く。

「ハンパない」

洗面台にパンツを置き、ブラを外してハイソックスを取り去って全裸になる。曇った鏡を手で拭いて鏡の中の自分を眺めると、何故か笑顔が溢れた。

「タケルの奴にいかされちゃった。にして上手いキス。あいつ、こんなところで勉強してんだろ？」

ブツブツの私。パンツを握り締めてバスルームに戻った。

溶かされて…溶かされて…

浅い眠りは、タケル…、体に伸しか掛かる妻の重みで覚まされた。

マツクから出て、じゃあな、皆と別れた俺と妻。別れる寸前まで、由美は俺に心配そうな視線を向けていた。大丈夫だって…。皆に気付かれない程度にウインク。

大通りを渡り、街路に入って10分も歩けば、俺の家に着く。

「ちょっと寄りたいところあんだけど」

交差点で信号待ち。手を繋ぐ妻に言った。

「どう?」

「ショッピングセンター」

「何か買うの?」

妻は何と言うか? プロポーズ直後は、そんなお金使っちゃだめ、と拒否られた。けど、今日はどうしても買いたかった。

「俺と彩の指輪買いたいんだ。指輪…やっぱりいるよ。買わせてくれ。彩が言ってた、その…お金じゃ買えない意味があるものはきつといつか見付けるから」

目の前を流れる車を見ながらいうと、妻の握力が強くなる。

「うん…。でも…あんまり高くないやつね」

肺に溜まった息を一気に抜きながら微笑んだ。

「そ、そりゃもう…。んな高いの買えないから」

「二つ買うんなら…タケルの分は私が出すからね」

「え？ いいよ。二つとも俺が…」

「結婚指輪ってのは二人で買わなきゃ意味がないの」

信号が青に変わった。

「ほら、行くよ！」

よく妻に横断歩道で手を引かれる俺だった。

お袋の晩酌に付き合わされていた妻。キスには微かにチューハイの匂いが混じる。暗闇の中に粘着音が響く。

「欲しいの…」

「うん…」

暗闇に目が慣れ始め、妻の輪郭、顔が浮かび上がった。

「夕方から三回もしたのに…」

「もっとしたいもん」

体が不調でも、何故かセックスだけは別腹。と言うか、セックスが薬なのかもしれない。事実、妻とセックスするだけで、全てを忘れられ、全てが癒された。

「タケルも…したいんでしょ？ 何か固いもがあたるよ」

それを確認されりゃあ、どんな男でも嘘は着けない。妻はトランクスの中に手を忍ばせ、タケル…とまた吐息を漏らして指でチンコの裏筋を撫で、愛してる…と俺に唇を戻す。キスを離さず、俺は妻の体を仰向けにして妻に覆い被さり返した。

「お袋が寝てるんだ。声は出せねえよ」

「いつもみたいに…唇で塞いで」

俺の髪を掻き上げる妻。暗闇の中で、妻の瞳と唇だけが光っていた。

夫の瞳がいつもより、きらきらと輝いてるように見えた。

「可愛いお揃いの指輪。タケル、絶対なくしちゃダメだよ」。何も言わずに頭を撫でて、ママに照れ笑いを隠した夫。可愛くて仕方ない夫だけど、夫はあまりママの事を私に話さない。明日は雄二と智喜も一緒だけど、私は少し不安。どうなるか、先が読めない四人の話の流れよりも、また違った不安が私を被っていた。

ショッピングセンターを出た後、お互い左の薬指に指輪を着けて、何か世界が変わったようで、見て見て！ と左手を開いて空に透かす私を、皆見てるよ！ と赤面しながら諫める夫。その優しい瞳は変わらない。タケルが買おうて言ったくせに！ 腕にしがみつくと、柔らかく私の頭を撫でてくれた。でも、やや言葉少なげに俯く夫から不自然さを感じた私。今日はタケルの家に止まるからね、と言うと、ああ、言いよ、と夫はあっさりと応えてくれた。私の取り越し苦労ならいいんだけど…。

「その代わり、明日の内容はお袋には内緒な。やっぱり、親父さんの言うように最後は智喜に決めさせてやんねえとよ。彩は…さっきの事頼むよ」

「任しといて」

でも…何か変。今日一日、夫と全裸で抱き合い、熱い愛情を子宮に得ながらそれを感じていた。夫と常に愛し合える、体を繋ぎ合わせる妻だから感じられる夫の異変。

私の手の中で、口の中で、膣の中で、脈打ち、うねる夫のチンコは変わらず健在で、私は頼もしく扱き、美味しく涎をからませて堪能し、奥まで当たる突進に何度もいかされたけど、ほんの僅か乱れる呼吸と随所で一瞬だけ止まる体の動きは何？ 何でもない事を願うだけで、私は何も言えない。

また私と夫は全裸になり、お互いを弄り、お互いの性器を口に着けようとする。夫の顔を跨いで逆さになった私。クリをリズムカルに弾く夫の舌も変わらない。私の口の中で、夫のチンコは相変わらず、いや、いつも以上に元気。そう、全て私の思い過ごしに違いない。

「彩のこ…美味しい」

こ、声は出せないいい…。吐き出されそうになった喘ぎを、ウフウフ、夫のチンコを強くくわえて我慢した。容赦なくクリを掻き上げる夫の舌捌きに負けず、私は脈打つチンコに舌を巻き付ける。ズーと吸う音ぐらいは許容範囲だと思ふ。少し固かった玉袋も私のマッサージで柔らかくなり、二個の可愛い玉を手の内ではせると、チンコの根元がヒクヒクと吊り上がり、尿道から美味しい我慢汁が私の舌の上に供給される。うん、元気元気。何にも問題はない…はず。ふうん…。夫の舌が私の会陰を這い上がり、肛門に差し掛かる。私も味わいたい。玉袋を引き上げ、夫の股間に頭を潜り込ませると、私に肛門を舐められ易いように、夫は腰を浮かせてくれた。同じように、私は玉袋と肛門の間（会陰）にチロチロ舌を這わす。気持ち…いい…。夫の言葉が私の肛門に響くと、温かな舌が円を描き、渦巻いて真ん中の穴に吸い込まれた。くうう…。チンポをくわえてない私はシートを握り締める。夫の肛門に舌が到着する頃には夫はクリをつま弾きながら、私の肛門を食べていた。懸命に夫の肛門に舌を纏わり付かせる私。もうその寸前になる。声だしと言う発散がない状態ではこれ以上無理。

「タケル…入れて…」

私の降参を受け入れた夫は私のお尻をぺたぺたと軽く叩いた。

夫の顔から降りると、仰向けだ、と夫。急いで、正常位の姿勢になり、脚を開けて、早くちようだい、準備完了。夫は私に覆い被さりながら、熱り立ったチンポをぐいっと中に。クワツ！と出そうになった発狂は約束通り、夫の唇に塞がれた。暗闇の中でもよく見える夫の綺麗な瞳が動き揺らめく。子宮に送られる夫の温かな愛情。声の代わりに普段より響く卑猥な音と私の鼻息。快感を舌の絡め具合で夫に伝える。確りと強く重なる唇と唇に音を漏らす隙間はなかったけど、その内部の音が私の鼓膜に響いていた。

「はいいてる…。はけふ…（愛してる…。タケル…）」

ちゃんと通じてるに違いない。

「はいいてるよ…。はや…（愛してるよ…。彩…）」

ちゃんと返してくれた夫に私はしがみつき、また激しく突き入れられるチンポに合わせて、くくくううくう…、私はより一層と舌を動かすと、私の頬に夫と私の混合唾液が流れた。鼻息も激しくなる中、夫の指がクリを捉える。そ、そんな、だめ！ 声も出せないのに！ 舌を引つ込めた私は奥歯を噛んだ。止まらない夫のチンポと指が私の絶頂を呼ぶ。夫もわかつていたようで、更に両方のスピードつけた。うううう…いい、いい、くううう…、沈黙の快感は夫の両肩に爪を立てさせた。夫のチンコも私の子宮口で爆発し、ふうくふうんくうう…、私の鼻息に同調して、熱く元気な夫の分身が注ぎこまれた。私は再び夫の口に舌を挿入し、その放出から作られる妻の特権と幸福に酔いしれ、私は完全に溶かされた。夫は…元気に決まってる…。

洗面器でパンツを洗い、シャワーで体を濡らした私。バスタブに張られた熱いお湯に飛び込んだ。

「死んでも、いかないと思ってたのに…しかも、セックス以外で…」

別に虚しくない、微笑みが溢れた独り言。私は親父っぽくバスタ

ブから両手を上げて顔を拭いた。

「タケルだからかな…?」

バスタブの縁に頭を倒して足を伸ばし、あんな頼れる奴もいるんだ…、と言葉に出さずただ思い、湯気が舞うバスルームの天井を見上げれば、広く浅い付き合いを繰り返していた自分自身が虚しく、情けなくなる。モテるからってそれ以上なにもない。

「もうやーめた」

広いバスタブの中、体を足元に向かって滑らせ、頭と涙をお湯の中に潜らせた。

冬の風が吹き付けられた体と髪を洗い終えた私は、ああ、気持ちよかった、と益々、親父っぽくバスルームを出て、体と髪を拭いてバスローブを羽織り、髪にタオルを巻き付けて鏡の前で、腰に両手を当て、首をぐるぐる回して息を吐く。歯ブラシをくわえ、ごしごし歯を磨き、蛇口から手で掬った水を口に含んで、ゲロゲロゲロ…ペツ。ああ、OK、と気取りっぱなの女の子捨てたらこんなもん。生まれ変わった私は色気なんて微塵もなくなっていた。搾ったパンツを、これいいねえ、と洗面台の端に歯ブラシと一緒に添えられていたシャワーキャップに包み、部屋に戻ると、コートのポケットに忍ばせた。

「取り敢えず、明日はノーパンかよ」

明日も寒くなるだろうけど、仕方ない。私は一人微笑んだ。そう言えば、どうしてるかなあ? あいつ。タケルが籠るトイレをノツ

クする。

「タケル、出たよ」

ん？ 無反応に不安になり、開けるよ、とドアを開けると、便座に座り、壁に体を横倒しにして居眠りしているタケル。余りにも可愛い寝顔に、ぐすつと漏れた。

「ありがとう…。タケルのお蔭でふっ切れたよ」

顔をタケルに近付け、お礼を囁き、まあ…いいか、みたいな感じで密かにキスしてやった。顔を離れた私に太股を揺すられたタケルは、ううん、と目を薄ら開けた。

「おう、由美…。今日も相変わらず可愛いな」

寝ぼけながらも呟いた、いつものタケルの台詞に安心する私。

「私…終わったからさ」

「ああ、そう」

「さっ、起きなつて。ほら」

タケルの腕を取り、一緒にトイレを出た。

「ちょっと、向こう向いてて」

よく考えたらヤバイ格好してる。ノーパンで太股見せて薄いローブ姿私はタケルを残し、急いでベッドに駆け込んで布団の中に体を

潜り込ませ、布団の中から顔だけを出した。呆れ顔と寝ぼけ顔、どちらとも言えない表情で頭を掻きながら鼻で笑うタケル。

「何やってんだよ？ 俺…今から風呂浴びるからよ」

「うん」

二人の間に沈黙が走る。

「いや、だから…」

真顔で恥ずかしがるタケルがまた愉快で、私は笑いを噛み殺していた。

「ああ、ちゃんと見詰めとくから、そこで脱いでいいよ」

はははは…、と白々しく笑ったタケルは直ぐに真顔に戻った。

「おもしれーけどなあ…。生憎、由美姉さんにお見せできるような立派な代物持ち合わせじゃねえんだ」

もう堪え切れない笑いを布団で押さえた。

「当分の間、布団に潜り込んで見ないようにしてて下さいよ。まあ、特等席で男性ストリップ見たい気持ちも分かりますけどねえ」

背後のガラス張りのバスルームに、タケルは親指を差しながら言った。

「分かった。分かりました」

笑いの限界を越え、背を向けて布団に潜り込み体を奮わせると、タケルの溜息が聞こえ、しょうがねえなあ、とタケルの足音が遠ざかっていった。ごゆっくりい。暫くすると、タンタンタンタン、と慌ただしいタケルの足音が近付いて来た。え？ まさか、こいつ、息なり私を…。慌てた私は布団を捲って体を起こし、ベッドに座り込んでタケルを見上げた。

「な、何なの？」

「おまえ、ブルー、使ったろ！？」

タケルの手にはピンクのバスローブが。何だ、ビックリしたあ！

「だっ、だつて私…ピンク似合わないんだもん」

「あれだけピンクの部屋にいて似合わないはねえだろ？」

「ピンクを眺めるのが好きなだけ。着るのは苦手なの」

「好き嫌いの問題じゃなくって…こう言う所じゃ、女はピンクで男はブルーって決まってるんだよ。俺にピンク着ろってのか？」

「大丈夫だつて。タケルはピンク似合ってる」

私はまた笑いに浚われた。

「しょうがねえなあ…。あ、それと…」

タケルが私から顔を背けた。

「な、何？」

「オッパイ…ポロリしてる」

「エッ!？」

胸に目を落とすと、前合わせのローブが開けて、左のオッパイがまともに露になっていた。

「ヤッ!」

反射的に布団を引き上げた私。見られたあ…。タケルがお風呂から出るまで、私は布団中に潜り続けた。

「寝たか？」

「まだ」

布団を捲り上げ、ベッドから体を起こした私は新鮮な酸素を思いっ切り吸い込んで深呼吸しながら湿った髪にタオルを巻き直した。ピンクのローブを纏ったタケル。首に掛けたバスタオルで髪を拭いていた。

「もう12時だ。寝よ」

タケルがベッドに迫って来る。ええええ…。何何何？ 心拍数が一気に上がり、私は両膝を抱え込んで体育座り。私の緊迫を無視し、

タケルはベッドに上がって来た。な、何かしゃべれって。わ、私にも覚悟つてもんが…。タケルは膠着する私の背中に回り込んだ。う、後ろから来るっての？ベッドの上部に備えられた室内光の調整パネルを弄り、部屋を暗くするタケル。も、もう、ダメだ…。

「こんなもんでいいか？」

「う、うん」

何、私も返事してんだよ？ 真後ろのタケルの声に私が答えると、タケルは2個あった枕の1個を取り去ってベッドから下りソファへ向かった。へ？

「じゃ、お休み」

意外と真面目な奴…。別に意味ない細い溜息が漏れた。

薄暗くなった部屋。ソファアの上に体を伸ばすタケルの寝姿が、まだベッドの上に座り込む私に一時の寂しさ、孤独感を与えた。

「タケル…」

「うん？」

「寒い…」

「いや、大丈夫だよ」

「いや、私が寒いって」

タケルがソファァーから体を起こした。

「布団、被らねえと」

「だよね」

仕方なくベッドに寝転がり、布団を被る。再びソファァーに体を倒し、タケルは左足をソファァーの下に落とした。

「タケル…」

「何？」

「あんたも、ポロリしてるよ」

あー、もう！ とロープの裾を直して、タケルは長い両脚をクロスさせた。私はくすくすと布団の中で体を奮わす。

「早く、寝ろってよ！」

夜中、同じ部屋で二人でいるのに離れ離れになってる違和感が寝られない原因だって事。タケルに早く気付いて欲しかった。

「一緒に寝るくらいいいじゃん！ 別にどうこうなるって事じゃないんだから。私があつまれるだけだからからさ」

女が素直になれば、男も素直になるって、私はよく知っていた。はあ！ と体を起こしたタケルは納得したように何度か頷いた。

「分かったよ」

枕を抱えてベッドに来たタケルを、私は布団を捲って迎え入れる。

「いらっしやいらっしやい」

「何言つてんだよ？」

ベッドに寝転んだタケルに布団を掛けてあげた。その途端、タケルは私に背を向けた。味気ねえ奴…。

「お休み」

その広い背中が私をまた眠気に近付けさせない。

「タケル…」

「うん？」

「まだ寒い」

悪戯心もあつたかも。タケルの溜息が仰向けに寝ていた私に届いた。仕方なくだけど、分かってくれた様子。

「じゃあ…向こう向けよ」

うん、とタケルに従った私は45度体を動かしてタケルに背を向けた。タケルの右腕が私の首と枕の間に入る。腕枕？ このスタイルじゃ、ま、まあ、そうなるよね。タケルの左手が私の下腹部に当てられた。あ、これ…。

「あつたかい…」

思わず漏らした。私の背中とタケルの胸が密着すると、自然に、私はタケルの右手を両手で包んだ。

「あつたかいか…。よかった」

私の下腹部に当てられたタケルの左手が私の子宮を温めていくれた。

「凄い気持ちいい…」

「こつやると…女の子って安心するんだろ？」

「うん…。凄く安心する」

かなり癒される。こいつ、どこで、こんな事覚えたんだろ？ ずっと笑った私。気取って常に体を強張らし、周りの視線を気にしながら生きてきた、素直になれずに強情を通した日々が雲に抱かれるような心地に包まれながら消えていった。見栄えの格好よさや見掛けの優しさ、一時の快樂に流され続けた後悔が体を奮わす。

「タケル…。私…辛かった」

友達はいっぱいいたけど、いつまた取り残されるか、不安で不安で…。無理して無茶して強がって…。やっと搾り出せた本心が枕に落ちた。

「もう何も…心配…すんな…。由美は…」

「何でも話せよ。俺達似た者同士さ」。こんな真剣な瞳をした男の子がいるんだ。タケルは私を…。タケルのすーすーと呼吸が長くなった。寝ちゃった？

「ありがとう」

薄暗さが真つ暗になり、私はまたタケルに溶かされそうになっていた。でも、タケルは私の親友が…。彩が…。でも…。もうダメ！ 勇気なんていらぬ。何の違和感もなく、何の不安もなく、振り返ってタケルに抱き着いた私はタケルの唇に自分の唇を押し付け、舌を強引に入れてタケルの瞳を開けた。ごめん、タケル…。ごめん、あ、彩…。タケルの瞳がゆっくり開かれ、唇と舌を引いた。

「由美…。悪い…。俺…」

私の意味を理解していたタケルは薄いブラウンの瞳を沈ませた。

「分かってる。私…代わりでいいんだ。今夜だけ…私…タケルのはけ口でいいから。それで、それで、幸せだから…。それで、いいから…」

タケルは他の男達とは違う。だから…後悔なんてしない。タケルの顔を眺めていると、知らない間に髪に巻いたタオルも行方が分からなくなり、少し浮いた体からローブは抜かれていた。

「俺も男だから…」

違う男だよ。あんたは違う。もう我慢しきれない切ない願いをタケルの耳たぶ辺りに漂わせたると、私はタケルのローブを取り去った。今度はタケルから私に息を吹き込んでくれた。タケルが出す息

と音に同調した私はタケルの指に自分の指を絡め、直ぐに組み合わせた。また絶頂の兆しが私の子宮から…。両脚が開かれると、タケルの熱い吐息が私の耳に、首筋に、胸に、更に下方に伝わり、両脚にやや入った力も抜けた。シーツを握り締め、その舌の感触を受け入れた私は二度目の絶頂を得た。

全てを吸い付くしてくれたタケルが体を浮かび上がらせた直後、私達は一つなり、一つの揺れの中で一つの熱を感じていた。私の中から出る音に合わせてベッドも音を出す。タケルの熱いものが私の奥で止まり、慌ただしく抜かれ、飛び散る直前に三度目を迎え、私は完全に溶かされた。死んでもいい…。

言えない分だけ

寝返りを打つと、もう妻の感触がない。うう、ああ…、ベッドから体を起こし、カーテンに滲む日の光から避けるように微かな音へ目を向けると8時15分。もうお袋は店に行つたろう。これでいいや。俺は全裸のままベッドを降りて部屋を出た。

妻の体を包んでいた俺はこれと言つた夢を見なかった。久しぶりの熟睡をくれた妻はライトイエローのＴシャツ、ブラウンのエプロン、白のスエットパンツの後ろ姿でキッチンに立つ。出窓から入る朝日。妻の細い背中と括れた腰に輪郭を作っていた。俺は髪を掻き乱す。おはよ、と振り返り、今、朝ごはん…、と言い掛けた妻は俺の全裸と朝立を目にし、笑顔から一転。急いで火を止め、エプロンを引き抜いて俺に駆け込んで来た。

「朝ごはん…すぐ食べるう？」

唇を着けてくる妻。

「な訳ねえだろ…」

まだまだ時間はある。舌と吐息が絡み合う中。ノーブラの妻が胸を密着させると、俺はスエットの中に両手をつまむ。ノーパン。妻も…朝からやる気ありありだった。

少し早く目覚めた、と言うか、タケルの思つたより可愛い寝顔を

眺めながら、あまり寝られなかった私。唇をそつと着けて、タケルの腕を抜け出すと、こっそりシャワーへ…。と思ったんだけど、ほんと可愛い寝顔だったから、もう一度、キスを落とした。

頭から浴びる少し熱めのシャワーなんかでは消せない昨夜の余韻を全裸に感じながらスポンジを体に滑らす。バスルームのガラス越しに曇るタケルの寝姿。ずっとタケルを見ていたくて、ガラスにシャワーを掛けて曇りを消した。薄暗い部屋。水滴の向こうに滲むタケルに、愛してる、と独りよがりを呟けば、シャワーより熱いものが頬に流れ、私はまたシャワーを頭から浴びた。

髪にタオルを巻き、ローブを纏って部屋に戻ると、ベッドの上でうつつんうつつ、と目を擦るタケル。服着るまで、もう少し寝てて欲しかったんだけど…。まあ、仕方ないか。

「おはよう。いい夢見れた？」

必死で親友の顔を作って、私はベッドの傍に立ち、タケルを見下ろした。

「おはよう…。何時？」

学校で雑談している時のように、腰に手を当てて斜めに構え、ベッドの上のデジタル時計を見た。

「7時…10分前」

タケルは目を擦るのを止めて欠伸をする。

「はあー、はやえなあ…」

私に手を伸ばしたタケル。起こして欲しいってか？　しょうがない少年。

「自分で起きないとねっ！」

タケルの手首を握って引き上げようとしたけど、タケルが私の手首を握り返してきた。

「アーツ！」

逆にベッドに引き込まれる私。ヤバいつて！　折角、親友の顔作ってたのに！　と思ってるうちに、もう私は全裸のタケルの下。

「タケルッ！　ちょ、ちょっと、は、話きい…」

唇も塞がれた私はタケルの温かい息と柔らかい舌使い、ふうくふうう…、タケルの胸を押していた抵抗力は溶かされ、いつの間にかタケルの広い背中を引き寄せ、自分の舌がタケルの舌を凌駕していた。こいつだけは…。てか、私も私…。私の内股にあたる固さも違和感がない。やっと唇を私から離れたタケルのバカ。そんな切ない瞳で見詰めないで…。堪らずタケルの唇を撫でる私のバカ。

「お願い…一っだけ言わせて…」

何？　と前髪が掛かる、綺麗…、薄いブラウンの瞳。ダメだあ…。

「私を…私をタケルの都合いい女にして。タケルの都合のいい親友にして」

だから、何言ってるんだから分からなくなる。

「え？ それって…」

瞬間的に、タケルの両肩を引き寄せた私。タケルの唇を塞いで舌に、我慢してたけど…もうダメだよ、言葉にできない思いを込める。そうだよ！セフレでいいじゃん。そうでないと、私はあんたに抱いて貰えない女。素直を許されない私はそれでいいんだ。二人だけの秘密を持たせて…。強引に唇を解いたタケルを見詰めてと祈った。好きだよ。愛してるよ。言葉にしたくて仕方ないけど、出来ないんだよ…。タケルは溜息混じりの笑顔をくれたけど、それがどちらの答えか分からなかった。

静かに、私から体を起こしたタケル。ベッドの上の操作パネルに手を伸ばし、部屋を明るくした。だよね。いいや。冗談だよ、て言おう。明るくなって気分が晴れっ…。体を起こし掛けた私に、タケルが唇を戻してくれた。

「もう何にも言うなよ」

えっ？ 目が塞がらない。タケルが私の口の中で呟いた。

「うん…」

そのまま返事をする、私のローブの紐を解いて、来てくれる…。胸を開けさせるタケルは唇をそのままにオッパイを下から押し上げるように揉んでくれた。目を閉じて、もう答えなんてどうでもいい、全てをタケルに委ねる私。何も聞かないよ、私から引いた唇を、タケルは私の乳首に落として溶かしくれた。

「ああ…」

小さく漏れた声。同時にタケルは私のアソコに感触をくれる。

「はっ！」

クリに伝わったタケルの感触。何でこんなに敏感になるの？ タケルの両肩を更に強く掴む。今までの義理のセックスなんかと比べられない。奮える乳首とクリ。溶かされる気持ち…。

「タケル…。気持ちいい…。も、もっとして…」

昨夜に言えなかった事が明るい部屋で言葉になった。恥ずかしく、タケルの髪を掻き乱すと、私のローブを引き抜いて覆い被さるタケルに合わせて、私は両脚を開いた。タケルは舌が私に入り、ちよと厭らしい音に乗って体の隅々にまで伝わる。さ、叫ぶよ…。親友のあんたに…叫ぶよ…。も、もう、が、我慢が…。

「くっ！ ああっ！ タケルッ！ ああうっ、あうっ、くくああああ…。」

丹念にクリを、強くアナルを、タケルの熱舌はその官能を這わせる。

「そ、そんな、とこまで…。タ、タケル…。恥ずかしいいいい…」

綺麗にしてくれてる…。小指を噛む私。タケルが…、髪が唇に乱れ着く、綺麗にしてくれてる…。タケルの指が膣に沈む。

「あー！ いつ、あああ…」

両脚を抱え上げた私は親友に見せる恥体に少しの戸惑いもない。

好きにして…。指が弾ける微震と舌が絡む音に体が渦を作り、熔けてなくなりそうに…。

「いつ、あっ、タケルッ！ あっ、いいいく！ うっ、タケルッ！
！ いくー！」

ま、またあ…いかされたあ。体を弓なりにした私。安心感を相手から得なければ、絶対に絶頂に到達しない事を実感した。タケルだからいけるんだ。私の胸から昇ってきたタケルの瞳を私は奮える両手で迎える。

今度は私が…。キスを絡めたまま、タケルの体を仰向かせた私はタケルの乳首を吸い込みながら舌先に微弱な振動を作る。

「アッ、ゆ、由美、だ、だめって、ううう…」

「何い？ もう、じっとしてなきゃ」

「く、擦ったいって」

ふふ、仕方なく私はタケル乳首を吸い上げて、ウツ！ と上がったタケルの声にチュツと音を合わせて唇を離れた。

体を起こし、掻き上げた髪を片方の肩に流して首筋を露にした私は前夜から欲しくて堪らなかった、きつとタケルが私に気を使って何もさせてくれなかった、熱い脈が打たれるタケルの部分にそっと手を添えた。おっきい…。その舌触り、風味と共に深く口内にそれを沈めてた。しっとりする…。今までの通り過ぎなんかじゃない、最愛と呼べる人。青く浮かび上がった、その人のものに全ての情を唇と舌、そして、吐息を使って染み込ませ、もつと…、二つの玉が入った少し膠着気味の薄皮を包み上げた。私はタケルの親友。でも今は都合のいい女にして。親友にここを愛させて。都合のいい女に

ここを頂戴…。そんな言い訳も、その注力に揉み消される。四つん這いになった体を横に向け、固く張ったチンチンの先端部を掬い上げるように舐め、更には、甘酸っぱい汁を溢す尿道まで舌先を這わせた。くうくう…。タケルの呻き声を聞きながら、尖らせた舌先を尿道に挿入。もっと尿道がら汁が進むように、私は玉袋を包んでいた手に極僅かな力を入れて、その汁を絞り出した。甘い。タケルの…。くわえ込みながらタケルの長い足を跨ぐ。もう誰もにも、私自身にも止められない。

裏筋部分に舌先で微弱な振動を与え、攪り始めた私はオツパイをタケルの太股に密着させた。乳首がころころ固くなってる。気持ちいいのかな？ タケル。殆どフェラなんてしたことなかった私。別に、そこまで気持ち良くさせてあげたい男に出会わなかったと言える。舌をもつと下に向かって滑らせる前に少し視線を上げてタケルを眺めた。ベッドに両肘を立てて、タケルはその美しい瞳を柔らかく開いて私を見詰めてくれた。

「気持ちいいよ。由美…」

私の髪を指に絡めるタケル。気持ちよがってくれてる。口からチンチンを抜いた私はペロンと裏筋を一舐め。

「マジで？ 私…あんまり自信ないからさあ」

タケルだから上手く出来る。

「そうなの？ 上手いよ」

笑顔のタケルが両肘を解き、ボタンと枕に頭を着けた。どっから見たって、カレカノだけど、違うんだ。玉袋とチンチンの繋ぎ目辺

りをくわえた私はその根元に舌を押し付け、巻き付け、波打たせる。尿道を人差し指で擦り、その支柱を残りの指で撫でると、ゆ、由美
いいい…、タケルの声と共にまた汁が醸し出された。

タケルが太股が奮えると、私の体も吐息も奮える。タケル…。その汁を啜りながら、舌を亀頭まで到達させる。その頂上からチンチンをすつぽりと飲み込んだ。唇を出来るだけ強く密着させて、舌を出来るだけねつとりと動かし、吸引力だけで直立させたチンチンを口内で上下させる。心中だけで…。私の上目使いにタケルの瞳が合わさった時、私の舌と首と息が更に荒くなり、がたがたと奮えるタケルの下半身が汁の濃度を高めている様子だった。

愛してるって言わせて…。瞳を薄くして、限界を超えそうだったタケルは軽く私の二の腕を引く。チンチンを口から出し、私はタケルの太股からタケルの腕のに体を上げた。

「由美…。おまえ、上手いじゃん」

腕枕…。落ち着く…。当然、タケルのチンチンはまだ私の手の中。

「マジい？ 自分では分かんないよ」

言われた事ないような…。てか、今日始めてだからね。真面目にやったの。

「何でも…褒められんのは嬉しい…よね」

タケルのチンチン…熱い。

「そう言えば…あんまり由美を褒める事ってなかったよな」

タケルを見上げる私。タケルは私の前髪を柔らかく梳いてくれた。

「ハハッ！ 悪い妹みたいな存在だからね。褒める事なかったんじゃない」

親指がタケルの尿道を擦る。凄く大胆な事をしてるんだけど、自覚なかったかも。

「逆だよ。おめえは姉ちゃんタイプ。だから…逆に褒め辛かったよ」

「妹にしてよ。妹の方が可愛気あるじゃん」

「いやいや、おめえは姉貴姉貴」

単なる友達のような会話が終われば、私は恋人のように…恋人以上に愛する人に自分の唇を着けた。こんなのがいい。気を使わない幸せ。間違ってるかもしれないけど、凄い自然。

静かに温かく私に覆い被さるタケル。真剣に見詰め、タケルの首に両腕を巻き付けた私は両脚を開いて少しだけ胸の中にあつた罪悪感を消し去った。

「由美…」

慌てて、私は何か言い出し掛けたタケルの唇を引き寄せて塞いだ。もう言葉なんていらぬよ。ただ抱いて。タケル…。

私は再びタケルの熱いものを受け入れた。

「ウウツ！」

ブラウンの瞳に吸い込まれる私。タケルのものは静かに私の中で押し引きを繰り返す。タケルに過去の醜い自分を抜き出され、未来

の新しい自分を注ぎ込まれてる様だった。

「タケル…」

その後続く、「愛してる」を私は胸と子宮の中に押し込み、両脚をタケルに巻き付けて我慢した。好きな人はいた。けど、こんなに愛せる人はタケル以外いない。唇を離れた二人。見詰め合ったまま、より熱く激しく揺れ始めた。

「ふっあうっああああ…」

快楽と激情が入り乱れたけど、私は枕に顔を埋めず、タケルの頬を包み、透き通った瞳に抱かれ続ける。

「タケル…。あっ、もっ、もっと…して…。もっと、は、激しくううっ…」

タケルの腰に両手を落とせば、タケルの息遣いと揺れが速まり、私の膣からはいやらしくも狂おしい音がより激しく細かく漏れ出す。

「ゆ、由美…。す、素敵だ…。こ、こんなに…おま、おまえが素敵だ、な、なんて…」

「タケル…。そ、そんな、事…い、言われたら…わた、わ、私いい…」

口に出せない分だけ、愛し過ぎて気が狂う。

やっぱり避けてたんだ。冬休み明けて、何か変だったタケル。そりゃ、あんな事があつたんだから、避けられても仕方ないけど…露骨過ぎ。そう思うと、尖らせた唇が奮え、視界が曇ってきた。タケルが私の変化に気付いた様子。い、いや、そ、その…、と周りを見回した。もう一度、言いたくなかった。

「言つてつてば！」

わ、分かった、とタケルが頷くと、私は覚悟を決めた。あんなの無かつた事にしよ、と正直に言つてくれていいよ。当然、分かつてるつて、と明るくそれに従う準備も出来ていた。さあ、どうぞ！少し、鼻を嚙つてタケルを見た。

「いやその…実は…」

そんな俯いて言い辛くなんなくていいよ。私誰だと思つてんだよ。笑顔を滲ませてやる。

「由美を見てたらチンチン立ってきて…」

はあ？

「バカじゃないの!？」

緊迫感が完璧に破壊され、笑いを吹き出す勢いで言った。

「だからあ…。言いたくなかつたんだよ」

「しょ、正直過ぎだつての！ んなの。何考えてんのよ!？」

包み隠さず正直に恥ずかしい事を言う。それによって女子を引かさない可愛げもタケルの魅力。

「考えるもんなんて…。当然、由美の裸体に決まってるじゃねか」

「ワーツ！」

私の声で周りが数人振り向いたけど、私は構わず前屈みになって両腕で自分の胸を覆った。

「オツパイだけじゃねえけど…」

「イヤツ！ もうっ！」

次に、内股になりスカートを押さる。

「由美ってさあ…。絞まってるって絞まってるって出てるとこ出てるよなあ。由美が制服着てても、この二日、あの時の光景が浮かんできて、勃起しちまって…。だ、だから、失礼だろ？ 男として、おっ立てたチンチンのまま、女子のおめえに、その対象のおめえに目合わせるの。それにまたおめえも…俺を意味深に見上げるんだもん。こっちは想像する想像する」

真顔で格好よく言うなつての！ こいつだけはもうっ！ でも、憎めない奴なんだよ。恥ずかしさと笑いを耐えるのに必死だった私。奮えていた両肩をそのままに、赤面を両手で覆うのがやっと。

「だから…由美って…」

耐え切れなくなり、両手を顔から離れた私は笑いを破裂させた。

「キヤハハハハハ！ も、もう、い、いいっての！ それ、それ以上聞いたら、私が明日からよそよそしくなるよ！」

私もあなたのチンチン思い浮かべちゃうよ！

「んじゃ止めとくよ。まあ…そう言う理由なんで理解してくれよ」

「マジで、しょうがない男だねえ…」

十二分に理解できた私はポケットからハンカチを出して涙目を拭いた。

「てか…私ってそんな意味深な目つきしてたあ？」

「自分で気付いてなかった？ あんな上目遣い…周りにバレちゃうよ」

口に当てたハンカチに笑い声を染み込ませる私。

「わ、分かったよ。今後…気を付ける」

タケルは自分の首を撫でて苦笑いしていた。いいや、聞いちゃえ。

「で…今後、どうすんの？」

ハンカチを握った手を膝に置いた私はそのまま俯いて、冬休みのあの日以来、私の食欲を減退させていた悩み事を払拭しようとした。

「今後なら…簡単だよ。俺は絶対に止めたくねえよ。由美の親友を。前にも言ったろ？ やっぱ俺達似てるんだよ。そう思わねえ？」

ストローに指を戻し、タケルの瞳を見詰めながら何度も頷いた私はタケルに確約を取る決心をする。

「私もタケルの…。ずっとタケルの親友でいたい。タケルなしじゃ生きてけないと思う。だから…この前、私が言った事も嘘じゃないって理解して欲しい」

折れたストローを気にせず弄り続け、私はまた膝を見下ろした。

「由美…」

タケルの声に、顔をそのまま視線だけを恐々上げた。

「あまえとああ言う関係を続けていくかどうか…。俺に選ぶ権利なんてないよ。汚い男と思われても仕方ない。ただ一つ言わせて貰えるんなら、2回目の時は俺からだ。あの時、思ってた。由美が…俺の彼女になってく…」

「タケル！」

その後が怖かったから、タケルの話しを途中で切った。

「じゃ、私に選ばしてよ。あの時…私が言った事は嘘でも何でもないよ。だから、私を…タケルの…タケルのセフレにしてよ」

素直にさせられるのが怖かった。でも、タケルには傍にいて欲し

い。都合のいい私。タケル、お願い…。タケルの中にいる唯一の人が誰か、よく分かっていたけど、少しの間だけでもタケル自身が欲しかった。あれは、よくある男の衝動なんだよ。私と付き合いたい？ 優しいあんたが無理に責任取るうとしてるだけなんだ。責任なんて私みたいな女に感じなくていいから…。愛してるタケルに、私は苦しくない笑顔を作れた。

「絶対にタケルには迷惑かけない。タケルがもう止めたかったらいつでも止める。それだけは…ちゃんと約束するから…」

私から顔を背けて、タケルが一つ笑った。

「俺ってそんな魅力あるの？ んな由美みたいな可愛いくてモテる娘の…そう言う存在になれる男なの？」

テーブルに肘を着いて、私は髪を押さえながら笑った。

「私…自分の事可愛いなんて思ってないよ。タ、タケルは…魅力あるよ。タケルが自分の事を過小評価してるだけだよ。だって、私…こんなに何でも話せる男って他にいないもん。それに…私…いかされたの初めてだから。キスで初めていかされるなんて思ってなかったよ」

割りとエロい事も真剣に語った私を、微笑んだ柔らかい瞳の中に納めてくれたタケル。薄いブラウンの瞳に見惚れた。そのさりげない瞳が魅力的なんだって。初めて会った時から思ってたんだから。

「マジ？ それ。あ、あのキ、キスで」

「マジだった！ 嘘ついてどうすんのよ。あんた…どこであんな事

勉強するの？」

タケルが周りを見合わせた。

「べ、勉強なんてしたこたねえよ。極々自然にただけだよ」

「でも…普通…キスだけでいかさせる？ 私、あれが人生初めていつた瞬間だったんだから」

徐々に声が大きくなった私を、タケルは口到人差し指を当てて静止させ、私は周りを見ながら小声に変えた。

「お、思ってもなかったよ。最初がキスなんて。タケル、上手過ぎだつて」

タケルが俯いて肩を奮わせて笑いを堪えていた。

「俺ら…気持ちの相性も良いけど…体の…その…相性ってやつも…」
「良い訳でしょ!？」

私の声がまた大きくなると、タケルはまた周りを見回した。

「わ、私にとつて…あなたは麻薬みたいなもんだよ。いいじゃん。親友のままエッチしても。誰にも分からなかったら…誰にも迷惑掛けない訳だし。そんな、べ、別に難しく考えなきゃいけない事？ わ、私さあ、タケルだから頼んでんじゃん。他の男になんて絶対頼めないよ。てか、頼みたくないし。親友なら…親友ならそれぐらいのお願い聞いてよ」

我が儘と重々承知していたけど、目を潤ませて唇を尖らせていた私は間違はなくその女の武器を使っていた。汚い事してるって分か
ってるけど…。

「タ、タケルは…今までセフレ作った事ないの？」

タケルとしたいから。もうストローが丸く縮んで原型を留めてな
かった。

「ないって言えば…嘘になるよ。だから、分かるんだ。そのセフレ
って表現が下品過ぎて由美には似合わないってさ」

とことん優しい奴。

「じゃあ…他に何か呼び方あれば…」

タケルがまた一つ笑った。

「エロ友ってどう？」

何それ！？ ストローを弄るのを止めて吹き出した。

「バ、バカじゃん！ あんた。その言い方の方がいやらしいよっ！」

「そう？」

「そっだよー！」

いつも、タケルは冗談で私達の気持ちを楽にさせてくれた。

「で…タケルも…気持ち良かった？」

「由美のフェラは最高だったよ」

「ならまたしたげるよ」

「じゃ、宜しく」

「こちさこそ、宜しく。今日の予定は？」

「別に…何もねえよ」

で、最後はすんなりと確約。知らない間に、私のアイスティーのカップを取り上げていたタケルは丸く縮まり切ったストローを抜き、キャップを外して中身を飲んだ。

「じゃあ、7時くらいに来る？ お父さんもお母さんも夜勤だからさ。ご飯作っただげるよ」

氷をかみ砕く音がタケルの口から漏れている。

「由美の手料理？ かなり楽しみだな。で、その後…どうするの？」

「そりゃ…やることはイロイロ。エロ友同士だから」

氷を吹き出したタケルが立ち上がった。

「もう行くぞ！」

聞けない

深夜だったと思う。寝返りを打てば、俺の顔に生暖かく柔らかい感触。いつも嗅ぐミント系の香りが鼻に擦り寄せられ、思い切り締め付けられると、酸欠になりかけて目を覚ます。

「タケルウ……」

息苦しくも和らいだ暗闇の中、静かで怪しい声はその胸から響く。姉貴の……声？ 俺のベッドに……姉貴？ 二つの谷間から、俺は眠気を上げた。お互い小学生なら問題ないけど、お陰様で、姉貴は十八俺は十四に成長していた。一瞬だけ、ふふ、と溢して姉貴の谷間に顔を戻し、何やってんだ！ と完全に眠気を吹き飛ばした序でに姉貴を押し退けてベッドの上で体を起こした俺。本当に、いつも突拍子もない姉貴だ。

「何よ！？ ただ、タケルと一緒に寝たかっただけ」

ベッドから体をお越して髪を手櫛で梳かし、姉貴は両膝を抱えて体育座りした。グレーのタンクトップにピンクのショーツ。カーテンの隙間から外灯の明かりが漏れ入るだけの暗い部屋の中、でも姉貴の尖った唇はよく見える。

「何、寝惚けたこと言ってんだよ」

髪を掻き混ぜて、欠伸を打つ。また、タケルウ……、と悩ましがな姉貴の声。四つん這いになった姉貴が俺の顔を覗き込んだ。

「もう明日、私、東京行っちゃうんだよ。だから、今夜くらいは姉

弟水入らずで寝よう…」

お互い好い年こいて水入らずって言われても…。髪を掻くのを止め、つってもなあ…、と両腕をだらりとさせて拒絶反応を示しても、四つん這いの姉貴はその上目遣いと尖らした唇を俺に向けたまま。タンクトップの谷間に見える割れ目から顔を背けての咳払い、相変わらず妹のように我儘な姉貴の耳には入ってない様子。諦めた。

「ま、まあ、いいや。最後だしな」

「うん！ 寝よ寝よ！」

俺のパジャマの襟首を掴み、姉貴は俺をベッドに薙ぎ倒した。何じゃこりゃ！ ちゃんと、姉貴は自分の部屋から枕まで持ってきてやがった。姉貴つても、一応は女。両手を組み合わせて天井を見上げる俺は寝返りも打てない窮屈さを自分のベッドで感じるはめに。

「ねえねえ、タケル」

俺の横で、姉貴も天井を見上げていた。

「何？」

「あんだ、彼女いるの？」

彼女つてか、声かけ合って、お互い暇だったらセックスする女は何人かいたけど、そんな女どもを彼女なんて認めたくなかったから、いないよ、と答えてみたけど、姉貴に鼻で笑われた。

「財布にゴム忍ばせて、いつの間にか、タケルは私の手を離れちゃ

「ってるんだもん」

えっ！ 夜中なのに少し大きめの声を姉貴に向けた。

「な、何勝手に人の財布見てんだよ！」

「千円札、小銭に両替してもらおうと思ったただだよ」

大きく溜息をして、たくよ、と頭に両腕を敷き、再び天井を見上げた。

「でもお姉ちゃん、嬉しいよ。タケルの成長を感じれてさ」

体を横に向け、姉貴は俺に密着してきた。うわわわ…。何か当たっていたけど、壁側に寝ていた俺は逃げられない。

「いや別に…彼女って言えるような存在じゃないから」

背中への柔い圧迫感が仕方ない告白へ導いた。

「男はそれくらい余裕がなきゃどうすんの！」

バシツと響く、柔さの後の、ウツとくる刺激。

「そう言うタケルの成長が…お姉ちゃん、嬉しいんだよ」

今度は柔さと締め付けがきた。また咳払いをしてみても俺を揺する姉貴には届いてない。

「ねえ、タケル…。お姉ちゃんねえ、タケルの彼女と手を繋いで本

当の姉妹みたいにじゃれてお喋りするのが夢なんだ…。弟も悪くないんだけど、妹って憧れちゃうんだよねえ…」

はいはい、と俺は姉貴の締め付けが解けた隙に体を仰向けにした。

「タケル、本当に好きな彼女ができたなら、絶対、私に紹介しなよ。本当の妹以上に可愛がってあげる。本当の弟以上に守ってあげる」

朝起きて鏡の前に立つと可愛いピンクのリボンが頭に…。小さい時、姉貴はよく俺にリボンを着け、嫌がる俺を泣かせてた。そんな姉貴は明日家を出て行く。もう遅いけど、その実感がこみ上げてきた。

「じゃ、姉貴に…本当に好きな彼氏ができたら、ちゃんと俺に紹介しろよな。本当の兄貴以上に可愛いがってやる。本当の姉貴以上に守ってやるよ」

「大きくなつたねえ、タケル。お姉ちゃん、何にも心配ないよ」

俺は苦笑いで、おやすみをした。

仕事に忙しいお袋の代わりに面倒を掛けた姉貴。朝、寝返りを打つと、柔らかい感触は無く、ミントの香りだけがベッドに残っていた。テーブルの上には、＜大人になつた弟へ＞メモと一緒にコンドームが三ケース。目を擦りながら姉貴の部屋へ行く俺。ぼやけた視界の中がらんと殺風景になった姉貴の部屋。俺に何も言わずに出ていった姉貴は相変わらず…我儘。部屋に入り、鏡台の前に立つと俺の髪にピンクのリボンが。やりやがったな。苦笑いが寂しさを癒してくれた。相変わらず…優しい姉貴。

リビングの窓から斜めに入る朝日に浮かんだ夫の全裸。我慢できない…。まだ眠そうな可愛らしい瞳には不釣り合いかも？ 逆三角形の体に似合う勇ましく立ち上がったチンコ。欲しい…。エプロンを脱ぎ捨てて、キッチンからリビングへ。開けっ放しのカーテンなんて関係なく、無我夢中で、私は夫に抱き着いた。揉みし抱かれる私のお尻。全裸の夫を後のソファーに押し倒す前に私はＴシャツとスエットを脱いだ。キッチンの火は止めたけど、私の火は止められない。髪からブルーのシュシュを抜き、全裸の私はソファーに寝そべる夫に覆い被さった。

火照った妻の細い体は軽くソファーの上で反転させることが出来た。舌を絡ませたままアソコに触れる。あつ、と妻の声。アソコはもう蕩けて、中指がスムーズに入る。くちゅらせると、くふうふう…。妻の眉間に皺が寄せられ、俺の両肩に爪が入ったけど、痛くない。離れた妻の唇が、「舐めたい」と囁く。また妻に先を越された。

いいよ、と私の体を起こした夫がソファーに腰を下ろし、両脚を開く。その瞳に吸い込まれたくて仕方なかった。

夫の両脚の間に正座した私。夫を見詰めたままに、その熱り立ったチンコの先端を呑み込んだ。ふうふう…。と抜かれた夫の息に逆らって、私の口中でひくひく波打つチンコから甘く酸っぱい汁が滲み出る。夫にいつもの元気がないと、昨日は不安を感じた。いつもと変わらない朝に改めて安堵する。ごめんねえ、余計な心配しちゃて。

こんなに元気なのに…。私は、くちゅこちょ、裏筋に舌先を遊ばせ、ころにゆる、少し膠着した玉袋を指先で解しに掛かった。最愛の人のチンコを一生を通して舐められる幸せに浸りながら、上目に見詰める夫の瞳が淡く透き通る。その瞳に吸い込まれたかった。

激しい波に打ち上げられた私は息をきらせてベッドに俯せ状態で放心。タケルが私のお尻をティッシュで拭いていた。

最後は後ろから。物凄い強烈なタケルの突進に堪えられ、初めてのえええ…。なかつた私は両腕の力を切らし、小さな体をベッドに伏せた。のし掛かるタケルはその速さと強さを弱めず、何度いかされたことが分からない。部屋中に声を響かせ、恥ずかしさを曇らせたけど、やっぱり終わった後は超恥ずかしく、なかなかベッドから顔を上げれない私だった。

「でけえ声だったなあ」

ああ！ もう嫌！ 恥ずかしさが限界を越えれば開き直るしなかい。ベッドから顔を上げた。

「しょうがないでしょ！ マジ気持ちよかつたんだから」

私の横に仰向けで寝そべるタケルに恥ずかしさを覆い被せると、タケルはしっかりと私の体を受け止めてくれた。

「大丈夫かあ？ 体…」

体…？ 何の事…？ 見ての通り私は至って健康。少しの間隔の後、あつ！ と私はタケルを見上げた。

「タケル…」

謝らないと…。腕の中の私を見下ろすタケル。

「どうした？」

「ごめん、タケル…。あれ…嘘なんだ」

え？ とタケルは目を見開く。そりゃ、怒られるわあ。

「じゃあ、おめえ…」

悲壮な表情に変わるタケルを見詰めながら、私は嫌われる覚悟を決めた。コーヒーショップでタケルに言った事。結局、あの事でタケルはキレてコーヒーショップを飛び出し、追い掛けた私と今ここに…。何て卑しい女。嫌われても仕方ない。でもタケルみたいな優しい奴に嘘をつき通すなんて出来ない。

「妊娠して…中絶したなんて嘘なんだ」

罪悪感が溢れて、タケルの腕に流れた。

「マジで？」

もうタケルを見詰めてられなくて、うん、と頷き、そのまま目を伏せた。あんな男に振り回され、拳げ匂に、奥さんがもうすぐ出産だからと相手から別れを切り出され、捨てられた私。奥さんの元に

帰りたいから私と別れる。私のちんけなプライドが不倫男のそんな在り来たりな別れの理由を許さなかった。だから、他に別れの理由を作ってしまった。そして、独りで居たくなかった。タケルの言うように、独りで居たら何するかわからなかったから。でも、誰でもいいって訳じゃない。タケルなら…。今更だけど、タケルしかダメだった。

涙なんて拭かず、私は顔をタケルに上げた。私から腕枕を外したタケルは、半開きになった口、焦点が定まらない瞳、悲壮な表情のまま体を起こした。どうぞ、こんな汚い女を激しく罵倒してやって下さい。嘘をついた後悔が枕に流ればなしになり、再度、私は覚悟を決めた。

「よかったあ…」

重く張り詰めた空気がタケルの言葉と深い息で、一気に解かされ、新鮮な酸素が私の口から肺に入り込んで残りの涙を押し上げた。

「由実…。びつくりさせんなよ…。マジ、俺、殺人犯になるとこだったじゃねえか」

虚脱したタケルが横倒しにベッドへ堕ちた。いやいやいやいや…。とタケルに身を寄せる私。また違う意味で、ごめんなさいだよ。

「ごめんごめん！ タケルがあんなに怒るなんて思わなかったよ」

確実に口調は、さっきの「ごめん」より軽くなり、笑みまで漏れる。完全に安心したついでに、ね、ね、許してよん、とキスも振る舞う。

本当、すぐ見抜けると高を括っていた女の嘘に翻弄、狼狽させられるなんて……。俺もまだまだ男として半端だ。そんな反省なんてどうでもいいほど、事実、マジでどうやって、あの野郎を殺してやるうかと考えてた俺は安心し力が抜けた。相手が何だかんだでセツクスしちまった親友の由実だからだろうか、ごめんね、と謝られても、俺の方が、ごめんね、って気分になっちまう。俺に必死で唇を着ける由実。まだ残る涙の後を指で拭いてやった。

「もういいよ。マジ…安心してんだから」

「本当にいい？」

由実の唇が固くなったから、俺は舌で解かした。ポツ、キュン、ボン。由実の体を音で例えるとそんな感じ。由実を着痩せするタイプなんだろう。小さく可愛らしい体は出るところは出で、締まるところは締まってる。オッパイは揉み易いお椀型。ちっちゃい乳首は吸い付くほどに膨張する。アソコは大陰唇の肉付きがよく、恥丘が高目で陰列がやや深い、全体的に弾力性があり、舐めごたえも入れごたえがある。騎乗位で小さい体を一生懸命弾き上げてた由実は普段、姉御肌で頼られる個性をかなぐり捨てた感じ、別の一面を見たようで、可愛かった。やべえ、こんな事考えてたら、またチンコ立ってきた。

「シャワー行かねえ？」

唇を離したタケル。

「うん、行く行く」

吹っ切れた私はベッドから体を起こし、タケルの手を引っ張った。

「おまえ、先に浴びてこいよ」

体をくの字に曲げるタケルはベッドから起き上がろうとしない。

はあ？

「何言ってるのよ！ この際、一緒に浴びちゃうの」

より強くタケルの腕を引っ張る私。お互いこんなマツパ曝し合っ
て、シャワーごときに躊躇されたら、また恥ずかしさに逆戻りしち
やうよ。あーあ、と諦めたタケルは気だるく髪を掻いて体を起こし
た。

「私、先に行くからね。そのまままた寝ちゃだめだよ」

あ！ 立つたらまだちょっと恥ずかしい。お尻丸見えの状態で、
私はバスルームへ駆け出した。別に処女でもなかった私 Nonetheless、
相手が毎日学校で顔を合わせて馬鹿話するタケルだもんねえ。

丹念な妻のフェラが頭の芯まで暖め、何で血なんて吐く？ そんな
な昨日の事実など虚構ように変えてしまう。それでいい。それで妻
が安心するんだ。こんなのすぐに治る。由実以外知らない事として、
いつしか闇に葬り去られる。

舌が急激に動かし、俺の股間で頭の上下を繰り返す妻から、じゅずじゅずするじじゅずずじゅるる、と我慢汁を啜る、えげつない濁音がリビング中に響くと、俺は、くうくうくう、と絶頂感を妻の手を握り締めて我慢する子供になった。

夫はもう限界の様子。私は上目使いを残したまま、ぬっぽりと口から夫のチンコを抜いた。夫は私を脇の下から抱え上げてソファに座らせた。夫婦のあうんの呼吸。夫が何をしたいの分かる。そして、夫も私何を求めているのかわかってきているはず。クンニ。何も言わずに開いて抱え上げた両脚の間、アソコ目掛けて夫は顔を埋めた。

ノブを捻り、シャワーベッドからお湯を出す頃、タケルがバスルームへ入ってきた。髪をくちやくちやに掻いて、何だか恥ずかしそうと思いきや、ふえええ…、チンチンがピンピンに立っていた。シャワーを浴びながら急に背けた私の視線にタケルは気づいたみたい。

「だから、別々に入りたかったんだよ」

背中から抱き締められると、腰に固いものが当たった。

「い、いや、別にい…恥ずかしがってしょうがないじゃん。男なら…立つもん立つんだし」

何か、私もハズい事言ってる。シャワーからのお湯が、いや、私の体が段々熱くなってくる。

「そう言われりゃそうだけどさ。さっきより…ここ明るいし」

もう堪らない。私は振り向いてタケルの唇に吸い付いた。

「お腹へっちゃたよ。シャワー終わったら、ここ出て、二人で駅前のファミレス行こ」

「うん」

綺麗な瞳にまた吸い込まれ、タケルと唇を着けたまま答えた私。どこからどうみても恋人同士の二人。でも違う二人。そんな複雑な気分さえタケルの瞳に溶かされた。

どっからどう見ても恋人同士の二人。

「今夜はパツと二人で弾けにいかない？」と来た水月に、「うん！ 行こ行こ！」とすぐに返事を打った私。水月がタケルと別れてから、時々、どちらからともなく誘い合って夜にお出掛けしたり、いつもメールで近況報告や笑い話をする私達。「新しい男はどうなの？」暫く間が空いて、「ないない」と一言だけ。水月の寂しさはメールだけでも分かった。

その夜も、ご飯食べて、クラブに行つて、絡んで来るチャラチャラの男達を二人して適当にあしらったり、聞こえないふりして踊り

まくって、疲れて入ったカラオケボックスで殆ど歌わずに、夜通し、くだをまき合った。水月は来週から塾に通うみたいで、最後の夜遊びになるって。別の道を探して進む、弱い娘と違ってた水月は私以上に強かった。

「じゃあね。メールは続けようね」

「うん、美紀とはずっと友達でいたいよ」

水月と別れて、何か私も清々しくなり、お腹ペコペコになって入った駅前のファミレス。店内は朝帰りの同い年ぐらいの子達がちらほら。私だけじゃない、皆、親不孝してんだ、と思えば、妙な連帯感に包まれて、見回した店内。あれ？ 奥のテーブル、窓際に座る二人。どこからどう見ても恋人同士。向かい合わせになってテーブルの上で手を取り合ってるし。水月と別れた兄貴と…あの娘は確か…。向こうは私なんかに気付きはしないと思うけど、業と二人から距離を取ってテーブルに着いた。でも、角に座る二人をよく観察出来る。水月と一緒にじゃなくてよかったあ。にしても、水月と別れて…もう？ まあ、モテるタイプとは思ってたけど…。ふっ、自分の兄貴がモテる男ってのも悪くないねえ。さあ、何食べよっかなあ？ 清々しさは変わらず、私は笑顔でメニューを開けた。

「ねえ…雄二…」

「どっつした？」

雄二との朝帰り。あの朝と同じファミレスに。

「あ、いや…。今日…お姉ちゃんと初対面だからさ、緊張するなつて」

やっぱり…聞けない。

「大丈夫だよ。佐紀姉ならさ。タケルの言った通り、佐紀姉が美紀に会いたがってんだもん」

アイスコーヒーを飲み上げる雄二。グラスから氷の音が響く。やっぱり…聞けないや。どっからどう見ても恋人同士だった二人。私の兄貴といとこ。それを思う度、私の脳裏に彩の顔が過る。でも…聞けない。

合図

唇からの、くふうははふはふうふうくふうふう、舌からの、くちゆるるくにゆちゆるるすずすず、に包まれたアソコ。夫のそのいやらしい二重奏は鼓膜より粘膜に響いていた。堪らない！だから、止めないで！ 繋いだ夫の手をぎゅっと握り締め、私は少し体を捻って柔らかいソファの背もたれに横顔を沈ませる。

「彩…。ここは何てとこ…？」

はあ？ いきなりそんな事…。答えずにいると、夫の舌は激しさを増していった。ダメええええ！

「アアアア、グウアアクアアア…ク、ク、クリ…」

「ここは…？」

恥ずかしいけど…気持ちいい…。口と自制心が緩む。

「しょ、小陰…小いいいい、小陰唇んんん…」

まだ意地悪な舌の指摘は続いた。

「じゃ、ここは…？」

「ここ何てとこか、知らない女の子割と多いんだよね…」と以前、夫に指で触れながら教えらねたとこ。「おめえ、保健体育の先生かよ!？」と、思わず叫んだけど、ちゃんと覚えてる。

く来てくれ、とバイト先から連絡を受け、「悪い、今日急ぐよ」と
急ぎ足で教室を出る雄二に、「いいよいいよ。終わったら、メール
して」と私は手を振った。

自分の教室に戻ると、また一人で窓の外を見詰める由美が居た。
雨上がりの湿った風が由美の長い髪を揺らす。微動だもしないその
背中が寂しい影を教室に落としていた。

「ゆーみ！」

私の声に、え？ と振り返った由美。振り返る直前に、由美がほ
んの僅か、気付かれない程度に指で目を拭った事を、私は敢えて追
及しなかった。由美と並んで窓の外を眺めると、グラウンドフェンス
越しに、仲良く手を繋いで帰る彩とタケルが映る。由美…。

「雨…止んだね」

ありったけの作り笑顔だった由美に、私も笑顔を合わせた。

「だね」

「雄二は？」

「バイト先から急ぎの連絡あつてね。先、帰っちゃた」

「そっかあ…」

俯く由美。彩とタケルの姿はもうグラウンドフェンスから消えてい
た。

「ねえ、由美。今日、バイトない日でしょ。家に遊びに来ない？」

由美、まだ家に遊びに来た事ないからさ」

「い、いいの？」

「いいに決まってるじゃん。お母さんの写真見せてあげる。おいでよ」

うん、と頷く由美。目をくしゃっとさせた普段の可愛い笑顔が戻った。

六時十分前、家の呼鈴がなった。大した格好じゃないのに、俺のタッターソールチエックのシャツの襟を直してくれていた妻。

「一番手は誰だろうねえ？」

「当然、奴だろ。今日、一番緊張してる奴」

「だろうね。ちょっと出迎えてくるね」

妻は俺のシャツの胸ポケットにハンカチを突っ込んで部屋を出た。勝負服はこのチエックで行ってかあ？ 相手はお袋だぜ…。てか、俺が勝負するんじゃないし、普通にTシャツでいいんじゃないねえのう？ 改めて、クローゼットの鏡に自分の姿を映していると、うつくうつ…。また吐き気に襲われて体が折れた。彩が居なくてよかったあ…。顔を上げれば、開かれたドアとヤベ、「あんた、今日、何回エッチしたんだあ？」と腕組みした由美がその鏡に映っていた。

こいつ、いつもタイミングいいんだよ。顰め面を振り向かせた俺に、由美が迫り、胸ポケットからハンカチを抜き取って俺の口元を拭いた。

「彩…。ジュース持って行くから、先上がってって」

そのハンカチを俺に返した由美はテーブルの傍に腰を下ろして俺を見上げた。

「彩に心配掛けない為に…。普段通りに…。泣かせる男だよ」

「そんな何回もやっちゃんないよ」

実は六回ほどやった俺。鼻を擦るのを必死で我慢した。んな顔すんなよ。沈黙の中に、部屋の外から階段を上がって来る妻の足音が入り込んだ。

「何か…合図決めない？」

タケルの二歩先に飛び出し、私は鞆を後ろ手に持ち変えて振り返った。

マックから私の家までの道のり、普段通る人目が付く大通りを避ける暗黙の了解と手を繋がらない、繋げないエッチ友達としての遠慮があった。

「合図？」

鞆を肩に担いだタケルが足を止め、俯き気味な顔を上げた。

「そう。お互い…その…今日はOKだよって合図だよ」

くくつ、と照れ臭く笑って足を進め、私を追い越したタケル。私は鞆を肩に掛けてタケルに追い付き、横に並んだ。

「み、皆の目があるからさ。学校外で会える日には…何か合図決めといた方がいいかなってさ」

タケルの笑いで厭らしい事言っただ自分に気付いた私は恐々タケルを見上げると、薄いブラウンの綺麗な瞳が私に降りてきた。どきつと鼓動を感じ、私は俯くだけ。

「勃起してるんだ」

「バカか！？ あんた！」

何、格好つけて渋く言っただよ！？ ツンと顎を上げて、私は再び立ち止まったタケルを置き去りに、はや歩きした。

「おめえが、んなキャラに似合わねえ事言っからよう。逆にこっちがハズくなるっつの」

今度はタケルが私に追い付く。

「キャラ？ キャラの問題じゃないよ！ こっちはありったけの覚悟決めて言ってるのに…そういう茶化すような事はやめなさいっての！」

いい？ と私はタケルの胸を指で突いて見上げた。

「そ、そのキャラじゃん。由美はそういう姉貴キャラでいってくんねえとよ」

何言っただか？ ふっと鼻で笑い、髪を耳に掛けてタケルから顔を背けると、ぼん、と私の肩に手が乗った。おいおい。

「由美の肩って…手乗せ易い位置にあるよな」

人の肩を何だと思っただけ？ 憎めない奴。私がお姉ちゃんならあんたは弟だよ。固くなつた体を少しだけタケルに寄せた。

「これがママで、これがパパ」

ちよっと待ってて、とリビングから私の部屋に持って上がった家族写真。手に取った由美は私のベッドに腰掛けながら、それをじつと見詰めていた。パパとママ、どちらを見詰めているんだろ？ 由美の横顔は冷静でもとても綺麗だった。

私の古いアルバムの中に居る若い頃の叔母は美紀の写真と違い髪が長い。美紀と初めて話した時、誰かに似てると思った。でも、うちのママからその真実を聞かされるまで、叔母に気付くはずもなく

…。初めて見る美紀とタケルのパパ。二人ともお母さん似なんだね。優しい微笑み。その雰囲気はタケルにもあるけど、面持ちはママに似ている。私の叔母と叔父、もし、二人が私とタケルの過去を知ったら、何て言うだろ？ もういい加減、思い出しなくちゃいけないのに…。タケルを見ていると…。やっぱり…。

「由美」

うん？ と裏返った声で私は美紀を見た。

「どうしちゃったの？ 黙っちゃって」

「あ、いやあ…。綺麗なお母さんだから、見とれちゃってさ」

「真紀さんの方が綺麗で…。優しいよ」

「うちのママ？ ゼーんぜん」

由美は顔の前で手を振った。時々見せる寂しい表情。私達の視線に気付けば、直ぐに明るい表情に変える由美。その強気がいつも痛ましく感じた。

「美紀ってさあ…。彼氏作んないの？」

テーブルの上のグラスを由美に渡すと、由美は、くすつと微笑みグラスを受け取った。

「もう特定の男っていいかなって。私…。どうやらそういつ付き合い

に向いてないのかもねえ」

由美はグラスに口を着けた。

「由美、モテるのに…。この前も、『由美ちゃんって彼氏いるの？』って他のクラスの男子に聞かれちゃったよ」

「え！？ で、それ格好いい子」

「何それ？ さっき、そういう付き合いには向いてないって言ったばっかじゃん」

「いやでも…。一応、女の子だから、その手の話は気になるかな」

「もう」

興味なんてある訳ない。由美の心の中に居る唯一の人は誰だか分かってる。でも、それを悟られないように極自然に振る舞う由美。やっぱり痛々しい。親友の彼氏に…。やっぱり言えない。

やっぱり言えない。愛してるなんて。私の家に入るなり、我慢出せずに、どちらかともなく抱き合い、唇を交わす二人。肩から抜け落ちた鞆を玄関に置き去りに、時折、浮き上がる体はタケルの首にぶら下がる。そのままの状態で器用に階段を上がり、後ろ手に開けた私の部屋のドアも開けっ放し。まだ二人は離れない。ジャケットを引き抜く大胆さを、私に唇を塞がれたタケルは茶化せない。それ

どころか、タケルも私のブレザーを脱がせた。お互いが慌ただしくボタンの外し合いをしている最中も舌は止まらず、なかなか外れない最後のボタンを私は引きちぎり、タケルのベルトを緩める頃には、暖かい手がブラの中に入れられる。ブラのホックが弾かれると、タケルのズボンも落ちた。同時に開き合ったブラウス。スカートのジッパーも下ろされたら、私はタケルのＴシャツを捲り上げた。唇を離せば、言ってしまうそう。愛してるって。

ピンクのカーテンに外光が透け、益々とピンクに染まる由美の部屋と体。ちらっと見た由美のパンツもピンク。身に付けるピンクは似合わないって言ったくせに……。トランクスだけになってた俺は由美をベッドに押し倒した。首筋に落ちた唇が乳首に向かうと、指に引っ掛けたパンツを由美の足元に下げ、取り去った。

「可愛い。これ」

下になった由美の目前でぶらつかせるピンクのパンツ。

「変態かっのー！」

奪い取られて、投げ捨てられた。俺は女の子の下着に興味がある普通の男子だからしょうがない。笑い合いながら再び唇を重ね合った。

子供な奴だよ。たく。仕方なく合わせてやった笑い唇。丁度、恥ずかしかったから、いいタイミングだったかも。

「合図…これにしない？」

タケルが全裸の私に唯一残った黄色のバンドの腕時計に指で触れた。

「これ？」

「その時は…この時計外せよ」

この時計を外した私に異変を感じたタケル。だから、私達はこうしてられる。

「お風呂入る以外で、女が時計を外すのは、どうしようもない悩みがある時じゃなかったの？」

「もう一つある。何もかも忘れたい時さ」

そうだね。エッチ友達に抱かれない時って、そういう時だもんね。

「分かった。じゃ、タケルからの合図は何にする？」

うーん、とタケルは私から顔を上げた。

「勃起した時」

空かさず、ぱしっとタケルの胸を叩いた。

「んなの、分かんないってのー！」

「よく観察しろよ。スポンが膨らんてるから」

「やだ、んなの！ いっやらしい」

タケルの首に両腕を巻き付けた私。タケルに唇を塞がれると、熔け始める。腕時計を外し、ベッドの下に落とした。何もかも忘れたかったから。

タケルの指が私のアソコを撫でる。もう濡れてどうしようもなくなってるはず。指がスムーズに動き、クリに…、ふうふう…、呻き声が何の感触もなく上がる。気が付けば、私のオツパイに落ちたタケルが乳首を口に含んで舌でコロコロ、あ、ふうくふうく…、させて、まだ、うくうくああうう…、クリから指が離れず、タケル舌は更に下に…。

「タケル…。シャワー浴びてないよう」

「関係ねえよ。由美のだから」

私のだから…。その言葉に内股だった両脚の力は抜けた。開かれた両脚の間にタケルが入ると、クリに暖かい舌の感触が…。

「あっ！」

声を上げた私。夫のチンコが子宮に直撃した。欲しかったあ…。ママが居ない日は夫をフェラで起こし、上に乗って暴れ狂う私。今朝は出来なかった。その欲求が爆発する。

「タケル！ 思いつきり来てっ！」

「ああ、行くぞー！ 彩ああああ…」

刺され抜かれ刺され抜かれ刺され抜かれ…、カウウガアアアウガウアアア…、ぐじゅぐじゅと、掻き乱される内部音が私の喘ぎ声と共鳴される。き、気持ち良すぎて死んでもいい。ソファアアの上でくの字になって揺れる体。必死に夫の腰に腕を回して支えた。湿った唇同士が重なると、夢中で、ぴちゃぴちゃぐるにゆる、舌を求め合う私達、夫婦。チンコの勢いをそのままに、夫はクリを弾く。

「ふも、らめえー！（もう、だめー）」

回される舌で、上手く言葉にならないけど、夫は背中に滑り上がった私の腕の強さとアソコの締め付け加減で分かってくれるはず。

「う、うふしょにふこ（い、一緒にいい）」

そう夫は言ってるに違いない。薄らぎながらも、私を捕らえて離さない夫の瞳で分かる。夫の唇が離れた。

「イ、イ、イグウウウー！」

「行くぞーっ！」

私の子宮に電気が走る。熱くて堪らない、命の液体が中に注がれた。

「クウウウウ…。タケルウウウ…。愛してるっっっ…」

「出てる…。あつたかい…。最後の一滴まで、彩の中で出し尽くたい…」

最後まで、彩を離さない。死んでも彩は俺の女房だ。宿したい。俺の命を彩の中に…。ドクンと出た最後の一滴と思っただが甘かった。

「タケル…」

俺の下で、にやっと笑う不適な妻。調子に乗った時の妻の技が来そうだった。

「まだだよっ！」

腰に両脚をクロスさせた妻。はいはい、お好きにどうぞ。俺は諦めた。これ結構、気持ちはいいんだけど、絞り取られる男は恥ずかしい。

「ふん！」

妻の声が上がリ、膣圧をかけられると、ドクン、と膣内でチンコが弾く。

「出たあ！」

妻の表情が和らぐ。でもまた。

「…」

来たよ。ドクンドクン、と証拠にもなく二回鳴る節操のないチンコ。

「出る出る」

嬉しそうに俺の腰をぺたぺた叩く妻。

「お、おめえ、完璧、遊んでんだろが！」

「これは、私のチンコだよ！ 煮ようが焼こうが私の勝つてだよ！
ぐおらあっ！」

「煮てえええ、焼いてえええ、どうしよってんだああああ・・・」

いくら気張ってみても、大事などこくわえ込まれたら、勝てる見込みはない。その証拠に、ドクンと、くどいチンコ。ああ、もう勝手にしろや。病人相手に…。てか、こういう妻だから、俺は生きてられるかもしれない。

「まだまだ！ クラッ！」

ドクン。情けないけど、気持ちいい…。

六人がリビングに集まった。でも、笑うよなあ。一人だけ渋い黒

のスーツ、オールバック気味にセットした髪、その強面も手伝わ
まるでヤクザ。今夜の智喜は俺達力ジユアルとはまるで別世界野郎
だ。「じゃ、作戦通りに行くぜ」と俺が話し初めても、皆、そんな
智喜の緊張面をクスクスと笑ってる。

「タケル…。俺、やっぱり間違ってたかな？」

智喜のその一言で、限界を越えた皆は爆笑した。

「今更、間違いも正解もあるかよ。ばあちゃんに揃えて貰ったその
スーツで決めてやれ」

仕方なく俺はフォローに回った。

「そだな。シャ！行くぞ！」

左の掌を右の拳で打って、智喜は立ち上がった。

「だから、喧嘩しに行くんじゃないっての」

キッチンカウンター隣の椅子に座る由美が突っ込むと、また皆は
笑いだす。

「女子チームは…OK？」

女子三人に目を配った。

「うん。私がお姉ちゃんに連絡したから。お姉ちゃん、由美と美紀
に会っの楽しみにしてるよ」

由美の隣に座る妻が、OK！と指でサインを作った。

「早く行こうぜ。腹減ったよ」

美紀の隣、雄二が立ち上がった。

「もうちょっと、タケルの家に居たいなあ。私、初めてなんだもん」

唇を尖らした美紀は呆れ顔の雄二を尻目にソファーに座ったまま。

「今度、ゆっくり遊びに来いよ。なんなら、皆でお泊まりしてもいいぜ」

「それ最高！」

美紀が立ち上がると、彩と由美も腰を上げた。

「ヨシ！行くぞ」

俺は智喜の背中を叩いた。

家を出る時、また由美と目が合った。さっきから、吐き気が止まらんけど、ここまで来たら、間違いも正解もない。

あなたの名前は？ 生年月日は？ 住所は？ 年齢は？ 等々、検査といっても退屈な問診。明日はもう少し詳しい検査するって話。首を撫でながら検査室を出た俺は一階のロビーを通り過ぎようとし

た。朝と変わらず、騒然としたロビー中に一人俺を目で追う女の子。同じ学校の制服を来ている。黒髪のロングストリート、切れ長の大きな瞳、目鼻立ちが整った色白の綺麗な娘。あんな娘、学校に居たかなあ？ まだ俺を見ている。椅子から立ち上がった彼女。俺が足を止めると、胸の前で両手を結んだ彼女はゆっくりと俺に向かって歩み始めた。で、誰？

「タケル！」

振り向けば、そこに妻が立っていた。

「もう！ 心配させて！」

怒ってるんだか、泣いてるんだか、俺に駆け寄る妻は大人っぽい普段着。ヤベえなあ…、頭を掻いて言い訳を考えてた。

「彩！ ちょっと話が」

ロビーに振り返れば、真紀さんが俺に駆け寄る。妻と真紀さんは同時に俺の傍に到着した。

「彩…」

見詰める真紀さんに、私は不吉を感じ、夫と話す前に、まず、その真剣な眼差しの意味を知りたいと思い、バッグからハンカチを取り出して涙を拭いた。

「タケル…。先、病室に帰ってて。真紀さんとちょっと話していく

から
「

「ああ。じゃ、上で待ってる」

妻の腕を軽く叩いた。丁度よかった。その空きに、言い訳考えよ。エレベーターの乗り口に向かう前に、もう一度、ロビーに振り返ったけど、彼女の姿はもうなかった。

摩擦

俺の家を出た六人。初めて姉貴に会う美紀ははしゃいで、俺達の周りを飛び跳ね、彩と由美に絡み着く。初めてお袋に会う智喜は：胃が痛そうに敵つい顔を曇らせて俺達の最後に付いていた。初めての何かつてのは女の方が気持ち座る。改めて思い知らされ、俺は笑って智喜の肩を叩いた。

「裕ちゃんに連絡するよ」

大通りに出ると、雄二がポケットから携帯を取り出した。「じゃ、うちらこつちだから」と俺達に手を振る彩。最後まで俺から目を離さなかつた由美に、心配すんなって、俺は軽く頷いた。

タケルはきつと何かを隠してる。私はタケルの妻。大丈夫だと自分を言い聞かせていたけど、夫の変化に気が付かない訳はない。「男の行く手を邪魔する女だけにはなるんじゃないよ」お母さんの言葉が最後まで私に口を噤ませていた。

「彩…」

さっきまで、はしゃいでた美紀が顔付きを変えた。

「タケル…。何かいつもと違うくない？」

私達三人に共通してる所。皆、鋭い。

「大丈夫だって。タケルの奴も緊張してるんじゃない？」

美紀と腕を組むと、彩が私に送った視線。行き交う車のライトに照らされ、微かに覗かせた不安を見逃さなかった。彩も…きつと気付いている。タケルの家で皆に冷やかされてた薬指の指輪。何故、タケルは彩に贈ったんだろ？ 私は必死で笑顔を作った。

指の摩擦に、ど、どうにも堪えられなくなった。それでも、くちやくちや、と掻き回される粘膜。タ、タケルってえ…、と筋肉が浮かんだ勇ましい二の腕にしがみつく私。まだあからさまに声を上げるのは恥ずかしい。でも、我慢しきれない。覆い被さり、唇を付けて吐息に変えた声を口の中に吐き出す。音と指が止むと、私の唇はタケルの胸に落ちて固くなった乳首を口に含んだ。

「うわ！ 撥ってえ！」

いきなり、体をくねらすタケル。笑いを堪えて、私は両腕を押さえ込んだ。

「何！？ じつとしてなよ」

「マジ、俺、それ苦手なんだよね」

いつも、タケルにからかわれっぱなの私はずいとそのウィークポ

イントを見つけ、喜ばずに、からかい返さずにいらねず、えっへへへ…、タケルの乳首に笑いを吹きかけた。

「お願いだから…。由美…」

無視して、再び、その固い乳首を口に入れて舌で転がしてやると、由美いいい、とタケルは私の髪を両手で乱す。

「も、もうダメだってえええ…」

タケルが震えだすと、私はちゅっと唇を乳首から離れた。

「あー！ 助かったあ！」

「大げさにい！ バツカじゃない！」

明るい部屋が招く恥ずかしを、明るい雰囲気か払拭させてくれて、その機に、私はタケルのチンチンを握り締めた。

「だって、マジ、弱いんだよね。乳首」

私の乱れた髪を耳に掛け、甘いマスクを強張らすタケル。益々、悪戯したくなる。

「タケル君…。そんなに弱いんだあ」

私の唾液で湿った乳首を指で撫でると、止めて！ とタケルはまた身をくねらせた。

「あんだ、可愛いねえ」

仕方なく、自分の唇をタケルの唇に戻し、舐めよつか、と囁くと、タケルは私の髪を撫でながら、うん、と瞳を頷かせた。するつと滑り落ちたタケルの体。欲しかったものに到着すれば、すぐにそれを口に含む。熱い…。口の中一杯。ぴくぴくと私の舌に合わせて反応するチンチンが可愛い。今だけでいい、これは私のもの。そう思えば、舌も鼻息も激しさを増し、指先もタマタマを騒がす。深く呑み込まれ、もう限界の所まで到達すると、ゆっくりと唾液まみれのチンチンを吐き出した。まだ足りない。汁が流れ出る先っぽを口に含んで舌をロールする。ここも舐めておかないと、食欲なまでの舌は裏筋を震わせた。

「う、うううん。由美…。上手すぎじゃん」

夢中だった私。気が付けば、タケルが私を見下ろしていた。

あのラブホの一夜はまだたどたどしかった由美と俺。この日、由実の部屋で絡み合う俺達は親友同士に戻ったセックス…。変な表現か？ 親友同士が普段の遠慮ない会話を延長させてるような、と言えは説明つくかな？

「おめえ、何やってんだよ？」

チンコを前後に振り、べろんと出した舌に、パンパンパンパン、ビートを響かせて亀頭を当てる由美。へへへへ、と笑って、またその亀頭を頬張った。たく、人のチンコで遊ぶなんての。こんな感じの茶目っ気がある絡み合い。

無理して大人ぶって喧嘩売ってくる彩も可愛いけど、いつも自然体で俺らワルがきを姉貴風に怒鳴る由美も素敵。ふざけ合い、笑い合い、「元気だしなよ！」と背中に気合を入れられたり、時には真顔を突き付け合って相談話に明け暮れる、極一般的な由美との親友関係。今後は、それを表面上では保ちつつも、お互い、人肌が恋しくくらいに寂しくなれば、こうなっても……いいんじゃないかって。これも、ある意味で親友関係だろ。由美の提案は正しいと実感した。

「由美……。69（シックスナイン）しよ」

親友同志だから恥ずかしくないのかも……。他の男とは、いくら頼まれても出来なかつた行為もタケルに言われれば、「うん、いいよ」すぐ体を逆さに向ける。「おう、由美。相変わらず、今日も可愛いな」そう言つて、じゃれてくるタケルの憎めないキャラも、タケルとなら何でも出来る、私を開き直つたセックスに導いていた。

雄二から連絡があつた後、私は彩と初めて会つたしゃぶしゃぶ屋さんに向かつた。今じゃすっかり、彩のお母さんとも仲良くなつた私。息子達に交友関係を広められるとは思つてもみなかった。でも、驚いたあ。彩のお父さんが、あの頃、誠達が目の敵にした和巳つて子だなんて。高校の時だった。週末で賑わう歩行者天国、くわえタバコで仲間達の先頭をきつて我が物顔で歩いていたり、セントに皮ジャン。大人も子供も怖い道を空けていたけど、「あれが噂に聞く和巳つて奴ね。何偉そうに」私は別。和巳の集団は進路を変え

ない私達の行く手を遮る。裕子…、と私の腕を引つ張って道を開けようとする芳恵を振り切って私は和巳に向かって進路を譲らなかつた。

「どけよ。お姉ちゃん」

裕子つて、震えた千佳の声が背中では聞こえた。胸を突き合わす私と和巳。サングラスの中の目。よく見ると、その低温には似つかわしくない可愛い目してた。私も若かったなあ。

「はあ？ どくのはおめえらの方だろ」

「思い出した！」

夕食時、ビールを飲み干した和巳が急に声を上げた。

「何よ！？ お父さんいきなり」

驚いた緑がお箸を止めた。

「い、いや、タケルの母ちゃん」

「裕ちゃん？ あんた、知ってたの？」

二人とも同じ年。裕ちゃんは和巳のライバルの彼女。うん、知つても可笑しくない。そう言えば、和巳の話をした時、裕ちゃんは

クスクスと笑ってた。私は冷静に空いた和巳のグラスにビールを注いだ。

「にしてもよう。智喜の奴、恐ろしい人に筋通しに行ったな」

「はあ？ 裕ちゃんみたいな綺麗な人が恐ろしい？ 何言ってるの？」

「綺麗なバラには棘があんだよ。ま、見ものだけだよ」

和巳はニタニタした唇をグラスに着けた。

「姉ちゃん、聞こえねえのか？」

和巳の脇から出てきた男が私の肩を突こうとした。触んなくて！ その男の手首を掴み、外側へ捻った私。父から護身術にと手解きを受けた合気道は二段。ぐわ！ と捻りられた手首に合わせて体を傾ける男。丁度、いい高さに顔が落ちてきた。よかったあ！ 今日 はジーパン履いてて。顔面に蹴りをお見舞いしたら、ちよつと鼻血が吹き出したみたい。ざける！ 今度は和巳が私に掴みかかってきた。その手を軽く押し上げると、から空きになった男の急所目掛けて、また足が出た。我ながら綺麗に決まった急所蹴り。ぐがっ！ 悶絶を打ち、和巳がうずくまった。

「誠も大したことないねえ！ こんな奴らに苦労してんだもん」

「あ、おめえ、ま、誠の野郎のう……」

真ん中を押さえ、うずくまりながら私を見上げる情けない和巳に野次馬達も失笑していた。

「女なんかじゃないよ。時々、暇潰しに遊んでやってるだけの仲さ。私は裕子ってんだ。この街で、か弱い女相手にふざけたまねしたら、私が承知しねえからな！ よく覚えとけ！」

私の怒声に、和巳の仲間達がさつと道を開けた。

「さあ、行こ！」

震える芳恵と千佳にこの上ない笑顔で声を掛け、私は何もなかったように澄ましてその場を離れた。

裕子……。何処にでもある名前だけど、誠に結び着く裕子はその娘しかいねえ。誠に元カアチャンの名前なんて聞かなかったし、彩もタケルも「ママ」「お袋」としか言わなかった。涼子からタケルの母ちゃんの店で髪切ったって話を聞いて、「裕子」って名前を聞いた。何か引つかかっていたんだよ。あの娘ねえ。はいはい。あの時、立ち上がって殴り掛かる事は出来た。現に、真横で倒れてた賢二もこの女……。と起き上がるうとしてたけど、俺が野郎の襟を掴んで静止させた。上から睨み付ける、根性座った涼しげなああの娘の目。こんな女もいるんだ、俺は憎しみを越えた桁外れを感じた。それから暫くして、俺は同じような目をした涼子に惚れたんだ。そりゃ、こ

いっすら馬合っわ。

「何、あんたニヤついてんの？」

「お父さん、キモーい」

向かいに座る両極端な二人。雄二は店の中をキョロキョロ、ちょっと可愛い店員が通れば、美紀が居ない事をいい事に、尖った唇と厭らしいオヤジ風の目付きで、いい感じじゃん、と小声でケツを追っていた。確かに、割烹着風の制服が似合う、いい感じの女子大生風のお姉さんだけど、んな事はどうでも。そんな俺らをものともせず、俺の真向かいに座るオールバックの渋い野郎はじっと鍋からの湯気を見詰めたまま微動だもしない。ま、気持ちは分かるけどよ。

「智喜…」

たかがお袋じゃねえか…。俺は湯気の向こうの智喜を覗き込むと、智喜ははっと我に返った。

「うん？ う、うん」

「俺と雄二が居るんだ。もうちょい肩の力抜けよ」

「お、おう…。そ、そうだよな」

智喜は怒った肩を落とし、天井に向かって一息つく。その時、

おまたせえ！」と聞き慣れたお袋の甲高い声が響いた。智喜が一気に立ち上がった。

「初めまして！ 智喜って言います。佐紀さんと付き合ってます」

「バカか、おめえ！ 早いどころか、何のネタフリもしてねえつての！」

「彼：都内から来たの？」

目を見開いたお袋は俺と雄二を交互に見た。姉貴が地元に戻ってるなんて知らないお袋。当然、そうなるよなあ。どう説明しよう？ ほらまた、吐き気がしてきたよ。

「いつプロポーズしてくれるんだろ？」から続く美紀からの雄二の愚痴話を聞く限りのはこの二人には安泰。「でもそんな事どうでもいいぐらいに安心しちゃうんだよねえ」と愚痴話が徐々にぼやき話に。ごちそうさん、って感じ。時間を忘れて美紀の部屋で女子トークを咲かせていると、「ただまあ！」と下から声が。

「あ！ 帰ってきた。パパ」

「えっ？ お父さん？」

慌てて、手節で髪を梳いた。タケルのパパだあ。

「今日、由美が家に来るって連絡したら、仕事早めに切り上げて。でも、思ってたより早いよ」

美紀がカーペットから腰を上げると、私もベッドから立ち上がった。ど、どしよ。

「今夜、家でご飯食べて行くでしょ？」

急な美紀の申し出に言葉が詰まった。

「え？ そ、そんな…」

「パパにもそう言ってるから。一緒に食べよ」

心の準備が…。私の動揺をよそに、行く、と手を引く美紀。タケルのパパで私の叔父。初対面の緊張が階段を降りる足を震わせた。

「初めまして…。由美です」

美紀から見せてもらった携帯画像より可愛い。緊張しているんだろうか、少し顎を引いて肩に入っている様子の彼女。きりつとした二重瞼と口元が真紀姉そっくりだ。何か、真紀姉に見詰められているようで安心する。

「初めまして。美紀とタケルの父です」

美紀が吹き出して、緊張気味の俺たちの間に入り、俺が下げたデパートの袋を取り上げた。

「何買って来たの？」

「先週、うちのデパートの地下にオープンしたイタリアンの惣菜店から夕飯買って来た」

「うわあ！ お腹ペコペコだったんだ。食べよ食べよ」

「私、手伝うね」

二人はキツチンに向かった。今夜は娘と姪とで飯か……。俺みたいな悪い男がこんな幸せ味わっていいのか？ 細く笑って玄関を上がった。

俺の顔を跨いだ由美。眼前に曝け出された陰門対して、「いやあ、ホテルで見たときよか、綺麗になってねえ？ スゲエなあ」と褒めたつもりだった。

「あんだ、親父かっつての！」

チンコをスポツと吐き出した由美が上半身を立たせた瞬間に舌をクリに着けると、ううん…、と艶声を上げて、由美はチンコに唇と舌を戻した。薄い陰毛に覆われた大陰唇が由美自身の愛液と俺の涎で見る見るうちに光沢を発し、小陰唇は舌先にそのびらびらとした感触がなくなるほど蕩け、クリは勢いよく保護皮から由美の好きなピンクに染まって、その興奮の証としてこりこりと固さを維持して

いる。本当に落ち着く。

三学期早々のアマダくじで決まった席。俺の右隣に来た彩を越して、同じ並びで彩の列から三列目に座る由美。その視線が気になり、ちらちら横を向くと、「何見てんだよ？」と彩から勘違いされる始末。そのアマダを引く時も、ここ、と偶然、俺と由美の指が重なり「どうぞ…」「いやいや、私、こっちにする」豪く他人行儀な二人。「セックスは結ばれるものであると同時に遠ざけるもの。こりややべえな」と昨日バイト帰りに、あの日と同じ白い息を吹かし上げて悩んでたら、携帯が振えて、「ヤベエ、由美からかな？」と思ったら、<俺…最近マジ恋してんだ。まだ片思いだけだな。ウツフフ> 雄二からどうでもいいメール。そんなこんなで、今日になって由美が俺の悩みを解消…？ いや…どうなんだろ？ とにかく、今その由美の陰門を味わってる俺。水月と別れてまだ一か月も経っていないのに…。昔なら、昨日はその女でも今日はこの女と開き直る事が出来たけど、二人に対しては、そんな劣悪な感情を持ってない。でも、男って奴は不思議な生き物で、開き直らないければ、別の女が浮かんでくる。彩…。彩は俺達の親友で、俺の…。もう限界だった。俺は由美のお尻を軽く叩いて解除を伝えた。

タケルから下りて、体の向きを変えた私はタケルの横に寝転がった。私に覆い被さるタケル。その口周りはぎとぎとに艶が出ている。何ももう、素手で拭ってあげると、タケルの舌が私の口に入ってきた。絡みあう舌と舌。入れて…と言いずらかったけど、タケルは私の両脚を開き、あの日から欲しくて、待ちわびしかったものを、うっ、子宮口に届けてくれた。

「タケル…」

あの日以上の振動と刺激が私の膣内で暴れる。下からの焦点を外さず、私はタケルの瞳に包まれていたかった。あなたの中に居る人は誰だかわかっている。でも、理屈は何でもいいから、一時だけ私を代わりにして。こんな汚れた私だけ…。曇り始めた視界。押し寄せる波を返したくない一心でタケルを抱き寄せる。「愛してる」なんて言ったら、親友じゃいられなくなるから。狂いだしてしまおうから。言えない分だけ、気持ちの中で言わせて、「愛してる。タケル…」

今日の彩はちょっと化粧気があって、妙に色っぽかった。チンコ立つじゃねえか。いやいや、そんな事はどうでもいい話した。

俺は最後まで妻に病んでる事を言えなかった、その言い訳を考え、病室の中を頭を掻きながらうろちよろしていた。由美が喋ってんじゃねえだろなあ？ だったら、「何で由美が知ってて、私が知らないの!？」って事になるよなあ。結論が出ないままに、病室の扉が空いた。いいや、謝るしかないや。俺は覚悟を決めた作り笑顔で妻を迎えた。

「タケル…」

そんな悲壮な顔止めてくれよ。やや天井を見上げて溜息をついた。

「あ…彩…。ごめん。隠し通すつもりはなかったんだと…：…こんなのは別に…」

「タケル」

俺の話を遮る妻。その表情は大人び過ぎて怖かった。

薄い桃色

意識が遠退き、ピンクの光景が白く霞んで薄桃色になるほど気持ちいい、由実の体内。オツパイに弾む俺の体はその揺れをより激しくさせた。

「う、くくくうああああ…。タケルウウ…。ききき気持ちいい？」

由美に倒れ込んでいた上半身を上げた。

「ああ、気持ち良すぎて死にそうだよ」

「し、死んじゃだめだよ」

「そ、そ、そりゃ洒落になんねえよな」

由実のクリを弾き上げる。

「い、うっああああ私が死んじゃうよっつっつ…」

「死ぬなよっつっつ…」

ふっくうっつっ…、由美が笑うとチンコが締め付けられて、気持ちよさも倍増。溜まんない…。

「マジ、気持ちいいよ！ 由美いいいい…」

ぐちゃぐちゃ、チンコが濡れ壺を突く音も、由実の、うぶぐっつ

熱い息と液体が私の中から噴出したようだった。まだ私はタケルの瞳を離さない。私はいったけど、タケルはまだ。

「好きにして…。私なんか好きにしていいいから…」

霞んだ視界と荒くなった呼吸の中でも、その瞳は離れずにいから、思わず、私はタケルの頬を撫でた。

「そんな言い方するなよ。由美は…いつも綺麗だよ」

もう泣いていいよね。でも、愛してる人の前で明るい私で居たかった。

「後ろ向こうか？」

嬉し涙も見せなくなかったから。タケルはベッドから下りて後ろ向きになった私の腰を引き寄せる。丁度いい高さのベッドだなんて、それまで知るよしが無い。両膝をベッドから降ろしてベッドに覆い被さり、お尻を突き出した私。チンチンがずぼっと深く突入されると、瞬時に、うわっ！ と頭を天井に向かって上げた。素早く力強いタケルの腰に勢い付けられたチンチンの先端が、ぱんぱんずぼずぼ、と子宮口を襲う度に、嬉し涙がピンクのシーツに染みる。

「タタ、タケルうつつう…。マジ、ど、どうかなっちゃんうつつうう…」

タケルがチンチンのその速さを上げ、汗が私の背中にぽたぽた落ちる頃、覆い被さったタケルの熱い息を首筋に、指による激しい摩擦をクリに感じた。

「あつ！　だつ、だめって！　あああ、そ、そんなつ、だめってえええ…」

今度は言葉裏腹な叫びがシートに染み込んだ。幸せだった。明日になり親友同士に戻らなきゃいけないって分かっているても、幸せだった。次は聞こえない「愛してる」がシートに染み込む。

「ゆゆゆ、由美…。クリを摘まもうとしてんだけど…なかなかヌルヌルで…。ほら、ほらほら、摘まもうとしてんの分かるう？」

「わわ、わ、分かるよう！　好きにして！　私の体…。タケルの好きにして！」

水月と別れて、わがままだった自分自身を多少反省させるつもりで大人しくさせておいたチンコに、由美がガソリンを注入した。

完全復活。

その加速は限界点を振り切り、後は余力か、精神力か。しかし、それらももう絶えようとしていた。

「タケル…。まままま、またいくうよううっ…」

シートに籠もった由美の声が確かに聞こえた。何処で出す？　ダメなら、いつもみたいに、おどけてなかった事にすりゃいいんだ。

「由美…。口に出していい」

私にもう躊躇うことなんてない。う、うん…、多分、声は届いたと思う。タケルが最後の暴れを私の中に、ぐうあああああ…、振るった。堪らなくなり、私は頭を起こす。

「いつ、いくぐぐううう！」

ぐいつと奥深く一突きしたタケルのチンチンは、由美っ！ と叫ぶ声に合わせてすぐさま抜かれた。タイミングもなにも、初めてだから分からない。取り敢えず、咄嗟にベッドから体を起こした私は床に座り込み、チンチンに向けて口を開いた。うわわわわ…、来る来る来る…。

女子三人でお姉ちゃんのマンションに着く。ふうっ、息を吐いた美紀ときよるきよる視線が落ち着かない由美。

「そんな緊張しなくて大丈夫だよ」

ドアの向こうから、はい！ とお姉ちゃんの元気な声が聞こえた。

「俺達がお袋に会う。その間に、彩達は姉貴に会ってくれねえか？」

待ち合わせたマツク、タケルが私達に言った。啞然とした由美と美紀だったけど、私はその意味が分かった。

「お袋だけ納得させても…。姉貴がお袋に筋通すいい機会だ。そうすりゃ、智喜と姉貴は大っぴらに付き合える。そう思わねえ？」

ストローをくわえる前に、タケルが智喜に視線を送ると、智喜が不安げな表情を俯かせた。

「だね。女同士の方がそういう話できんじゃないかな。男どもに任せてばっかいらんない。私達もやるっよ」

そう言っつて、由美が美紀と私に目配りしてくれた。

「うん。私もお姉ちゃんに会いたい」

美紀が雄二の腕にしがみついた。

「お姉ちゃんならきつと分かってくれるはず。お姉ちゃんもきつとママに話すタイミングを欲しがってるよ。じゃあ、ちよとお姉ちゃんにメール打つね」

そう決まったら、早速、段取りだ。私は鞆の中から携帯を取り出した。

「皆、悪いなあ…。俺らの為によ」

「もう、やめろよ」

タケルが智喜の背中を叩くと、智喜は薄らと笑顔を上げた。

「でも緊張するなあ。お姉ちゃんと初対面だもん」

テーブルに両肘をつき、美紀が顔を両手で覆った。

「出来たら俺から佐紀姉に美紀を紹介したかったよなあ」

「そりゃそうだよな。姉貴が美紀に余計な事喋らないように見張っておかねとな」

「え？ 雄二、私にまだそんな内緒事あんの!？」

「い、いや、そういう訳じゃねえよ。あ、でも、よかったよなあ。

今日、裕ちゃんのとこで髪切つといてさ。最高に可愛い美紀を佐紀姉に見せられるよ」

「調子よすぎ！ おめえ」

皆の笑いにつられ、指を震わせながらメールを打つと、五分もしない内に「やるやる女子会！ 彩のお鍋、皆で食べよう！」とお姉ちゃんから返事が来た。

「よし。姉貴のマンションにお袋を連れて行く。ある意味サプライズだけど、それで、姉貴も逃げらんねだろ」

タケルはオレンジジュースを飲み干した。

「という訳なんだよ」

仕方なく全てを話した俺。口を半開きにするお袋。段取り度外視で思い切り先走って湯気の向こうで俯く、やれやれの智喜。鍋に肉と野菜を放り込んで、最早、食う事しか頭にない雄二。俺も体調忘れてやけ食いついたかった。お袋の溜息が湯気を吹き飛ばす。何でも言ってくれ。

「呆れたけど…。そんなのもありよね」

智喜が顔を上げ、雄二が箸enokと箸を止めた。

「タケル、覚えてる？ 私がいくら反対しても、あの子は東京で一人暮らしするって聞かなかった。まあ、可愛い娘には旅をつて最後には許してやったけど…。いつかは帰って来ると思ってた。あんな甘えん坊に一人暮らしなんて勤まるとはとても思えなかつたから」

お袋は笑顔で雄二から箸と箸を取り、鍋に肉と野菜を入れ始めた。

「キャバクラで働こうが、ソープで働こうが、もうあの子は二十歳の親の構う範囲越えてるよ。もう勘弁してって感じだよ。それに…」

お袋の視線が智喜が向いた。頼みます…。

「こんな、正直な彼氏が居るんだもん。私は安心だよ」

今度は俺の溜息が湯気を吹かせた。で、何で、おめえが智喜より先に泣くんだよ。雄二！

「あ、あの…。お、俺…、この間まではとんでもない不良でした。でも、タケルや雄二と出会って、俺…」

言わなくていい事を。もういいてよ。智喜が泣き崩れるとお袋がハンカチを渡した。俺は真向いの雄二に、洗って返せよ、とハンカチを放り投げてやった。

大噴火したタケルの精液は頬に、目に、鼻の穴に、顔面の至る所、きやはははは！ と何だか可笑しくなつて笑えば、髪にまで飛び散り、何とか口に先端をくわえる事が出来た。どくどくどろどろと尿道から流出する残りの精液を舌で受け止めながら、私はタケルを見上げた。

「ご、ごめん。的外しちゃったよ。別に業と顔射したわけじゃねえんだけど…」

もう業とでも、業とでなくてもどっちでもいい。タケルだから、こんな初めての事ができたんだと、ううん、とチンチンを頬張りながらタケルに答えると、何もかも出尽くしたチンチンを舌の感覚で確認し、そのまま、ごくんと全てを飲み込んだ。

「ゆ、由美！ そんなっ！」

そう言われても、もう飲んだ後。この体験も初めてだった。飲むんなら百万回死んだ方がましと、最後まで残しておいた女のプライドもタケルだから解放出来たと思う。しかも、もうちょっと味わい

たいと、ねちよねちよぐるんぐるん、舌をその先端に纏わり付かせ
る発想と行為なんて、タケル以外には絶対無理。

「くはははっふっふっ…」

タケルは情けなく眉をへの字にして微妙に腰を揺らした。擦った
いのかな？

いいのかな？ 由美に飲ませちまったよ。にしても、いった直後
に舌を亀頭に舌をこねくり回されちゃ、擦ったくて仕方ない。でも、
AV擬きの由美の精液塗れの顔をなんとかしなきゃ。苦悶の表情
を浮かべたまま、俺は周囲を見回す。ピンクの布ケースに入ったテ
ィッシュボックスがテーブルの下にあった。

「ゆ、由美…。ちょっとティッシュ取りに行くよ」

そうだ。顔を何とかしなきゃ。私はすぼんとチンコを口から抜く
と、タケルは、そのままだぞ！ と顔に指を触れかけた私を静止さ
せてテーブルの下のティッシュボックスにダツシユした。見てはな
いけど、私の顔面、えらい事になってそう。大量にティッシュを抜
き取ったタケルが私の顔にその束を押し当てた。

「大丈夫大丈夫。平気平気」

そのティッシュの束を取り自分で顔を拭き始めた。

「髪まで飛んじやったね」

髪を摘まんで拭く私。またティッシュを抜き取り、傍に座りつたタケルはチンコを拭きながら照れ臭そうに笑った。

「悪いな。上手く口に入らなかったよ」

私も照れ臭くなり、ふははは、笑った。

「こんなの初めて。いい経験させてもらったよ」

「マジで？ 初めてが俺でよかったの」

あんたしかダメだよ、とは言わずに、うん、と笑顔で頷いてタケルのティッシュを取り、私のティッシュと一緒に丸めてゴミ箱に捨てに立った。タケルも立ち上がり、私を後ろから抱きしめてくれた。もうカーテンには夕日は透けてない。

「シャワー、一緒に浴びようか？」

もう何の勇氣も要らなかった。

「おう、浴びよ」

恋なんて…しちゃいけない。

「にしてもよく気が付くねえ」

空になったお袋の小鉢とグラスを満たした智喜に、お袋が関心の眼差しを向けた。

「こいつ、由美と一緒に居酒屋でバイトしてて、客のお給仕には慣れてんだよ。因みに、親父と彩の親父さん、ヨッチャンとオヤツサンも智喜の店に行ってるよ。なあ、雄二？」

「おお、うちも親父もお袋も、よく気が付く子だって褒めてたよ」

「そう言えば、芳恵が、その居酒屋にすっごいカッコいい子が居たって言ってたけど。それ、智喜の事だったんだね。智喜の顔見て分かった」

早々とお袋の呼び捨てにしてくれたお袋。智喜の野郎がそれまでの膠着した顔とは打って変わった笑顔で頭を撫で、俺と雄二は顔を合わせて静かに笑った。

「タケル。おめえ、あんまり食わねえなあ？」

智喜が俺の小鉢に視線を落とした。

「あ、ああ、来る前に彩がちよこつとしたもん作ってくれてさ」

「ほんと、タケルも雄二も佐紀も、いい彼女彼氏持ったよ」

「え？ 美紀も入ってるの？」

肉を頬張り、雄二がお袋に顔を向けた。

「当然でしょ。あんな素直で素敵で可愛いくて、おまけに根性座ってる彼女。普通は私になんて会ってくれないんだけどね。昨日、髪切りに来て、話が弾んでね。雄二が居眠りしてる間に『私も彩や由美みたいに裕子さんの事、ママって呼んでいいですか？』って言うてくれた。『いいよ。で、敬語もなしね』って嬉しくて涙ぐんだよ。芳恵と勇作が気に入るはずだよ」

それ聞いて、当然、雄二も涙ぐむ。好きなだけ泣いてる。

「で、智喜は私の事、何て呼んでくれるの？」

「あ、ええつと…」

困った視線を向け、智喜は俺に助けを求めた。

噂以上に綺麗なお母さんだ。一瞬、目が合っただけで俯いてしまふ。こんな綺麗な人を何て呼べばいいんだろ？

「実は智喜さあ。昔、ワルやってた関係上、親父と彩の親父さんと先輩後輩関係なんだよ」

そつだよ。あの誠さんの元奥さんを雄二みたいにちゃん付けで軽い呼び方出来ねえよ。

「あの…。俺は…裕子さんで…」

「何か、さん付けつても堅苦しいよね。へー、誠と和巳の後輩な

んだ？ やっぱりワル同士って色々繋がってんだね」

タケルが俺を見たその意味を瞬時に把握した。親父さんの事は当然「誠」でいいよ。彩の親父さんの事を…「和巳？」裕ちゃんと彩のお袋さんに何の接点が…？ 裕ちゃんが親父さんと付き合ってた時に何か接点が…？ それにしても呼び捨てにするほどの？ タケルは口をぱくぱくさせて言葉詰まりになるほど驚いてる。無理もないなら俺が聞くしかない。

「ねえねえ。裕ちゃん、彩の親父さん知ってるの？」

やばい！ と思った瞬間はもう遅かった。この子達はどうでもいい事に限って聞き逃さない。仕方ないか。私も正直になる。ふうう、と肩から力を抜いて和巳との話をする決心をした。

垢抜けたお姉ちゃんと人見知りしない由美と美紀が打ち解ける時間なんて、ほんの僅かだと思ってた私の予想は大当たり。私が寄せ鍋を作ってる間に、お姉ちゃんの両サイドは二人に取られた。苦笑いのままに鍋が完成すると、「タケルもいい加減なのよねえ」「そんなのだったら雄二どうなんのよ！」「私も男作ろうかなあ…」「そんな時は私に相談してよね。しっかり品定めしてあげるから」多少のチューハイが混じったガールズトークが鍋をつつきながら炸裂。

たまの男抜きは本当に落ち着く。あ、でも本題を忘れちゃだめ。でも、もちよつと楽しんでもいいか、と思いきや、私の携帯が振えた。ちらつと見れば、案の定、旦那から。でも、もちよつといいか。てか、暫く男ごときに水を刺されなかつた私は携帯の電源を切つた。チューハイをぐいぐい飲み、女子同士の賑わいに酔いしれた。

青ざめる俺と智喜。腹に手を当てて笑いを堪えるバカ一人に合わせて、「和巳つて格好だけで弱すぎだつての。金蹴り一発だよ」と開き直つた男口調で話すお袋。そりゃ、昔話だからしょうかねえけど、勘弁してくれよ。智喜の顔を眺めながら、俺は頭を掻くしかなかった。

「お袋……。それ、彩の親父さん、覚えてるかな？」

「女にやられた事なんて死ぬまで忘れないよ」

笑いで震えながら答えたお袋。溜息とともに、俺はもう諦めた。

「ねえ、あの子達と何処で落ち合つなの？」

一通り笑い終わって、お袋はやつと話を変えてくれた。

「ああ、家で。彩達が姉貴を家に連れて来てくれる段取りさ」

「それ無理だよ」

お袋の言葉に、俺達はお袋に顔を向けた。

「あんたら、女の子の事何にも分かつちやないねえ。女が四人も揃えば夜通し腰上げないよ。これ食べたら、佐紀の部屋行くよ」

何も言わずに、俺達は顔を見合わせた。ま、手間が省けていいか。取り敢えず、俺は妻にメールを打った。

曇り始めた

私の髪を撫でるエアコンの温風とタケルの吐息。薄暗くなった部屋の中で背中に波つ打つ体温が心地いい。

「シャワーいく？」

振り返らず、胸元でタケルの手を包む。

「一緒に？」

まだ振り返らず、その手を握り締めた。

「うん」

私を振り返らせてくれたタケル。その唇と瞳が私に落ちてきた。

「また…洗ってやるよ」

「はっずかしい」

籠った呼吸の中、静かに答えたら、くちゅくちゅふうふう、二人の粘液と鼻息が更に激しく混ざり合った。

家に帰ってきて、部屋に上がった時と同じ、どうやって部屋を出で、階段を降りたか分からない。寒い家の中、私はただタケルにしがみつき、その吐息を吸い込んで、体を外側と内側から暖めていた。

明かりがつけられたバスルーム。他人の家のバスルームには雄二の家のにしか入った事なかった。由美が俺の体から離れると、俺は周りをきよろきよろと見回した。俺の家のバスルームと同じくらいの広さ。クリーム色のタイル壁と十分に足を伸ばせて入れるバスタブ。換気用の小さな出窓には色とりどりの入浴剤の小瓶が並べられていた。

「なーに？」

俺の定まらない視線に気付き、全裸の由美が俺を見上げた。

「いやあ、綺麗な風呂だって…」

くすつと俯き気味に、可愛く吹き出した由美はそのままシャワーノブを捻った。

「ぐあー！」

冷たい水が俺の頭に落ちてきたけど、まだ熱っていた体と神経を冷ますには丁度よかったかも。

俺と智喜はそうでも、店を出ると、食った食った、並んで腹を擦る雄二とお袋は満腹の様子。おめえらオヤジかよ。

俺達以外の奴らは皆どこにいくのか？何が楽しいのか？週末の駅前の繁華街は、人並みから聞こえる無数の笑い声、どこかのボツクスから漏れる下手くそな歌声、ゲーセンやパチンコ屋から漂う

タバコの匂いに汚染され、いつ止むとも知れない賑わいの中にあつた。何を感慨深げになつてんだ？ ポケットに両手を突っ込み、一人で気持ち悪くニヤついていると、「何か買っててやよろうよ！」お袋の声によつて我に返らされた俺。

ここのコンビニで買出しねえ……。寄りたくねえな。案の定、レジに居たあの野郎は俺の顔を見るなり、不自然に視線をそらせやがった。フツ、キモいんだよ。まあまあ気にせず、スナック菓子、おにぎり、サンドイッチにジュース、あれやこれやと、別に気を遣う必要ない姉貴と忘れっぽい女三人へ差し入れを調達した。この野郎……。そんなに俺が嫌いか？ 全く俺と目を合わせない野郎。ま、俺も嫌いだけだよ。

「裕子さん。俺、持ちますから」

そんなレジで、すばやく腰を低くして荷物持ちを買って出た智喜。

「ほんと、カッコいいだけじゃないね。佐紀にはもったいないわ」

お袋の言葉に、俺と雄二はまた苦笑いを合わせた。どうやら一人で持てそうだ。でかい袋と一緒に花も持たせてやるよ。智喜。

「さん付けなんてやめてよ。智喜」

俺の背中を叩く裕子さんに自分の頭を撫でて、いやいや、と笑いを浮かべるのが精いっぱい。

「彩みたいな奴が珍しいんだよ。初対面でいきなり慣れ慣れしくできる奴なんてそう居ねえよ」

雄二がウケる中、タケルがフォローしてくれたけど、理由はそれだけじゃない。

「あら？ 美紀も由美も、皆、初めから軽かったよ」

そう軽く言う裕子さん。あの誠さんの元奥さんで、あの和巳さんを一撃で沈めた人。俺みたいながきがタメ口叩ける訳がない。

「ここだよ」

タケルの言葉に合わせて見上げた三階建ての小さなマンション。コンビニから調子よく冗談をかまし合ってきた俺達は佐紀姉のマンションに着いた。駅前の繁華街の賑わいが醒めるか醒めないか、何気に、来た道を振り返れば、曲がった角から微かにネオンの明かりが差し込んでいた。

「そういえば、雄二は初めてだったよな。この野郎は毎晩のように泊り込んでやがるけどよ」

タケルが智喜に顎を向けると、い、いや、と裕ちゃんの手前、階段の登り口で焦ってコンビニの袋を落としかけた智喜を見て、俺はまた大爆笑。

「そりゃ、カレカノなんだもん。当然よね」

両腕を組んで、全く意に反さない裕ちゃんは相変わらずカッコい

い。

二〇三号室。佐紀姉の部屋のドアの向こうから、けたたましい女達の笑い声が聞こえる。裕ちゃんの予感は的中。こんな外まで聞こえるくらい賑やかにやってちゃ、朝まで帰って来ない。きつと驚くだろうなあ。俺達が想像している事は一緒。皆、無言で顔を見合って笑いを堪えた。

退院の日、久しぶりに雨を見たような気がした。

妻の話聞き終わった俺。全く信じられない話。しばらくの見詰め合う二人の間に、窓の外からの車の騒音、朝、通り越した踏切の警笛とドアの向こうから廊下を行きかう足跡が入り込んでいた。大きく吐いた息。妻から外れて漂い始める視界。ベッドの上に鉛のように重くなった体を落とした。

「タケル…」

「嘘だろ？」

俺に寄る妻が足を止めた。見上げる妻の目に涙が溜り、それが冗談ではないと思っただけ、まだ信じたくなかった俺。

「悪い。ドアの鍵閉めてくれねえか」

やせ我慢に微笑んでも、その現実から逃げられない。だから、ベッドから腰を上げた俺は、確かめたい、妻をドアまで追いかけて抱き締め、振り向かせて唇を夢中で付けた。何故か久しぶりに感じる柔らかい妻の唇を舌でこじ開けると、乾いた俺の舌に妻の濡れた舌が潤いを与えてくれる。いつもと変わらない事に安心を無理矢理見出す俺。しかし、その唇にしょっぱい涙の味がしみ込んだ。

「タケル…。ダメだよ。こんなところで」

俺の胸を押して唇を離れた妻。構わず、もう一度、唇を付けてドアからベッドまで妻の体を押した。

「タケルって。ここ病院だよ…」

鼻息と一緒に漏らす妻。言葉だけで抵抗なんてしていない。軽く体重を掛けただけでベッドに倒れた。

「シヨップینگセンターのトイレでも出来るんだ。こんなところ…何でもねえよ」

「カーテン締めて…」

「どうでもいいよ」

フローラル系のコロンの香りが染み込んだネイビーのブラウス。その裾を黒のタイトスカートから引き抜くと、右手をブラまで挿入させた。うつつふつつ、吐息を声に変えようとしている妻。鍵を掛けているとは言え、いつ何時、ドアをノックされるか分からない、廊下から騒々しさが伝わる緊迫した状況。その閉鎖されていてそうで、

実はされていない密室が作り出す一種異様な雰囲気は、あの日のトイレと一緒。違うのは、あの日の制服に染み込んだ学校の匂いも良かったけど、今日のほのかな大人の香りとくすみ乱れた妻の口紅が更に俺を興奮させていた事。妻の語った事実も一時だけだが、カンフル剤になっていた。ブラをまくり上げ、少しだけ汗で湿ったオツパイを揉みしだき、乳首を摘み、弾くと、ベッドがゆつくりと軋みだし、俺の口の中で妻の舌、くちゅねちゅぐるくちゅ、その蠢きが急激に速くなる。うん？ と気が付く間もなく、俺が履いていた病院のパジャマのズボンに突っ込まれた妻の手。その手は、タケル…、とトランクスの上からいきり立ったチンコをまさぐり、悪戯にトランクスの中にも、うふくうう…、突入され、「元気なんだから…」俺の口の中で囁いた妻は生でそれを撫で回した。押したたつもりで押されていた俺。負けちゃらんねえ。妻の太腿から滑らせた左手が股間にまで到達すると、くうつ、と籠った妻の悲鳴と同時に面倒なパンストを引きちぎり、露になったパンツのクロツチの上から陰門を撫で、オツパイから出した右手でブラウスのボタンを外そうとしたが、病み上がりのせいか、なかなか指がそのボタンに掛からない。それに気付いた妻は、待って…、と僅かに体を起こし、自らボタンを外した。

「来てえ…」

再び、体を倒した私。開けたブラウスの中に、夫が顔を埋める。夫にその真実を打ち明けた私。夫の塞いだ様子を目の当たりにした私はどうすることも出来ず、妻としての無力を痛感し、涙するしかなかった。本当に泣きたいのは夫の筈なのに…。決して泣かない強い夫に、今まで甘えていたのかも。だから、あんな…。それを確かめる勇気もない。夫だけは絶対に失いたくない。夫に抱き付かれた

私は悔し涙の中にほんの少しだけ嬉し涙を混ぜられた。夫は大丈夫、確かめたい、夫婦は体で語り合える。夫の愛情は不変。私が夫を守る番だ。キスを解いた夫に間近で見詰めると、その哀しく綺麗な瞳に溶かされる。夫が私のパンツの中に手を入れ、自分でも十分に分かる、どうしようもなく濡れきった亀裂に、くうっ、遠慮がちに漏らした声だったけど、その指が潜り込んでいった。

「もうこんなに濡らしちゃって…。厭らしい」

私の耳たぶを舌先で掬いながら、夫が囁いた。擦ったさと恥ずかしさに、私は首をすくめ、シーツを握って、また漏れそうになった呻き声を必死で喉の奥に押さえ込んだ。

「バカっ。タケルが興奮させるからじゃねえか」

「そんな言うんなら、止めよっかなあ」

そう言いつつも、ぬちゃにゆちゃくるくる、クリに激しく絡む夫の指。もうダメ。夫の唇に吸い付いた私。

「フグググウンフグウウウ…」

遠慮なく、その呻きを夫の口中に送り込み、仕返しにと、握り閉めていたチンコの、にゅばにゅば、その尿道を親指でこねた。

「おめえだって、こんな濡れてんじゃねえか」

唇を解いた私は、軽く夫の耳たぶをかじる。

「お互い様って事だよな」

私の膝から腿に這う、慣れた手つきでホックを外してジッパーを下げられたらタイトスカート。下半身を脱がせに掛かった夫に合わせ、私は軽く腰を浮かせる。履きっぱなしだった黒のローヒールと一緒に足元からそのタイトスカートは取り去りさられた。焦っているのか、興奮しきっているのか、夫の鼻息が荒くなる。鷲掴みにしたパンストとパンツを同時に両脚から引きちぎるように、しゃあこら、と剥ぎ取ったのはいいんだけど、その縮んで丸まった物を「うーん、いい匂い」と鼻に付けやがった。

「止めろってんだよ！」

場所をわきまえずに、思わず怒鳴り、たあっ！ と奪い返した現物を、ぐらあ！ と病室の椅子の方に放り投げた。

「マジでおめえ病人かよ!？」

「大病人だつての…。いたわれよ」

「あ、ある意味…大病人だよな」

まあねえ、と私の股間に、夫が顔を埋めれば、浮き上がっていた私の上半身はまたベッドに沈み、力が抜けた両脚は夫に大きく開かれた。私のふくら脛がから這い始めた夫の舌は膝小僧にくるくると回転する。ウクフウウフクフウ…、されて初めて分かるこの気持ち良さ。膝小僧を舐められると、おもつきりアソコに響く快感が得られる。膝小僧を出発した夫の舌。グウツツクウウフウググウウ…、ぞくぞくした震えが全身を覆い、私は枕の角を、早くうっう…、噛み締めてその激情に堪えた。もうすぐ、着くと予測してみても、一向にアソコに到着しないそれ。すーすー、生暖かい息がアソコに吹

き付けられるだけで、その現物が当たらない。どうしたの？ 早まる気持ちを俯かせた私。

「何、嗅いでんだよ！」

目を瞑って、感慨深げにアソコの匂いを嗅いでやがる可愛い変質夫に、また場所もわきまえず怒鳴った。

「でえけ声出すなってよ」

両肘を立てて、上半身を浮かせていた私は訳もなく、周りをキョロキョロ見回し、小声に切り替える。

「だ、出すよ。んなの。お、お風呂入ってないだからさ。や、止めるよう。熱心に嗅ぐのさあ」

私に吊られたのか、私の股間から顔を上げた夫も周りを見回した。

「安心しろよ。おまえのはどんな時でも、不思議なくれえ無臭だったの」

「む、無臭って分かってたら、んな匂いしないとこ嗅ぐ必要ねえじやねえか」

相手が夫であっても、女としての羞恥は持ち続けたい私。完璧に男言葉で対応していた。

「だからあ、無臭であっても、その無臭の中に何かあるかなって臭気で探索したい訳よ」

「意味わかんねえ」

私の股間の陰毛部から顔を上げる夫と、何言い合いしてんだろ？それでも両脚を閉じようとしない自分自身にも呆れて、くふふふふ…と小刻みに笑うしかない私。一見ふざけた、こんな幸福はあの初エッチ以来、夫だから感じられ続けられる。無二の人から一生離れるもんか。両肘を外してベッドに身を倒すと、夫の舌が、ペロリと私のクリを一舐めする。はうっ！とまた大声が上がった。

「静かにつて」

夫に言われて、私は両手で口を押さえた。やばいやばい。

業と悪態ついて顔を赤らめるところが妻の可愛いところ。もっと妻を辱しめたかった俺は、「彩…。相変わらず、いい色してるよ。桃色さあ。薄くて小さいこの小陰唇。プルプルだあ」と口にしながら、そこを舐めあげる。まだまだ、「固いよう…。このクリ…。」ちゅうずるちゅうずるずるちゅう、大袈裟な音を立てて吸い付く。「オシッコたれてるみたいに濡れてんじょねえかあ…。膣が勝手にぱくぱく呼吸して、愛らしいよう」また、じゅるじゅるずじゅずじゅずず…、えげつない音が病室に響く。

「おめえ、こ、こ、こらああああ…。いい、いつ、いい加減しろよなああああ」

言葉裏腹。腰をくねらせ、両脚を震わす妻はもつと舐めて吸って欲しい様子で、俺の頭を押さえ込んだ。「ここもいくぜ」俺は指先で、つんつん、突いていた肛門に舌先を付けた。

タケルのバカ！ そんな説明付きで舐められたら、いつもより濡れてくるに決まってるじゃねえか。夫の舌が肛門に熱く、指がクリを、も、もうダメだつてええええ…、弾き散らす。寸でのところで離れた夫の舌と指。よかった。今日は特に、夫のチンコを子宮で感じながら絶頂に達したかった。

「フェエラさせて…」

当然、その前に、私も味あわないと気が済まない。負けず嫌いは昔も今も一緒。夫はパジャマとトランクスを一緒に脱ぎ捨てて、仰向けに寝ていた私の口元までそのギンギンに勃起し、尿道にきらきらと我慢汁を輝かす私だけのチンコを戻してくれた。袋に入った暖かい二個玉を手のひらで転がしながら、夫の瞳を見詰めたまま、その先端を口に入れた。

「彩…。美味しい？」

尿道に舌を突っ込んだまま、うん、と答えた。そうだ、やり返してやる。興奮しすぎた感情と体が復讐心を招く時がある。「いつぱい我慢汁。美味しいよ…」言葉で表し、舌先を更に深く尿道に潜らせ、ほじり返す。うわあああ…、夫が天井を仰いだ。まだ緩いんだよ。「この裏筋…。キンキンに張ってるじゃん。切れそうだね」舌先はそこをぴんぴんと弾く。「血管も切れそうだよ」と、くわえたチンコの固い幹を左右にハーマニカ舐めして、口内に溜めた唾液を塗り、じゅぱじゅぱする、音を立てた。

「彩…」

「そんな困った顔しても、気持ちいいの分かってる。この止めどない我慢汁が正直に語ってる」

妖しい目付きを作って口内に含んだ私は、ころころ、と生きのいいその味を堪能する。あとはあそこだけ。夫の股下に手を突っ込んで軽く持ち上げ、「ここも、いっちゃんよん」肛門を、ずーずーっずぐずぐずーっ、啜ってやると、夫の太股ががくがくに震えた。

大人になった妻。もう負けた。妻の顔から股間に戻った俺は妻の両脚を抱え上げて、チンコを、うっ！ 膣に目掛けて突入させた。

ぐわっ！ また喘ぎが漏れそうになり、反射的に枕の隅を噛んで堪えた。欲しくて、待ち焦がれた夫のチンコが私の、うぶぐがうっがくああああ…、衝撃を繰り返す。弾かれるクリによって、「アアア、フツアアア…」と堪えられない喘ぎが極僅かに漏らされた。でも、声は最小限に抑えられても、ベッドの軋みは最大になり抑えられない。と言うか、この激しさは抑えてほしくない。薄板一枚。きつと、隣に響いてるうっうっうっ…。

ヤバい軋みだった。これしかねえなあ。

「彩…。ベッド下りて立ちバックしょ」

いいアイデア。流石、タケル。うん、と頷くと、私達二人はベッドを下りた。

「こっちだ」

夫は窓のそばで私を手招きした。え？ と一瞬目を見開いた私。

「ベッド以外に捕まるところは窓枠しかない」

部屋を見回す時間が勿体ない。早く夫に入れ直されたかった私は、以前、夫はこうしてくれた、バッグからハンカチを取り出して口にくわえ、窓枠を掴んで立つたまま、お尻を夫に向けた。あ！ ちょっと待って！ 気付いた時には、ぐうつ！ 遅かった…。カーテンを閉めてない。まだ真昼間の病院の下には人が行き交っている。三階の病室。もし、見上げられたら…。夫の突進に合わせて、窓ガラスが私の鼻息で曇り始めた。

関係ない

素足で踏む床が痛い。一月の冷気がタイルから直射されるバスルームの中、もうもうと煙のようにシャワーベッドから白い湯気が上がった。熱い？ と俺を見上げながら肩にお湯をかけてくれる由美。大丈夫、と湿った由美の長い髪にふれた俺。当然、由美は気付いているはず。俺の固くなったチンコに。でも、しゃぼんにまみれ、寒さしのぎに抱き合ってキスを交わしただけで、それ以上はなにも…。やっぱり、ラブホみたいな完全隔離されたセックス専用の空間にあるバスルームと他人の家のバスルームじゃ訳が違う。そう思うと、由美から体を離して直立不動で無口になる。

おまえのその溜息の意味は？ 体を洗ってくれるは嬉しいけど、そんなとこまでされちゃあ…。チンコやお尻に、由美がしゃぼんを浸透させてくる。意味深なその笑顔の意味は？ ついに、グリップとスナップを効かせてチンコを絞り洗う由美。かーっ、気持ち良すぎじゃねえか…。

「今日…何か宿題あったけえ？」

「いや、何も無いよ」

意味ない会話で興奮を散らそうとしたけど、チンコは休まるはずがない。ここ俺の家の風呂じゃねえから…。そんな正直な下半身とは別に、ここはお父さんもお母さんも使う風呂だから、まだ会った事ない由美の両親への後ろめたさが、こんな俺にその先への我慢と躊躇をさせて…。て、おめえ、何してんだ？ 身を屈めて長い髪を耳に掛けた由美が俺の乳首を、ちろちろちろ、舌先で、擦った気持ちいい、舐めていた。カラン、と床に落ちたシャワーヘッド。すぐに我に返り、何、何考えてんだよ？ お、おめえ…え？ すぐさま、

ひざまづいた由美は、ついに、ぱくっんちよ、俺のチンコを口に含みやがった。うくくくうう…、口の中で、もがもがくちゅちゅ、亀頭をこね、俺の股下に潜り込んで裏筋と茎に舌を泳がせる由美。開き直れば、理屈っぽい男なんかほったらかして女は大胆になる生き物だって忘れてた。俺が女なら絶対出来ねえと思うくらい、お産の時に、他人の前でも平気で大股を広げられる、所詮、69なんて通点である女の持って生まれたDNAは半端ない。その状況で上目使いに、入れて、と懇願する女に断れる男なんて世界中探したって存在しない。由美のお父さんもお母さんも使ってる風呂。そんな大人びた遠慮は、ずうずうずー、由美によって奏でられるチンコからの音とともに消し去られた。

「起きろ！」

由美の脇の下を大急ぎで持ち上げた俺。

「後ろ向けよ」

うふっ、と漏らし、タイル壁に両手を付く由美。うっ！ 湯気に霞む白いお尻に向けて爆発寸前のチンコを突き入れた。

「ううううくくくああああ…」

徐々に、由美の声の反響が大きくなる。由美のフェラに、すっかりその準備を整えられてしまったチンコは早々と射精の段階に入っている。それなりの恋愛遍歴がある由美。そこいらの経験がない、もしくは、経験不足の女とは違ってセックスでの期待値と満足値が高いはずだ。ぐううわああああ…、由美の益々と大きく響く声と、ふぐうくううう…、ぐにやぐにやと回転する容赦ない腰つきに堪えながら、奥歯を噛み締めて何とかチンコを振っていたけど、こり

や仕方ねえな。同じように異性の体を知りつくしている俺としては早漏なんて絶対に思われたくない。男のプライドを優先させる事にした。吸い付く由美の膺から、ぬぼんとチンコ抜いた俺。へ？ 何で？ と言いたげに振り向いた由美はつんとアヒルのように唇を尖らせ、物欲しげにまだ両手を壁に付けてお尻を突き出している

「続きは…出てからにしよう」

湿った髪が首筋と胸元に絡み付く、湯気の中の由美が、うん、とうつすらと笑顔で頷いた。出さなかった後の祭りを瞬間的に、畜生が、後悔させるような妖艶な笑顔だった。

一見冷たく背中を向けてバスルームの扉を開けたタケル。何、焦ってんの？

「バスタオルはその棚の中ね。冷蔵庫から適当にジュース出して飲んでて」

湯気を透して、由美…、あの日と同じ柔らかいライトブラウンの瞳が浮かんだ。

「なーに？」

「別に…何でもない」

扉が閉まった。変な奴。きつと早くいきそうになって途中で止めちゃったんだろね。続きは…、何て聞こえがいい事言うのは、その場の雰囲気を取り繕う男のごまかし。その辺の経験ない、もしくは、

経験少ない女ならごまかせても、私には無理。私を誰だと思つてのさ。鼻で笑つてやつてシャワーヘッドを拾い上げ、一人熱いシャワーを顔に浴びた。

バスルームから出て、冷たさが丁度いい廊下を通り、ちゃんと待つてるかなあ？ リビングに入ろうとすると、Ｔシャツとトランクス、首にバスタオルを掛けたタケルが二階から降りてきた。

「どうしたの？ ジュース飲んでなかったの？」

吐く息は白く濁っていたけど、寒さは感じなかった。そんな私もＴシャツとパンツ姿。

「おまえの部屋に服脱ぎっぱなだったからな。マッパで人ん家うちよろできねえよ。ちよつとだけリビング入ったぜ」

リビングに入ると、暖かい、タケルがエアコンのスイッチを入れておいてくれた。相変わらず、気が利いて優しい奴。ありがと、と振り向こうとしたけど、動けない、背中にタケルの体温をぎゅっと感じた私。髪に巻かれていたバスタオルがほどけて落ちた。もう何回かエッチしたんだから、こんな軽装もありかなって思ってたけど…密着されたら、やっぱりちよとハズい。

これはかなり反則だったので。ライトイエローのＴシャツに透けた乳首と水色のパンツから少しはみ出ているお尻の割れ目見逃さなかった。リンスの匂いが香る濡れた由美の髪も俺の興奮を高めている。

「ノーブラにパンティだけのも…いいじゃん」

暖かいを通り越して熱くなる。

「いいの！ そんなこと…」

振り向いてタケルを見上げた瞬間、唇を塞がれた。背伸びする私が疲れないようにお尻を持ち上げてくれるタケル。舌同士が絡む中、固くなったチンチンがお腹に当たる。言葉にしようとすればするほど、彩の顔がタケルの瞳に映る。彩もタケルも私の親友。目を閉じて、胸の奥に、愛してるよ、をしまいこんだ。ひんやりとした手が私のＴシャツの中に入ろうとした時。

「ちよっ！」

タケルの胸を押しして、わざと離れてやった。バスルームで中途半端に終わらせた仕返しも兼ねてね。タケルの苦笑いはいい気味だよ。照れ笑いの私はバスタオルを拾って首に掛けた。

「お腹減ったでしょ？ ご飯作るよ」

鼻を擦っていた手を止めたタケルはきよとんと不思議そうな顔を向ける。

「飯作ってくれんの？ 嬉しいなあ。腹ペコだったんだよ」

何も言わずに手を引いて、タケルをキッチンに連れて行き、テーブルの椅子を引いて、座って、と肩を押し下げて座らせた。私は椅

子に掛かっていたお母さんのワインレッドのエプロンを纏い、髪にバスタオルを巻き直した。

「残り物だけだからさ、大したものでないけど。タケル、パスタ好き？」

「大好物」

「良かった」

冷蔵庫を開けると、タケルの好きなコーラがあった。食器棚からグラスを取り、ペットボトルのコーラを注いでテーブルに置く。そんなに見詰めたら、マジでヤバいって。

「由美……」

グラスに手を添えたタケル。何かを言い辛そうにグラスだけを見詰めた。止めてよ。こんな雰囲気でもた不安になるような事言わないでよ。

「何？」

ペットボトルを持ちながら固まった。

「素顔のおまえも可愛いよな」

鼻息が吹き出ると、同時に肩の力がすーっと抜け、照れ笑いをこまかしながらペットボトルにキャップを戻した。

「バ、バカ！ な、何、いきなり何吹いてんのよ」

「この前、ホテルで起きた時もそう思ってたんだよ」

コーラのグラスを口につけたタケル。

「学校じゃ化粧してんだろ？」

また冷蔵庫を開けて、私は少し熱くなった顔を冷やし、よしよし、これでOK、と冷蔵庫からベーコン、玉子と生クリームを取り出した。

「化粧っていうほど大した事してないよ。軽くマスカラと薄いリップつけるだけだよ」

「そうなの？ 何か学校じゃ、ギャルっぽい派手なイメージがあるからな。由美って、素顔がいいからどんな化粧しても似合うんだって発見したよ」

普通褒められた嬉しいはずなのに、顔をタケルに向けられない私。て、言うか、この格好やっぱり失敗だったかな？

「褒めたって、パスタとコーラ以外何にも出ないよ。性格がこんなんだから、派手に見られがちかもね。私って」

キッチンキャビネットからボウル、鍋、包丁、まな板と瓶詰めのパスタを取り出し、まずは、生クリームのパックをボウルに空けて、玉子を割った。

「そのさっぱりした性格が由美のいいとこさ。俺達男が姉貴ってか、

兄貴みたいは何でも気軽に話してできるんだから。で、結構、そういう女ってモテんだよなあ。冬休み前も『由美ちゃんって、どんな男がタイプなの？』って聞かれたよ。『さあ、本人に聞いてくれよ』って言っといたけどな」

ボウルの中をかき混ぜながら、ようやくタケルに振り向いた。

「で、誰よ？ それ？」

コーラを一口飲んだタケル。

「何？ んな気になんの？ そんな急がなくてもそのうち野郎の方から告りに来るよ」

タケルは意味深な笑いを浮かべて、テーブルに頼杖を付いた。つい十分ほど前までエッチしていた男。タケルは学校に居る時と同じような親友の顔に戻っていた。

「そんなもったいぶらないで教えてよ」

「教えてやってもいいけど…パスタとコーラだけってものなあ」

「何、言ってるのよ！？ 上等でしょ」

お互い下着姿で、客観的に見ればエッチ直後だっただけ分かる。けど、少し離れば親友同士。こういう関係を求めていた…。いや、求めなければいけないものだった。上手くいってると思っているいいんだ。

彩とタケルのキスをリビングの窓から覗き見していた私達三人。うつとりと二人のキスを眺めてる美紀と雄二からそつと離れ、リビングを一人抜け出してトイレに入った私。その途端に、涙が溢れ返り、エプロンで目を押さえ込み上がる嗚咽を殺した。タケルが無事に帰って来てくれた。

生きた心地がしなかった数時間の間、強いつて一体なんだろう？ 頼られるってこんなに辛いこと？ でも私がすっかりしなきゃ彩が……。そう思いながら、必死に彩を元気づけていた。タケルにもしもの事があったら、私だって生きていけない。そんな素直な感情をひたすら閉じ込めていた長い時間。トイレの中で、震える体と漏れそうになる声、どうしようもない孤独に堪えながら、私は小さい時にママから言われた事を頭に過らせた。

「由美、あんたは頼られる人になりな。自分が傷ついても相手を助けてあげられる人になるんだよ。損な役回りだと思うかもしれないけど、そんな人が一番必要とされるんだよ。あんたはいつも必要とされる強い人になりな」

さあ、行こう！ 泣いてなんていられない。最後に絞り出した滴を拭い、一つ深呼吸をしてトイレを出た。リビングに戻り、元気で強い私の復活、はいはい！ と窓の外をまだ眺めてた美紀と雄二に手を二回叩いた。

「もう終わり！ 二人とも、お好み焼きの準備手伝って」

「はい」

「はいね」

腰に手を当てるキッチンに来た二人を迎えた。これからも必要とされる人に……。でも、強気な私が泣きたくて仕方なくなった時、そつと雨宿りさせてくれる、そんなタケルを近くて遠くから愛していきたい。たとえば、誰かのものであっても……。こんな恋もあっていいと思う。

「美味しい？」

ちよと多すぎかな？　と思うほどの大盛パスタだった。右肘を上げてスプーンを使わずにフォークだけで、ずーずー、と吸い上げるタケルの見事な食べぶり。お腹減ってたんだ。パスタを巻き上げるスプーンとフォークを止めて目を見開いた私は在り来たりな言葉で、スパゲッティカルボナーラ、そのシンプルな料理の出来映えを尋ねた。パスタを頬張りながら、うんうん、と頷き、コーラを口に流し込むタケル。「男の食べ方って結構エロくない？」廊下ですれ違ひざまに小耳に挟んだ女子同士の会話を、「そんなことあるわけないよ」と小声で蹴散らした私だったけど、相手によるんだね。ファミレスやマックじゃ気にも留めてなかったけど、タケルの豪快な食べっぷりをしんみりと眺めると、生まれて初めてそれに色気を感じて鼓動が速くなった。

「こんな美味しいカルボナーラ初めて食ったよ。由美って料理上手かつたんだな。弁当なんかも自分で作るの？」

「うん。今日みたいに私一人の日は当然一人でご飯作るし、ママも

パパも私より起きるの遅いから、ついでに私がお弁当お弁当作っちゃう」

「へー、意外に家庭的なんだ」

「意外って事はないでしょう」

笑ってタケルに視線をあげると、その口の回りにソースがついていた。子供みたいな奴。スプーンとフォークをお皿に落とした私は、ちよと待って、と立ち上がり、テッシュを取りにリビングのテーブルに向かった。

「タケル。ソース、ソース」

すぐそばのリビングのテーブルからキッチンのテーブルへ。その戻り際にボックスからテッシュを抜き取ったけど、はい、と素っ気なくそのテッシュをタケルに渡したくなかった。

「ちよと、じつとして…」

大人しく私を見上げるタケルの口元からソースを拭き取ると、さっきの豪快な食べっぷりとじつと見上げる静かなライトブラウンの瞳が重なり、少しの無言と溜息が、もういいや、唇をタケルに吸い付けてしまうくらいの衝動を呼んだ。タケルが座る椅子とキッチンのテーブルに隙間が出来れば、唇を離さず、器用にお尻をタケルの膝の上に落とした私。ゆっくりと私の腰に回り込む逞しい腕に引き寄せられ、ぴちゃぴちゃぐにやぐにや、生クリームと黄身の風味が残る舌に絡み付いた。もう夢中。パンツから滲みだした私の体液がタケルの膝を濡らしてるかもしれない。固くなった二つの乳首がTシャツに擦れて痛い。太股に押し付けられるもう一つの固いものに

そつと手を触れようとした瞬間、うつつ、タケルがやや強引に私の唇を離す。またお預け？ 唇の形がキスの形のまま残った。

「先、飯にしょ」

そ、そだね。私を抱いたまま、テーブルに多い被さって手を伸ばし、私のパスタのお皿を引き寄せたタケル。スプーンとフォークを使って、くるくるとパスタを巻き上げた。前から思ってたけど、筋肉が浮き出た二の腕とは対照的、繊細で綺麗な指。また見とれてみると、ほら、と巻かれたパスタが口に運ばれた。口を開けても、その透き通った瞳から決して視線を離さない、離れない。パスタが口に入り、フォークが抜かれたら……。ソースが付いたね、テーブルからテッシュなんか抜き取らずに、タケルの唇が被さり、舌先が私の唇を拭く。その隙にもがもがするパスタは濃厚なソースにブラックペッパーのスパイスがピリツと効き、ベーコンの塩分が味を引き締めてる。ゆで上がりもプルプルのアルデンテで歯ごたえも良く、初めて男に作った料理にしては我ながら上出来。まだ口の中にパスタが残ってるのに入り込んできたタケルの舌先。悪戯しちゃえ、とその口の中へ噛み砕いたパスタを流し込んだ。一旦、唇を外して異様な顔つきで、もがもがするタケルに笑いそうになる私だった。

「うーん、これも別の味がして美味いや」

「マジでえ？」

今度は、私がタケルのお皿からパスタを巻き上げる。

「マジだよ。由美の味がブレンドされてて美味しい」

巻き上げるたパスタをタケルの口元に運び、フォークを抜くと、

また生クリームと黄身の濃厚な味のキスが被さる。思ってた通り、パスタが私の口に入れ返された。

「うーん、これも美味しい。タケルの味がするね」

言うておくけど、私達は付き合っていない。一線は越えてるけど、セフレとしての一線だから。と、また自分自身に言い聞かせたけど、まあ、二人きりだから、恋人…、その感覚ならいいかなって少し気持ちを緩めた。

「何、笑ってんだよ？」

タケルがパスタを巻き上げる私を眺めながら、言った。気持ちの緩みは顔に出るもの。仕方ないよ。

「何でもない。はい、あーん」

ああ、やっぱりダメダメ。気持ちはしつかり持つておかないと。やってる事は恋人同士だけど、中身は、遊び半分で絡み合っただけで欲求を満たし合うだけのセフレ同士でいなきゃ。そう気持ちを直して、そして、またキス。お互い食べさせ合っただけでキスを繰り返した私達。私のお皿に残った最後の一口を巻き上げるタケルの指が、由美…、と止まった。もう何言われたって怖くない。マツクに居る時に覚悟を決めてたはずなのに、タケルと絡み合っただけで生まれた絶頂感が私の神経を軽く横路に逸らしたただだから。確かに…最高に愛してる人だけ…。

「もう一回、約束しろよ」

私にあんたのセフレ。あんたは私のセフレ。そんな事心配しなく

ても分かつてる。私は強いから。私はタケルの首に両腕を引つ掛けて天井に向かって、ふーっ、清々しく息を吐いた。さあ、何でも言つてよ。

「辛くなつたら俺を頼れよ」

遊び上手なタケルに最後の念を押されると思っていた私は意外な言葉に、え？ 見開いた目をタケルに落とした。

「強くて頼りがいがあるおまえを皆好きなんだ。それは分かつてる。でも、そんなおまえは誰に頼るんだよ？ 由美姉さんを支えられんのは、同じように強情で意地っ張りで辛い時でも平気を装える俺しかいねえじゃん。俺は命懸けで…おまえを守る。俺の事を単なるセフレと思つんなら、勝手に思つてくれ。俺は勝手におまえを守らしてもらつよ。おまえ、俺に負けず劣らずの意地っ張りだから…：そう言つても自分から何にも言わないだろうし、この前みたいに変だなと思つたら、俺から声掛ける事にする。ウザいなんて思うなよ。約束しろ」

バツカ！ ウザいなんて死んでも思わないよ。照れ臭いのか、鼻歌混じりで最後の一口を巻き上げたタケル。最愛、最高、最強の支えに身を委ねると、私の目から噴き出した滴が、頬に流れて、ぼたぼた、とタケルの背中に落ちた。あんたが誰を一番好きかなんて関係ない。私があんたを愛してたら、それでいいから。

「ほら、食べよ」

「お腹いっぱい。タケルにあげる」

気持ちもいっぱい。タケルに全てあげる。

「上からも下からも忙しい女だなあ」

はあ？ 下からもって？ ずぶ濡れになった頬よりもずぶ濡れになったアソコが気になった私は慌ててタケルの肩から顔を起こした。

「あんた、分かってたの？」

「そりゃ、おめえ…俺の膝にずっと座ってたもん。パンツから染み出した汁がずっと俺の膝濡らしてんのくらい分かるよ」

しらっとした顔でタケルは pasta を口に入れた。やっぱり滲みが伝わってたよねえ。ムードに浸り込んで、肝心な事忘れてた私。

「あんた、言つてよね！ はっずかしい！」

「おまえが何も言わねえから、わざとしてんだろって思ってたよ。まあいいじゃん」

そう言つて、髪を耳に掛けられ、唇を付けられると…自然に恥ずかしさも飛んでいく。さあ、もう開き直ろ！ タケルの胸を押して立ち上がった私。邪魔なTシャツとパンツを脱ぎ始めた。

「おお、おいおい、部屋行こうぜ。お父さんお母さんの使うキッチン、やっぱまずい…」

「関係ない」

全裸の私はタケルに飛び込んでいった。

凍った雪

「ちょっと待てよ!」

下足場で機嫌とりの愛想笑いとは愛ない話を振りまく俺を完全無視する由美は口を結んで目を細めた無愛想な横顔だけを残し、上履きを下駄箱に戻して校舎を出た。ああ…勘弁してくれよ、と頭を掻きながら靴を履き替え、急いで追いかけた由美の背中は校門を出ると、夕べ降った雪がまだ路肩に残る坂道を、滑るぞ、と言う俺から逃げるように下って行った。そんな態度取るから、渡さなきゃいけないもの忘れてたよ。それに…時計…。

怒ってると思われること事態が腹立たしい複雑な気分をどうにも言い表せなかった私は、とりあえず、ウザそうに無視を決めるしかなかった。タケルが後ろで何かブツブツ言ってるのが余計に私の神経を逆撫でしてたから、ああ、もう、しょうがない。はや歩きで肩からずれる鞆を直しながら、もう! とタケルに振り返った瞬間だった。凍った雪に足をとられて滑りそうになり、お、おい! と慌てて駆け寄ったタケルに両肩を掴まれ、不覚にも、ちょっといい、何て思ってしまったただったけど、悔しいから、膨れっ面は続けてやった。とにかく、複雑な気分は何も変わらない私。

「だから、滑るって言ったろ」

「あんたが、追いかけてくるから滑るんじゃない!」

タケルから離れると、興奮と馴れないはや歩きから出た白い息が

タケルの胸元辺りに残っていた。

「これ、忘れもんだ」

階段を降りる途中で机の上に忘れた事に気付いてたけど、取りに戻るのが面倒だった水色のニットの手袋を、タケルはポケットの中から取り出した。

「彩が：帰るんなら由美に渡してっさ。あいつもおまえが機嫌悪いの気にしてたぜ」

「そう。忘れ物渡しに追いかけてきただけなら、早く言ってよね」

タケルから手袋を受け取った私は、呆れ顔で見詰めるタケルをちらっと見上げて冷たくなった両手に手袋をはめ、ふーっ、と白くて長い息をタケルの胸に吹きつけた。もう諦めた。今度は慌てず、足元の雪に気を付けながら、ゆっくりと歩き始めた。

「怒ってる理由分かるよ。話…しよ」

早く言ってよね。

濡れた頬を輝かせて可愛く泣いたと思えば、髪を振り乱して猛然と攻めてくる。何故、女つてのはこう強弱が極端なんだよ？ どうかにスイッチでも付いてんじゃねえのか？ 疑問を抱いている間に、おいおいおいおい、俺の顔が由美の乳に押し潰されそうになるくら

い圧迫される。いや！ やるぞ！ 由美のオツパイに押されながら見た、キツチンすぐそばのリビングに敷かれた茶色のカーペット。その毛並みはエアコンの温風になびくほどふわふわで柔らかそう。そこまでそんなに距離はない。由美を抱え上げた俺は激しくキスしながら、その小さな体をリビングまで運んだ。

「タケル…。タケル…」

俺の首にしがみつく由美を仰向けにカーペットの上に寝かせると、鼻息を荒げる由美は下から俺のＴシャツを脱がせようとしていた。けど、何を焦ってるのか？ 由美の手がＴシャツに引っ掛からない。

興奮してるのは間違いないけど、何をそんなに焦ってるんだろ？ また途中で止められそうな不安がきつとあったんだと思う。興奮と焦りで上手くタケルのシャツを掴めない、脱がせられない。タケルが立ち上がった。何？ もう逃さないんだから！ 私は下からタケルのパンツをずり下げた。

おまえまた何を？ おまえが下で苦労してるから、自分でシャツとついでにトランクスも脱ごうとして立ち上がったけだつての…。何をそんな焦んなきゃなんねんだよ？ 何処にも行きやしねえよ。俺のトランクスをずり下げた由美は問答無用でギンギンに勃起したチンコを頬張った。でも…気持ちいい…。マジ、勃起した男なんて女にはかなわねえ。もう好きにしてくれ。

バスルームで中途半端に終わり、廊下からリビングに入った時、迫るタケルに全てを任せればエッチ出来たのに、変な意地で拒絶した。そんな後悔をもう味わいたくない。素直な欲望をタケルにわかつて欲しかった私はチンチンを喉の奥まで、ずるずるつぐごぼぼ…、苦しくなる地点をも越えて思いつきり吸い込み、ごろくはじゆるる…、と吐き出す。そんな一連の動作の繰り返しスピードを徐々に上げていった。何て固くて勇ましいチンチンなんだろう。病みつきになる。いや、もうなった。私の涎がチンチンからカーペットにしたり落ちていた。お口いっぱい頬張りながら見上げるタケルは苦しそうで可愛い。れるれるる…、裏筋の舌触りが堪えない。尿道からしたる甘酸っぱい汁も美味しくて、ちゅぱちゅぱずるず…、吸い上げた。ゆっくりと舌を這わしてチンチンの裏側に潜り込み、タマタマを舌で掬い上げ、ぱくつと丸のみする。このんころん、と口の中で動く果実もまた甘い。まだ到達してないポイントに好奇心が湧き立つ。タケルのお尻の穴。そこまではもうあとわずか。行くしかない。更に潜り込んで、タマタマと肛門の間を舌先で、ちろちろそして、ずるつと肛門に固く尖らせた舌を突っ込ませた。

「由美…。そんなとこ…」

いいの。好きにさせて…。舌で震わす肛門に吸い付き、涎を存分に塗り込んだ。これも相手がタケルだから出来るんだ。全ての女のプライドを捨てて、この人に気持ち良くなってもらいたい。タケルの内股が震え始めた頃、私はようやく股下から顔を上げた。

学校じゃ決して見せない妖しく澄んだ瞳に捕らわれた俺。勿論、親友に肛門を舐められた直後で照れ臭く、そんな真顔になられても、

と笑っておどけてようとした。しかし、由美の、動かないで、と呪文じみた静かで圧倒的な眼力は、にわかには俺を凍りつけて微動だもさせなくする。その視線を残したまま、俺の地肌に這わせた舌を下腹部から脇腹へ滑る上がらせ、ゆらゆらと遊ばせる由美。あんなとこに…。リビングのドアのそばに置かれた姿見（鏡）に気付くと、そこに映り込む、不規則な舌の動きに合わせて揺れる由美の白い背中とお尻が擦ったさと気持ちよさの中で薄らいでいた俺の視界と意識を覚ました。舌先が乳首を騒がせても、何故、そんな目で俺を見上げるの？ そんな疑問も、うぐうぐう、電気が走る全身に消される。もう由美の舌は俺の首筋に…。オッパイも体に触れる頃には長い道のりを越えてきたその舌が唇に到着した。

明日になればお互い何もなかったように振る舞わなければならぬ。それが私達の約束。そんな切なさが舌に染み込んでいたと思う。タケルの首に回した両腕を思い切り引き寄せ、オッパイを密着させた私はその舌を精一杯タケルの舌に絡ませた。もう…。気持ちもアソコも濡れて、どうしようもない。体重を私に移すタケルから、私はまだ視線を離さない、離せない。近くだけと遠くに居るあなたをずっと見詰めていたい。カーペットへ仰向けに寝かされたら、あとは、あなたの自由にして…。

まだ俺に全裸を静観さえれるの事が恥ずかしいのか？ 俺を攻めていた時の気高く自身に満ち溢れた由美の妖気と視線は仰向けに寝かされた途端に潜められ、オッパイの舌で両腕を組み、内股に両脚を閉じた由美。その唇はまだ俺と自分の唾液濡れている。横顔にはくつきりと尖った顎の線が描かれ、小さな吐息と極めて薄く開かれ

た瞳の光沢が柔らかいカーペットの表面に漂っていた。

由美の唇に自分の唇を落とし、舌で内部を乱しても、まだ舐めたい。綺麗なものに魅せられた俺の衝動は急速に舌を由美の首筋に進め、掴み具合のいいオツパイと頬張り具合の良い乳首を、ふうふうくうふう…、と漏れる声を聞きながら先端から唾液をさせた。まさぐる茂みに中指がスムーズに入れば、粘液をクリに塗り込む。

「タケル…。も、もう私いいい…が、がまんんん」

「出来ないなんて言うなよな」

乳首を含みながら言うと、体をアソコに向けて滑り落とした。まずはやり返しだ。果てを知らない欲望は力づくで由美の両脚を押し上げて、丸出しとなった肛門へと舌先を導いた。由美なら色々と経験あると思うから、別に気を使う必要のないよな。

うわわわ！ 怖い怖い！ 実はタケル以外にクンニされた事ない私。過去、どうしてもクンニされるのが嫌いで、無理矢理してこようとした男を足蹴りにしたこともある。タケルだから自然にクンニを許せた私だったけど、さすがに肛門を舐められるのはまだちょっと抵抗がある。タケルの肛門を頂いた私がそんな文句言える立場じゃないんだけど、そんな事したから、きつとタケルは私が何でも出る女だと勘違いしてるに違いない。どうしよう…？ と悩んでいたら、ちろつとタケルの生暖かい舌が私の肛門に付いた。やっぱりそこは！

「ちよつと、タケル、待ちなさいいいい！」

根性決めきれない私は体を捻ってうつ伏せになった。

「何だよ？ おめえだって舐めたじゃねえか」

タケルがそう言うのも当然。

「分かってる！ 分かってけど、ちょっと待ちなさいって！」

俯せに両脚をしっかりと閉じ、両腕を体の下に敷く全裸の私は間抜けだ。

「てかさ。おまえ、これぐらい経験あんだろ？」

やっぱり、こいつ勘違いしてるよ。

「初めて！ フェラしたのも、クニニされたのもあんたが初めて！」

ここで、分かってもらわないと先々困ると思った私は体を起こしてカーペットに座り込んで、タケルに体を向けた。

「うっそー」

やっぱり勘違いしてる。

「何で私が汚い男のチンチン舐めなきゃいけないの？ 何で私が汚い自分のもの舐めさなきゃいけないの？」

タケルに分かってもらう為、私が徐々に必死の形相を近付けていくと、タケルは優しく私の頬を包み唇を合わせてくれた。

「じゃ、何で俺だけ…何て聞かないよ」

聞いているじゃん。って言えないほど強烈に唇を塞がれた私。全て分かってくれたタケル。今までは好き止まりで、あんたは愛してる人だから。また胸の奥で焦がれた言葉をタケルの甘い吐息が包んでくれると、全身が溶かされ、私はゆつくりとカーペットに沈んでいった。もう何も怖くない。広げられた両脚に力なんて入らない。タケルの舌がそつと私の、くうううぐうう…、こ、肛門を、うぐぐああくうう…、しゅ、周回いいいい、し始めた。

「はーい！」

元氣よく、姉貴がドアを開けた途端、部屋の中から色んなコロナか酒が分からない匂いと悲鳴に近い笑い声が入り雑じった多種多様な空気が、きつと鍋でも食らってたんだろ？ その温風に乗って吹き出した。姉貴の笑顔が、えっ？ とお袋に向けられると、そのまま固まり、動かなくなる。知らねえぞう。俺達はただお袋についてきただけだから。とりあえず、今回、言い出しっぺじゃない俺はお下を向いて鼻を擦った。

「お久しぶり」

きりつとしたお袋の笑顔。嫌みか？ 本気か？ 多分、いや、きつと嫌みだろ。

「お、お、お母さん！」

やっと叫んだ姉貴に気付いた女どもが奥の部屋から飛び出してき

た。

「ママア！」

女三人の声が見事に合わさった。お袋のサプライズ訪問。別にサプライズなんかにしたくなかった俺は文句なんて言われる筋合いのない、携帯切って女子会に没頭していた妻に堂々としかめっ面を向けてやった。確かに、おまえに連絡付かない俺に代わって、美紀と姉貴に連絡取ろうとして携帯取り出した雄二と智喜を「止めとけ。驚かせてやりやいいんだよ」って止めたのは俺だけだな。

まさか、こうなるなんて思ってなかった。もうちよとしたら、お姉ちゃんに話して連絡しようと思ってたんだよ……。携帯切ってて……。許してえ。私は泣きそうな笑顔を夫に送った。

その困った笑顔が可愛いから……。今晚は朝までやりまくって反省させてやるって思ったけど、いやいや、そうしたら、逆に妻を喜ばす事になって……。でも、その表情が堪らなく可愛いから、やりたくって仕方ないって、そんな事、考えてる場合じゃないってのは百も承知だったけど、勃起はしていた。

「佐紀姉！ ひっさしぶり！ 会いたかったよーん！ 入れてよ入れてよ」

姉貴に擦り寄る雄二。俯きっぱなの智喜は頼りになんないけど、こういう時は雄二の空気読まないマイペースな性格が役に立つ。

「ユージ！ ひっさしぶり！ しばらく見ない間にカッコよくなっちゃってさ。私に黙ってあんな可愛い彼女作ってんだもん。上がって上がって」

どうやら、姉貴も雄二に助けられたようだ。雄二の手を取って中に入る姉貴。俺は、右、智喜に軽く目で合図送って、左、お袋に苦笑いを作り、姉貴と雄二に続いた。

ママにお姉さんの事を内緒にしてて悪いと思った私が顎を引いてママを見詰めていると、ママはペロツと可愛く舌を出して廊下を通り過ぎてくれた。良かったあ！ 泣きそうになるぐらい安心していたら、無表情で私のオツパイを指でつつんとして、はあ？ さりげなく通り過ぎる意味不明な夫。「本当、あんたら仲いいねえ」と呆気に取られる由美と、「でも何かうらやましい」とウケる美紀と一緒に部屋に戻った。

「思ったより広い部屋に住んでんだあ。店での稼ぎがいいんだね」

相変わらず、柔らかいオツパイだった。と指先に残る感触に浸る間もない。お袋がそう切り出しすと、え？ と姉貴が智喜に振り向いた。

「智喜は何も言ってるねえよ。俺が全部喋った。ばらすのに今日ほどいいタイミングだったからさ」

俺が床に座り込むと、皆一斉に腰を下ろした。俺の横に座った妻は事情を把握したようで笑ってた。

「タケル達にも言ったんだけどね。もう、あんたは二十歳越してんだよ。あたしが出る幕は終わってんだよ」

姉貴は肩の荷が下りた様子。天井を見て鼻水を啜った。素早くコンビニの袋からビールの缶をお袋に差し出した智喜。その学校では見せない低調さに、女どもがくすくすと口に手を当てると、智喜は、配って、と隣に座る由美にそのコンビニの袋を渡した。それぞれの好みを聞きながら、まずは飲み物を配る由美。

「タケル、何にする？」

すっかり自分の体の事を忘れていた俺。思わず、ビールくれ、と言いそうになったけど…由美のその目が、「今夜は酒なんて飲ませないよ」と意味深に怖かったから、ウーロン茶、と逆らわなかった。

「ねえ、佐紀…。お願いがあんだけど…」

プシュ、とビールの缶を開けたお袋が静かな声で姉貴を見ると、少しざわつきを取り戻した空気がまた静かになった。

「な、何？」

酎ハイの缶を口に付けかけていた姉貴。何を言われるか？ 缶を下し、多少乱れた髪を耳にかけながら周りにきよるきよる視線を振る。

「智喜をあたしにちょうだい！」

また突拍子のないお袋の言葉に、まず雄二が吹くと、はあ？と目を見開く姉貴と頭を撫でて照れる智喜以外、キャハハハハ！と皆が一斉に笑い声を上げた。

「やだよ！ 第一、タケルと雄二となら分かるけど、何で、お母さんと智喜と一緒にいるの！？ それも、呼び捨てできるほど仲良くなってるし」

姉貴が隣に智喜の肩を肘で突くと、益々、智喜はうなだれた。そういえば、まだ姉貴に、何で俺達がお袋と一緒に居るかって話してなかったよな。いいや、面倒くせえ。別に話さなくってもいいや。

「そんな事、どうだっていいじゃない。智喜はタケルと雄二の友達だもん。私とご飯食べても何にも不思議じゃないじゃない。それよりさあ、智喜みたいに何でも言う事聞いてくれる男欲しかったんだよ。ね？ 私にちょうだいよう。芳恵にも自慢できるしさあ」

「ダメ！ 絶対ダメ！」

お姉ちゃんは智喜の腕にしがみついた。ママはママらしい言葉でお姉ちゃんと智喜を認めてくれた。

「それだけ仲が良かったら、何にも心配する事ないね。でも一つだけ言わせて。あんた、ちゃんと智喜のおじいちゃんとおばあちゃんに挨拶行くんだよ。智喜はね。私に会うなり『佐紀さんと付き合ってます』ってちゃんと男の筋とおしたんだよ。今度はあんたが女の筋とおす番だよ。それが出来なきゃ、あんた、女として失格だから

ね。いい？」

はい、とお姉ちゃんが俯くと智喜がスーツの袖で涙を拭いた。

「よし！ みんなカンパニー！」

さすがママ！ カッコよすぎ。私達も、カンパニー！ ママの掲げた缶に自分達の缶を付けた。

「皆、今夜はうちに来て泊まんな」

「うわー！ ママの家泊まれるんだ！」

美紀が身を乗り出すと、私と由美が顔を合わせて微笑んだ。

「うん、誠にも、真紀姉にも、和巳にも私が連絡しといてあげるから」

タケルの顔が、あっちゃー、と歪んだのが可笑しくって、俺はまた吹き出した。隣に居る美紀も裕ちゃんの最後の言葉にピンと来て、俺に顔を向けた。それもまた愉快。さあ、次に来るのは彩だぞ…。

「マ、マア…」

ほら来た。裕ちゃんも、ビールの缶を口につけよか、つけまいか、ヤバいって顔してる。

「うちのお父さんの事してるの？」

「ああ、お袋、昔、親父さんと昔付き合ってたんだよ」

タケルのその場しのぎの冗談に、俺と智喜は、グハハハハ！ 当然、ぶっ飛んだ。

「バカな事言うんじゃないよ！」

裕ちゃんは真っ赤になってビールを飲んだ。

「何？ 何？ 教えてよ！」

タケルにもたれかかる幸せそうな彩。タケル…。絶対に病院連れてくからね。あんたと…彩の為に。

私はマツクに居る時から気付いていた。時々、沈痛な表情を浮かべるいつもと違う由美に…。今も彩を見詰めながらそんな表情を。何かが起こりそうな、そんな予感だったけど、何であんたも私のオツパイつつんしてくんのさ！？ 雄二っ！

「俺の家来るか？」

「うん…」

苛立ちついでに、タケルの目の前で引きちぎるように外した時計。あれらか丁度一週間が経っていた。

忘れ物だけじゃない。時計の合図を覚えていたから、タケルは教室から飛び出した私を追いかけてきてくれたと思う。でも、最初の合図がこれじゃあねえ…。あんだ、それでいいの？ また凍った雪で足を取られて滑りそうになった私を支えてくれたタケルに「ありがと」っていう言葉を絞り出す以外、複雑な感情の中、私はタケルの家に着いても固く口を閉ざしていた。初めてのタケルの部屋に、本当はもっと上擦った気持ちで来たかったのに…。ブラウンのカーペットの上に座って、無表情で肩から溜息する私。つくづく、可愛くない。

透視力と想像力

タケルの熱い舌の旋回は私の体を柔らかくう、うくつぶつぶふんふぶう…、した。ついに、男によって肛門を舐められた私は女としてももう終わり、そう思えば、遠慮なんていらぬ。

「タケルッ！ 気持ちいいっ！」

叫んで握ったカーペットの毛が抜けた。それでもタケルの舌は更に強く押し込まれ、その穴をこじ開けて、そんなとこまでえええ…、中にまで入ってきた。これは終わりではなく…始まりだ。私とタケルの…新しい始まりだっ、あああああ…。見詰める天井に意識も羞恥も躊躇も吸い込まれ、残った欲望に全て従う事にした力ない私を裏返しにしたタケルは私の腰を掴んで引き寄せる。さあ、もう勝手になさいよ。と言わんばかりに、女らしく堂々とバツクのスタイルになりお尻を突き出すと、タケルの舌がまた私の肛門に来る。

「くうああああ…。タケルうううう…。す、すごいいいい…」

下品な私はその喘ぎの限りにまたカーペットの毛を握りしめた。溶けていくうううう…。体も心も、タケルの舌が溶かしていく…。舌は、にゆるにゆると肛門から膣へ。そして、ずずずるう、と唇が音を立てて私の液を啜り取る。

「うぐうつぶぶぐああ…いいいい！」

喘ぎついでに額をカーペットに付けて、舐められている部分を覗き込むと、私のお尻を掴んで舐めていたタケルは、丁度、その舌を私のクリへ触れさせようとしていた。

「タケルうつつ…タケルうつつ…よすぎるうつつ…」

一生懸命に動くタケルの尖った顎とクリを丹念に包み込む舌を越して、遅しくそそり立つタケルのチンチンを見た。絶頂に到達する前に…それが欲しい！ 思い切り頭を上げ、反り返る。

「入れてっ！ 入れて！ タケルッ！」

素直に叫ぶと、更に私のお尻を引き寄せたタケル。

「アッ！」

その衝撃は稲妻のように速く、強く、私の一番奥に届き、私の頭を突き上げると、ぐうあああたああ…も、もももの凄い速さで、く、く繰り出されるうつつ、チ、チンチンのせえええ、先端が私の、私のし、子宮にぶつつうぶちあてえええ…。

「タケルッ！ すっ、凄いいいい！ こおおおわれるうつつ…」

それで、クリなんていじられるもんだから…。

「マ、マジッ！ マジッ！ 死んじゃうてえええ！ ぎゃあああああ
ああ！」

親なんていない家のリビングに遠慮の欠片もない悲鳴がこだまする。

「もっ、もっと感じてっ！ 由美…。もっとおおお…」

私の背中に覆い被さったタケル。暖かい息が私の耳に当たる。器用に連動するタケルのチンチンとクリを弾き上げる指は益々と激しく熱くなるうつつうつつ…。もうダメ。

「い、いくつて、タケルツ！ もっ、もう、いくつええええ…」

少し早いけど、バスルームから続く興奮は爆発寸前。俺は腰の動力を小刻みな運動に変えて、その準備に入った。

「由美いいい…。いい、一緒にいい。一緒にいい」

「う、うん、一緒にいい、いい、いくつつつつ…」

反り上がった由美の上半身がその絶頂の波に合わせて、がくがくと痙攣した。今だ！ 膣から抜いたチンコをお尻の割れ目に乗せた瞬間、ぴゅぴゅぴゅぴゅーう、と精液が勢いよく由美の背中に飛び散った。

あつたかい…。カーペットの毛並みが微かに揺れ、エアコンの音より大きく二人の呼吸が漏れている。俯せに寝る私と仰向けに倒れるタケル。寄り添ってきてくれたタケルに、私は最後の力を振り絞って唇を上げた。

街路樹からの木漏れ日、小鳥のさえざりとそばを通り過ぎるランドセルを背負った子達の元気いい声が、まだ重たく鈍い俺の瞼を叩き、学校前の坂道に差し掛かる頃には朝のしぶとい睡魔から完璧に起こされる。

あれから一週間が経っていた。由美から例の「合図」はまだ発せられていない。何も起こらないのならそれでもいいかな、と由美との間に起った事全てを過去の異物にしようとしても、「おはよ！」と俺の背中を叩いて走り過ぎ、今、校門に入るその由美の後ろ姿がああ時の姿見に映った全裸の後ろ姿に見え、朝立ちが終わって間もない俺のチンコをまたむくむくさせる始末。一度でも寝た女はその女が何を着てようと全裸に映る、あれから男特有の変質的透視力を同じ教室に居る由美に使い続けていると同時に、「朝から何ニヤついでんの？ いつやらしい！」と小走りに、ひんしゆくを校舎に向かわせる彩に対して、こいつのアソコはどんな具合なんだろ？ とまだ寝た事がない女への男特有の本能的想像力を用いていた俺は女どもから見れば変態窮まりないけど、「相変わらず、人気もんだなあ」と嫌みつたらしく俺の肩に腕を回す雄二みてえな野郎から見れば普通の男だった。

「おめえ、最近暗くねえ？」

「そうか？」

「うーん、何かぼーうってしてるってか…。そういう時は、ぱーっとコンパでって…悪い、ちょっと急ぐわ」

俺達の横を澄ました顔で通り過ぎていったシャギー髪の娘を、雄二は慌しく追いかけていった。がんばれよ、と苦笑いの俺に「タケル君！」と誰かが声をかけてきた。振り返ってみると、どっかで見

た顔。そいつは冬休みに入る前に雄二が、「こいつ、どうしても合コン体験してえんだって」と待ち合わせ場所のクラブに連れて来た…隣のクラスで…テニス部の…名前は確か…？ 思い出していたら、その爽やかなイケメンは軽快な足取りで、俺に駆け寄って来た。名前は思い出せねえが、そいつが俺に言った事と俺がそいつに言った事は鮮明に覚えていた。

喧しいクラブの騒音が微かに届くトイレの個室で適当にフェラさせてやった女を放り出した時、そのトイレ内でかち合ったそいつはシヨンベンしながら、あはは、と頭を撫でていた。女は、うふふ、と妖しい目つきを残し、口を押さえて逃げて行きやがったけど、合コンなんてこんなもんと、しらーっと無言で教えてやりたかった俺はそいつを通り過ぎると、清ました顔して鏡の前で真っ赤に染まった唇を拭き、乱れた髪とシャツを整えていた。

「タケル君…。凄いじゃん。いきなりあんな可愛い子と…」

俺の隣に来たそいつは手を洗いながら目を見開いて鏡越しに俺を眺めていた。

「もしかして…あの子狙ってた？」

「いやいや、そんなそんな」

どきまぎしながらハンカチで手を拭くそいつに思わず吹き出した。

「タケル君…水月ちゃんと付き合ってたんだよね？」

雄二が言つてたとおり、部活やつてる奴らのアイドルだった水月。そっちの噂も広まるのが早いらしい。

「ああ、付き合つてた。おめえもあのサッカー部の…」

「正也ね」

日に焼けた顔から真つ白い歯を浮かばせて笑つたそいつ。あの野郎の事知つてるのか？ なら、俺のいい噂は聞いてねえな。

「そ、そう、その正也みてえに水月に惚れてたのか？」

「確かにちよつといいなとは思つてたけど、正也みたいにのめり込んじやなかつたよ。正也は異常だよ。あいつ、どつか勘違いしててさ。ちよとばかりし大学のスカウトマンから目付けられてるだけでスター気取りでさ。自惚れ屋つての？」

「違う。俺は頷きながら微笑んだ。

「自分が好きな女は全て自分の事も好きって思い込むんだよね。部活やつてる連中も、皆、自信過剰な正也を毛嫌いしてるよ。で、タケル君が水月ちゃん絡みで、その正也のプライドをズタズタにくれてさ。それから正也の奴しゅんとなつちやつて。皆、いい気味だつてせいせいしてるよ。それから部活組の男子の間じゃ、やつてくれたつて、タケル君の人気は急上昇だよ。俺も遠慮なくズバズバもの言えちゃうタケル君みたいな男に憧れるよ。俺達は、空気読めない奴はチームプレイに適さないつて教育されちゃうから、言いたい事も言えなくなるんだよね」

雄二の野郎が俺と正也の事をこいつらに触れ回つたんだろ。蛇口

を止めた俺は、けなされてるんだか、褒められてるんだか、とりあらず苦笑い。そいつはいきがつた正也とは違い。ちよつとお喋りだが、憎めねえ体育会系だった。

「女からモテても悪き気はしねえけど、男からモテてもちよとなあ。初めての合コンはどうだ？ 楽しんでるか？」

うん、と姿勢を正してまた白い歯を見せたそいつ。

「たまにはこうやって校則破って、女の子達とはめ外すのも悪くないね。凄い楽しいよ」

分厚い胸板と喉仏が目立つ長い首を真つ直ぐに笑顔を見せるそいつは目鼻立ちが整い、凜々しい顔立ちのイケメンだけど…面白さに欠けていて、女からは、いい人、だけで終わられそうなタイプ。手助けしてやるか。またお節介を閃いた俺は、そっかあ、と怪しくそいつの肩に腕を回した。

「じゃあ、あとはその女だな。テーブルに帰ってたら、気に入った女を目で合図しろよ。俺が話つけてやるよ。今夜はとことんはめ外せよ」

そいつの耳元で囁くと、いやいや、と首を振るそいつ。へらへらと笑った俺はそいつの分厚い胸を軽く叩いてやった。

「何言ってるんだよ。おねえがダメでも…こいつがOKだから」

そう言って、そいつの下半身に視線を落とすと、そいつは慌てて俺から離れた。憎めねえんだけど、やっぱ面白くねえ野郎だ。溜息しか出てこない。

「てか、俺さあ…気に入った子がいてさあ…」

何だよ？ いるんじゃないか。遠慮すんなって。

「ほう。そう来なきゃよ。どの子だよ。おめえの隣に座ってた茶髪の子か？ 早速、話つけてやるよ」

ドアに行こうとした俺の腕を、ちよと！ とそいつが引っ張った。

「な、何だよ？ 俺に任せとけて」

「ここでは…任せらんないんだよ」

やや俯くそいつの顔を覗き込んだ。

「どっぴうこつたよ？」

「ここには…居ないんだよ」

「どこにいるんだよ？」

「学校に…」

「学校？」

「あ、のっ…」

そいつは視線を漂わせながら顔を上げた。

「由美ちゃんって…好きな人いるのかな？」

「はあ？ 由美って…あの由美？」

「そ、そう、タケル君と雄二君と仲がいい…」

で、また俯く男前。

「そんな事なら…雄二に…」

「雄二君には言ったよ。そしたら…タケル君に相談してみろって」

あのバカ！ 面倒くせえ事を俺に押し付けやがって。それでこの男前を不似合な場所にわざわざ連れてきやがったんだな。苦手だっ
てのこんな実直そのものの男の恋バナ聞くの。鼻を擦った俺。

「自分で聞けよ」

そいつの肩を叩いた俺は逃げるようにトイレのドアを開けた。でもまあ…由美も親父と付き合うより、ああいう不器用なタイプと付き合う方が意外といいかもな。しっかりした姉貴と頼りない弟みてえだよ。喧しい騒音の中、テーブルに戻りながら俺は一人でニヤニヤしていた。

と、まあ確かにあの時は笑い飛ばした俺だけど、これ由美ちゃん
にあって俺にこんなもん渡されても…男前。あの時と今じゃあ色々事情が変わってて…何て言える訳がないよな。

うわ！ 俺が引くほどの勢いで、男前がジャケットのポケットか

ら出したのは白い封筒の真ん中に筆ペンで、由美様へ、と達筆とも言えねえ字で書かれた普通なら爆笑もんのださださのラブレター。何を今更…？ 俺への要望は分かっていた。

「だから、自分で渡せつての！」

「書くのに一ヶ月以上掛かって。昨日、タケル君の教室の前を行ったり来たりしたんだけど…どうしても…渡せなかったんだ。タベも寝られなかった。お願いします！ タケル君！」

はい？ その時代おくれのラブレターを俺の前に両手で突き出し、深々と頭を下げる男前。憎めねえだけ…困った奴だなあ。鼻を擦っている、女の集団が男二人の醜態を滑稽にして、白い目でひそひそしながら通り過ぎて行きやがった。人前で堪えられたもんじゃない。しょうがねえなあ。諦めてそのラブレターをひったくると、顔を上げた男前はまた清々しい白い歯を見せやがって、まあ。

「結果は責任持たねえぞ」

「ありがとう！ ありがとう！」

何度も九十度に頭を下げる男前。

「止める！ 皆見てるつての」

封筒の裏を見ると、村上慎吾。そうか、確か、慎吾って名前だったよな。ま、でも、おめえは男前でいいや。

「じゃな、男前」

俺はまた逃げるように校舎へ向かった。参ったよなあ と頭を掻きながら下足場に着いた俺は自分の上履きを、でもまあ、とゆっくり取り出した。よく考えてみりゃあ、由美の彼氏でも何でも俺が別に何の躊躇もする必要ないか。階段にかかると、自然に深呼吸した。俺は…ただ由美と一発…二発…三発…四発…五発、風呂では入るのか？ うん、じゃ、五・五発やっただけの男だ。階段を登る足取が軽やかになり、一段抜かして駆け上がった。でも、こんな事、あの実正也に言っただけに露骨にあの男前に喋った日によ自殺もんだろうよ。教室の二階に着くとピタッと足が止まる。で、由美はこれ貰ったらどんな反応するんだ？ 男前だけど面白くない… 由美のタイプじゃねえよ。教室の前でもう一度深呼吸をした。考えても仕方ない。俺はただの受け渡し人。関係ねえよ。さっぱり笑顔を浮かべて教室に入って机に向かうと、「起きてる!？」またいきなり背中を叩いてきた由美。「わっ!」と反射的にそのラブレターをポケットにしまう俺。

「そんなびつくりする事ないでしょ」

ケラケラ笑いながら、彩の机に向かう由美。こんな時でも例の透視力と想像力が交差する。目を固く閉じて、首を振って廊下に視線を流すと、あの男前がまた俺に白い歯を見せて通り過ぎやがった。ふーっと息を吐き、気を取り直して俺は自分の机に向かった。

「朝からニヤニヤは直った？」

想像力の方が話かけてくる。

「またいやらし事かんがえてたんでしょ？」

透視力の方が明るく正解を言う。

あれから一週間も経つ。全く、時計を外さない由美。由美の中では俺との事は…もう過去になってるんだ。と改めて解釈すれば、ポケットに入ってる男前のラブレターの重みも軽くなった。あの男前が由美のタイプがどうかは知らねえけど、由美は俺みたいなのセフレとちゃらちゃら付き合うより、特定の奴ともつと真剣に付き合った方が幸せになれるんだ。

何？ いつもなら私の冗談に付き合ってくれるタケルは黙りこくった。あれから、私は私なりに、皆の手前、必死で親友の顔を作ってた。でも、疲れて…抱いて欲しくて堪らなくなって何度も何度も時計を外そうと思ったけど…。もしタケルがその合図を忘れてたら？ たとえタケルが覚えていても、淫乱な女だつて思われたら？ てか、何でタケルから誘ってくれないの？ 私ってそんな魅力ない？ ちょっと強引だったから、私…嫌われちゃたかな？ さまざまな憶測がその行動を躊躇させていた。

「由美。どうしたの？」

「へ？ いや、何でもないよ」

彩の声で正気に返らされると、タケルが席から立ち上がった。

そう思っても、五・五度もセックスした同じクラスに居る女に他の奴からのラブレターは渡しづらい。始業のチャイムまであと十分ある。あの野郎を使えばいいんだ。机についた頬杖でぺしゃんこになった顔をぼーっと窓に向ける男。その様子じゃ、きつとシヤギー

髪の子と上手くいかなかったんだな。

「おい、ちょっと話があんだよ」

え？ と顔を上げた雄二。俺は顎を廊下の方へ振った。

「どうも声かけづれえんだよねえ。何か壁があるってかさあ…」

どいつもこいつも呑気な片思いかよ。頭を撫でて欠伸する雄二を、俺は教室に居る女二人の視線をチラチラと気にしながらそいつらの視界に入らない廊下の隅まで連れて来た。

「で、何？」

「じ、これなあ…」

俺が徐にポケットから取り出した男前のラブレターを見て、雄二はまず吹いた。

「キヤハハハ！ 何これ？ 果たし状かよ？」

確かに、間違えられてもしょうがねえラブレター。苦笑いで雄二の爆笑に対応した。

「これ、あの…村上って男前からの」

「わ、分かってるよ。あの野郎、マジ書いたんだあ？」

俺の手から取ったラブレターを窓からの日の光に当てて中身を透かそうとする雄二。

「んな好きなら手紙でもかけよって俺の言った事を間に受けるとわねえ。でも、今時、手紙つても流行んねえよな」

やっぱりおめえが発端かよ。なら遠慮いらねえ。

「朝、あの男前からこれ渡しといてくれって言われてよ。てめえで渡せって言ったんだけど…。何か、勇気ねえらしんだよ。だから、ほのめかしたおめえが責任持って由美に渡しとけよ」

「おう、いいよ。由美どんな顔すんだろ」

意外と軽く受けて、よし！ と教室に駆け戻る雄二。

「ちょ、ちょっと待て、まだ話があ…」

追いかける俺の声は始業前の教室の騒々しさに消されたのか、面白さに駆り出す雄二がわざと無視したのか、そんな事はもうどうでもいい。

「由美いいい！」

雄二の甲高い声に振り向く由美。いいや、マジで彼氏でもない俺が何にも気を揉む事はない。

「はい、これ」

含み笑いのたちの悪い顔で、雄二は由美にそのラブレターを差し出した。何これ？ 視線を上下、猜疑心ばりばりの顔つきで、それを受け取る由美。

「何って、ここに由美様へって書いてあんじん。ラブレターだよ。タケルからの」

殺すぞ！ てめえ！ 啞然を食らった俺に顔を向ける由美と彩。止めてくれよ。

一瞬だけど、かなり嬉しかった私。顔が熱くなったけど、すぐそれが雄二の冗談だって分かった。タケルが私に様なんて付ける訳がないし、ラブレターなんて古い手もタケルは使わない。それに…もうこんな事しなくなつて…。彩と顔を見合つて、くすつと溢した。

「はいはい、誰からよ」

封筒を裏返すと、村上慎吾。聞いた事ない名前。

「タケルからつてのは嘘だけどよ。タケルが今朝、そいつから受け取ったんだよ。由美に渡しといてつて。な？ タケル」

言わなくていい事を言いやがつて。それを口止めする為に、さっき、おめえを追いかけてたんだよ。でも…いいや。俺が受け取るうが、雄二が受け取るうが、男前が直接渡そうが、行き着く先は由美だからよ。うん、とまた鼻を擦った俺。

タケルがすんなりと受け取った？ 鼻擦っちゃってさあ。そんな困らなきゃいけない事？ てか、何で、こんなもん受け取るのよ？ 私達はそりゃセフレに違いないけど…。でも…。でも私の雰囲気ですの…。何て言うかあ…。

「どんな子なの？」

手紙を覗き込んでいた彩が雄二に顔を上げる。

「テニス部に居る奴でさあ。なかなかイケメンだぜ」

「へー、格好いい子なんだって。由美」

彩は私の腕を擦ってくれたけど、嬉しさなんて微塵も感じない。これが雄二が受けたもんなら、そんな格好いいんだ！？ とタケルに当つけがましく言ってやるけど、これはタケルが受け取ったものの複雑だった。出来れば…由美には好きな人がいるから無理だよ、と受け取らないで欲しかった。それぐらいの配慮がいくらセフレでもあっていいんじゃない？

「なかなか素直な奴で、嘘なんてつけねえタイプだ。デートぐらいしてやればいいじゃん」

とどめをを刺すような信じられないタケルの言葉。私の気持ちはどうでもいいの？ 爆発寸前の私を始業チャイムが止めた。とりあえず話しようよ。私はタケルを睨み付けて時計を外し、誰にも分かってもらえない、分かれちゃいけない複雑さと一緒に自分の席に体を向けた。一人ぼっちじゃん。

すげえ怖い目付きだったけど、何か俺：悪い事したあ？ 雄二の顔を見ると、いやいやいや、と顔を震わせて雄二は席に戻った。由美の背中が、うーん、綺麗な裸体に見える見える。

「由美、昔、テニスしてる男にストーカーされちゃった事あるから、トラウマあるかもね」

隣の席から、彩が俺に耳打ちした。ああ、いい匂い。マジでおまえの裸体ってどうなってるんだ？ 想像する想像する。男なら誰だっ
てこんなもんなんだよ。

覚醒

薄い緑のカーテンを透かしていた夕日が段々と色あせていくと、タケルが立ち上がり、部屋の蛍光灯をつけた。微かに漏れたのは私の溜息。ジュースの缶は二本とも滴を薦わせ、テーブルのガラス面を濡らしていた。冷たい空気に、私はまだ口元までタータンチェックのマフラーを着けたまま、時折、目元まで顔を沈めてみて、何を言おうか、考えるけど、どうも思い浮かばない。

「ラブレター…どうした？」

最初に口火を切ったタケル。ジュースの缶をテーブルから取り、開けて一口飲んだ。

「まだ持ってる」

ようやくマフラーを取った私。

「返事…どうすんだよ？」

まだタケルは私と目を合わせない。

「あんたは私にデートして欲しいんでしょ？」

やけっぱちに取ったジュースの缶を開けた。

「俺は…どっちでもいいよ」

ジュースの缶をテーブルに戻し、うなだれて、タケルは頭を撫で

る。

「どっちでも？ ならデートしてあげるよ！」

もうイライラは最高潮。乱暴に缶をテーブルに戻すと、私は勢いよく立ち上がり、「帰る！」と鞆とマフラーを鷲掴みにしてドアに突進した。

「ちょっと、まっ！」

立ち上がったタケルはドアのノブに手を掛けた私を背中から引き離そうとした。当然、手足をばたつかせて暴れる私。

「嫌っ！ もっ！ はっ、離してよ！」

カバンとマフラーが床に落ちる。

「落ち着けてよ！ 由美！」

私を引き寄せるタケル。私は強引に振り返り、タケルの胸を押し、「バカ！ 離してっ！」と叩く。

外の冷たい空気とほどよい室温に挟まれた教室の窓ガラスは曇り、次第に結露が水滴の線を作ろうとしていた。これじゃあ、窓の外を眺めて授業をただ聞き流して退屈な時間をただ経過させる事は出来ない。こんな日はこれに限るよな。頬杖の角度を微妙に変えて横目

で隣に座る彩を見る。今日もポニーテールからのほつれ毛を小さい顔の輪郭と白いうなじに漂わせながら真面目にノートを取る彩。夏ならブラウスからブラが透けるんだけどなあ。白いVネックのセーターは机の上に乗るか、乗らないか、ぷくつと可愛らしい丘のラインを描いている。こいつのオツパイは一握り…ないよな。大丈夫、俺、貧乳も好きだから。要は形だつて。乳首の色と大きさは…？肌の色からしてメラニン色素を帯びてなく薄いだろ。大きさはオツパイの大きさに反比例して巨砲かな？ いやいや、んなバカな。きつと小豆大の可愛い小粒に違いない。横目ではなくなった露骨になった視線は、それでそれで、と下がる一方。口も半分開いてくる。ほう、いいじゃん。チェックのスカートから出る長い生脚は寒そうに内股になって閉じられていた。アソコの毛。んん…意外と情熱的に濃いかも。で、最後、割れ目は…？ 勝手極まりない暇潰しの想像でチンコを固くすると、彩はシャーペンを止め、キリツと鋭くこつちを見た。ヤベ、と頬杖と視線を外したけど、一瞬遅い。

「何見てんだよ？」

低い声で囁いた彩。ヒヤツとさせるその瞳もまた綺麗つて、褒める場合じゃねえ。

「あ、いや、その…そのノートまた見せて欲しいなつて」

ナイスリカバリー。

「たけえぞつ」

小声で言つて、彩はノートに視線を戻した。

「わーつてるよ」

同じように小声で言い、顔を前に向けようとした時、彩の先に由美の姿が映った。気付かれないように俯いて涙をノートに落とす由美。全裸は浮かばない。何て事しちまったんだ。遅すぎたけど、俺は初めて朝の自分の言動に後悔した。女の気持ち分かるの…まだまだ勉強不足だよって、おめえも気付いてるんなら、泣いてる泣いてる、って、由美を指差しながらふざけた顔して口だけ動かすなよ！雄二！思わず笑っちゃまうだが。この始末、あとみんな俺なんだからあ。頼むよ。

よく想像力を全開に働かせて描いていた、この妻の体。陰毛が想像より薄いくらいで殆ど想像通り。妻が声を殺す為に、うっうう、と全身を力ませると、膣が、ぎゅぎゅ、と強くチンコを締め付ける。

「フウググウフフフ…、クグウフフグフフ…」

視界が歪むほど腰の振りを速めると、妻が噛み締めるハンカチの隙間から漏れる声と荒くなっただ鼻息が調合された。

「あああ、彩…。た、堪えないようっつ」

立ちっぱなしで月だす妻の白いお尻を撫で、俺は内股から右手を進入させて、中指で固いクリを弾き上げる。

「ウツグクウググウウ…」

更に膣が締まり、妻が握るアルミ製の窓枠から、キツキツキツ、と響く普通なら鼓膜を突かれて不快になるような爪音も妙に俺の興奮を高める嬌音になる。妻の口からハンカチが落ちた。

「イグウウウ…。そ、そんなにチンコ動かしちゃああ…。クリいじうちああ…。」

快樂の中で、気張って小さく声を絞り出す妻はもう限界の様子。実はお、俺も…。

「いいよ…。彩…。い、一緒に…」

こくりと頷いた妻。頭を小刻みに、ウググクウグク…、と小刻みに痙攣させる。もう来る。

「イ、イクウウ…」

「いくぞ、うっ、あっ、うぶっうぶっ…」

「ハッ、クツ、フフウウウ…」

出てるっ…。熱い夫の愛情が、生命が、私の子宮に吸収されてるうっうっ…。もっ、うっ、ああ、だ、出してえ、い、いつ、あ、また当たるうっ、い、いっぱい出してえ…。最愛の人に精液を思う存分中出しされるこの女の至福。時間を止めて欲しかった。このままずっと繋がり、感じて、受け止めていたい…。

「いいから話ぐらい聞けつての!」

「嫌だ! は、離してっ!」

俺の胸の中で、髪を振り乱して狂乱する由美。こうなった女には言葉なんて一切通用しない。なら…これしかない。ドア付近で揉み合う俺と由美。俺は力づくで由美の体をベッドまで引き込んで押し倒した。いやっ! と仰向けに倒れた由美。その制服のスカートから白い太股が露になる。俺は素早くジャケットを脱ぎ去り、ベッドに飛び込んで由美に覆い被さった。

「バカッ! こっ、こんな時になっ、何すんのよ!」

「いいんだよ!」

由美の両脚の間に体を入れた俺は、イヤーツ! と俺の体をか弱い力で押し返す両手をベッドに押さえ付け、首筋に唇を落とし、舌を這わせた。

「もっ! イ、イヤだつてっ!」

鼓膜を直撃する由美の怒声。俺の体に開かされた両脚は駄々っ子のようにばたつく。背中や太股に蹴りが入っていたけど、かまっちゃらんない。乱れた由美のブラウスの裾に進入させた右手。ブラのカップの僅かな隙間を突いて乳首まで到達させる。コリコリに固くなった乳首を中指と人差し指の間に挟みながら思い切りオッパイをグリップした。

「うっ！ タツ、タケルのバカああああ！」

うるさい由美の口を唇で塞いで舌を入れると、ガタガチに食い縛った歯が和らいでいった。でもまだ、うんうんうん、と鼻息を発し、空いた左手で力なく俺の腕を叩く由美の抵抗は残っている。止めはこれだ。ブラから抜いた右手を、すぐさまスカートの中に突っ込み、パンツをまさぐる。うん？ 湿ってる。由美の舌が、うーん、鼻息と一緒に俺の舌に温かく絡み付き、全ての抵抗が止んだ。こうなつた女は二種類。からからに渴いて一から濡らさなきゃいけない女と初めから濡れて男に楽させてくれる女。由美は後者だった。よっし！ 俺はパンツのクロツチから一気に右手を進入。うわ！ 濡れてるところか、漏らしてるみてえじゃねえか！ びしょびしょ。

「くふくふうっうっ…」

俺の首に両腕を回す、駄々っ子だけど、健気な由美が可愛くて仕方ない。体を起こした俺はもう邪魔な代物の由美のパンツをスカートの中から剥ぎ取り、せつかちな興奮からくる震えを押さえながら、カチャカチャ、自分のベルトを外してスボンとトランクスを同時に脱ぎ捨てる。いくぞ！ より広く由美の両脚を開けると、俺はそのスカートの中に顔を潜り込ませた。

ベッドのヘッドレストに背中を付け、私を腕枕してくれる夫。あれだけ激しいセックスの直後、剥き出しの胸からの鼓動と私の舌に絡む息遣いはまだ若干荒く感じた。夫の胸元から撫で上げた手を頬に当てて、私は夫から唇を離す。

「大丈夫だった？」

私が尋ねると、夫は私の前髪を梳いて耳に掛けてくれた。夫の優しく、どこことなく悲しい瞳はあの頃のまま。何も変わらない。

「大丈夫さ。平気平気」

「いきなりするんだもん。ビックリしちゃったよ」

私はまた夫の胸に顔を埋めた。

「未だに…信じられない」

夫のその言葉に現実へ戻された私は込み上がる涙を堪える為により強く夫を抱き締めた。どんな事があっても絶対に離れない。私の誓いもあの頃のまま。何も変わらない。

艶かしい喘ぎ声と妖しい振動音が微妙に漏れるドア。二人で何をやってるのか？ 皆、暗黙の了解。振り向いて咳払いしたママの合図にうちのママ、駆けつけお姉ちゃん、美妃、雄二に智喜が一斉に俯いて吹き出す笑いを堪えた。

「で、どんな感じ…？」

雄二が見えるわけないのにぴっちり締まったドアの隙間に目を当てそつになる。

「バカ！ あんた」

笑い声混じりの小声で叱った美妃が後ろから襟を掴んで雄二をドアから引き離す。それを見てた、私も含めた他の五人は、もうダメ、とお腹を抱え、体を震わせてドアから距離を取った。私は両脚をばたばたに涙を人差し指で掬う。

「こ、これ…。し、しばらく二人きりにしてあげよ。む、向こうこ」

絞り出すようなうちのママの声。その提案に賛同した私達は、どろどろとゆっくり、エレベーター前のベンチに移動した。

「洒落になんねえよ！ あいつら」「昼間から元気よすぎだつての」「マジ心配してんだつての。こっちは…」と、皆が堪っていた笑いを解放させたのも束の間。

「ねえ、真紀姉。本当にタケルって…そんな…？」

ベンチに着く直前に、ママがうちのママに尋ねると、場違いな笑いに気付いた私達は静まり返った。

「裕子…」

うちのママが看護師の真顔を振り向かせた。タケルの事はまだ…彩とママとうちのママ、そして、私しか知らない。

そう。私は濡れていた。学校からタケルが私を追いかけきてくれ

た時より更に前、学校に居る時から、私は怒り、泣きながら濡れていた。いやでも、この一週間、常に濡れていたかも…。

タケルが自分の部屋に私を連れてきてくれた時点で、私の憤慨はほとんど癒えていた。その証拠に、部屋に入ってから今まで、タケルと何を話したかよく覚えていない。なら困らせあげよ、ぐらいな気持ちだけだったから。それより何より、演じきれない部分、女の弱い部分をタケルに悟られなくなかった。次第にパンツに染みる液体と正直に、抱いて、と言えない自分自身にイライラして我慢出来ずにテーブルを立ったのが事実。

今、タケルの舌が、ふうぐうう…、私のクリに温かくいたから、私は小指を噛んだ。制服のまま、パンツだけ脱がされただけで…こんな…。恥ずかしさなんて裏腹に大きく広げた両脚。次第に小指が痛くなる。鼻息だけでは体の熱を発散させきれない。

「タケルッ！ バカッ！ きつ、気持ちいいっ！」

私はスカート越しにタケルの頭を撫で回した。

ちゅるる、と吸い込んだ由美のクリ。我ながら器用にクリとその保護皮の溝に舌先をまわり付け、更には、ちろちろ、震わせる。その振動につられて由美の太股が、ぶるっぶるっ、と痙攣した。膣にゆっくりを人差し指を沈めると、溢れ出た愛液が肛門に流れ落ちる。堪えない…。俺はお尻を持ち上げて、肛門ごと、じゅるじゅる、その愛駅を嚙り上げてやった。

「ぐあああ…。タケルウウウウ…」

舌のビートを速くすると、俺の頭を撫でるのではなく、強く押し

込む由美。感じまくってる。

どうして、怒ってる女つてのはこう男を欲情させるんだろ？ 由美の怒りは俺の興奮を頂点まで高めていた。学校から追いかけた時より、ずっと前から、学校に居る頃から、その悲しく怒る横顔に勃起していた俺は、事実、どこかで由美を押し倒すタイミングを見計らっていた。

そのまま陰門に舌と唇を残し、俺は下半身を由美の頭の方に移動させ、かちかちのチンコを口元に突き立てた。

欲しかったものがやって来た。タケルのチンコを手放して頼張る私。ねつとり、と力がこもる眉間とは逆に、出来るだけ舌を柔かくして裏筋を掬い上げた。枕代わりに、タケルの内腿に頭を置いたら、可愛いタマタマを指でそよがせながら、その先っぽを全て口内に含んで、くちゆくちゅ、と吸って舐めて転がし、もう夢中になる。出てきた…。甘酸っぱいタケルの液がほとばしる尿道に舌先を付けて押し込む。タケルのクリへ攻撃が更にそ、その…。いい、いい威力を増してえええ…。負けずに私も、吸い込んだ先っぽを上下に細かく速く動かすと、ア、アアア…。アソコにかかるタケルの吐息があああ…。熱くなるうふう。い、入れてえええ…。ほ、欲しいいいい。そ、そんな、ち、ち膣までえ、こっつ、肛門までえ、な、舐められたら、いいい、今すぐうふう…。いれてえええ…。その願望を、私は思い切りチンコに染み込ませた。

その吸引と舐め鳴らしが俺に限界を越えさせた。由美の陰門から唇と舌を離すと、愛液と唾液で作成された透明糸が二、三本引かれる。美味かったあ。上半身を起こすと同時に、すぽん、とチンコを

吐き出す由美。素早く俺が覆い被されれば、お互い、ねとねとになった唇をぶつけ合った。離れる唇にも透明糸が引かれる。見詰め合ったままに、由美の用意万端に出来上がった膣にチンコを思い切り、挿入。

「タケルッ！」

ぬるつとした感触を得る前に、雷鳴の如く、由美の叫びが部屋に響き渡った。じわじわ、ゆるゆる、とチンコに伝わるそのねっとりとした膣内の柔らかくも熱い感触と潤みきった由美の瞳に吸収される神経が調合され、まるで麻薬ように全身に駆け巡る。その作用により、俺は、ぐうぐうっ、チンコを力の限り強く、もうこれ以上進まない、由美の膣内最深部まで到達させると、振幅一センチぐらい、小刻みにチンコを上下に振るった。

「タケルウウウ…す、凄いいいい…いい…」

桃色に染まる由美。俺はその強く深い運動を持続させながら、由美のブラウスのボタンを外した。

「由美いい…。まだああ、お、怒ってるう？」

全て外されたボタンから薄い水色のブラが露になる。少しだけ横を向いて、つんとした、また可愛らしいアヒル口をした由美。俺は由美の背中に腕を回しこ込んでブラのホックを弾いた。カップからブラをまくりあ上げると制服のブレザーからオッパイが飛び出した。制服エッチは…人格を壊滅させて、どれだけ男を野獣にさせるか、やれば分かるよ。

「お、怒ってんのかよ？」

ぎゅっと握り締めたオツパイ。お指で固い乳首をこねる。俺は、うぐうぐうぐ、と漏らす口を結ぶ由美から、その答えを聞きたく、更にチンポの振動を強めた。上になってるものの勝ちさ。

「お、怒ってるっ…」

由美の口がまた尖る。そんなの嘘って分かってる。こんな時は女の上の口より下の口を信用するもの。

「っ、ごめんなあ…。由美いいい…」

でも、とりあえず、女を見詰めたまま、チンコの勢いを持続させ、目に真剣身を漂わせて謝り、誠意を見せれば…女が照れ臭く漏らすのはこの一言に決まってる。

「バカ…」

この一言で、もう完璧にわだかまりは消え失せる。由美は俺の思惑どおりに俺の首に両腕を回して引き寄せる。熱く激しいキスも、チンコの勢いだけは消せやしない。

「うぐふぶぐふぶううういぐうぐうう…」

由美は俺のシャツの肩口を握り、その快感に耐えていた。余りにも幼く変わった由美。その姿がいつもの頼もしい由美とかけ離れ、俺の優しさを引き出す。

「由美…。うう、バイト料入ったからさあ…。今夜は飯お、奢るよ

う。二人でファミレスいこ…」

「うん」

由美が眉をへの字にして泣きそうに頷く。マジ、いける表情だ。もつと嬉しがらせなきや。

「その後は…後は…二人でホテルに…ホテルに泊まる」

「うん、と、泊まりたいいい…」

俺を手繰り寄せて、キスする由美。

「泊まるううう…。タケル」

まだまだ。

「今日はき、金曜日…。泊まって土曜日で。土曜日もここへ戻ってこよ。でええ、ううう、次の日曜もいつ、一緒にいいい」

「週末ううう…ずっ一緒にいよううう」

チンコがより激しくグラインドすと、ねちやねちやと絡む由美の舌。堪能した俺は舌を離し、揺続けて由美を眺める。優しさの後は、その由美の、うううううふう、と俺に見詰められて恥ずかしそうに震えるその表情が興奮をより一層高めるネタになった。

「由美…。俺達…い、今…一つだよ」

分かりきった事を聞かれると、余計に照れてしまう。

「ゆ、由美の中…すごい温かいよ。こんなにぐぢゅぐぢゅいって
るっ…」

もう！ 何言ってるんだか。

「バカッ！ くぐっあああっ…」

叫んでみても、すぐにチンチンの過激な動きに揉み消されてしま
い、そのタケルの言葉が私を高揚させる。

「ほら、ゆ、由美いい…。クリもこんなに固くなってえ。こんなに
感じちゃってさ…」

「タケルウウウ…。バカもっっっ…」

まだ恥ずかしい。

「由美の膣の中…凄いき、気持ちいい…。止まらないよっ…」

「と、止めないでえええ…。き、気持ちよすぎいいい…」

段々…開き直りってくる。

「おまえの…おまえの子宮に亀頭がガツガツ当たってるよっ…」

エッチなタケルに、もう完全に覚醒させられた。こうなった私は
生易しくない。

「タケルッ！」

タケルのシャツを力いっぱい開けた私。ブチブチブチブチ、と全てのボタンが弾き飛ぶ。下からとはいえ、私はそのシャツをタケルから引き脱がした。

ふわふわわ、と啞然としていたら、今度は俺のシャツを掴んで脱がそうとする由美。わ、わかったって。自分で脱ぐってよ。さすがに、チンコの動きを止めた俺がTシャツを脱ぐと、下から由美が体をお越し、俺に抱き付きいてキス。うぐうう、と一瞬、呼吸を止められた俺は由美に押し倒され、由美が騎乗位の姿勢を取った。

さあ！ 上になってるものの勝ちだよ。心の中で舌なめずりした私。静かに見下ろした可愛く幼いタケルに微笑を浮かべた。あんたを味わってあげる。

俺から目を離さず、ゆっくりと制服のジャケット、ブラウスとブラを脱ぎ捨てた由美。静寂に妖しく光るその瞳は凶暴なまでに俺を捕えていた。な、何すんの？ 由美：姉さん。

でも時には…

「ちよと話いいかな？」

放課後、彩からノートを借りると、「で、これも、バイトの帰りにでも返しといて。何なら、返却日は明日までだから、今夜バイトが終わったら見ていいよ」とDVDのケースも一緒に渡された。ケースには駅前のレンタルDVDショップの店名。開けてみると、うええ、とても健全な男子高生が夜中に一人で見れる代物じゃない韓流ドラマ。「おめえ、こんなの趣味なわけ？」としかめっ面を上げてやると、「なわけないでしょ。お母さんのだよ」と彩。何でもいや。パシリー一回で昼寝してた英語の授業のノートが借りられるんだから安いもんだ。鞆にノートとDVDをしまう俺。そのニヤニヤを覗き込んだ彩は「こんなんじゃ借り終わったと思うなよな。ファミレスちゃんと連れてけよ」俺の腕をポンと叩く。いつかその小ぶりなオツパイ揉みちゃくつてやる。その本音と本能を押さえて、「わーてるよ」と言えば、「じゃ、バイト頑張つてねえ」彩は後ろ向きに手を振った。「途中まで一緒に帰ろうか？」の一言があつてもいいんじゃないの？ 彩のそういうさっぱりしたところが喧嘩のネタになり、また憎み切れない理由でもあつた。この前の喧嘩の原因は…第二ボタンまでしっかり閉めるって言われて…。その前が…スパゲッティカルボナーラか、カルボナーラか、どっちが正しか？ クラス中に聞いたけど、また半分に割れて。お互いむム力ついて一日中喋らなかつた。確か、俺がカルボナーラ。いや、ナーラの方が？ あいつがラーナ？ どっちだったっけ？ 喧嘩の次の日、「おはよ！」と背中を叩かれれば、そこで全てが終わって、また新しく始まる彩と俺。ぶつぶつしながら階段を降りた。マジ揉んでみてえなあ…。バイトの帰りにわざわざ駅に迂回するのも面倒だし、由美に

時間があれば頼むんだけど、今日、新しいバイトの面接があるって先に帰った。何でも居酒屋のバイトらしい。確かに、あいつはコンビにでレジなんて打つより、元気良く走り回る客商売が似合ってる。

冬場のガソリンスタンドでのバイトはきつい。一応、こつちも客商売。ポケットに手を突っ込んで客を迎えるわけにはいかない。寒風に晒され、痛く凍える素手をジャンパーの袖を長くしてカバーする。白い息を吐き散らし、流れ出そうになる鼻水を啜りながら店頭で客の車を待つ。今夜は雪が降ってないだけまだましだ。温かそうな店内の時計を見れば、まだあと二十分もある。店のガラスに反射する車のライトに気付き、振り返ると、白いセダンがスタンドに入ってきた。

「いらしゃいませ！」

勢いよく上がった白い息が顔に掛かり、そのセダンに駆け寄る。

パワーウィンドが開くと、一瞬だけ車内からの温風に浸れるのがさやかに密かな楽しみだった。

「レギュラー満タンで」

お客と目があつた。どっかで見た顔だったけど、よく来る客かも。「レギュラー満タンで」と客の言葉を繰り返し、片時の温帯から離れて車の給油口にノズルを差した後は、また辛い仕事。冷たい濡れ雑巾で客の車のガラスを拭く。かじかむ手でフロントガラスを拭き始め、その客とまた目が合った。この男：知ってる。手が止まるとフロントガラスに掛かる白い息が薄ら笑いを浮かべるその男の顔を消した。

給油と窓拭きが終わって、まだ俺を見てやがる、運転席の窓に寄ると、その男が金を渡しながらか言った「話がある」に「お釣りお持

ちします」とやや言葉を被せ、車を離れた俺。その男が俺としたい話の内容におおよその見当を付けてた。聞きたくねえし、関わり合いたくもねえ。でも…何で俺達の事を知ってんだ？ 結局、こっちも聞きたい事があると判断した。

「少しでいいんだ」

男の要望に釣りを返しながら俯く。白い溜息が顔に掛かり、窓越しに目線だけ上げれば、その男の気味悪い薄ら笑いが靄に透けた。

「寄りたいたこがあんだ。こいつで送っていつてくれんならいいよ」

「バイト…何時に終わるの？」

妙に落ち着いた低い声。

「あと10分ちよい」

「分かった。向かいの…商店街の入口の辺で車止めてるよ。じゃあ」

送っていつてくれんだから…いいや。その男の車の赤いテールランプに白い溜息が被さった。

上になって主導権をタケルから奪った私。タケルのおどおどしい顔を見下げて唇を落とし、口内の舌の巻き付けに合わせて腰を回転させた。すーうつと時計回りに、そして、六時のところでぐっと押

し下げると、うぐつ、先端が子宮口にぶつかり、頭の芯に、くつ、電気が走る。熔ける快樂と突き刺さる刺激の堪ないアンサンブルに酔いしれた。

「由美…。気持ち…いい」

唇と唇の隙間から虫が泣くような小さな声で可愛く漏らすタケル。その細く開かれた瞳から微かに滲むダークブラウンが美しすぎた。

「タケル…」

唇から離れて上半身を少し前にやっても、チンチンが膣に吸い寄せられるように付いてきた。左手をベッドにつき、タケルの頭を右手で包んだ私は半分開いたその口に、食べて、乳首を突っ込んだ。タケルはまるで大きい赤ちゃんのように、ぱふぱふ、と必死に乳首に吸い付く。

「もっと、もっと吸って…」

「美味しいよ…。由美…」

自分で自分の乳首を男の口に…。その上、一瞬右手を外して股間に潜り込ませ、ぬるぬる、愛液まみれのチンコに指を触れてその結合を意味があるんだか、ないんだか、入ってる入ってる、なんとなくチエックする私。こんなに下品になるなんて、させられるなんて夢にも思わなかった。どこまで私はタケルと相性が合うんだろ？再び私は右手をオツパイに戻した。

冗談を撒き散らして笑わせたり、急に拗ねて怒ったと思えば、照れながらなついてくる。俯きがちな女の子には「元気だせよ」とそばで見てても、何あれ？ とやきもきする言葉と二の腕への柔らかか

い接触を忘れない。その反面、納得いかないものには皆の助言に逆らってまでも毅然を貫く。でも時々、何をそんなに？ 言葉を掛けられないほど寡黙になり、頼杖が寂しそうに瞳を窓の外に向かわせる。優しくて強いけど、本当は何かに疲れて、何かを悲しんでる。それをふざけてごまかしてるだけなんだね。そんな強弱、優劣、明暗が演技じみてなく、ごく自然に表れるところに女の子達は他の男の子にはない妖しい魅力を感じるんだね。私はタケルの彼女じゃない。私は…タケルの…。そう、タケルの女。彼女じゃなく、時にはお姉ちゃんのように叱ってあげて、時には愛する人を懸命に守るお母さん、時には納得いくまで話を聞いてあげられる親友に、そして、時には存分に快楽を分かち合える特定ではなく変幻できる、そんな女になる。私はそう心に誓った。口から乳首を抜けば、もっと下品になりたい、タケルの耳に唇を付けた私は中に舌を入れて舐め回した。

こいつの得意技か？ これ。 くちゅぐちゅ、舌が回転し、耳に直撃する由美の唾液音。その口撃の擦ったさに耐えかねて、あの日と同じ、「ゆ、由美いいい…」と腰を両手でつかんだ俺。チンコが自動的に膣内へ小刻みな連射を繰り返す。

「タケルうっうっうっ…気持ちいいいい…」

ドルビーサラウンドな喘ぎが鼓膜を揺らし、延髄を震わせる。益々、ぐちゅぐちゅ、愛液がチンポで溢れ返される音が卑猥に発せられ、玉袋がその液に湿らされていた。やられたら分かるよ。騎乗位で女に耳舐められたら、男はどうなるか。もう、ぐわうっわわうっ…、狂ったようにチンコの突き上げを繰り返し、その擦ったさと気持ち良さの間を疾走するしかない。由美はきつと前回で、その男の性質を見抜き、この高速連射により女も激楽を与えられる事を知っ

たに違いない。

「すすす、凄いようっつ…。 タケルうっつ…」

耳でこんなになるんなら…。舌の回転を緩めると、チンチンの動きも落ち着いた。私は好奇心任せに耳から唇と舌を首筋へ不規則に漂わせ、胸元に、ちろちろ、這わせる。

「ふんっ！ ぐわぐわいいいうあああ…」

思わず上がった声で、唾液の跡が乱れた。擦ったいんだね。膣の中で、あああああ…、と大暴れを取り戻したチンチン。でもまだ、こんなもんじゃ許さない。ここまで私を燃え上がらせたのはあんたなんだから。タケル…。上に乗ったもんが勝ちなんだ。固くなったタケルの乳首に、ぴちゃつと舌を、ぐぐわっ！ 私自身が発射されると思っぐらいチンチンの先端に子宮を押し上げられ、付けた。

す、凄まじい！ 由美の濡れ舌が、ころころ、と俺の乳首を掻き上げると、チンコに、ぐわわわわわ！ 耳よりも更に敏感な部分に与えられる怒涛の快進を呼んだ。跳ね上げられながらも、必死で乳首に食らい付く由美。ここまで発想するとは。もうチンコは折れそうなくらいに振られていたけど、その刺激が止まらない限り、チンコは俺の限界に逆らい続ける。歪む天井を眺めながら、俺は逆転を狙って、由美の内股に右手を滑り込ませ、茂みの中から小さく固いクリを探った。これを受けてみる！ と言わんばかりに、俺は中指でクリを弾き上げた。

ふっあうっ…、タケルの指の動きに、一気に鼻息が漏れ、一瞬怯んで舌が止まりそうになった。でも、私は逆にその指の動きに自分の舌の動きを乗せ、タケルと一緒に、気持ちよさを声ではなく行動で表現してやる、蠢きを速めた。

更に加速した由美の舌だった。しかし、俺も緩めない。俺が由美のクリを弾き、膣にチンコを小刻むと、刺激を得た由美は俺の乳首を吸い転がし、チンコを膣内でこねる。その興奮は俺の神経から指とチンコに伝わり、また由美の攻撃へと繋がる。そして、由美はまた俺へ返す。二人は「タケルううっ…」「由美いいい…」その快楽の連鎖の中に居た。

もう絶頂がああ…。子宮に充満したマグマがタケルの指とチンコによって噴火させそうにいい…。下半身が痙攣が徐々に全身を覆う。もうっ、もう…。乳首から離れた私。タケルの胸に両手をつけて顔を天井に上げた。さあ、叫び散るよっ！

「イツ！ イツ！ イツグウウアアア！」

うわあ。由美姉さん、まだでけえ声だあ。水月の比じゃねえ。表で子供が転ぶどころか、下手すりゃ車も事故るぜ。反り上がった由美を眺めながら手を由美の股間から抜いた俺。勝ちだな。まあ、男の威力ってな、ざっとこんなもんさ。意気揚々と、チンコを出し入れを再開した。さあ、あとは俺がいつて終了だ。俺は余裕を持ってチンコの突き上げを繰り返し、再び、由美の可愛らしい体を弾き上げた。

「うっぐぐうあくうくくく…」

いった直後のアソコは全体的に攪ったくたい。タケルの胸に体を倒した。私は顔に掛かる髪を気にも止めずに、くんくううんん…、子犬のような鳴き声でしがみつき、それでも、私はあんたの女、微かに腰を上下させてタケルをサポートした。

うっうっ…、子宮口からその熱さが亀頭に伝導する。由美の鳴き声と緩やかな腰の動きも、俺の激しいピストン運動を助け、もう限界。太股に力が籠り、その発射の準備に入った。由美に伝えて、タイミング良く、膣からチンコを抜かせないと…。

「由美…。お、俺も…い、いくよ」

タケルのほのめかしに、私は、だから何？ と咄嗟に思ってしまった。これは…チャンス。私は顔と髪を振り上げ、タケルの過激な出し入れに合わせて、また腰を急激に上下させた。

「タケル。私はあんたの女。あんたを中でいかせる義務があるんだよ」

「えー！　そ、そんな、おまえ、な、中でってえ…」

目を見開くと同時にチンチンの突き上げを緩めたタケルだけど、関係ない。ここは死んでも離れない。私はタケルの両脇の下に両手を回し込み、しっかりとしがみ付いて腰だけを思い切り上下させてタケルの爆発を助長させた。

「ゆ、由美って…。だ、いや、そ、そんな、う、動いたら、マ、マジ、中で…」

「つべこべ言う男を黙らすのはこれしかない。私はタケル唇に吸い付いて塞ぎ、舌をぐるんぐるんに絡める。

「い、いきないいい…。タケルうつつ…」

口内で呟くと、眉間に皺を寄せて苦しそうな表情のタケル。何、我慢してるわけ？　いくようっ！　唇を離れた私は荒れ狂う腰をそのままに、もう一度、タケルの耳に舌を挿入させ、かき混ぜた。

「由美っ！　イ、イクウウウウ…」

「出してっ！　タケルウウウウ…」

タケルの耳から唇と顔を上げた瞬間、で、出たああああ…、私の奥にタケルの精液が放たれ、で、出てるうつつうつつ…、子宮に入り込んだその熱に全身が和らげられ、ぱたんとタケルに倒れた。

「タケル…。温かいよう…」

とくとく波打つチンチン。まだ流入する愛するタケルの精液。タケル以前の男とはゴムなしでは到底できなかったセックス。初めてされる、厳密に言えば、させた中出しだけど、最愛の人からの精液がふざけた恋愛ごっこを繰り返した過去の私を内部から洗い流してくれているようだった。これが最高の愛情…。

負けた…。どう足掻いても…女にはかなわねえ。由美の中で、まだ脈打つチンコがその敗北を嘲笑ってるようだった。でも、何かすがすがしい。由美なら…由美姉さんなら、こんな負けっぷりでもいいや。チンコの揺れがやむと、はーはー、俺の首筋に吹き付けられる健気な由美の息を感じ取れた。

チンチンの痙攣が止むと、急に恥ずかしさと変な躊躇いが私を襲った。何か顔を上げづらい。タケルにとっては想定外だろうなあ？ 怒られるかなあ？ どんな顔してタケルを見ればいいのか？

「由美…。大丈夫かあ？」

大丈夫？ 私の髪を撫でながら、タケルの予想外の言葉に恐々だけど、顔を上げた私。

やった直後の乱れ髪の女はやっぱり最高だ。

「よかったよ。最高だった」

俺はその髪を手櫛で梳かした。

嬉し涙でも照れ臭かった私は、またタケルの首筋に落ちた。

「本当にいい？」

「ああ、本当に最高だった」

「約束…覚えてる？」

「ああ、この後、一緒に飯食って、ホテルに泊まって…」

「土曜も日曜もずっと一緒だよ」

「うん。一緒だ」

また髪を撫でてくれるタケル。

「一緒にシャワー浴びよう」

髪にキスしてくれた。

「もうしばらく…このままで…」

「これじゃあ…繋がったまんまで固まっちゃうよ」

「それでもいいよ」

でも時には…妹みたいに甘えさせて。

バイトが終わり、スタンドを出た俺。街灯の明かりだけになり、すっかり寂しくなった国道にほとんど車は行き来していない。ダウンジャケットの前ポケットに両手をつ込み、機関車のように白い息を上げ、スタンドから斜め向かい商店街へ疾走。カチカチカチ…、黄色いハザードランプが点滅するあの男の車に走り込んで助手席のドアを開けた。

「寒い寒い。冬場の仕事はきついね」

助手席に腰を落としてドアを閉めると、擦り合わせた両手に暖かい息を吹き込んだ。

「何なら、うちのバイトに来るか？ スタンドよりかは温かいぞ。一人辞めたから大変で」

「止めとくよ。俺は仕事じゃなく雇い主見てバイト先決めるほうだね。とりあえず駅前までな」

ふっ、とその男はまた薄ら笑い溢し、オートマレバーをドライブに入れ、サイドブレーキを下ろして車を発進させた。短い髪を無造

作に立たせたすらつとした面長の中年男は学校からそんなに離れてない大通りに面したコンビニのオーナー。水月とも行ったことあるし、中学の時には塾帰りによく彩と寄った。下校の買い食いついでに雄二と一緒に由美を冷やかしに顔出した事もあった。だから、「俺の顔よく分かったね」って言われなくても、よく覚えてるって、あんたの顔なんて。店の中じゃ愛想いい笑顔だけど、今夜は運転席の緑のパネル光に照らされた怪しい微笑を闇に浮かばせている。由美の元彼、不倫相手。だから、「聞きたい事がある」って言われなくても、分かっているって、あんたが俺に聞きたい事なんて。

「俺：何度も寝てるよ。由美と」

さつぱりと面倒臭い結論を言っただけなら、キーツ、と車が急停止。両足を踏ん張ると、次に来るのは何か分かった。「殺気はまず相手の表情から判断しろ。怒鳴り声を上げるだけの奴より薄気味悪く笑う奴の方が要注意だ」と昔、親父に教えてもらったとおり、その男は俺の顔面に向けて裏拳を放ってきた。「そういう奴のそばでは常に準備しとけ。まずは防御のな」とも言っていた親父。もうポケットには手を手に突っ込んでいないし、最初からシートベルトも締めてない俺。親父の言葉に、分かっているよ、と心中で答えれば、そのクソ遅い裏拳を顔面の前で両手でナイスキャッチ。軽やかに掴んだ男の手首。上半身を運転席の男の方へ向けながら思い切り外側へ捻る。合気道の関節技は、昔々、悪さした罰としてお袋から体で覚えさせられた。急ブレーキ直後のシートベルトはがっしりと固定されて体の動きが取れなくなるってバイト先の社長が言っていた。身動き出来ず、「クツカカカカ…」と息を詰まらせ、顔をシートにへばり付かせて激痛に顔を歪める男。

「おい、オッサン。由美と俺含めて今時のガキ舐めじゃねえぞ」

冷静に語り、冷徹に睨み付けてやる。あと一センチ絞れば、この
オッサンの腕は…折れる。

それを分かって

何とかドリリアにドリンクバーのセット。それにデザートチョコアイス。一回のノート借賃としては高くついた。でも暇つぶしが出来た俺。苦笑いで、口の周りにアイスを付けるまだあどけない彩にテーブルの隅に置かれた紙ナプインホルダーから一枚渡す。

「ありがとう。あいかわらず…隙ないよね」

「隙の問題かよ。仮にも一緒にいる女にだらしくしてほしくないだけさ」

わざと苦笑いを持続させてコーラを飲むと、彩が背筋を伸ばしてスプーンをアイスの皿に置いた。また来るぜえ。

「ちょっと、仮にとか、だらしないって言い方やめろよな！」

そのでかい声に対して、俺が周りを見回すと、彩は人目を忘れた憤慨に気付き、肩を竦めて目玉だけを動かした。

「元気なのはいいんだけど、学校じゃねえんだからよ」

「わ、分かってるよ」

視線を落とした彩は皿のスプーンを取り、アイスを口に運んだ。

「元気つていえば…。タケル、最近、元気ないね」

「元気かあ…。最近、エッチのしすぎが顔や動作に出てるかもな。」

「そうか？」

鼻を擦りたい気持ちになっただけど、こいつには俺の癖がばれてる、堪えた俺はコーラのグラスに手を伸ばした。

「女と別れたのがそんなに痛手なの？ そんな事で……。だらしないのはタケルの方だよ。もうちょっとシャキツとしないと幸せも寄って来ないよ」

スプーンくわえてのんきにしゃがって。でも、いいや。俺が水月と別れて元気がないって、彩は思ってくれてる。由美とのセックス疲れなんて死んでも言えない。別に、由美とは言い合わせてはないけど、由美は自分の親友の彩だけには仲間同士で一線を越えた二人の関係を絶対に知られちゃいけないって事をよく分かってるはず。

「当分：大人しくしとくよ」

彩に嘘を付いた気まずさを、俺はコーラで流し込んだ。

何か：私に隠してる。テーブルを挟んで向かい合わせになっても、目を合わせようとしないうタケル。少しの猜疑心が私の加えたスプーンをかに揺らしていた。

「別に好きな子できた？」

唐突な質問にも、タケルは鼻を擦らない。ちよっただけ、ほっとした。

「んな急に、できる分けないだろ」

不思議に鼻を擦ろうとしなかった俺。彩と目を合わさなのまま、窓に溜息を向ける。いつから…こんな？ テーブルに両肘を突いて握り締めた左手を右手で包むと、ファミレスに来て、初めて彩と目を合わせた。

「分かってるよ。折り畳み傘、鞆に入ってるから」

彩が膝横の鞆をぽんぽんと叩くと、俺は溜息とも苦笑いとも分からない息を吐いた。

「彩…。おめえ…俺の家に来たことなかったよな？」

何で、いきなり、そんな事聞くの？ もしかして、私を…家に誘ってる。一瞬、外の雨音が店のBGMより大きく聞こえたような。

「ない…けど…」

こんな雨の日にタケルの家に行って…それで…？ 私は恐る恐るの上目遣いでタケルを残したまま溶けたアイスを掬って口に運んだ。

何訳の分かんねえ事言ってたんだ？ 彩の不安な表情に醒まされた

俺。今度は真正銘な苦笑い。また口の周りにアイスを付ける彩にまたテーブルの隅からナプキンを差し出す。

「ここからなら俺の家の方が近いからな。わざわざ、おまえの家に寄って遠回りしたくないだけだよ。別に変な意味じゃねえよ」

チャリンと音を立てて皿の上に落ちたスプーン。ゴシゴシと乱暴に口を拭く彩。また来るぞ。

「嫌だよ！ 何で、こっちがわざわざ、おめえの家に遠回りしなきゃなんねえんだよ！？ 傘に入れてやるだけでも、有り難く思え！」

少しだけ期待した自分自身にも腹が立っていた。

私服に着替えた俺とまだ制服の由美。玄関を出ると、すっかりと暗く、より冷たくなった街路。夕方まで止んでいた雪がまた降り始めたようだ。舞い散る白い塵が住宅地の街灯に照らされている。傘を差すほどでもなく、そのまま歩き出す。マフラーを口元まで上げた由美。髪がまだ湿り、微かな湯気とお袋のリンスの香りを冷たい空気に漂わせた。俺はそんな髪にも触れずに両手をダッフルコートポケットに突っ込む。部屋に一緒に居る時と違い、誰にも秘密な関係、手なんか繋いでて誰かに見られたら…、別に言い合わせなくて

も分かった。由美と俺は友達同士の男女が一定に保つ間隔を維持しながら歩いた。

「気持ち…良かった？」

言葉は見えないもの。唐突に大胆な事を言っただけで目元までマフラーに顔を沈める由美。

「あ、ああ…。とつても」

「もうおさまった？ チンチン」

手は繋げないんだから、せめて言葉だけは大胆にしたかった。ふっふっふ…、とタケルの白い息が断続的に吹き上がった。

「おまえがまた風呂場でフェラしてくるから元気になっちまったじゃん。おさめるの大変だったよ」

照れ笑いを堪えるのが苦しくなり、マフラーを下げて、私は、きやははは！ と一気に白い息を吹き出した。

「てか、あんたのチンチン。私がフェラする前から元気だったしい。だから、気遣ってあげただけじゃん！」

私の大声にタケルは足を止めて、周りを見回した。誰も居ない街路。来てほしい。手繰り寄せたいほど欲しいタケルの白い息。私の目の訴えに無言で反応してくれたタケルは半歩分空いた二人の友達間隔を温かく包んでくれた。寒くて暗い夜空に伸びる二本の吐息が

消え、すがり付く私に注入してくれた熱気は私を熔かし、動き回る舌がその熔解を膾から流させる。このままじゃ、ヤバいかも…。私の頃合いを見計らったように舌が止み、唇が糸を引いて離れると、また吐息が二本、夜空に伸び始めた。

「行こう。腹ペコだ」

「うん」

由美の前髪を梳いた後、俺たちはまた一定の間隔を空けて歩き始めた。

後ろに来た車がクラクションを鳴らす。しょうがねえなあ。その一センチ手前で俺はオッサンの手首を離れた。

「ぐっぐっふふう…」

情けなく叫びながら、オッサンは俺に捻られた左手首を顔面の前で右手で握り締め、手のひらの開閉を繰り返して息を荒げた。またクラクションが鳴る。

「オッサン、車だよ」

俺が涼しい顔で親指で後ろを差すと、オッサンは左手をぶらぶら

振りながら、片手でハンドルを操作した。オッサンは相当焦ってたんだろ。サイドブレーキを解除し忘れてたせいで、車の動きがスムーズじゃなかった。

「酷い事するじゃないか？」

何を言うと思ったら。緑のフロントパネルがオッサンのこめかみに汗を光らせていた。

「はあ？ 先に手出したのはオッサンだせ」

もっともな事だ。オッサンは茶色のジャケットの胸ポケットからハンカチを出して汗を拭いた。

「そう、そうだな。つい…ついカッとなったこっちが悪いんだ」

ふっ、と呆れ笑いの俺は「こっから歩いて行くよ」とドアに手を掛けた。

「ま、待ってくれ。話したい事があるんだ」

ドアから手を離し、俺はフロントガラスに向かって大きく息を吐いた。

「何だよ？ 俺と由美が寝てる関係って分かったんだから、もういいだろ。オッサン、由美と別れたいって切り出したのはあんたの方だろ？ それも金使ってたな」

「金を使ったのは女房の方だ。俺じゃない」

て、事は…。俺は下唇を指で触れ、オッサンに顔を向けた。

「オッサン。あんた…奥さんに由美の事バレたの？」

「携帯…見られてな」

腕を握り締めたながら、オッサンはハンドルに頭垂れた。

「かあーっ！ あのねえ、オッサン。そんなメールは読んだらすぐに消去だ。女つてのは男の携帯見て、やっと男の言葉と態度を信用する生き物なんだよ。だから、逆に俺なんて、気に入った女とはベツドの上で一緒にメール読んじゃうよ。ま、他に忙しい事がない時、限定だけどね」

「聞いた話どおり、君は女の子からモテそうだな」

オッサンはハンドルから顔を上げた。

「聞いた話？ あんた、誰からそんな話聞いたの？」

「君がうちの店に来た時、由美から聞いたよ。『あの子、タケルっていつて、見かけいいのもプラスして女の子から結構モテるですよ』ってね。でも、見かけは由美の言うとおりの単なるプラス要素だったね。腕つぶしも強いって情報は入ってなかったよ」

オッサンはまた手首を撫でた。

「由美の前で喧嘩なんてした事はないよ。もっと他にあるんじゃないの？ 由美が俺とセックスする理由」

露骨な俺の言葉に顔を沈ませたオッサンから、もはや戦闘意欲は感じられない。

「何で、俺が由美と…そういう関係になってるって、わかったの？」

オッサンはフロントガラスが曇るほど溜息を吐いた。

「君と由美が仲良く歩いているのを偶然見たんだよ。よくあのスタンドでガソリン入れるからね。君があそこでバイトしてるのは、『あ、由美が言ってた子はここでバイトしてるのか』って前から知ってた」

「俺と由美は…セックスする前から友達さ。一緒に歩いてても別に不思議じゃないだろ？」

オッサンの目がフロントガラスを見詰めたまま寂しく沈んだ。

「だから、単なる友達同士だと思ってたよ。さっき、君から『何度も寝てる』って聞くまではね」

ハンドルをギュッと握り締め、険しい表情を俺に向けるオッサン。あれ？ じゃ、俺が早く結論言いすぎて墓穴掘ったって事か。

「そう。そう言う事か。じゃ、あんたは俺と由美の関係を調べに来て…目的果たしたんだから、もういいだろ？ 殴りかかってくるほど未練があるってのは理解出来るけど、あんたも…奥さんがいる事だしさ。不倫なんてやめて真面目に生きなよ」

そう言ってドアレバーに手をかけ掛けた瞬間、「待って！」と身乗り出し、俺の肩を引くオッサン。肩の上に乗ったオッサンの手

に視線を流し、はあ？ とオッサンに見得を切った。

「あ、ご、ごめん」

オッサンは慌てて俺の肩から手を離す。

「何だよ？ まだ何かあんのかよ？」

鬱陶しく言い、ジャケットの襟を直す俺。

「確かに、君の軽い遊び感覚の口調に、一度は好きになった由美をもてあそばれているような感じがして大人げなく腹を立てた。それは素直に謝る」

目玉を左右に動かし、何故か顔に悲壮感を漂わすオッサン。ついさっきまでの怪しい影はなかった。もしかして、暗い車内と俺の、由美の不倫相手だから、きつと…、という極端な思い過ごし中で、薄ら笑ってるように見えてただだけかもしれない。好きだった相手を軽んじられたら、誰だつてムカつくよな。正当防衛なんてせずに、子供らしく一発殴らせてやってもよかった。

「分かったよ。で、話つて何？」

流石に制服のままじゃ、ホテルはまずい。ファミレスで飯を食った後、由美の家へ寄った。「今夜、親二人とも夜勤だから、上がってく？」と玄関先で尋ねる由美は「上がったら…ホテルに行きたく

なくなるよ」と答える俺に笑顔と、周りに誰もいない、軽く唇の残り香を預けてドアに消えた。これはホテルまで溜めておこう。普通なら寒さで凍てつくのに、下半身の固いものがカイロのように、じわじわと全身を暖めてくれる。十分も経たない内に、濃紺のナポレオンコートに身を包んだ由美が「お待たせ」とドアから現れた。

幾分か、タケルの足が速くなってるのを感じた。はやる気持ちは私も同じ。話す時間さえも勿体なく感じた。一秒でも早くタケルと一つになりたい。グリーンにライトアップされたホテルに入る時だけは私の手を強く握り締めてくれたタケル。

「ここでいいや」

ロビーで、タケルがどんな部屋を選んだかは覚えていない。上がるエレベーターをやらた遅く感じた。やっと着いた部屋に入った瞬間に、私達はお互いの唇をむさぼる。ふらふら、遠のく意識。ブーツを履いたまま廊下に倒れ込むと、部屋の電話が鳴った。

「ちょっと待ってる」

体を起こしたタケルは靴を脱ぎ、ベッドのそばの電話に駆け出した。息を荒く、立ち上がった私はその隙にブーツとコートを脱ぎ捨ててベッドに寄ってタケルを待った。フロントからの電話を切ったタケルは私に飛び付き、私は夢中でタケルの唇に吸い付きながらダウンジャケットを掴んで脱がせた。

「うるさくて寝られたもんじゃねえ」

姉貴のマンションから俺の家へ移動した俺達。俺と姉貴を吊し上げた、歯切れがよく恥ずかしいお袋の喋りを中心に一通り盛り上がった。一人づつ、ああ、彩とは入れねえ、風呂に入り、「じゃあ、私、早いから寝るねえ」と先に部屋へ上がるお袋。喋り疲れた俺達も眠気まなこ。女子達は、ああ、彩とは寝れねえ、姉貴の部屋へ、野郎どもは、今夜は男の臭いかよ、俺の部屋へ、「おやすみ」とそれぞれ別れた。

「ああっ！」

野郎二人のイビキの共演にベッドを飛び起きた俺。しょうがねえなあ。頭を掻きながら部屋を抜け出た。ぶつぶつ言いながら廊下の電気をつけると、姉貴の部屋のドアも開いた。

「どうしたの？ タケル」

部屋を出てすぐの廊下で鉢合わせたのは、姉貴のピンクのスエットがよく似合う美紀だった。

「あいつらのイビキがうるさくてな。寝られねえよ。おまえこそ、どうしたんだよ？」

俯いて静かに笑った美紀。

「彩と由美の間だもん。二人に抱き付かれちゃって。私も寝られな

いよ」

可愛い女ども。今度は俺が俯いて笑った。

「下いつて寝よ。おまえはソファー使えよ。俺は床で雑魚寝するよ」
階段を降りようとすると、美紀は俺の腕にすがり付いてきた。

「な、何すんだよ!？」

小声で叫ぶと、久しぶりに見るよな、美紀は小悪魔的な笑顔を上げた。

「今夜だけ。今夜だけでいいから、兄貴と妹になって一緒に寝よう」
何、寝言ほざいてるんだ？ また頭を掻きむしる。

「この歳になって、どこの世界に一緒に寝る兄妹がいるんだよ？」
「だって、タケル。お姉ちゃんと一緒に寝た事あるんでしょ？」
妹の私と一緒に寝ないなんて不公平じゃん」

また、そういうわがままを平気で。ああ…、と首を振りながら階段を降りようとすると、俺の腕を「今夜だけ。今夜だけだからあ」と引っ張る美紀。

「おめえはソファー！俺は床！」

小声で怒鳴る俺。もう女の「今夜だけ」には嵌まらねえぞ。

凄まじい勢いで絡まり、求め合う二人にとって、全裸になるのは
そう時間はかからない。気が付けばベッドに上や周りに服が散乱し
ている状態。二人っきりの時間と空間でも、恥ずかしさだけは女と
して残しておかないと…、と試ってみても、内股を擦るタケルの固
いチンチンが私の両脚を大胆に開かせるから、どうしようもない。

「なあ、由美…」

唇を離して上から見詰めるタケル。

「どうしたの？」

見詰め返して、私は両腕をタケルの首に回す。

「前に言った事…覚えてるか？」

チュツと軽めの唇が触れた。

「何、言ったけえ？」

タケルが私に語ってくれたことはいっぱいありすぎる。

「マツクでさ。おまえの裸が目焼き付いてるっていったら？」

私は顔をくしゃっとさせて頷いた。

「覚えてる。タケル、エッチなんだから」

次は、私が下からタケルを引き寄せて、チュツとする。

「今でもそうなんだ。おまえが制服着てようが…普段の服着てようが…何着てようと…」

タケルは私の唇を指で撫でる。

「このオツパイも…」

優しく触れられたオツパイを強く、うぶっっ…、下から上に揉み上げられる。

「この乳首も…」

摘ままれた乳首はも、もう、うっっく…、こ、こ転がされるにはあああ…、ちよっど、ちよっど、いいいい固さだいいいい…。

「でえ…」

乳首を離れたタケルの指は脇腹をそよがせ、アソコに…。わざとらしく陰毛をさわさわ撫でて、じらすタケルをまた引き寄せると、舌が私の首筋を這う。

「ここもっ…」

濡れてどろしよっもなくなり、その液が滲み出す割れ目にタケルの指が触れる。

「みんな…見えてる」

ぬるぬるの水分を得た指が、わ、私のクリに…。

「じゃっ、じゃあああ…。わ、私はあんたの前で、いつもマッパじやん…」

タケルのエッチな言葉に堪らなく恥ずかしくなり、思いつきり抱き付く私。タケルは私の首筋から顔を起こした。

「そっだよ。学校でもどこでも、おまえは俺の目にはずっつと全裸に映ってる。それを分かって生きていつて欲しい」

照れて、嬉しくて、重なるタケルの唇を吸い、「バカ」と口の呟くと、酸欠になり、気が遠くなるほど舌を絡めた。ゆ、指の動きがあああ…はやっ、速くなるうっつ…。

「タケルうっつ…。がっ、が、学校でもどどど、どこでもおお、そんなのおお…考えただけでえええ…ぬっ、ああああくっぐっくあああ…、濡れてくるうっついいあああああ…」

くちゅくちゅくちゅ、いやらしい音が全身に伝わる。もうダメ！

「タケルッ！好きにしてっ！」

「もう何なのよう…」

月曜日の朝、雄二と一緒に階段を上がってきたタケルと出くわした。

「おはよ。由美」

先に雄二に、「おはよ」と笑顔を作る。

「おはよ。由美。今朝もあいかわらず可愛いな」

「バカもう!」

私は慌ててトイレに駆け込んだ。いつもマツパな私を…。それを分かって生きていけって言われてもう…。慣れるまで時間がかかるよ。女子便の個室。ほらもう、やっぱ濡れてんじゃん。

「はあ!? オッサン、それマジな話か!？」

掴んだオッサンの襟。引き寄せたオッサンの顔が、う、ううん、と縦に震える。こっしちゃんない。俺はその襟を離した。

「とりあえずっ! とりあえず由美の家だっ! 急げ!」

「わ、分かった」

キキキーツとタイヤを鳴らしてUターンする車。由美が…由美が
危ない。激しい呼吸と震えが俺を襲っていた。

心配しなくても…

柔らかくいじられても、乳首は固いまま。吸い付くタケルは器用に舌を巻き付け、転がし、また吸う。ざらざらした舌先が乳首の先端を撫でると、「タケルうっ…」と私はタケルの頭を包んだ。

「美味しいよ…。由美…」

ぺろぺろと乳首を舐めているのを強調するように由美を見上げた。由美は俺の頭から離れた両手を枕の下に入れて俺と目を合わせる。

「気持ちいいいい…。タケル…」

テレビのそばの電気スタンド、間接照明が渗んだ薄暗い部屋に、地肌がベッドのシートに擦れる音、二人の息遣いと執拗に由美の乳首を愛撫する俺の舌の奏でが共鳴する。その水気を減らすことなく滑らせた舌が下腹部に漂い、茂みを掻き分けると、ふっつふっつ…、艶かしい声が由美の両膝を引き上げた。

「由美…。奥まで…丸見えだよ。愛液が膣から流れ落ちて肛門まで艶々じゃん」

枕に籠った声で、「そんな見ないで…。恥ずかしいよ」と言えば、私は少しだけ肛門を柔らかいベッドに沈めた。

「見てやる。瞼に焼き付けてやる。学校でも、どこでも、由美を見れば…。由美のここが頭に浮かんでくるようにしてやる。綺麗だよ…」

そんな言われたら…。いやらしくも嬉しい言葉の後、タケルは私のアソコに最初の一口をつけた。

「見ないでくれる！ 変態！」

まだ皆寝てる早朝。トイレから出ると、ドアの前にはちよつとだぼついた姉貴のシルバークレーのパジャマ。V字に開いた胸元に、「おは…」と自然に眠気を残す視線が落ち「よっ」とパジャマの袖口から小さく伸びた人差し指で目を擦る由美の顔に上がり、こいつ生足かよ、で、すぐにまた落ちる。その途端、内股になってパジャマの裾を押さえた由美はそう叫び、俺を押し退けてトイレに入った。ボタンと勢いよく閉まるドア。

生足晒してやがんの、おめえじゃねえか。変態？ 見ただけで…別に触ってもいないのに…？ 不思議な気分が髪を掻き乱す。

出来るだけ唾液を飲み込み、水分をなくして由美の膣口につけた舌。まるで濁いたスポンジのように膣から流出する愛液が染み込んでいく。染み込みすぎて吸収力がなくなると、舌面に溢れた液が舌

先からこぼれ落ちた。膣に挿入した舌を縦横に舌を動かすと、ぐぐうふうふうぐふふふ…、シーツを握り締める由美。円周の動きを舌に与えてやると、あっ、ああああうああ…、と両膝を抱え上げる。露になった肛門を、俺が逃すわけがない。ぬるっと滑り込んだ舌は、きゅっと締まった肛門をゆっくりとまったりと溶かす。ふうふうううう…、と由美が息を吐いたのと合わせて、やっと微妙に開いたその穴へ舌先を突っ込み、震わす。

「熱い…。タケルうう…。あつたかいよううう…」

「由美の肛門…美味しいよ…」

もつと奥を求める舌。

「嘘だようう…。そんなところうう…。美味しいわ、わけ、なっ、ないよううう…」

水分が切れれば、また膣に戻って液を舌に染み込ませて肛門へ戻る。もつと欲しい、となれば、うぐうああぐうう…、親指がクリをこね回す。

「ダッ、ダメだって、タケルッ！　ダメええええ…」

浮いた由美の両脚がボタンと落ちると、俺は上半身を迫り上げ、べたべたになった唇を由美のしっとり濡れた唇に落として真横に仰向いた。

タケルの求めていることはすぐに分かった。次は私の番。タケル

に覆い被さると、唇に舌を突っ込み唾液をお互いの唾液を混ぜ合わす。タケルの乳首に触れた指先が渦を作って固い先を転がし、激しく鳴っていた唇と舌が長い首に絡み付いた。

その乳首が私の口内に収まれば、揺れるオツパイがぺたぺたといきり立ったチンチンを叩く。ちよっと遊んで見たくなかった私。乳首でタケルのチンチンの裏筋をなぞり、尿道をつつく。「何やってんだよ?」と頭の下で両手を組んだタケルにただ、えへへ、と笑って返事する。擦り続けて、微妙な湿りを感じて離すと、っーと糸が尿道から乳首に伸びた。

「妻が…由美を…」

「はい?」

助手席で気だるく首を回して足を組もうとした時だった。

「あなたのアカチャンがどうしたの?」

組まれなかった脚がドンと車のフロアーを叩くと、オッサンの震える唇が動きだす。

「ああ…。さつき、妻にばれたって言ったろ? ばれた後…激怒した妻は家で大暴れした。拳げ句…『これで別れてきて』って、妻は引き出しから驚掴みにした店の売上を俺の顔に向かって投げつけた」

愛人からも、奥さんからも金を投げつけられるたあ。ざまあねえ親父だな。今度は俺の溜息がフロントガラスを曇らす。

「由美とは…別れたが、妻はそれだけじゃあ…」

「収まりつかなかったて訳だな」

またハンドルに頭垂れるオッサンの代わりに俺が答えた。頭を上げたオッサンが俺に顔を近付ける。緑に染まるオッサンの顔。うわ、キモい。俺はドアにたじろぐ。

「妻が言うには、俺の机からバイトの子達の履歴書を引っ張り出して、由美の住所を調べて。何度も…由美の家まで行って由美を監視してるらしいんだ」

「監視!？」と目を見開き、俺がドアから体を起こしすと、オッサンは慌てて体を引いた。

「何の為にさ？」

「由美を俺に近付けない為にだよ」

「んな事しなくったって、もう由美はあんたなんかには近付きやしないよ」

その視線をオッサンから逸らした俺。何度溜息をついても足りない。

「今日、妻から、由美が俺と別れた後すぐ格好いい子を家に連れ込んでるって聞かされてね。まさか、その子が君だとは思わなかった

よ

見られてたなんて、気付く余地ある訳ない。

「で、今日、初めて、あんたはカアチャンのストーカー行為に気付いたって訳かよ？」

「ああ…。正直、由美に対してまだ未練があった俺は妻のそんな行為よりも、由美に新しい男ができたという事実には…思わず逆上して目の前に居た妻を殴ってしまった」

もう溜息も出てこない。「最低もいいところじゃねえか」と呆れてこめかみを指で掻くだけ。

「その由美が言ってたよ。『女は分かる』ってさ。あんたのカアチャンは自分が殴られた理由を分かってる」

またオッサンは頂垂れる。

「だから…妻は台所から包丁を持ち出して、『あの子、殺してやる！』って出ていった」

何言った？ 視線を戻した俺はオッサンの襟を掴んだ。

フロントガラスに白い塵が無数に当たり、濡れた路面を弾くタイ

ヤの音がシートに伝わる。路肩に並んだ街灯の光を切りながら走る車は由美の家に向かっていった。

「カアチャンを止められなかったのかよ？」

「包丁を自分の喉元に突き付けて、『ついて来たら死んでやる』って言う妻を止められなかった。俺も興奮してたから、どうせすぐに帰って来るって見くびっていた」

「由美の家に直行すりゃいいのに…。何で俺なんかに会いに来たんだよ」

逸る俺はどうしようもなくシートの背もたれから体を起こし、いらした神経は両手に伝わってダッシュボードを叩かせていた。

「行ったさ！ 行ったけど…誰もいなかった。だから、友達の君なら由美の居場所知ってると思ってる…」

交差点の手前で黄色に変わる信号。車の速度が落ちると、「行け！」と俺の怒鳴り声に反応したオッサンはアクセルを踏み込んだ。腕時計をちらっと見た。十時四十分。バイトの面接なんてとうに終わってるはずだ。

「なら、俺に会った時に、真っ先に本題を言えよ！」

「俺と妻の問題を…。本当は誰にも知られたくなかった。とにかく、妻はもう臨月なんだ。妻が心配で…」

殴っておきながら何言ってた？ オッサンとアカチャンの問題？ じゃあ、由美はどうなるんだよ？ そう出かけた言葉が深く吸

い込まれた息に押さえ込まれた。運転手じゃなかったら、このオッサン、思いつきり殴り倒してやる。

「オッサン…。由美に連絡したの？」

「したさ。でも…電話もメールも着信拒否にされてる」

そりゃそうされるよな。ポケットから携帯を取り出した俺。とりあえず由美に連絡しねえと…。

夜空に向かって溜息する私。携帯つてのはつくづくありがた迷惑なもの。いくら着信拒否にしても、わざわざ発信者の名前を画面に表示させる。折り返しても欲しいの？ 無理無理。何度もそいつの名前が画面に表示された。くどすぎる。死んでもこれ以上見たくない名前。タケルの優しい笑顔を思い浮かばせ、今とは別人だった過去の私を拭おうとしても、また名前が表示された。嫌すぎる。私は電源を切って携帯を鞆の中に放り込んだ。

「何で電源切れてんだよ？」

俺は首を振りながら携帯を切った。車は交差点から狭い街路に入る。もうあとちょっとで由美の家。「今夜、親二人とも夜勤なんだ」

って言ってたような。

振り上げた髪を耳に掛けた私。タケルのチンチンを握り締め、先端に向けて泡で白く濁った唾の固まりを落とした。先ずは、親指を使って、くりくりとその唾液を先端に塗す。尿道からの液と私の唾液が混ざり、先端がより滑らかになる。次は、支柱の部分にも同じように唾の固まりを落とし、右手全体でグリップを効かせてしごく。最後は、タマタマの袋に唾を垂らして、左手で柔らかく、きゅっと可愛らしく緊縮したその袋を解す。

女に不自由するようなあんたじゃないって事は分かってる。ますますとしごきと解しに熱が入る。だから、あんたの自由を奪って、締め付けやしない。でも、この三日間は…私だけのものだよ…。

「由美…」

タケルの声によって、一時、我に帰らされた私。ふっとタケルに顔を上げた。

「何処でそんなこと覚えたの？」

しごきと解しが和らぎ、そりゃそう思われるよね、ぐふっと笑いが零れ、「昔…中学の時…」と言い掛けると、「中学の時におめえもうそんな事やったの？ 流石、由美姉さん、やるねえ」と早とちりし、いつもの口調で茶化すタケル。私は「違っつう…」と笑いながらチンチンとタマタマを握って揺すった。

「うわははは！ 強すぎだってよ。それ」

「あんたが勘違いするからでしょ！」

私もいつもの口調に戻ってる。

「中学の時、友達のお兄ちゃん…」

両肘をベッドに突いて、タケルは頭を上げた。

「え？ 友達のお兄ちゃんに、んな事教えてもらったの？ やっぱやるねえ。由美姉さ…」

この男だけは…。やけぎみってか、面白半分もあって、チンチンの先端をぱくつくわえ込んで、もがもがしてやった。

「ふわああ…。気持ち、気持ちよすぎだし！」

タケルは内股になって震えだす。スポンツと音をたてて抜いてやった先端にピンクの艶が出来ていた。

「違うよ！ 友達のお兄ちゃんの部屋から内緒で持ち出したAVをその子と見たの！ AVの中でやってた事を見よう見まねしただけだよ」

うつん、と何か難しそうな顔をして、タケルは頷いた。

「それもある意味、いやらしくてスゲエよな」

私の興味から作り上げた独創もあった。何れにしても「嫌なものは絶対に嫌」と言い放ち、セックスにおいて相手に奉仕なんてことしなかった私にとって、こんな大胆に、下品になるのは初めて。タケルだから…出来るんだ。改めての実感が私を更なる興奮と開拓へと導く。

「お尻の穴も舐めていい？」

また両肘を突いて頭を上げた俺。ギンギンにおっ立ったチンコを挟んで、潤んだ瞳と唇の女にそんな事言われて、「ダメ」なんて言う野郎は世界中に一人もいやしねえ。

「いいよ」

チンコの向こうの由美を見詰めたまま、俺は両膝をM字に浮かせた。恥ずかしいポーズだっけのは分かっている。でも、男にとって「アナル舐め」は、脳みそがとろけて耳の穴から出で、ふわふわと体が宙に浮きそうになるくらい気持ちいいんだ。まあ、騙されたと思っただけ一回やられてみれば分かるよ。

タマタマの下に顔を潜り込ませると、タケルの肛門が目ね前に。最愛の人の肛門だから、私は初めて味わう好奇心を持てた。今、萎んだタケルの穴に濡れた私の舌がねとつと付いた。

「うっ」

漏れた声と同時にタケルの両腿が微かに震えたけど、もうすでに、好奇心から執着に変わった私の神経はそれが繋がる舌を止める事は出来ない。まだ遠慮がちに萎む穴を固く尖らせた舌先がこじ開けようとする。

「由美いいい…」

タケルが私を呼べば、そびえるチンチンを握り締め、速くしごきなから肛門を舐め続ける。唾液がシートに染みる頃、少し柔らかくなった穴に、チャンス、と舌先を突き入れた。愛してる人に遠慮なんてする事出来ない私。荒くなる鼻息がタマタマを揺らしているようだった。

「気持ちいいい…。ようううう…。由美いいい…」

解けて開く肛門に、振動を与えられた舌が出し入れされる。マジで…美味しい…。ぴちゃぴちゃと嫌らしいけど楽しい音が私の鼓膜を揺らし、肛門に浴びせる吐息が更に濃くなった。

夢中に俺の肛門を舐める由美。意識朦朧としながら鏡張りの壁に映る、突き出された由美の陰門と肛門を眺めた。

「由美…。後ろ…丸見えだぜ」

肛門から顔を上げた由美はその壁に振り向き、鏡越しに、くしゃつと照れ笑いをくれた。

「鏡越しになんて見ないで直接見てよ」

肛門まで舐めたんだ。もう何でもあり。私は後ろ向けにタケルの顔を跨いだ。

こんな大胆になって…。眼前の由美の尻を両手で裂く。クリを唇で包み、ちゅーつと吸い出すと、ふうふうふう…、由美は由美でチンコを深く呑み込み、俺は俺で真空になった口内で舌でクリを転がす。

「タケルううう…。すごいいい…」

じゅぱつと吐き出したクリはより深い桃色に染まっていた。その体に似合う小降りな大陰唇と小陰唇。中指と人差し指で、小陰唇を舐めやすくする為に大陰唇を割る。軽快にビートをかけた舌で小陰唇を震わしてやると、由美はその快感の全てをチンコへぶつけるように、その吸引と上下運動を強めていった。ヤベえよ。これ…。俺は親指で膨張しきったクリをこねながら人差し指をぱくぱく開閉する膣に沈ませ、膣内をその指で。ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃと荒らしすと、ようやく、由美がチンコから体を起こした。

「タケルツ！ もうダメツ！ 入れてっ！」

振り上げた髪はまだお袋のリンスの香りを残していた。

タケルの顔から降りて振り返った私を、タケルはすぐに押し倒してくれた。両脚を広げて腰を浮かす私はずっと迫る愛しい人を見詰めたまま。

「来てえ…」

首に両手を回す。

「入れるよ」

うん、と頷くと、ズコーン、子宮にまたあの衝撃。それと同時に、私はタケルの唇な吸い付く。勢いよく膣に出し入れされるチンチンに連動されて二枚の舌が慌ただしく絡まる。繋がったまま、唇を重ねたまま、タケルが私を抱き起こすと、二人は向かい合わせになる座位の体勢になった。

タケルの膝の上で狂ったように揺れる私。私の唇から離れたタケルは乳首に吸い付く。

「タケルうつつ…。し、死んでもいい…」

タケルの頭を強く抱き締めた。「死んじゃだめだよ」と私の股間に手を潜り込ませて、クリを弄り始めたタケルは少し私の体を浮かせて両足を投げ出した。

「いじりやすいように…ちょっと向こうに倒れて」

もうタケルに言われるがまま、後ろ手を突き、私も両脚を投げ出して二人の結合部を露にし、恥ずかしくなんてない、クリを弾き上げるタケルの指のリズムを受けて私の腰も上下に弾んだ。

「由美…。おまえのここが俺のチンコを飲み込んで動いてるよ。よく見えるよ。いい…眺めだよ」

またエッチな事を言うタケルが可愛い。

「見てえ…。いっぱい見てえ…。タケルうっ…」

腰を回すと、ねちよねちよとアソコから音が漏れる。まだまだ、うぐうふぐああああ…。速くなるタケルの指。も、もつきてるう…。子宮からで、出てくるううう…。限界にもう到着しそうな私は後ろ手を離して仰向けに倒れた。私に覆い被さるタケル。その腰使いから送り出される振動が私の子宮からいち早くその解放を引き出すうとしていた。

歯を食いしばり、眉間に皺を寄せて顔を、ぐぐうふぐぐくと顔を真っ赤に膠着させる。由美のいくタイミングを把握していた俺クリから指を離し、両手をベッドに突いてチンコの動きを強く膣の最深ポイントまで亀頭を突き入れて小刻みに震わす、由美の好きなバイブレーション運動に切り替えた。これで前もいったからな。由美相手には、俺もこの奥で震わすやり方を好んだ。由美の膣は奥へ進むほど狭くなってくるタイプ。奥でチンコが締め付けられるううう…。

「タタタタ、タケルウウウ…。も、もうううううう、いいいいいい…」

「い、いっていいよっつっつっ…」

由美が俺の腰に両脚を巻き付けた。分かってる。もうそんな事しなくても…。

「由美。中で、中でいくよ」

心配しなくても…分かってるよ。

もう後戻りは嫌と巻き付けた両脚を、タケルが中にくれるうつつう…、安心して両脚を解くと、嬉しくて涙が零れた。

泣いてる女って、何でも男を興奮させるんだ。額に汗が滲み始める。こっからは息継ぎのなんてする暇もないぜ。由美いいいい…、俺は可能な限りの強さと速さでチンコに小刻みな振動を与えた。顎を引き、由美の顔が震えながら上がる。来るぞ。あの大音響が。

「い、いぐ、あっ！　いつぐうあああああ！！」

その絶叫は由美の陰門から潮まで吹き散らし、接合部からちゃぶちゃぶと音がした。俺も、俺も、さ、酸欠、ぎ、きみいいい…。

「いろいろくっくっ…」

弓なりに軋んだ体から全ての精気が由美に注がれ、どくどくどく…、ゆっくり放出される精液に、膣内でチンコが溶かされそうだった。

「じゃ、来週から来てください」

いい結果で終わったバイトの面接に、私の足取りは軽かった。カウターの前にいた強面のあの子は…確か一緒の学校の子だよな。恐そうな顔してたけど、帰り際に、ニコツと笑ってやったら、照れ臭そうに笑い返した。悪そうな奴には見えない。

信号待ちの交差点角、メンズショップのショーウィンドを、このシャツ、タケルに似合いそう。バイト料入ったら、プレゼントしてやるのかな。あいつには色々とお世話になってるから…、と眺めていた時だった。そのショーウィンドに人影が映った。

「あのう…」

誰？ 私は女の人の声に振り返った。

女として

濡れた枕に乗せられた頭が微妙に震えている。私の中で、どくどく、と繰り返される振動に同調され、慌ただしく出し入れされた呼吸が落ち着きを取り戻そうとしていたら、私に落ちてきたタケル。しっかりと抱き締め、温かい…、唇を交わすと、どくんと最後の反復が起こった。タケルの両脇の下から両腕を回し込み、まだ抜かないで…、完全に精液が私の子宮に浸透するまで無言の願いを吐息に沁みさせる。

そうしていると、肛門に熱い固まりがこぼれてきた。きつと、子宮に吸収されなかった精液が溢れてきたんだ。私が両脚を下ろすと唇を上げたタケルは体を離し、ベッドのヘッドレストから、サッササッサ…、とティッシュを素早く抜きとり、私のアソコにあてがった。

「由美…。おまえ、吹いたな」

吹いた？ 意味わかんない。え？ と両肘を突いて体を浮かせて下を見ると、驚きの光景がシートに広がっていた。

「何？ 何？ 何？ 何？ 何？ 何？」

「潮、潮、潮、潮、潮、潮」

私の連呼に、タケルも連呼で答えながら丁寧にアソコを拭いてくれた。

「わ、私…お漏らししてないしい！」

正直、泣きそう。

「分かってるって。悪い、俺にもティッシュ取ってくれ」

疑念と視線をベッドに残しながら上半身を起こしてヘッドレストに手を伸ばし、サッササッサ…、とティッシュを抜き取る。これがあの噂に聞く潮吹きってやつ…、とかなり焦っていたけど、ここは可愛く女の子らしく、無造作に取られたティッシュを一枚つつ丁寧に…重ねてって、指が震えて上手く出来ないから、もういいやって、くしゃくしゃにした。それを受け取るうとしたタケルに首を振り、「あ、いい、いい」と首を振る。ベッドに座り込んでいたタケルは「あ、ああ」と私のなすがままに。股間に顔を近付け私は縮んで小さくなったチンチンを摘まみ上げて綺麗に拭いた。

「おまえ…吹いたことないの？」

「ないないないないない」

股間から顔を上げた私はまた連呼。

「そうなんだあ」

「そ、そうだよ」

潮の地図が染みたシーツを眺めるタケル。ハズい、と抱き付き、うーふううー、とその初めての体験への驚きを拗ねたような声で表現した私はすらっと長いタケルの首にすがつた。

「女の子は気持ちよくなりすぎると、誰でも潮吹くんだよ。大丈夫大丈夫」

タケルは私の背中をぼんぼんとし、自然に固くなった唇に自分の唇を軽く合わせてくれた。らしくない私。こんな事でビビるなんて…。

「待ってる。タオル取ってくる」

普通なら私が腰を上げるけど、立てない。タケルはペタペタと足音を鳴らし、洗面所へ行き、フェイスタオルを持って帰ってきた。「あっ、わ、私が拭くから」とタケルから取り上げたタオルを濡れたシーツに強く押し付けて拭いたけど、当然、完璧には吸いとれない潮。

「ダメだあ」

諦めた私はそのタオルをシーツの濡れた部分に被せた。

「こっちおいで」

タケルが布団を引き上げながら私の肩に腕を回しすと、二人はベッドに倒れ、またお互いの舌を絡め合った。

「潮吹きが…初体験とは思わなかったなあ」

俺はまだ半信半疑だった。

「初めてだって！」

笑いながら俺の胸を叩く由美。眉間をくしゃつとさせて唇を尖らす表情は学校でよく俺達ガキの冗談を叱る時と同じ。由美が普段に戻った。

「うつそー！　じゃ、俺が由美姉さんを初めて吹かせた男？　光荣だねえ」

俺も普段に戻ろうとした。

「ちよーしに乗るなつての！」

由美が軽く俺の頬をつねる。

普段と違う二人。普段と違うのは二人が全裸で抱き合ってる事だけ。それだけしか…違うない。

「カアチャンには連絡つかないの？」

街路に入り、次の角を曲がれば、もう由美の家が見える。しかし、俺の焦りは膝までがくがくと上下に震わせていた。

「携帯持たないで飛び出していった」

そんなこつたるうよ。大量の息を吐きながら上を向いて首を振ると、「あっ！」とオッサンが叫び、急ブレーキを踏んだ。急停止した車の反動で、シートベルトをしていなかった俺は前に放り出される。何！？　と声になる間もなく、反射的にダッシュボードに両手

を突き、間一髪で顔面強打を避けた。

「オッサン！ 急に何だよ！？ 危ねえだろ！」

「妻だ！」

「えっ！？」と前を見ると、舞い散る雪の中、歩道のガードレール越しに、ふらふらと歩くベージュのコートの女がヘッドライトに照らされていた。

「行くぞ！」

ドアを開け、助手席から飛び降りる。車を巻き込む白く濁った排気ガスに視界を覆われた。ガードレールを飛び越すと、今度は白い息に視界を遮られる。

「待って！」

駆け寄りながら叫ぶと、彼女はドキッと両肩を上げて振り返り、「ちよと待てっ」と俺の言葉はコートの中から抜かれた包丁によって止められた。

「莉莎子！ やめないかつ！」

俺に追い付いたオッサンが叫んだ。

「うるさいっ！ ここまで来るのに相当覚悟したんだ！」

凍てつく空気の中で、血色のない白い顔、震えて紫に変色した唇、雪と寒風に乱された髪。そして、ぶるぶると包丁を突き付けながら

大きいお腹を片手で持ち上げて支えている彼女が、このオッサンのお陰でこんな…、痛々しい。オッサンを見ると、茫然自失はこの事、何を言いたいやら、口をぱくぱくさせているだけ。俺が行くしかねえか。顎を引いて冷たい空気を吸い込んだ俺は一步、彼女に近付く。

「来ないで！」

彼女は前に構えた包丁を自分の喉元に突き付けた。そう来るのかよ。足を止めた俺。彼女まではあと二歩はある。

「そ、それ以上近よったら、死んでやるからっ！」

「その美しい人…」

緊張しすぎて、思わず歯が浮くような台詞を吐き、自分で自分を笑いそうになったけど、若干、鼻から息が抜けただけで堪えた。

「な、何言ってたんだ？ お、おまえは…」

確かに…。震えるオッサンに「黙ってる！」と一括すると、彼女に視線を戻した。

「実質、初対面じゃないっすか。せめて…自己紹介でもさせてもらえませんか？」

割りと、紳士的に背筋を伸ばして語りかける俺。あんたが死んでも、こっちは困りやしねえよ。そんな本心を隠しながら彼女にもう一步近寄った。

「俺：由美の彼氏になった男です」

彼女の喉元に突き付けられた包丁の先端が微かに下がったように見えた。

「ああ、あんまり顔覚えてないと思うんですけど、ほら、由美の家に一緒に入ってた男ですよ。あの後：由美と無茶苦茶セックスやりまくりました。本当、由美も満足してくれて、このオッサンより遙かに俺の方がいいって。以来、由美は俺に夢中なんです。まあ、このオッサンに勝ってるのはチンコだけじゃないと思うんですけどねえ……」

紫の彼女の唇が少し緩み、ずっと笑い混じりの息を溢したように……。「何を!？」とまたほざくオッサンに振り返し、睨み付けて黙らすと、俺はもう一步、彼女に近付く。もう彼女に手が届く距離。しかし、俺は両手をジャケットのポケットに収めた。

「莉莎子さんっていいましたっけ？」

女の口説くのと一緒だ。強引にいけば……どんな女も逃げていく。下手すりゃ白い雪の代わりに真っ赤な血が飛び散る、ぎりぎりの状況下。張りつめた神経を少しでも和らげようと、俺は、近くで見れば綺麗な人だ、軽い遊び感覚へ、その方が饒舌になる、と気持ち切り替えた。

「分かりますよ。こないいい加減なオッサンに振り回されちゃ、どんな女だって莉莎子さんみたいになります。女に愛される資格なんて微塵もないスケベなだけの中年だ。莉莎子さんみたいな綺麗な人が……こんなオッサンの為に死ぬなんて勿体ない。まして殺人者になるなんて……」

まだ包丁は喉元に突き付けられたままだったけど、彼女は俺に聞き入ってくれていた。俺は視線を彼女のお腹に下げた。

「今、一番考えなきゃいけないのは…お腹の赤ちゃんの事じゃないですか？ 元気な赤ちゃんを産んでから…このオッサンと別れる事を考えればいい。俺んとも…親父が他に女作って、お袋から離婚されちまってるね」

え？ と表情を残し、彼女は包丁を下ろした。けど、俺は焦らない。落ちたように見える女ほど実はまだ落ちてない。ナンパの鉄則さ。

「親父はどうでも…お袋は好きですよ。莉莎子さんみたいに綺麗なお袋じゃないけど…。いつやあ、やっぱ子供ってのは父親より母親の見方なんすよね」

彼女の目から涙が一滴流れた。よし、仕上げだ。

「赤ちゃんが生まれれば、もう莉莎子さんは独りぼっちじゃない。元気で可愛い莉莎子さんの見方を産んで下さい。莉莎子さん似て可愛い赤ちゃんを」

「う、うああああ…」

嗚咽が漏れると、手から包丁がぼとりと落ち、彼女はその場にしやがみ込んだ。振り返れば、オッサンもしやがみ込んでいた。終わった。俺は寒空に白い息を吹き上げた。

「…」

明らかに、泣き声じゃない重い呻きが下から聞こえる。

「莉莎子さん…。大丈夫…？」

彼女の背中をさする俺。大丈夫…じゃねえよな。慌てて、振り返る。

「オッサン！ 車だ！」

顔を上げたオッサン。

「り、莉莎子！」

「早く車ここまで持ってこい！ 病院だ！」

「うああうわわ…」

奇声を上げ、オッサンは狼狽しながら車に戻る。

「莉莎子さん…。ちょっとだけ立ってますかあ？」

俺は彼女の腕を自分の肩に掛けて抱き起こした。

「すぐ…病院…行きましょう」

「き、君…。も、モテるでしょ？」

「はい？」

間近の彼女の顔に目を向けたためい。

「綺麗な…瞳だね。まるで…催眠術。彼女の…由美ちゃんが羨ましい…」

こんな状況じゃなきゃ、年上の女性から褒められて飛び上がるほど嬉しいんだけどなあ…。白くて長い溜息が伸びると、車が来た。

「冷たいっ！ 冷たいっ！ 冷たいっ！」

「あ、ごめん。まだ水だった」

「もう。おめえ、無茶するよう」

ふざけながら一緒に浴びたシャワーの後、タケルにブルーのローブを盗られた私は「マジ似合わないって…」と嫌々ピンクのローブを纏って「いいからこっちこいよ」と明るくなった部屋で、タケルが手招きするベッドへ「もっ！」と飛び乗る。バウンドした私の体をキャッチしてくれたタケルと倒れ込んで、また唇を重ねた。

「風邪ひくぞ」

タケルが被せてくれた布団にすっぽりとくるまれ、より強く体をタケルに押し付けた。

「ねえ、タケル」

「どうした？」

キスを交わしながら見詰めるライトブラウンの透き通った瞳。私から声をかけておきながら、ちょっと間を空けて「何でもない」と素っ気ない答えを返すくらいに見惚れて照れた。

「何だよ？ 言葉よ」

「いいの」

急激に私の舌がタケルの舌をもてあそぶと、髪に巻いたタオルが緩んで外れた。目を覆ったタオルを、タケルが取り去ると、またその瞳が私の全てを覆った。

「言葉よ」

吸い込まれていく私は観念した。

「私でよかったですら…何にも気にしないで、いつでもエッチしてね」

やっぱり突拍子な言葉に、タケルは唇を引いたけど、私はすぐに追いかけて吸い付き、だから、言いたくなかったのに…、また照れて舌を乱入させる。音を立てるほどの二枚の激しい交わりがしばらく続き、ふう、息継ぎが唇と舌を和らげた。

「いつでももって…おめえ…」

もうその瞳を見てられなく、私はタケルの首筋に唇を付けた。

「タケル…。マジで…余計な事考えなくていいからね。私が…勝手にあんたにすがってるだけだから。淫乱な女って思っておいてくれたらいいから。私の体に飽きたら…飽きたら」

「捨てるろってか？」

タケルの首筋から顔を上げ、うん、と頷いた。

「この先どうなろうと、由美とは一生付き合っていく。だから、おまえには…セフレでいいやって思うそこいらの女と同じ感覚持てねえよ」

そう言ってくれるのは嬉しいけど…。タケルの女になるって決めた私。愛してるタケルには出来るだけ安心して私を抱いて欲しかった。それが、特定の彼女ではなくただの女としての勤めだと思っから。

「中出しも気にしないでね。私…万が一って時の為に基礎体温計使って排卵日チェックしてるから」

「おまえ、んな事してんの？」

目を見開き、タケルが胸から見上げる私を見下ろした。益々、淫乱って思われるかも…。

「け、結構やってる子多いよ。ゴム着けないでやってくる男もいるからさ。わ、私は…んなゴム着けない奴とはエッチしたことないけどさあ。もし、されそうになったら、アソコ蹴り飛ばして逃げ帰るよ。で、でも…万が一って時の為だね」

胸が震え、くっくっくつ、とタケルは笑いだした。

「で、でもよ。中出しされてから…ヤバい、今日は危険日だって分かって遅いんじゃないの？」

軽くその胸を叩き、目を細めて唇を尖らす、不細工な顔を作る私。きつと学校でタケル達を叱り飛ばす時の態度と同じ。友達としての表情と同じ。出来るだけ…安心して、気楽に私を抱いてもらいたい。

「バカ！ そんなのがあつちやいけないから。危険日にエッチしない為に基礎体温を計ってるの！」

「なるほどねえ。さすが由美姉さん、頭いいや」

「あんたが悪すぎんだよって、濡れてきた！」

やけ気味にタケルの唇に吸い付く私。

「俺も…立ってきた」

タケルの口の中に、ふっふっふつ、と笑いをこぼす。布団の中でごそごそ、固いチンチンに触れ、愛してる…、女として言えない言葉。葉を吐息に変えてタケルに吹き込んだ。

「うーん、うっうっうーん」

運良くフォードアだった車。俺とオツサン、二人ががりで彼女を後部座席にのせた。俺が彼女を支えて、オツサンが運転し、病院へ向かう。彼女は大きいお腹を両手で覆い、額から脂汗を流してその激痛ってか…保健で習った事あるけど陣痛だったかな？ そ、それに耐えていた。

「莉沙子…」

情けない声で、ハンドルを握りながら後ろをチラチラと気にするオツサン。危なくって仕方ねえ。

「おい！ 後ろはいいから、しっかり前向いて運転してる！」

運転席のシートを後ろから蹴飛ばした。と言いつつも、俺もどうして分からず、ただ、「大丈夫だから…」と彼女の背中をさするだけだったけど…何か人肌ぐらいの温かいものがジーパンに染み付いた。シートに触れた手を顔の前上げると、無色透明の液体がべつとり付いている。これも…確か、保健で習った…ひつじのみずって書いて？ そうそう、羊水だ。女は出産直前になると、赤ちゃん包んでる羊水が膈から潮吹き、じゃなくって破水するんだっけ。ま、まあ、んな事はどうでもいいや。

「オ、オツサン！ と、とりあえず急げ」

この世に誕生して以来、およそ十六年振りに、参ったなあ、羊水まみれになった俺は「急げってよ！」ってまたシートを蹴飛ばした。

「じつとして…」

唇から滑り落ちる夫の体。私を注視する夫と視線を合わせながら私はこころごころに固くなつた乳首に立ち寄り、舌を付けて、潤し、転がした。

真紀さんの口添えもあつて、先生の許可を貰う事ができ、今夜は夫と二人で外泊。過去を辿るように、夫と私はファミレスで食事し、駅裏のラブホテルへ来た。長い昏睡から目覚めて、昼間の病室ではあんなに元気に激しく私を抱いてくれた夫。その体の機能には何の心配もしていない。でも、その真実を知つた夫の心理は今、私の胸元に当たる固くて太いチンチンだけでは計り知れない。

妻として、少しでも癒してあげたくて、お風呂で洗つてあげた夫の体。勇ましく筋肉が張つた二の腕に見惚れ、シャボンまみれの私は夫の背中から抱き付いた。

首筋に感じる妻の吐息が不安定な俺の精神をそつと、俺にはおまえがいる、安定に導いてくれる。膝元に落ちるシャワーの音を聞きながら、風呂椅子に座る俺は体を妻に向け、唇を合わせた。俺の膝へ乗る妻。しゃぼんだらけの手でチンコをしごくから、石鹸水が尿道に染みて、ひりひり痛かった。両膝を開けば妻の両膝も開かれ、露になつた陰門に人差し指と中指を忍ばせた。

「ウツア！」

叫んで俺の肩に倒れる妻。その陰門には温水の成分なんてごくわずか。もっと粘着性がある愛液に濡らされている小陰唇。二枚のビ

ラに触れた二本の指がじんわりとそのレールに沿って下から上へ、ウツフクウクク…、俺の肩をしゃぶる妻の熱く震える舌使いを感じながら、固くなっているであろう小さな粒を目指して滑り上がっていった。

「アッ！」

夫の指がクリ到達し、全身に浴びせられた電流が瞬時に私の体を仰け反らせた。二本の指が、摘まめそうで摘まめない、私のクリを、ぷにゅぷにゅ、弄り回す。

「タケルウウウ…」

夫の首にぶら下がる力も尽きそうになると、夫が私の腰を支えてくれた。

「危ないよ。彩」

「入れちゃっていい」

「だーめ。ベッドでゆっくりしよ」

「バカ」

体をお越し、夫の肩に拘ねる私。

「愛してるよ…。」彩

「愛してる。タケル」

恋人を経て、妻になった私だけにしか言えない言葉を夫に口移しにした。

「あつ、な、何でもありません」

おどおどして俯き、背を向けた彼女。丁度、信号が青に変わり、雪で濡れて色とりどりの街のネオンを浮かべる横断歩道を私から逃げるように走り去る。長いブレイドの髪。部活やってるクラスの子が自分の彼女でもないのに携帯を開いて自慢気に見せた彼女の画像。彼女は…。

とにかく彼女と話たかった。同じ…女として。

「待って！」

人混みを縫って追いかけると、その横断歩道を渡りきったところで彼女は足を止めた。走るのをやめた私は青信号点滅が点滅し、信号機からの誘導音が鳴り止んだにも関わらず、息を切らせながらゆっくりと彼女に歩み寄る。鞆の肩紐をぎゅっと握り締めた彼女が私に振り返った。

色とりどり

彼女の肩に左腕を回し、俺は身重の体を支える。うつつうつつ…、と右手が強く握り締められた。

左手で大きいお腹を抱える彼女は髪の毛を湿った顔にへばりつかせ、膠着した体から何度も苦痛を絞り出す。俺はただ彼女の手を握り返し、「もうちよとの辛抱だから」と多分、伝わらない励ましを送るのが精一杯。羊水まみれなんて気にする暇なんてありやしねえ。

「莉沙子…頑張れ…」

制限速度なんて構ってられないのは分かるけど、無数の雪がフロントガラスを叩き、前方が見えづらくなってきた。

「オッサン！ ワイパーだ。三人、いや四人とも事故死なんて勘弁してくれよ！」

「あ、ああ…」

ワイパーが動き出し、「ところで、病院…」と言いかけたところで、「あっ！」とオッサンが叫び、車が急停止する。その反動で押し出される彼女の体を、ヤベツ！ 反射的に両足を踏ん張らせて俺の胸に引き戻した。

「また何だよ!？」

「あ、赤信号だ!」

「くそつたれが！ 病院どこだ！？」

「この信号を越えたらすぐ…」

「もう…駄目ええ…」

ぱたつと握力が落ち、放心する彼女。限界だ。四面の窓越しに周りを見る。他の車も交差点を渡る人の気配もない。

「聞いたろ、オッサン。 赤だろつが何だろつが、行けっ！」

「わ、分かったあ！」

キツ、とタイヤからスリップ音が鳴り、車が赤の交差点を急発進。後部座席に俺と彼女が吸い寄せられる。

「もうちよいだから…頑張れ…」

俺は柔らかくなつた彼女の手を握つた。偶然か、必然か、人助けも楽じゃねえ。

赤色回転灯が照らす病院の救急救命ゲートの前に車が到着。ギツ、とサイドブレーギが上がる音がすると、オッサンは、はーはー、ハンドルに額を付けて肩で息をする。

「オッサン！ 何やってんだ！？ 早く誰か呼んでこい！」

俺に何回シートを蹴らすつもりだ？

「わ、分かった！」

ドアを空け、表に出たオッサンは砕けそうな腰を必死で浮かせ、走っているんだか、ふらついているんだか、蛇行しながらゲートに向かって行った。

「安心して。病院だ」

俺の胸に沈む彼女を見ると、彼女は俺の手を握り返し、俺に顔を上げた。

「ありがとう…。君の彼女を殺そうとした私を…」

「んな事…気にしなくていいよ」

「ありがとう…」

手の力が緩む。顔を俺の胸に戻す彼女。早く来いよ。彼女を抱く手に力が入った。

息を切らせて飛び込んで来た男性は救命救命の受付カウンターに前のめりになって倒れた。

「どうしました？」

夜勤で新人の子の研修も兼ねて救急救命センターに入った私。ただ事じゃない。新人の子は椅子から飛び上がり、受付シートを挟んだバインダーを胸に抱えて目をきよるきよるさせている。ここは救急救命、何が起こるか分からない。こういう時こそ落ち着かなきゃだめ。彼女にそう目で語りながら、私は激しく動く彼の肩を揺すつ

た。

「妻…妻が産気付いて…。車の…車の中に…」

「すぐ産科に内線入れて」

私は彼女に指示を出し、大急ぎで、毛布を二枚、タオルを適当な枚数抱えてカウンターを出た。

「行きま…」

彼はカウンターに背中を付けて倒れ、気絶状態。「それすんだら、内科にも内線入れて」と私は彼に落とした視線を彼女に上げた。普段は外科専門の私。こういう時こそ落ち着かなきゃ。自分に言い聞かせてセンターを出た。

看護師が一人やって来た。暗くて、顔はよく見えない。

「うわ！ 大変だね」

その看護婦は後部座席のドアを開けるなり言った。

「助かりました」

「ちょっと手伝って」

てか、オッサン、何してんだ？

「あの…さつき中に入った人は？」

「気絶してる。心配しないで。そっちにも先生呼んだから」

マジ殴ってやりてえ。

「君。そっちのドア開けて、彼女の頭の下にこれ嚙ませて」

その看護師は俺に丸めた毛布を渡した。

「はい…」

暗くて顔はよく見えないけど…声の感じからしてまだ若そうな子だった。

タケルに覆い被さり、ロープの紐を解き、主導権を握った私は自分のロープも脱ぎ去り、タケルのチンチンにむしゃぶり付く。

「おまえ、激しいな」

体を浮かせ、タケルもロープを脱いだ。

「えへへ…」

その先端の裏側に舌を付けて笑った私。バスルームで綺麗に洗ってもらったお尻とアソコをお知りをタケルに向けて顔を跨いだ。

火のついた由美は止められない。眼前へ晒された陰門。俺は由美の内股から右手を回し…、うつつ…、由美の舌がねちっこく亀頭にまとわり付いてきやがるうつつ…、その亀裂の上部を軽くうつつ…、ヤベえ、そんなにかりくびに舌を引つ掛けてこりこり刈り上げられたらああ、集中がああ…、クリを皮から剥き出しにいい…、吸い付いてええ、そんなに速くうつつ上下されちゃああ…、ようやく、クリに舌をつけた。

一瞬、ドキンと下半身に入った凝縮をタケルの舌が解してくれた。

「うふあ…」

チンチンの茎の側面に吐息が掛かる。私は液まみれになり、すべすべに触りがよくなったその先端にこね回す親指を残したままああ…、そんな音たててクリを吸われたらああ…、荒くなった吐息が吹きかかる…、す、凄いビートがクリにいい伝わるうつつ…、タマタマを…、膣に指なんていれられたらああ…、口に含んでえええ…、ぐちゃぐちゃとこりこりが私のおそこへ同時にいい…、舌で転がした。気持ちいい…。

もうタケルのチンチンを膣に欲しくて堪らなくなった私。タケルの顔を降り、素早く体の向きを変えると、股間を跨いでチンチンを掴み、膣口に、ぬちよ、と先端を合わせ、腰を…「アガッ！」と

下ろした。

「ウツグウアア…。スツゴい、いい…」

膣にチンチンを包み込み、腰が前後に波打つ。優しいタケルは私の両手に自分の両手を組み合わせ、その揺れをサポートしてくれていた。前に行くとき、ぐうぐうと子宮の入口に先端が刺さり、後ろに下がるとき、ふぐうふぐと中に溜まった熱が抜かれる。クセになりそうな運動の中、薄く視界を覚ますと、顎を引いて、タケルがはつきりと私を見上げていた。

「恥ずかしいいい…」

言葉裏腹。膣とチンチンの擦れ合いは、混ざり合う愛液と我慢汁の濃度を高めていった。

「うわああああ…」

俺は看護師の指示通りに車外に出て、支えを無くし仰向けになった彼女の頭の下に丸められた毛布を噛ませた。何かエッチの喘ぎ声と似てる。不純が似合わない場所に限って、そんな余計な事が頭を掠めるのは、俺が健全な十六歳の男だって証拠。ニヤツと薄気味悪く微笑むと、女医と看護師が二人、ガラガラと彼女を寝かすストレッチャーと一緒に駆け寄って来た。助かったあ。白い溜息が開けっ放しのドアのから車内へ向かって伸びた。

助手席のシートを前に倒し、彼女のワンピースをまくり上げ、パ

ンツを脱がす女医。しゃがんで彼女の様子を見ていた俺は、おいおい、と目を背けて、でもラッキーとすぐに目を戻す。初めて眺めるお袋と姉貴以外の年上の陰門。畜生、そっち側に行つてりゃよかつた。こつち側だと暗くてよく見えねえじゃねえか。悔しがつていたら、その女医が呻く彼女の足を広げた。うほー、いいねえ！ マジ健全な十六なんてこんなもんさ。ゆらゆら揺らぐ陰毛は暗い中でもよく見える。

「ちよつと！ 何、ぼーつとしてんの！」

女医の怒鳴り声に、え？ へ？ 我に返される。

「そつちから、手握つてあげて！」

手つて…？ 「いやでも…それに乗せるんじゃあ？」と俺は女医の後ろに準備されたストレッチャーに目を向けた。

「もう赤ちゃんの頭が半分でてるの。この状態で動かすのは危険なのよ」

「え！？ て事は…」

驚き、苦しむ彼女に目を落とす俺。

「緊急出産。ここでね」

最初に来た看護師の声がした。

「お、俺が…立ち会っていいんですか？」

「普通は…旦那さんの仕事なんだけど。旦那さんは旦那さんで、今、内科のお世話になってるから」

女医の声が生きたけど、俺は「ぐうぐうぐうぐう…。」とますます呻く彼女から目を離せない。参ったな。この若さで出産の立ち会いかよ…。

「まだ若そうだね。いいんじゃない？ こういう経験を若いうちにできて」

女医の後ろから看護師達の小さな笑い声が聞こえ、俺は、勘弁して下さいよ、苦笑いを上げた。

「旦那なんかじゃダメ！ 彼に…彼に居てもらって…くっ、下さいいい…」

はい！？

「君。年上からモテるんだ。先行き楽しみだね。さっ、早く手を握ってあげて」

こんな現状じゃなきゃ最高に嬉しい誉め言葉んだけどさあ。女医さん。今は先なんて考えられる余裕ねえよ。

「分かり…分かりました」

覚悟を決めた俺。もう陰門なんて眺めてる暇なんてありやしねえ。やるしかねえなあ。

「いい？ 息を思いっきり吸って、吐くと同時に力んで！ さあ！」

すーっと息を吸う彼女。早く産んじやてよ。ふーっと息が吐かれ、俺の両手は女のものとは思えない強烈な力で引き込まれる。

「あつ、うがああああー!!」

スゲエなあ。女って。

「水月ちゃん…だよな?」

彼女…水月は鞆の肩紐を握ったまま、え? と表情を変えた。そうだ、何で名前知ってるのか、ちゃんと説明しなと。

「あつ、えつとう、水月ちゃんてさ。うちの学校で部活やってる男子達から人気あつてさ。クラスの子から水月ちゃんの写真みせてもらった事あるんだ。だから、名前知ってる…」

「そう…なんだ…」

水月が下を向いた。携帯の画像なんかでは分からない、賑やかな私や彩にはない静かで不思議な雰囲気。実物は…凄い綺麗。

雪が降ってきたけど、水月は傘を持っていない様子。私は鞆から折り畳み傘を取り出して開けた。

「ねえ。そのマックでちょっと話さない?」

口を結び、顔を上げる 水月。

「水月ちゃんの方が背高いからこれ持ってよ」

「う、うん」

まだ名前も知らない彼女から差し出された私は傘を差し、一緒にマックに向かって歩き始めた。

タケルとあの坂道を楽しそうに降りてきた彼女。

公園に隠れた私の前をタケルと笑顔で通り過ぎた彼女。

さつき、メンズショップの前で、タケルに似合いそうなタッターソールチエツクのシャツを眺めていた彼女。

な、何…黙ってるんだろ私？

「名前…なんて言うの？」

「あ、そうだ。まだ言っていなかったね。私…由美」

遠くで見ても、近くで見ても…凄い可愛い彼女。ネオンに照らされ、色とりどりに染まった雪を背にして、あの日と同じ笑顔を私にもくれた。

俺に乗る由美が後ろ手を突いて二人の結合部を晒せば、この攻撃しかない。俺は親指を由美のクリに押し込んだ。しかし、艶々しく

弾力性のあるその桃色のボタンはどんなに強い押し込みが繰り返されようと「ぐっ！ あっ！ ふっ！ くっ！ うっ！ ああ！」と腰と喘いで腰と頭を振る由美によって、プルッ、プルッと親指から滑り出される。畜生、しょうがねえ。諦めた俺はブルブルブルブル、と親指を俊敏に動かした。

「ダッ、ダメッ！ マジで死んじゃうってえ！」

「なら…止めちゃう？」

より激しさを増す親指。

「イヤッ！ 止めないでえええ…」

どうなんだっての？ 分からん。女って。

きっ、きそっ…。唇にへばりつく髪も気にならない。最初の絶頂はただ気持ちよさに流されて、その感覚を得られなかったけど、二度目以降はしっかりと、頭と体と子宮でそれを感じ取りたい。

「タケルうっうっ…！ いっ、いっちやいそっになってきたあああ…」

愛してる人にクリを弄られながら、そのチンチンを膣の内部に奥深く子宮口に突き刺され、二重の幸福によって…て、ぐだぐだどうでもよくなってきたあああ…。頭が上下にいいいい…。も、もっ、ぐちゃぐちゃだったのうっうっ…。

「いきなっ。由美。思いつきり、思いつきり、いきなっ！」

タケルの声が聞こえたような。脳から子宮に何かが落ちる！

「いつ、いつ、いぐああああ!!」

わわわわわわ！ 相変わらずの天井に突き抜ける発狂と同時に、ぐぐつと突き出された二人の結合部から水鉄砲のように勢いよく、由美の潮が俺の顔面に発射された。口にも目にも鼻の穴にも入った潮。撃たれた俺は、ぱたんと枕に頭を落とした。ああ、でもこの味… 美味しい。

もう何回引き込まれそうになった事だろう。暗闇の中で、微かに光る彼女の瞳が力む度に涙を絞り出す。

「先生…。大丈夫なんすか？」

握る彼女の手が俺と彼女の汗でぬるぬると滑り、寒いはずなのに、体が温かくなってきた。

「大丈夫！ もうあと一押し。頑張つて！」

女医の白髪混じりの髪が見えた。声の割には年いった先生だった。

「うっああああ…」

悲鳴とも言っている彼女の嗚咽。また俺の両手が引き込まれ、頼みます、と無言で願うと、パチン、と両手が滑って離れた。ヤベツ、と顔を上げた時、何やら黒い物体が彼女の股間からにゆるにゆるとデカイウンチ…いやま、表現悪いけど、所詮、十六のガキなんですよがねえ。とにかく、赤ちゃんが、うっわああぐあああ、気持ち悪い…、彼女、本当ゴメンね、男でよかつかたあ、出てきた。「ぎゃあああ…」と赤ちゃんの産声が響くと、あんなちっちゃい穴からよく出すよ、と感心と安心が俺の腰を落とし、地べたに尻もちを付かせた。

仰ぎ見た屋上。照明に照らされた病院の看板が白い息越しに見えた。何だよ？ ここかあ。学校から近い病院だったんだ。初めて自分が何処に居るのか気付いた。

「お疲れさん。いい仕事したよ」

最初に来てくれた看護師の声だった。俯いてうなだれていた俺にタオルが差し出された。いい仕事なんて…何か照れる。

「ありがとうございます」

俯いたままタオルを受け取り立ち上がると、車越しに、女医が、まだ何かあんのかよ？ 「こっちこっち」と手招きする。男の看護師が二人がかりで、男居るんならもうちよと早く来いよ、彼女をストレッチャーに横たえさせていた。

車を回り込んで彼女のそばに着くと、バスタオルにくるまれ、看護師に抱かれた赤ちゃんがもう鳴き声を止まっていた。

「最初に…彼に抱かせてあげて下さい。彼みたいな子になって欲しいから」

女医も看護師達もくすくす笑ってた。もうマジ勘弁だって。俺は苦笑いで自分の頭を撫でた。

「それは…中で寝てる旦那さんの仕事だよ。そこまで…旦那さんの仕事盗れないよ」

彼女は笑顔で最後の涙を絞り出した。ゲートの中に搬送される彼女と赤ちゃんを、俺は、ゴメンねえ、ウンコなんて表現しちゃって、と反省しながら見送った。

へえ、顔もいい男だけど、中身もいい男だね。私は感心して、ゲートが開いたときに中の明かりに照らされた彼の横顔を見た。ん？この横顔…どっかで見た事…。

「中でズボン乾かしていつて。温かいコーヒーもあるから」

腕時計をちらっと見て、内ポケットに入れっぱなしだったDVDのケースをジャケットの上から掴んだ。ここからなら、まだ間に合う。

「あ、いや…。友達に頼まれ事されちゃってて。俺は…ここで」

「そ、そう…」

俺は使わなかったタオルを看護師に返そうとした。

「いいよ。持っていて」

「じゃあ……。ありがとうございます。それじゃあ」

そのタオルを首に掛けた俺は、結局、その看護師とまともに目を合わせる事なく、もう二度と来る事はないだろ、と赤い回転灯を眺めながら、その救急救命センターを離れた。

あ！ あの子……。確か、娘と一緒に学校から帰ってた子で裕子の……。去って行くあのこの子の後ろ姿を見て思い出した私。

「裕子……。あなたの息子は最高にカッコいい子だよ」

独り言と涙がこぼれた。照れ屋なんだからね。褒められるのが苦手みたい。この事は裕子にも由美にも内緒にしとこ。いづれまた会えるだろうし。

どんな理由か分からないけど、見ず知らずの妊婦さんを用いまみれになりながら支えた優しいタケル。そのタケルが……。こんな事に……。ナースステーションの中、あの日と別の意味の涙を滲ませて、私はタケルのカルテを閉じた。

今日はヤケに丹念に私のあそこをいじるタケル。気持ちいいんだけど…そんな二本指で開いたり閉じたりされたら…恥ずかしいっての。

「なあ…。彩…」

「な、何？」

「私は枕から顔を上げた。」

「お前も…子供産むんだよな？」

「はあ!？」

感じて薄くなった視界が途端に明るく開かされた。

「そ、そりゃあ…いづれはねえ」

枕に頭を戻した私。タケルと私の赤ちゃん。想像すると、かなり嬉しかった。

人差し指と中指で最大に開いても…三センチつってとこじゃない。こんなところからあんなデカい赤ちゃんが出てくるてか？ 不思議だよなあ。女って。

「こんな…ちっちゃいとこから出てくるんだよな？ 赤ちゃん」

ああ、恥ずかしいっ！ 今日は何か丹念にアソコを弄ってくれ
らと思ってたら、いきなり何なのよ！？ 私は慌てて両肘を突いてタ
ケルを見下ろした。

「そ、そりゃ、出てくるんじゃないのう？ 産んだ事ないから分か
らないよ」

私は両肘を突いてタケルを見下ろす。

「由美も…いずれは…赤ちゃん産むんだよな？」

「な、何いきなりさあ？ も、もう」

頭を枕に戻した私。タケルと私の…赤ちゃん？ 想像すると、ち
よつと嬉しかった。

赤い回転灯…。また、ここに戻って来たのか？

ストレッチャーの上で、消え入りそうな視界。雨音の向こうで、
誰かが叫んでる。あの時の声だ。あの…看護師さん。「タケル！」
って叫んでる。あの時…俺は名前なんて言っていなかったのに、何で
？ 分かんねえよ。もう…寝よう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7180q/>

Bowline

2011年11月7日08時19分発行